
L u c k y & U n l u c k y 魂の継承者 ~アドベクシュ迷宮探索記~

暇犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u c k y & U n l u c k y 魂の継承者 〈アドベクシユ迷宮探索記〉

【Nコード】

N 8 5 9 9 U

【作者名】

暇犬

【あらすじ】

総運値0 幸運度MAX 悪運度MAX この男、運がいいのか悪いのか？

見習い冒険者（未満）のザックスが自由都市ペネロペイヤを拠点に繰り広げる出会いの物語。

凡人、獣人、妖精、ドラゴン、魔王……なんでもありの世界で織りなす疾風怒濤のファンタジー。

走れ！ 進め！ 主人公！ 君の行く手には輝かしい多難がもろ手

を挙げて待ち構えている！

01 ザックス、断られる！

「帰んな！」

にべもない一言だった。

ここは「ちよつと待てよ」とでも反論すべきところなのであろうが、30回目ともなれば、もはやそんな気力も湧かない。言葉と同時にカウンターに突っ伏した彼の頭上に、さらなる冷たい追い打ちがかけられる。

「商売の邪魔だ！ カネにならん奴は客じゃない！」

野太い声のマスターの更なる一言はカウンターの上で絶望に打ちひしがれている若い男にとどめを刺した。カウンター上で無造作に突き返された冒険者証であるクナ石の首飾りを手にして、ピクリともしないその姿にため息をついたマスターは、僅かに表情を崩して男に声をかけた。

「よく見てみな、兄ちゃん」

男から再びクナ石を受け取ったマスターは小さな呟きと共に石にマナをこめる。冒険者証として協会から供与されたクナ石の首飾りは、カウンターに若い男のステータス値を浮かびあがらせた。

名前	ザックス		
マナLV	01		
体力	20	攻撃力	35
理力	MAX	魔法攻撃	0
智力	28	魔法防御	30
技能	20		
特殊スキル	なし		

称号	なし
職業	なし
敏捷	28
魅力	15
総運値	0 幸運度 MAX 悪運度 MAX
状態	呪い(詳細不明)
備考	協会指定案件6 129号にて生還
所持金	2000シルバ
武器	鉄の剣
防具	冒険者の服 冒険者のズボン 皮の靴
その他	なし

「兄ちゃん、初心者だな」

こくりと力なく頷くザックスを眺めながら、マスターは言葉を続ける。

「俺もこの仕事について30年近くになるが、ここまででたらめなパラメータをみるのは初めてだ」

太い指で一点を指し示して、眉を潜める。

「まず、手始めに理力値。装備からみるに兄ちゃんは戦士志望だろうが、その値は一流の魔導士ですら滅多にみることはないMAX値だ。にもかかわらず魔法攻撃力は0。術師の才能は全くないって事だ」

何て無駄な値だ、と呟きながらさらに別の点を示す。

「総運値0。こいつは差分で引き出される値だから、初期時点でマインス値を示す奴もざらにいる。成長すればそれなりに解消されるものだが、お前はこれがすでに限界値に達しきっている」

まったく出鱈目だ、と言いながらマスターはさらに続けた。

「さらに詳細不明な呪いがかけられるようだな。冒険者協会ですら

把握できない解呪不能な呪いなんて論外だ。そして最大の問題はこいつだ」

声を潜めたマスターは、ザックスの目を見据えて言う。

「お前、一週間前に起きたあの一件の生き残りらしいな」

その瞬間、周囲の空気が凍った。

わざわざマスターが声を潜めたにも拘わらず、聞き耳をたてていた周囲の者達はその一言に大きく反応した。鮮度の高い情報に価値を求める冒険者根性ゆえというところであろう。店内の様子に僅かに呆れた様子を見せながら、カウンターの向こうのマスターは続けた。

「普通ならこんな苦労はしなくていいはずだ。初期パーティの仲間なんて冒険者訓練校の同期のやつらで組んで、しばらくはそれでいけるはずだからな。だが、お前さんはあの一件でその選択肢を奪われ、初心者の段階で仲間集めの苦労をしなければならぬ。それは同情する」

「……………」

「冒険者って奴が無謀でいられるのは始めのうちだけだ。ダンジョン探索やクエストの数をこなすほど、その実態の困難さに目が覚める。故に誰もが保守的になって、そんな奴らがお前のような爆弾を、好んで仲間に入れられることなんてありえない。こつちも仕事だからな……店の看板に傷がつくような真似はできねえんだよ。あそこの店で紹介された奴を入れたばかりにパーティが全滅しかけたなんて噂が経とうものならば目も当てられやしねえ……」。

さらに初心者のお前じゃ、単独探索も出来ねえ。協会も黙ってはいいはずだ。悪い事は言わん。冒険者を廃業して新しい道を探すんだな……………」

そう言い残すとノキル酒で満たしたグラスをザックスの目の前に置き、離れていく。灰汁と酒精の強いノキル酒の杯を交わすのは、冒険者たちの間では縁切りの際の風習である。

もはやとりつく島もない事を理解したザックスは、グラスを放置

したまま立ち上がる。それを機にしんと静まり返った酒場の中が再び活気づく。荷物を背負ってとぼとぼと店から去っていくザックスの動向を気に留める者は、もはや皆無だった。

夕刻に近づいているものの夏の空はまだ高い。濃い潮の香りに満ちた波止場から釣り糸を垂れながら、ザックスは沖合に浮かぶ島々の景色をぼんやりと眺めていた。

別段、現実逃避をしているわけではない。収入のあてがない以上、無駄な出費は極力切り詰めねばならない。いわゆる夕食の調達だった。周囲には彼と同様の境遇と思しき者達が波止場近くの貸し釣具屋で調達した竿と餌を使い、穏やかな波間に浮きを浮かべている。

(ついてない……)

これも総運値0の恩恵だろうか？

本日数度目のため息をつきながら、一向に当たりの様子を見せない浮きに悪態をつく気力もなくなった座り込む。そのまま彼はここ暫くの間に自身の身に起きた様々な災難を、しみじみと振り返っていた。

彼が釣り糸を垂れている海 通称《大円洋》とも呼ばれる《アドベクシュ海》を挟むように、北と南に二つの大陸が広がっている。その一つ、南の《サザール大陸》の沿岸部に存在する複数の自由都市国家群にまたがる巨大な組織の名を冒険者協会という。

初心者から伝説的英雄まで数多の冒険者を輩出してきたこの組織の門を彼が叩いたのはおよそ2か月前。簡単なマナの扱いと冒険者に必要な生存技術を協会経営の訓練校で学び、卒業審査である『初心者の迷宮』踏破の試練に仲間たちと挑んだのがおよそ一週間前の

事。

成功率百パーセントに近い、簡単な技能試験であるその試練をクリアすれば、『見習い冒険者』の称号を得るとともに新たな冒険者人生がスタートする……はずだった。百人近い同期生がいくつかのパーティに分かれて挑んだその試練において、あの忌まわしき大惨事が起きたのだった。

六層構造のダンジョンの最下層部にある召喚魔法陣の上に現れたのは、初心者パーティに少しばかりの困難を強いるであろうDランクボスモンスターではなかった。

《十二魔将》 協会にSSランクオーバーと登録された伝説級の魔人の一人の出現に、ダンジョン内は当然の如く阿鼻叫喚の坩堝と化した。魔人の結界に阻まれ、緊急転送アイテムの効力を失った初心者達の末路は無残なもので、無事に生還できたのはザックスを含めて五人だけだった。

ダンジョンの最上層部で気を失ったまま保護されたザックス達が、協会の施設院で目を覚ましたのはそれから3日後。協会指定案件6129号と名付けられた事件の事情聴取を受け、雀の涙程度の見舞金を渡され放り出されたのが2日前の事だった。

目覚めて以来度々襲い掛かる奇妙な目眩に悩まされながら、ザックスは自身が所属するべき酒場を探して街中をたった一人で歩き回る事となった

新規冒険者の9割以上が死亡、生存者の内、二人が廃業、一人が意識不明のこん睡状態のまま、一人が事情聴取の後行方不明、という惨事の顛末は瞬く間に都市中の酒場に知れ渡り、事件後に異常値を示すステータスのせいでザックスほどの酒場でも敬遠される事となった。冒険者協会認定の酒場に所属しなければ、その後の冒険者としての活動は実質不可能である。『見習い冒険者』ですらないザックスの前途は絶望的だった。

このような状況に至っては冒険者の道をあきらめる事が妥当な選択であろう。だが、彼自身にかけられた正体不明の呪いが、『廃業』

という選択肢を阻んだ。

諸経費として見舞金の半額をばったくった協会派遣の役立たずの解説師が、自身の無能さをごまかしながら残したのは「掛けた奴に解いてもらえ」という無責任極まりない一言だった。もう一度SSランクオーバーの魔人と相対し、どうにかしろという訳である。

「絶望的だ……」

再びため息と共に咳きが漏れる。一向に当たる気配すら感じさせない釣果以上に絶望的な状況に頭を抱える、そんな時だった。

「まったく、ええ若い者がため息なんぞつきおつてからに……。お前さんの放つ陰鬱な気のせいで魚共が逃げてしまつてはいないか！」

ザックスの隣で、糸を垂らしていた老人が彼に声をかけた。一帯の顔であるといった風体のその老人は、ザックスの返事を聞く事もなく言葉を続ける。

「さほど、困難ともいえぬ困難を前に逃亡寸前といったところかう。ここらで釣り糸を垂らして待つとるだけでは、落ちぶれ冒険者どもの仲間入りじゃぞ」

最近の若いもんはこれだから、といった老人の口ぶりにムツとした口調でザックスは言い返した。

「人の事情も知らんくせに、無責任に首つつこんでんじゃねえよ」
だがそんな無礼なザックスの言葉にも、老人は臆しない。

「カツカツ……。青いのう。正攻法がだめなら搦め手を考えてみるもんじゃ。真つすぐばかりが人生ではないぞ。どれ、ちよいと見せてみんかい」

えっ、と思つたのもつかの間、竿を置いた老人の手には、いつの間にかザックスの首飾りが握られていた。

「ちよっ、爺さん、いつの間……」

驚くザックスを尻目にニヤリと笑つた老人は、クナ石の首飾りにマナを込め、ザックスのステータスを覗き見る。

「なるほどのう。まずはレベルを上げん事には何ともならん、と云う事か……」

「あのなあ、そんな事は分かってんだ。同期のやつらは根こそぎやられて、半年後に新しい見習い冒険者のパーティが現れるまで待ってる時間はねえ。そして今のオレとパーティを組もうとする奴を紹介してくれる酒場なんて、どこにもねえんだよ」

言葉にすると同時にじわりと鈍いものがこみ上げる。なんだってオレがこんな目に逢わねばならんのだ、人生のバカヤロウ、と海に向かつて吠えるのはもはや時間の問題だろう。

「やれやれ、近頃の冒険者も冒険者なら、酒場の主人たちも問題とிட்டたところか。自分達の役割をとんと忘れて、保身に走りおつてからに……」

ぶつぶつと呟いていた老人は、やおら首飾りをザックスに押し付け、竿を握り直しながら言葉を続けた。

「経験値を稼ぐだけならいくらでも方法はあるだろうが……」

「オレに『経験値売買』をやれつていいのかよ！ 大体そんな金なんかあるわけねえだろう！」

経験値売買 冒険者訓練校の講義において、これを多用するものは冒険者達の間ではあまり好まれていないという前置きとともに教わる手段である。

冒険者達をあらゆる面から評価管理するステータスシステムは、人間のもつ曖昧な能力を数値に表わすというものである。マナLVを基準に強化されていく冒険者達の能力値を上げる為に必要な経験値は、戦闘やクエストの達成、ダンジョンの踏破など様々な手段によって加算され、冒険者の体内にマナとして蓄積されていく。経験値が上がればマナLVも増加するというわけである。

当然、これを悪用する方法もあり、マナのやり取りで変換される経験値のみをしかるべき方法で買い取り、自身のステータス値を上げ、名を売ろうとするものも現れる。

実戦での経験が皆無なくせにやたらとLVだけが低い彼らは、冒険者達の間では軽んじられるものの、裏ではこの行為はそこかしこで行われている。そして、それを実行するにも力ネ次第というわけ

である。たかだか2000シルバの所持金しかない今のザックスに
買い取れる経験値など雀の涙程度であり、事態の好転に一役買うこ
となど、到底不可能である。

不貞腐れたザックスの様子を眺めながら、からからと笑って老人
は続けた。

「もうちつとばかり、歩き回って頭を使ってみるんじやな。お主の
ような者でも必要とする奴らは、必ず見つかるじやろつてよ」

そう告げると、老人は竿を引き上げ、釣った魚を放り込んだバケ
ツを片手に立ちあがった。饞別じや、と釣った魚の半分をザックス
のバケツに放り込みながらとある一策をザックスに囁くと、相変わ
らずからからとご機嫌な様子で立ち去っていく。

岸壁にぼつりと残されたザックスは、混乱した頭で呆然とその背
を見送るのだった。

2011/07/15 初稿

02 ザックス、あこで使われる！

「おい、新入り、さっさと換金アイテムを集めろ！」

「のどが渴いた！ ドリンクを出せ！」

「畜生、怪我しちまったじゃねえか、薬草水はどこだ！ これ以上ひどくなったらメエのせいだからな！」

次々に掛けられる暴言に近い命令に従うべく、ザックスは走り回る。何かと腹立たしくはあるがこれも経験値の為。そう割り切って、ザックスは己の仕事に取り組んだ。

「ボク、もう疲れちゃったよ。ちよつと休もうよ……」

「分かりました、若様。もう少し行ったところに適当な場所がございます。そちらまで我慢頂けないでしょうか」

「ええっ！ もう一步も歩けないよ。ここで休もうよ」

「仕方ありませんね……」

一行の中心となっている主従のやり取りをうんざりとした様子で聞きながら、ザックスはモンスターの落した最後の換金アイテムの収拾に精を出していた。

波止場で老人と別れた翌日、ザックスは去り際に老人に教えられたとある店に向かった。

『裏酒場』 冒険者協会非公認のその店を示す看板には協会の紋章が入っていない。自由都市《ペネロペイヤ》内に幾つも点在するそのような店は、協会公認の酒場で斡旋される事のないクエストやミッションを紹介している。協会非公認である為、クエストやダンジョン踏破記録が残ることもなく、通常の冒険者には敬遠されがちなものだが、世の中には好んでそんな場所を拠点に活動している者

もいる。

場所によっては非合法的なものすら受け付けるその場所でザックスが見つけた仕事は、「ダンジョン探索パーティの荷物持ちと雑用」だった。

待ち合わせの場所にいたのは平均レベル40程度の者達4名からなる一団であり、彼らの仲間に加わって雑務をこなすかたわら、ザックスは己の経験値稼ぎに励む事とした。

雇い主達が挑むのは中級レベルのダンジョン踏破であり、すでにマナレベルが上級者クラスに達しつつある彼らには、さほど困難なクエストではない。内心楽勝だな、などと考えていたザックスだったが、探索開始からしばらくして、己の目論見が甘かったことに気づかされた。

彼に与えられた仕事そのものはさほど困難な物ではない。『異界』と呼ばれる場所から魔法陣で召喚されるモンスター達の討伐後に残される様々な換金アイテムが消滅する前に、協会から供与された『^{バック}袋』に収めて回るのが彼の仕事だった。

空間魔法を施された『^{バック}袋』には、いかなる大きさや形のアイテムであっても無限に収納可能である。魔法光や光苔によって明るく照らされているダンジョン内において、換金アイテムを収拾する仕事は慣れてしまえば実に容易い。『初心者^の迷宮』挑戦時に、仲間たちと苦労しながら何度も失敗を重ねた事が嘘のようだった。

収拾の傍ら戦闘に参加する事で自身の経験値稼ぎを行う余裕ができると、己の置かれた状況が見え始めたザックスには、雇い主達の無様さばかりが目につくようになった。

でっぴりと肥えた体型の『若様』と呼ばれる主を中心としたこの一行は、どこかの貴族の子弟とその従者達であるらしい。嫡子として家を継ぐ事のできない貴族の二男、三男達が『修行』と称して冒険者に身を置き、クエストの実績を積む事で大商家や後継ぎ不在の貴族の家との縁組みを行う、というのはよく聞く話であり、この一行もそういった類のものであろう。

だが、彼らの対モンスター戦闘は余りにも無様であり、新米冒険者であるザックスですら、彼らのレベルが初級者とさほどかわらぬように窺えた。

討伐モンスターランクが上がれば上がるほど、効果的な戦術や戦略が重要視されるにもかかわらず、パーティの強引ともいえる力押しは無駄な損害を出し続け、およそ洗練という言葉とは程遠い。おそらく実家からの資金を元手に経験値を買い漁った結果、数値だけが独り歩きしたパーティの典型であろう。

初めての探索の下準備の際、所持金をにらみながら購入した高価な薬草水を、湯水のごとく消費しながら進軍するパーティの様子は、ある意味壮観であるがその先行きは不安だらけである。尤も『若様』のやる気の無さは筋金入りであり、探索に飽きて、ダンジョンを離脱しようと言い出すのは時間の問題だった。それまでになんとか自身の目標であるレベル10に達してほしいと思うものの、現時点では絶望的な模様である。ようやく手にした機会を最大限に生かすべく、ザックスの忍耐の時間は続くのだった。

『おい！』『そのの！』などと呼ばれることにすっかり慣れてしまったダンジョン第9層で、変事は起きた。

「なんだ！ あいつは！」

想定外の事態に、一団の足が止まる。

発見から何十年もの間に幾つものパーティによって踏破されているこのダンジョンは、すでにその攻略法から出現モンスターの傾向まで、完璧にマップिंगされ、ダンジョン入口付近の協会経営の店で手ごろな価格で売り出されている。ザックスの雇い主達も当然それを持参して攻略に挑んでいた。

このダンジョンの周回モンスターの平均ランクはCまたはD、全30階層の中で10層毎に出現するボスモンスターのランクは平均

してBである。最初の難関であるボスモンスターに挑むか、あるいは一端引き返し装備を整えるか、そんな議論に沸いていた雇い主らの肝を冷やすかのように、一匹のモンスターが道を塞いだ。

《グリーン・ドラゴン》 数多のモンスター中、最強の種族である竜族において最弱とされながら、ランクAに分類されるモンスターである。攻略マップに存在しないそのモンスターの出現に、一団は腰を抜かした。

彼らの実力がマナLVに相応のものであれば全く問題ないはずであるが、生憎とザックスの雇い主達の実力はたかが知れている。

「ひいー」という情けない声を上げて、素早い逃げ脚で一団の最後尾へと逃げ込んだ『馬鹿様』もとい、『若様』の戦力など当然当てにならず、多少腕が立つとはいえ、従者達の実力も初級冒険者に毛が生えた程度である。それでも彼ら3人が、眼前に立ちふさがる自身の背丈の3倍程度のドラゴンに挑みかからんと身構えるまでは、まだ恰好がついていた。

だが、《グリーン・ドラゴン》はそんな矮小な人間達を一瞥すると、その巨大な口を開き咆哮を放った。

《ドラゴンの咆哮》 竜族が最強のモンスターのひとつと数えられる所以とされる魔力の込められた咆哮は、パーティーのメンバーの精神を著しく掻きまわった。強烈な咆哮にあっさりと言意を削り取られ、構えていた武器を取り落とした従者達は完全に逃げ腰になっていた。「おい、何をやっている！ こんな時こそお前の仕事だろう。ボクの盾になって逃走の時間を稼ぐんだ」

怯えた表情をこれでもかと云わんばかりに張り付けた『若様』は従者達と共に、一人だけ比較的冷静に事態を受け止めていたザックスを正面に立たせた。

「ふざけんな、オレに何しろってんだ！ こんなの仕事に入っただえぞ！」

自慢ではないがこちらのマナLVは未だに5である。ドラゴンの攻撃を一撃でも食らえば、即座に終わりである。

「ええい、金なら後でいくらでもくれてやる。とにかくお前はボクがうまく逃げ果せるまで時間を稼げばいいんだよ！」

言葉と共に後ろから剣を突き付けられ、ザックスは逃げ場を失った。

前門のドラゴン、後門の腰ぬけパーティ……。間に挟まれたザックスは仕方なく足元に落ちていた剣を拾う。

さすがに金持ちパーティだけあって、拾い上げた長剣はザックスの持つ《鉄の剣》よりもランク上の材質でつくられている。しかし、それを持ってしても、今のザックスの技量では鱗一つ傷つける事はできないだろう。

こうなったら隙を見てこの場から逃げ出すしかない。報酬は無くなるだろうが命には代えられない。滅茶苦茶に剣を振り回して、雇い主達を囷に逃走を図り、後の事はその時考えよう……。などと思いつつ、前方の巨体に向かって身構えたその瞬間、再びドラゴンが巨大な咆哮を放った。びりびりと震える空気の中を何とか咆哮の魔力をやり過ごしたザックスだったが、その背後に全く人の気配がない事に気付く。

慌てて振り返った彼の視界には、誰もいなかった。

(お・い！)

目が点になるとはこの事だろう。雇い主達の姿はどこにもなかった。

彼の背後には元来た通路がぼつかりと口を開け、正面には攻撃意欲満々といった様子で巨大な顎を広げた《グリーン・ドラゴン》がじわじわと距離を詰めてきている。

「あの、ろくでなしのクス共が！」

思わず叫び声を上げる。もはや雇い主への敬意など、欠片も残っていないであろうはずがない。

『若様』達御一行は、ご丁寧なザックスを一人残して自分達をパーティから強制解除する事で、ドラゴンと彼を1対1の状況に置き、緊急脱出アイテム《跳躍の指輪》を使って逃走したのである。探索

開始時に一パーティに一つだけ与えられるそれは、非戦闘時にのみダンジョン内のいかなる場所からでもパーティが脱出できるように設定されている。彼らが意図したザックスの本当の仕事は、非常時の囷役と云う訳である。

(じよ、「冗談じゃねえ……」)

今やダンジョン内にぼつんと一人取り残されたザックスの命は、風前の灯だった。いかに巨体を誇るとはいえドラゴンの敏捷性はザックスのそれを上回っている。囷役も特殊スキルもない今のザックスがドラゴンを振り切って逃走する可能性は、限りなく0に近かった。

「畜生！」

仕方なく壁際を回り込みながらほとんどやけっぱち気味で構えるザックスに向かって、ドラゴンがその太い前足で足元の岩を弾き飛ばす。

すさまじいスピードで迫る岩石がザックスの傍らを砲弾のように通り抜け、背後の壁に大穴をあける。ガラガラと崩れおちる岩の音を背中で聞きながらも、ザックスは不思議と冷静であった。

直ぐに飛びかかってこないところを見ると、眼前のドラゴンは慎重な性格らしい。

火炎弾を放つことすらできない《グリーン・ドラゴン》であるが、その怪力は今のザックスには十分すぎるほどに脅威である。ゆっくりと距離を詰めながら忍び寄るドラゴンは再び足元にある岩を弾き飛ばそうと試みる。

(一か八かだ！)

ドラゴンが岩を弾き飛ばすその瞬間、ザックスは前方に駆け出した。強烈な勢いで弾き飛ばされた岩がザックスの直ぐ傍らを掠め飛ばす。肝を冷やしながらもザックスはそのまま岩を弾き飛ばした反動で動きを止めたドラゴンの傍らを駆け抜け、もと来た通路を逆にたどろうと試みた。

とにかく逃げる！

ただ逃げる！

ひたすら逃げる！

逃げて逃げて逃げまくる！

その一念のみでザックスはドラゴンの傍らを駆け抜ける。

岩石を弾き飛ばした反動から回復し、その巨体を旋回させて追いかけてくるまでの僅かな時間内で、少しでも通路の狭い場所に逃げ込んで、なんとかやり過ごす。今のザックスが思いつくのはその程度の事だった。

だが、ザックスがその傍らを駆け抜けようとしたその瞬間、予期せぬ方向からの一撃が襲い掛かった。

ドラゴンはその太く強靱な尾を風切り音を響かせながら振り回し、ザックスの身体を強かに叩きのめした。

反射的に持っていた剣を突きだしたものの、堪らず吹き飛ばされたザックスの身体は遙か反対側の壁面に強かにぶつけられ、全身の骨が砕かれたかのような衝撃で息が詰まる。

冷たい床面に放り出されたまま、尾に突き刺さった剣による痛みに咆哮を上げて暴れまわる《グリーン・ドラゴン》の姿を、遠目にしながら、ふと、以前のことを思い出した。

「ああ、こんな事、前にもあったかな……」

声にならぬ声で呟きながらザックスの意識は暗転していった。

自身の許容範囲の限界を超えた恐怖を目の当たりにした時、人は意外な行動をとるものである。そんな言葉を思い出しながら彼はただひたすらに走っていた。眼前で行われているのは単なる殺戮だった。

た。猫が……否、獅子がネズミをいたぶるといふ比喩すら生ぬるい。直に自身もその当事者に置かれてしまふ、それもいたぶられる側の方に……。

《初心者向けダンジョン》最下層である第6階層において、先行したいくつかのパーティが苛立ちを覚えながらボスモンスターの出現を待ちわびていた。一向に表れる様子のないボスモンスターに屈を持って余した訓練生たちが口々に協会の不手際をなじり始めた頃になって、ようやく魔法陣が起動した。

だが、彼らの予想に反して、鮮やかな輝きを放って現れたのは貧相な姿の壮年の男だった。啞然とする彼らを尻目に、現れた男は陰気な面相に不似合いな朗らかな笑顔を張り付けて、言い放った。

「見習い冒険者の皆さま、初めてのダンジョン踏破おめでとうございます。《十二魔将》を代表いたしましたし心からお喜び申し上げます。ただ残念ながら、記念品の数には限りがございます。どうかしっかりと生き残って、ささやかな品をお受け取り下さいませ」

言葉と同時に幾つもの火炎弾が浮き上がり、弾け飛ぶと同時に周囲を焼き尽くす。余りの高温に消し炭一つ残さずに消えてしまった同期生達の哀れな末路を目の当たりにした仲間達は、事態をようやく理解すると恐慌をきたした。

戦闘効果範囲に入っていない者達の多くが《跳躍の指輪》を使って脱出を試みるものの、いかなる力が働いたのか、その効果はあっさりとかき消されてしまふ。そんな彼らを嘲るかのように粗末な衣を身にまとった男は、ひたひたと彼らに近づくと指先に浮かび上がる僅かばかりの炎で、一人ずつ焼き尽くしていく。我先に上層階を目指して逃走を試みる訓練生たちの眼前に瞬間移動で現れるその姿は、死神そのものだった。

逃げ続ける彼らの前に、ダンジョン内の緊迫した空気を読み取れぬ周回モンスター達が立ちふさがり幾人かが足止めされる。後ろか

ら追いかけてきた魔人がモンスターごと訓練生達を焼き尽くす
そんな事が繰り返される内に、百人近くいた彼らは両手の指に満た
ぬ数まで減らされていた。

ようやくたどり着いたダンジョン最上層において、気付けば周囲
は見知らぬ者達ばかりになっていた彼の前にも魔人が現れる。

出口まであと少し　その希望が彼と周囲の胸に僅かな光を灯し、
勇気を奮い立たせる。相手は只一人、総がかりで挑めば手傷の一つ
も負わせて怯ませられるはず。そんな意図と共に周囲の者達と力を
合わせ立ちふさがる魔人に一斉に襲い掛かる。ほとんどがむしやら
に切りつけたその剣は確かに魔人を切りつけているにも拘わらず、
手ごたえは全くなかった。

再び最後方の者から順次焼き尽くそうとする魔人の衣を不意にほ
んの僅かだった彼の剣が切り裂いた。一瞬驚いた表情を浮かべた
魔人は、すぐさま攻撃をやめ、宙へと逃げるように浮かび上がった。
「近頃は根性無しの冒険者ばかりだ、とと思ってましたが、どうやら
そうでもないようです。おや？　そろそろお時間のようです。
ではお約束通りに記念品を贈呈して、お別れとさせていただきます。
再び出会える事を心からお祈り申し上げます、見習い冒険者諸君。
では御機嫌よう！」

言葉と同時に彼と僅かに生き残った周囲の者達に強烈な睡魔が押
し寄せる。何かを囁くかの様に告げる声を耳にしながら、彼の記憶
は薄れていった。

03 ザックス、拾われる！

口腔に広がる生温かい感触。

次いで不思議な甘さが広がり、その後を追うかのような鋭い苦みがのど元を刺激する。

僅かの時を置いて全身が燃え盛るかの様な感覚に蹂躪される。体内で暴れまわる熱と共に息を吐き出したザックスは意識を取り戻した。甘い香りと共にぼんやりとした視界に広がるのは、柔らかそうな見知らぬ材質で編まれた胸当てをはちきれんばかりに押し上げる形のよい胸だった。やっぱり特注品なのだろうか、という疑問がぼつんと浮かびあがったザックスの頭上から、聞き覚えのない声が掛けられる。

「気がついた？」

初めて聞く優しい女の声。知的で耳に心地よいその響きに、ザックスのはこう答えた。

「こなわがままな胸を間近でみるのは初めてだな……」

途端に後頭部に激痛が走る。地面に放り出されたらしい。

「どうやら気がついたようだね」

今度は若干、刺刺しい声が投げかけられる。

「おいおい、姐さん。そいつ、死にかけてたんだぜ。もうちっとばかり、丁寧に扱ってやったらどうなんだい」

さらに聞きなれぬ男の声が被さった。

「もう十分だね！　あまり甘やかすとガキはつけ上がるからね……」
「女だつて同じだろうに……って、いや、別に姐さんの事を言ってる訳じゃありませんよ、はい」

語尾に力がないところを見ると、力関係は女の方が上であるらし

い。そんな事を漠然と思ひ浮かべながらも、意識が徐々に覚醒していく。どうやら気絶していたであろう自分がいかにしてその過程へと至ったのかと云う事を、うる覚えの記憶を探りながら思い出す。確か、人として褒めるところなど欠片もない雇い主達に裏切られて、放り出された上に、凶暴な《グリーン・ドラゴン》と対峙する事になって……。その場面を思い出し飛び起きる。

とたんに襲ってきたのは、ここしばらくなじみとなったいつもの目眩だった。揺れる世界の中でしつかりと踏みとどまったザックスは、慌てて周囲を見回した。その視界に移ったのは恐ろしい凶獣の姿ではなく、さらに別の男の姿だった。

「ウルガの旦那、終わったのかい」

ウルガと呼ばれた男はその呼びかけに片手を上げて応えた。ザックスより10歳近く年長だろうかと思われるその男は、《ライトメイル軽装鎧》グレートソードで覆われた巨軀に《大剣》を背負っている。一目で歴戦の冒険者であると言わんばかりの空気を身にまとった彼の右手にはザックスが《グリーン・ドラゴン》の尾に突き刺した《鋼鉄の剣》が握られている。衝突の勢いで無残にひん曲がったその剣はもはや使用不可能なクズ鉄と成り果て、古道具屋で二束三文程度の価値しかない。

「ドラゴンはどうなったんだ？」

ザックスの問いに答えたのはウルガではなく、最初に声をかけたきた女と共にいた男だった。

「ウルガの旦那がとくに片づけちゃったよ。悪かったな。お前さんの獲物を横取りしちまって……」

「あいつをたつた一人で？」

開いた口が塞がらない。

こちららさんさんに逃げ回って瀕死の重傷を負わされた立場である。危うく獲物にされかけながら、オレの獲物だなどと主張出来る訳もなく、たつた一人であるような強敵をあつさり片付けてしまった男の実力に唾然とするばかりだった。そんなザックスを一瞥したウルガは、もう一人の男に声をかけた。

「このあたりの周回モンスターはあらかた片づけちゃまって、しばらくは出現しないだろう。早いとこ本題に入ったらどうなんだ、ダントン」

若干、苛立ち気味の声でそう告げたウルガに苦笑いを浮かべながら、ダントンと呼ばれた男は了解の意思を示した。

「悪いな、俺の名はダントン。こっちの旦那がウルガで、そっちの綺麗な姐さんがエルメラだ。年齢は聞かない方がいい、殺されたくないかったらな」

ウルガの傍らに立っていたエルメラがダントンに石を投げる。どこかシリアスに至りきらぬ空気が漂う中、ザックスは彼らに名乗った。

「ザックスだ。見習い冒険者……未満だ」

ふてくされ気味に自己紹介をしたザックスにニヤリと笑いかけると、ダントンは言葉を続けた。

「一週間前の例の一件で生き残った総運値0の見習い冒険者……だよな」

「……。なんでそれを？」

「まあ、そんなに警戒しなさんな。実はそんなお前さんに俺達は用があつて探してたんだよ」

「オレに？」

「酒場のマスターに偶然お前の話を聞いてな。あちこち探し回つてようやく足取りをつかんだと思つたら、どうもおかしな奴らと一緒にダンジョン探索に向かつたつて言うじゃねえか。ところで一緒にいた奴らはどうしたんだ？」

「とつくに逃げちまつたよ、俺をドラゴンの餌にしてな！」

忌々しげに語るザックスの肩をポンとたたくと、ダントンは続けた。

「まあ、同情はするが、自業自得だ。騙される奴が悪い。これに懲りたらクエスト内容は選ぶ事だな」

「仕方ねえだろ。他に手がなかつたんだから……」

不貞腐れるザックスに肩を一つすくめるとさらに続ける。

「まあいいさ。捨てる神あれば拾う神ありってね。そんなお前さんに俺達は用があるんだよ」

「オレに？　どんな？」

「正確にはお前さんの運勢値になんだがな……。ちよつと確認させてもらつていいか？」

ザックスの首飾りを受け取ったダントンは、マナを込めて地面に彼のステータスを浮かび上がらせた。

名前	ザックス				
マナLV	05				
体力	40	攻撃力	55	守備力	48
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	40
智力	37				
技能	35				
特殊スキル	なし				
称号	なし				
職業	なし				
敏捷	38				
魅力	17				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX
状態	呪い(詳細不明)				
備考	協会指定案件6 129号にて生還				
所持金	非資格者による閲覧の為表示不可				
武器	非資格者による閲覧の為表示不可				
防具	非資格者による閲覧の為表示不可				
その他	なし				

「見事なもんだな。幸運度、悪運度がともにMAXで総運値0。こ

んなの初めて見たぜ。初めからこうだったのか？」

気付けばウルガとエルメラも覗きこんでいる。クナ石の首飾りを受け取ったザックスは、それを首元に戻しながら答えた。

「初心者で迷宮で気絶した後からだよ。目が覚めたらこんなになっちまってた。協会の奴らは『呪い』のせいだって言うんだが、本当のことなんて分かんねえつてのが本音だな。ところで俺に用って一体何だ？」

「実は俺達にはとある目的があるんだが、今、かなり行き詰っててな。そんな俺達にとってお前さんが救いの神になるんじゃないか、と考えたのさ……」

「……………」

「勿論、かなりの危険に巻き込む事になるんだが、お前さんにもそれなりにメリットはあるはずだ」

「待ちな、ダントン」

それまで黙って二人の話を聞いていたエルメラが、口を挟んだ。

「あたし達はまだあなたの与太話を信じた訳じゃないんだ。足手纏いのお守は御免だよ」

「まあ、待てよ、姐さん。言い出しっぺの俺だつて半信半疑なんだ。だからこれから実験してみよう、って言ってんだろ」

どうにも腑に落ちない話である。又利用されて切り捨てられるのは御免だと警戒するザックスに、ダントンはさらに説明を続ける。

「さつきも言ったように俺達はお前さんの総運値に興味をもっている。正確には総運値0ではなく幸運度MAX、悪運度MAXの方にだ……。こいつは俺の持論なんだが、冒険者の運勢値つてのは、幸運度、悪運度共に各々の場面において影響されるんじゃないかって事で……」

「退屈な御託はいいから、簡潔に結論だけを述べてくれればいいんだよ」

エルメラの茶々に、ダントンは苦笑いを浮かべながらザックスに向き直る。

「……つたく、どいつもこいつも短気だな。まあ、要するにお前さんの幸運度MAXの恩恵を確かめる為に、これから俺達とパーティを組んでこのダンジョンを探索してみないかって事だ」

「あんたたちとか？」

A級に分類される《グリーン・ドラゴン》をたった一人で打ち倒せる男のいるパーティである。他の二人だっただけかかなりの実力を持っているのは一目で分かる。そんな彼らにこの中級者向けのダンジョンの攻略など朝飯前といったところだろう。一体何が必要なのだろうか？

「このダンジョンは過去幾度も様々なパーティによって攻略されるんだが、実はこのダンジョンの最下層のボスモンスターは強さこそBクラスながらSSランクのレアドロップアイテムを持っているらしい。こいつには今20万シルバの懸賞金がかけていてな、それを頂いちまおうって寸法なのさ」

「レアドロップ？ 20万シルバ？」

「モンスターの落とす換金アイテムの取得方法には様々なやり方がある、つてのは訓練校で習っただろう。最下層にいるこいつの落とすレアアイテムの取得条件は純粹に運勢値が影響するらしい。そこでお前さんの出番って訳だ。お前さんの役目は俺達のパーティに入っただけで戦闘に加勢し、奴の落とすアイテムを収拾するだけでいい」

「なんか雲をつかむような話だな」

「まあ、懸賞金やレアドロップアイテムの話はついでみたいなものだ。要はお前さんの運勢値の力を俺達に示してほしいのさ」

「……………」

「なんだっただら最下層までに手に入る換金アイテムはすべてお前さんに渡してもいい。中級レベルのダンジョンとはいえかなりの身入りになるはずだ。どうだ、悪い話じゃないだろう？」

「確かにな……………」

「だったら善は急げだ、さっさと最下層まで行って上手い晩飯にありつこうぜ……………」

言葉と同時に無造作にポンと何かを投げ渡す。慌てて受け止めたザックスの手の中にあつたのは《跳躍の指輪》だった。

「そいつにお前さん自身を登録したら、そのまま持つててくれ。怖くなったらそれを使って逃げ出せばいいさ……」

「なんか、あんた達、なりふりかまつてないみたいだな……」

ザックスの言葉に一瞬3人の顔に暗い影が走った。しばらくの沈黙の後、それまで黙り込んでいたウルガがポツリと一言呟いた。

「俺達にはもう時間がない。この機会を逃したら次はいつになるのか……」

その言葉は重くザックスの心に響いた。

凄まじい。

頭に浮かんだのはその一言だった。上級冒険者達の実力にただ啞然とする。

マナLVの最高値50を誇るウルガを筆頭にLV40代後半の二人の計3人の戦闘は、見習い冒険者ですらないザックスの理解の範疇を越えていた。

ザックスを加えた一行は第十層のボスモンスターを、咆哮を上げさせる事もなく一蹴した。

さらに続く下層において並みいる周回モンスターを一撃、もしくは二撃で瞬殺して行く。凶暴極まりない周回モンスター達が斬り伏せられ、撥ね飛ばされ、焼き尽くされていく。『若様』御一行と同じく一見無造作な力押しに見えるがその実、相手に合わせて攻撃パターンを巧みに変えており、最も効果的な手段で敵モンスターを駆逐していた。息のあった連携でモンスターに反撃の隙すら与えずに完封してゆくその姿は、このパーティに回復役が全く必要ない事を

納得させる。

第二十層の飛行系ボスモンスターはそんな彼らの不意を巧みについで、一行の急所であろうザックスに強力な火炎弾を吐きつけたものの、あっさりとその意図を読み取ったウルガに割って入られ防がれた。逆にエルメラの《極大火炎連弾》で翼を焼き尽くされ、地に伏せたところをダントンによって首を刎ね飛ばされ、断末魔の叫びさえ上げる事はなかった。

これが冒険者のあるべき本当の姿なのか……。眼前に繰り広げられる戯曲的な光景の前に、ザックスはただ息を飲むだけだった。そんなザックスの内心など全く気にも留めず、彼らは快進撃を続け、最下層に向けて順当に歩を進めていた。

「思ったより手ごたえがなかったな」

このダンジョンを初めて踏破した冒険者達によって『錬金の迷宮』と名付けられたその最下層、第30層の扉の前で一行はようやく小休憩をとっていた。

並みのパーティなら確実に一日以上要するその行程を、僅か数時間足らずで駆け抜け、その間立ちふさがる周回モンスターから一度も逃亡する事もなく鮮やかに殲滅していた。

「さすがに最短踏破記録と云う訳にはいかなかったわね」

あっさりとそんな言葉を言っただけのエルメラだったが、この一団がその気になればそれすらも実行出来てしまっただろうと思えるから恐ろしいものである。

彼らは若様御一行とは異なり、ダンジョン内の地図など持ってはいなかった。ダントンの持つ探索系スキルLV3《察知》は、ダンジョン内の順路からトラップの位置までほぼ正確に把握するらしい。《盗賊》職系のダントンの技能はダンジョン攻略にはかかせぬものだった。

各ダンジョンの最短踏破記録は、協会によって記録されれば冒険者達の名誉となると同時に懸賞金の対象でもある。それ専門のパイティも存在するというのだから、冒険者の世界には様々な人々がいる事が窺える。

「しかし、お前さんもすぐかったな。《盗賊》でもないのに換金アイテムを一つ残らずあっさりと集めちまうなんて……。そっち系に向いてるのかな」

ダントンの言葉にザックスは思わず頭をかいた。ほとんど攻撃に参加できぬまま、ここまで来たザックスの役割は換金アイテム收拾のみであり、彼は全くミスなく全てを收拾していた。戦闘勝利ポイントを得る事によって、いつしかザックスのマナLVは15となっており、アイテム收拾スキル《収奪》を身につけていた。《初心者迷宮》での惨事以前はこのような芸当ができなつたあたり、もしかしたら内容不明な呪いの恩恵の一つなのかもしれないところだろうにも決まり悪い。

「じゃあ、いよいよ本命だな」

一同が僅かに身を固くする。彼らの最終目的がパーティの攻撃能力とは全く関係のないところでの問題であるだけに、さすがに抱える想いは皆複雑なところがあるのだろう。

「相手は植物系のデカブツだ。臭気と放散する花粉にだけは気をつけろよ」

そんなダントンの忠告を耳にしながら、一行の最後尾についたザックスは緊張した面持ちで扉をくぐった。

大広間突入もすでに3度目となればさすがに度胸も据わってくる。二度目の突入の際にはいきなり上空から火炎弾をぶつけられそうになり肝を冷やしたが、今度の敵はそのような小細工を弄する事もなく広間の中央、おそらくは召喚魔法陣の上と思われる場所に腰を落ちつけている。その様相は一言でいえば食虫植物のようなものであるが、大きさはケタ違いである。家畜程度ならば一飲みであろう。

うねうねと延びる無数の触手がグロテスクではあるものの、攻撃範囲に入らねば問題はない。慎重に接近する4人の気配と振動を感じ取ったモンスターは、威嚇するかのよう臭気と花粉を周囲に放散し始める。

すかさずエルメラが風術でそれらを一掃し、同時にパーティ全員の周囲に風の結界が生まれた。切り札である臭気と花粉を事実上封じると同時に、ウルガが無造作にモンスターに近づいていく。ウルガに対してモンスター触手で攻撃を試みるものの、当のウルガは自身に絡みついてくるそれを大剣で強引に切りとばす。よく見ればウルガの大剣の刀身にはうっすらと炎が浮かび上がり、切り捨てた触手の切り口を焼き尽くし、再生を封じていた。

徐々に弱ってゆくモンスターの巨大な主茎を、その影から現れたダントンが飛び上がりざまに両の双剣で斬り割いた。声ともいえぬ断末魔の悲鳴を上げて急所を切り裂かれたモンスターは地響きを立てて倒れ伏せ、動かなくなった。

徐々に白くなっていくその体躯の一部がやがて光り出す。慌てて飛び出したザックスはその光に向けて手を差し出した。瞬時に自身のマナとその輝きを同調させると、それを手にしたまま慌てて傍らの《袋》^{バッグ}へと収納した。

存在する力を失い完全に消え去ってゆくモンスターの軀を尻目に、ザックスの周囲に3人が集まってくる。

「どうだった？」

ダントンの言葉にザックスは《袋》^{バッグ}の中に再び手を入れると、今收拾したアイテムを確認するために取りだした。マナの同調が解けると同時にザックスの手に握られているのは、手のひら大の植物の球根だった。ダントンがそれを取り上げ注意深く《鑑定》する。3人が息を潜めてそれを見守る中、やがて、ぽつりと紡ぎ出すように言葉を放った。

「やりやがったじゃねえか……ザックス！」

僅かに震える手で、それをウルガに引き渡しながら、彼は続けた。

「SSランクのレアアイテム《ハルキユリムの球根》に間違いねえ。どうだ、俺のいった通りになったじゃねえか……」

不思議そうな顔でそれを眺めるウルガとエルメラを尻目に、ダントンが喜びを爆発させた。

「やりやがったよ！ お前、たいした奴じゃねえか！」

喜ぶダントンにバンバンと背中を叩かれながら、ザックスは貴重なレアアイテムを手に入れた喜びよりも、ようやくはじめてのダンジョン踏破成功にほっとしたのだった。

2011/07/17 初稿

04 ザックス、大いに楽しむ！

「親父！ 飯だ！ 最上級の奴を頼む。それから店中の奴らに酒を出してやってくれ！ 今日俺達からのおごりだ！」

その日の晩のガンツ＝ハミツシユの酒場は大いに賑わっていた。

酒場に所属するパーティの中でも古株であり、酒場の顔でもある彼らが手にした巨額の懸賞金によって、店内は大騒ぎとなっていた。

目的のSSランクアイテムを手に『錬金の迷宮』を離脱したザックス達一同は、自由都市内のアイテム換金所で長く待たされる事となった。SSランクのレアアイテムが持ち込まれた事で驚いたのは換金所内の職員達も同じであり、鑑定から懸賞金の支払いまで、てんやわんやの騒ぎとなっていた。

《ハルキュリムの球根》は市場には決して流通する事のない強力な秘薬の原材料として高値で取引され、懸賞金をかけたのはとある年老いた貴族であるという話をダントンから聞きながら、ザックスは退屈な時間を紛らわしていた。

球根以外にダンジョン内で收拾したアイテムを全て換金した総額はおよそ4万シルバに及び、球根の取り分の5万シルバと合わせてザックスの懐には実に9万シルバもの大金が転がりこむこととなった。この中からザックスは1万シルバを3人に支払っていた。《グリーン・ドラゴン》に瀕死の重傷を負わされた際にザックスに使用された高級薬滋水の価格を弁償したのである。

「せっかく口移しで飲ませてやったんだから、その分もつとふっかけたらどうなんだい」

ニヤニヤと笑いながら、意外な事実を知らせるダントンの一言でエルメラの顔を正視できなくなってしまったのは、些細なアクシデ

ントである。

換金所内の人々の羨望の眼差しを背に、堂々と出ていくウルガ達にそのままついていくこととなったザックスは、クエストの打ち上げと称して見覚えのある酒場へと連れて行かれた。ガンツハミツシユの酒場　ウルガ達のパーティが根城としている酒場兼宿屋であり、ザックスが30件目に訪れた際に彼の身に起きている状況を丁寧に説明してくれたマスターのいる酒場だった。

「何やってるの？　あんたもこっちに来るんだよ！」

豪快に料理と酒の注文を終えると、店内の客達の喝采を浴びながら堂々と2階席へと上がって行く3人を呆然と見送っていたザックスに、エルメラが声をかける。妖艶な美貌のエルメラに声をかけられたザックスの風体が見習い冒険者である事に、今度は店内から様々な奇異の視線が向けられる。一部では敵意の込められた視線すら感じたザックスは、慌てて二階席へと駆け上がって行った。

いそいそと階段を駆け上がったザックスは、二階席に広がる光景にぎくりと足を止めた。広さこそ一階席の約半分程度であるものの、8卓程度しか置かれていないその場所は、すし詰め気味の二階席に比べてはるかにゆったりとした造りである。しかもその8卓に座っている者達は皆、明らかに熟練の冒険者の匂いを漂わせ、誰もが駆け上がってきたザックスに好奇の眼差しを送っていた。

「おい、ザックス、こっちだ」

ウルガ達は二階席の最奥部、おそらくはそこから店内全体を見渡せるであろうと思われる一卓についていた。足早に熟練冒険者達の好奇の視線の中を潜り抜けたザックスは、ようやく彼らの席へとたどりつき一息ついた。

ダントンに促されるままに彼らの卓の末席に着いたザックスの前に、なみなみと注がれた麦酒のジョッキが置かれる。氷術系魔法を使ってしっかりと冷やされたその麦酒を運んできたのは獣人族の女性だった。スレンダーな姿態に猫族特有のしなやかな仕草の彼女は、尻尾をピンと立てたままザックスに「いらっしやいニヤン！」と軽

くウインクをすると、軽やかにその場所を離れて行く。

店内の全ての人々に麦酒のジョッキが行き渡ると、ダントンはやおら立ち上がり、店内を見下ろして大声で叫んだ。

「明日の今頃はどこかのダンジョンの中でおっ死んでしまってるかもしれない冒険者共よ！ 酒は行き渡ってるか？ 今夜俺達は素晴らしい獲物を手に入れた。この一杯は俺達3人とここに居る勇敢な見習い冒険者ザックス殿からのおごりだ！ 心して味わってくれ。

足りないならば樽を開ける！ この店の酒は俺達が全て買い占めた！ ガンツの親父がもうやめてくれ、と泣きだすまでしつかりと飲んで騒いで、最高の夜を味わってくれ！」

バカヤロウ、その程度で俺が泣くもんか、というガンツの言葉が冒険者達の感謝の声にかき消される。

店が震えるような雄叫びを上げて騒ぎ立てる冒険者達を尻目に、ザックスの前には次々に旨そうな料理が並べられ、この都市に来て以来初めての至福の一時を味わっていた。

宴もたけなわ、夜も十分に更けてそろそろお開きといったところだろうか。十分に酒を飲まされて若干、酩酊気味の頭を抱えたザックスは周囲を見回した。

向こうの卓では、賭け腕相撲で店内の力自慢達を根こそぎ倒したウルガの前に、空になった幾つものジョッキと硬貨がうず高く積まれている。一階席では一夜の床を賭けてエルメラと飲み比べを行い、無様に敗北した男達が折り重なるようにして倒れ、それを肴に、エルメラがちびちびとジョッキに口をつけている。

「楽しかったかい……」

ザックスの眼前ではやはり彼と同じく酩酊気味のダントンが、麦酒を呑んでいる。

「こんな夜はこの街にきて初めてだな」

ザックスはぼつりと呟いた。

どこか陰気な空気のコモった故郷を飛び出して以来、いつも肩肘を張って過ごしてきた日々が続いていた。昨日の今頃は開けぬ未来への不安で気がおかしくなりそうな夜をすごしていたはずだ。

「そうかい……」

そんなザックスの様子を柔らかな眼差しで眺めながら、ダントンはぼつりと呟いた。

「誰もがこの街で夢を見る。大きなもの。小さなもの。そして様々な思い出を胸に皆いつかは去ってゆく。ここはそんなところさ……」

しみじみと呟くダントンの言葉が染みわたる。再び沈黙が広がり、やがて店内のどこかからの小さな喧騒にかき消されていった。

暫しの時間をおいて、ザックスはずっと心の中に抱えていた疑問をダントンにぶつけた。

「なあ、あんた達の目的っていったい何なんだ？」

今日のSSランクアイテムの收拾はあくまでもザックスに対するテストである。圧倒的な実力を誇る彼らが行き詰まりを抱えている問題。そして自分のような駆け出し冒険者の力すらあてにせねばならない状況。それがいかに困難なことかと云う事は、ザックスですら容易に想像がつく。

ザックスの質問にダントンは直ぐに答えなかった。ジョッキの中の麦酒の泡が消えていく様を、どこか焦点の合わぬ目でぼんやりと眺めている。

それからどれだけの時間がたったのか……。やがてぼつりとダントンが口を開いた。

「俺達は《十二魔将》の一人を追っている。もう五年近くになるかな……」

《十二魔将》 ああ、どこかで聞いたような懐かしい言葉だ。何だったのだろうか、と酩酊する頭をフル回転させてその言葉に関連する記憶を脳内から引っ張り出す。と、過去のあるシーンを思い浮かべたザックスは背筋を震わせた。

瞬く間に酒気が吹き飛んだザックスが思い浮かべたのは、ダンジョン内の空中にふわりと浮かんだ陰気な魔人の顔だった。

慌てて周囲を確認する。

幸いなことにまばらになった二階席の客達は皆酔いつぶれているようで、ザックスとダントンの会話に聞き耳を立てていそうな奴は一人もいない。ホツと胸をなでおろすザックスに、曖昧な笑みを浮かべたダンTONは淡々と続けた。

「気にするな。この事は酒場の常連やマスター達は皆、知っている事だ」

「そ、そうなのか……」

「ああ。俺達は五年前、奴に全てを奪われた。それ以来、奴の消息を求めて様々なところへと向かった。いつの間にかそれこそが俺達の最終目的になっちまった。」

無茶な事もずいぶんとやった。僅かな手掛かりを求めて未踏破ダンジョンを探索した事もある。おかげで手に入れた物は大きかったが、失った物も大きかった……」

未踏破ダンジョン 全く情報のないその場所を探索、踏破して名を残す事は冒険者にとって名誉の一つであるが、同時に最大級の危険でもある。既踏破ダンジョンに比べて圧倒的な踏破率の低さは、その困難さを裏付けている。

「五年という時間をかけてようやく分かったのは、奴らが俺達の住む世界とは別の時間の流れの中に身を置いている事、過去に俺達と同じ人間だったということぐらいだった」

「たった、それだけなのか……」

ダンTONは小さくうなずいて、ジョッキの中の麦酒に再び口をつける。

「一月前の事だ。ほとんど手詰まりに近い状態だった俺達はある情報を得た。奴が再び現れる、とある星詠みが神託を受けた」

占いを生業とする星詠み達のそれは決して確実なものではない。

だが一部の靈感能力の著しく高い星詠みが、時折創世神からつける

託宣の実現率は完璧であった。

「俺達は急ぎその神託の場所へと下見に向かった。だが、そこはかなり厄介な場所だった。無限回廊つてのを知ってるか？」

「いや……、初めて聞いた」

「ある空間の中に幾つもの異なる事象が、同時にしかも無限に存在する場所の事をそう言うんだ。特に目的がなければ、踏み込んでモサほどの問題はない。適当に一つの事象が確定するだけだから……。だが、ある特定の目的をもって踏み込むとなると途端に厄介度が跳ね上がる。無限の事象の中から目的であるたった一つのみを確定させねばならなくなる。魔将と対峙するといったたった一つの事象をな……」

「……………」

「奴が現れるのは今からおよそ一月後の満月の晩だ。その機会を逃せば、いつ又遭遇できるか分からない。神託だつてそうそう都合よく下るものじゃないからな……」

「オレはそこで何をすればいいんだ？」

「お前に望むのは、俺達が無限回廊で奴と対峙する状況に立たせてくれる事だ。回廊の扉を開け、無限に存在する世界の中からたった一つを選びとつて、俺達をそこに誘こびかつてくれればそれでいい……」

「なんでオレにそんな事ができるんだ？」

「お前さんには悪運度MAXというパラメータがある。つまり最悪の選択肢を選びとる事ができるのさ。回廊の中で起きうる最悪の選択肢　魔将と対峙するという……な」

「そんなに都合よくいくものなのか？」

「多分な、それを今日お前さんは、証明して見せただろう」
「そう言うと、ダントンは再びジョッキに口をつける。」

「実のところ旦那も、姐さんもこの計画には反対なのさ。お前さんを魔将との戦いに巻き込むことになるからな。こいつは俺達の問題だ。俺達のわがままの為にこれ以上関係ない人間を死なせる事はできない　それが二人の言い分さ」

「どついう事だ？」

「5年間俺達はずいぶん無茶な事をやってきた。そんな俺達と組んで命をなくしたり廃業しちまった奴らは一人や二人じゃないってことだ。この酒場の2階席に座る奴らだって、間違いなく尻込みをする。魔将と戦うつてのはそういう事なんだ」

2階席に立ち入る事が出来るのはマスターに許可を得たパーティーかその客分のみ、それがこの店の暗黙の了解である。それなりに実力がなければマスターに認められることはない、そんな話を宴の間に誰かから聞いた事をザックスは思い出した。

「ぶつちやけて言えば、お前さんの話を聞いた時、俺は間違いなく仲間に引き込めると思った。総運値の問題を除いても、魔将に出会いながら只一人冒険者であり続ける道を選んだお前さんなら、きっとモノになるだろうってな。」

お前さん自身、自分に降りかかった呪いをどうにかしなければならぬと考えているんだろう？」

その問いにザックスは静かにうなずいた。

「だが、ドラゴンに撥ね飛ばされて死にかけてるお前さんの姿を目にして考えが変わった。やっぱり駄目だ、とな。いかに明確な動機があつたとしても実力の差は如何ともし難い。旦那や姐さんの言いたい事つてのがよく分かつちまった。」

優しいんだな、あの二人は……。自身の目的の為に他者を平然と犠牲にする非情さつてのを持ち合わせちゃいない。まあ、それが二人の魅力だからこそ長い事付き合っているんだろうが……」

「……」
「でもな、それでも諦められないんだよ。今、目の前に長い事待ちわびた機会が転がっている。お前さんの成長を待つて次の機会を待つ事など、俺にはもうできそうにねえ。『時間による忘却』つて名の敵には、人は絶対になわねえからな……」

ジョッキを飲み干したダントンは階下に向かって代わりの杯を注文した。猫族のウェイトレスが運んできたそれに再び口をつけると

先ほどとは違って変わった明るい様子で再び話し始めた。

「まあ、湿っぽい話はここまです。今日はめでたい日だから」

「めでたい日？」

「ああ、お前さんはマスターだけでなくこの酒場の奴らに仲間として認められたんだよ。何たって俺達4人の杯をみんなたらふく飲んじまったんだからな。文句なんて言えやしねえ。これからはパーティのメンバー集めに苦労する事もないだろうし、妙な奴らと組む必要もない」

冒険者協会公認の酒場に所属する事　それは冒険者として様々なメリットがあるだけでなく、極めて重要な意味合いがある。

「ところでいつ行くんだ？」

「へっ、どこに？」

「何言ってるんだ。お前さんのマナレベルはとっくに10を超えちゃってるんだろ。だったらいいよ『職』に就けるんじゃないか」

「そ、そうか……」

「多分今が一番楽しい時だろうな。目の前に無限の可能性が開けている。そんな錯覚と期待の中でいろんな夢を見る事が出来るんだから……」

そう言つとダントンは手にしたジョッキを差し出した。

「見習い……じゃないな。初級冒険者ザックス殿の前途を祝して……」

…乾杯」

カチン、と二人のジョッキが合わさる音が、宴のあとの静けさに満ちた2階席の空気を小さく震わせながら広がった。

05 ザックス、出会う！

創世神殿 大陸の様々な主要都市に必ず一つは存在する創世神を祭る神殿である。逆にいえば、創世神殿のある都市はそれなりの規模と格式と伝統を備えた都市であるとみなされる。同時にこの場所は冒険者達に『職』を与える場所でもある。

冒険者たちは『職』につく事によってそれに応じた様々なスキルを身につける事が出来る。冒険者が成長の過程で得られる固有スキルの数を大幅に超えるものが得られる為、これは冒険者にとって必須事項であった。

冒険者のマナLVが10に達し称号が『見習い冒険者』から『初級冒険者』へと変わる事で彼らは初級職に就く事が出来る。マナLVが10に達するまでの期間『見習い冒険者』として彼らが扱われるのは、本当に彼らが冒険者としてやっていけるのかを見定める期間だといえる。

ガンツハミツシユの酒場での大宴会の翌朝、遅めの軽い朝食を済ませたザックスは大浴場で身を清めた後、酒場のマスターであるガンツの推薦状を受け取ってこの場所に向かっていた。信仰心とはとんと無縁な彼であったが、さすがに酒の匂いを漂わせながら神殿へ訪問するのはまずいだらう、と考えた為である。

荘厳な石造りの建物の中には彼と同じく、初めての『職』に就こうとする者や『クリスチエンジ転職』を望む者達が列をなしており、ようやく彼の番が回ってきたのは、昼時を大きく過ぎた頃であった。

「こちらへどうぞ」と事務的な微笑みを浮かべた係の者に誘われるままに入った部屋の中で、ザックスは思わずうなり声を上げそうに

なつた。

部屋の正面にはこの世界の子供ですら誰もが知る伝説の一幕を描いた壁画が描かれていた。異世界から現れた邪神とも呼ばれる《破壊神》と対峙する《創世神》。描き手の有無をいわさぬ圧倒的な筆力が、その戦いの激しさの一部始終を壁面に描きとめていた。

「気に入られましたか？」

くすくす、と笑いながら掛けられたその声にハッと意識を取り戻したザックスは、壁画の下の机に座った一人の巫女の姿に気付いた。その彼女の容貌に再び息を呑む。

年の頃はまだ十代半ば、あるいはもつと幼いだろうか？ 流れるような美しい銀髪にあとけない笑みを浮かべる彼女の頭には、小ぶりの兎の耳があった。兎族。獣人族の中でも、その類い稀な容貌と明晰な頭脳で有名な種族である。

男女を問わず幼少時のコケティッシュな魅力と成人時の圧倒的な美貌には、誰もが目を奪われ、一部の不埒な者達によって、売買の対象とすらされる事もある。さらに彼らの明晰な頭脳は国の中枢部でも十分に活用され、獣人ながら有能な官僚や政治家として名を馳せる者も多い。

欠点と云えば人間に比べて若干短い寿命くらいであり、大抵のものが長寿を誇る獣人族にしては短命といえた。その類い稀な資質故に、人間、獣人を問わず、敵も多く、偏見をもって扱う者達も少なくない。

「私の顔に何かついていませんか？」

ザックスの視線に気を悪くしたのだろうか。幼い外見に少しばかりムツとした表情を浮かべて、今度は少し居丈高に振舞おうとする。気を悪くした様子すら可愛らしい絵になるのだから、兎族の魅力とは恐ろしいものである。

「い、いや、その……すまん。こ、こんな可愛らしい人を見るのは初めてなんで……、その緊張しちまって……」

しどろもどろに自身に決して悪意がない事を示そうとするザック

スの姿とその言葉に、今度は彼女が赤面する。

「こちらこそ、御免なさい。私の外見がこんなせいで、気を悪くされる冒険者の方もいらつしやるので……」

創造神殿の巫女といえども、それなりに気苦労があるらしい。まだ巫女服姿が板についていない様子の彼女は、新米巫女といったところなのだろうか。

「初めて『職』に就かれるのですね？」

クナ石の首飾りを受け取った彼女はそのステータスを確認した後で僅かに小首を傾げる。が、直ぐに何事もなかったかのように、説明を始めた。

「これからザックス様には初級職に就いて頂くための洗礼を受けて頂きます。洗礼といっても、滝を潜り抜けて頂くだけのきわめて簡単なものですが……」

小ぶりの耳を時折ぴくんと動かしながら、彼女は説明を続ける。

「《初級職》は全部で3種類。戦士、詠唱士、技能士。戦士は主に戦闘系のスキルを、詠唱士は主に魔法系のスキルを、技能士はダンジョン探索に欠かせないスキルやレアスキルを覚えていきます。そのほかにはマナLVによって冒険者個人のもつ潜在的特質から発生する固有スキルというものも存在します。ザックス様の場合はアイテム収拾スキルLV3に該当する《収奪》がそれに当たります」

「それってすごいのか？」

「そうですね……。レベル40以上の上級冒険者の方でも滅多に持ち得ないスキルだといえればお分かりでしょうか？」

マナLV16のザックスには《収奪》という特殊スキルは、破格すぎるものらしい。

「ここで注意すべき点なのですが……」

僅かに緊張した面持ちになって声を潜めた兎族の少女は、言葉を選ぶように告げる。

「冒険者の方々に職業選択の自由はありません。全ては《創世神》の御意志であって、それを変える事は私達神殿に従事するものに

もできないのです」

「つまり、自分の望み通りの職業に就く事は難しい……と？」

「戦士や詠唱士の場合は、大抵これまでの冒険者の方々の適正に応じたものに割り振られます。ただ、鍛冶職や盗賊職、といった技能士系の特殊職をお望みの方が、後々その通りの職に就けるかどうかは難しいということです。よろしいでしょうか……」

彼女は若干自信なさげな瞳でザックスを見上げる。職業はパーティの編成に大きな影響を与える事柄である。下手をすれば現在のパーティを解散せねばならぬ事態にもなりかねず、この辺りは特定の仲間たちと行動を共にしてきた普通の冒険者達には、厳しい問題となるのだろう。

「いいさ、今のところ別にこれといった問題もないしな……」

幸か不幸か、そういった制約のない今のザックスには大きな問題ではなかった。そんなザックスの答えに巫女の少女は表情を崩し、心から安堵した様子を浮かべる。自身がどうにもできない事に文句を言われたらどうしようか、と内心びくびくしていたのだろうか。

「最後に『経験値の寄進』はいかがされますか？」

「経験値の寄進？」

聞きなれぬ言葉に首を傾げる。そんなザックスの様子に、少女は再び説明を始めた。

「現在、ザックス様のマナLVは16となっております。『経験値の寄進』とはこれまでの冒険で得られた経験値によって増加した体内のマナを開放する事で、マナLVを意図的に落とす行為です」

「なんでそんな面倒くさい事を？」

「マナLVを一度落とした後、再度探索やクエストにおいて経験値を得て再びそのLVに達すると、以前の時よりも高いパラメータを得る事が可能となります。もちろん各段階において上限値はありませんが……。その他にも低いレベルでしか遭遇できないモンスターやアイテムを得る場合の調整手段として、ご利用なされる方もいらっ
しゃいます」

「……………」
「巷では『経験値売却』と呼ばれる行為と似たようなものです。もちろん神殿に寄進された経験値に相当するマナは、有益な手段で神殿の様々な慈善行為にて還元されます」

最後の言葉と共にぺろりと舌を出す。建て前はともかく実態は彼女のような下っ端の巫女には分からない、と言外に告げていた。

冒険者の資産状況によつてはここで『寄進』するよりも自由都市内のしかるべき場所で換金化することで、今後の探索の資金としたほうが有利である。そんな彼女の心遣いだった。

長い目でみれば冒険者にとつて有利な行為である事は間違いないらしい。『経験値売買』と云う言葉に若干の抵抗があるザックスは、彼女の勧めに従つて『寄進』を行う事にした。

「ええと、どのくらい『寄進』できるんだ？」

「短期間で体内からマナを開放する為、一度に余りにも大量のマナを放出すれば、体内のバランスを崩し健康を損なう事もあります。今のザックス様のLVでは『職』に就かれるという事を考慮するとLV10程度までが妥当であると思われます」

「じゃあ、それで頼む」

「ではこちらに手をかざして、マナを込めてください」

傍らに置かれたケル石の結晶の上にかざしたザックスの手の甲に、少女が自身の手を重ねた。彼女が何事か小さく呟くと同時にザックスの体内からマナが解放され、手の下にあるケル石の結晶に吸収されていく。僅かに上気した顔を上げた彼女はザックスの体調を案じた。

「お身体は大丈夫ですか」

「ん、ああ、なんか頭がすっきりした感じだな」

マナが解放された瞬間、一瞬倦怠感を感じたものの、すぐに体内に満ちてきた清涼感にザックスは軽く伸びをする。

クナ石の首飾りはザックスのマナLVが再び10に戻った事を示している。そんな彼の姿にかなり驚いた表情を浮かべた少女だった

が、直ぐに微笑みを取り戻して言葉を続けた。

「それではこれから《洗礼の滝》へと向かいます。私についてきて下さい」

「ああ、よろしく頼む」

少女は立ちあがりザックスと連れだつて部屋を出ようと扉に手を掛けたところで、ふと思いついたように尋ねた。

「あの、どうして冒険者を続けようと思われたのですか？」

「えっ？」

不意の質問に思考が止まる。そんなザックスの様子に少女は慌てて詫げる。

「す、すみません。立ち入った事を聞いてしまって……。ただ……。協会指定案件6号に該当する事件。それは貴方が過去に命を失うなどと言葉では語り尽くせない恐ろしい目に合われたという事。

普通だつたら冒険者を廃業して別の道を模索するでしょう。でも貴方は冒険者であり続けようとされている。いったいどうしてなのか、そう、疑問に思ったのです」

尋ねながらいつの間にか食い入るようにザックスに迫っていた少女は、ハッと我に返って赤面し、一步身を引いた。そんな彼女の問いに対してザックスは宙に視線を飛ばし、彼女の質問の回答を思索した。

「そうだな、やっばりまず、オレにかけられた訳のわからない呪いをどうにかしなきゃならない、つてのはあるな。けど、それだけじゃない……。怒りつてのもあるかな」

「怒り……。ですか？」

「わずかな間だつたとはいえ、訓練校の仲間達をオレから奪いこんな目にあわせた奴に、あるいは理不尽な運命に一矢報いてやりたいつてやつかな」

「……………」

「でも、なんだかそれだけでもないような気もするな……。俺は、もしかしたらそんな今の状況が本当に楽しいのかもしれない」

「楽しい……」

「嫌な事も怖い事もあるかもしれないが、それでも仲間たちと連れだって目的を完遂して、それを共に喜びあう たった一度だったけど俺は初めて過ごしたそんな時間がとても嬉しかった。もう一度あるいは何度でもそんな時間を過ごしてみたい、そんな冒険者の毒に染まり始めているのかもな……」

いつの間にか少女に迫っていたザックスは、我に返ると熱く語っていた自身に赤面し、一步身を引く。そんな彼の顔をまじまじと見つめていた少女は、やがて小さく微笑むとザックスの手を取り、扉の向こうへと彼を誘った。

「行きましよう、貴方がこれから見出すであろう何かの為に、私にお手伝いさせてください」

そんな言葉と共にザックスを先導しようとする小さな彼女の手は、温かく力強かった。

「ええと……」

戸惑うザックスの隣で巫女の少女も又、顔を赤らめて立っていた。《洗礼の滝》 滝と云っても建物の上層から下層に向かって水が落ちていく人工の滝である。

洗礼着である腰巻だけの姿になって膝まで水に浸かっているザックスの隣には、やはり彼と同じように洗礼着に着替えて膝まで水に浸かった少女の姿があった。このまま二人で《洗礼の滝》に打たれながら潜り抜ける事で、洗礼は終わりらしい。

実に簡単な行為であるが、今のザックスの内心の動揺は余りにも激しかった。その原因は彼の傍らに立つ洗礼着姿の少女にある。

薄い布切れ一枚に包まれただけの幼い彼女の姿態はまだ凹凸に乏しいものの、滝の水しぶきに濡れた洗礼着を素肌に張り付けた姿は、まだ若いザックスを動揺させるには十分すぎた。さらに幼いながら

も手足のすらりと伸びた容姿の彼女がぴたりと彼に寄り添うことで、ほんのりと伝わる少女のぬくもりと甘い香りが、理力MAXのパラメータを誇りドラゴンの咆哮すら耐えきったザックスの不動心を、著しく掻きまわった。

いったい何人の奴らが今の自分と同じようにこんな姿の彼女と時を過ごしたのだろうか、と神聖なはずの場にそぐわない不謹慎ともいえる黒い感情が内心に渦巻くのを傍らの少女に気付かれぬよう、ポーカーフェイスを張り付ける。

互いに終始無言であった二人だが、やがて彼女は自身の役割を果たすべく、ザックスの先に立って彼を滝へと誘った。

天井から流れ落ちてくる滝の水は僅かに青白く輝いている。マナを秘めた神聖な水である証を確かめたザックスは、少女の両手から差し出された水を口に含むと、彼女に手をひかれるまま滝の中へと身を進めた。

仄かな青白い輝きを放つ水に全身を浸した瞬間、ザックスの周囲の景色が変貌する。

どこまでも青く広がる世界。意識すらすべて解放されそうなその世界の中でザックスは何者かのおごそかな声を全身で受け止めた。同時に自身の身体感覚がどんどん消失するような錯覚を覚えた。あわてて、何かに縋りつこうとしたザックスは自身の左手であったものをしっかりと握る柔らかなぬくもり。巫女の少女の手の感覚をしっかりと意識した。とたんに彼の周囲は再び現実へと戻り、気付けば傍らの少女と共に滝を潜り抜けていた。

「大丈夫ですが」

心配そうにザックスの顔を覗き込む少女。見知った濡れた薄絹の衣と輝かんばかりの銀色の髪が視界に入る事で、ザックスは落ち着きを取り戻した。

「妙な声が聞こえなかったか？ 聞いた事のない言葉で話す……」
ザックスの言葉に少女はわずかに驚きの表情を浮かべる。だがそ

れをすぐに消した彼女は静かに首を振った。その行為で自身の感じたものが只の錯覚であると理解したザックスは、慌てて首元のクナ石の首飾りにマナを込めた。職業欄に《戦士》の表示を確認したザックスは、安堵の笑みを浮かべた。

「ありがとう、無事に《戦士》職に就けたみたいだ」

眼前の少女は真っ赤になってうつつむいている。ザックスは喜びのあまり彼女の両手をしっかりと握りしめ、自身の胸元に引き寄せていた事に気づいた。

「ご、ごめん！」

慌てて手を離して一歩引いたザックスに、少女は小さくかぶりを振った。

再び装備に身を包んで自身に礼を言って去っていくザックスの背を見送りながら、少女は小さな自己嫌悪にとらわれていた。

詩や戯曲のなかにあるようなもつと気の利いた別れの言葉をかけるべきだったにも拘わらず、導き手という役目を終えてしまった彼女は、ただ時間の流れるままに無言で彼を見送るだけだった。

もつと話をしていたい。

もつとあなたの手を知ってみたい。

人として当たり前のように浮かび上がる願いを口にする事を阻んだのは、神殿巫女としての職務や立場よりも、そんな自身の内心を思うままに吐露する事を気恥ずかしく思う彼女の心だった。

どんなに巫女としての潜在能力に優れていても人生経験の少ない彼女は所詮13歳の小娘である。年長の巫女たちのように巧みな話術で縁をつなぐ術も知らず、小さな無力感が己の中に湧き上がる。

そんな彼女の背に突如大きな黒い影が現れ、まだ水にぬれたまま

の銀色の髪と取りあえず羽織ったガウンに包まれた細身の姿をしつかりと抱きしめた。

「こらーっ！ イ〜リ〜アっ！」

イリアと呼ばれた少女の小柄な姿態をしつかりと抱きしめたのは、彼女の姉貴分の巫女の一人だった。可愛い妹分をしつかりと羽交い絞めにした彼女だったが、その腕の力はいつも以上に強かった。

「昼日中のもも忙しい最中に、ずいぶんのんびりとした時間を過ごしてくれたようですね、あなたは……」

僅かにとげのこもった姉貴分の声に小ぶりの耳をピンと立て、丸い尻尾をわっさとふくらませて、少女は慌てて弁解する。

「そ、その、《初級職》の方でしたので、神殿巫女として出来る限りのお務めを果たさせて頂いただけですわ。マリナ姉さま」

少しばかり、上ずった声で弁解するイリアだが、そんな彼女にマリナと呼ばれた姉巫女は僅かに目を細めた。

「出来る限りのお務め……ですか。いつから《初級職》の洗礼の見届け人であるはずの神殿巫女が、洗礼者と一緒に滝をぐる、なんて事をするようになったのかしら。ご丁寧な女性冒険者用の洗礼着にまで着替えて……」

その言葉にイリアの顔が真っ赤になり、小ぶりの兔耳がぴくぴくと忙しく動き始めた。

「な、なんのことでしょうか？ マリナ姉さま。な、何か勘違いをなさっ……フミヤア！」

「嘘をつこうとする悪い口はどれかしら？ まったく……。これは『お義父様』に報告すべきなのかしらね……」

少女の両頬をつねって、その言葉を封じたマリナはイリアの弱点である『お義父様』の威光をつかって、巧みに彼女を追い詰めていく。

「そ、それだけは許して……姉さま」

「まったく、あなたは……。神殿巫女が与える《最上級の洗礼》つてのが、どういう意味がよく分かってるでしょうに……。小さなあ

あなたには10年早いのですわ。それもあんなどこの馬の骨ともしれないへっばご冒険者に……」

「馬の骨でもへっばごでもありません！ ザックス様で……フミヤア！」

若干涙目になりつつあるイリアの可愛らしい両頬を振り上げながら、マリナはあきれ果てる。

「で、そのザックス様にうっかり者のあなたは、きちんと連絡先なりを尋ねたのかしら？」

その言葉に再び羽交い絞めにされたイリアの耳が一瞬ピンと立ち、直ぐに、しおしおとうなだれた。

「おおかた名前すら教えてないのでしょね、このオマセさんは……。兎族の女は昔から早熟だって言うけれど、可愛いあなたには、まだ早いわよ。まあ、いいわ。『お義父様』に報告されなくなかったら、今夜は私達の前であたの『初めて』の一部始終を、しっかりと告白してもらいましょうかしら」

「私達？」

羽交い絞めにされたまま振り向いたイリアの視界には、マリナより僅かに年下の、やはりイリアの姉貴分である巫女達が、ニヤニヤと笑顔を浮かべて立っている。その様子に蒼白になったイリアを今度は優しく抱きしめたマリナは、諭すように告げた。

「早く身なりを整えていらっしやいな。あなたの今日のお務めはまだ終わってないのですよ。私達の力を必要とする冒険者は、彼一人じゃないのですから」

「……はい、姉さま」

小ぶりの耳をシュンと頂垂れさせて扉の向こうに消えていくオマセな妹分の背中を、マリナ達は小さな微笑みを浮かべて見送るのだった。

夕暮れの波止場は人影もまばらだった。

創世神殿からの帰り道、ふと何気なく波止場に立ち寄ったザックスは、貸し釣具屋で竿と餌を借り、波止場に腰掛けて釣りをする者達の中に見知った背中を見つけ、その隣に腰を下ろした。

「よう、爺さん、釣れてるか。」

「なんじゃ、お前さんか。あれからどうした？ どれ、ちよいと見せてみい」

再びいつの間にか老人の手の中にザックスの首飾りが握られている。2度目ともなればさほど驚くこともない。ウルガ達と共に行動した事で、この老人が特殊なスキルを持った只者ではない事におおよその見当がつく。

名前	ザックス				
マナLV	10				
体力	67	攻撃力	83	守備力	77
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	55
智力	48				
技能	50				
特殊スキル	収奪				
称号	初級冒険者				
職業	戦士				
敏捷	67				
魅力	25				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX
状態	呪い(詳細不明)				
備考	協会指定案件6	129号にて生還			
所持金	79350シルバ				

武器	鉄の剣
防具	冒険者の服 冒険者のズボン 皮の靴
その他	なし

「ほう、どうやらずいぶん上手い事やったようじゃのう」

「おかげで死にそうになつたけどな……」

「ふん、それでも今、お前さんはこうしてぴんぴんしておるじゃないか。『終わり良ければすべてよし』ということじゃよ」

「まだ、終わってねえよ。ようやく始まつたばかりなんだぜ」

そんなザックスの言葉にニヤリと笑みを浮かべた老人は、首飾りをザックスに返した。

「で、その始まつたばかりのお前さんはどうしてここにおるんじゃ？ 今のお前さんは食費の切り詰めなんて考える事もないじゃろう？」

「只の趣味だとは思わないのか」

「お前さんの下手な腕前じゃ、誰もそうは思わんよ。どれ、ワシがいつちよ、特殊スキル《釣り名人》を伝授してやろうか？」

「いらねえよ、そんなもの。……ってか、あるのか、そんな無駄なスキル？」

ザックスの言葉にかつかつと笑いながら、餌を付け替えた釣り糸を再び垂らした。濃い潮の香を含んだ海からの風は僅かに強いものの、夏の太陽に照りつけられ火照った空気を覚ますには、十分に涼しかった。

「昔はのう……、後先を考えぬ馬鹿な奴らがそこかしこに溢れておつたもんじゃ。そんな奴らがこぞつては、あちこちのダンジョンに挑んでいく。帰ってこぬ者も多かったが、それ以上に未知なる場所に挑戦しようとする馬鹿共がやってきてのう。」

上級者達が初心者達を積極的に引つ張ってはしつかりと鍛え上げ、伝説となるパーティが生まれて行く……。そんな本物の冒険者達が大いに集って街に活気を作り出しておつた」

並んだ二つの浮きが、波間にゆらゆらと揺れる。

「いつ頃からかのう？ 他人の歩いた道を歩み返しては満足する、そんな狭量な輩ばかりが蔓延る様になつてしまつた。」

まだ探索されてはおらん未踏破ダンジョンなどいくらでも存在するのに、やれ詳細な地図だの攻略法だのに頼り、拳句の果てには縄張り争いに嫉妬丸出しの足の引つ張り合いじゃ。リスクを取る事を嫌つて、堅実な金儲けばかりに目がくらんだ、そんなケツの穴の小さな奴らばかりで、この街は溢れ返る様になつてしまつた。つまり奴らが作つたつまらんルールの牛耳る世界からあぶれた者は追いつてられ、こんなところで釣りをしながら来るあてもないチャンスに期待して、無駄な時間を過ごし続ける……。情けないのう」

日没間近の真つ赤な夕日が、最後の輝きを空に映している。

「冒険者なぞ、なつたその時から己の命は捨てたようなもの。己の命をチップ代わりにどれだけ広い世界を手にする事が出来るのか

それが冒険者の醍醐味じゃろうに。どんなに無謀な挑戦であつたとしても、そこから生きて帰ってくるのは狭量で賢しらな奴らではなく、馬鹿でも気風のよい奴らの方が圧倒的に多かつた。

時代、といつてしまえばそれまでなんじゃろうが……。それでも、わしにはそう思えんのでう。いつの時代でも変わらぬ真実というものがあつた。わしはそう思うんじやよ……。」

さつと引き揚げた針の先には指先大の稚魚がかかっている。しよぼいのう、と呟きながら老人はかかつた稚魚を海へと放り込んだ。

「気にするな。時代に取り残されたただの爺の戯言じゃよ。若いお前さんには退屈なだけのカビの生えたロマンというやつじゃな……。」
そういつと再び糸を垂れる。

黙りこんでしまった老人の隣で一向に当たる様子のない浮きを眺めながら、ザツクスは繰り返し寄せる波の音にただ身を任せていた。

2
0
1
1
/
0
7
/
1
9

初稿

06 ザックス、鍛えられる！

闘技場 自由都市のほぼ中心部に位置するその場所では、二か月に一度、冒険者同士がその技量を比べあう大会が隔月で開かれる。冒険者達の中には賞金目当てにそれを専門で行っている者もあり、大会の日には闘技場周辺で様々な催しも行われちょっとしたイベントとなっている。

そんな盛り上がりとは無縁の平日の闘技場内では、冒険者達が集まって自身の技芸の向上に努める様子も見受けられ、さながら修練場といったところである。その一角において、創世神殿で無事に《戦士》職を授かった翌日のザックスの姿があった。

彼の居場所が闘技場の片隅であったにも拘わらず、なんとなく周囲の視線が気になるのは、決して自意識過剰な訳だからではなく、一緒にいるエルメラのせいであろう。

整った顔立ちにしっかりと自己主張する形の整った胸を始めとするメリハリのある身体のライン、身体全体から浮かび上がる妖艶な美貌と輝かんばかりの脚線美に、周囲の熱い視線を一身に受けながら、そんなことはどこ吹く風とまるで気にも留めず、ザックスの前に立っている。昨日の神殿巫女の少女とはまったく正反対のその妖艶な女性の魅力に内心動揺しながら、ザックスは彼女と向き合っていた。

「手ほどきを始める前に、ちよいとこいつに軽くマナを込めてみな」
ぽいつ、と放り出された球形の物体を慌てて受け止める。手のひらサイズのそれに言われたとおりにマナを込める事、数秒。球形の物体は赤い点滅を繰り返し始めた。その様子にエルメラが僅かに感心した様子を示し、傍らで二人の様子を見守っていたダントンがむ

う、とうなり声を上げる。

「貸しな！」

ザックスからそれを受け取ったエルメラは、目をつぶって、と小さく呟くと同時に、手にしたそれを喧騒の元になりつつある周囲のヤジ馬達に向かつて放り投げた。床に落ちた途端にその球形の物体は目のくらむような光を放ち、まともにその光を浴びたヤジ馬達は悲鳴を上げて、その場を逃げ出した。

やりすぎだぜ、姐さん、というダントンの言葉を無視したエルメラは、輝きを消したそれを拾い上げるとザックスの方に向き直って説明を始めた。

「こいつはある能天気な鍛冶屋が作り出した《閃光弾》っていう名の失敗作でね、効果はご覧のとおりさ」

「失敗作？」

「起動させるにはマナを込めなきゃならないんだが、アタシですら一分近くの時間をかけなければならぬのに、それをあんたは僅か数秒でやつちまった」

「……………」

「この間のダンジョンでも思ったんだが、あんたにはある特定の魔法の才能があるんじゃないのかって、アタシには思えるんだよ」

「魔法？ でもオレの魔法攻撃力は相変わらず0だぜ」

「特定の魔法だっていったろ。たしかに炎術や氷水術といった攻撃系には才能は皆無のようだけど、それ以外の可能性は0とはいえないんだよ。あんたのステータス値にある理力MAXってのはマナの扱いにも大きく影響を与えるんだからね」

「マナの扱い？」

「けど、問題もある。あんた、時々体調が悪くなったり、目眩に襲われたりすることはないかい？」

「目眩ならたまにあるぜ」

「それはあんたの理力のパラメータがMAXを示すようになってからじゃ？」

「言われてみれば……」

「そいつはね。マナ酔いつて奴だよ」

「マナ酔い？」

「マナを扱うには体内のマナと外界のマナを同調させる事が基本だつて訓練校でならつたる？ 理力値が大きくなればなるほど同調できる外界のマナの量も増えていくのさ。だが、それを受け止める今のあなたの身体能力は極めて平凡だ。だからそれを受け止めきれなくなった反動で目眩が起きるのさ」

「じゃあ、俺の身体が強くなれば目眩は起きなくなるのか？」

「まあ、そういう事だね。どっちにしてもマナLVが上がって体力の値が増えない事にはなんともならないさ。ところで《洗礼の滝》はどうだった？ あれは濃いマナのこもった神聖水をもろに浴びるからあなたには辛かったんじゃないのかい？」

ザックスは洗礼での出来事を手短かに語った。初めは何気なく聞いていたエルメラとダントンだったが、すぐに表情を険しくした。

「あなた、その話、あたし達以外の誰かにしたかい？」

妙な迫力に包まれたエルメラに気圧されながらもザックスは首を横にふる。

「絶対にするんじゃないよ。場合によっちゃ、あなた、命を狙われることになりかねないよ……」

「へっ……」

エルメラの言葉に啞然とする。最近の若い娘は大胆だな、などとぶつぶつ呟くダントンを放置してエルメラは話を続けた。

「話を戻すよ。攻撃補助魔法は知ってるね？」

「訓練校で習ったくらいは……」

「マナのコントロールによって自身の身体を強化したり、能力を高める。それが攻撃補助魔法さ。大きく分けて、身体強化、敏捷強化、攻撃力強化、といったところだね」

手の中の《閃光弾》を腰の《袋》の中に仕舞うとエルメラは足元の小石を拾い上げる。

「マナで身体の一部を強化する事で、非力な女のあたしでもこのくらいはできる。身体強化は全ての強化系魔法の基本だね」

拾い上げた小石を握りつぶして粉々にする。ぱらぱらとこぼれる小石の破片に唾然としたザックスの眼前からエルメラの姿が消え、突如として彼の背後に現れた。

「今のが敏捷強化系のスキルLV3の《瞬歩》という奴さ。基本的には肉體強化とマナのコントロールだね。優秀な詠唱士系職業の補助を受ければLV2程度までは可能だが、それ以上は無理、自分で会得するしかない。身体強化、敏捷強化、攻撃力強化このうち一つでも使いこなす事が出来れば戦闘は俄然有利に進める事が出来るし、上級冒険者になるための必須条件だといえるわ」

ちよつと力を抜いてみな、といってエルメラがザックスの背に手を置く。大人の女性の香りが鼻腔をくすぐり、添えられた手のひらの柔らかかなぬくもりにザックスはどきりとする。瞬間、世界が揺れた。

驚きの声を上げそうになりながらもザックスはその異常な世界を体感する。周囲の全てがゆっくりと動く中、自身だけがいつもと変わらぬ時間の中を過ごす。数歩踏み出して振り返った彼は距離感の隔たりに躊躇いを覚えた。

「今のが敏捷強化系LV1の《加速》だよ。この感覚にまずは慣れる事だね」

直ぐに効力が途切れたのか、近づいて来たエルメラは普段通りの動きだった。自身の手足を不思議そうに眺めるザックスを尻目に、ダントンの方に向き直ったエルメラは静かに言い放った。

「アタシの手ほどきはここまでだよ。あとは言い出しっぺのダントン、あんたがやりな！」

「おいおい、姐さん、そりゃ無責任つてもんだろ。最後まで面倒をみてやるのが『いい女』ってやつじゃないのかよ」

「バカ言っつてんじゃない。アタシは面倒見のいいあんたと違って暇じゃないんだ。だいたい魔法つてのは理屈ときっかけさえ与えれば、

後は自分で自得するしかないんだよ。戦士職のこいつにあたしが教えることなんてもう何にもないのさ」

「何言ってるんだ、姐さん。戦闘以外にも教える事なんていくらでもあるだろ。冒険者生活の裏側のあれこれを年上の女が優しく手ほどき……わっ、危ねっ、何すんだよ！」

突如として空中に表れた火球がダントンを襲う。鮮やかにそれをかわしたダントンの姿にちっと舌打ちをすると、役目は終えたと言わんばかりに颯爽とその場を立ち去ってゆくエルメラの後ろ姿を、ザックスは啞然として見送っていた。

夕食時、腹をすかせた冒険者達が一斉に押し寄せ、一日の内で酒場が最も賑わう時である。

僅かに疲れた表情を浮かべて足を引きずるようにして階段を上ったダントンは、なじみの卓に着くと注文を聞きに来た猫族の看板娘の尻をすりと撫で上げ、その尾でピシヤリとはたかれた。

「坊やはどうしたんだい？」

先に卓についていたウルガとエルメラの二人とジョッキを合わせたダントンは、ほっと一息ついた様子でぼつりと呟いた。

「あいつなら疲れて宿の自室だ。あの調子だとおそらく朝までぐっすりだな」

眼前の料理に手を伸ばすダントんに、皮肉気な笑みを浮かべたエルメラは続ける。

「現実って奴がよく分かっただろっ？」

だが、その問いにダントンはレンゲン鳥の丸焼きにかぶりつこうとした手を止め、僅かに沈黙すると彼女に言った。

「ああ、そうだな。『事実は物語より奇なり』って言葉を、よく

思い知らされたよ」

その言葉から彼の意図が読めないウルガとエルメラは顔を見合わせる。二人の様子にかまわずダントンはかぶりついた肉を運ばれてきた麦酒で流し込んで、一息ついた。

話は時を遡る。

その日の朝食をとっていたウルガ達3人の前に現れたザックスは、自身の思いついたとある計画を提案した。

それは次の満月の晩での戦いにおいて、彼らを手助けする為の奇妙奇天烈な一手であった。だが、決して実現不可能でないその提案に3人は複雑な想いを抱える事となった。

しばらくの議論の後、その計画を実現する上でどうしても外せない問題　ザックスの実力の底上げを行うべく、エルメラとダントンは彼を伴って闘技場へと向かった訳である。

「姐さんが行つちまった後であいつと手合わせをしてみたんだが、姐さん達の言うとおり、初めの内は確かに使えるという言葉とは程遠かった」

僅かに言葉に含みを持たせたまま、ダントンは話を続ける。

「フィルメアの生まれというだけあって、一通りの武器の扱いには心得があるらしい。だが、地力と経験の差は如何ともしがたいものだった」

フィルメア首長国連邦　サザール大陸の東端に位置するいくつかの部族からなる国とも呼べぬ小さな国である。

短い夏と長い冬を過ごすその国は豊かさとは無縁であり、若者たちの多くは傭兵や冒険者となって大陸の方々へと散って行く。子供の頃から武器の扱いを自然と覚えさせられる環境がザックスの冒険者としての戦闘技術の根幹を支えていた。

「しばらくは武器の扱いと力の見定めを行っていたんだが……。そのうちぶつぶつと何やら呟き出してな。休憩の後で再び手合わせを

始めたら……」

僅かに言葉を切って、麦酒に口をつける。いつしか話に聞き入っているウルガ達二人にニヤリと笑みを浮かべると、さらに続けた。

「あの野郎、《部分強化》を使いやがった」

「なんだって……」

「驚くのはまだ早いぜ、姐さん。マスターしたのはそれだけじゃないんだ」

「……………」

「さらに手合わせを続ける中での野郎、いろいろと試し出して……。面白かったんでこつちもつき合ったら、なんと《加速》を使って俺から一本取りやがった」

「バカなこというな！ あいつに魔法を教えたのは今日が初めてだよ。僅か半日でLV1とはいえ身体強化系と敏捷系の魔法を二つも習得しちゃったていうのかい」

「事実なんだから仕方ねえだろ。なんだったら明日、クナ石を見せてもらえよ。特殊スキル欄に《加速》と《部分強化》ってのが表示されてるから」

「……………」

「俺だって目を疑っちゃったよ。本人に聞いても魔法なんか使ったのは今日が初めてだ、ってんだから。奴が戦士職である事を考えれば、こいつは間違いなくあいつ自身の固有スキルだよ」

運ばれてきた料理を平らげながら、ダントンは僅かに嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「こいつはもしかしたら、もしかするかもしれない。あいつが使えるようになれば、俺達の計画にも希望が湧くってもんだ」

「どうだろうな……………」

それまで黙って聞いていたウルガが、初めて口を開いた。

「どんなにスキルを覚えたところで奴のマナLVはまだ10だ。みすみす死なせることになるのが落ちだろう」

「分かってるさ、旦那。あいつがせめて自分の身を自分で守れるだ

けの実力を付けさせるよう、ハードルは高めに設定するつもりだ。

旦那と姐さんの二人が納得するぐらいのな」

「そんなに簡単にいくのかねえ？」

「やってみなけりゃ、分かんねえだろう！ やらないうちから駄目だなんて決めつけるのは俺達の流儀じゃなかったはずだ！」

珍しく語気を荒げてダントンは持つていたジョッキを机に叩きつける。陽気なダントンには珍しい激しい口調に一瞬店内が静まった。一瞬の静寂の後、再び喧騒が戻っていく店内の空気を感しながら、エルメラが静かに口を開いた。

「そうやって、あたし達はもう何度も取り返しのつかない失敗をしてきたんじゃないのかい」

「分かってるさ、姐さん。でもな……」

いつもの調子を取り戻したダントンが答えた。

「今回は俺達がこの5年間に得られた中で最大のチャンスなんだぜ。もう次はないかもしれない、って分かってるだろ」

「……………」

「二人とも、いつまで奴に縛り付けられてるつもりだい」

「奴に縛られてるのは、あんただって同じだろ」

「ああ、そうさ。俺は姐さん達とは違った意味で奴を追い続けてきた。『復讐』ってやつでな。でも俺達の奴へのこだわりが、俺達自身だけでなく周囲のやつらにも悪影響を及ぼしてるって事に、旦那も姐さんもうすうすう気付いてるはずだぜ。冒険者達の先頭に立ち続けている俺達がいつまでも立ち止まっていれば、後に続く奴らは皆行き先を見失っちまう」

「否定はしないよ」

「それに俺は正直もう耐えられそうにない。ここできっちり区切りをつけなきゃ、いつまでもずるずると引きずってしまっ、そんな気がするんだ」

「だから、あいつを犠牲にするのか」

「やみくもにそうする訳じゃねえ。あくまでもあいつがうまく立ち

まわれるようになる事が前提だ。最終的な判断は旦那と姐さんに一任するよ。あいつの力を借りたい、って二人が言わない限り、俺はあいつを連れていくつもりはねえよ。ただ、そう出来るよう、時間の許す限り俺はあいつを鍛えるつもりだ。それだけは譲るつもりはねえ」

3人の視線がぶつかり合う。やがて、諦めたようにエルメラがぼつりと呟いた。

「ダメだといつてもやる気なんだろう。だったら好きにしろ……。でもね、ダントン」

僅かに言葉を区切る。

「あんたが全てを背負い込む必要はないんだ。あたし達はこれまで3人でやってきた。得るものも失うものも3人同じだって事を、忘れないでおくれ」

「分かってるよ、姐さん」

僅かに薄暗い明りの下で3人はジョッキを合わせる。それは多くの想いを共有してきた3人にとっての決意の証だった。

2011/07/20 初稿

07 ザックス、苦戦する！

「汚ねえ店だな。大丈夫なのか？ この店？」

見た目通りの外観に正直すぎる感想を述べるザックスに、ダントンは苦笑する。

「店は外見じゃねえ、中身が問題なんだってのが、ここの店主の信条と口癖でな。妙な事を口走っているとブツ飛ばされるぞ」

店の対面を指さすダントンに、なるほどとザックスは頷いた。堀には何かが勢いよくぶつかった後とそれを補修した跡が幾重にも重なっている。

自由都市《ペネロペイヤ》の東地区にあるアイテム屋や鍛冶屋が乱立する区画の一角にあるその店で、ザックスは自身の装備を新調する為に、ダントンと連れだってやってきていた。

手持ちの所持金は十分すぎるほどにある。

だが、それでも安くない物を求めてしまうのは貧乏生活が長いせいであろう。ヴォーケンの鍛冶屋という看板を掲げた店内は外観の様子とは異なり、うってかわって整頓されている。掃除も隅々まで行き届いているようで、様々な武器が鈍い輝きと共にそこかしこにならべられている。

「よう、坊主、ヴォーケンの親父はいるかい」

ダントンとはすっかり顔見知りなのである。にこりと笑った見習いらしい少年は、二人を迎え入れるといそいそと裏手へと向かっていった。

しばらくして現れたのは巨大な鍛冶槌を片手に抱えたクマのような男だった。火の側で時間を過ごす事の多いせい、浅黒い肌に並みの人間の胴体程もある太い腕が印象的だった。

「なんだ、ヘタレ盗賊じゃねえか。まだ生きてたのか」

「相変わらずだな、クソ親父。近頃は安い大型店に押されて景気はすこぶる悪いっていうじゃねえか」

「へっ、あんなどころに品物入れるのは下手くそな鍛冶屋ばかりと相場は決まってるもんだ。粗悪品掴まされてダンジョン内でポツキリ逝った時には、己の馬鹿さ加減を呪ってればいいのさ」

容赦のない二人の挨拶に度肝を抜かれたザックスを尻目に、店番をしていた少年は気にする風もなく訪れた二人の客の為に飲み物を準備している。

「で……、今日は何の用だい」

「ああ、こいつに適当な剣でも見繕ってもらおうと思ってるな」

「うちに、適当なものなんて一つもねえぞ」

「言葉のあや、ってやつだよ。上客は大事にするもんだぜ」

「上客？ こいつがが？」

ヴォーケンと呼ばれた鍛冶屋の親父は、無遠慮な視線でザックスを頭のとっぺんから足の先まで値踏みする。

「なんだ、また新人の手ほどきか」

「こいつはそんなタマじゃねえよ。俺達の仲間になるかもしれないやつだ」

「何っ！」

ギラリとヴォーケンの目が光った。睨みつけるような視線をダントンはどこ吹く風といった様子で涼しげに受け流す。

「悪いがテメエとの付き合いはこれまでだ、ダントン。力のない奴を盾に利用するようなクズに売る武器はねえ」

「なに、耄碌してやがるクソ親父。鍛冶場にこもりすぎて脳味噌が濃んじまったんじゃないか。たまにはしっかりと日の光でも浴びたらどうなんだ。こいつはあんたの作った失敗作を、いとも簡単に起動させちまったんだぜ」

「何、かましてやがる。こいつはどう見たって戦士だろうが。なんでそんな奴があれを起動させられるんだよ」

「仕方ねえなあ、ザックス。お前さんのステータス値を戦闘パラメータだけ見せてやんな」

ダントンの言葉に従い、ザックスは自身のパラメータをヴォーケンに披露する。それを見たヴォーケンはうなり声を上げて黙りこんでしまった。しばらくして口を開いたヴォーケンは、しぶしぶといった様子で自身の負けを認めた。

「なるほど、よくわかったぜ。だがよ、ダントン。いくらこいつが規格外だからって、テメエらと肩を並べるには無理がありすぎるんじゃないかねえか？」

「だから今、こいつがモノになるよういろいろと手を打ってるんだよ。クソ親父、あんたの店はそのための栄えある一番目に選ばれたんだ。分かったらとつとつと、こいつに似合いの剣を持ってこい。俺達はこれから防具屋にアイテム屋廻りと忙しいんだからよ」

ダントンの悪口など意にも返さずに、ヴォーケンはザックスをじつと見つめている。そしてぽつりと尋ねた。

「テメエ、フィルムメリアか？」

出自を尋ねられたザックスは素直に頷いた。

日照時間の短いフィルムメリア首長国連邦の民は他の国の民に比べ肌の色素が薄く、目の色も青みがかかっている。国を出てからまださほど時のたつていないザックスは、平均的なフィルムメリア人の要素を十分に備えていた。

「ダントン、いつまでにこいつをモノにする気だ」

「次の満月の晩には必要だ」

「ちつ、時間なんて全然ねえじゃねえか」

ぶつぶつと呟きながらヴォーケンは店の裏手へと引っ込んだ。しばらくして戻ってきた彼がカウンターの上に置いたのは、両手持ちの《バトル・アックス戦闘斧》だった。

「おい、クソ親父、俺は剣って言ったんだぜ。耳が遠くなっちまったのか？」

「うるせえ、へっぽこ盗賊。ちよっと黙ってる」

ザックスに向き直ったヴォーケンがザックスに尋ねた。

「使い方は分かるか？」

「まあ、一通りは」

「さすがにフィルメリアだな。じゃあこいつを持っていけ。テメエは線が細すぎる。まずは臂力の強化を意識するんだな。ついでに防具に身軽なものを選べば、当面はなんとかなるはずだ」

ヴォーケンの言葉に従う事を了解したザックスはダントンにその旨を告げる。ザックスの意思を了解したダントンは再び交渉に入った。

「そっぴや、親父。前に《身替りの腕輪》とかいう失敗作を見せてくれたよな。あれ、まだあるかい？」

「何だと。あれは俺の創作の中でも自信作中の自信作だけ。気軽に失敗作だなんて、ふかしてんじゃねえ」

「じゃあ、その自信作つてのを買ってやる。いいからそいつをとつとと持ってこい」

ヴォーケンに命じられた見習いの少年がいそいそと持ってきたその腕輪が、《戦闘斧》と共にカウンターに並べられる。

「使えるのは5回までだ。それ以上は保証しねえ。対象は周回モンスターに対してのみ。実力差がない限りボスモンスターに無効なのは魔術士共の魔法効果と同じだ。高えぞ」

「いくらだ？」

「しめて5万に負けといてやる」

その言い値に思わずどきりとする。だがダントンは涼しげな顔で続けた。

「おい、クソ鍛冶屋。負けるって言葉の意味知ってんのか。いつからあなたのスキルには《強欲》つてのが入ったんだ。どう見ても3万、いや2万5000つてとこだろっつが」

「何言つてやがる、このへっぴばこ盗賊。テメエのスキル《鑑定》はどこへ行つた。4万5000だ！」

「おいこら、ケツの穴の小さい値引きなんかしてちゃ、カミさんに

逃げられるぞ。3万だ！」

「うるせえ、惚れた女を前にいつまでも指を加えて眺めてるヘタレ野郎に言われる筋合いはねえ。4万だ！」

「鉄ばっかり相手にしてるから『忍ぶ恋』なんてモノの醍醐味が分かんねえんだよ。3万3000だ！」

「鉄ってのはな、女よりもデリケートな生き物なんだ。タイミングを逃しちまえばすぐに拗ねられちまうんだよ。3万8000だ！こいつで納得できないなら、よその店に行きやがれ！」

「質の良い火晶石をギルドを通さずに格安で渡してやってるのが誰なのか、忘れたのか。3万5000だ！」

「ちっ、いいだろう。そいつで手をうつてやろう。3万6000だ！」

ヴォーケンの言葉ににやりと笑うと、交渉締結の握手を交わす。

互いに肩で息を切らしているところを見ると、どうやら本気の勝負であったようだ。

ザックスの隣で成行きを見ていた少年が、静かに耳打ちする。

「この二人はいつもこんな感じなんですよ。うちの親方もダントンさんも結構楽しそうですよ」

「成程、あれは楽しんでるっていうのか」

ザックスには握手を交わしたまま、二人がにらみ合っているように見える。よく見ればヴォーケンより小柄なダントンの額には脂汗が浮いているようで、未だに水面下では壮絶な握手合戦が続いているらしい。

「そろそろいいかよ」

しびれを切らして割って入ったザックスの言葉で、二人は固く握りあった握手をようやく解いた。互いにしびれかけた手をカウンターの下でぶらぶらと振り解す様子はあえて見えぬふりをして、ザックスは支払いを行う。

「さて、こいつの要件はここまでだ。今度は俺の要件を聞いてほしいんだが」

「今度はなんだ」

「なあに、自由都市《ペネロペイヤ》で一番の腕を誇る鍛冶職人の
お前さんには大したことじゃない」

「舐めるな。俺の腕は大陸一だ！」

「じゃあ、その大陸一の鍛冶職人にこいつを注文したいんだが……」
ニヤリと笑みを浮かべて、ダントンは懐から紙片を取り出しヴォ
ーケンの前に開いた。何気ない様子で紙片に目を通したヴォーケン
の顔色が変わった。

「ダントン、テメエ……」

「大した事じゃないだろ」

僅かにおどけた様子のダントンに対して、ヴォーケンはその硬い
表情を崩さない。

「こいつはホネだぜ。材料には《魔法銀》^{ミスリル}、いや駄目だな、最低で
も《精霊金》^{アマルガム}、それも純度の高い奴が必要だ。《神鋼鉄》^{オリハルコン}なら完璧
なんだろうが、あれは俺も一度しか見た事がねえ。精錬にとつても
なく手間暇がかかるしな。あてはあるか？」

「《精霊金》^{アマルガム}か。二つ三つ、あてはない事もないが、そっちのギル
ドを通した方が確実じゃないのか？ 問題は魔法調金のほうだろ」
「ギルドを通すと時間がかかっちゃうんだよ。中間マージンをぼっ
たくろうとする馬鹿がわんさか湧いてくるおかげでな。調金に関し
てはこっちの領分だ。材料さえあれば調金に長けた知り合いを総動
員していくらでも作り出してやる。だが、その分値は張るぞ？」

「あんたの言い値で買ってやる。納期は次の満月の晩までに間に合
わせてくれればいい。どうだ？」

「いいだろう、だがな、ダントン。お前、本気なのか」

「ああ、本気だ。今度こそケリをつけるつもりだ」

「そうか……」

「じゃあ、頼んだ。期待してるぜ」

そう言い残したダントンは、ザックスに合図して店を後にしよう
とする。

「死ぬんじゃないぞ、へつぽこ盗賊！ テメエにはまだ、貸しがたつぷりと残ってるんだからな！」

その言葉に小さく右手をあげてダントンは答える。

ありがとうございました、と彼らを送りだす少年の声がからんとした店内にただ静かに響き渡った。

眼前に立ちふさがるのは古さだけが際立つ巨大な扉。その前に立ちつくしたザックスはここ10日間の苦闘を振り返り、大きなため息をついていた。

「ようやくここまでたどり着いたか……」

クナ石の首飾りを首元から引つ張り出して、自身のステータスを確認する。

名前	ザックス				
マナLV	18				
体力	110	攻撃力	150	守備力	138
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	125
智力	83				
技能	102				
特殊スキル	収奪	加速	部分強化	直感	
称号	斧撃術				
職業	初級冒険者				
敏捷	132	戦士			
魅力	45				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX

状態 呪い（詳細不明）

備考 協会指定案件6 129号にて生還

所持金 5325シルバ

武器 戦闘斧

防具 金剛系の上衣 金剛系のズボン 羽の靴

その他 なし

ステータスを確認した後で首飾りを元に戻したザックスは、腰の《袋^{バック}》から携帯ボトルを取り出すと一息に飲み干した。体力回復用の滋養水が身体の隅々まで染みわたる時間、静かに目を閉じるとおよそ10日前の出来事を思い出していた。

ヴォーケンの鍛冶屋を後にした二人は、その足で防具屋とアイテム屋を回りダンジョン探索に必要な装備を調べた。

翌日のウルガ達との朝食の席で、ダントンはザックスに2つの試練を与えた。その一つがおよそ10層から20層で構成される初級レベルダンジョンの単独踏破だった。

《サザール大陸》及び《大円洋》周辺の地域において、冒険者協会に登録されたこの《初級レベルダンジョン》の数は全部で13。

すべて地下階層構造になっており、周回モンスターのレベルがDもしくはE、ボスモンスターのレベルはCもしくはDである。初心者の迷宮をクリアし、見習い冒険者になりたてのパーティが挑む為のものであり、13のダンジョンをすべて攻略すれば、マナLVはたいてい10を超える。

ただ、総取得経験値がパーティの頭数で割り振られる為、多くのパーティは初級レベルダンジョンを半数程度クリアしたら、大抵はより身入りの高い中級レベルダンジョンに挑むようになるのが通例だった。

ダントンはこのうちの5つのダンジョンの単独踏破をザックスに

命じたのだった。

自由都市から各ダンジョンへの道程は冒険者協会が管理する《転移の扉》によって行き来する。

中級レベル以上と登録されたダンジョンはその構造に関わらず、人気度や大陸にまたがる各自由都市間の縄張りの問題もあって、その管轄が厳密に決まっている。

実入りが高く人気度の高いダンジョンの中には予約制のものもあり、3か月先までキャンセル待ちなどといったところも珍しくない。そのような制約の少ない《初級レベルダンジョン》は踏破によって得られる実入りが少ない事もあって、どこの都市からでも自由に行き来ができた。

当初、ザックスのmanaLvが10程度であった為に、協会に所属するダンジョン管理官たちは彼の単独挑戦に難色を示していたのだが、ダントンの強引な交渉によってザックスの単独挑戦は許可される事となった。

「まあ、気をつけて行ってこいよ」

軽い言葉でザックスを送りだしたダントンとの別れ際に、饒別だと探索スキル《直感》のきっかけを与えられたものの、ザックスの本格的なダンジョン踏破は困難を極めていた。

初級レベルダンジョンは見習い冒険者達が初めて挑むものであるだけに、その上層部は比較的難易度が低い。パーティで挑む者が一匹の低級レベルモンスターを数人がかりで倒す事ができる為、中階層あたりまでは比較的楽に攻略が可能である。

人数不足を装備の質と特殊スキルで補ったザックスも、初めの内は楽に攻略を進める事が出来た。だが、中階層を越えたあたりから、様相が変わり始める。

モンスターの強度レベルこそさほど変わらないものの、問題は出現時の数にあった。

複数人によるパーティであるならば、攻撃、防御、回復と役割を分担して事態に当たるところを、彼は全て一人で補わねばならない。複数同時攻撃能力を持たない今のザックスには数頼みの弱小モンスターすら脅威となっていた。

大木槌を振り回す妖精族モンスターに囲まれてタコ殴りにされる事数回。

動きの素早い吸血飛行系モンスターに噛みつかれて貧血寸前になること数回。

昆虫系モンスターに囲まれて背筋を震わせる事数回。
スライム族に押し潰されそうになること数回。

拳句の果てには、数度のリタイアの末にようやくたどり着いた最深部階層直前に仕掛けられたトラップをうっかり踏んでダンジョン外に放り出される事もあった。

一晩不貞寝をした翌朝に、クナ石と《跳躍の指輪》を併用して、任意の再開ポイントから再挑戦する事が可能である事をようやく思い出したのは高い授業料だった。

鍛冶屋のヴォーケンの自信作《身替りの腕輪》も使用制限回数をとくに使い果して砕け散り、文字通り身体で覚える方式の挑戦の末に、彼は10日ばかりで5度目の最深部階層へとたどり着いた。
(まったく、ここまでよく生きていられたよな……)

ウルガ達の実力を改めて思い知る。

初級レベルのダンジョンですらここまで手こずってしまう自分が、前回の初めての踏破において、いかに分不相応な者たちと組んでいたのかという事実をまざまざと見せつけられる思いだった。

あの『若様』達御一行ですら、自分とは釣り合わぬのではないかと思わず落ち込みそうになる。

それでも、人間というものは死ぬ寸前まで追い詰められるととてもない力を発揮するものらしい。ぎりぎりまで研ぎ澄まされた感

覚は探索スキルLV1《直感》を習得、発動させ、その他の特殊スキルも幾度もの戦闘の中で磨きに磨き抜かれて、今や手足も同然のように扱える。

単独踏破である為に経験値は全てザックス一人に入るものの、挑戦の半ばあたりからは逃走の回数ばかりが目立ち始め、さほど大きな収穫はなかった。逃走が増える以上、換金アイテムの収集も不可能となり、只ですら実入りの少ない初級レベルダンジョンにおいては致命的だった。

8万近くあつた所持金も高価な装備と複数のタンジョン探索に必要なアイテムの購入の為に底が見え始め、実に心もとない。又、釣りをしながら食費を切り詰めねば為らぬ生活に逆戻りなのか、とどつぷりと落ち込みつつ、いやいや人間生きていてこそいくらであると思ひ直し、静かに体力の回復に努めていた。

「そろそろいくか」

滋養水の効果で自身の体力が十分に回復したのを感じ取ったザックスは、眼前の巨大な扉に体重を預け、ゆっくりと押し開ける。

仲間さえいればこんな苦勞などしなくてもいいのに、一体何時になつたら普通の冒険者生活を送る事ができるのだろうか、という疑問を脳裏から追い出しつつ、室内の気配を探る。

ここまでの攻略の途上、一対一となりやすいボスモンスター戦では高価な装備によって嵩上げされたザックスの能力と特殊スキルの恩恵もあつて比較的危なげなく事を進めていた。外見と種族から予想される特殊攻撃に気をつけさえすれば、さほどの問題はあるまい……それがザックスの油断だった。

悪運度MAX 彼の誇る理不尽なパラメータはここにきて、いかななく発揮される事となつたのである。

風を切る音が彼の直ぐ傍らを突き抜け、続いて硬質の物体が背後

の石造りの壁に大穴をあけてめり込んだ。強靱な大広間の壁石が音を立てて崩れて行く様子に、ザックスは背筋を凍らせた。直撃すれば死は確実に免れない。不気味な音が立て続けに室内に響いていた。想定外の事態に理力MAXのザックスは動揺こそしなかったものの、難敵を攻めあぐねて、苦戦の最中だった。

最深部階層大広間の魔法陣の上でザックスを待っていたのは、子供の遊ぶゴムまり程度の大きさの《カーボンスライム》だった。どことなく愛嬌のあるその姿にほんの一瞬気を抜いたものの、直ぐにその判断が誤りであった事に気づかされる。

並みのスライムなど足元にも及ばない能力値は実にランクBに該当した。

特殊スキルである《加速》を使ってもそのスピードに追い付く事は出来ず、真に恐るべきはその特殊能力にあった。

自身の身体の硬度を自在に操る事でその形態を自由に変化させた《カーボンスライム》は、身体の一部を床に食い込ませ、軟体化した身体を十分に引き延ばして弓矢の要領で自らその身体を弾き飛ばす。

ザックスの攻撃の遙か射程外から、文字通り生きた砲弾と化していた。しかも軟体化した際の《カーボンスライム》には戦闘斧の一撃は全く効力がなく、さらに数度の攻撃の最中に回避し損ねたザックスの戦闘斧はその柄を破損し、攻撃力を大きく下げている。

「こいつはもしかして大ピンチってやつなのか？」

僅か数週間内で何度も死にそうなる目にあってきた身としては、今一つ実感が湧かないものの、効果的な攻略法が全く思いつかない現在の状況は間違いなく危険であることに変わりない。

「どうするよ……」

自身のどうしようもない悪運度にもはやあきれ果てながら、ザックスは縦横無尽に飛び交う生きた砲弾を必死でかいくぐっていた。

だが、その抵抗にも終わりの時が見え始める。

気付けばザックスは部屋の片隅にまで追い込まれ、絶体絶命の窮

地に陥っていた。ザックスを追い詰めた事を確信したのか、跳ね跳びながら移動する《カーボンスライム》の跳躍間隔が徐々に小さくなっていく。これまで何度も見てきた攻撃態勢に入る寸前の準備段階である。

床に張り付いたが最後、身体を引き延ばし、最後の一撃を放ち、ザックスの身体に大穴をあける事になるのだろう。隙だらけである事が分かっているながら攻撃の術がない、そのいら立ちにザックスは歯ぎしりする。

「ええい、こうなったら一か八かだ」

部屋の隅に身体を押し付け、柄が破損した戦闘斧の背を両手で支えて、自身の正面に縦に構える。来る方向は分かっているのである。後はタイミングの問題だけだった。

体内のマナをフル活用して自身の身体全体に強力な膜が覆うようにイメージする。周囲の空間に漂うマナを同調させて取り込み、足りない分を補ってゆく。

押し寄せる目眩と吐き気を必死で耐えしのぎながら、眼前の《カーボンスライム》の気配を探る。《カーボンスライム》が動きを止めて跳躍態勢に入った。強力なマナ酔いに意識が途切れそうになる事に必死に耐えながらその発射の瞬間のみに集中する。

《カーボンスライム》の姿が僅かに揺れたように見えた瞬間、正面に構えた戦闘斧に強烈な荷重がかかった。

「負けてたまるか！」

大きな叫びと共に、全身のマナをさらに活性化させ、両手両足に集中する。

全身にのしかかり続ける強力な荷重。

揺れ続けるマナ酔いの視界。

最悪の気分だった。

だが、不意に全身に掛かる重さが喪失した。

目標を消失し、バランスを崩して勢い余ったザックスの身体が前方に転倒する。

慌てて起き上がった瞬間、強烈な頭痛に悩まされながらも周囲を見渡したザックスは、己の足元に碎け散った《カーボンスライム》の残骸とポロポロになった自身の戦闘斧が転がっている様子を目にした。

どうやらなんとか自分は生き残ったらしい　そう理解したザックスは揺れる視界の中でどうにか換金アイテムを回収し終えると、《跳躍の指輪》にマナを込め、息も絶え絶えにダンジョンを脱出した。こうしてザックスはどうか第一の試練をクリアしたのである。

2011/07/21 初稿

08 ザックス、涙する！

「おい、ザックス、お前に荷物が届いてるぞ」

怒涛のダンジョン単独攻略ツアーから4日がすぎ、体力を万全に回復したザックスは、いよいよダントンからの第2の試練を受けるべく酒場を出発しようとした矢先に、カウンターの中にいたガンツに呼び止められた。受け取った箱の中に入っていたのは高価な装備の数々だった。

心当たりのない贈り物に不審の念を抱いたものの、送り主の名を確認してようやく事態を理解した。

5度目の単独攻略成功後、僅かな戦利品をアイテム換金所に持ち込んだその場所で、ザックスは再び換金所内の職員を慌てさせた。

ザックスを敗北寸前まで追い詰めた《カーボンスライム》^{アマルガム}が残した見慣れぬ鉱石の塊は、鑑定所の《鑑定》の結果、《精霊金》^{アマルガム}であると判明したのである。武器防具の調金素材としてはAAランクに分類され、ザックスが持ち込んだ塊は純度が極めて高く、滅多に市場に流通しない事もあり、50000シルバの高値がつけられていた。

売却を熱心にすすめる換金所職員の話聞きながら、ふとダントンとヴォーケンの会話を思い出したザックスは、《精霊金》^{アマルガム}の塊をヴォーケンの店に持ち込んだ。

緊迫した空気の充満した店内に恐る恐る入ったザックスが、カウンターの上に何気なく置いた其の塊に、たまたまその場所に居合わせたダントンとヴォーケンの顔はみるみる明るくなり、感謝されることとなった。勿論、親方の機嫌が良くなりとはっちりを食う事の

なくなつた店の片隅で怯えていた見習いの少年にも、大いに感謝されたのは言うまでもない。

日頃からずいぶんと借りのあるダントンに《アマルガム精霊金》を贈呈する事にしたザックスの行為への返礼が、この贈り物と云う訳である。箱の中に入っていたのは3つの品だった。

一つ目は《アマルガム精霊金》製の《賢者の額環》。装備することでザックスを悩ませるマナ酔いの症状を緩和し、より効率的なマナの運用を可能とするものである。

二つ目は《ミスリル魔法銀》製の《魔法障壁の籠手》。マナを込める事で左腕に魔法障壁が展開し物理攻撃や魔法攻撃を緩和する優れたものである。

三つ目は《ミスリル魔法銀》製の剣《ミスリルセイバー》である。すらりとした美しい文様の描かれた刀身の切れ味は、並みの鋼鉄や特殊加工鋼など足元にも及ばず、魔法との相性が抜群によい。ウルガの大剣と同様の素材である事から、いずれは彼のように炎術を刀身にまとわせての魔法剣も可能となるかもしれない。

時価にして明らかにザックスの渡した鉱石の価格を越えた贈り物に戸惑うザックスに、グラスを磨きながら成行きを見守っていたガントンは静かに語った。

「お前は職人の誇りを守り、仲間の危機を解決したんだ。こいつはおそらく二人からの感謝の印なのさ」

「でも、これは明らかに俺のもらい過ぎのような気がするんだが……」

「所詮、人間関係なんてモノは貸し借りの中からしか生まれないのさ。時として借りっ放し、貸しっ放しなんてこともあるくらいだ。今はたまたま、お前が受けとった物が多いのかもしれないが、やがては巡り巡って、おまえが与える側に回る事だってあるものさ。それが人の縁って奴だ。素直にそいつを受け取って探索の足しにする事が、粹な冒険者の流儀って奴だよ」

「じゃあ、そうさせてもらおうよ」

ガンツの言葉に従って装備を調べて出発しようとしたザックスは、ふとある疑問を思い出して彼に訪ねた。

「ところで、今日俺と組む予定の奴らってこの酒場に所属してる奴らなんだろ？　なんで待ち合わせ場所がここじゃなくなってる《転移の扉》の前なんだ？」

何気ないその質問に、ガンツは磨いていたグラスを思わず取り落としそうになる。僅かに動揺の色を見せながら、彼はしどろもどろに返答した。

「ま、まあ、うちの店にもいろんな奴らがいるってことだ。ちょいとばかり、癖が強いが……、決して悪い奴らじゃないから安心して行ってこいや」

どことなくはぐらかされた感のあるものの、しつこく追及して臍を曲げられても困ると考えたザックスは、しぶしぶ了解して酒場を後にしたのだった。

自由都市《ペネロペイヤ》から各ダンジョンへのルートを結ぶ《転移の扉》は、仰々しい造りの《冒険者協会》建物前の広場　《旅立ちの広場》と呼ばれる場所にある。

ダンジョンへと向かう都市内の酒場に所属する冒険者達だけでなく、よその都市から《転移の扉》を通過して冒険者達が現れる為、朝のひと時の時間帯において《旅立ちの広場》は無数の人々が行き交う事となる。そんな彼らを巡って臨時の朝市が立ち並び、その喧騒はちよつとしたお祭りのようである。

ガンツはハミツシユの酒場を後にしたザックスは、待ち合わせの場所である《旅立ちの広場》の《聖者の像》の足元で、その日共にダンジョンに向かう予定のパーティのメンバー達がやってくるのを

待っていた。

ダントンからの第2の試練として彼らのパーティの臨時メンバーとなってダンジョンを踏破する事を、命じられたのである。向かう先が《涙禍の迷宮》などと物騒な名の中級レベルダンジョンである事もあって、一抹の不安を感じたザックスは、朝市の出店で何気なく購入したガイドマップを眺めながら、まだ見ぬメンバー達の到着を待っていた。

ガイドマップによれば《涙禍の迷宮》が初めて踏破されたのは、ウルガ達と踏破した《錬金の迷宮》よりも古い時代であるものの、その踏破率は異常に低かった。出現モンスターレベルをみても平均的な中級冒険者向けダンジョンとしかいえないにも拘わらず、踏破率の尋常でない低さと踏破後に得られる踏破経験値の低さは多くの疑問を残した。

もつとも所詮は出店で買ったガイドマップである。

《ハルキュリムの球根》の時のようなレアなアイテム情報が載っているわけでもなく、せいぜい観光者向けの読み物程度の情報しかない。ましてやザックスの悪運度MAXのパラメータによって、想定外の強力なモンスターに所構わず出くわす事もある為、参考になりそうにない。

兎にも角にも、先日までの単独踏破ツアーと違って、今回は仲間もいる事であるし、なんとかなるであろうと軽い気持ちで行き交う人々の姿を眺めていた。勿論、メンバー達に対するガンツの意味深な発言は、なるべく考慮しないようにして……。

「失礼ながら、ザックス殿とお見受けするが……」

待ち合わせの時間を少し過ぎ、場所を間違えてしまったかとする不安になり始めた頃になって、ようやくザックスに声をかける者が現れた。きよるきよると周囲を見回すがあたりにそれらしい人影はない。

「こちらでござる。ザックス殿」

再び声をかけられる……。

ただし、頭上から……。

その方向を見上げたザックスは啞然とする。待ち合わせ場所である《聖者の像》の上には4人の冒険者達が立っていた。

2階建ての建物程度の高さの像の上に立つ4人はザックスが気付いたのを確認すると「ヤー！」という掛け声と共に像の上から飛び降りた。ぴつたりと同じタイミングで着地した4人はすつくと立ち上がると名乗りを上げる。

「我こそは炎の闘士、イーブイ！」

「同じく雷撃の魔術士、デュアル！」

「紅一点、大地のごとき慈愛の僧侶、サンス」

「風任せにさすらう吟遊詩人、シーポン」

ビシリと決めポーズを決めた4人の声が唱和する。

「我ら、知る者ぞ知る伝説のパーティ、『ブルポンス』！！」

ここは人の激しく行き交う天下の往来である。突如始まった寸劇もどきのパフォーマンスに皆足を止め、徐々に黒山の人だかりとなつて行く。知らぬふりをする訳に行かぬザックスは、恥ずかしさをこらえて急ぎ挨拶を交わす。

「ザ、ザックスだ、ええと、よつ、よろしく。ブルポンスだっけ？」

「うむ、善きミッシヨンとなる事を祈るでござる」

「新たな仲間に、乾杯！」

「創世神のご加護を」

「ラーラーラー」

その日のダンジョン探索は、ザックスの冒険者人生の中でも一、二を争う恐ろしい事態になりそうな予感がした。

《涙禍の迷宮》。

このダンジョンにそう名付けた初の踏破者達にはそれなりの意図

があつたのだろうか、今のザックスは違った意味で泣いていた。彼らも又、初級冒険者の頃にダントンに世話になつたらしく、その縁で彼はザックスを紹介したらしい。

ガンツ^{II}ハミツシユの酒場に初めて現れた日に大宴会の主賓となつたザックスの顔を知らぬ者はおらず、ザックスが《聖者の像》足元に現れた事を確認して、4人はあの像に登つたらしい。そんな彼らのハツチャケぶりはダンジョンの中でもいかに発揮される事となつた。

平均レベル23前後の彼らは皆、相応の実力を持っており、個人個人の能力は高い。特に吟遊詩人という珍しい『職』はなかなか貴重で、沈黙に支配されがちな探索行に大いに明るさを与えていた。

パーティを区別する際にはリーダーの名をあげて『誰々のパーティ』と呼ぶのが冒険者達の通例である。人の出入りの激しい冒険者達のパーティに名をつける事はゲンの悪い行為であると考えられ、忌避されがちだった。そんなジnkスなどお構いなしに自分たちの名から一文字ずつをとって名付けられた《ブルポズ》の面々は個性豊かであり、そんな彼らとの集団戦闘はいろいろな意味で脅威だった。

「いよいよでござるな。我ら5人の実力とくと見せつけてやろう！
まずはリーダーであるイーブイ。」

サザール大陸の東にあるイステイリア諸島の勇猛果敢な戦士達の『マゲ』という風習を真似たという彼の髪型は非常に個性的で、長髪を左側頭部でひとまとめにくくっている。何かが違うような気もするのだが、誰もつつこまないところをみるとさほど問題ではないのだろう。

「防御は任せるでござるよ」

様々な武器を扱う為の多様なスキルを得る事のできる中級職である《闘士》の彼は、《盾攻防術》という珍しいスキルを持っている。使いこまれた小型の円形盾にマナを込めると、展開したシールドに魔法障壁が生じ、一行の前に頑丈な防御壁が生まれる。

このパーティに足りないのは先頭に立ち、戦端を切り開くアタッカーの存在である。

手に入れたばかりの《ミスリルセイバー》の切れ味を確かめるべくザックスは彼らの前に立ち、現れた獰猛な獣型モンスターに向かって剣を抜いた。すらりと抜き放った白銀の刃が中空に弧を描き、両者の間に戦闘時に特有の緊張感がみなぎってゆく。

だが、戦端は意外なところから開かれた。

「ぬおおー」

先頭に立つザックスのすぐ後ろに立って防御役となる事を宣言したはずのイーブイが、モンスターに向かって果敢に突進する。勢いよく吹き飛ばされ、シールドと壁面に挟みつけられ戦闘不能となった獣型モンスターに、すかさず《隠し杭》シールドスピアを打ち込んで、イーブイはあっさりと止めをさした。

「お・い！ 防御はどうした！ 防御は！」

すっかり置いてけぼりを食ってしまったザックスのつつこみに、イーブイはハッと我に返る。

「すっ、すまぬっ。つい、いつもの癖で……」

だが、この程度、彼らにとっては序の口である。

続いて現れたのは小型飛行系モンスターの集団だった。ダンジョン内を自在に飛び回る其の素早さと複数方向からの同時攻撃は、単独攻略ツアーにおいて苦戦の連続であった事を思い出す。

「わが必殺の雷撃術。今こそご覧あれ！」

キザなセリフと共に《魔術士》デュアルが進み出る。

閉鎖空間であるダンジョン内では数ある魔術体系の中でも雷撃術が最も効果的であるというのは冒険者達の常識である。だが、習得難易度が高い故にその使い手は少なく、彼は実に優れた魔法の才能を持っているようだ。

僅かな時間でマナを集中させると、彼は素早く術を発動させる。

「くられ、罪深きモンスター共。必殺！ 爆裂連撃波！」

《魔法杖》から生まれたマナの輝きが、空中に爆発を生み出す炎術系の特技となってモンスター達に炸裂する。爆発に巻き込まれたモンスター達はあとかたもなく消え去った。

だが、それだけに留まらない。ここは閉鎖された空間である。

次々に生まれる爆発の熱波と衝撃はさらに拡大し、通路を伝わってパーティの先頭に立っていたザックスまでをも巻き込んだ。もちろんイーブイの防御壁によって後ろの4人は全員無事である。

「バカヤロウ！ 味方を『必殺』してどうすんだ！ 大体、雷撃術じゃなかったのかよ！」

只一人巻き込まれ、うつすらと焦げたザックスの叫びがダンジョン内に木霊した。

些細な事故はあったものの、さらに一団は先へと進む。

中級レベルのダンジョンともなれば出現するモンスターたちも多彩な攻撃を仕掛けてくる。パーティの先頭に立つアタッカーが負傷する頻度は大きく、様々な特殊攻撃にさらされる事もある。そんな時に頼りになるのが、回復呪文を使いこなす術者の存在である。数に限りのある高価な薬草水の消費を大幅に抑え、より長時間の探索にかかせぬ回復役の存在は実に心強い。

植物系モンスターの毒攻撃に侵され、倒れたザックスの身体を《僧侶》サンズが治療する。

ぼんやりとした温かみがザックスの身体を覆い、効果範囲内のある要素を活性化させる。

当然、ザックスの体内の毒もさらに活性化して 猛毒状態となった。七転八倒の苦しみにのたうちまわるザックスの悲鳴がダンジョン内に轟いた。

「お前ら！ オレを殺す気か！」

度重なる不慮の事故にザックスはついに魂の雄叫びを上げた。す

まなさそうな顔で沈んでしまった3人と怒りに震えるザックスを慰めるかのように《吟遊詩人》シーポンが歩み出た。

「どうか、お怒りを鎮めてください。ザックスさん。彼らに悪意はございません。皆、新しい仲間がいいところを見せようと張り切っているのです。アタッカーとして優秀なザックスさんは私達にどうしても必要な存在。この探索で私達の実力をしっかりとアピールして、あわよくばあなたに正式メンバーに加わって頂こうとみな奮闘しているのです」

「そ、そうだったのか。それでは仕方ないよな……、まあ、次からは気をつけてくれ」

パーティにおけるメンバーの問題は重要な要素である。自身の生存確率を上げるためにも優秀かつ相性のよいメンバーの確保は必須要件である。

とある酒場では激しいメンバーの引き抜き合戦の結果、刃傷沙汰にまで至り、協会から資格はく奪処分を受けてしまったところもあるという。長い冒険者生活の中、まだまだ駆け出しのザックスには分からぬ苦勞もたくさんあったのだろう。自身の大人げない行為を反省するザックスにシーポンは明るい口調で続けた。

「さあさあ、こんなところで暗く立ち止まらず、私達の明るい未来に向かって歩みを進めようではありませんか。一つ、景気づけに、今思いついた新曲を披露することにいたしましょう」

その言葉に他の3人が顔色を変えた。

「いかん、耳を塞ぐでござる！」

「《風の結界》よ！」

「マジックアイテム《耳栓》！」

辺りに不協和音が鳴り響く。もはや音楽とすら呼べぬ殺人的な音波がようやく止んだその場所には、分裂気味のパーティの隙を物陰から窺っていたモンスター達と共に白目をむいて気絶するザックスの姿があった。

「よ、ようやくたどり着いたか……」

全身が微妙にボロボロになったザックスの後ろには、4人の仲間たちがやはり同様の様子で立っていた。

「う、うむ。まさかたった1日でこのダンジョンを踏破することになるうとは……。ザックス殿の存在はもはや我らにとってなくてはならぬものようでごさるよ」

イーブイの言葉に他の3人が頷いた。そんな4人の様子に乾いた笑いを浮かべながらザックスはそれまでの道中を振り返っていた。

初めこそ頻発していた不慮の事故も階層が深くなる毎に徐々になりを潜め、パーティの戦闘は回を重ねるごとに洗練されていった。

だが、ザックスの新装備《ミスリルセイバー》の威力に加えて、最初の頃に深層心理に刷り込まれてしまった不慮の事故への恐怖が先頭に立っていたザックスを突き動かし、パーティの進行速度と戦闘の早期終結に一役買っていた。戦闘ではさほどの活躍がなかった《吟遊詩人》シーポンの楽曲が連戦連勝でさらにハイテンションになったパーティの背を押し、もはやダンジョン内のいかなるモンスターも彼らの足を止める事は出来なかった。

第23層で遭遇したC級ボスモンスターに至っては恐怖のあまり逃げ回る始末で、途中遭遇した別パーティの冒険者たちでさえ、自身の縄張りや先有権を主張することなく黙って道を譲った。彼らの顔が若干、恐怖にひきつっていたのは気のせいであろう。

「では、行こうか」

最下層前の扉の前に5人の仲間たちが立つ。眼前に重々しく立ちふさがる其の扉を仲間たちが力を合わせて押し開く。単独攻略ツアーの際に何度も夢想したその瞬間をザックスは今、ようやく味わ

っていた。何か違うような気もしたが……些細なことである。

事前の情報では最下層ボスモンスターの攻略は比較的容易であるという。もはや、踏破成功は確定したも同然。

だが、ここで事態は意外な展開を見せた。

ザックスのパラメータ値《悪運度MAX》が牙をむき、パーティを思わぬ事態に陥れた……のかどうかは定かではない。

誰もが無言だった。陽気さが取り柄の『ブルポンス』だけに、言葉を発する事のない沈黙は違った意味で恐ろしい。

彼らの眼前の魔法陣上にはC級ボスモンスターの姿があった。植物系のその小柄な容姿は恐るべきことに……とても、可愛らしかった。

成人の膝下程度の身長のもそれは下半身こそ植物族特有の機能をもっていたものの、其の上半身はよちよち歩きの人間の赤ん坊そのものだった。あどけない瞳でじつと見つめられて「キャハハ」とご機嫌な声を上げて笑うその姿を見れば、誰もが戦意をなくす。

だが、そんなモンスターに涙を流させ、これを回収しなければこのダンジョンを踏破した事にはならず、当然、踏破経験値も得られない。

「これが《涙禍》の真の意味でござるか……」

イーブイがしみじみと呟いた。

初めての踏破者達は自身の踏破実績の為にこの愛らしいモンスターを殴りつけ涙を流させたのだろう。そして、冒険者仲間達から顰蹙とブーイングをくらって、今度は己が涙したに違いない。

その後の踏破者達も自身の行為の浅ましさを恥じ入って情報を開示しなかった事が、攻略難度が低いにも拘わらず、低すぎる踏破率につながっていたという訳である。人間の良心を試すダンジョン

それは想像だにせぬ脅威だった。

だが、ザックスは自身の未来の為にも何としてもこの試練を越えなければならぬ。おそらくダントンはザックスが冒険者として非情に徹しきる事を試しているに違いなかった。

すらりと《ミスリルセイバー》を抜き放ったザックスは、とてつもなく愛らしいボスモンスターに向かって構えた。

「ザ、ザックス殿……」

「い、言うな、俺はこの試練を乗り越えなければならないんだ」

血を吐くようなザックスの叫びに誰もが言葉を失った。そして、意を決した彼はその非情の刃をモンスターに向けて振るった。

虚空に白銀の非情な閃光が走る。

だが、モンスターには傷一つなかった。その場に崩れるように膝を突いたザックスに仲間たちが駆け寄る。

「ダメだ、すまん、オレにはどうしてもできねえ」

「仕方がないでござるよ。ザックス殿。我々は冒険者といっても人間なのでござる。冒険者の誇りと人間らしさを失ってはモンスターと変わらんでござろう。それに我々の事をお忘れか？ 我々は『ブルポンス』でござるよ」

イーブイの言葉に顔を上げたザックスの顔に疑問が浮かぶ。だがそんな彼に答えたのは他の3人だった。

「要はこの者に涙を流させればよいのでしよう」

「ふっ、ならば簡単な事だ。あの手を使えばよいのだな……」

「ランララー」

妙に自信ありげな3人の言葉にさらに疑惑の念を強くする。

「一体、何をするつもりだ」

「拙者達には簡単な事、『悲しみと苦しみの涙』ではなく、『喜びと笑いの涙』を流させればよいのでござる」

「ま、まさか……」

「では、御一同!」

「ふっ、今こそ、我が真実の姿の顕現の時!」

「お任せ下さいませ」

「ラーラーラー」

ここに、前代未聞のダンジョン最下層における大演芸大会が開催される事となったのである。

《涙禍の迷宮》 入口付近にあるダンジョン管理官詰所付近には黒山の人だかりができていた。その日、このダンジョンの真の完全踏破者が現れた事が報告され、周囲はそんな彼らの姿を一目見ようと、ヤジ馬達であふれかえっていた。

そんなヤジ馬達に囲まれていたのは5人の冒険者の姿だった。言わずと知れたブルポンスとその他一名である。

「今日はザックス殿の独壇場であったな」

「ふっ、あんな隠し玉を持っていたとは……」

「素晴らしい隠し芸でしたわ。私も感動にうち震えました」

「ラーラーラン」

最下層部での大演芸大会は白熱し、異様なテンションの中で盛り上がった。そして、他の4人に煽られたザックスの渾身の一芸がモンスターに宝珠《喜びの涙》を流させたのである。

過去の冒険者達が収集した宝珠《悲しみの涙》よりも2ランクも高いアイテムレベルは間違いなく彼らが初の真の完全ダンジョン踏破者である事を証明し、累積して上限に達していた踏破経験値が残らず彼らに割り振られた。同時にザックスのマナLVは20から2

4へと達し、その称号は《初級冒険者》から《中級冒険者》へと変化していた。

「では、冒険者の皆さま、記念撮影を行いますのでご準備の方、よろしく願います」

人の良さそうなダンジョン管理官が埃にまみれた写影具をセツトして彼らに呼び掛ける。

「では、御一同！ 参ろうか！」

「お、おい、ちょっと待て、まさかお前ら……」

不幸なことにザックスの予感は的中した。写影具の前に立った『ブルポンス』の面々は高らかに名のりを上げポーズを決める。

「我こそは炎の闘士、イーブイ！」

「同じく雷撃の魔術士、デュアル！」

「紅一点、大地のごとき慈愛の僧侶、サンス」

「風任せにさすらう吟遊詩人、シーポン」

周囲全ての視線がザックスに集中する。その期待に満ちた視線はザックスに退く事を許さなかった。ご丁寧に『ブルポンス』の面々は中央を開けザックスの立ち位置を確保している。

後はもう……、流されるがままだった。

彼らの中央に立ったザックスは写影具に背を向け、人差指で天を突き上げながら背中越しに振り返る。

「光速の超戦士、ザックス」

5人の声が唱和する。

「我ら、知る者ぞ知る伝説のパーティ、『ザ・ブルポンス』！！」

彼らの肖像は《涙禍の迷宮》初の完全踏破者として、その後、多くの冒険者達の尊敬と笑いを誘ったという。

2
0
1
1
/
0
7
/
2
2
初稿

09 ザックス、転職する！

すでに日は西に傾いていた。

創世神殿の建物の人気は少なく、建物内の時間は実にゆったりと流れている。転職者の多くが訪れるのは午前中から昼過ぎのひと時までである事もあり、今神殿内にいる者たちの多くは、純粹に創世神の信者たちなのだろう。

《涙禍の迷宮》で伝説的偉業を成し遂げてしまった為、帰還の遅れてしまった《ザ・ブルポンス》の面々が、ガンツ＝ハミツシユの酒場にたどりついたのは翌日の夕方近くだった。途中立ち寄った冒険者協会建物内にあるアイテム換金所において、三度職員達を混乱させた事も帰還の遅れの原因となっていた。

Sランククラスの宝珠《喜びの涙》は初めて協会に持ち込まれた事もあってなんと30万シルバの値がついていた。一人分の分け前6万シルバと《ブルポンス》臨時メンバーとしての協力料、さらに通常換金アイテムの処分によってザックスの懐には7万シルバ以上の大金が転がり込んでいた。

其の晩のガンツ＝ハミツシユの酒場は再び大宴会の様相を呈し、つい先日底を尽いた酒のストックをようやく回復したにもかかわらず、再び底を尽きかけてしまい、カウンターの中でマスターのガンツは苦笑いを浮かべていた。

翌日の昼近くになって自室から起き出してきたザックスは、例によって大浴場に行つて身を清めたその足で創世神殿へと向かった。

目的は《中級職》への転職だった。クリスチエンジ

「すまない、転職を希望したいんだが」

すっかり人気のなくなつた待合室でようやく通りすがつた巫女服

姿の女性を捕まえたザックスは、その声をかけた。

こんな時間帯にこのこやってきやがって……、そんな色を僅かに見せながらも極めて事務的な口調で彼女はザックスのステータスを確認した。ザックスのステータス内容に一瞬怪訝な顔を浮かべた彼女だったが、直ぐにハツと顔を上げてザックスの顔をまじまじと見つめる。とたんに愛想よい笑顔を浮かべた彼女は、彼にこやかに語りかけた。

「分かりました。お待ちせして申し訳ありません。直ぐにお連れいたします」

どことなくうきつきとした足取りで先に行く彼女に若干の不審の念を覚えながらも、ザックスは黙ってついて行く。連れて行かれたのは先日と同じ壁画の部屋だった。

相変わらず圧倒的な迫力で来た者を出迎えるその壁画の下の机に座っていたのは、先日の兔族の少女ではなく別の女性だった。おそらくはザックスと同年代くらいだろう。心のどこかで少女に再び出会える事を期待していたせいも、僅かな失望が彼の心に広がった。

ザックスを案内した巫女服姿の女性は意味ありげにザックスに視線を送りながら、室内にいた別の巫女と話を始めた。

机についていた巫女の女性も彼女が何事か囁くと、直ぐにハツと顔を上げてザックスを見つめる。二人の女性から値踏みされるような視線を受けたザックスは気まずそうに視線を外した。やがて彼を案内してきた女性がいそいそと部屋を出ていく。

去り際にそれまでの格式ばった巫女の仮面を外して「ちょっと待っててね」と余りにもフランクな一言と共に扉の向こうに消えていくその様子を、ザックスは啞然として見送った。

「どうぞ、そちらに掛けてくださいな」

二人きりになった部屋の中でザックスは机についていた女性に椅子を勧められた。

「ええと、《中級職》に転職したいんだが……」

勧められるままに腰掛けたザックスは、意味ありげにじつと自分

を見つめる巫女の視線に耐えきれず要件をのべた。

モンスターの中にはその視線の強さで冒険者の精神にダメージを与えたり、石化させたりするものもいるという。もしかしたらそういった類のスキルを持っているのだろうか、などと考えていたザックスに、彼女はにこりと笑って言った。

「ごめんなさい。貴方の転職のお手伝いは私にはできないわ」

こちらの女性も先ほどから実に親しげにザックスに話しかけている事に、ようやく気付く。

「来る時間帯が遅すぎたか？　なんだったら、また明日出直すけど……」

ザックスの答えに一瞬きよとした表情を浮かべた彼女は、直ぐに破顔した。

「違うわ、違うわ。そうではありませんの。あなたの転職のお手伝いをする娘は、もう決まっていますのよ」

「ああ、『職』^{クラス}によって役割が分かれてるんだな」
その答えに彼女は再び破顔する。

自分が返答するたびに笑われてしまうのは普通ならば気を悪くしてもよいところだが、眼前の女性の笑顔にはそういった感情を消し去ってしまう効果があるようだ。元来、人に好かれる資質をもっているのだらう。くるくると猫の目のように代わるその表情は見ている者を飽きさせず、酒場などでも人気のあるタイプの女性である。巫女にしておくのは惜しいものだ、などと思うのはさすがに不謹慎であろうか。

「ふふつ。では、そういう事にしておきましょう。直にイリアが参りますので、それまで私と雑談にでもお付き合いくださいな」

「イリア……さん……か？」
知らぬ名を上げられて困惑する。

冒険者達の中には有名どころの巫女の名や酒場の看板娘の名、果ては協会女性職員の名まで制覇している者もいるというが、そういった話にとんと疎いザックスには、なじみのない名をあげられても

当惑するだけである。

眼前の彼女は、両ひじをつくと顎を乗せて身を乗り出すようにして彼の表情を眺めている。

「ええ、先日貴方がいらした際にお世話をさせて頂いた兎族の娘ですわ」

「ああ、彼女か……」

僅かに表情を緩めたザックスは、彼女の名を知った事で小さく喜んだ。

どうやら今日も彼女が転職の一切を取り仕切ってくれるらしい。転職に当たっていくつかの不安な要素を抱えていた事もあって、少しでも顔なじみの人間に任せられるのは喜ぶべき事だろう。

そんなザックスの内心を見透かしたかのような彼女は、優しげな微笑みを浮かべると話し始めた。

「あの娘はね、訳あってこの神殿の高神官の一人が赤ん坊の頃に引き取った娘ですの。幼い時から私達神殿に努める巫女達にとって、掛け替えのない妹分なのです」

「お、おい、いいのか、そんな話、オレなんかにし……」

ザックスの口唇を人差指で遮って彼女は話を続けた。どうやら、黙って聞いているという事らしい。

「外見があの様ですからね。不埒な事を企む馬鹿な冒険者達も時折現れるし、何よりも兎族ということで、偏見をもって扱う人間なんてのもいますわ」

「ひでえな……」

「それでもあの娘は頑張って巫女の務めを果たそうとしている。あの娘が巫女になる、と言い出した時は彼女のお義父様をはじめとして周囲のみんなが大反対したのだけど、頑として譲ろうとしませんでした。もつと違う……優しい生き方もできましたのね。あの娘はそういう強い娘なのです」

「……………」

「さて、あの娘はまだまだ来そうにないから、今度はあなたの話を

聞こうかしら……」

「えっと、俺の事が……？」

「ええ、私の事を聞きたいのかもしれないでしょうけど、私は生憎とお金持ちのおじさまにしか興味がありませんの」

「いいのか？ 神殿巫女がそれで……」

「そんなこんなである時ふらりと現れた行きずりの冒険者と恋をして、駆け落ちしてしまう、そんな人生にも憧れていますわ」

いたずらっぽく片目をつぶった彼女はそんな言葉であっさりと言葉の追及をかわす。さほど年が変わらないにも関わらず、自身よりもはるかに長く生きているかのような巫女を前にして、ザックスの試練の時は続くのだった。

ポフン、という音と共に妻がら入りの枕が壁にぶつかり床に転がった。

日がな一日、自室の中で貴重な非番の休日をただ悶々と過ごしてしまつた事に後悔する。それもこれも占いが悪いのだ、などと思つてはみたものの後の祭りである。

私は一体何をしているのだろう、とここ暫くの体たらくに兔族の巫女少女 イリアはどつぷりと自己嫌悪に陥っていた。

事の起こりはやはり2週間近く前に現れたザックスと名乗る冒険者のせいであろう。

初めは一風変わった冒険者程度の印象だった。常に好奇の視線を引く自身の姿よりも頭上の世界創造の壁画に目を奪われてしまった辺り、少しばかりムツとしたのは事実である。だが、そんな彼は自身の身の上で起こつた厄介な運命に吞まれるどころか、そんな中から新たな生き方と楽しみを見つけようと試みる、強い心の持ち主だ

った。

気付けば彼女は彼の為に役立とうと《初級職》の冒険者に与えるべきものよりも、はるかに多くの加護と祈りを与えていた。

そんな彼女の暴走を姉巫女達は一晩中からかい続けたものの、彼女にとつて事はそれで終わりにならなかった。それからしばらくは仕事を手につかなくなり、うっかりともいうべきミス連続に、神官長や巫女長にまでお小言を言われる始末である。

そんなイリアの姿を見かねた姉巫女のマリナが、伝手を頼って彼女の不調の原因であるザックスの所在を調べてくれた。彼との接触に最も難色を示していたマリナからの好意にイリアは大いに感謝したものの、問題はさらに増えた。

会って何と言えばいいのか……、嫌われるどころか、忘れられていたらどうしよう……。――

実に少女らしい悩みに再び取りつかれ悶々とする日々が続いた。貴重な非番の休日に意を決して会いに行ってみようかと思ってみたものの、今一つ思いきれない彼女は姉巫女の一人に占いを頼むことにした。

『待ち人、あらわる』

良く当たると評判のその結果に喜び、一日ただ待ち続けてしまったものの、動かぬ者にそうそう都合よく機会が訪れるものではない。人生の真理とその辛酸を舐めながら、暮れて行く日差しと共にたつぷりと自己反省に浸ろうとしたちょうどその時、彼女の部屋の扉が激しく叩かれた。

「イリア！」

飛び込むように入ってきたのは彼女の姉貴分の一人であるエルシ―だった。

「どうしたんです？ エルシー姉さま……」

息急ぎ切つて駆けこんできた彼女は、イリアの驚く様子もそつちのけで言葉をつないだ。

「あんた、何してるの、まだ、そんなカッコして。ほら、起きて、

起きて、巫女服はどこ？」

「ちよつと、エルシー姉さま。私、今日は非番なのですよ……」

「ああ、もう髪が跳ねてるじゃない、全くこの娘は。ほら、そこに座って」

巫女服をかぶせられ、鏡台の前に強引に腰掛けさせられた彼女は、訳も分からぬまま自身の髪を整える姉巫女に事情を尋ねた。

「ああ。もう、だから、来たのよ、彼が！」

「姉さま、彼って、一体？」

「だから彼よ、あんたの待ち人よ！」

その言葉に飛び上がる。だが同時に疑問が湧きあがる、いったいどんな理由で彼はここにやってきたのだろうか。淡い期待をしながらもそんな想いを言葉に隠す。

「えっ、でもなぜ彼が来るのですか？」

「なぜって、そんなの決まってるじゃない。冒険者がここに来る理由って言えば、転職以外にあり得ないでしょう？」

「転職？ 彼がここに来たのはまだ2週間前の事なのですよ」

イリアの言葉に彼女の長い銀髪をくしでといていたエルシーは、手を止めて鏡越しにイリアを見つめた。

「その2週間で今の彼のマナLVは24よ。少しばかり裏技使って経緯を覗かせてもらったけど、彼、相当無茶してるわね……」

「そんな……」

二週間前に担当した時に経験値寄進を行った彼のマナLVは10まで下がったはずである。そこからたった2週間で24まで上げる事など通常では考えられない。最短でも半年程度はかかるところを彼は僅かの期間で成し遂げてしまったのだとすれば、常識をはるかに超える無茶をしているということだろう。

「ほら、ちよつと待って」

慌てて立ち上がるうとするイリアを、エルシーはしっかりと抱きしめる。

「落ち付きなさい。巫女であるあんたが動揺してどうするの。無茶

とはいえ、彼は正当な手段で自身を高め、その代価をここに受け取りに来ているのよ。落ち着いて、深呼吸して、自分が何をすべきかもう一度考えなさい」

自身をしつかりと抱きしめる腕の強さとその強い言葉がイリアに落ち着きを取り戻す。いつもの冷静な彼女に戻ったことを確認したエルシーはいたずらっぽく笑うと、鏡の中の愛しい妹巫女に優しく語りかける。

「はい、できた！ あんたは十分に可愛いわよ。こんな時こそ、その外見をしつかり使わないでどうするの。お行きなさい。今、マリナ姉さまがお相手をなさってるから。ぐずぐずしていると、取られちゃうわよ」

その言葉にイリアはあわてて立ち上がり、脱兎のごとく部屋を飛び出した。そんな彼女の姿を呆れた顔で見送りながらエルシーはその背に声をかけた。

「頑張つてね、今夜もしつかり報告してもらおうからね！」

弄りがいのある妹分の醜態を肴に再び楽しい夜を過ごすべく、彼女は少しだけ意地の悪い微笑みを浮かべるのだった。

10 ザックス、再び出会う！

針のむしろに座らされ真綿でゆったりと包くるまれる そんな拷問のような時間を眼前の巫女と過ごしながら、ザックスは扉の向こうから兎耳の少女が現れるのを心のどこかで待ち望んでいた。やがてパタパタと足音がして扉の向こうでぴたりと立ち止まる様子が感じられると、眼前の巫女はにこりと笑って彼に別れを告げる。

『ごゆっくり』と云う言葉と共に軽やかに足を運んで去っていく彼女が扉の向こうに消えてしばらくしてから、顔を真っ赤にした少女がおおずおおずと部屋の中へと入り、ザックスの前に座った。

「あの、お久しぶりです」

「ご無沙汰……だな」

そう言ったきり互いに言葉がない。二人が再び言葉を交わすまでに、それからかなりの時間を要した。

「今日はどういったご用件でしょうか」

「《中級職》への転職を頼みたいんだが……」

「それではクナ石を拝見させていただきます」

極めて事務的な言葉を選びながらも、石を渡す際に僅かに触れた互いの体温にどきりとする。マナLV24 エルシーが言った通りのその事実を静かに心の中で受け止める。

冒険者のクナ石を覗く時、巫女達には裏技と呼ばれる表示されるパラメータ以上の情報を覗く方法が、代々口伝で伝えられている。様々なデリケートな問題を扱う為、この事実は決して巫女達から外部に洩らされる事は許されず、それを怠ったものには厳しい罰則が加えられる。

イリアのようなまだ経験の浅い巫女には伝えられていないこのや

り方で、エルシーが彼女にその内容を僅かに伝えたのは、ザックスの異常な成長の数値にイリアを動揺させまいと考えたからである。それが理解できたからこそ、自身は神殿巫女であり、眼前の冒険者に不安を与えることなく其の前途に等しく祝福を与えねばならない

その一心でイリアは己の役割に徹していた。

一つ深呼吸をした彼女はクナ石をザックスに返すと格式ばった巫女の仮面をつけて、《クラスチェンジ転職》についての説明をはじめめる。

「《中級職》は《初級職》に比べてその種類がはるかに増えます。一般に戦士の方は剣士、闘士、騎士に、詠唱士の方は魔術士、僧侶、魔法戦士に、技能士の方は盗賊、鍛冶士、その他様々な職クラスに移ります。ただ、これらはあくまでも一般論であり、必ずしも確実にそうなるとは限りません」

「どういう事だ？」

「転職の際、これまで成長してきた冒険者の方々の各パラメータの値や特殊スキルなどによって変則的な転職クラスチェンジがおりうるという事です。たとえば戦士から魔法戦士へ、あるいは詠唱士から騎士へといった具合です」

「当然、それは冒険者の望み通りにならないってことだよな」

「はい、あくまでも創世神の御意志のままにという事です」

「分かった」

端的に、事務的に、それでいて丁寧に。

高鳴る胸の鼓動を無理やり押さえつける。

今の自分はとても怖い顔をしているのではないだろうか？ そんな不安を必死でひた隠しにしながら、イリアは己の職務を全うする。

「経験値の寄進はいかがされますか」

「じゃあ、マナLV20まで……」

「分かりました。それではこちらに手を……」

そう言いかけてどきり、と心臓が音を立てた。その行為の先にあるものに自身の心は耐えられるのだろうか？

わずかに躊躇う彼女を救ったのはザックスの手だった。二人の傍らに置かれたケル石の結晶の上に彼が手をかざす。躊躇いながらもその手の甲にイリアは自身の手のひらを重ね合わせた。自身の手のひらよりもはるかに大きなそれに重ね合わせた時、不意に彼の方からよりしつかりと繋がりを求められたかのような錯覚を起こす。動揺する心を押さえつけ、呪文を唱えてマナを活性化する。彼の体内のマナを自身のそれと同調させて開放する。

「お身体は大丈夫ですか」

「ん、ああ、なんか頭がすっきりした感じだな」

先日と全く同じやりとりがなされて自身のクナ石を確認したザックスが小さく微笑んだ。どうして、こんな事で自分は嬉しくなるのだろうか？ そんな思いがイリアの胸をよぎる。

「それではこれから洗礼に参ります。準備はよろしいでしょうか」

「あ、ああ……、そう……だったな」

瞬間、それまで全てがスムーズに行われていた二人のやり取りに、小さな不協和音が生まれた。

「あの、どうか、なされましたか？」

どことなく煮え切らぬザックスの姿に、イリアの内心は大きく動揺する。

「どこか、間違えたのだろうか？ 彼を不快にさせてしまったのだろうか？ そんな焦りがイリアの心を大きく揺るがせた。

「あの、なにか落ち度があったなら、はっきり言っ下さい！」

思わず強い言葉で内なる想いを吐露してしまい、はっと我に返る。相手を決して不安にさせてはならない。そんな巫女の戒めを思わず破ってしまったのは彼女の焦りゆえだった。

「ごめんなさい」

小さく呟いた。

自分はなんて愚かなんだろう……。

己の間抜けさ加減にいら立ちを覚え、同時に涙が浮かび上がりそうになる。ここで、泣いてはならない。それは甘えであり巫女の務

めに対する冒瀆である。ただ、その一心で歯を食いしばって溢れそうな想いを腹の底へと呑み込んだ。そんな彼女を救ったのはザックスの言葉だった。

「そうじゃないんだ。君のせいじゃない」

顔を上げたその先にあつたのは、自身を心配そうに見つめるザックスの少し困ったような顔だった。

「その、情けない話なんだが……、洗礼を受けるのが、実はちょっとばかり不安でね」

彼ぐらいの年齢ならば自分よりも年下の少女に弱さをみせてしまうのは恥ずかしいのだろう。だが、それでも言わざるを得ないほど彼は不安なのだ、という事をイリアは理解した。

私は何をやっているのだろう、目の前で困っている彼の姿に気付かず、己の事ばかり考えている。そんな己に小さくダメ出しを送って、彼女は気持ちを切り替えるきっかけを見出した。そんな彼女にザックスは語り続けた。

「オレ、どうもマナ酔いしやすい体質みたいでね」

「マナ酔い……ですか？」

「ああ、今はこいつのおかげで大きな問題はないんだけどね」

自身の額の額環を指さして彼は恥ずかしそうに語った。先日はつけていなかったその額環にそんな意味があつた事を理解した彼女は、彼が言わんとする事を瞬時に把握した。

「神聖水による影響が心配なのですね」

「ああ」

「大丈夫です。私が側にいます」

下心ない無心の言葉に、ザックスは顔を僅かに赤く染めた。

「その事なんだけど、いいのか？」

「えっ？」

「詳しくは分からないんだけど、あれはとても特別な行為なんだろう。君に迷惑をかけてしまってるんじゃないかって……」

ザックスとて馬鹿ではない。

ここ数日酒場で知り合った冒険者達に何気なく『職』や洗礼について話を聞いていたうちに、自分が彼女に与えられた行為が他のそれとは逸脱している事に気付いていた。

『場合によっちゃ、あんた、命を狙われることになりかねないよ…』

そう自分に警告したエルメラの言葉の意味がなんとなく分かった事で、ザックスはイリアに無理をさせてしまったのではないかと思っただのである。

ああ、この人は気付いているんだ、とわずかに顔を赤らめたイリアは、恐る恐る尋ねた。

「あの、御迷惑だったでしょうか」

だが、その言葉にザックスはかぶりを振った。

「迷惑どころか、君にはとても感謝してる」

「感謝……ですか」

意外な言葉だった。

「あの時君が手をつないでいてくれたから……、君のぬくもりを感じ取れたから……、俺はマナの奔流の中で自分を見失わずにいられたんだ。もしできる事なら……」

そういつて僅かに顔を赤らめる。そのザックスの顔でイリアは彼の望みを知った。

「大丈夫。私が貴方の側にいます。貴方を必ず守ります。だから安心して、大船に乗ったつもりで洗礼を受けてください」

言葉にした後でその内容に赤面する。

ずいぶんと大胆な事を口走ったような気がするが、些細な事は後で振り返ればよいのである。姉さま達にはあとで徹底的にからかわれるんだろうなと思いつながら、今は眼前の彼の為にできる事を全力で行うだけだった。

「行きましよう、貴方がこれから見出すであろう何かの為に、私にお手伝いさせてください」

以前にも彼女がそういつた事を、彼も又覚えていたのであろう。

「前と同じだな」

そういつてクスリと微笑みながら、自身に向かって差し伸べられたイリアの手をザックスはしっかりと握った。

それは、二人の想いが僅かに繋がった瞬間だった。

青白い輝きの神聖水が上階層から柔らかな音と共に流れ落ちる。

同じように輝く泉の中で、ザックスとイリアは膝まで水につかって立っていた。水しぶきによって湿った薄手の洗礼着が、白磁のような滑らかな輝きのイリアの肌に張り付き、透ける様は神々しかった。先日の時のような不埒な妄想は思い浮かぶことなく、その美しい姿にザックスの心はただ圧倒された。

そんな彼女は今、ザックスの腕をしっかりと両手でつかんで立っている。ザックスの腕に押し付けられた彼女の淡い胸のふくらみとあたたかなぬくもりが、彼の心に安らぎを与えていた。

「少しだけ待っていて下さい」

そういつと彼女はザックスの腕から手を離し、滝の水を両手ですくい取って自身の口に含んだ。次いで、同様にザックスの口にそれを含ませると、再び彼の腕をとり、しっかりと己の胸にかき抱いた。流れ落ちる滝の前でただ寄り添うように立っていた二人だったが、彼の腕をとったイリアは体内のマナを活性化させて神聖水を通じてザックスのそれに同調させていた。彼女の暖かな存在感がマナを通してザックスの中に流れ込んでくるような錯覚を覚える。

「行きましよう」

小さな微笑みと共にイリアは先に歩み出す。マナを同調させたことによる安心感からか、ザックスは自然に足を踏み出し、滝の中へ身を投じた。

瞬間、再び彼の周囲は青い世界へと変貌した。

圧倒的な力の奔流だった。

攻撃的に。

暴力的に。

破壊的に。

その世界にあるのは只力のみ。溢れんばかりの力の奔流が重圧となつて彼にのしかかる。

対する彼はあまりにも儂げな存在だった。

全ての事象が揺らぎ続ける青い世界の真つただ中において彼の存在は消滅寸前だった。

ああ、自分は一人なのだ。いや直に存在すら無くなつて一人と数えることすらできなくなるだろう。

そう感じられるほどの圧倒的な意思が彼を襲った。

聞いた事のない強力な意思を持った言葉が力の塊となつてぶつけられ、彼の存在をはずたに切り裂いていく。

悪意も敵意もかんじられない。

ただ力が力を呑み込むだけのあまりにも単純な図式の世界で、彼は今、確実に消え去ろうとしていた。

なにかに縋るべく、つい先ほどまで自身の手であつたものを必死に伸ばそうとする。

ふと、その先に温かな懐かしいぬくもりを感じた。

僅かな記憶を頼りにそれを確かめる。それは徐々に形をなして彼を包んでゆく。

ああ、俺は一人ではない。

思い出したのは少女の香りとぬくもり、そしてその言葉……。それを手繰つて、小さく輝く出口へと導かれる。そこから伸ばさ

れた手を握って、青い《揺らぎの世界》を後にする。

『直にお前を喰らってやる。だから、しばらくそこで指を加えて待ってるんだな』

薄れて行く意識の片隅で、そんな言葉を聞いたような気がした……。

「……………様、ザックス様！」

ふと気づけば滝の泉の傍らで彼は寝かされていた。目覚めて直ぐに視界に入ったのは、泣きそうな顔のイリアだった。

「大丈夫ですか、ザックス様」

「ああ、オレ、どうなったんだ」

「覚えておいでではないのですか？」

「ごめん……………」

「あなたは真つ青になって滝から出られた後、私に支えられてここまでやってきて、横になられたのです」

「どのくらいだ？」

「ほんの数秒程度です」

「たったそれだけか？ ずいぶん長く違う場所にいたような気がするな」

「……………」

起き上がるうとして強い目眩に襲われる。思わずうなり声を上げて頭を抱え込む。

「ごめんなさい。ごめんなさい。あんなに偉そうな事を言ったのに……………。ちつともお役に立てなくて」

濡れた銀の髪と洗礼着を細身の姿態に張り付けた少女が、涙と共に詫びの言葉を口にする。ザックスは横になったまま傍らに座る少女のほつそりとした腰を抱いて静かに告げた。

「そんなことはないさ。君は十分にオレを助けてくれた。君が導い

てくれたんだろ。だからオレはここに帰ってこれたんだ。自信を持つていい」

「ごめんなさい。もっとうまくできると思ったのに……」

「しかたがないさ、あれはオレ達にはどうしようもないんだから。それよりも少しだけこうしていてもいいかな？」

「はい、気休め程度ですが、貴方の身体のマナの流れを鎮めてみま
す」

そういうと彼女の手からぬくもりが溢れ、身体の中の熱がゆっく
りと拡散してゆく。心地良いその感触に身をまかせながら、ザック
スは水にぬれたイリアの愛らしい顔立ちとそのほのかな胸のふくら
みをうつすらと見上げていた。

すでに日はどっぴりと暮れていた。

暗くなりすっかり人気のなくなつた中庭を歩いて、二人は神殿の
通用門に向かって並んで歩いていく。

決して触れず、それでいて離れない。そんな距離を保ちながら歩
み続ける。

互いに言葉はなかった。

ただ静かに歩を進め、気付けば二人の前に年季の入つた鉄製の小
さな通用門が外部へと口を開いていた。

「それじゃ、今日はどうもありがとう」

「はい、あの……」

「ん？」

少しだけ心が近づいたような気がした眼前の彼に、イリアは僅か
な願いを口にした。

「どうか、無茶はなさないでください」

互いの視線が絡み合う。

それは少女の小さなたった一つの願いだった。

もし少女が願うなら今の自分はどんな事でもかなえようとするのではないか？ 共に歩みながらそんな事を考えていたザックスだったが、彼女の言葉で夢が覚めた。

おそらく自分はその小さな願いすらかなえてあげる事はできないだろう 己の背負った物ゆえに。

本能的に感じ取った答えが彼女から僅かに視線をそらさせた。

「分かった、そうするよ……」

言葉と共に背を向け、そして宵闇の中に歩みを進めた。

消えて行くその背をイリアはただ見送るだけだった。そんな彼女の傍らに静かに一人の巫女が立った。

「マリナ姉さま」

言葉と同時にその豊かな胸に飛び込んだ。まるで破裂したように泣きだす小さな妹分をマリナは優しく抱きしめた。

「嘘をつかせてしまいました……」

「そう……」

「胸がとても苦しいです。姉さま」

まだ幼い彼女の手に残る彼への想いだけでなく、敬愛し尊敬する姉巫女にすら語れぬ秘密を持ってしまった彼女は、その重さにこれから苦しむことになるのだろう。激しく嗚咽する妹分を優しく抱きしめながら、マリナはもはや見える事はないだろう彼の背を闇の中に求めた。

（奇運は奇運を呼び寄せるとは……）

周囲から人払いしたうえで彼女は只一人、洗礼所の中で二人の起した奇跡を目の当たりにしていた。

二人が滝の中へと身をおいた瞬間、青白い水がさらに輝き、滝の中の二人の姿が一瞬大きく揺らいで消えた。神殿巫女としてこれまで何度も洗礼に立ち会ってきたが、そんな場面に出くわした事など一度もなかった。彼女自身に経験はないが、正しい作法で行う最上

級洗礼の場面に幾度か立ち会った際にも、それは人の手によってただ敵かに行われるだけの神の奇跡とは程遠い行為だった。

奇異な運命を抱えた二人の行く末を案じながら、マリナは己の腕の中で泣きじゃくる妹分をただ黙って抱きしめていた。

2011/07/24 初稿

11 ザックス、心配する！

迫ってくるのは小型獣型のモンスターの群れだった。一体一体は大した強さではないのだが、敏捷性を持った個体群が群れをなして襲ってくる、それなりに厄介である。

ただし、それは数日前までの話だった。

《加速》と《全身強化》をかけた身体で襲い掛かる群れのと真ん中に身を投じたザックスは手にした《ミスリルセイバー》で周囲のモンスター群を一息に切り裂いていく。先ほどマナレベルが21になると同時に習得した《乱れ斬り》の効果がいかんなく発揮され、モンスター達は次々に切り裂かれていく。

全滅させたのも束の間、さらにその背後から別の猛牛型モンスターが現れた。

「おいおい、ここは初級レベルダンジョンじゃなかったのかよ」

モンスターの突進をひらりとかわしたザックスは《袋》^{バック}から秘密欠陥兵器を取り出した。鍛冶屋ヴォーケンに性能評価を頼まれていた試作アイテムにマナを込める。だが、再び立ち直った猛牛型モンスターの突進をかわす事で、その行為が中断される。

「時間がかかり過ぎだな」

ようやく起動し始めたそれを、自らの突進の勢いで壁に激突して目を回しかけているモンスターに放り投げると、急ぎ左腕の《魔法障壁の籠手》を展開し、自身の眼前に障壁を展開した。放り投げた試作アイテム《爆裂弾》が作動し、モンスターは炎に包まれて倒れる。爆発の熱風と衝撃を展開した魔法障壁でやり過ぎすと、再び沈黙に包まれたダンジョン内で換金アイテムを回収した。

「使えねえな。起動のタイミングがつかみづらいし、威力があります

ぎる。ダンジョン内での使用は自殺行為に近いな」

床に転がっていた《爆裂弾》を回収しようと手を伸ばし、その余熱に驚いて慌てて手を引いた。

「回収できるようになるまで待つてろってのか、この手のアイテムは使い捨てが基本だろうに……」

しばらくの時間をおいて、ようやく回収できるようになった創作屋の自己満足満載の欠陥アイテムを袋バッグに戻したザックスは、大きく一つ伸びをする。

「依頼されたアイテム回収も終わったし、ついでにボスモンスターでも倒してこのダンジョンの踏破ボーナスでももらっておくか」

先日の神殿での転職において中級職である《剣士》となった今のザックスには、すでに初級レベルダンジョンの単独踏破など朝飯前だった。

彼と同レベルの冒険者ではまだとても不可能な事をあっさりやっってしまったている辺り実はすごい事なのだが、同じレベルの仲間たちとパーティをほとんど組んだ事のないザックスにはその価値が分からない。

まあ、みんなこのくらいはできるんだろうな、などと呟きながら、彼の姿は最下層の扉の向こうへと消えていった。

《転職》の翌々日の昼下がり、クエストをうけた初級レベルダンジョンを丸一日かけて攻略したザックスは、ようやく酒場に帰還した。途中で立ち寄ったアイテム換金所の職員達の妙な視線が気になったものの、僅かな額のアイテムを換金した後、彼はその場所を後にした。あとは依頼内容のBクラスアイテムをマスターのガンツに届けければそれで終了であると思った矢先、ザックスは店内にいたイー

ブイに呼び止められた。

「おお、ザックス殿。ようやく帰ってこられたでござるか。どちらに行かれておった？ 探したでござるよ」

「転職したんでな、腕試しを兼ねて、ちょっとばかり潜ってた」

そう返答したザックスに、マゲを横向きに結ったイーブイは僅かに驚いた。

「少しは休まれてはいかかかな、ザックス殿。無理は禁物でござるよ」

「まあ、分かつてはいるんだけどな」

「ところでザックス殿、温泉に興味はないでござるか」

「温泉？」

「うむ、拙者達《ザ・ブルポンス》は今懐事情もよいことでこれを機に、一月ばかり温泉巡りに繰り出そうということになり申した。

ザックス殿を探しておったのでござる」

「それは楽しそうだな、でもすまん、俺は行けそうにない」

「ダメでござるか？」

彼らと同じく懐事情に余裕がある今なら少しくらい休んでも問題はないのだが、ウルガ達との約束の期日が迫っている事もあって、少しでも彼らの力に追いつくべく、焦っていた。

「すまん、先約があつてな。もう期日が迫ってきてるんで、あまりのんびりできないのさ」

「先約とは、ウルガ殿達の事でござるな」

「ああ」

イーブイは僅かに沈んだ表情でザックスを見つめる。だが、やがてため息を一つつくと言った。

「分かり申した。この度は諦めるでござる。だが、ゆめゆめ忘れないで下され。ザックス殿は我ら《ザ・ブルポンス》のかけがえのない一員でござる。拙者達の復帰の際にはいの一に召集を掛けますので、必ず我らのパーティに参加して下さい。それまで決して……、決して死んではならぬでござるよ」

パーティーのリーダーであるだけに大方の事情は察しているようである。その言葉に彼の気遣いを感じ取る。

「ああ、分かったその時はよろしく頼む」

「では拙者達はあちらであらたな『決めポーズ』を考案してくるでござるよ」

「それだけは勘弁してくれ」

「ダメでござる。我々はもう運命共同体なのでござるよ」

からからと笑いながら去ってゆく彼の背を見送りながら、ザックスはどことなく暖かさを感じていた。

「ザックスさん、そろそろ休憩にしませんか」

中級レベルダンジョンの下層域近くの広場で雇い主の一人が声をかける。周囲に対モンスター用の結界壁を張った中で訪れたひと時の休息时间だった。

ガンツⅡハミツシユの酒場に所属する中級冒険者達の臨時メンバーの予定だった者が体調を崩した為、ザックスは急きよその代役として彼らと行動をともにしていた。

（退屈だな……）

それが昨日、今日と行動を共にした彼らとのミッションの感想だった。

平均マナLV25の4名からなるパーティーの実力は相応のもので、彼らの戦闘は実にそつなく無駄がない。合理性を重んじる彼らは事前に綿密な調査をしっかりと重ね、目的地への最短距離を確実に無駄なく進行していくタイプのパーティーであった。ほどほどの冒険をし、ほどほどに稼ぐ。ガンツⅡハミツシユの酒場に所属しているもののさほど印象に残らぬ彼らは、マスターのガンツに紹介される

まで思い出せなかった。

ウルガ達やブルポンスと行動を共にした時の、楽しさやワクワク感といった物が全く感じられぬミッションは余りに機械的だった。

尤も彼らはダンジョンの攻略ミッションやクエストを『カネを稼ぐための仕事』と割り切っている節があり、そういった意味では彼らは目的を同じくする仲間なのだろう。ときおり「私達のパーティーの正式メンバーになりませんか」という誘いを受けるものの、それは単なる社交辞令以上には感じ取れなかった。

『他人の歩いた道を歩み返しては満足する、そんな狭量な輩ばかりが蔓延る様になってしまった』

波止場で釣りをする爺さんの言葉がふと思い出される。

(仲間か……)

それはおそらく目的を同じくする運命共同体の事をさすのだろう。ウルガ達もブルポンスも皆そういった意味で彼らは『仲間』だった。

だが、いかに彼らと親しくしようともザックスは、彼らとはどこか違うところを見ている己を感じていた。

(俺の目的……か)

結局、行きつくところはそこなのだろう。

冒険者になったのは未来の見えない故郷を見捨て、生きる糧を得るためだった。

迷宮内での不幸な事件の後は自身にかけられたこの呪いをどうにかしなければならぬとも思っていた。だが、時折奇妙な出来事や困難に遭遇する事はあれども、ここ暫くはそんなことも忘れ、ただ自身の向上のみに意識を向けていたような気がする。

(オレに仲間なんて必要なのだろうか?)

不意にそんな疑念にとらわれる。ウルガ達との約束を果たしたその先に自分はどこへ向かっていけばいいのだろう。そんな想いが漠然とザックス自身にのしかかっていた。

「ザックスさん。ザックスさん。貴方はどう思いますか？」

不意に声を掛けられて振り返ると雇い主達は皆自分に注目している。少しばかりザックスより年上の彼らが話題の中心に上げていたのは、創世神殿の巫女達の事だった。

「ええと、何の事だっけ」

「やだなあ、これですよ、これ」

見れば彼らは一冊の薄手の書物を開いている。

『貴方が選ぶ注目の美女たち』と題されたその書物は一部の裏酒場が高額の代金で発行している冒険者御用達の書籍である。季刊発行されるその書物は大神殿の巫女や酒場の看板娘、あるいは街の有名な人や観光スポットを紹介するという内容である。その一面に映った一人の女性の姿にザックスは見覚えがあった。

「あれ？ この人……」

「おお、ザックスさん、お目が高い。やはりマリナさんが一番ですよね」

「ああ、たしか、中級職の転職の時に……」

「なにに！」

一同の注目が集まる。すかさず四方から質問が飛んだ。

「『天使の微笑』とうたわれたマリナさんと話したんですか」

「1000人の悪人を見事に回心させたとか」

「彼女は神聖水だけを飲んで生きているというのは本当なのか？」

途方もない質問に当惑する。噂がやたらと独り歩きしているようである。彼らの理想を粉微塵に破壊する事を避けるため、ザックスは話題を変えた。

「いや、俺はどちらかといえばこっちの娘の方が……」

何気なく指したその先の肖像は、幸か不幸か自身がよく知る娘だった。

「そっだよな、やっぱりイリアちゃんが一番だよな」

「くろう。ザックスさんお目が高い！」

再び盛り上がりつつ行く話題に閉口する。そんな時だった。

「でも、イリアちゃん、今、病気で寝込んでるんですよ？」

「なにい。それは本当か」

「ああ、なんでもどつかの間抜けな冒険者に泉に突き落とされたとか、彼女の人気に嫉妬した姉巫女達に苛められて一晩中外に締め出されたとか」

「マジかよ、またガセネタじゃないだろうな」

「ここ数日神殿内でみた人はいないってのは本当らしいですよ」

「畜生、見舞レースに出遅れちまったじゃねえか」

彼女の意外な近況を、ザックスは呆然とした面持ちで耳にしていた。

夏の日差しはまだ高いものの、すでに夕刻近い時間帯である。

ダンジョンの踏破もそこそこに、急ぎ自由都市に帰還したザックスはその足で大神殿に向かっていた。

途中で購入した見舞の花束を手に、先日彼女と別れた神殿裏手の通用門付近でうろろする。だが、神殿内に伝手を持たぬザックスにはイリアの容態を知る術もなく、ただ時間だけが徒に過ぎて行った。門の守衛がそんな不審者を取り次ぐはずもなく、『とつとつと消えろ』と云わんばかりの視線でザックスを威嚇する。仕方なくすすごとその場を退散しようとしたその時だった。

「なにか、御用か？ 若いの」

不意に背後に現れた気配に驚いて飛びのいたザックスは、そこに一人の神官衣に身を包んだ男の姿を見出した。

年の頃は50近く。短く髪を刈り上げ、太い丸太を連想させるような体躯のまだまだ男盛りといったその姿は、神官と云うよりは流れる戦士に近い。こんな強面でよく信者がついてくるものだなというのが第一印象のその姿に気圧され、ザックスはおもわず本音を漏

らした。

「いえ、あのイリアの容態が気になって……」

「イリア、だと！」

言葉と共にぎろりとザックスを睨みつける。

「君はイリアを呼び捨てにするほどに親しい仲なのかね」

「い、いえ、その……、イリア……さんには『転職』の際に大変お世話になりました、た、体調を崩されたと聞きまして、ご、ご様子を窺おうかと……」

しどろもどろになって答えるザックスをぎろりと睨みつける神官風の男の視線に耐えきれず、ザックスは男に花束を押し付け、その場を逃げ出した。

先日のマリナといい、今日のこの男といい、この神殿には何か特別な視線の力を持つスキルが存在するようだ　などと頓珍漢な事を考えながら、ザックスは坂道を転げ落ちるように逃げだした。

「あらあら、おじさまが余りに睨みつけるから、彼が逃げ出してしまったじゃないですか……」

押し付けられた花束を手にして訝しげにザックスの背を見送る男の傍らに、一人の巫女服の女性が現れる。

「ふん、あんな腰ぬけの若造、100年早いわ。」

彼女に手の中の花束を預けながら、男は忌々しげに吐き捨てた。

「でも、おじさま、ザックスさんは新進気鋭の冒険者として、今の都市で、密かに注目されつつあるのですよ」

「何、彼が、あのザックスなのか」

「ええ」

巫女の言葉に神官の男は何やら考えこんでいる。やがて、何かを思いついたかのように顔を上げた男は、傍らに立つ彼女に頼みごとをした。

「マリナ、頼みがある。少しばかり面倒事だが、やってくれるか」

「はい、おじさま。なんなりとお申し付けください」

男の依頼を、マリナは『天使の微笑み』とうたわれるその笑顔で

引き受けた。イリアとザックスを肴に再び何か面白い事になるに違いない、と彼女が考えた……かどつかは定かではない。

「おい、ザックス」

ガンツ「ハミツシユの酒場のマスターであるガンツは憚然とした表情で通りかかったザックスを呼びつけた。

「なんだよ、マスター。またクエストか？」

だが、その言葉に憚然とした表情を崩さないガンツは、唸るような声を上げて尋ねた。

「お前……、神殿と何か悶着をおこしたのか？」

その問いにぎくりと立ち止まる。

昨日の事を含めていろいろと心辺りがありすぎるのだが、それでも大事に至るようなものではないはずだ、と考えたザックスは首を振った。訝しげにそんなザックスの姿を眺めていたガンツだったが、やがてため息をつくと彼に告げた。

「転職以外の用件で神殿にはあまり関わるな。事を構えて潰された酒場ってのは何軒もあるんだからな」

「それって、支配下の冒険者が巫女に悪さをしたとかっていうんじゃないのかよ」

「それもある。だがな、それだけじゃない。冒険者協会が神殿に一目置いてるってのには、それなりに理由があると思え！」

「分かったよ」

「じゃあ、クエストの依頼だ」

「へっ？」

「クエストだ。お前さんに神殿から直々に御指名がかかってるんだよ。契約日数は3日間だ！」

「おい、関わるなって、今、言ったじゃねえか」

「この仕事は断れねえんだ。だから釘を刺したんだよ。だいたいお前程度のレベルで、あそこから御指名がかかること自体が異常なんだ」

「そうなのか」

「くれぐれも気をつけてな。巫女に悪さなんかするんじゃないぞ！」

「しねえよ！」

周囲の嫉妬と羨望の視線を一身に受けながら、ザックスは依頼主の待つ創世神殿へと向かったのだった。

「あらあら、いけませんわね。ナイフとフォークは外側から使うと先ほど教えましたでしょう」

ピシリと空気を切る音がして鞭が振られる。

「いてえ！」

鞭で打たれたザックスの悲鳴が、室内に響き渡った。

「何すんだよ」

その言葉に再び鞭が振られる。

「言葉使いが乱暴ですわ」

「あんた、絶対楽しんでやってるだろう」

「まあ、そんな事あるうはずないではありませんか。大事な妹分の為、将来の旦那様になれるかもしれぬお方を調教……、いえ、教育するのが今の私の仕事なのですよ」

「いま、『調教』って言わなかったか？」

「あら、そんな事あるうはずないではありませんか」

「なぜに棒読み？ そんなことより、本当にイリアの容態をきちんと教えてくれるんだろうな？」

「私達は神殿巫女ですよ。創世神に誓って嘘を申すことなどありえません」

イリアを餌に手玉にあやつられている事に気付かず、さらに得るものと失うものの差が余りにも大きすぎる事に、全く気付いていないザックスだった。

創世神殿神官寮の一室において、神官衣を着せられた彼は、言葉遣いを始めとしてテーブルマナーなどの行儀作法についてのレクチャーを受けていた。彼の傍らには、両家の子女の家庭教師役の典型のような服装で、鞭を片手に指先でくいつと伊達眼鏡を押し上げるそぶりを見せながら、ノリノリで指導するマリナの姿があった。

「絶対、詐欺だ！」

そんなマリナの姿を見ながら、ザックスはぼつりと呟いた。

『天使の微笑』というのはその内面を知らぬ者の戯言だろう。1000人の悪人を見事に回心させた 借りに真実ならおそらく力技かペテンにかけたに違いない。

「神聖水だけを飲んで生きてるのは、きっと『大酒飲み』つてオチなんだろうな」

「何かおっしゃいました？ 確かにお酒はたしなみますが……」

にこやかな微笑みでそう語る彼女に、もはや言葉もない。

はじめて会話をした時からうすうす気づいていたのだが、こころも実態と噂がかけ離れている人物も珍しいだろう。

この神官寮は男子寮であるのだが、彼女とすれ違う全ての者達が居住まいを正して彼女に挨拶をする辺り、どうやら只者ではないらしい。ザックスと同世代かどうかもあやしいところである。

「あらあら、私はザックスさんと同い年ですよ」

まるで頭の中を覗いたかのようなタイミングで掛けられた言葉に、背筋がゾクリとする。そんなザックスににこやかに微笑みかけながらマリナは告げた。

「出発は明日になります。今夜は徹夜になっても、それなりの体裁を整えて頂きますわ」

その言葉にザックスは眼前のテーブルに突っ伏した。そんな彼の姿を微笑みを浮かべて眺めながら、マリナは小さくぽつりと呟いた。「私達の可愛いあの娘をイリアさんさんに泣かせたのですから、その分しつかり働いて頂きますわよ」
最強の敵が直ぐ側ラスボスにいることにも気付かず、ザックスはなれぬ作法に悪戦苦闘するのだった。

2011/07/25 初稿

12 ザックス、弄ばれる！

歩く事が基本の冒険者の生活からしてみれば、馬車などというものは実に無駄な乗り物のように思える。

街中の通りを闊歩するものの多くは自由都市指折りの富豪たちの派手に飾り立てられたそれか、《ペネロペイヤ》近郊の農村部から多くの荷駄を運び込む商人達、そして今、ザックス達が載っている神殿の印がしっかりと刻み込まれたこのような馬車だった。

「質素儉約が旨ですから、私達も滅多に乗る事はないのですよ」というマリナの言であるが、さすがに神殿の威光は凄まじく、道行く人々から馬車までが道を譲ってゆく姿は壮観だった。『神殿とは事を構えるな』というガンツの言葉の意味がつくづく思い知らされる。北地区にある創世神殿から《旅立ちの広場》まで馬車に揺られた後、転移の門を通して自由都市《トロイヤ》に向かったザックス達はさらにそこから馬車に揺られて《トロイヤ》にある創世神殿に向かっていた。

さすがにマリナとのやり取りには慣れたものの、着なれぬ神官衣を纏ってさほど広いとも思えぬ馬車に揺られるのは何かと不自由であるのだが、さらに今のザックスには一つの問題があった。

道行きのもう一人の同行者にして今回のクエストの正式な依頼人、創世神殿高神官ライアット 先日、神殿からザックスを追い払った張本人である壮年の男は、マリナと並んで座るザックスの対面にドシリと座り込み、一言も話すことなく目を閉じている。それなりに広く造られているはずの車内の空間を、その丸太のような体躯と暑苦しい存在感で一人で圧迫している。

何かと苦手意識が先走るザックスだったが、迂闊にイリアの事を

切り出そうものなら、先日の一の舞になりかねず、結局全く接点が見出せぬまま、言葉を交わさぬ時間に閉口していた。

彼の警護というのが今回のクエスト内容であったが、そんな必要なんてどこにもないじゃないか、と店の安寧の為に自分を売ったマスターのガンツを呪っていた。

只でさえ様々な不安要素のある中で、唯一救いだっただのは、イリアの病気が只の風邪であり、すでに全快して、今日からまた務めに励んでいるとマリナに知らされた事くらいだろう。

「もしかしたら、見送りの一団の中に混じっていたかもしれませぬ」

馬車が神殿を出てしばらくしてぼつりと呟いたところが、マリナの意地の悪さである。そんなやり取りにも飽き始めたザックスは、馬車の窓から初めて見る別の自由都市の景色の感想をぼつりと呟いた。

「汚い街だな」

「そんな風に見えるのですか？」

「ん、ああ、まあ俺は《ペネロペイヤ》以外はほとんど知らないから、比べようがないんだけどな」

故郷から食糧輸送船に紛れ込んでやってきたザックスにとって、《ペネロペイヤ》以外の都市に来るのはほとんど初めてといえた。

これまで《転移の扉》を幾度も潜り抜けてきたものの、思えば都市とダンジョンの往復ばかりの生活だった。ウルガ達とすることがなければ、《ブルポンス》についていって見識を深めるのも一つの手だったかな、と残念に思う。

「多少活気がないようですが、私にはそのようなには感じられませぬ」

「まあ、気のせいっていえば気のせいなんだが……、空気が澱んでるんだよね……。ところであんた達、暑くないのか？」

季節は夏である。

日中ともなれば気温も上がり、せまい馬車の中もそれなりに暑い。

巫女や神官の外出時の正装は、外部のものからすれば相当に暑苦しく見えるものだが、二人は汗一つかく様子もない。

「なんか、オレに隠してないか？」

「まあ、ほほほ、これも日々の修練と信仰の賜ですわ」

「その顔だと神殿独自の暑さ凌ぎの秘伝みたいなものがありそうな感じだな」

いつも優雅な笑みを浮かべるマリナが一瞬絶句した当たり、的外れではないのだろう。

「あらあら、そろそろ目的地が見えてまいりましたわ。ザックス様、それでは依頼したクエストの件、くれぐれもよろしくお願いしますね」

「あんたら、絶対いい性格してるよ」

絶妙なタイミングではぐらかされたザックスは、不貞腐れながら馬車を降りたのだった。

「これは、これは、ライト殿、遠路はるばるようこそお越し下さいました。マリナ殿もあいかわらずお美しく。はて、そちらの方は知らぬお顔ですね」

馬車を降りた一同を迎え出たのはこの神殿の神官長職にある麦酒樽のような体形の男だった。ライト殿と同じく高神官位についている事を示す彼は、神官に不似合いなふくよかな体形に、満面の笑みを浮かべて、挨拶をする。

「ブレルモン殿、御無沙汰いたしております。こちらは行儀見習いを兼ねて、私の身の回りの雑務を任せておりますヤハルと申す者。まだまだ不作法者ゆえ、御気分を害する事もあるでしょうが、その時はどうかご容赦を」

「何をおっしゃられる。ライト殿が身の回りをお任せになっておられるのなら、きつと将来有望な神官でいらっしゃるに違いない」

細い目をさらに細めて、ほめちぎる麦酒樽の姿にはどうにも嫌悪感しか湧かない。マリナに教えられた通りのしきたりにのっとった挨拶をしたザックスは、極力目立たぬように振舞う事を心がけた。「ささっ、では参りしましょうか。面倒なお務めなど早めに済ませて今夜は大いに飲み明かしましょうぞ」

神官として余りに不謹慎な言葉をさらりと言つてのけながら、ブレルモンは3人を奥へと案内していった。

「あつ、マリナ姉さまだ。ほんものははじめてだ!」
「きれい……」

あどけない笑みを浮かべて中庭で遊んでいた子供たちが、彼女の周りに集まっている。

「みなさん、お元気ですか」

『天使の微笑み』を浮かべるマリナの周りに集う子供達は、さながら天使の従者というところだろうか?

「あれ、なにこの人、マリナ姉さまのかれし?」

「うわっ、だっせー、マリナ姉さま、だまされてんだよ」

「うわーん。マリナ姉さまがダメなオトコにひっかかったー」

彼女達の傍らに立つザックスに、マリナの周囲のクソガキどもが容赦のない言葉で威嚇する。

「あらあら、みなさん。その者は私の従者トなのです。私がお願いすれば、お空も高く飛んでくれますし、素敵な御馳走も運んでくれるのですよ」

「うっわー。すごい、すごい。マリナ姉さま、やってみせてよ」

「お・い! ちょっと待て!」

慌てるザックスの姿をきやあきやあと喜ぶ子供達。そんなやり取りの最中、彼らの元にこの神殿の巫女が現れ、むずかる子供達を屋内へと引き揚げさせた。

「じゃあね、ばいばい、マリナ姉さま。ペットの兄さまも、またね……」

あどけない笑顔に容赦のない言葉を残して、子供達は去ってゆく。そんな子供達の背中を手を振って見送っていたマリナにザックスは何気なく尋ねた。

「あの子達は孤児なのか？」

その問いに僅かに目を伏せたマリナは、さびしげな微笑を浮かべて答えた。

「あの子達は未来の私達の後輩となるべく、幼いころから親元を引き離された子供たちです」

「そんな、無理やりだっというのか……」

その問いに小さく首を振る。

「神殿に仕える者……特に巫女になるものには特別な資質が必要です。確かに孤児の中からそういった子供が選ばれる事もありますが、大抵は幼いうちにその資質を見出され、神殿からかなりの支度金を渡され、連れていかれるのです」

「あんたもなの……か？」

その問いに彼女は小さく微笑んだ。

「一度巫女になれば、その力を失うか、禁を犯して力を封じられるか、あるいは寿命が尽きない限り巫女を止める事はできません。確かに神殿巫女には様々な特権も与えられていますし、恋愛も結婚も禁止されてはいません。しかし、いかなることがあろうとも、何らかの形で神殿につなぎとめられる事に、変わりはないのです」

淋しげに笑う彼女の視線の先には何が見えるのだろうか？ 彼女の話聞きながら、ザックスはふとイリアの顔を思い出した。

「イリアもそうなのか……」

「あの娘は私達とは違います。例外なのです」

「例外って？」

「あの娘はおじ……いえ、さる高神官様がさる筋から娘としてお引き取りなさり、私達と共に姉妹のように育ちました。私達にとって

あの娘は希望だったのです」

「希望？」

「何物にも強制されず、人生を自由に切り開いていく事。それが多くのしきたりに縛られる私達が決して手に入れる事の出来ない、『密かな憧れ』なのです。それなのに、あの娘はその自由をかなぐり捨てて、私達と共にある事を自分から選んだのです。不幸なことにあの娘には類い稀な巫女の資質がありました」

「……………」

「周りの姉妹が次々に巫女になって行く事で淋しかったのかも知れませんが。もつと突き放して、彼女と私達は違う人間なのだ幼いうちから教え込んでおくべきでした。それでも可愛いあの娘を手放せなかった『私』の過ちなのです」

淋しげな笑顔と言葉だった。

「巫女の仕事は時として過酷です。神から冒険者に与えられる理不尽な運命への反発の矢面に立たされることもしばしばです。あの娘の幼さと兎族であるという事は時としてそれを増長させてしまうことでもあります。それでもあの娘は弱音を吐くことなど一切せずに、日々の務めを黙々とこなしているのです」

そう語ったとき、彼女は黙り込む。そのまなじりに小さな輝きが生まれたように見えたのは気のせいだろうか？ そんな彼女に向かってザックスは言葉を掛けた。

「部外者の俺には正直、あんた達の苦しみや想いは分からねえよ。でも、あいつが不幸であるとは俺には思えない」

ザックスの顔をマリナが凝視した。

「あいつは自分から選んで巫女になったんだろ。それってあんたのいう『密かな憧れ』って奴をかなえたともいえるんじゃないか。それにあいつの周りにはあんたのようにあいつを誰よりも想いやり、守ろうとする人たちがいる。だったらそんなあいつが自分の事を不幸だなんて思うはずじゃないか」

その言葉にマリナは目を見開いた。

「幸せなんて人それぞれ。実はいつも身近に当たり前のように転がっているのが幸せだ、って昔から言うだろ。あんたが必要以上に重荷を背負う事なんてこれっぽっちもないんじゃないの？」

その言葉にマリナは再び優しく微笑んだ。それはこれまでに見た事がないほどに優しい微笑みだった。

「ザックスさん、神殿巫女に説教するなんて……。冒険者のくせに生意気です」

「……だろ。俺も少しばかり、恥ずかしいんだ」

「有難うございました。少しでも心が晴れましたわ。でも、貴方とイリアの事は別問題です。私達は可愛いあの娘をあなたにお渡しするつもりなど毛頭ございませんわ」

「だー！。オレはまだ何にもしちゃいねえよ、まったく、どいつもこいつも……」

夏の昼下がりに、柔らかな風が吹く神殿の中庭に、ザックスの小さな叫びが響きわたった。

寝付けない。

慣れぬ寝具の匂いと氷水術系魔法による若干冷え過ぎの感のある室内の空気。だが、それ以上に安眠への道を妨害する真の理由とは……。

「ハラ減った！」

こらえきれずザックスは寝台の上に跳ね起きる。

出された夕食の味は絶品だった。

様々な珍味を取りそろえたその夕食は、神殿に仕える者の食事としては分不相応であまりに豪勢過ぎるものだった。

高神官ブレルモンの腹が麦酒樽のようになる理由というのはある

程度、推測がつくというものである。給仕をする他の神官たちの羨望の視線の中、ザックスは堂々と食事に挑んだものの、なにぶん一皿の量が圧倒的に少なく、前日にマリナに徹底的に仕込まれたテーブルマナーを気にするあまり、とても満足できる食事とはならなかった。

同席したライアットとマリナはそつなく食事を行っていたが、彼らの内心がいかなるものかという事は察しがつくだろう。

寝台の傍らにある《袋》^{バック}に手を伸ばしたものの、ここ数日の強行軍がたたり、ダンジョン探索時に必須の携帯食は全て品切れだった。仕方なく、調理場にまだ何か残っているのではないかと考えたザックスは、部屋を離れることにした。冒険者の習性として腰に《袋》^{バック}を装着して、その上から神官衣をかぶった姿でザックスは扉を開け、小さな明かりを頼りに暗めの廊下を進んでいく。

「どちらへ行かれるのですか、ザックスさん」

曲がり角で彼を呼びとめたのは巫女服姿のマリナだった。人の気配が全くしなかった事を十分に確かめていたにもかかわらず、突然かけられた声に驚いて叫びそうになるザックスの口を、マリナはその柔らかな手のひらで押さえた。ほんのりと漂う甘い香りにどきりとするザックスは、彼女に傍らの倉庫へと引き込まれた。

「何をしてらっしゃるのですか、こんな時間に……」

「それはこっちのセリフだよ。あんたこそ何やってんだ？　ここでは一応お客様なんだろ」

「私はまあ、いろいろと、巫女の務めを……」

口ごもるマリナに僅かにため息をついたザックスは、少しばかり意地の悪い種明かしをする事にした。

「探し物は見つかったのかい？」

その不意打ちに彼女は息を飲む。いつも優雅な微笑みを浮かべる彼女が浮かべた驚きの顔は、昨日からやられっぱなしのザックスに僅かな優越感をもたらした。

「あんた達はここの責任者の不正を暴きにきたんだろ。昼間の査察

はあくまでも形式的なもの。ライトのおっさんはどちらかと云えば囿役で、実行部隊があんたつてところかな。場合によれば顔の知られてないオレも囿の囿つてところだろ」

その言葉にマリナはさらに驚きの顔を見せる。だが、直ぐにいつもの微笑みを取り戻した。

「まったくそのとおりですわ、ザックスさん。おっしゃられるように、私達はあの妻……、いえブレルモン高神官の様々な疑惑の解明の為の事前調査を行いに来ました」

「事前調査？」

「詳しい事は申し上げられません。ただ神殿の組織内にも様々な人間関係がありまして、それらを刺激しないように事を進めねばなりません。これまでも私達と同じようにこの神殿に足を運ばれた方々はいらっしやいましたが、どれも決定的な証拠を手に入れることができず空振り続きでした。正式な査察を入れて空振りという事態になれば神殿関係者の面子が関わってきますので……」

「それも巫女の仕事なのか……」

「いえ、どちらかといえば、これは私の個人的な趣味と云うべき……」

……つて、何を言わせますの！」

「あんたが勝手にしやべったんだろが……」

「それで囿の囿役のザックスさんはここで一体何を……」

「ハラが減ったんだよ」

「はい？」

マリナの目が点になった。これも貴重な表情である。

「あの晩飯じゃ食った気がしなくなつてな、携帯食も品切れだったんで、ちよつとばかり調理場に何か残っていないかと夜食を調達に……」

徐々にマリナの目がジト目になっていく。

「人が神経をすり減らして仕事をしている最中に、つまみ食いですか……」

「うるせえなあ。だいたい不正の証拠集めなんて、オレのクエスト

内容には入ってねえだろ」

「それはそうですが……」

「そういう訳で、お仕事頑張ってたな！」

マリナのジト目に耐えられなくなったザックスは、彼女を置いて先に倉庫を出ようとすする。そのザックスの襟首をマリナはむんず、と掴んで引きとめた。

「なっ、何すんだよ！」

「仕方ありませんので、私もお付き合いますわ……」

「なんだ、あんたもハラが減ってたのか？」

「ちっ、違います！ 見つかったらどう言い訳するつもりなんですか？」

こめかみを押さえながらマリナはザックスについてゆく。

彼女も無駄な時間を過ごしてよいわけではないが、ザックスにつき合おうとするところをみると手詰まりなのだろう。見かけによらずブレルモン高神官というのは周到な男らしい。

倉庫を出た二人は暗い廊下をゆっくりと進み、夜食の調達ミッシェンに挑むこととなった。

「あれ、人がいるな」

長い廊下の先、ドアが僅かに開いた部屋から室内の明かりがもれだしている。

気配を消してそこに近づいた二人は中の様子を探った。水音が僅かに響くその場所はこの神殿の《洗礼の滝》の部屋だった。低くかがみこんだザックスの上から覗き込むようにしてマリナが室内の様子を探る。

彼女の吐息がこそばゆく、その豊満な胸のふくらみが巫女服越しにザックスを密かに刺激する。彼女の性格からしてわざとやっているようにも思えるが、ここは素知らぬふりを決め込み、そのみずみずしく柔らかな感触を密かに堪能する。

「この神殿にも《洗礼の滝》があるんだな」

「ええ、《洗礼の滝》はどの神殿にも必ずあります。私どもが義務

めする神殿は正確には大神殿と分類されるもので、この神殿よりも規模も大きく格式も高いものです。そして、この神殿で洗礼を受けずに私達の神殿にやってくる冒険者の方々が、なぜかここ暫く急激に増えてきているのです」

「理由はあれだろ」

《洗礼の滝》 その場所に満ちているはずの神聖水の輝きは鈍かった。おそらく効力が落ちてきているのだらう。問題はなぜそうなったかと云う事だが、これはマリナ達の領分の問題だらう。

それよりもザックスが気になるのは中にいる人影の方だった。水勢の悪い滝の下ではそばそと呟く声が聞こえる。それはブレルモンの姿だった。そして直ぐ側にもう一つの人影がある。

『はい、資材は全て別の場所へ……。ええ、ここにはもう何もございません。査察官もボンクラ……で、この場所についてすら興味を……… せんでした。先ほどまで酒精をた……… ましたので今……… すり眠っているでしょう。明日に……… 急用を思い……… ので、直ぐにでも……… 』

とぎれとぎれに聞こえる言葉を、マリナが読唇術で補って小さく呟いていく。

「なあ、ふん捕まえなくていいのか……」

「いえ、今の彼を捕まえても意味はありません。ここにはもう証拠になりそうなものはないようですから、後はもう一人のフードの方の正体を調べて、その線から追うしかないでしょう。いずれにしても今すぐどこにかできることではないようです」

「そうか、面倒くさいんだな、神殿つてのは……」

その言葉にマリナは苦笑いを浮かべる。部外者にとって組織内のことごとほど、馬鹿馬鹿しいものはないのだらう。

もう一人の姿が見えたところでそれは自分には関係のない人物であることから、ザックスがその場所をマリナに譲って離れようとする。そんな彼の目の片隅に不意にフードをかぶったもう一人の男の

顔がチラリと映ったような気がした。

「どうされました、ザックスさん」

一度はそこから離れようとしたものの、再び熱心に扉の隙間に張り付いて中を覗きこむザックスに、マリナは奇妙なものを感じた。しばらくしてザックスはゆっくりと扉から離れていく。その顔は真っ青だった。

「ザックスさん？」

「あいつだ、間違いない……」

真っ青になったままザックスは小さく呟いた。その手がぶるぶると震えている。

「お知り合いの方なのですか？」

その問いに返答はない。

しばらくしてザックスは自身の心を落ち着けるかのように、数度深呼吸をして目を閉じた。再び見開いたその目を見てマリナの心音が跳ね上がる。それはいつも陽気でどこか抜けた様子の普段のザックスとはかけ離れた、深く冷たい目だった。

やおら立ちあがったザックスは着ていた神官衣を脱ぎ捨てると《^{バック}袋》から《金剛系の上衣》を、ついで《賢者の額環》、《魔法障壁の籠手》を取り出して装着し、最後に《ミスリルセイバー》をすらりと抜き放つ。扉から漏れる光を受けてその刀身が冷たく輝いた。

「ザ、ザックスさん、一体どうなされたのです？」

慌てて彼の身体をつかんだ《マリナ》の手を力強く握り返したザックスは、先ほどよりもさらに冷たい目をしたまま彼女に告げた。

「マリナさん、悪いが契約はここまでだ。あんたは直ぐにここを離れて、おっさんと神殿内の人を外に誘導してくれ」

「どうなさったのです、訳を教えてください」

「早く行ってくれ。子供達を巻き込む訳にはいかないだろう。悪いが、ここからはオレの喧嘩だ。あいつは絶対に許せない」

口元に僅かな笑みを無理やり張り付けて彼女への言葉を残すと同時に、ザックスはマリナの手を離し、眼前の扉を勢いよく蹴り飛ば

した。

待って、と呼び止めようとしてふとマリナは気付く。

彼は心底怒っている。

今やそれは、己には絶対に止められない事を、彼女は理解した。

2011/07/26 初稿

13 ザックス、怒る！

激しい破壊音と共に扉を蹴り飛ばして侵入した者の姿に、ブレルモンは眉を顰めた。

見慣れぬ装束を身にまとい、白銀に輝く刀身の剣を手に、迫ってくる男が立ち止まる。しばらくしてからようやく、それが査察に訪れたもののうちの一人であることに気付いた。

「ヤハル殿と申したか、これはどういう事なのかな」

だが、彼がその言葉に耳を貸す事はなかった。立ち止まった彼は無言のまま、ブレルモンと話していたフードの男に向けて鋭いまなざしを送っている。

「一月ぶりの再会は久しぶりって言うていいんだよな！ まさかこんな所で会えるとは思わなかったよ」

その言葉にフードの男は僅かに微笑する。自身がないがしろにされた事にブレルモンは激怒した。

「何の真似だ！ 小僧！ たかだか神官風情がこのわしをないがしろにするとは何事だ！ わしは貴様がこびへつらっている冒険者上がりの高神官などとは比べ物にならぬほどの傑物なのだぞ！ 本来ならこんな辺鄙な都市の神官長で収まるような人間ではないのだ！

もつと敬わんか！」

「黙ってる、麦酒樽！ お前に用はない！ そこで静かにお座りしてる！」

その暴言にブレルモンが絶句する。代わりに口を開いたのは彼の後を追ってきたマリナだった。

「申し訳ありません、高神官様。この者にはよく言ってお知らせするので、なにとぞご容赦を……」

そう告げながらザックスの前に進み出そうとした彼女の細腰を、ザックスは左手でしっかりと抱きしめ、自身の背に隠した。尋常でないザックスの様子にマリナは啞然とする。

だが聡明な彼女は彼の意図を察した。そして、眼前のフードの男が得体の知れない者であると直感した。

彼女を背にしたまま、持っていた剣をフードの男に向けたザックスは言葉を続ける。

「挨拶ぐらいしたらどうなんだ、まさかオレの事を忘れた、ってんじゃないだろうな」

「いい加減にしろ、小僧！ ロシユフオール卿は貴様ごときが声をかけるなど恐れ多いお方。さる王国の宮廷魔術師に暴言を吐けば、自由都市の一つや二つ、灰にされても文句は言えないのだぞ」

「なるほど、名はロシユフオールというのか」

「貴様、いい加減に……」

「黙れ、麦酒樽！ こいつは宮廷魔術師なんて可愛いものじゃねえ。そうだよな！ 《十二魔将》さんよ！」

ザックスの言葉に室内が凍りついた。彼の背で黙って成行きを見守っていたマリナも絶句する。

《十二魔将》……伝説の魔人達の一人が目の前にいる。ザックスの言葉を信じるならば、今自身はとんでもない場所に居合わせているという事になる。

凍りついた室内の空気を再び動かしたのは、ロシユフオールと呼ばれたフードの男だった。

「くつくつくつ……麦酒樽ですか。確かに言われてみればよく似てますね。いや、笑わせて頂きましたよ。それにどうやら貴方の中には、私の蒔いた種があるようだ……」

「ロシユフオール卿、貴方、まさ……」

言葉の最中に、ブレルモンがびくびくと痙攣し始める。

「まったく人が話しているというのに身のほどをわきまえぬ方ですね。ああ、そうそう、自己紹介が遅れました。私は《杯》を司る魔

将ヒュディウスと申します。よろしければ貴方のお名前を聞かせてはもらえませんか？」

「ザックスだ！」

「ザックスさんですか。あれからこちらでは一月になるのですね。その割にはまだ成長が足りないようだ、新芽が苗木になりかけというところでしょうか」

「苗木だと！ お前一体オレに何をした。答える！ オレにかけた《呪い》はなんだ！」

「《呪い》ですって、これは面妖な。いや、そうか。この世界ではそうなってしまうのですね。」

まあいいでしょう。ですが困りましたね。こういうのを不測の事態というのですか。

私はどちらかを選択しなければいけないということですね。いやはや、困りました」

どこまでもふざけた物言いの魔将の様子にザックスはいら立ちを覚える。どこか会話がかみ合わない。見ている世界、あるいは視点の違いというべきか。二人の間には決定的な齟齬が生じていた。

苛立つザックスに構わず、ヒュディウスは飄々と語った。

「仕方ありません。まだまだ先行き不透明ですが成長する楽しみと一つのもありますし、こちらの苗木を育てる事にしましょう。さて、麦酒樽さん……」

言葉と同時にブレルモンの痙攣がとける。せいぜいと息をつきながらブレルモンは、恐怖の表情を全面に張り付けて後ずさる。そんな彼にヒュディウスは不気味な笑みを浮かべながら言い放った。

「あなた、もう、要りません。だからこちらの苗木の肥料になって頂けますか？」

「な、なんだ、《十二魔将》だと、ふざけるな。私は貴様が宮廷魔術師だというから協力したんだぞ、これでも私は神官なんだ、魔人なんかには貸す力など……がっ……」

ヒュディウスが指を鳴らすと同時に再びブレルモンが胸を押さえ

て苦しみだす。そんな彼を笑って眺めながらヒュディウスはザックスに告げた。

「残念ながら今の私は、先日のように貴方とスリルあるひと時を過ごす事ができないのですよ。そこで代わりにものをご用意させていただきます。若干物足りないかもしれませんが、今のあなたには十分でしょう」

言葉と同時にブレルモンの四肢が肥大化しはじめ、醜く膨れ上がって行く。そして異形の魔物へと化していった。

その過程にザックスとマリナは絶句する。

生まれた異形がさらに肥大していく様子を、楽しそうに眺めていた魔人の姿がふわりと宙に浮く。

「おい、逃げる気か！」

「先ほどこの方は自分が優秀だなどとおっしゃられておりましたが、あなたが間違ってもいないのですよ、血筋だけを見ればね。彼の血筋を何代か辿れば竜人族に行きつくのです。そういう訳で彼の中に眠る竜の因子をマナで覚醒させてみると、ご覧のとおりです」

異形と成り果てたその巨大な姿は、かつてザックスが見た《グリーン・ドラゴン》に類似している。だが《グリーン・ドラゴン》に倍近いその体軀は白っぽく変色し、ところどころ腐臭を放っていた。そんな異形のモンスターを尻目にヒュディウスはザックスに語りかける。

「残念ながら私はもう行かねばなりません。お名残り惜しいですが、今はまだ私達の運命は互いに交わる時ではありません。代わりと云ってはなんですが、これをプレゼントさせていただきます。《ドラゴンゾンビ》、貴方達冒険者風に言えば、AAランクボスモンスターといったところです。今の貴方には若干手に余るかもしれませんが、どうぞ十分にお相手差し上げて、実力の向上にお役立て下さい。また会える日を心よりお待ち申し上げます」

「おい、待て」

ザックスの制止に耳すら貸さず、魔人はその姿を揺らがせて空中

へと消えていく。後に残されたのは巨大な咆哮と共に暴れまわるブレルモンの醜悪ななれの果てともいうべき姿だった。

その巨体を所かまわず周囲にぶつけて、忌々しげに魔力のこもった咆哮を放つ。その瞳に理性の色はなく、完全に自我を喪失しているようだ。

不意にその口から放たれた溶解液がザックスに向かって飛散する。飛びあがってかわそうとした彼は、自身の背にマリナがいた事を思い出す。

間一髪、左籠手の魔法障壁を展開して防いだものの、ザックスの足に溶解液がかかり、金剛糸のズボンの一部が溶解した。

「マリナさん、逃げるん……」

警告を発しながら彼女の顔を見たザックスはハッと気付く。マリナの瞳の焦点が合っており、彼女はドラゴンの咆哮の魔力をまともに受けたようだった。すぐさまマリナを抱え上げ、自身に《加速》と《身体強化》をかけたザックスは、部屋の入口まで後退する。

「マリナさん。しっかりしろ！」

身体を揺する事数度、ようやく彼女は正気を取り戻した。

「ご、ごめんなさい、私……」

溶解したザックスの装備をみて、マリナは己が足手まといになっていた事に気付いた。

「逃げてくれ、ここはなんとか食い止める」

「でも……」

「あんたを守りながらじゃ戦えない、残念だが、あれはオレ一人でも手に余る代物だ」

「そんな……」

「あんたは神殿巫女なんだろ。だったらこの建物の中にいる人たちを助けてくれ」

「……。分かりました」

立ち上がるうとするザックスをマリナが不意に押しとどめた。そして何事か呟くと彼女の柔らかな口唇がザックスの頬に触れた。

同時にザックスの身体の中のマナが急激に活性化していく。突然の出来事にザックスはうろたえた。

「マ、マリナさん……?」

「《巫女に加護》を今、貴方にかけてました。これでああなたの能力値は一時的にですが上がっています。攻撃補助呪文の効果も倍増するはずですよ」

「あ、有難う……」

「それと、この部屋は神聖水に満たされています。効力こそ落ちていますが、アンデット系のモンスターにはその効果は絶大なはずですよ。強さのランクが一つもしくは二つ下がっていてもおかしくありません」

その言葉に周囲を見渡す。言われてみれば、正気をなくして暴れまわる《ドラゴンゾンビ》の動きは鈍いように見える。

「確かに、これなら何とかなるかも知れないな」

ザックスに手を取られて立ち上がったマリナは、僅かに頬を赤らめ、小さく微笑んだ。

「直ぐに周囲の人々を避難させ、おじ……、いえ、ライトアット高神官を呼んでまいります。だからそれまで……」

わずかに言葉を切った。

「何としても持ちこたえてください。貴方にもしもの事があれば悲しむ娘がいると言う事を、ゆめゆめ忘れなさいませぬよう」

「わっ、分かってるよ……」

ぎこちなく微笑んだ彼女は、身をひるがえすと一目散に走り出す。その姿が扉の向こうに消えるや否や、ザックスは荒れ狂う凶獣に向かって突き進んで行った。

咆哮をあげて暴れる凶獣が柱に頭を激突させ、その衝撃で部屋が揺れた。

マナによって加護された石造りの部屋は強固な構造となっているものの、このままでは崩壊するのも時間の問題である。強靱な体軀を《ミスリルセイバー》で幾度か斬りつけたものの、《ドラゴンゾンビ》のもつ厄介な再生能力が決定打を打たせない。斬り飛ばされた前腕が即座に再生する様子を目の当たりにした時点で、ザックスは戦術の方針転換を余儀なくされた。

「どうするよ……」

マリナによる《巫女の加護》と強化系の魔法を三重にかけた今の状態で、なんとか五分の状態に持ちこんでいるものの、いずれは効力が切れるだろう。それまでになんとか決定打を打たねばならない。理性を失い、辺り構わず暴れまわる凶獣を観察するうちに、ザックスはあることに気付いた。

「あれだな……」

神聖水の泉にふれた部分の肉体の再生が他の個所に比べて著しく遅れている。建物への度重なる衝撃で上層階からこぼれおちる神聖水はすでに止まっているものの、泉に突き落とせばかなりのダメージを与えられるはずである。

あとはどうやってそこまで誘導できるかということだろうか。眼前の正気を失ったモンスターはザックスに目標を絞っているわけではない。ところ構わず目の前のものをやみくもに破壊して回っていた。

モンスターの周囲をぐるりと回り込んだザックスは泉に膝までつき、《ミスリルセイバー》を泉の水に浸した。剣のミスリルと泉の水のマナが反応し、光術系の簡易魔法剣が生成される。光り輝く剣を手に、再びザックスは真正面から飛び込んで《ドラゴンゾンビ》に切りつけた。

二度、三度、ザックスが斬りつけるたびに《ドラゴンゾンビ》の身体から白い煙が上がり、傷の再生効果が遅延する。だが四度目に切りつけた時には剣に宿ったマナは消失し、切りつけた傷は再び再生した。さらに不意打ちとも言うべき《ドラゴンゾンビ》の左腕の

一撃が、魔法障壁でガードしたザックスの身体を再び泉に撥ね飛ばした。

「やっぱ、付け焼刃じゃ駄目か」

《全身強化》の効果でダメージこそさほどないものの、こちらも効果的な攻撃にはならなかったらしい。さらに悪い事に泉のmanaの効力で、ザックスは目眩に襲われた。

「俺って、アンデット扱いかよ」

押し寄せる目眩と吐き気を我慢しながら、ザックスはさらなる効果的な戦術を模索する。

先ほどの攻撃の唯一の収穫は《ドラゴンゾンビ》の意識がこちらに向かったことだろうか。眼前のモンスターはさすがに泉の水を警戒しているのか、こちらに必要以上に近寄ろうとはしない。

（あれを使うか……）

左手で腰に装着した《袋^{バック}》の中の秘密欠陥兵器を探り当てる。

ヴォーケンから預かったのは2発。manaを込めればあと一度ずつ使えたはずである。

再び泉に剣を浸し簡易魔法剣を生成する。《加速》《剛力》《全身強化》の順に攻撃補助魔法をかけ直すとザックスは泉から離れ、周囲を大きく回り込むと、《ドラゴンゾンビ》の背を泉に向けさせる。

身体組織の崩壊と再生を繰り返しながら、《ドラゴンゾンビ》は咆哮を上げてザックスに襲い掛かる。その攻撃を《加速》の効果を使って巧みにかわしたザックスは簡易魔法剣で腹部を切りつけ、身体を半歩後退させて左右を入れ替えると、起動させた左手の《爆裂弾》を、再生の遅れた傷の中に埋め込んだ。

同時に、左手の《魔法障壁の籠手》を発動させる。

凄まじい爆発音と共に《ドラゴンゾンビ》の腹部が破裂する。爆発の衝撃を左籠手の障壁で殺しつつ、ザックスは飛び下がった。よたよたと足元をふらつかせながらモンスターは泉に向かって後ずさっていく。

「もう一発だ！」

後退したザックスは再び袋から取り出したもう一つの《爆裂弾》を手にするとマナを込めながら《ドラゴンゾンビ》の懐に飛び込んで行く。

斬りつけた《ミスリルセイバー》が撥ね飛ばされるのにも構わず、しゃにむにつつこんだザックスは起動した《爆裂弾》を飛び上がりざま、モンスターの巨大な口の中に放り込んだ。

《爆裂弾》はその凄まじい破壊力で《ドラゴンゾンビ》の頭部を微塵に弾き飛ばす。

魔法障壁を展開し損ねてその衝撃を殺しきれなかったザックスの身体が宙に放り出され、床に転がった。《全身強化》の効力を持つとしても耐えきれない痛みがザックスの身体を襲う。

痛みに床を転げまわりながらザックスが目にしたのは、頭部を失い腹部に大穴をあけた《ドラゴンゾンビ》が泉に沈んでいく姿だった。

徐々に小さくなっていく水音と共に室内に静寂が戻る。

(へへっ、やったぜ)

全身を襲う痛みをしかめながら、勝利の余韻に浸る。

すでに体力が限界に近く、激しい戦闘ですでに《金剛系の上下》はボロボロになっており《羽の靴》には大きな穴があいている。戦闘の最後に弾き飛ばされた《ミスリルセイバー》も周囲には見当たらない。とりあえずどうにか生き残った事で、マリナとの約束も果たせそうだった。幸いここは神殿であるから治癒の魔法ぐらい使える神官はいるだろう。

「これって経費で落ちるんだろうな……。そういや、その前にオレはマリナさんに契約終了の申し出をしちまってたし、どうなるんだろ？」

などと呑気な呟きを口走る事ができるのは、生死のぎりぎりのラインでの戦闘に勝利できたからこそであるろう。

だが、戦いは未だに終結してはいなかった。勝利の余韻に浸るのは、ザックスの早計だった。

激しく水の跳ねる音と共に巨大な足音が再び部屋を揺らす。不意を突かれたザックスは慌てて音のした方向に目を遣った。そこには崩壊していったはずの《ドラゴンゾンビ》の躯が、泉から這い上がるうとする姿があった。すでに頭部はなく腹部には大穴が開き、身体の至る所から白煙をあげて腐臭を漂わせている。その姿のまま《ドラゴンゾンビ》は残った両足でよたよたと大地を踏みしめ、確実にザックスに近づいて行く。

「おいおい、もう打つ手はねえぞ」

《爆裂弾》を使い切り、《ミスリルセイバー》も手元にない。バツグの中にはまだ《鉄の剣》が残っているものはたして、《ドラゴンゾンビ》に通用するであろうか？ おまけにザックスの身体は限界を迎えた体力と全身を襲う激痛と目眩で指一本動かせぬ状態である。徐々に近づきつつあるその巨大な影に、背筋が震え、己の死を予感したその時だった。

部屋の中を一陣の風が駆け抜け、ザックスと《ドラゴンゾンビ》の間に一人の男が割って入った。

見覚えのある神官衣姿の男の背を見て、ザックスはひどく安堵感を覚えた。

飛び込んできた男　高神官ライアットは凄まじい音を立てて石造りの床を踏み込むと両手で持った《金剛槌》ダイヤ・メイスでモンスターの身体を天井に向かって撥ね飛ばした。その非常識ともいふべき破壊力にザックスは啞然とする。

天井には叩きつけられそのまま入り込んだ《ドラゴンゾンビ》の姿があった。

すかさずライアットは何事かを呟く。途端に彼の周囲の泉の水が宙に浮き、空中に巨大な水の球体が生まれた。

それをそのまま天井の軀に叩きつける。崩壊を加速させていく軀

を呑み込んだ水球は徐々に小さくなり始め、やがてそのまま空中で完全に消滅した。

あっさりとついでにしまった決着とそのライアットの實力にザックスは啞然とする。

息一つ乱さずに戦いを終えたライアットは周囲を見回した。倒れているザックスに視線を遣ると彼の元へと歩み寄り、見下ろしたまま傲然と言い放った。

「若い。冒険者である以上、無謀である事は仕方がない。だが、戦いの詰めが甘いのは愚かな証だ。今のお前に大切な物は守れんし、ましてや己の大切な物を預けることなど、とてもできんな」

傲慢とも思える物言いに言葉を失うザックスを無視して、ライアットはすたすたと歩き去って行く。代わって彼に近づいたのはマリナだった。

「あのおっさん、好き勝手言いやがって……」

「黙って下さい。傷を治します」

その言葉と共に治癒の魔法がかかけられ全身が仄かなぬもりにも包まれる。視界に移るマリナの顔色はひどく青ざめていた。どうやら自分の身体は相当重傷のようだという事を、ザックスはようやく理解した。

「大丈夫ですか……」

僅かに緊張したマリナの声が、徐々に遠くなっていく。

「ああ、とつても気持ちいいよ、できたらもう少し、このままですさせてくれ……イリア……」

暖かな懐かしい安らぎに包まれて意識を手放しながら、ザックスは無意識にここにいない者の名を呼んで眠りに落ちていった。

「おい、ザックス、神殿から荷物が届いたぞ」

昼食時、酒場に食事を取りに降りたザックスは、ガンツに呼ばれて包みを受け取った。不思議な事に周囲の者達から羨望の眼差しを受ける事はなかった。大抵の者たちが昨日ボロボロの恰好で帰還したザックスの姿を見て、同情の視線を送っていた。

（きっと奴は神殿のタブーに触れて、恐ろしい目に合わされたに違いない）

そんな憶測が叫ばれる中、彼にその問題について触れようとする者は皆無だった。当然、神殿から届いた荷物の内容について詮索しようとする者も又、皆無である。

自室に戻ったザックスは包みを開いて困惑した。中には先日の戦いの中で破損した装備品に代わる品と手紙が入っている。送り主の名を見てザックスは眉を顰め、その内容に悪寒が走った。

先日のクエストにおいて破損したザックス様の装備一式に代わる品を感謝の念と共にお贈りさせていただきます。

神聖護布の上衣

疾風金剛のひざ当て

バトルブーツ

以上3点、どうぞお納めくださいませ。

尚、先日ザックス様と過ごしたためくるめく熱く激しき一夜は、決して忘れられぬ事になりそうです。

私の粗末な胸に御身体を預け、こっそり感触をお楽しみになられていたザックス様が、私を庇われ、単身戦いに赴かれていったその凛々しきお姿と英雄譚は、今思い出しても大変心踊るものであり、私一人の胸の内に収めるにはあまりに大きすぎます。

故に、昨夜、イリアをはじめとする妹達を前にその詳細のあれこれを、しっかりと包み隠さずお話しさせていただきました。あしからず……。

追伸

装備品一式の見立てはイリアと私で行わせていただきました。お気に召していただければ幸いです。

「あの女性ひとは！！」

ザックスの悲鳴が自室に轟いた。

マリナの性格である。話を盛り上げるために様々に脚色して尾ひれをつけまくっているに違いない。

次に神殿に行った時に何と言われるのか……。ふと、愛らしい顔立ちの兎族の少女にピイツと顔をそむけられる光景を思い浮かべて、ザックスは自室の寝台の上でどっぴりと落ち込むのだった。

2011/07/27 初稿

14 ザックス、想いを背負う！

ガンツⅡハミツシユの酒場。

食事時を終えたこの店には、一人の夜を過ごすことに淋しさを感じる冒険者達がどこからともなく集まっては、その懐事情に応じた酒と共に語り合っている。

人間、獣人、妖精族……いかなる種族であろうと孤独に耐えられるものは少ない。たまたま訪れた流れの吟遊詩人の奏でる豎琴が、照明を僅かにおとした店内に優しく流れ、郷里の調べに涙する者もいる。

雑多な種族の人々が入り混じった店内には、穏やかないつもの夜の風景があった。

ふと一人の《剣士》が、建てつけの悪くなった扉を押し開いて店に入ってくる。装備品の金属音がこすれる音を僅かに立てながら、ギシギシと鳴る年季の入った階段を踏みしめて、そのまま一目散に二階席の一番奥、店内の全てが一望できるこの店の最上卓の前に立った。

「おっ、やっと、来たか」

すでに卓についていた3人の内の一人、ダントンが、現れた《剣士》にザックスに席を勧めた。麦酒を注文した彼は勧められた席に着くとそのまま店内を見渡した。階下の席から、時折わつとあがる歓声に耳を傾けながら、よく冷えたジョッキを手にすると先に来ていた3人と共に乾杯する。

「いい、クエストをクリアしてきたみたいだね」

卓上の火晶石の欠片が放つ炎がぼんやりと浮かぶ向こうで、エル

メラがザックスの顔を眺めて、声をかけた。

「それほどでもないさ」

「もはや一人前の冒険者つてところか」

「まだまだ、知らない事ばかりだな」

ダントンの冷やかに、ザックスは動じる様子もなく答えた。

卓の一番奥に座るウルガは3人のそんな様子を肴に、終始無言でお気に入り葡萄酒のボトルを煽っていた。首元の僅かに赤みがかつた青いクナ石が、炎の瞬きにちらちらと輝く。

「謙遜だな、ダンジョン史に名を残すなんて滅多なことじゃできないぜ」

「偶然さ。オレ一人じゃ絶対にできなかった。それに非情に徹しきることでもできなかった」

「非情に？　なんでそんなことしなければならなかったんだ？」

「へっ、それを試したんじゃないのかよ」

あの時の苦悩はなんだったんだとでもいうザックスに、ダントンはきょとんとした顔で答えた。

「さあ、何の事だ？　そんなことより、おもしろい奴らだったただらう」

心底楽しげにダントンが言う。どうやら第2の試練の真の意図は《ブルポンス》と行動を共にさせる事にあつたらしい。

「型破りすぎだろ。なんであいつらと組ませたんだ？」

ザックスの問いにダントンは直ぐに答えなかった。ジョッキの麦酒を煽ると一息つき、宙に視線を走らせながらぼつりと呟いた。

「お前にとって冒険とはどういうものなのかって事を、確認しておいて欲しかったのさ」

「どういう意味だ」

「年を重ね、上級者になっていくほどに冒険者つてのは、いろんな重荷を背負っていくことになる。」

お前さんが俺達と行動を共にする事で無用な重荷を抱えるようになって行く前に、あんな冒険のやり方もあるんだって事を知ってお

いてほしかったのさ。

ミッシヨンやクエストの中で得られる様々な感動の瞬間を、仲間達と共に分かち合う、そのやり方は人それぞれだ。俺達よりはるかに経験が少なくても、奴らはそんな時間の楽しい過ごし方を知っている数少ないパーティなのさ」

その言葉はなぜか重く響いた。ちっ、少し湿っぽくなっちまったなど、ダントンは階下に麦酒の注文を行った。

「ちよいと見せてもらってもいいかい」

エルメラの要求に応じて、ザックスはクナ石の首飾りを手渡した。

名前	ザックス				
マナLV	23				
体力	140	攻撃力	201	守備力	164
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	155
智力	153	技能	128		
特殊スキル	収奪 加速 全身強化 剛力 直感 剣撃術 斧撃術 一刀両断 乱れ斬り				
称号	中級冒険者				
職業	剣士				
敏捷	156				
魅力	87				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX
状態	呪い(詳細不明)				
備考	協会指定案件6 129号にて生還				
所持金	非資格者による閲覧の為表示不可				
武器	非資格者による閲覧の為表示不可				
防具	非資格者による閲覧の為表示不可				
その他	非資格者による閲覧の為表示不可				

ザックスの能力値に目を通したウルガとエルメラからクナ石を受け取ると、再びジョッキに口をつける。そこからは4人でただ雑談に耽るだけだった。

様々な冒険の中で得た貴重な体験や意外な裏話、耳寄りな情報、冒険者ならではの話題に興じて彼らは只静かに語り合っていた。

この時間が永遠に続けばよいのに……、雑談に興じる4人の中でザックスはふとそんな感慨にとらわれた。もしかしたらそこに座る誰もがそう考えていたのかもしれない。

「さて、俺はそろそろ行くぜ」

話題が途切れた頃になって、ダントンが腰を上げる。

「なんだい、付き合いが悪いね」

「へっ、明日は大事な日だからな、いまからしっかりハッスルしくんだよ。なんだったら姐さん、相手してくれるのかい？」

「肝心な時にへばんないようにしなよ！」

「ちっ、あっさりスルーかよ」

そんな軽口をたたき合うと、ダントンはザックスの肩をポンと一たたいて去って行った。陽気な口笛を吹きながら店を出ていくダントンを見送ったザックスは、再び卓の静寂の中に呑み込まれていた。

やがて、卓上の火晶石の欠片がポロリと二つに割れ炎が小さくなった時、ウルガが静かに口を開いた。

「始まりは俺達3人だった。名声を求めた俺、ラヴァンは力を、エルメラは富を求めた」

聞きなれぬ名が混じっているが、おそらくは彼らの昔話なのだろう。そうザックスは理解した。

「故郷は豊かだったが退屈だった。だが、そんなところでも俺には居場所がなかった。ラヴァンもエルメラも似たようなものだ。文無し同然である場所を抜け出し、時に盗みをしながら、そうやってこ

の街にたどりついて冒険者になった。あの頃は本当に怖いもの知らずだったな」

虚ろな炎の向こうにウルガの笑みがうかんだ。

「見習い冒険者になってこの酒場の扉をくぐったその日に、俺とラヴアンはこの席に座っていた奴らに喧嘩を売った。一番眺めが良かったんでな。当然、ボコボコにされて放り出された」

「あの時は面白かったねえ」

「その時にエルメラが言ったのさ。『3年だ、3年でその場所をあたし達のモノにして見せる』ってな」

「リーダーの面が気に入らなかつたんだよ。不細工な顔のくせにあたしに『自分の女になれ』なんて戯言をほざくからさ」

「おかげでずいぶんと無茶をする羽目になったな。あちらこちらで恨みも買った。だが、そんな奴らを叩きのめしてオレ達は力をつけていった」

「……………」

「一年後にオレ達はダントンとマトツシユの兄弟と知り合った。紆余曲折はあったがやつらが仲間になる事で、オレ達のパーティーは完成した」

「さらに一年後には俺達はこの店の2階席の一角に座る事をガントツに許された。周りにいた奴らには…………、特にこの席に座っていた奴らには脅威だったんだろうな」

「争ったのか？」

その問いにウルガは無言で首を振った。代わりにエルメラが答えた。

「奴らはいなくなつたんだよ」

「あの頃はよくあつた事さ。未踏破ダンジョンに入つてそのまま帰つてこない…………。奴らが何を求めたのかは知らないが、そうしてここからいなくなった。性格は悪かったが、それでも本物の冒険者ではあつたという事だな」

ぼつりと呟いてボトルを傾けた。

「3年目になってオレ達は宣言どおりこの場所を手に入れた。同時にこの都市の冒険者の中でオレ達の事を知らぬ者などいなくなった。上級冒険者になったオレ達は幾つものダンジョンを攻略していくうちに、何かが少しずつ変わり始めていた」

「何だ？ それは……」

「名声を求めてとびだしたはずの俺が、いつの間にか気付けば本物の冒険者になっていたのさ、おそろくな。未知の物を探求する……ただその楽しさのみに囚われ始めていたんだろう。エルメラ達も似たようなものさ。だが、一人だけ変わらなかつた奴もいた」

その言葉にエルメラが顔を伏せた。

「それからしばらくしていくつかの上級レベルダンジョンを踏破したオレ達はそれなりの資金を貯め、アドベクシユ海 《大円洋》にこぎ出した。目的は《大円洋》の真ん中にあると言われる《幻影島》だ」

「《幻影島》？」

「その島には天に通じる果てしなく高い塔がある、と言われている。実際のところは分からない。島の実在すら怪しいからな。それでもオレ達はそれを探し求めた。今思えばいぶん無茶をしていたものだと思つづく思つ」

「……………」

「航海の最中、資材も食糧も尽き始め、そろそろ一度都市に戻ろうかと考え始めた頃だった。オレ達はとある島に怪しげな建物を見つけた。この大陸のどんな国の建築様式とも異なる、とても不思議な建物、あえていうならば神殿なんだろうな」

「あたし達は一目で魅了されちまつたのさ……」

「そこには何があつたんだ？」

「たった一つのを除いて特別なものは何もなかつた。人が生活していた痕跡すらないその場所にあつたのは……《魔王》だった」
その言葉にザックスは啞然とする。

「《魔王》って、あの？」

「そうだ、この世界の子供ですら誰でも知っている世界の覇者にして、神への反抗者。四大魔王の一人、いや一つというべきものがそこにあった」

「《魔王》があった？」

「俺達は確かにそれを見たはずなのだが俺達の記憶に残っているのは、それがそこにあつたという事実だけだ。余りにもその圧倒的すぎる存在に俺達はそれがどんな形をしていたのかということすら認識できなかった。そして《魔王》の方も俺達の存在すら知覚していなかったはずだ。ただ一人を除いてな。」

そういうとウルガは目を閉じる。エルメラは顔を伏せたまま、何も言おうとしなかった。

「俺達の中でラヴァンだけが奴に挑んだ。そして敗れた。奴らの中にどんなやり取りがあつたかは分からない。だが、戦いに負けた奴は《魔王》についていく事を選んだ」

「そんな……」

「制止しようとした俺とダントンを振りほどき、はげしく食い下がったマトツシュを斬り捨てて、《魔王》の軍門に下つたラヴァンは、魔将となって俺達の前から姿を消した。そして、その時から俺達の時間は止まつたんだ」

「……………」

「あれから五年、再び訪れたその島にも手掛かりはなく、時折流れてくる《十二魔将》の顕現の噂もほとんど空振りに終わった。《十二魔将》に関して言えば、俺達のこの五年間の成果は0に近い。そして明日が五年の間でおそらく最初で最後のチャンスになるんだらう」

グラスの葡萄酒を飲み干したウルガは、静かにそれを脇に置くとザックスに向かって頭を下げた。首元の赤みがかつた青いクナ石がゆらゆらと揺れる。

「おい、ちよつと、何してんだよ」

慌てるザックスに構わず、ウルガは言葉を繋ぐ。

「ザックス、俺達は明日、奴と戦わねばならない。俺達は俺達自身の為に、あの日止まった時間を取り戻さなければならぬ。いや、取り戻したいんだ！　そして、そのために俺達はお前の力を必要としている。今のお前の力を考えれば、これは余りに無謀な挑戦だと言う事は十分に承知している。だが、それでもお前に頼みたい。力を貸してくれ。ザックス！　俺達に奴と相見える機会を与えて欲しい」

「あたしからも、頼むよ。この通りだ！」

自分達の全てをさらした上級冒険者の二人に頭を下げられたザックスは言葉を失った。

これが彼らが背負い続けてきた重荷なのだという事を理解する。そして、今ここにいないダントンも又、彼らと同じ想いを抱えているのだろう。二人の姿を見つめながらザックスは静かに彼らに告げた。

「顔を上げてくれ、二人とも。上級冒険者のあんた達が俺みたいないな駆け出しに頭を下げてちゃ、格好がつかないぜ、それに……」

僅かに言葉を切った。つい、先日に出会った《杯》の魔将と名乗った男の顔を思い出す。

「《十二魔将》の事は俺の問題でもあるんだ。俺はもう一度奴を見つけ出さなきゃならないんだ」

「奴？」

ザックスの言葉に顔を上げた二人が疑問を投げかける。そんな二人にザックスは声を潜めて語った。

「数日前に、とある場所で又会ったんだよ。俺に《呪い》らしきものをかけた《杯》を司る魔将ってやつにな」

その言葉に二人の顔色が変わる。

「お前、よく無事で……」

「さあ、ただ向こうも都合が悪かったみたいでな、おかげでとんでもない化物とやりあう羽目になったけど……」

「あんたって奴は……。つくづくあんたの悪運度って奴を、信じて

みたくなつたよ」

「とにかく、魔将の事に関してはこつちも当事者なんだし、協力させてもらうよ。俺自身の為にもな……」

そういうとザックスはジョッキを手にした。そんな彼の行為に僅かに笑みをうかべて、ウルガとエルメラもそれぞれのグラスを手にする。

「明日の勝利を誓って……」

チン、と透き通った音が辺りに響く。それは各々の決意の証だった。

世界の全てが揺らいでいた。否、揺らいでいる事こそ、その世界の正しい姿であると言える。

時間の存在せぬ揺らぎの一角から、確定された事象の集合する《現世》^{うつつよ}への門を開くと、彼　　そう呼ぶ事が正確であるか否かは不明であるが　　は、己の開いた門をくぐって顕現した。扉を通り抜けたその場所には、一人の男が立っていた。

「久しぶりという挨拶は我らには不似合いですね、《剣》の」

その言葉が終わらぬうちに、二人の間に閃光が走り、現れた男の胴が二つに割れた。だが、直ぐに元通りになってゆく様子に動じる事もなく、二人は互いに言葉をかわす。

「俺をわざわざ呼び出しておきながら、自分は《幻像》を送ってくるとはどういう見だ、《杯》の」

「やれやれ、魔将の中で最も短気な貴方にかかる私も形無しですね……」

「この身を魔将と化してまだ日が浅いからと、俺をなめているのか、《杯》の」

その言葉に《杯》の魔将は肩をすくめた。

「己が身を魔将と化したその時から、我らは時の流れの外側に身を置くものであるはず。日の浅さなど些細なことであり、我々の本質はその執着の度合いと己を存在させうる《概念》によって左右されるはず、お忘れか？ 《剣》の」

その言葉に舌打ちをみせる《剣》の魔将の様子を眺めながら《杯》の魔将は言葉を続けた。

「今の私にはこの姿での現界が精一杯でしてね。できれば機嫌を直していただけるとありがたいのですが……」

「貴様が《現世》^{うつしよ}に何やらちよつかいを掛けているというのはどうやら本当らしいな。まあいい、ところで俺に何の用だ」

「やれやれ、そんな噂が、もう、たっていたのですか、お恥ずかしい限りです」

はぐらかすようなその言葉に《剣》の魔将は《杯》の魔将を睨みつける。だが、その視線を軽く受け流して《杯》の魔将は言葉を続けた。

「直に《揺らぎの晩》が参ります。そしてこの場所が数ある無限回廊の一角に呑み込まれると言う事は御存知でしょう」

「ああ」

「実はこの場所の守護を貴方をお願いしたいのです」

「ここは貴様の領域ではなかったのか？」

「まあ、そうなのですが、今の私はこういう身体ですので守護者としての力を満足に振るう事ができないのですよ。故に暇そうなおっと失礼、戦意豊富なれどその効果的な使い道にめぐまれない貴方に、この場所の守護を一晩だけお願いしたいのです」

《杯》の魔将を睨みつけながら《剣》の魔将は黙って聞いている。

「何、たった一晩だけ、月が夜空に満ちてマナの力が強まり、この《狭間の世界》そのものが揺らいでしまっている間だけ、でよいのです。おそらく滅多な事は起きないでしょうが、それでも万が一という事もあります。《現世》^{うつしよ}の者が《揺らぎの世界》に迷いこめば、

いかなる不測の事態がおきるか分かりませんが、それを止めて頂きたいのです」

「らしくない言葉だな。《不測》や《混乱》といった言葉を何よりも好む貴様が安定を望むなどは……。その言葉を額面通りに受け取るものが魔将達の間にいると思っっているのか？」

「なあに、今の私は《不測》や《混乱》を求め過ぎたあまり、自分の首を締めすぎてしまい、その後始末に追われているのですよ。まったくお恥ずかしい限りです」

「どうだかな、まあ、いいだろう。望み通り世界の揺らぐ間だけここを守護してやろう」

「有り難い、さすがは《剣》の。頑固な変人集団である《十二魔将》の中で唯一話の分かる……」

言葉が終わることなく、再び胸が二つに割れた。

「失せる、貴様の世辞などいらん。言葉の裏側に何が潜んでいるか気味が悪いわ」

「くっくっ……ではよろしくお願いいたします。《剣》の」

言葉と同時に《杯》の魔将は己の姿をかき消していく。その姿を見送りながら《剣》の魔将と呼ばれた男は忌々しそくに舌打ちした。

15 ザックス、導く！

静かな夜だった。否、静かすぎる夜だった。

草も木も虫もあらゆるものが、眠りの世界へと誘われる……不気味ともいえる静寂に満ちた夜の空には『蒼月』^{そうげつ}が青々とした輝きに満ちていた。

遠い神話の時代から夜空に浮かぶ青い『蒼月』^{そうげつ}には、様々な言い伝えが残されている。

曰く、そこにはこの世界とは違った人々が住んでいる、と……。

曰く、そこは竜と竜人達の故郷であると……。

曰く、世界を覇した『魔王』達が居を構え、日夜神々と戦い続けていると……。

子供達の空想を掻きたてる物語の題材として、吟遊詩人たちに語り継がれてきたその内容に真実がいかほど含まれているかは分からない。

だが、マナの扱いに長けた者達ならば、この夜の『蒼月』^{そうげつ}が世界に大きすぎる影響を与えるであろうことに気づき、多くの者が己が家に静かに身を潜め、何事も起きぬ事を祈りながら、普段通りの朝の訪れを待つのである。

上級レベルダンジョン『幻影の迷宮』の入口付近にあったのは5人の姿だった。ウルガ、エルメラ、ダントンの3人とその協力者であるザックス、そして最後の一人は創世神殿の高神官ライアットの姿だった。

「若いの、足を引つ張るでないぞ」

「おっさん、あんたの方こそ、今日は出し惜しみしてんじゃねえぞ。体力に不安があるんだったら、そろそろ引退を考えるんだな」

先日の《ドラゴンゾンビ》との戦闘の際の乱入は、あまりにもタイミングが良すぎた。おそらく今日の為に、ザックスの力量を影から計っていたのだろう、とおおよその察しがついた。

「おい、ザックス、お前、ライアットさんと知り合いなのか？」

「ちょっとした縁でな、でも知り合いなんかじゃねえ。多分、天敵だ！」

ザックスの勘は、なぜかそう告げていた。

互いに睨み合う二人の姿に、ウルガ達は顔を見合わせる。

「そんなことより、なんでこのおっさんがここにいるんだ」

「ガンツの紹介でな、今までもライアットさんには上級ダンジョン攻略時に、力を借りてきたんだ。何か気になるのか？」

先日の《トロイヤ》での一件はどうやらガンツも何らかの形で関わっているらしい。

「そりゃまあ、実力不足とは思えねえけど、それでも相手は魔将なんだろ……。いいのか？」

魔将との戦いは、ダンジョンの踏破などとは全くレベルの違う問題である。少なくともザックスはそう考えていた。死ぬことすら考えられるその戦闘に協力を申し出るなど正気の沙汰ではない。ザックスの問いに答えたのはダントンだった。

「まあ、創世神殿に仕える神官つてのは、俺達とどうも頭の構造が違っらしくってな。己の命よりも世界の秩序が大切な場合つてのがあるらしい。詳しい事は俺も知らんが、魔将つてのは秩序を乱す者と考えられているそうだ」

どうやら、ここは一時休戦すべきであるらしい。何故二人の間がそういう風になってしまったのかは、当のザックスにも理解できぬ問題であるが……。

「へマをするなよ、若いの」

「おっさんこそ、気いつけな！」

その言葉で休戦の意思表示を互いに確認した。二人の様子に顔を見合わせたウルガ達だったが、やがて最後の確認事項に入った。

「手順を確認する。俺達はこれから《跳躍の指輪》を使って、このダンジョンの第49層にあるクナ石の印の場所にまで転移する。見晴らしのいい場所ではあるが、遭遇戦の危険もある。転移と同時に周囲の状況は必ず確認しろ、特に頭上は要注意だ！」

ウルガが一堂を見渡した。最後にザックスに向かって言い渡す。

「特にザックス、お前は絶対に手を出すな。ここらはA級からAA級の周回モンスターがごろごろしている場所だ。逃げ回って身の安全を第一に考える。お前の仕事は闘う事じゃない、ということを忘れるなよ」

「分かってるよ！」

「周囲の安全を確保すると同時にリーダーの交代。ザックスは俺から《跳躍の指輪》を受け取る事とクナ石のマーキングを忘れるな。完了と同時に進軍開始だ。第50層の扉にたどりつく事を最優先しろ」

ザックス以外の4人の身体からは、ダンジョン攻略に臨む際の冒険者が放つ特有のピリピリした空気が漂っている。『錬金の迷宮』の際にはまだ彼らが本気ではなかったという事を改めて思い知る。

「扉に辿りついてからが、ザックス、お前の出番だ。開けると同時に現れる無限回廊の幻影の中から只一つを選びとって、俺達を導け」

「気楽にやるんだよ」

「まあ、こればかりは運任せだからな」

「奴と遭遇したら隙を見てお前はパーティを離脱。タイミングは俺の指示を待て。離脱と同時に《跳躍の指輪》を使って迷宮を脱出。夜明けと共に《跳躍の指輪》を使って49層に再突入し、俺達を回収するんだ」

これがザックスがウルガ達に示した一手だった。ザックスを置き去りにして自分達だけ逃げ出した『若様』達のやり方を逆手に使い、

自身の身を守りながらウルガ達の目的を果たさせる事を可能としたのである。

「再突入でヘマするんじゃないよ」

「分かってるよ」

「再突入の際は必ず危険を伴う。俺達の姿がなかったら直ぐに離脱するんだ、いいな！」

「了解」

「以上だ。聞きたい事はないか？」

全員が沈黙で返答する。

「行くぞ。俺達はここで必ず奴とのケリをつける」

言葉と同時に《跳躍の指輪》が発動する。跳躍時の奇妙な浮遊感に身をまかせながら、ザックスはごくりと唾を飲み込んだ。

「妙だね」

周囲を警戒しながら、エルメラが首をかしげた。

「うむ、前回はしつこいほどに遭遇した周回モンスターに、一匹も出会わんとは……」

ザックスの背後に立つライアットが同意する。第49層の込み入った通路を進みながら、パーティの面々は首をかしげていた。

星詠みの託宣を受けた直後、下見がてらにこのダンジョンを踏破した4人によれば、モンスターとの遭遇率は半端なものではなかったらしい。ウルガ達ですら途中脱出を含めて数日を掛けて踏破したというのだから、恐ろしいものである。冒険者に脅威を与える様々なトラップに細心の注意を払いながら歩くザックスを真ん中に、一同はモンスターの気配の全くしない通路を、目的地目掛けてひたすらに歩み続けていた。

「あれだ」

先頭を歩いていたウルガが立ち止まる。最下層である第50層へ

と続く扉が、重々しく立ちはだかり行く手を塞ぐ。

「大丈夫か、ザックス。顔色が悪いぞ」

ダントンが中央に立つザックスを気遣う。

「ああ、大丈夫だ」

そうは言うものの背筋にはしる悪寒は並々ならぬものがある。

強烈な波動となつて渦巻くマナの様子が、頑強な作りの扉を通して感じられる。

これが上級レベルダンジョンなのか？　今まで踏破してきた中級レベルのそれと比べて圧倒的に異なるその迫力に呑み込まれそうになる。

「少し休むかい」

ある程度事情の分かるエルメラの心配そうな言葉に、ザックスは返答する。

「いや、行こう。待っていてもこの波動が弱まる訳じゃないんだから……」

言葉と共に扉に手を掛ける。5人のメンバー全員が力を合わせて扉を押し開けた。そして、その先の空間にザックスは目を奪われた。普段ならば、大広間につながる通路がぼつかりと口を広げている。その場所には、幾つもの幻影が同時に現れては消えていく。

それが密度の濃いマナによっておこされる現象である事に気付いたものの、無数に現れては消えて行く事象は手のつけようがない。右に、左に、上に、下に。自身の平衡感覚が狂いそうになるのを必死で押しとどめながら、ザックスは足もとの地面に意識を集中する。幾百、幾千、幾万にも展開する世界の中からただ一つの正解を選びださねばならない。それは不可能としかいいようがなかった。

思わず後ずさつたザックスの背を、ウルガが押さえた。

「前もこうだったのか？」

「ああ、あの時はさほど意識をしなかったのだがな、改めて見ると凄まじいものだな。一度引き返すか？」

その言葉に途方に暮れる。仮に引き返したところでいい案が浮か

ぶ訳でもなく、やみくもに前に進んでも正解にたどりつけそうには思えない。いかに悪運度MAXを誇るといつても文字通り運任せにする事は、正しい選択とは思えなかった。

「仕方がないな……」

ぼつりと呟きながらライアットが《袋》^{バック}から何かを取り出した。

「それにマナを込めてみる……」

若干嫌そうな顔をしながら渡されたのは《護符》だった。ライアットの態度に釈然としないものを感じながら、ザックスは言われたとおり、左手に《護符》をのせてマナを込める。マナを込められた《護符》は瞬時に激しく燃え上がった。

「えっ？」

炎の中から護符の中におさめられていた幾筋もの銀色の糸が柔らかく宙に浮遊し、ザックスの左手に絡みつく。その銀糸から懐かしく温かなマナの波動を感じた。

「おっさん、これってもしかして」

驚くザックスにそっぽを向いて、ライアットはぶつぶつと呟いている。

「まったく、なんだってこんな馬の骨の為に、あの娘の……」

その言葉に確信する。これはイリアの髪の毛である、と。

手にふわふわと絡みつく彼女の髪にこもったマナが周囲の混沌としたマナを浄化し、ザックスの感覚を研ぎ澄ませていく。銀糸に導かれるまま、再び前に一歩歩み出たザックスは静かに目を閉じた。

途端に幾つもの凶悪なマナが襲い掛かるようにザックスの感覚を刺激した。

それらはおそらくこの無限回廊の先に手ぐすねを引いて待ち構えている凶悪なボスモンスター達のものであろう。これまでに出会った事のない強力なマナの波動にうるたえながらも、ザックスはそれらが自分達の求めるものではないという事を直感した。

「違う、俺達の行くべき場所はこいつらのところじゃない。もっと別のところだ」

押し寄せる圧倒的なマナをイリアの銀系による浄化に任せながら、
一歩ずつ先へと歩を進める。

「お、おい、ザックス」

慌てて4人がついてくる様子をその背で感じながら、目を閉じた
ままのザックスはその研ぎ澄まされた感覚でさらに気配を探ってい
く。

不意にザックスの感覚の中に違和感が生じた。無数の暴力的なマ
ナの波動の中にちらほらと感じられる『無』の事象。似たようなも
のは他にも幾つもあるが、そこだけは他の何かと異なっている。立
ち止まったザックスはその『無』のさらに奥へと意識を集中する。

……と、彼はその違和感の正体に気付く。

それは『無』ではなく『静』なのだ……。一見『無』としか思
えぬほどに圧倒的な『静』の中で何かが息づいている。

(ここだ！)

ザックスの勘がそう告げた。確信ではなくあくまでも直感。後は
運任せである。

目を開いた彼は振り返ると4人の仲間達にはつきりと告げた。

「行こう、ここが俺達の目的地だ」

言葉と同時に周囲の景色が暗転する。ザックスの肩や背中に触れ
ていた彼の仲間たちも又、転移していく世界へと呑み込まれていく。

そして、僅かな浮遊感の後、揺らぎ終わったその場所に現れた
5人の眼前に一人の男が立っていた。

周囲に広がる景色は室内のそれではなかった。

岩塊がぼつりぼつりとあるものの、足元には砂浜が広がり、少し
離れた場所には海が見える。だが、水平線の彼方に目をやれば、そ
の景色が揺らいでいる事が分かる。隔絶された異空間、それが適切

な表現であろう。

その場所の主とも思える男はただ静かにそこに立っていた。整った顔立ちに涼しげな目もとのその男は、すらりとした長身に漆黒の騎士甲冑を纏い、左腰には見慣れぬ形の剣を釣っている

無言で近づいていく5人の姿。やがて彼らは足を止め、静かに立ち続ける男と対峙した。

「ラヴァン……」

しばらくの沈黙の後にエルメラが声をかけた。幾つもの思いが込められた彼女の呼びかけに男が答えた。

「その名で呼ばれるのは久しぶりだ。エルメラ、ウルガ、ダントン……知らぬ顔も混じっているようだが、少し変わったか……」

「5年だ。あれから俺達は5年の歳月を過ごしてきたんだ。お前は変わらないな、ラヴァン……」

「5年……。もうそんなになるのか。時の流れは早いもの……。いや、そこから外れた俺には、もはや関わりない事……」

「ふざけないで、あんたにとって私達はもう関係のないものだっていうの？」

「そうだ、俺はもはや魔将となった身。《現世》^{うつしよ}の些事など詮無きこと……」

その言葉にダントンが舌打ちをする。

「ふざけるな、てめえ、マトツシュを殺したこともなかった事にしようってのか！」

「いったはずだ、ダントン。些事であると……」

「ラヴァン！」

拳を震わすダントンの傍でウルガが叫んだ。

「お前、人の心を投げ捨て、化物と成り果てたのか……」

「それが、今の俺そのものだ。《剣》を司る魔将エイルス、それが今の俺の名だ」

「5年間、俺達はお前を追い続けてきた。その間、お前に執着する事で俺達は自分達の時間が止まっている、そう思っていた」

「相変わらずだな、ウルガ。お前が本当に執着していたのは俺ではないだろう。俺を追い続ける事でお前は自分の愚かさと同じ向き合っていただけだ」

その言葉にウルガが絶句する。ラヴァンは続けた。

「冒険を重ねる事で、お前達は皆少しずつ変わっていった。俺以外を除いてな。俺の居場所はもうお前達のところにはなくなっていた、とつくにな……」

「ラヴァン、あたしは、あんたを……」

「やめる、エルメラ。愛だの恋だのというのは、所詮ひと時のまやかしかだ。お前も又、俺を置いて変わっていった者達の一人だ」

「……………」

「俺達は道を分かち、こうなる運命だった。そして分かれた運命は決して交わる事はない」

「もう何を言っても無駄だということか」

「そうだ」

「分かった」

そういうとウルガは自身の《袋》^{バッグ}から携帯ボトルを取り出し、それをダントンに渡した。中身を一口口に含んだダントンはそれをエルメラに、そして同様にしてエルメラはウルガにそれを返した。返ってきたボトルの中身を一口含んだウルガは、それをラヴァンに放り投げる。

「ノキル酒か……」

「そうだ、5年前、俺達はそれを飲むことなく別れた。それを今ここで果たそう」

「いいだろう」

ノキル酒を口にしたラヴァンは、そのボトルを宙に放り投げるとやおら腰の《大太刀》を引き抜き、一閃した。二つに割られたボトルは瞬時に炎に包まれ中空で消失した。ラヴァンの剣さばきが全く見えなかったザックスは、自身がこの場にそぐわないものである事を自覚する。

怪しい輝きを放つ刀身を右手にゆらりと立つラヴァンは眼前に立つ五人に向かつて宣言する。

「我こそは《剣》を司る魔将エイルス。ここは我が守護する場所。速やかに立ち去るならばよし。かなわぬならば我が剣の贅としてくれよう」

その言葉を聞いたウルガも又、背の《大剣》を引き抜いた。

「魔将エイルスよ。最後に一つ聞きたい。貴様は《杯》の魔将の企てに加担しているのか？」

その問いにエイルスは僅かに戸惑いを見せたものの、速やかに返答をよこす。

「知らぬな。確かにこの身がこの地にあるのは彼の者の企てであるが、それ以上は関わりなきこと。彼の者が《現世》^{うつしよ}に何らかの企てを行えども、その真意などに興味はないな」

「そうか、返答、感謝する」

《大剣》を引き抜いたウルガがザックスの正面に立ち、彼に命じた。「行け、ザックス、お前の役目はここまでだ。ここからはお前に関わりない世界。奴の強さが理解できるくらいには、お前も成長しているはずだ」

「ウルガ……」

背中越しに僅かに振り返ったウルガが、その口元に小さく笑みを浮かべた。

「世話になったな、お前はお前の目的を果たせ。さらばだ……」

言葉と共に魔将に向かつて歩みを進める。さらに3人がそれに続く。無意識に後を追おうとしてザックスは立ち止まった。

それは正しい選択ではない。自身はウルガ達に与えられた最後の役目をまだ果たしていないのだ。その想いがザックスにその場に残る事を選択させた。

「帰ってこいよ、絶対に……」

叫びながら《跳躍の指輪》にマナを込める。そしてザックスは、ウルガ達のパーティを離脱した。

2
0
1
1
/
0
7
/
2
9
初稿

16 ザックス、決着する！

戦いの狼煙を上げたのはエルメラだった。

最大級の《極大火炎連弾》を息つく間もなく連続で打ち込み、足元の砂地ごと焦土と化した。

火炎弾の余波が収まらぬその場所に、ライアットの攻撃補助魔法で自身の身体を強化したウルガが大剣を手に斬り込んだ。

特殊スキル《爆力》で大幅に強化されたその一閃を、灼熱の地獄を中心部で耐えきったエイルスが其の《大太刀》で難なく受け止める。すぐさま激しい剣撃が始まり、甲高い金属音が周囲に鳴り響く。ウルガの《大剣》が上段から轟音と共に大地を叩き割り、それかわしたエイルスに向かって輝く刀身がさらに地から跳ね上がる。

その軌道を完全に見切ったエイルスは、身をひるがえすと同時に《大太刀》を中空に走らせ幾筋もの閃光を同時に生む。《武装強化》ライトメイルによって輝くウルガの《軽装鎧》がそれらを弾き飛ばし《大剣》にマナを込めたウルガの強大な《火炎斬撃》が気合と共に放たれ、エイルスを再び襲う。宙返りで鮮やかにかわしながら距離をとって着地したエイルスの足元の影からダントンが現れ、《双剣》で《騎士甲冑》に覆われたエイルスの首を背後から狙った。

前に倒れこむように転がりながら、《大太刀》でダントンを一閃したエイルスだったが、攻撃は互いに不発に終わり、エルメラが再び放った《火炎弾》によって、両者の距離が再び大きく広がった。

息つく間もない攻防に呼吸を乱す事もなく、両者が再び対峙する。《大太刀》を手に掲げて無造作にたたずむエイルスに、じわじわとダントンとウルガが距離を詰め、後方からエルメラとライアットがその魔法で援護する。そんな図式が戦場を支配し始めた。

それから数度、同じような展開が繰り返されるも、両者に決定打は生まれない。戦局が膠着するかと思われた最中、エイルスはウルガ達に告げた。

「こんなものか……」

その言葉には明らかに失望の色が見えた。

「5年とたったな。それだけの時間があつてお前たちの力は何一つ変わらなかったのか……。無様だな」

「なんだと！」

「やはり人である事を捨てて正解だったようだ。これ以上闘つてもどうやら得られる物はないらしいな、かつての邦輩のよしみだ。直ぐに楽にしてやろう」

言葉と共に全身にマナを込める。途端にエイルスの周囲の空気が代わり、辺りに殺気が満ち溢れる。

「《剣》の魔将エイルスの力の一端、とくと味わうがよい」

《大太刀》の刃が黒く染まってゆく。闇術の効果を与えられた魔法剣からは闇が溢れだし周囲の空間を侵食していく。黒い炎をまとった刀身を大上段に振りかざしたエイルスは気合と共にウルガ達に向かつて一閃する。

「いかん、集まれ！」

ライアットの言葉と同時に4人の周囲に光の結界が生まれる。刀身から生み出された闇の炎が空間を走り、生み出された光の結界ごと4人を呑み込んで、周囲もろとも漆黒の炎で焼き尽くした。

「他愛もない……」

闇が消え去った後には、倒れた4人の姿が残された。ライアットの結界は闇の浸食を防ぎきったものの、その衝撃までは殺せなかったらしい。

エイルスが見下ろすその先で、最初に動き出したのはウルガだった。4人の先頭に立ってその大柄な体躯で真正面から衝撃を受け止めたウルガは、全身を暴れまわるダメージによって、自身の大剣を支えに膝立ちしているのが精一杯らしい。

「これが……、魔将の本気が……」

「バカな事を言うな、今のはほんの少し力を入れた程度。本気ならば貴様らなどとつくに消し炭になっているはずだ」

「成程、不憫だな……」

「それはお前の事が……」

「いや、未来ある冒険者のことだ。奴の前途多難さに少しばかり、同情しているのさ……」

「この期に及んで他人の心配とはずいぶんと余裕だな、ところで回復はまだなのか？ 次はもう少し本気で行きたいのだが……」

先ほどからウルガ達の周囲が明るく輝き、ライアットが回復の魔法を使っている事をエイルスはわざと見逃していた。

「その傲慢、高くつくぞ」

十分に回復したウルガが立ちあがる。後の3人も同時に立ちあがった。ふと、ウルガはここにいらないもう一人の協力者の顔を思い浮かべた。

（これが終わったら奴の未来に手を貸したいと思ったが、どうやらそれは無理らしいな。それでもせめて……、魔将の一人ぐらいは片づけて希望をみせてやらんと……）

小さな笑みを浮かべて眼前の《大剣》を引き抜いた。

「たっぷりと後悔しろ！ 《剣》の魔将よ」

言葉と同時に走り出す。その余りにも無防備な姿にエイルスは嘲笑した。

「バカが……、愚かさと共に死ぬがいい」

《大太刀》を構えて迎えうつ。だが迫りくるウルガの容貌に異変が生じた。

体内から溢れるようなマナの輝きが生まれ、大柄な体躯がさらに膨張する。頭が、腕が、足が、人肌の色からさらに赤く変色していき、やがて異形のものとなる。

「竜戦士化……だと！」

長身のエイルスをさらに頭2つ分ほど上回る背丈に、しなやかで

強靱な体躯の一人の竜戦士が現れた。その左足が大地を力強く踏み込んだ瞬間、竜戦士の姿が消え、まるで瞬間移動したかのようにエイルスの眼前に現れた。

「忘れたのか、俺が、なぜ故郷の奴らに受け入れられなかったのかという事を……」

言葉と同時に竜戦士と化したウルガが左拳でエイルスを殴りつけた。その拳をまともに受けたエイルスは砂地をゴムまりのように転がって行く。さらに転がった先に《瞬歩》で移動して先回りしたウルガは、転がってきたエイルスの身体をその強靱な右足で宙に高く蹴り飛ばした。なすすべもなく宙に飛んだエイルスの身体を、さらに《瞬歩》で先回りしてその《大剣》を叩きつけ、大地に叩き落とす。盛大な地響きと砂しぶきを上げて地面につつこんだエイルスの身体に、エルメラの《極大火炎連弾》が襲い掛かる。

紅蓮の炎の中に黒い影が踊り、あたりに大地が溶解する異臭が立ち込める。

「やったか！」

「いえ、駄目よ！　こんなじゃあいつは倒れない……」

エルメラの言葉通りだった。荒れ狂う炎がようやくおさまるとその場所には黒い球体が残される。徐々にそれが溶けるように薄くなつて消えていったその中であつたのは、ほとんど無傷のエイルスの姿だった。

「今のはかなり危なかったな……」

身体そのものに傷はないものの頑強な《騎士甲冑》は見る影もなく破碎し、もはや鎧としての機能は果たせない。留め金を外して甲冑を捨てたエイルスは鍛え上げられた上半身をむき出しにしたまま《大太刀》を握った。傍らに立つウルガの姿に目をやるとぼつりと呟いた。

「竜戦士化か……。ウルガ、それが、お前の切り札か……」

「そつだ、これでお前にもう勝ち目はない」

「笑わせてくれるな、竜人族が最強の戦士であるというのは、あく

までも《現世》^{つつしよ}の世界の常識だ。まあ、いい、お前のその力、試させてもらおう」

言葉と同時にエイルスの姿が消える。次の瞬間、ウルガの前に現れたエイルスの《大太刀》の一撃をウルガが受け止める。

「簡単に倒れてくれるなよ」

言葉と同時に閃光が走る。エイルスの剣撃が幾筋もの閃光となつてウルガを襲う。その閃光をウルガは捌き、かわし、いなしながら、隙を見て強烈な一撃を放つ。空気が震え、互いの剣撃が衝撃波となつて周囲の岩を砕く。すさまじい破壊の渦に飲み込まれぬよう3人はそれを遠巻きにして隙を窺う。

「やるではないか、ならばこれはどうだ」

激しい剣嵐の渦の中で不敵に笑みを浮かべるエイルスの体躯が、徐々に黒く染まっていく。その整った顔立ちが、一切の無駄のない鍛え上げられた鋼の肉体が、徐々に変貌し、異形の者と化した。

ひととき高い金属音が響き合う事で剣嵐が収まった中に現れたのは、鏢迫り合う竜戦士化したウルガと魔物と化したエイルスだった。「それがお前の本性か……」

ウルガの言葉に魔物は笑みを浮かべて答える。その僅かな隙をついてウルガが叫んだ。

「やれ！ エルメラ！」

言葉と同時に二人の周囲が熱化する。《極灼熱波呪文》 人がマナの力によつて起こせる最大威力の熱が二人を襲った。

「ちっ、もろともか……」

鏢迫り合いで動きのとれぬエイルスはウルガもろとも灼熱に焼き尽くされる。身体をまともに焼き尽くされてゆくエイルスに対して、自身の身体の周囲をライアットの結界の膜で覆ったウルガは、咆哮を放つてエイルスを押し潰す。瞬間、周囲に凶悪な殺気が振りまかれた。

灼熱の効果が徐々にとぎれたその先にあつたのは、自身の左腕を剣と化したエイルスの姿と、それをまともに胸板に受けたウルガの

姿だった。

「ウルガ！」

エルメラの絶叫が響く。己の左腕で旧知の身体を貫いたまま、エイルスは告げた。

「狙いはよかった。だが、貴様の誤算は、わが本性の顕現の本質を見誤ったことだ」

だが、胸板に刃を受けながらもウルガは笑みを浮かべた。

「お前の……、敗因は……、その……傲慢だ」

言葉と同時に傷口を絞め、左腕でエイルスの右腕を掴んだ。

「終わりだ！」

右腕の《大剣》を叩きつける。だが、その刃がエイルスの身体に触れる事はなかった。

「魔将となるとな、こんなこともできるのさ」

エイルスの背中からさらに刃と化した2本の腕が生まれ、それを頭上で交差させて振りおろされた《大剣》をしっかりと受け止めていた。だが、ウルガの笑みは止まらない。

「これでお前は、もう動けん、やれ！ ダントン！」

瞬間、足元の影からダントンが現れ、エイルスの背中をとった。

手にした《双剣》を捨て、隠し持った《小剣》の柄を両手でつかんでエイルスに襲い掛かる。

「マトツシュの仇だ、手前の捨てた物の重さを思い知れ！」

叫びと共に渾身の力でその背を襲う。そして……、血しぶきが焼け焦げた大地に激しく散った。

「ダントン！」

周囲の誰もが目を疑う。

倒れ伏したのはダントンの方だった。エイルス達の足元に奇妙な輝きを放つ《小剣》が転がり、斬り上げられた反動でダントンの身体は二人から離れた場所に音を立てて叩きつけられる。

「切り札は常に二段構え、それが俺達の流儀だったな……」

自身の左足を刃化して跳ね上げた勢いでダントンを斬り捨てた形

のまま、エイルスは呟いた。再び足を元の形に戻すと大地をしつかりと踏みしめる。己の足元に転がる《小剣》に目をやり、わずかに眉を潜める。

「呪具か……、効果は知らんが、貴様らの事だ。相当、危ないものを持ちこんだのだろうな……」

言葉と同時にゆっくりと足を持ちあげる。両腕を逆に封じられた事で、ウルガにもなすすべはない。

「や、やめろ」

自身の血に染まった大地を必死に這いずりながら、ダントンが叫ぶ。

「捨てた物の重さか……。そんなものにしがみついているから、いつまでも惨めさを繰り返すのだ」

ウルガ達の最後の希望を無残に砕くべく、言葉と同時に足を踏み下ろす。地響きと共に大地が揺れた。

瞬間、周囲に風が舞った。

「何だと！」

エイルスが声を上げる。踏み下ろした足の下で呪具を破壊した手ごたえはなかった。代わりに何者かの影が勢いよく駆け抜け、それを拾い上げたことを察知する。

「何者だ！」

視線の先には見知らぬ、まだ駆け出しの冒険者といった風体の若い男の姿があった。僅かに離れた場所で立ち止まった彼は、両の手で怪しく輝く《小剣》を弄びながら、堂々と『名乗り』を上げた。

「光速の超剣士、ザックス、参上！」

「ザックス！」

4人が驚きの声を上げる。

「バカヤロウ、なぜ戻ってきた！」

互いの動きを封じあったままでウルガが叫ぶ。怪しい輝きを秘め

た《小剣》を手にしたザックスに、ダントンが息も絶え絶えに告げた。

「……ザックス、そいつを俺によこして、お前は逃げる！」

「バカ言ってるじゃねえ、これでも飲んでしばらく安静にしてる！」
《袋^{バック}》から高級薬液水を取り出して、ダントンに放り投げる。

「口移しは勘弁だぜ……」

「バカ、調子に乗ってるじゃないよ、あんたの敵う相手じゃないんだ！」

そのままこちらにやってきそうな剣幕で、エルメラが叫ぶ。

「……んな事は分かってる。」

でもな、帰ってこない仲間をただ待つてるなんて寝覚めの悪い事、まっぴらだ。

今、このパーティーのリーダーは俺だ！ こいつを倒して全員で生きて帰る！ リーダーの命令には絶対に従え！」

危ない暴君のようなザックスの言葉に周囲が唾然とする中、彼はさらに続けた。

「エルメラ、《火炎弾》で牽制を。ウルガ、そのおっかない化物を絶対に動かすなよ。おっさんは俺に補助魔法を。出し惜しみはなしだぜ」

「バカ、止め……」

言いかけたダントンの視線の先には《閃光弾》を手にしたザックスの姿があった。

「行くぜ、一発勝負だ！」

ザックスの手から《閃光弾》が放り投げられる。眩しい輝きがウルガとエイルスを包む。

「どうなっても知らないよ」

《閃光弾》の輝きの中にエルメラが《極大火炎連弾》を打ち込んだ。眩しい輝きが収まると同時に、ザックスが二人の周囲を走り回り、攪乱する。ライアットの強化魔法によって《駿足》《倍力》《全身強化》の効果を得たザックスは、エイルスの隙を窺う。

狙いは只一点、その心臓のみ。

身動きのとれぬ二人の周囲を走り回り、《火炎弾》の熱が冷めたその一瞬の機会を冷静に待つ。

「下らぬ、小細工を弄しおって、侮られたものよ……」

エイルスは《心眼》を使い、冷静に気配を探る。いかに優秀な術者によって強化されようとも、所詮は駆け出しの冒険者。地力の差が違いすぎるのは明白である。

ザックスが襲い掛かってくる気配を冷静に捉えたエイルスは、再び左足を刃に変え、カウンターの一閃を蹴りあげる。

「同じ手を食うかよ！」

瞬時に間合いを変え、エイルスの右背部に回り込んだザックスが、背後から心臓を目掛けて、《小剣》を突き出した。

「もう、右足を変えても間に合わねえ！」

《小剣》の刃が異形の魔物の背を襲う。だが圧倒的な二人の実力差は、冒険者の常識をはるかに超えていた。

刃化した左足をそのまま下ろす勢いで右足を跳ね上げたエイルスの後ろ蹴りが、ザックスの鳩尾に決まり、ザックスはそのままたらを踏んでその場に崩れた。

「ザコが、手間を掛けさせおって……」

振り上げた右足を再び刃と化して、その場に崩れ落ちたザックスに向かって勢いよく振り下ろす。

「逃げる、ザックス！」

周囲の叫びも間に合わず、無慈悲な一撃が地に伏したザックスの身体に振り下ろされようとした、その瞬間だった。

（……まったく、だらしがない。この程度で動けなくなるのか……。まあよい、一度だけ、助けてやろう）

以前にどこかで聞いた声がザックスの脳裏をよぎった。同時に体内に力が爆発的に生まれ、ザックスはその場を飛び下がった。遅れ

て、エイルスの一閃が地を抉る。

「何っ！」

決してよけられるはずのない一撃をかわし、死角に入った闖入者の気配を《心眼》を使って察知したエイルスは、驚愕に震えた。その場所に立っていたのは、先ほど地に伏して自身が止めを刺そうとしたものとは全く異なる力をその身に宿した男だった。

「どついう事だ！」

この戦いの中、エイルスはその時初めて背筋を凍らせた。

（触媒をよこせ！）

言葉と同時に、ザックスの額の《賢者の額環》が砕け散って光に消えた。

（まだ足りぬ！ そうだ、それがいい）

ザックスの左手にうつすらと絡まっていたイリアの髪が勢いよく燃え上がって行く。同時にザックスの中のマナが爆発的に増加した。

（全開だ！ 壊れるなよ！）

言葉と同時に世界が揺れる。僅かな浮遊感と共に眼前に魔将の姿が現れる。下からはね上げられる刃の蹴りを右に左に自在にかわす。全てがゆっくりと動く時間の中で自身の身体だけが早回しで動くのを意識しながら、ザックスはその背に狙いをつけた。

（これは、おまけだ！）

腕にマナが集まると同時に腕力がみなぎって行く。そして、ザックスは己の手の中の小剣を、魔人の心臓目掛けて勢いよく叩きつけた。

驚愕の表情を浮かべた魔人の胸板から突如として《小剣》の刃が

生まれた。

それと同時にそれまで凄まじい力で互いを拘束していた力の均衡が崩れて行く。その勢いでバランスを崩したウルガの身体はよろめきながら後ずさり、尻もちをつく。刃に貫かれた胸からは血が噴き出し、同時に激しく吐血する。

慌てて駆け寄ったエルメラがその背を支え、ライトアットが治癒呪文で傷を塞ぐ。魔人の背に《小剣》を突き立てたザックスも又、よろめきながら倒れ込むところを、薬滋水の力で回復したダントンによって支えられた。

己に突き立てられたものを信じられぬかのように見つめるエイルスは、指一本動かすことなく立ちつくしている。

ザックスを抱えてその正面によるめきながら回り込んだダントンは、エイルスに向かって言い放った。

「その刃はお前を悠久の時間の中に封じるために作り出されたものだ。今、こうしてへばりかけているザックスが材料を見つけ、多くの人々の力によって彫金され、今再びザックスがそれをお前につきたてた。

分かるか！ ラヴァン！ 時間は流れ、着実に次の世代が生まれ、可能性を引き継いでいく。

人は永遠に生きられない。だが、人の想いは……、冒険者の魂は確実に引き継がれ、様々な形に姿を変えながら永遠に生きていく！ お前が捨ててしまったのはそういうものだ！」

震える指先を伸ばし、《小剣》の刃先にそれを置く。僅かに力を込めたダントンの指先から流れ出る血が、《精霊金》^{アマルガム}の《小剣》の刃先を濡らした。

「永遠に眠れ！ かつての友にして仇敵、ラヴァンよ！ 凍結破砕」^{フロスト・ブレイク}

解呪の言葉と共に《小剣》が砕け散り、胸の傷から一匹の蛇が生み出される。それはすぐさまエイルスの身体に巻きついて、其の身体を永遠の氷の中へと閉じ込めていく。それだけに留まらず、エイルスの踏みしめる大地や周囲の空間までをも徐々に浸食する。空間

の侵食に巻き込まれぬよう、よろめきながらそこから離れた二人は、水の彫像と化したエイルスの最後をしっかりと確認した。

「脱出するぞ、ザックス、この場所は直にすべて浸食されるはずだ……。しっかりとしろ、おい、リーダーなんだから！」

ダントンの言葉に真っ青になりながらもザックスは己の最後の使命を果たす。

彼が《跳躍の指輪》にマナを込めると同時に、5人の身体から輝きが生まれた。

「さよなら、ラヴァン」

エルメラの小さな呟きと共に、5人の姿はその場から消えて行った。

《跳躍の指輪》で脱出を果たした一団は小高い丘の上にある『幻影の迷宮』の入口付近に現れた。水平線に朝日が昇り、夜明けの訪れと共に鳥たちが羽ばたいていく。

脱出と同時にすべての体力とマナを使い果たしたザックスを目覚めさせたのは、エルメラのすすり泣く声だった。起き上がるうとしたザックスの全身に凄まじい痛みが走り、彼はうめき声を上げた。

「動かない、若いの」

気付けばすぐ側で、疲労を顔に浮かべたライアットが治癒の魔法を駆使して、ザックスの身体を治療している。

「お前の身体は全身の筋肉が断裂しかけ、骨にも大小様々なダメージを負っていた。いったい何をどうすればここまでになるのか……」

「治るのか？」

「誰に向かってモノを言っておる。例え貴様が……、まあ、よいわ……」

口ごもりながらさらに治癒の呪文を行使する。仕方なく寝ころんだまま、夜明けの空を見上げたザックスだったが、ふと、ある事を思い出した。

「そっぴや、ウルガの傷はどうだったんだ、俺なんかより、かなりヤバかったんじゃないのか？」

胸部を魔将の刃で貫かれたのである。それでも魔将を足止めし続ける事が出来たのはやはり、彼が竜戦士化していたからであろう。だがザックスの質問にライアットは何も答えなかった。代わりに足音がして、夜明けの空を仰ぐザックスの視界の中にダントンが現れた。

「起きたみたいだな……」

「なあ、ウルガはどうした。おっさんの奴、意地悪して教えてくれねえんだよ……」

「おいおい、俺だって重傷だったんだぜ、ちつとは心配してくれねえのか……」

「なんで、はぐらかすんだよ！」

怒りがザックスを突き動かし、激痛が体内を走り回る中で、無理やりに身体を起こす。

「バカ、無茶するな……」

慌てて、抑えようとするダントンの向こうに、ザックスは竜戦士化したまま横たわったウルガと、その傍で泣き崩れるエルメラの姿を見た。

言葉を失うザックスに、ダントンが淡々と告げた。

「ウルガの旦那はもう助からない、手遅れなんだ」

「何、馬鹿言ってるんだ、まだ薬液水なら残ってるだろう！ おっさんだって神の御技って奴が使えんだ！ 俺は今すぐ死ぬわけじゃないんだから、あつちを優先してやれよ！」

「黙れ！ 若いの！ わしだって、それができるなら……、とつくにやっておるわ！」

声を荒げてのライアットの一喝に、ザックスは気圧される。ダン

トンが続けて語った。

「旦那は半竜人なんだ……」

「半竜人？」

「竜人と人間の間にも生まれた子供って意味だ。そして半竜人は生涯に一度しか竜戦士化できない、己の命とひきかえにな……」

「そんな……」

「竜人と人とは持つている資質が違いすぎるらしい。通常は竜人の資質を眠らせたまま半竜人は一生を終えるが、一度竜戦士化してその資質を活性化させてしまえば、強すぎる竜人の力によって、弱い人間の資質が崩壊していくんだ……」

「みんな、知ってたのか……」

「ああ、勿論、竜戦士化は切り札だったから使わぬに越した事はなかった。だが、そうする事は俺達にとっては半ば確定していたことなんだ……」

「だからあの時『さらば……』なんていったのかよ、ウルガの奴。冗談じゃねえぞ、俺はみんな生きて帰る為に無茶したつてのに、肝心のウルガがそんなんじゃ、意味ないじゃねえか……」

起き上がり、ウルガの元へ行こうとするザックスを押しとどめて、ダントンは続けた。

「そんなことはないさ。俺達は勝ったんだ。お前のおかげでな。そして、一瞬でもこうして、又、皆で日の光を見る事が出来た。俺達はまだ十分にやったんだよ」

「でもよ……」

「旦那からお前に伝言だ。『いいクエストだった、感謝している』だだよ」

「……………」

「あとは二人だけにさせてやってくれ。旦那と姐さんは故郷を出てから今までずっと一緒にやってきたんだ……」

二人の姿を見つめるダントンのまなじりに一筋の輝きが生まれた。「畜生、こんなのってあるかよ……。こんな終わり方なんて納得で

きねえよ！」

ザックスの嗚咽が周囲に響く。だが、それも遠くから響いてくる波の音に優しくかき消されていった。

水平線の上を昇ってゆく朝日が、何事もなかったかの様に優しく静かに降り注ぎ、激しい戦いの終わりを告げていた。

2011/07/30 初稿

17 エピローグ 魂の継承者

その世界は凍てついていた。

《現世》^{うつしよ}に留められてしまった《揺らぎの世界》の欠片。その中央に彫像の如く立ちつくす凍りついた魔人が一体。

その驚愕の表情は、自身が失って久しい感情だった。彼も又、それを失くしてしまつて久しいはずなのに侵入者たちはそれを、取り戻させてしまつたらしい。

「やつてくれましたね、と言つべきでしょうか、もしくは、油断でしたねと言つべきでしょうか」

静寂に満ちた空間に一人の魔人が姿を現した。《杯》を司る魔将ヒュディウス。陰気な面相の顔をフードで隠した魔人は、世界の中心に立つ魔人にふわりと近づいてゆく。

驚愕の表情を浮かべて凍りついたその姿にゆらりと手を伸ばすと、触れようとしたその指先に魔人の彫像から現れた氷の蛇が、顎を広げて噛みついた。だが実態を持たぬ彼の《幻像》をすり抜け、目的を失い当惑する。

「やつかしいな事ですな……。《時間凍結の理法》ですか」

その言葉とは裏腹に魔人は嬉しそうに笑う。目をつむり気配を探つたその先に、僅かに彼の知る者のマナの残滓を感じ取る。

「おやおや、成程、そういう事ですか。それならば、このような事態もあり得ることですね。だが、しかし……」

僅かに眉を潜めた。マナの残滓の中にかすかではあるが異質な物を感じ取る。

「まあいいでしょう、ともかく、これで、始まつてしまったのですね」

世界の一角である魔将がたかが人間如きにしてやられる。この前代未聞の事態を、他の魔将達はどう捉えるのか、そしてあの方々は……。

口元に笑みをほころばせながら、周囲を見渡した魔人はふと、思いついたように呟いた。

「ああ、そうでした。この世界を閉じておかねばなりません」

魔将に時間という概念は存在しない。だが、それはあくまでも彼らが《揺らぎの世界》に身を置いておく事が前提である。

《現世》に身を置けば、魔将としてその世界の理に縛られる。《剣》の魔将はこれから永遠の時をこの場所に縛り続けられる。

勿論彼を解き放つ事は大きな困難を伴いながらも一応可能であるが、《杯》の魔将にとってはなんら利益とはならない。むしろ今、この状況が魔人にとっては都合がよいのである。

「申し訳ありませんが、このままこの場所の守護者であり続けてくださいね……」

動かぬ同輩にそう告げると、魔人の《現像》が揺らいでいく。やがて姿の消えたその場所には、再び永遠の静寂が訪れた。

冒険者協会協会長執務室。

「……成程のう、以上が事の顛末と云う訳かい」

雑然とした執務室のソファに座っていたのは3人の男。ザック、ライアット、そして冒険者協会協会長という肩書をもつ一人の老人。だった。

「何じゃ、お前さん、ワシに何か言いたい事でもありそうな面じゃのう」

「言つて欲しいのか？ 爺さん」

カツカツ……と笑いながら老人は、しゃあしゃあと告げる。

「礼ならいくらでも受け付けるぞ。なんたってワシは協会長じゃからなの」

年寄りの戯言に頭痛を覚えながら、聞き流す。

ウルガ逝去の翌日、酒場を上げての彼の葬式の最中に現れたのは、空気の読めない冒険者協会の事務方達だった。

魔将に関する詳しい調査をその場で行おうとした彼らの姿勢に怒りを爆発させたザックスは、協会職員の一人を殴り飛ばし、それがきっかけで暴動寸前といった様相を呈したところに現れたのが、いつも波止場で釣りをしていた老人だった。

自身を協会長と名乗った老人のとりなしで事は丸く収まり、正式な調査と過日の謝罪の為に彼らはこの場所に訪れていた。

「まあ、気にするでない、担当の者達も深く反省するために、ちつとばかり、僻地に飛んでいったからのう」

何かさらりととんでもない事を言ったようだが、それは気のせいだろう。

「しかし、ライアット、お前さん、ええ加減、もう少し大人しくなつてくれんかのう……」

協会長の言葉にライアットは珍しく神妙な顔つきになっている。

「現役にこだわるのもいいが、ほどほどにしておかんと周囲が混乱するでのう。只でさえ、人材不足の協会じゃ。しっかりと支えてくれる人間がおらんと收拾がつかんようになるわい」

「はあ……」

「ウルガも逝つてしまつた。将来の協会を背負つて立つ人材と期待しておつたんだが、残念でならんわ……」

「……………」

「むしろ、いい加減、年じゃからのう、ちつとは心休まる日々を送らせてもらつても、罰は当たらんと思うぞ……」

先ほどから黙つて聞いていたザックスだったが、老人の言葉にと

うにもハラの中が収まらなくなり、気付けば啖呵を切っていた。

「おい、こら、爺さん。さっきから黙って聞いてりゃ、好き勝手言いやがって……」

「なんじゃと……」

「あんた前にこう言ったよな。『冒険者なぞ、なったその時から己の命は捨てたようなもの。己の命をチップ代わりにどれだけ広い世界を手にする事が出来るのか』ってよ。

やれ、協会の将来だの、背負って立つ人材だのと、そんな事はど
うだっていいんだよ！

俺達は冒険者だ！未知の場所に踏み込んで道を切り開いてなんぼ
なんだよ！

それができる奴はいくつになっても冒険者だ！

手前らみたいな鄙びた年寄りが若いものに未来を期待しているよ
うなふりして、いざそいつらが転んで怪我するようなら、手の平返
したように責任押し付けてるから、『リスクを取る事を嫌って、堅
実な金儲けばかりに目がくらんだケツの穴の小さな奴ら』が、この
街に溢れ返るようになったんじゃねえか！

前に進めなくなったらそういつやつが後ろを守ればいい。

後ろを守ることに疲れたら、その時は波止場で釣りでも楽しんで
余生を過ごせばいいんだ！

ウルガは自分の為に走り続けた……後先のことなんて考えずにな
おっさんもダントンもエルメラもそれに続いた。

だから俺も走るんだ。あいつらの背中に恥じないようにな！

周りがどうだかとか、後に続く奴がどうだかなんてこと、考えて
る奴は冒険者なんかじゃねえ！

未来はその未来に生きてる奴が決めて行くんだ、ってことを忘れ
んなー！

互いに睨み合う。

だがしばらくして老人は相好を崩し、笑い出した。

「カツカツカツ……。お前さんの言う通りじゃ、こいつは一本取られたのう。だがのう、若いの」

笑みを収めて真顔になる。

「この都市にも多くの人間がいる。だれもが正攻法で己の利益を確保できる訳ではない事を、よく覚えておくんじゃぞ」

「んな、難しい事なんぞ、そうそう分かるかよ！ 転んでからゆっくり考えるさ」

「全くじゃのう。さて、ところで、面倒くさい爺の小言はここまでじゃ。お前さんたちの引き取り人も来ておるでの……」

「引き取り人？」

老人の笑顔にただならぬものを感じた二人は、顔を見合わせた。

「どれ、入ってこんかい」

いそいそと手ずから開けた扉の向こうから現れたのは、ザックスのよく知る巫女服の二人だった。

「イリア、に、マリナさんまで……」

絶句したザックスの隣でやはり言葉を失って顔面蒼白のライアットの姿があった。兔族の巫女少女は目を赤くしたままぼつりと呟いた。

「お義父様に、ザックス様……。大変……。危ない事に関わられたと窥いました」

「お義父様？」

ライアットの顔をまじまじと見つめる。ザックスはこれまでの全てをようやく理解した。これまでのライアットの態度はイリアを思う故であるらしい。

「イ、イリア、これは、その……」

ライアットのうつろたえる姿は珍しい。

「イリアはとても心配したんですよ……」

その言葉と共に彼女の瞳から大粒の涙がこぼれおちる。

「イ、イリア、そうではないんだ。これは、おい、若いの！ お前

もなんとか言わんか！」

「ちよつと待て、俺も、なのか？」

「あらあら、ザックスさん、御自身の立場がまだよくおわかりになられていないようですね……」

「はい？」

「イリアはあなた方の無謀な行為に小さな胸を痛めて泣いているのですよ。ええ、そうです。神殿巫女達わたしたちの可愛い妹分のイリアが……、ふふっ」

「ちよつと待て、確か、この間は英雄譚に胸をときめかせたとか言っただけ……」

「あれは偶然巻き込まれただけ……。今回は、自分からのこのこと出向かれたのでは？」

「のこのこ、って……。とにかく俺は冒険者としてだな……」

「私達にとっては可愛いイリアが泣きじゃくっている事が、何よりも優先されるのですよ……」

「そんな、理不尽な……」

彼らのやり取りを己の机の上で頬杖をついた老人は、ニヤニヤと楽しんでいる。

「協会長、これはあんたの差し金か！」

「まあ、人間カッコばかりつけて生きてはおれん、ということじゃのう。いやいや、若いというのはええことじゃ」

「じじい、テメエ……」

「ザックスさん、おじさま、お二人には罰を受けて頂かなければなりませんわね。そうですねえ、ああ、いい事を思いつきましたわ。これならばきつとイリアも笑顔を取り戻してくれるはず……」

マリナの出した迷案にザックスとライアットの絶叫が響く。

「若いのが、貴様、よりもよって……。そこに直れ。叩き飛ばしてくれわ」

「うるせえぞ、おっさん。俺を責めるのは筋違いだろうが……」

その後、冒険者協会協会長執務室がどのような事態に陥ったかは、定かではない。

早朝の《旅立ちの広場》では、今日も転移の扉を通ってあちらこちらへ行き交う人々にぎわっている。そんな人々を目当てに朝市を立てた店の店主たちが、こぞつて客引きに精を出していた。何年もこの都市に暮らした者ならば見慣れた光景である。

「こんな時間にわざわざ出発しなくても……」

「こんな時間だからだよ……。俺も姐さんもこの空気が好きだったんだ。そしてウルガの旦那も……。何かが始まるかもしれない、そんな期待に満ち溢れた人々の生み出す熱気がな」

大きな荷物を背負ったダントンがぼつりと呟いた。傍らには身軽な格好のエルメラが、名残惜しげに周囲を見回しながら立っている。

「本当に行つちまうんだな……」

「なんだ、寂しいのか」

「そんな訳、ねえだろう……」

ウルガの死によってエルメラとダントンは冒険者を廃業し、この都市を離れる事を決めたのだった。

「悪いね、本当ならあんたの事を手伝ってやるつてのが、筋なんだけどね」

「気にするなよ」

ラヴァンとの決着をつけ、ウルガが死んだ事で自分の中にあつた冒険者であり続ける理由がなくなった。ガンツ＝ハミツシユの酒場のいつもの席で、彼女はそう言ってザックスに頭を下げた。

「まあ、普通の冒険者としてなら、おまえさんはもう大丈夫だよ。気がかりな事はなくもないがな……」

「奴らの事はなんとかするさ、今日明日に解決しそうじゃない問題だしな」

上級冒険者には必ず向き合わねばなくなる問題がある。マナLVの限界値……ダントンはLV47の時点で己の限界と向き合わねばならなかった。それが、魔将との決着を焦った理由の一つでもある。いつもの場所でそう言つて、彼は笑った。

「これからどうするんだい？」

ザックスの問いに二人は顔を見合わせた。エルメラが答える。

「まずはあたしたちの故郷に……。ウルガとの約束を果たさなければならぬからね、その後はまたどこかへ、風のむくまま、気の向くままつてとこだね」

「そうか。気をつけてな」

別れの言葉を告げるザックスは、エルメラと向き合った。

「はじめは、とてもじゃないが無理だ、と思つていただけけどねえ」

「姐さんの口移しが効いたんじゃないやねえ、つて、わっ、アチッ」

ダントンが飛び上がって足元の炎を消す。

「本当にあんたのおかげだよ。あんたには返しきれない借りができちまった」

そういうと懐から腕輪を取り出しザックスの右腕に装着する。赤く輝く宝石が埋め込まれた《アマルガム精霊金》製の腕輪だった。

「これは？」

「半竜人は一生に一度だけ竜戦士化した後、己の竜の力を結晶化して残すのさ」

「これつて、もしかして……」

「こいつはウルガの魂さ、あんたに渡してくれつて。これから先のあんたの戦いの力になるだろうから、つてあいつの遺言でね……」

「そうか、ウルガが……」

大柄な男の背中を思い出す。ああ、そういえば俺はあの男の背中ばかりを見ていたんだな、とザックスはようやく気付いた。

「さて、それじゃ、そろそろ行くところかね。冒険者をやめた奴らがうるうるしてちゃ、後に続く者の邪魔にしかならないって言う奴がいるからね……」

そう言い残して彼女は軽やかに歩き出す。

「じゃあな」

大きな荷物を背負ったダントンが片手を上げてそれに続いた。二人が《転移の門》を通過して消えて行くのを見送ったザックスは、僅かに鼻をこすった。

「さて、俺も行くか……」

ザックスの冒険はこれから始まるのである。

未踏破ダンジョンに様々な未知のアイテム、そしてこの世の謎ともいえる魔人達との邂逅……。

世界はまだまだ謎に包まれている。そこへどんな仲間たちと共に向かっていくのか。

己のこれまでの軌跡を振り返るかのように、ザックスは胸元のクナ石にマナを込める。

名前	ザックス				
マナLV	25				
体力	152	攻撃力	203	守備力	167
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	159
智力	134				
技能	134				
特殊スキル	収奪 駿足 全身強化 倍力 直感				
称号	剣撃術 斧撃術 一刀両断 乱れ斬り 中級冒険者 魔将殺し				
職業	剣士				
敏捷	160				
魅力	102				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX

状態	呪い（詳細不明）	全属性半減
備考	協会指定案件 6	1 2 9号にて生還
	協会指定案件 6	1 3 0号にて生還
	協会指定案件 6	1 3 1号にて生還
所持金	8 5 3 2 1	シルバ

武器	ミスリルセイバー
防具	魔法障壁の籠手 神聖護布の上衣
	疾風金剛のひざ当て バトルブーツ
その他	ウルガの腕輪

ステータス値を確認したザックスはクナ石を戻すと、エルメラ達とは正反対の方向へと歩を進める。

「兄ちゃん、クエストを受けてくれないか？」
「パーティのメンバーを募集しています」
「ええい、武器はいらんかい、うちのは安くて頑丈だぜ」
「薬滋水のセット販売よ。混ぜ物は一切なしね！」
「創世神の御心のままにお祈りをさせてくださいませ……」

雑多な声と喧騒の充満する人ごみの中に踏み出していったザックスの姿は、やがて溶け込み消えていく。そして、いそいそと日々の日課に明け暮れる自由都市に住む人々の一日は、静かに幕を開けていくのだった。

2
0
1
1
/
0
7
/
3
1

初稿

01 イリア、戸惑う！

神殿巫女の一日は忙しい。

日中、訪れる冒険者の為に祈りをささげる彼女たちの仕事はそれだけでは終わらない。縁起を担いで転職の日取りを決める冒険者も多い為、日によって訪れる人々はまちまちであるが、空いた時間には雑事に追われるのが普通である。

自由都市《ペネロペイア》の大神殿は他の都市のものよりも規模も大きく格式も高い故に、その仕事の多さも想像するに余りある。

『神殿巫女の優雅な一日』などという特集が「裏酒場」が発行する季刊雑誌に載せられた事もあるが、あんなものは真つ赤な偽物である。特集の中に出てくる巫女は本職の彼女たちがうらやむほどに実に優雅な一日を過ごしているが、そんな楽な仕事があるなら是非ともやってみたいものだ、というのが人情であろう。

長い柄のついたタワシを華奢な身体でしっかりと抑えつけ「えい、やあ」と泉周辺の床掃除に精をだすイリアは、そんな重労働の最中だった。

本日最後の冒険者を笑顔で送り出した後、彼女はいつもの清掃着に着替えて、その日の担当を黙々とこなしていた。

華やかで見た目重視の巫女服とは違って、動きやすく機能性を追求した……というよりは単に布切れを身にまとっているというだけのあられもない姿は、とても外部の者には見せられない。洗礼以外の時は男子禁制のこの場所だからこそ、こんな姿でいられるのである。

額に汗してせつせと、長柄たわしで床を磨く姿は、『神殿巫女』という存在に幻想を抱く者たちにはタブー以外の何物でもない。

だが、そんな姿であっても姉巫女のマリナは、イリアでも思わず

どきりとする艶つぼさを見せながら、気品と共に優雅に仕事をこなしてしまふのだから恐ろしい。

「ああ、今日も一日が終わりましたね……」

と、笑顔で汗をぬぐう仕草をみれば、きつと多くの男性が卒倒して彼女の虜になるに違いない。

「ザツクス様にだけは見せないようにしないと……」

ぼつりと呟いて思わずかぶりを振る。

何を考えているのだろう、彼がこんなところに来る訳がないといふのに……、と赤面しながら泉の水面を見つめる。

一日の役割を終え、上階層から降る滝の水も今は止められ、水面は何事もないかのように静かである。そこに映る己の顔を見ながら思わず、にへら、と顔がゆるむ。彼女の目には、部屋が一番大切な引き出しにしまつてある《額環^{サークレット}》をつけた自身の姿が輝いている。

質素が旨であり、公式の行事においての正装の際に唯一巫女達に許される、とつておきの装飾品を、先日の『大市』の際にザツクスより贈られた彼女は、その時の喜びを反芻し、腕の中の長柄タワシによりかかって身悶える。その贈り物に込められたのは、彼からの『感謝の念』である事は十分に承知しているのだが、それでも期待してしまうのは彼女がまだ少女ゆえであろう。

様々な妄想に浸りながら、水面に映つた緩みつぱなしの自身の顔にはたと気づいた彼女は、思わず身を正す。

つい数日前は、その状態のまま後ろから姉巫女の一人に声を掛けられ、慌てふためいて足を滑らし、泉に落ちるといふ醜態を堂々とさらしたイリアである。当然、その夜は彼女が何を考えていたのかという事で、姉巫女達とのお茶会の場はすっかり盛り上がってしまった。

いい加減、自分をネタにからかうのは止めて欲しいと思う一方で、そんな機会に、外部の伝手から彼の近況をさりと知らせてくれる姉巫女達の好意に感謝し、その夜、寝台の上で枕を抱えて悶えてし

まづのは、ここ一カ月の間についた習慣のようなものである。

(そろそろ夕食の時間だし、片づけないと……)

洗淨道具を一纏めにして、いつもの倉庫に放り込もうとしたその時だった。突如として、上層階から滝の水が降り始め、泉の表面を慌ただしくかき乱した。

その音に驚き小ぶりの兎の耳をピンとたて、丸い尻尾をわっさと膨らませて振り返った彼女の目には、信じがたい光景が映った。神聖水の流れる滝の中に一人の女性が入ろうとする姿を目にしたのである。

「ま、待って……」

洗礼衣姿の彼女を呼び止めようと混乱した頭のまま、泉にかけよる。

転職の為の洗礼の際には冒険者はただ滝を潜るだけでなく、事前に巫女の祈りの加護を受けなければならない。まだ自分は彼女にそのような行為をしてはいない、いやそもそも何時の間に彼女はこの場所に入ってきたのか……そんな混乱を必死で押さえながら泉に駆け寄った彼女の足が止まる。彼女は滝に入ろうとする女性の特徴ある長い耳に気付いた。

(エルフ……)

その事実には彼女の本能が警戒心呼び起こす。

エルフと兎族、否、妖精族と獣人族は互いに相入れない。

それは彼らの種としての発生の在り方に起因するものであり、歴史書を紐解けば、過去、二つの種族の間で勃発した多くの争いが記載されている。そのほとんどの争いにおいて、原因たる原因が存在しない事からも窺える通り、互いの種族が些細な事でいがみ合い、争いを大きくしていくという負の連鎖は、この時代にも脈々と受け継がれてきた。

妖精族の代表ともいえるエルフはその生まれとルーツをなにより

も重んじ、特に七氏族と呼ばれる家系に属する者たちのプライドの高さには並々ならぬものがある。彼らの機嫌を損ねた為に《エルフの呪い》をかけられた都市が一つ衰退した、などとまことしやかな噂もあるように、その存在を決して侮ってはならないのがこの世界の常識である。

イリア自身にそのような偏見はない。

彼女自身が兎族という羨望と偏見の対象である為に、そのような視点で他者を判断する事が愚かであるということは十分に承知している。

だからといって、相手方が同じような考え方であるという保証は限りなく0に近い。これまでの短い神殿巫女としての経験の間にも、妖精族出身の冒険者を担当し、あらぬ中傷を浴びせられた事は一度や二度でない。涙をこらえて、巫女としての務めを終えた後で、マリナのふくよかな胸で泣きじゃくるといふ苦い経験も多々ある。

だが、責任ある神殿巫女としてこの事態を見過ごすわけにはいかない。意を決して彼女に声をかけようとしたその瞬間、眼前で再び信じられないことが起きた。エルフの女性が滝の中に入ると同時に、それまで勢いよく流れていた滝がさっぱりと消え、同時に彼女の姿も消えてしまった。後にはただ、静かに泉が水を湛えているだけであり、そこに膝までつかったイリアは呆然と立ち尽くした。

「……………」

理解不能の眼前の事態に呆然とする彼女の脳裏にとある一つの噂話が思い浮かぶ。

『エルフの幽霊を見た!』

つい一月ばかり前に姉巫女の一人が遭遇した一件は、しばらくの間神殿に務める者達の間で大きく話題になっていた。

きつと想像力豊かな姉巫女が、日頃の退屈な務めの日々を紛らわせるために、皆を驚かせようとした作り話が受けたのだ、とその時のイリアは受け止めていた。

だが、眼前で起きた事態は、彼女の話通りのものであり、今は何事もなかったような静かな泉の様子にイリアは、初めてこの場所に不気味な物を感じていた。思わず己の頬を抓ってみたのだが、決してそれが夢ではない事を、痛みが彼女に伝えた。

「イリア、何をしているのかしら？」

不意に彼女の後ろから姉巫女のマリナが声をかける。振り返ったイリアの姿を見て彼女は思わず吹き出した。

自身の頬を指で抓ったまま振り返った可愛らしい顔立ちの彼女の愛嬌あるその仕草に、マリナは笑みを浮かべて尋ねようとした。

「どうしたの、イリア。そんな顔をしているとザックスさんに……」
だが、その言葉は途中で中断される。

頬から手を離れた彼女は、顔を青くしてよろよろとよろめきながら泉から上がると、そのままふらふらと自分の元へ歩みよってくる。愛しい妹分の尋常でない様子をいち早く察した彼女は、慌てて彼女に駆け寄り、その少女らしい華奢で繊細な姿勢をしっかりと抱きしめる。

「どうしたの？ イリア！ 何があったの？ 話して……」

自身の腕の中の少女が震えている様子に困惑しながらも、懸命に言葉を掛ける。しばらくして、ようやく平常心を取り戻したのか彼女は豊かなマリナの胸にうずめていた顔を上げると、愛らしい小さな口元を懸命に動かして、震える声でぼつりと告げた。

「姉さま、どうしよう、私、見てしまいました……」

「何を見たの？」

「わたし、確かに見たんです。エルフの幽霊を……、この目で、はつきりと……」

その言葉にマリナは驚いた。

今、自身の目には、ただ静かに洗礼の泉が水を湛えている様子が見えるだけである。

だが、愛しい妹分は確かにそれを見たという。彼女は他者からの関心を引きたいが為にわざと嘘をつく娘ではないし、神殿巫女とい

う職に誇りを抱いている。何よりも、彼女にとって『エルフ』と云う言葉は冗談の種に使えるようなものでは決してないのである。

イリアの突飛な言葉にマリナも又動揺する。そんな彼女がようやく絞り出した一言は余りにも簡潔なものだった。

「そう、困ったわね……」

滔々と水をたたえる泉の淵に立った二人の巫女姉妹はただ、呆然と、静かな水面を見つめるだけだった。

空回りしている　　という言葉がある。

もし、それを具体化したのなら、多分、それは今の自分の状態なのだろう　　そう考えながらザックスは目の前のアルキル果実のしぼり汁の入ったグラスを乱暴にマドラーでかきまわした。氷結魔法によって作られた氷がコロンと音をたててグラスの中で踊る姿を、ため息をついて眺める。子供から若者、そして老人までが飲む一般的な飲み物をクエストの終わった後で酒場で飲むというのが、ここ暫くの彼の日課になっていた。

普段ならば麦酒の一杯でもと考えるものだが、残念なことに近頃の彼はとてもそのような気分になることはできなかつた。

優秀な腕ききアタッカーとして、近頃は酒場の中だけでなく外部でも評判の上がりつつある彼には、度々クエストの依頼が舞い込んでいた。大抵はダンジョン踏破に挑む中級パーティーの臨時メンバーとして彼は必要とされ、その期待を裏切らない働きを続けてきた。

何よりも彼の持つ称号《魔將殺し》の威力は絶大であり、彼に実力以上の評価を与えていることは、少々こそばゆいところである。様々なパーティーから臨時メンバーとしての打診を受ける彼であっ

だが、以前のように「うちの正式メンバーになりませんか」と彼に申し出る者は皆無だった。

理由がなんとなく察せられるだけに、ザックスも彼らとの付き合いを仕事であると割り切つて、それ以上は深入りしようとはしなかった。

最初は良好だった雇い主との関係も、しばらくすると先頭を歩く彼と後方からついてくる彼らとの間に、距離とは言えない微妙な距離感が生まれはじめ、それはミッションやクエストの終わりの際の「お疲れさまでした」という他人行儀な言葉とともに0に戻る。

なぜ、そうなるのか？

端的に言えば、視点や目標の違いなのだろう。

これまでのザックスの異常ともいえる成長速度と巻き込まれた異常事態の数々が、彼の視点を普通の冒険者としてのそれとは全く異質なものにさせていた。例えマナレベルは同じくらいであっても、そのような冒険者としての基盤の違いが彼らとの間に空白を生み、無意識に敬遠させているのであろう。

ささいな歪みが徐々に広がり、同じ状況を重ねるといふ負の螺旋に巻き込まれつつある事を自覚しながらも、自身の力ではどうにもできず、ただただ、苦悩ともいえぬ中途半端な悩みに頭を抱えていたのである。

過去に彼を唯一受け入れた《ブルポズ》の面々は、臨時収入を手に入れて温泉地への豪遊に向かい、彼に土産を送つてよこした後は何ら音沙汰がない。酒場のマスター、ガンツからの話によれば、温泉に飽き足らなくなった彼らは諸国漫遊の旅へ足を伸ばしたと言ふ事であり、《ペネロペイヤ》への帰郷はまだまだ未定であるらしい。

ミッションの最中には閉口した彼らのハチャメチャぶりが、いつしかザックスにはなぜかとてつもなく懐かしいものとなっていた。

カランと再び音を立てたグラスを自身の脇に追いやり、眼前の卓に突っ伏す。

ガンツ^{II}ハミツシユの酒場、二階の一番席　そこに座る事をマスターに許されたのは、店内でただ一人、ザックスのみである。それは決してザックスの実力ゆえではない。

様々な偶然と出会いの中で彼はこの場所に堂々と座る偉大な者たちと行動を共にし、彼らに力を貸す事で、ここに座る事を許されただけである。辛い別れを乗り越えてここに只一人残ったザックスは、彼らの客分として未だにここに座る事を許され続けているだけであり、ザックス自身がこの場所に誰かを座らせるということは決して許されない。

顔を上げ空席に目を向けたザックスは、かつてその場所に座っていた偉大な男たちの姿を思い浮かべる。

今の自分をみたら彼らはなんとこのだろうか？

ザックスの右腕にひっそりと輝く《アマルガム精霊金》の腕輪には、ザックスがその背を見続けた偉大な男の魂が嵌め込まれている。あの男のような冒険者になりたい、あの男の背中をのりこえたい、そう思えば思うほど、それはザックスの心に焦りを生み出し、周囲とのちぐはぐさを生み出す原因になっていることに、彼はまだ気付いていなかった。

「昼日中からアルキルのしほり汁なんざで、のんびりとうつつを抜かしてるとは、ずいぶんな御身分じゃねえか」

不意に頭の上から声をかけられる。

振り返ったザックスの前には巨漢の男が立っている。優れた斧使いとして定評のあるその男は、この店の2階の2番席に座ることを許されたパーティのリーダー、バンガスだった。

腕はいいのだろうか性格は褒められたものではない　それがザックスの彼に対する評価である。

ウルガが逝き、ダントンとエルメラがここを去ってしばらくしてから、バンガスはザックスに事あることに突っかかるようになっていた。度重なる因縁に、時として一触即発の事態になったこともある。

それなりに経験を重ね、いい年をした冒険者が自分のような駆け出しに突っかかるなど実に大人げないと思うのだが、災いは向こうからやってくるのだから仕方がない。ウルガに比べて何かと見劣りする彼と関わりを持ちたくなかったザックスは、仕方なくその場を離れる事にした。

ここはウルガ達がいた大切な場所　つまりぬ事で穢すような事だけはしたくなかった。

いかにこの場所に座る事を許された身であったとしても、ザックスはまだ中級クラスの孤独な冒険者である。店内での発言力などに等しい彼が、この場所を守るには黙って引き下がるしかない。

仕方なく立ち上がったザックスはバンガスに会釈をすると、そそくさとその場所を立ち去った。

「けっ、スカしやがって！」

バンガスの悪態を黙ってその背で受け止めたザックスは、そのまま階段を降りて、カウンターの前を通りかかった。

「おい、ザックス」

野太い声でそんなザックスに声をかけたのは、この店の主であるガンツだった。

「なんだい、マスター。クエストなら今日は勘弁だぜ。帰ってきたばかりなんだからよ……」

「フン、そういうのはもっと一人前になってから言うんだな。クエストが終わったってのに、そんな辛気臭い顔してうるうるしてるよっじゃ、とても一流の冒険者とは言えねえな！」

口は悪いが、その眼力は一級品である。

カウンターの向こうから店内の一部始終をしっかりと把握し、その人を見る目には決して誤りが無い。そんな彼にかかれればザックス

の内心など透けて見えるのだろう。

「お前、今のまんまじゃ、そのうち大きなポ力をやらかしちまうぞ」
「分かってんだよ、そんな事は！」

声を荒げたザックスに一階席にいた他の冒険者達の視線が集中する。自身の放った思わぬ言葉の強さに、ザックスは我に返る。

「悪いな、マスター、疲れてるんだ……」

「フン、まあ、いいさ。ところでザックス、お前に少しばかり相談があるんだが……」

「相談？」

「ああ、お前の今の状況を少しばかり好転させた上に、俺の悩み事が一つもしくは二つばかり消えてくれるという、実に魅力的な提案の相談なんだが……」

「俺に……？ 一体何をしろと」

その問いに直ぐに答えることなく、ガンツは傍らのグラスの中の冷たいホメヨ茶のグラスを一杯傾けた。一拍置いてニヤリと笑ったガンツの言葉は、意外なものだった。

「お前、この都市を一度離れて、別の都市に行ってみるつもりはな
いか？」

2011/08/28 初稿

02 ヘッポイ、突き進む！

自由都市《エルタイヤ》、またの名を神殿都市《エルタイヤ》。

その都市の最奥部にあたる北区画には、サザール大陸全土をまたにかける創世神殿の総本山である《最高神殿》が存在する。

《最高神殿》のその壮麗な建物は《ペネロペイヤ》の大神殿など比べるべくもなく、そこには膨大な数の神官と巫女が住まい、そして大陸中から創世神の信者たちが日々訪れている。

また、この都市の冒険者協会支部は、最高神殿と密接な関わりをもつ事により、協会内でも屈指の発言権を持つており、《ペネロペイヤ》にある協会本部からその実権を奪いとるべく、虎視眈々と狙いを定めているというのがもっぱらの噂である。

そんな都市の一角に、ガンツからの直接のクエストを受けたザックスの姿があった。

彼の目的地はそこから經由して辿りつけるダンジョンでもなければ壮麗な威容を誇る最高神殿でもない。《ドノヴァンの酒場》冒険者協会の認定証の表示が入った酒場の看板の前に彼は立っていた。

「ここか……」

小ざつぱりとした若干洒落つ気のある店の造りは、おそらく改修してまだ間がないゆえであろう。規模及び宿屋の収容人員はガンツのものとはさほど変わらない。宿屋としては、大きくも小さくもないといったところである。

ただ、どうにも建物の外観から活気のある様子が伝わってこない事が気になるではあったが……。

ともかく、「よし」とばかりに気合を入れたザックスは、店の扉を勢いよく開け中へ入っていった。

「いらつしやいませ」

と、カウンター内で笑顔と共に彼を迎えたのは、この店の主ドノヴァンだった。

ザックスよりも年上、おそらくはウルガ達と同程度であるだろう。彼は同業者の中では若い方だろう。彼の丁寧な応対は、ガンツの親父もこういうのを少しは見習ったらどうなのか、とザックスに思わせるほど新鮮だった。

ガンツの紹介状に目を通したドノヴァンは営業用の笑みを消して、若干はにかみ気味の彼らしい笑みを浮かべてザックスを歓迎した。

「すみません、なんだか、変な依頼をしまして………。御覧のように店内はこんな有様でして……。」

がらんとした酒場内にはポツリポツリと人影がまばらなだけで、ザックスが先ほど感じたとおりに活気のない様子が一目了然だった。周囲を見回したザックスはドノヴァンに向き直ると、単刀直入に述べる。

「俺は宿屋の専門家じゃないし、冒険者としても日が浅い。ガンツの親父が何を考えてるか知らないが、多分、役には立てないと思うぜ……。」

「ご謙遜を……。《魔将殺し》のザックスと云えばそれなりに有名ですよ。そんな方が私の宿に逗留して頂けるだなんて、光栄の極みです」

ドノヴァンの言葉に店内にいた冒険者達が好奇の視線を投げかける。人が少ないために声の通りがいい店内では仕方のない事とはいえ、気恥ずかしくなったザックスは話をはぐらかせる。

「そんな立派なものじゃないさ、そんなことよりも部屋への案内と

あいさつ代わりに何かいいクエストがあったら紹介してくれないか」
 「さすがに熱心ですね、クナ石を拝見しますので少しお待ち下さい」

名前	ザックス
マナLV	27
体力	159 攻撃力 209 守備力 173
理力	MAX 魔法攻撃 0 魔法防御 163
智力	138
技能	144
特殊スキル	収奪 駿足 全身強化 倍力 直感 剣撃術 斧撃術 一刀両断 乱れ斬り 中級冒険者 魔将殺し
称号	剣士
職業	剣士
敏捷	166
魅力	112
総運値	0 幸運度 MAX 悪運度 MAX
状態	呪い(詳細不明) 全属性半減
備考	協会指定案件6 129号にて生還 協会指定案件6 130号にて生還 協会指定案件6 131号にて生還
所持金	57294シルバ
武器	ミスリルセイバー
防具	魔法障壁の籠手 神聖護布の上衣 疾風金剛のひざ当て バトルブーツ
その他	ウルガの腕輪

ザックスのステータス値をクナ石で確認したドノヴァンは帳面を引き出すと、店で引き受けているクエストのリストを物色する。

「いくつか適当な物がありますが、実はザックスさんに是非ともお受けしてほしいものがあるんです」

「俺に？」

ドノヴァンに薦められたクエストを引き受ける事にしたザックスは、彼に連れられ、しばらくの根城となる宿の一室へと案内される。「宿の利用についての詳しい規約はそちらに書いてあるので目を通しておいてください。それと私からガンツさんへの依頼につきましては、是非ともご存分になさってください」

その言葉を残して、丁寧なお辞儀と共に去って行く。

店に入って以来感じられた、どこか息づまる想いからようやく解放されたザックスは、寝台に寝転がりながら規約なるものを書いた紙面に手を伸ばし……、思わずげっそりとした。

「成程、こりゃ、みんな嫌がるかもな……」

事細かく決められた規約がびっしりと書き連ねてある様子は、大雑把さが信条のザックスにはかなりの苦痛を伴った。

ドノヴァンが頼んだというガンツからの依頼の内容は端的にいえば『なぜ、この宿が繁盛しないのか』ということの調査であった。

「お前の思った通りに言えばいいんだよ！」

ガンツの言葉にかなりためらったものの、他の都市に行ってみるという提案はザックスにとって魅力的に響いた。

「まあ、なにはともあれ、散歩だな……」

自室に不要な荷物を置くと、ザックスは暫くのホームタウンとなる《エルタイヤ》の街を観光がてら見物することにした。

冒険者協会《エルタイヤ》支部　その建物の大広間においてザックスは多くの冒険者達に混じって、協会自らが依頼人になった大

々のクエストについての説明会に出席していた。

様々なパーティのリーダーと思しき人物が肩を並べるその場所で、誰か知っているものがないかと辺りを見回してみたものの、彼の知る顔は一つとしていなかった。これほどの人間がいながら知り合いにいくわさなというのは、いかに冒険者の世界に人が多いかということだろう、と自身で納得して、彼は与えられた資料に目を通しながら演壇に立つ協会職員の話聞いていた。

『……で、あるからしまして、この度のクエストは《エルタイヤ支部》の全冒険者に参加していただき……』

退屈になってきたザックスと同じように周辺では、小声でのひそひそ話が目立っていた。

「だから、協会の支部長が神殿のタヌキ共に取り入る為に計画したって噂だぜ」

「手間の割にカネにならないからって、上級パーティの大半が不参加らしいな」

「いいんじゃないの、ちつとくらい俺達貧乏パーティにも楽なクエストまわしてもらわねえと、やっていけねえよ」

「人が足りないんであちこちから支部の伝手を頼って人材を確保しているらしいな。本部の爺さんはどうにもカンカンだとか……」

「その話なら俺も聞いたぜ、なんでも《魔将殺し》って奴まで駆り出されたらしいな」

「ああ、なんでも山みたいにでかい奴らしくって、そこらの巨人族なんか軽く絞め殺せるらしいぞ」

最後の言葉に思わず、ずり落ちた。

そんなザックスをにらみつける後ろの席に座る者たちに、小さく頭を下げると肩をすぼめて参加者たちの間に身を隠す。変に有名になるとどうにもいろいろと問題があるらしい。配られた紙片に目を通すふりをして下をむく。

手の中の紙片にはこの度のクエスト内容である『初級レベルダンジョン一斉搜索』という題字が踊っている。

「ここしばらく、冒険者達の間では二つの奇妙な噂が囁かれていた。一つは初級レベルダンジョンにおいて想定ランク以上のモンスターとの遭遇率が高まっている事、そして、もう一つは初級レベルダンジョン内にエルフの幽霊が徘徊するというものである。どちらも今のところ大きな実害がもたらされていない為、冒険者協会本部はこれを無視することとしていたのだが、この度《エルタイヤ》支部が総力を上げての搜索を決定したのである。

13ある初級レベルダンジョンを全て一時閉鎖して、担当区画ごとに区分けし、冒険者達のパーティに徹底調査させる。当然かかる費用は莫大なものになるのだが、自由都市有数の財力を持つ《エルタイヤ》だからこそ可能な事といえた。

初級レベルダンジョンが一時閉鎖される事は他の都市の冒険者達に大きな影響を与えるため、他の支部からの不満は並々ならぬものがあり、それでも強行できるのは《エルタイヤ》支部の協会内での絶大な発言権ゆえと云うところである。とぼつちりをくらったのが《ペネロペイヤ》に居を構える協会本部であり、苦情の矢面に立たされた件の老人は相当お怒りになっているらしい。

「天罰だな……」

老人の顔を思い浮かべてニヤリとするザックスだったが、彼としても実入りの少ないクエストには若干の不満が残る。

『このクエストに参加する事でザックスさんもいろいろとお知り合いができて、この先、動きやすくなると思いますよ』

というドノヴァンの言に従い、当座の生活に困らぬ彼の当面の目的は、人脈作りといったところだろう。

「尚、臨時に参加されました単独の冒険者の方々には、現地においてこちらで割りあてた人員でパーティを組んでいただく事になりますので、ご容赦を……」

そんな言葉と共に終わった説明会の会場から、散つてゆく冒険者の群れの中に混じりながら、ザックスは不慣れな街の人ごみの中に

身を預けるのだった。

「おい、いいな、俺がリーダーなんだから、命令には絶対に従えよ」
気持ちいいほどに『イタイ』ヤツである。

それが、彼に対する印象だった。周囲から嘲笑と同情の視線を浴びながら、ザックスは「まあ、よろしく」とお茶を濁す。

一斉搜索当日、協会職員に割り当てられた彼の相方は創世神殿神官籍を持つ冒険者だった。他に面子はいないのかというザックスの問いに、協会職員は若干申し訳なさそうにザックスが過去、数度の単独踏破の経験をもつことと、担当区画が上層階である事をあげて詫びた。

協会に一方的に割り当てられたこの男であるが、顔を合わすや否や、マナレVと冒険者になっての日数を問われ、ザックスが日の浅い事を告げると、胸を反りかえらせて『オレ様リーダー・絶対服従』発言をかましてくれたのである。

今後の事を考えると軽い実力行使の上で主導権を奪い返しておくのが定石であるが、彼は厄介なことに神殿神官籍を持つ人間である。創世神殿の影響力の絶大なこの街で神官籍を持つ者とトラブルになるのはさすがにまずいだろうと考えたその時から、ザックスの忍耐ははじまることとなった。

「暇だー」

ダンジョン内に麗しき相方、ヘッポイの声がこだまする。担当区画の数か所の召喚魔法陣を回って、周回モンスターを殲滅したあと

は、定期的に呼び出されるモンスターを順次瞬殺しながら、担当区画をパトロールする。これを全ダンジョンの全階層で行う事でモンスターの出現率調査、及びエルフの幽霊についての調査を行う訳である。

二日間の日程で行われるこの調査も、一日目はどうにかうまくやり通せていた。

厄介なのは退屈な調査よりも、相方ヘツポイの自分語りであり、ザックスの頭の中には彼の半生の年表が完全な形で再現されていた。すでに聞く気力の失せたザックスに構わず延々と己を語り続けるヘツポイを、ザックスは自身の頭の中で5度ほど《ミスリルセイバー》の錆にしていた。

二日目が終盤に近付いたころ、さして変わらぬルーチンワークに耐えられなくなつてキレてしまったのは、なぜかストレスの溜まりまくつたザックスではなく、さんざんに自分語りを続けて悦に入っていたはずのヘツポイだった。

「どうして、俺がこんなところでチンケなD級モンスターをちまちま相手にしなくちゃならないんだ」

ちなみに討伐数はザックスの方が3倍近く多い。

そんなヘツポイにもなかなか人間臭いところがあるようで、「もう、飽きたよ」といきなり昼寝を始めて、頭上から現れたスライムに押し乗られた時には、その苦痛が忘れられなかったらしい。自分から丸2日間見張りを買って出てくれたのはとても有り難かった。

「よし、決めた！ これからこのダンジョンを踏破することにしよう！」

「おい！」

「待っていたって、チャンスは来ない！ 自分から掴みにいかなければ！」

言っている事は正しい。惜しむらくは状況が全く見えていない事だろう。

全ダンジョンの全区画に担当者が張り付く事で調査が成立するの

である。担当員が勝手に、持ち場を離れてしまえば、調査そのものに意味がなくなる。

だが、オレ様リーダー、ヘッポイに正論は通じない。そして常識とは彼だけが決めるものである。

「行くぞ、ザックス、ついてこい！」

胸をはって《鋼鉄槌》アイアン・メイヌを片手に堂々と進軍を開始する。

「こんな人脈……要らねえよ」

ザックスの悲痛な叫びが虚しく通路に響き渡った。

「俺の目標はライアット高神官なのだ！」

2日間聞かされ続けたセリフを繰り返しながら、ヘッポイはつき進む。こんな奴に目標にされるおっさんにも多少の同情はするが、やはり奴を作り出してしまった大罪は是非とも追求すべきであろう。創世神殿神官籍 高度な資質を要求される神殿巫女とは異なり、神官籍を持つことに特別な条件はない。建前上、男女、種族による制限もない為、実に雑多な人々が神官衣に身を包み、神殿の名の下に様々な奉仕活動や治安活動を行う。神殿と事を構えるというのはよほどの事なのである。

冒険者のスキルが多大に貢献する事もあり、大抵の人間は冒険者活動でスキルを身に付けた後で神官職に専念する。

高神官職と冒険者を兼任し、しかも魔將殺しにまで関わったライアットの存在はかなり稀有な事例だが、そんな彼にあこがれて、神官職をおろそかにして、冒険者である事にうつつを抜かすものの中にはいるようで、ザックスの頼もしい相棒のヘッポイはそんな者達の代表例だろう。

「お、おい、お前ら、何やってんだ！」

自身の担当区画に突如として現れた、ヘッポイの姿に驚くパーティーを尻目に、彼の進軍は続く。

「皆の者、見回り御苦労！ 立ち止まらずに俺に続け、ザックス！」
人の話を一切聞かぬヘツポイを断じる事を諦め、後に続くザックスに非難の視線は集中する。

「もう、降りてえよ」

非難の視線に耐えながらザックスは彼に続く。こんな奴でも一応相方である。この先二度と彼と組む事は願い下げだが、それでも冒険者である以上、彼を見捨てるわけにはいかない。ザックスの苦悩と忍耐は続くのだった。

初級レベルダンジョンとはいえ、中階層辺りを過ぎると、出現モンスターの数が攻略の難易度をあげていくというのは周知の事実である。

上階層から『オレ様快進撃』 他のパーティが殲滅した道を歩いて来ただけだったが、 を続けてきたヘツポイもこのあたりで苦戦するようになった。ヘツポイの制止を諦めた周辺区画の担当者達は「じゃあ、任せませ」と高みの見物を決め込んだらしく、再出現したモンスター達とヘツポイの壮絶な死闘が始まった。

中級冒険者になりたての能力的には至って平凡なヘツポイの『職^{ジョブ}』は、どういう訳か神の御技と呼ぶべき治癒系呪文を駆使する僧侶であり、他に目立った固有スキルは持ち合わせていない。創世神は一切何を考えて彼にそんな力を与えたのだろうか？

そんなザックスの疑問もどく吹く風とばかりに彼の眼前では壮絶なバトルが繰り広げられる。そして、過去にどこかで見た事のある光景が次々に再現された。

歴史は繰り返される……とはこの事なのか？

「ぬつりゃあー」

大木槌を持った妖精族モンスターに囲まれ、タコ殴りにされるへ

ツポイ。当然、助けるのはザックスである。

「とわあー」

びっしりと吸血モンスターに噛みつかれ、ふらふらのヘッポイ。当然、助けるのはザックスである。

「いやあー」

大型の虫型モンスターに玉突きの要領で転がされるヘッポイ。当然、助けるのはザックスである。

「むぎゅー」

スライムの群れによる空中連続ボディアタック。初めて見る華麗なその技に押し潰される我らがヘッポイ。当然、助けるのは……。

少しは痛い目に遭えば、いろいろと思い直すだろうと考えたザックスは手出しを控えていたのだが、ヘッポイという名のこの男、恐ろしい事に……決して引こうとしなかった。倒されても、倒されても、立ち上がり、自身に回復魔法をかけては咆哮と共に突撃するその姿勢は、あまりに清々すがすがしく美しい。

「引かぬ！ 媚びぬ！ 顧みぬ！ 何人なんびとたりとも俺の前は歩かせん！」

意気込みは見事！

だが、伴わぬ実力は如何ともしがたく、後始末に明け暮れるのはザックスである。勝ち目のない戦場で兵をむやみやたらと突撃させる指揮官は困りものだが、自分までもが先頭に立つとなるとさらに厄介な事この上ない。

攻撃対象範囲内にヘッポイがいるため、特殊スキル《乱れ斬り》での一斉掃討は困難を極めた。

「もう、帰ってえよ」

とつとつ半泣きになりながらザックスは剣をふるう。しばらくして、ザックスの願いがようやく通じたのか、ヘッポイの足は徐々に鈍り始めた。いわゆる体力と理力の限界である。

さらに現れた大型獣モンスターにふらふらの足で果敢に挑み、へ

ツポイは渾身の一撃を放つ。

「必殺！ ライアット・アタック！」

本家よりもはるかに弱々しげな踏み込みと共に両手で振り上げた彼の《鋼鉄槌》は、空振りしてすっぽりとその手をすり抜け、彼の頭上に舞った。天井にぶつかかった反動で落ちてきたそれをまともに頭で受けた彼はその場で昏倒する。

すかさず《ミスリルセイバー》でモンスターを《一刀両断》することに成功したザックスの周囲はようやく静寂に包まれた。

倒れて目を回すヘツポイの姿を見下ろしながら、ザックスは凶暴なボスモンスターを倒した後のような気分を味わっていた。とにかくこのままダンジョンから連れ出そうと彼から《跳躍の指輪》を抜き取ろうとしたザックスは、その背にふと人の気配を感じた。

「すまんがちよっと手伝って……」

と、言いつつ振り向いたザックスは、啞然とする。

彼の背後に立っていたのは美しいエルフの女性だった。年の頃は彼よりも若干下であろうか……。

尤も、異種族であるエルフの外見と年齢は判断の参考にならないと言われるため、正確な事は分からない。黄金に輝く長い髪を後ろでひとくくりに結びあげ、妖精族独特のピンととがった長い耳の彼女の外見は美しかった。

だが、勝気さを感じさせる整った顔立ちに浮かぶその表情にはどこか悲壮感が漂い、何よりもザックスを驚かせたのは、彼女の姿がうっすらと透けており、その輪郭がおぼろげな事である。

（この世のものではない……）

直感的に感じ取ったザックスは、それが噂のエルフの幽霊であることをようやく理解した。

「おい……」

声をかけるものの件のエルフの幽霊に聞こえる様子はない。ただ静かに彼の眼前を歩み去って行く。

その横顔から美しいうなじへのラインを見送りながら、ザックスはふと奇妙な感覚に襲われた。

(前に会った事があるな……)

どこで会ったのかは思い出せない。だが、彼女の美しい横顔と後ろ姿を見送りながら、ザックスの頭からはその考えが離れなかった。「うっ、うーん……」

そんなザックスの足元でヘッポイが起き上がるうとする気配を見せる。この状況で目を覚まされてはたまらない。そう考えたザックスは急ぎヘッポイの手から《跳躍の指輪》を抜き取ると慌てて、ダンジョンを脱出したのだった。

「チクシヨー、俺はまだ戦えるゾ」

担架に縛り付けられて運ばれていくヘッポイの姿を見送ったザックスは、ため息をついた。

おそらくもう2度と会う事はないだろうと思いつつ、彼の振り返った先には渋面を浮かべた数人の協会職員が並んで立っている。勝手に持ち場を離れた事についての釈明をして頂きたい、とザックスは彼らに促されるまま、管理所へと入って行く。言い出しつぺの本人はとつくに立ち去り、後始末を押し付けられ頭を抱えたザックスだった。

無然としながらも彼らに事情を釈明するうちに、数人の職員がザックスに同情の色を見せ始める。そのうちの一人が気の毒そうな顔をしながら、意外な事実を語り始めた。

「実は彼、《エルタイヤ》でも有数の富豪の一族でして、神殿にも多額の寄付があり……、そのせいかどうかは知りませんが、協会内ではかなり有名な問題児なんです」

「ちよつと待て、そんな奴とオレを組ませたのか？」

「すみません。上からの指示でして、《魔将殺し》のザックスさん

と組ませれば彼に箔が付くからと……」

「おい！」

「極力、調査の邪魔にもザックスさんの負担にもならぬように、配置したつもりだったんですが、まさか自分から行動をおこすとは……」

冒険者協会《エルタイヤ》支部、この組織、どうやら大いに問題があるらしい。

「つきましては、この度のクエスト、彼とザックスさんは参加なされなかったという事で……。ああ、事後処理はお任せ下さい。何事もなかった、と上には報告しておきますので……」

「おい……」

さも当然、と言った風に結論を出した彼らは、いそいそとその場を後にする。二日間の忍耐の末にただ働きとなったザックスは、無人となった詰所内で怒りと虚しさに拳を震わせた。自身のパラメータ、悪運度MAXは未だに健在のようだ。

だが、彼はまだこの『ヘッポイの災禍』に続きがあるなどという事をこの時、夢にも思っていなかった。

2011/08/29 初稿

03 シーボン、唄う！

ただ働きとは非情に疲れるもの。

遭遇したエルフの幽霊については報告する義理もなく、ザックスは胸の内にそれを留め、精神的によろめきながらエルタイヤに帰還した。どこか虚ろな瞳で見知らぬ街の通りを宿に向かって歩く彼の姿は、憐れみを誘った。

『世間は厳しい』という言葉を教訓とともにかみしめ、こんな日はヤケ酒でもして寝るに限る、と考えた彼だったが、ふと、近くの路地裏から何者かの争う声が聞こえてきた。

『ヘツポイの災禍』によつてふつふつと湧いてくる欲求不満のはけ口を見つけたザックスは、路地裏へと近づいていく。おそらく争っているだろう者達の会話が耳に入った。

「てめえ、冒険者だろ！　ちつとばかりカネを貸してくれればいいんだよ！」

「兄貴、大丈夫なんですか？」

「けっ、冒険者っていつてもこいつは《吟遊詩人》だ。戦闘能力なんてありはしねえよ」

世界は広い。

世の中にはそこらの戦士が束になつてかかっても太刀打ちできないほどに恐ろしい吟遊詩人も存在するのだが、世間一般ではそれがありきたりな評価であろう。

少しばかりの憂さ晴らしがてら、諍いに割って入ろうとした彼の耳に届いたのは、どこかで聞いた声だった。

「仕方ありません。今手持ちがこれとってありませんので、お詫びといつては何ですが、貴方がたにいま思いついた新曲をプレゼントいたしましょう……」

その言葉にザックスの身体が条件反射をおこす。
特殊スキル《直感》が発動し、すかさず彼は《袋》^{バック}からマジックアイテム《耳栓》を取り出し装着する。その場所には、彼の予想通りの事態が訪れた。

《耳栓》を装着したまま恐る恐る覗いたその先には、数人の男たちが白目をむいて気絶した姿とその中にぽつりと立っている自身のよく知る者の姿があった。

「シーポン！」

呼びかけたものの、目をつむり演奏に没頭する彼に聞こえる様子はない。近づこうにも彼の紡ぎ出す音波は《耳栓》をつけている彼にもうつすらと聞こえ始め、これ以上は近づけない。どうやら彼の音色は、しばらく見ないうちにさらに力を増しているらしい。追い打ちをかけられびくびくと泡をふきながら痙攣する男たちに僅かばかり同情しながら、ザックスはシーポンが曲を奏で終えるのを待った。

「ザックスさん！」

ようやく新曲を奏で終わったシーポンは路地の先に懐かしい顔を見つけ、笑顔を見せる。

「お元気でしたか？」

遠く見知らぬ土地での懐かしい者との再会に、ザックスの心は久方ぶりに晴れたのだった。

ドノヴァンの酒場には相変わらず活気がないものの、夕食時ともなればそれなりに人は集まってくる。そんな店の片隅でザックスはシーポンと共に再会を祝っていた。

宿に帰還したザックスはクエストの失敗と一連の事態をドノヴァ

ンに報告した後、シーポンを彼に紹介した。「それは大変でしたね」という言葉とともに事態を把握したドノヴァンは、店に吟遊詩人が訪れた事を喜び、彼の逗留を歓迎した。

「では、挨拶がてら新曲をご披露……」

と、豎琴を取り出したシーポンを慌てて止めたザックスは、彼と共に店の一角にある卓で夕食がてら再会の杯を交わしていた。

「実は旅先でウルガ殿の訃報とザックスさんの活躍を耳にしまして……」

今までどうしていたのか、というザックスの質問にシーポンはそう前置きした。

「《ブルボンズ》はこのままではいけない、という結論に達した我々は、暫しの間別行動をとり、それぞれの技芸を磨き、再びガンツⅡハミツシユの酒場で再会しようという事になりました。そして私は……、旅に出たのです」

やおら傍らの豎琴を取り出すや否や、彼は音楽と共に語り始める。「それは辛い困難な旅でした。自身の音楽の世界に限界を感じ始めていた私は、己の壁を乗り越えるために様々な人々に教を請うて歩いたのです」

ララー、と歌いながら彼は続ける。

「ある方には、音色に力強さが足りぬと言われました。私は美しい音色を紡ぐ指を鍛えるために、断崖絶壁を素手で登ったのです。」

ある方には、声に艶が足りぬと言われました。七色の声を手に入れるために《虹色の蜜》を求めて、秘境探索を行ったのです。

ある方には、魂が足りぬと言われました。我が音楽に足りぬ魂の叫びを得んがため、ドラゴンの前に立ちはだかり、かの凶獣の咆哮に真っ向から挑んだのです……」

おい、ちよつと待て、というザックスのつつこみに構わず、シーポンは続けた。

「だが、そのどれもが私を満足させませんでした。」

そんなある日、私はふと気付いたのです。己の求めるものは己の

内にしかないと……。

そして私はついに開眼しました。真の音楽とは何か、誰もがうちふるえる『魂の歌』とは何かという事に……」

時に優しく、時に荒々しく。美しい指さばきで奏でられる豎琴のメロディにのって流れるシーポンの柔らかな歌声に、いつしか周囲の者達までが聞き入り始めている。

「真の音楽……それは……『愛』です。認め合い、許し合い、求め合う。それこそが人々を魅了する音楽の真実……」

「おおー」という周囲のどよめきと共に、シーポンの歌はクライマックスを迎える。

「今こそ、皆様にお伝えしましょう。神話の時代から受け継がれた真実、そして至高の吟遊詩人の奏でる歌、『究極の愛のセレナーデ』を……」

豎琴の音色が激しく鳴り響き、感極まったシーポンは豊かな声量をもって、言葉を紡いだ。

そしてザックスを含めた店内にいる誰もが、白目をむいて気絶したのだった。

部屋の扉をノックすると共に朝の到来を告げる従業員の声で目が覚める。

行き届いたサービスというのは気持ちよいものだが、行き届きすぎるのはいかがなものだろうか……。ここ数日、この宿に逗留したザックスの中に事あるごとに生じる違和感だが、それはわざわざ口にするほどの物でもないのが困りものである。親切心の押し付けというものは実に厄介きわまりない。

己の店の前で重低音をたつぷりと効かせた咆哮とともに朝の到来を告げるガッツの姿が、なぜか懐かしく感じられた。

違和感を胸に寝台を起き上がったザックスは、朝食をとるべく階下へと向かう。昨夜、シーポンと再会を祝した後の記憶がまったくない。宿の誰もがザックスと同様で、食堂と化した朝の酒場は実にいつも通りの静かな光景だった。

先に起きて朝食を取り始めていたシーポンが何事もなかったかのように2階席で手を振るのをみて、ザックスは自身もトレイを抱えて、階段を上っていった。

「おはようございます、ザックスさん」

食後のホメヨ茶を楽しむシーポンの前に座ったザックスは何気ない雑談のあとで、彼に尋ねる事にした。

「そうですね、私はさほど苦痛とを感じる事はありませんが……」と、前置きしつつ、シーポンは語る。

「確かにこの店はいろいろと行き過ぎのところがあるようですね。一般の冒険者向きではない、そう評価できると思います。しかし……」

僅かに言葉を切つて、ホメヨ茶を口にしたシーポンは続ける。

「それも又、この店の味であるともいえるのですよ……。世の中には、他人が敬遠したり見向きもしない場所を好き好む、という風変わりな方もいらつしやいますからね。そして、そんな人たちに居場所を提供する事で、この都市のかけがえのない構成者の一つとなっている……。外部のものがむやみやたらと自身の価値観を押し付けてしまう事で、微妙なバランスを壊してしまうということもありうるのですよ……。かく言う私も……」

言葉と同時に豎琴を取り出して音色を奏で始める。

「己が最も素晴らしいと思うものが周囲に理解されない……。そんなジレンマに苦しむ一人なのです」

「そ、そういうものなのか……」

「だが、それでも私は諦めません。いつか私の最高の音楽が多くの

方々の魂を震わせ感動に涙するよう、力の限り歌い続けるのです」
「な、成程……。応援するぜ！」

「おお、今、私の頭に素晴らしいフレーズが浮かび上がりました。これこそ当に創世神のお恵み。ではここで一曲、新曲のご披露を……」

「そ、それだけはやめてくれー！」

応援するぜ、といったその口で、ザックスは容赦なく彼を再び制止した。

人の世とは無情なものである……。

「ザ、ザックスさん。た、大変です。た、大変な事になりました……」

朝食の時間も終わり、昨日のただ働きの鬱憤を晴らすべく、ガイドマップを片手にシーポンと共に《エルタイヤ》の観光計画についてあれこれ相談している最中、店主のドノヴァンが血相を変えて、ザックス達の座る2階席に駆け上がった。彼の手には一通の封書が握られている。

「どうしたんだ、ドノヴァンさん？」

「大変な事になりました」

混乱したドノヴァンは大変、大変と繰り返すばかりで、一向に要領を得ない。同席していたシーポンと顔を見合わせたザックスは、ドノヴァンが落ち着きを取り戻すまで待つしかなかった。

「こ、これを見てください」

ようやく落ち着いたのか、彼は手に持っていた封書をザックスに差し出した。宛名欄に達筆でザックスの名が書き込まれたその封書は、大げさに装飾が施され、送り主欄には名前が無い。

「で、こいつがどうしたんだい」

どうにも悪戯じみた封書をぽいっと無造作に放り出したザックス

に、ドノヴァンは血相を変えて詰め寄った。

「な、なんて事するんですか、ザックスさん。これは最高神殿からの召喚状ですよ！」

「召喚状？」

こくりと頷くドノヴァンを尻目に、ザックスは再び放り出した召喚状なるものを手にとって見た。

「ほう、これが、あの噂の……。私も目にするのは初めてです」

シーポンも興味深げにそれを眺めている。

「これは、ザックスさんにあてられた最高神殿からの呼び出し状なのです。そして、最高神殿からの呼び出しはいかなる事情にも優先され、もしこれに従わなければ、ザックスさんは神殿の敵としてみなされると……」

「な、何……！」

妙に物騒な曰くつきの封書に、目をやる。

「たいていは自由都市や各国家の元首に恫喝の意味をこめて送られるものなのですが……。ザ、ザックスさん、あなた一体、何をやらかしたのですか！」

大変な剣幕で詰め寄ってくるドノヴァンに気圧される。逗留中の冒険者の不祥事はその酒場にも咎が及ぶ事もある為、彼も気が動転しているであろう。

「ま、まあ、とりあえずは開けてみようじゃないか、考えるのはそれからだ……」

事態はどうにも大事になりそうだ。ヘッポイの件で心当たりは無い事もないが、そこまで大事になるとは思えない。

ドノヴァンに急かされるかのように封書を開いたザックスは、折りたたまれた書面を開きおそるおそる目を通す。……と、ザックスの顔に少しばかり苦渋の表情が生まれた。

「ど、どうでしたか……」

「安心しろ、ドノヴァンさん。これは只の手紙という名の呼び出し状だ。送り主はオレの知り合いだ」

「へっ……」

ザックスの言葉にドノヴァンはへなへなとその場に崩れる。自身の店の危機になりかねぬ事態に、相当に動揺していたらしい。そして、はたと思いついたようにぼつりと呟いた。

「そ、そういえば、召喚状には高位の神殿関係者に親しい方、もしくは神殿に利益を与える方であるということを周囲に示す意味もあったのでしたね……」

「ドノヴァンさん、それを早く思い出してくれ……」

彼の早とちりで無用な不安を与えられたザックスも、大いに迷惑である。

「しかし、さすがはザックスさんですね。最高神殿にお知り合いがおられるとは……。一体どんな方なのか、よろしければお教え願えませんか？」

「ああ、神殿巫女のマリナさんだ」

何気ない、軽い一言だった。

だが、その言葉に店内の時間が凍った。決して《時間凍結の理法》が働いた訳ではない。

「なにいー！」

一拍の間を置いて店内にいた二十人近い客の全てが、ザックスに詰め寄った。

「あ、あんた、あの神殿巫女のマリナさんと知り合いなのか」

「その微笑みは『神の微笑み』とまで称えられたあの……」

「一万人の悪人を回心させ、敬虔な神殿の信者にしたという、あのマリナ様が！」

「彼女が流す涙によってマナを込められた神聖水は、あらゆる冒険者達の転職を希望通りになえてくれるというのは、本当なのだよな！」

血走った目で詰め寄る冒険者達にザックスは気圧される。

彼の側に崩れ落ちていたドノヴァンは押し寄せた冒険者達にそのまま踏みつけられ、シーポンは我関せずと傍らで豎琴を奏でている。

「お、おい、ちょっと、待て」

噂に尾ひれがつくという言葉を地でいくように、なにやら彼女の伝説は以前聞いたものより、はるかに凄まじいものになっている。《エルタイヤ》は《ペネロペイヤ》から相当離れている分、彼女の伝説も増幅されて伝わっているようだ。もはや、彼女を教祖に新たな宗派が誕生しそうな勢いですらある。

とまどうザックスを尻目に、血走った目をした冒険者達は、次々と彼女の伝説を熱く披露する。

「オレの話を聞けー」

ザックスの叫びは、シーポンの豎琴のメロディに乗って虚しく散って行った。

2011/08/30 初稿

04 マリナ、微笑む！

《エルタイヤ》 創世神最高神殿 。

豪華、壮麗、絢爛、といった言葉がかすんで聞こえるほど壮大な建物は、神殿都市《エルタイヤ》の最も北側の奥深い区画に悠然と佇んでいる。

神話の時代に巨人族の建築士によって建てられたという逸話すら残るその巨大な建物には多くの神官、巫女が寝起きし、一日に大陸全土から訪れる信者は膨大な数に上る。

人生の終わりに一度でもこの場所に訪れたいとやってきては倒れるはた迷惑な老人たちの為に、大規模な施設設備も備わっており、《エルタイヤ》はこの最高神殿を中心に全てが動き、それが無ければおそらく都市としては機能しないだろうとさえ言われている。

そんな最高神殿内のある一室で神殿巫女のマリナは、その美しい顔に若干の疲労の色を浮かべながら己の務めに励んでいた。

「本当に肩の凝りがおさまらない日々が続きますわね」

その原因は、決して彼女の神殿巫女にしておくには惜しいほどに豊かな胸のせいではない。あえていうならば神殿内に充満する空気の重さのせいであろう。周囲に人がいないのをよい事に、マリナは再びボヤク。

「《ペネロペイヤ》の大神殿のほうがよほど気楽ですわ。みんな元気で勤めに励んでいるのかしら」

最高神殿にマリナが参内して2週間近く。奇しくもザックスと変わらぬ頃に彼女はこの地を訪れていた。

幽霊騒ぎに巻き込まれたイリアがまだ完全に立ち直っていないにも関わらず、神殿を離れねばならなかった彼女は、後ろ髪をひかれる思いで彼女を妹巫女達に任せ、《ペネロペイヤ》を離れることとなった。上級巫女である彼女の務めとはいえ、それは彼女にとって、苦渋の決断だった。

史上最年少で上級巫女となった彼女は近々、神官・巫女職に就く者達の為に行われる中級試験の為の準備に日々明け暮れていた。

彼女の仕事は、神殿内の様々な方面への折衝であり、必然的に多くの人々と関わらねばならなかった。いつも微笑みを絶やさぬと言われる彼女ですら閉口させられたのは、神殿内に充満する陰湿な空気だった。

伝統、格式、権威……。

偉大な先人達によつての多くの戒めは、歴史が積み重ねられると共にその本質が塗り替えられ、その時代に権力を握るものの恫喝の手段と化していく。

目に見える形での神の奇跡を求める人々の要求に従うべく、俗物化した教義は本来の創世神の意思とは程遠い。必然的にそれに媚びる人々によつてさらに捻じ曲げられていくその場所は、閉鎖的な世界にありがちな俗世以上の力オスだった。

彼らがありがたがっているのは創世神という絶大なカリスマではなく、神殿という巨大な空っぽの箱に入った創世神らしきものの幻想と奇跡を望む者達の巨大な欲望である。マリナはときおり、そんな滑稽な錯覚を覚える。

だが、人の世界においては、そのような欺瞞にみちた存在でも社会に一定の秩序を与える事は疑いようのない事実である。そして、創世神の存在を心のよりどころにして日々を慎ましく暮らす多くの人々や、誇りをもって務めに励む巫女や神官たちがいることも、まぎれもない事実だった。

見える目を閉じ、聞こえる耳を塞ぐ……そんな不自然さが疲労感になって押し掛かるのだろう。

「早く終わらせて帰りたいものですね」

らしくない弱音がぼつりと吐き出される、そんな時だった。彼女の部屋の扉をおずおずとノックする音が聞こえる。「どうぞ」という言葉と共に入ってきたのは、愛しい妹分の兔族の少女だった。

「お久しぶりです、マリナ姉さま」

若干緊張気味の顔をして入ってきたのは、この場所が暮らしなければ《ペネロペイヤ》の大神殿とは勝手が違うから、というだけではないだろう。

「もう、元気になったみたいですね」

「ごめんなさい。マリナ姉さまに心配をおかけしたままで……。それよりも姉さま、お顔の色が優れないようですが……」

「いいんですよ、それよりも試験の準備はどうですか？」

「はい、エルシー姉さま達に、とてもよくして頂きました」「無理はしなくてもいいんですよ。あなたの年齢ではまだ早いからいなのですから。それよりも楽しんでいらっしゃいな」

と、いつてもこの芯の強い可愛い少女は、期待に応えようと頑張ってしまうのだろう。そんな愛しい少女を久しぶりに彼女はしっかりと抱きしめる。

「フ、フミヤア……ね、姉さま？」

後ろからしっかりと抱きしめられ、イリアの兔の耳がびくびくと忙しく動く。

「ふふっ、妹成分の補給です」

そんな言葉と共に悪戯っぽく笑うと。彼女の小ぶりの兔の耳を軽く甘噛みする。

「フミヤア……ね、姉ひゃま……、そ、しよれは……、らめですう」

最後にいつもよりも強くしっかりと抱きしめる。そして、彼女は静かに少女の身体を手放した。

涙目になりながら「ひどいです」と顔を真っ赤にしたイリアにマリナは優しく告げた。

「有難う、イリア、おかげで元気が出ました。貴女も少し緊張がほぐれたならいいのだけど……」

その言葉にイリアはハツと我に返る。きつと緊張した自分を氣遣ったのだ、と考えたのだろうが、それはお互いさまなのだということとが理解できるようにするのは、もう少し大人になってからだろう。それまでの甘く温かい時間を振り払うようにいつもの優雅な微笑みを取り戻したマリナは、イリアに向かって静かに告げた。

「イリア、ごめんなさいね、これからはしばらく他人です。知っている方に出会っても、あくまでも創世神殿の巫女として慎ましかかに振舞うのですよ……」

その言葉に僅かに淋しげな色を瞳に宿しながら、彼女は「はい」と答える。

去ってゆく彼女の背を見送りながら、マリナは心の中に落ち着かぬものを感じていた。彼女の姉貴分である自分達の目が届かぬ場所で、兎族の少女が周囲とうまくやって行けるだろうか……。そんな不安が心を捉えてはなれない。

「あまり、過保護なものじゃありませんね……。あの娘は強い娘なのだから……」

時として突き離さねばならない事を、過去の経験から十分に身に染みて理解している彼女は、そう呟いてジレンマに揺れる己の心を押さえつけた。

そんな彼女の背に一人の巫女が声をかける。

「あの、マリナ姉さま……。姉さまから召喚状を受けたという怪しげな冒険者が面会を求めているのですか……」

その言葉でふと我に返る。

ああ、そうだ、私はあの娘の為に一つ手を打っていたのだ、と思い出したマリナは、柔らかな微笑みと共に彼女に答えた。

「分かりました。すみやかにこちらにお通しして下さい。過去に神

殿を一つ破壊しかけた凶悪で悪辣極まりない冒険者ですので、貴女も十分に注意して……」

その言葉に彼女は顔色を変え、背筋を伸ばした。

「分かりました。姉さま！　姉さまからのお役目、完璧に果たしてご覧に入れます！」

力強い言葉と共に一礼して小走り気味に歩み去ってゆく。

そんな彼女の背を見送りながら、きらりと目を光らせたマリナが「ふふっ、いい退屈凌ぎになりそうですね」と思ったかどうかは定かではない。

ノックの音と共に開いた扉の向こうには実に愉快的な光景が広がっていた。

中央に大きな木箱を抱えた冒険者が一人。

その周囲をとり囲んだ完全武装の神官3人が武器を突き付け、件の巫女も少し離れたところから警備用の《短槍》を小脇に立っている。

そんな冒険者に彼女は優しげな笑みを浮かべて声をかけた。

「あらあら、わざわざ、御足労下さり有難うございます。ザックスさん。どうぞお入りくださいな」

彼女に慥然とした表情を向けたままザックスは無言で部屋に入ろうとする。

「あの、マリナ様、その……よろしいので……」

3人の神官たちは隙あらば、襲い掛かるかのような視線をザックスに向けながら、マリナに尋ねる。傍らの巫女も油断ない様子で《短槍》を構えている。

「ええ、ご苦労様でした、みなさん。ここからこの者を善き道に導くのは私の役目です。よろしければ酒代の足しにしてくださいな」
懐から心付けを取り出し、神官たちの一人に手渡した。マリナの

暖かな両の手に包まれ、赤面した神官は神殿礼と共に去ってゆく。

「貴方もご苦勞様でした。お務めに戻ってくださいね」

マリナに担がれた事に気付かぬ巫女も又、神殿礼とともに去ってゆく。そして、部屋の中に相変わらず懽然としたザックスとマリナの二人の姿が残った。

「ご無沙汰しておりましたわ、ザックスさん」

「……で、あんた、あいつらに一体何を吹き込んだんだ？」

「いえ、私は何も、ただ、あるがままを語っただけですわ、ふふっ……。それよりどうなさったのですか、その大きな御荷物は……」

床に置かれた大きな木箱の横にしゃがみこんで、マリナは面白そうに中を探る。

「こんな大きな箱を抱えて、前も見えずに一体どうやってここまでたどり着いたのかしら、あらあら、高そうな御品ばかりなこと……」などと呟くマリナを尻目に、ザックスは部屋の中の適当なソファにどっかりと腰を下ろした。

「うちの宿の奴らからあんたへの貢物だよ」

「まあ、それではわざわざ、ザックスさんはそれを配達して下さったのですね。でもどうして抱えていらしたのかしら。冒険者はみなさん《袋》^{バック}をお持ちでしょうに」

「入れようとしたら怒られたんだよ。『マリナ様への献上品を《袋》^{バック}などに放り込んで無碍に扱うとは何事か』ってね。まったく困ったもんだぜ、あんたの信者には……」

「あらあら、それではこちらの品は神殿への寄付として、丁寧に納めさせていただきますね。ところで、ザックスさんから私への献上品はこの中に入っているのですか？」

中身を一つ一つ確認しながらマリナは悪戯っぽく微笑む。

「ねえよ、あるとしたらその大きな箱とここまでそれを運んできた勞力ぐらいだ……」

「それではこちらは大事に扱わせていただきますね」

入れ物となつている大きな木箱を、愛しげに優しく撫でる。

「あんだ、わざとやってるだろ……」

「ふふっ、なんの事でしょう」

そう微笑んで立ちあがると、二人分のお茶の準備を始めた。

「ここは大きいし、活気のあるところだな、でも好きにはなれそうにない場所だ」

二人分の冷えたホメヨ茶をグラスに満たして彼の傍らに腰掛けたマリナの傍で、ザックスはぼつりと呟いた。

「そのおっしゃり方、懐かしいですね。あの日の事が昨日のように思い出されますわ」

「オレはもう忘れないよ」

「ひどいですわ。あんなに激しい夜でしたのに。ザックスさんは私の胸だけをさんざんに弄んで、捨ててしまわれるような殿方でしたの？」

マリナは自身の両腕で己の身体を掻き抱きながら、そそとザックスに身を寄せる。

「おっ、おい、ひっ、人に誤解されるような言い方は……」

「ここには誰もおりません事よ、ザックスさん。ここは貴方と私の二人きり……。何が起ころうとも二人を止めるものなどありませんわ」

さらに、すすつとザックスに身を寄せる。甘い香りがザックスを包み、仄かな吐息が耳元を刺激する。

うるんだ瞳に間近でじつと見つめられてザックスは大きくたじろいだ。

「ちよっ、ちよつと、マリナさん……?」

「あら、よそよそしい。せっかく二人きりなのだからマリナとお呼び下さいな」

「はい?」

「気付きませんでして……? 私、あの夜からずっと貴方をお慕いいたしておりますのよ……」

「ま、待てっ……、いったい何の話……うわっ」

身を寄せてくるマリナに堪らず、ザックスはソファから転げ落ちた。そんな彼の姿をくすくすと笑いながら、マリナは見下ろしている。

「ザックス様、真つ赤になられて、とても御可愛らしいですわ」

「あなた、又、オレを担いだな！」

床の上で不貞腐れていたザックスは反撃とばかりに彼女の傍らに立ちあがると、その身にぴたりと己の身を寄せて座りこむ。だが敵もさるものだった。

「あらあら、これから私はどんな風にされてしまうのでしょうか？」
直ぐ間近で、期待に満ちた瞳で見つめられてはザックスの完敗である。

出されたホメヨ茶をぐいと飲み干し、降参の意思表示をする。そんなザックスに小さく微笑みかけた彼女は、彼の傍らから身を離すと自身のグラスをからからと掻きまわした。

「さて、そろそろ、本題に入ってくれるかな。オレをここに呼び出した訳って奴が聞きたいんだが……」

あら、残念、とつぶやきながらマリナはグラスに口をつける。形の良い口唇の跡がうつすらと冷えたグラスに移る。それをテーブルに戻したマリナは居住まいを正して、語り始めた。

「二日後よりこの最高神殿において、神官、巫女の中級試験が始まりますの……」

「中級試験？」

「創世神殿において、巫女はそれぞれ、初級、中級、上級、神官は初級、中級、上級、高神官、最高神官という風に大まかに位分けされております」

「なんだか冒険者みたいだな」

「あくまでも組織内での名目上の肩書ですわ。ただ、そうする事でそれぞれのお務めの内容が少しずつ変わってくるのです。」

試験は、筆記、面談、実技の3つで行われ、及第点に達した者が

合格するのです」

「難しいのか？」

「中級神官職はさほど問題ではありません。中級巫女職の方は少しばかり困難である、というのが一般的な見解ですわ」

「ふーん」

興味なさげな態度で彼女の話聞くザックスの姿に微笑みながら、マリナは続ける。

「試験の最後に実技審査が行われます。内容としては神官、巫女数名がパーティを組んで初級レベルダンジョンに入り、簡単な探索を行うというものですよ」

「それはまた、大変だな……」

「神官は闘う事に慣れている者もおりますが、巫女の大部分はそうではありません」

「なんで、そんな、真似を？」

僅かに言葉を切ったマリナは、少し遠くを見つめながら語った。

「私達巫女は多くの冒険者の方々の転職のお世話をいたします。日頃からお世話をさせていただく冒険者の方々が、一体どのような場所でのような想いを抱えてダンジョンに挑まれるのか……。それを己の中できちんと実感する事が、この実技試験の目的ですよ」

「つまりただ踏破すればよいという訳ではないと……」

小さくうなずいてマリナは続けた。

「各パーティには必ず審査官と護衛役をかねた上級冒険者が一人以上付き添う事になります。その役をザックスさんをお願いしたいのです」

「オレに？　なんでまた……。大体オレは上級冒険者ではないぜ」

「一つには《エルタイヤ》の神殿組織が冒険者協会に不審感を持っていると言う事が上げられます。先日の初級レベルダンジョン一斉搜索ミッションが見事に空振りしたのはご存知ですか？」

「ああ、あれね」

嫌な経験を思い出し、ザックスは少しばかり不機嫌になる。

「あのミッションはこの度の中級試験の事前調査も兼ねていたのですが、さほど、大した成果も上げられなかった事と上級冒険者達がほとんど参加しなかった事もあって、神殿の権威をないがしろにされたと、長老達がお怒りになられ、それに対して冒険者協会の方々も大きな反発をなされまして……」

「成程……」

「要は上級冒険者程度の実力、もしくはそれに準ずる経歴があればよいのです。ザックスさんの過去の実績には申し分がありませんし、何よりも称号《魔將殺し》を持つお方。ザックスさんは最高神殿の召喚状を受け取られるに値する十分な資格をお持ちなのですよ。反対する者など決しておりません。故に私が推薦し、とあるパーティの護衛役をつとめて頂きたいのです。」

これは神殿からのクエストであると同時に、私個人からのクエストでもあります」

「なんか、裏がありそうだな。この前みたいなのは御免だぜ」

「あれは私の意向というよりは、おじさまの意向が強く反映されたものですわ。ザックスさんには是非ともこのクエストをお受けして頂かなければなりません」

「理由を聞きたいな。あんたがそうまでして、オレに頼みこむ理由つてのを……」

その言葉に彼女は伏し黙る。だが、直ぐに顔を上げた。

「ザックスさんの担当するパーティにはイリアがおりますの」

「はい？」

「実は、イリアはこの度の中級巫女試験に臨んでおります」

「……………」

「年齢的にも巫女となつての期間から考えても彼女にはまだ少し早いのですが、それでも彼女にいずれ中級巫女の資格は必要となるであろうと考え、私が推薦したのです。もちろん本人も大いに乗り気です。あの娘ならば筆記と面談はおそらく問題なくクリアするでしょう」

「よし」

兔族は優秀ですからね、とマリナは付け加える。

「えっと……、オレは彼女につきそい、影から手伝って彼女を合格に導けっというのか」

僅かに慚然とした表情でザックスは尋ねた。

「めっそもありません。そんな事は私も彼女も一切望んではおりません。彼女に相応の力がないと判断されたのならば、即座に失格と判断して頂いて構いません」

「あなたの望みがよく分かるのだが……」

「私がザックスさんに望むのはあくまでも彼女の身の安全です。ダンジョンの探索は慣れぬ者の目から見れば恐ろしいものです。いかに常日頃から神官や巫女が武闘訓練を行っているとはいえ、いざ、人外のモンスターを相手にするとすれば、その精神状態は計り知れません。彼らが神官や巫女であるとはいえ、所詮は寄せ集めのパーティ。何が起きるか分からないのです」

「……………」

「そして何よりもあの娘は兔族です。その異質な容貌と種族への偏見が、どのような悪影響を及ぼすか計りしれません。だから私は……」

マリナの瞳は真摯だった。微笑みすら忘れ、彼女はいつしかザックスに詰め寄っていた。

「なあ、おっさんはどうしたんだ。一応、イリアの『お義父さん』なんだから……」

「おじさまはあの娘の受験について何一つ口出しはいたしません。ああいう方ですから……。巫女としてのイリアの全ては私に一任されているのです。ただ、今回のアイデアを与えてくださったのは、おじさまではありませんが……」

彼女は言葉を切った。室内に小さな沈黙が生まれた。

「お受けしては頂けないでしょうか」

探るような瞳が揺れる。僅かに呼吸をおいて、ザックスは肯定の意思を示した。

「いいだろう、受ける事にしよう」

その言葉にマリナの顔に明るい花が咲く。そしてさらに悪戯っぽい表情が浮かび上がった。

「ふふっ、ザックスさん、それはイリアの為なのですか？」

「いや、違うな。オレの為だ」

意外な言葉だった。

拍子抜けしたようなマリナの顔は新鮮だった。

「興味があるってのが本音だな。即興とはいえ一つのパーティがどんな事を考え、前に進んで行くのかってのを外側から見るのはとても面白そうだ。それに……、神官ってやつらが一体どういう頭の構造をしているのか、知りたいってのもあるしな」

ザックスの意味深な言葉に、興味深げな色を浮かべるマリナの顔を見つめながら、彼は続けた。

「実はここにきてしばらくして、神官籍を持つ奴にひどい目にあわされてな……」

手短かにいきさつを語る。

しばらくの間、腹を抱えて笑っていたマリナだったが、やがて、真顔に戻るとしみじみと呟いた。

「残念ながら神官籍を持つ者の全てが心正しいものではない、ということはどうしようもない事実です。ザックスさんがお会いした方だけでなく、神官という肩書を利用して横暴を働く者は大陸中のあちらこちらに潜んでおります。先日のブレルモン神官長の一件を覚えておいでですか？」

「ああ」

「神に仕えるものとはいえ、所詮は人間です。私達が人間の組織のしがらみの中で生きていく以上、どうしても避けられない問題なのです」

「大変だな……」

「何を他人事のようにおっしゃられておられるのですか、ザックスさん。あなたもこれからしばらくの間、当事者になるのですよ」

言葉と同時にマリナは立ちあがり、自身の執務机へと向かう。

「ええと、マリナさん……？」

「実技試験の審査官である以上、様々な不正の手段を知っておかねばなりません。中には買収や色仕掛けで迫ってくる者もおりますわ」

「お、おい、そこまでやるのか……」

「はい、悪用すれば大きな利益となりうる創世神殿神官籍というのは、そのくらい魅力的なものなのです」

なにやら引き出しをこそご探りながら、マリナは言葉を続けた。「ですから、これからザックスさんには手短にレクチャーを受けて頂きます」

きりり、と顔を上げたマリナの顔には伊達眼鏡が、そして手には鞭が握られている。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ、マリナさん！ その姿はまさか……」

「今回は私も忙しく余り時間はとれません。服装はこのままでご勘弁を……。それでは前回よりもさらに厳しくビシビシ行かせていただきます！ 御覚悟の方、およろしいですか？」

先日のお悪夢がよみがえる。

「待てつ、そこまでやる事はないだろう！」

「問答無用です！ 大丈夫！ ここには誰もおりません事よ、ザックスさん。ここは貴方と私の二人きり……。何が起ころうとも二人を止めるものなどありませんわ」

「そう、来るのか……」

「これもひいては可愛いイリアの為、そして未来のザックスさんの為。さあ、さあ、参りますわよ！」

「オレの話の聞けー」

室内にザックスの悲鳴が響く。

マリナの輝かしい悪人回心人数記録に、再び一人追加されることとなった……。かどうかは定かではない。

2
0
1
1
/
0
8
/
3
1
初稿

05 イリア、苦悩する！

雑多な種族の人々がひしめき合う大食堂で手早く質素な食事を済ませたイリアは、与えられた個室に戻ると「はあ」と一つ丸い溜め息を吐き出した。いつもと変わらぬ質素な食事メニューであったがどうにも食べた気がしない。

仕方なく手荷物の中からもぞもぞと携帯食料を取り出した。

以前にザックスに教えられた冒険者向けのそれは、激しい彼らの一日を支えるべく、味はともかく栄養素だけは十分である。神殿で生活する神殿巫女としては、はしたない行為であるが、栄養不足で目を回しては元も子もない。試験の準備を手伝ってくれた姉巫女達の為にも、何としても期待に応えねばならないと考え、彼女は狭い自室で一人カリコリと携帯食を口にしていた。

「淋しいな……」

ぼつりと呟く声が部屋の中に広がり消えて言った。

『お友達をたくさん作っていらっしやいな』

不安が先走るイリアに姉巫女達はそんな言葉で励ましつつ、彼女を笑顔で送り出した。過去に中級試験を受けた姉巫女達の様々な失敗談や思ひ出話を聞かされたイリアは、自分もそんな経験をして世界を広げたい、そんな希望と共にこの地を訪れていた。

だが、現実は厳しかった。

思い切って数人のよその神殿の巫女達に声をかけてみたのだが、その反応はあまり芳しいものではない。どうやら、彼女の幼さと兎族である事を示す外見が相手に警戒心を呼び起こし、場合によって

は必要以上に敵愾心を持たせてしまうようだった。

不運な事に、今回《ペネロペイヤ》の大神殿からこの試験を受験するのはイリア只一人のみである。

神官試験を受ける者達は数名いるのだが、彼らと行動を共にする事は《ペネロペイヤ》での彼女の立場上、逆に相手に気を使わせてしまう事が分かっていたため、できなかった。

結果として、彼女はこの神殿に来て以来、ずっと一人で時を過ごしていた。

日程や場所、装備の確認などやるべき事をいくつか終えてしまった後は、もはや手持ち無沙汰となり、割り振られた自室で、経典の復習をしつつ、虚ろな時間を過ごすこととなった。

ふと、思いついた彼女は荷物の中から小箱を一つ取り出す。柔らかな布状の外観のそれを開くと、中には鈍い輝きを秘めた《額環》サークレットが収められている。ザックスから贈られたそれを優しく撫でるように触れたイリアは、再び箱を閉じて両腕にしっかりと抱きしめ、ごろりと寝台に横になる。

「早く終わるといいのに……」

一人きりになると、日々の生活の中で自身がいかに姉巫女達の庇護のもとに暮らしていたかを思い知る。

巫女としての資質がどんなに優れていたとしてもそれでは人は集まらない。自分も敬愛するマリナ姉さまのような女性にならなければ……、そんな思いが小さな胸をよぎった。

いつしか眠りの世界の住人となっていたイリアの孤独な夜は、こうして静かに更けて行った。

中級試験もいよいよ後半戦となった。

筆記と面談を難なくクリアしてほつとしかけたイリアの前に、最後の関門である戦闘実技試験という難問が立ちはだかっていた。前日までの筆記と面談で振り落とされたものを除いた選抜者達によって構成されるパーティでの、初級レベルダンジョン探索である。

神殿巫女であるイリアにとってダンジョンの探索はこれが2度目だった。

初級巫女になった時の研修で、入ることとなった《初心者向けダンジョン》では彼女はほとんど戦闘を行う事なく、パーティの後ろに控えていた。戦闘はもっぱら血の気の多い神官候補生に任せ、傷ついた彼らを回復させつつパーティの後ろの方からおそるおそる様子を見をしているだけだった。

低級とはいえモンスターはモンスターである。そんな異形を相手に戦闘を行うのはさすがに恐ろしかった。

だが、今度も同じような訳にはいかないだろう。

気を引き締めた彼女は己の装備である魔法弓の状態を確認する。

通常の矢を放つ事も可能なそれは《魔法銀》^{ミスリル}製の弓と特殊な魔法素材の弦にマナを込める事で魔力矢弾を生成し、放つ事が可能である。

巫女の中でも僅かな者にしか扱えないそれを、《ペネロペイヤ》の大神殿から借り受け、彼女は己の試験に臨んでいた。

試験の為に臨時に供与された《袋》^{バッグ}の中に数種の矢束とともに、携帯食と治療用の薬草水の瓶を数本、収納する。自室の姿見で戦闘用の巫女装束に身を包んだ己の姿を確認したイリアは、僅かに躊躇った後で、手荷物から《額環》^{サークレット}を取り出して装着し、その上から鉢巻きを締める。

(目立たないよね……)

念入りにチェックを済ませた彼女は準備を終えたことを確認すると自室を後にする。向かう先は最高神殿前の広場だった。

一都市の北区画をほぼ占拠する最高神殿前には広大な広場が存在する。

様々な施設が立ち並び中に冒険者協会《エルタイヤ》支部の正門が面しているこの場所こそ《エルタイヤ》における《旅立ちの広場》であり、いくつかある《転移の門》が様々な場所へと通じていた。神殿内の巨大な通路をいそいそと歩き、ようやく表に出たイリアの眼前には、多数の人々の集う光景が広がる。大部分の者達が戦闘衣に身を包んだ神官や巫女たちであり、そんな彼らを目当てに幾つもの出店が立ち並び、試験に向かう彼らにアイテムや装備を提供していた。

行き交う人の波に華奢な体をもまれながら、イリアは指定された集合場所へと向かう。

共に仲間としてダンジョンに向かう人たちとうまくやれるだろうか、という期待と不安に小さな胸を膨らませて、彼女は人ごみを掻きわけ前へと進む。

そんな彼女の目にふと、見知った姿が映った。

「えっ……」

そんな事、あるはずがない。

ここは《ペネロペイヤ》から遥かに離れた場所である。中級冒険者である彼がこんなところにいる事などあり得ない。

頭の中をぐるぐると回るそんな思考に流されそうになりながらも彼女は、その姿を追いかける。ようやくたどり着いた先にあったのは、彼女の指定された集合地点に立つザックスの姿だった。

(どうして……)

ただの偶然？

それとも私を心配して励ましに？

あろうはずもない妄想が次々にイリアの頭に浮かんで消えてい

く。

(とりあえず、挨拶を……)

なんて声をかけようか、と様々な言葉を思い浮かべながらザックスに近づこうとしたイリアは、ふとザックスの胸に審査官の印を見出した。

「あつ……」

小さな声を上げてその足が止まる。

なんだ、そういう事か。

彼は今日この実技試験の審査官として、この場所に立っていたのだ、と彼女はようやく理解した。膨れ上がった期待が音を立ててしぼんでいく。

「バカだな……私……」

ぼつりと呟いた時だった。後ろから不意に押されて彼女はその場に転んだ。

「なにやってんだ、ウサギ！　こんなところでブーツと突っ立ってんじゃねえ、ノロマめ！」

戦闘衣に身を包んだ神官らしき若い男が転んだイリアに悪態をつく。彼も又、中級試験の受験者のようだ。詫びる気配もないところを見ると、どうやら故意に彼女の背中を押したらしい。

公衆の面前で転んだ恥ずかしさに、顔から火が出る思いで立ちあがるうとしたイリアに、不意に手が差し伸べられる。顔を上げたイリアの目に映ったのはザックスの姿だった。

差し伸べられた暖かい手をとると同時に、彼女の腰に手が当てられ、そのままぐつと強い力で引き上げられた。イリアが感謝の言葉を口にするのを封じるかのように、ザックスは彼女の膝の汚れをはたいて、彼女に話しかけた。

「戦闘実技試験を受験されるイリアさんですね……」

とてもよそよそしい言葉だった。その一言に呆然とする。

(どうして……、嫌われてしまったんだろうか……)

だが、ザックスが手元の帳面に彼女の名前を書き込む様子を見て、再び理解する。

(彼はきつと私のパーティの審査官になるんだ)

よそよそしい顔を見せるザックスの姿に数日前のマリナの姿が重なった。筆記試験会場に試験官として現れた彼女は微笑みを浮かべる事もなく淡々と仕事をこなし、去っていった。

『これからはしばらく他人です。知ってる方に出会っても、あくまでも創世神殿の巫女として慎ましやかに振舞うんですよ……』

マリナの言葉が不意に思い浮かんだ。ああ、あれは、こついう事だったのだ、と合点がいった。

これは偶然ではない。きつと姉さまが私を気遣って手をまわしてくれたに違いない。

だったらいつまでも甘えていて良い訳がない。自分は十分にやっ
ていける事を証明して、姉さまに無用な心配をさせてはならないの
だ。そう考えた彼女ははっきりとした声でザックスに告げる。

「実技審査でお世話になります。《ペネロペイヤ》のイリアです、
よろしく願います、審査官殿」

彼女の言葉に手を止めたザックスは、僅かに顔を上げた後で小さく
右手をあげてその場を離れようする彼女を呼び止めた。

緊張気味の少女の顔。

おもわず駆け寄って一言かけてやりたくなるのは、彼女が愛らしい
顔立ちをしているからだけではない。過去、彼自身が受けた彼女
からの無垢な行為に、大きな借りがあるゆえである。

だが、今は状況がそれを許さない。

故に己の役割に徹するふりをして、少女が自身の力で目的を達す
るように見守らなければならなかった。

数日前、最高神殿内で見かけたイリアの姿は、これまで見た事がないほどに弱々しかった。

多くの人々が織りなす流れの中にぽつんと一人取り残されたように身を置くその姿に、ザックスはつい先日までの《ペネロペイヤ》での己の姿を重ねた。

目的がないわけではない。だが、その目的の達成の為に励まし合う仲間がいるわけでもなく、ただ漠然と時を待つ。

そんな時の孤独な人の姿というものは実に儂い。それがイリアのような美少女であるなら、なおさらである。必要以上に人の波の中に浮いてしまうその姿は、彼女の笑顔をよく知る者からすれば、いたたまれなくなる。

マリナに報告すべきであるかと思つたものの、彼女も又、己の仕事で忙しい。否、彼女の事である。務めに忙殺される中で、イリアの状態をきちんと把握しているに違いない。きっと心を鬼にして、彼女を黙って見守っているのだろう。

「辛いな……」

ザックスはぽつりと呟いた。

だが、彼女はザックスに自分から声をかけ、堂々と神殿巫女として立ち振舞おうとする。そんな姿を目の当たりにしたザックスはふと彼女の額に気付いた。それゆえに、僅かばかり己の職権を濫用することにしたのである。

「イリアさん、鉢巻きが少し緩んでいるようだ。こちらへ……」

僅かに指を滑らせ、彼女の鉢巻きの下にあるものの存在を確かめる。そのことに気付いたのだろう。イリアは僅かに顔を赤らめた。彼女の鉢巻きを直すふりをしながらザックスは周囲に決して聞こえぬよう小さく呟いた。

「頑張れ……。しっかりと見てるぞ……」

その言葉に彼女の小ぶりの耳がピクリと動いた……。

運命的な出会いというものがある。

その相手が絶世の美男美女であったならば、大抵の者は至福の時を過ごすことを夢見るだろう。だが、自身に害悪しかもたらさない相手だったなら、大抵はそんな運命を与えた神を呪う事になるだろう。その時のザックスの心情は概してそんな感じだった。

事の起りはどこかで聞いたような台詞からだった。

『おい、いいな、俺がリーダーなんだから、命令には絶対に従えよ』
その言葉に受験者の出席帳簿とにらめっこをしていたザックスの
手がぴたりと止まった。

おそろおそろ見上げた先には先ほどイリアを故意につき飛ばした
男の後ろ姿があった。

「まさか……」

急ぎ名簿を確認するもそれらしき名前はない。ただの偶然か……、
と思いつつこちらをふり向いたその男の顔にザックスは啞然とする。

「ヘッポイ……」

忌まわしきその名と行状が、ついでに奴の半生の年表までがモノ
ローグつきで思い浮かぶ。だが、そんなザックスに、男はすぐさま
こう答えた。

「ヘッポイだと……。あんな愚兄と一緒にするな。我が名はマヌケ
ル。将来の最高神官となる男の名だ。覚えておけ！ 愚鈍な審査官
め！」

（駄目だ、こいつ思考回路が奴と同じだ……）

そして、その災禍が降りかかるのは……。急ぎ帳面を確認し、そ
れが己とイリアの身に降りかかるといふ事実には愕然とする。マリナ
の力もここまででは及ばなかったらしい。

「マジかよ……」

ザックスの苦悩を増幅させるかのように奴の声が響き渡る。

「いいか、俺のこの輝かしい経歴に挫折という名の傷をつけ、足を引く張るやつは許さんからな」

すでにリーダーになる事を前提に、オレ様理論でパーティの主導権を握りつつある。愚兄譲りの人心掌握術、自己主張術にイリアを含めた周囲の者達はまんまと嵌っていた。

パーティの基本方針は受験者の自主性によって決められるため、審査官であるザックスに口出しをする権利はない。自身の立場のほどかしさにかつてこれほど悔しい思いをした事はないだろう。

「特に、そのウサギ！ お前はどうもノロマのようだ。一番後ろに引込んで俺達の戦いの邪魔をするんじゃないぞ！」

ダンジョン内で殿を任せられるのは戦闘技術と生存技術の高いものという冒険者の常識を気持ちよく無視して、オレ様理論で突っ走る。何よりもイリアに対する暴言の数々はどうにも我慢がならない。(ダンジョン内ではなにが起きるか分からない。人も多い事だし、道中、一人くらいいいなくなっても、別に構わねえよなあ……)

腰の《ミスリルセイバー》に手を当てながら、ザックスはそんな物騒な事を考えるのだった。

「くられ、モンスターめ！ マヌケル・アタック！」

必殺技に己の名をつける辺り、その自己顕示欲は愚兄以上である。だが、その一撃がライアットのモノマネであるところはいただけない。己の面子のためなら他人の手柄を容赦なく横取りする者の典型であろう。

チームワークはともかくイリア達の、否、マヌケルの、マヌケルによる、マヌケルの為のパーティは順調に歩を進めていた。

殿にはそれなりに経験のありそうな冒険者上がりと思われる神官

がさりげなくついている辺り、メンバーそのものの潜在能力は決して悪いものではない。イリアに対する暴言などつくに忘れて戦闘に興じているマヌケルは、目の前の事にしか興味がないらしい。

「いいか、俺達はこのダンジョンを踏破し最高の成績で堂々と合格するんだ！ ついてこれない奴はおいていくからな」

（そんなことしたら、失格になるに決まってるだろうが……）

もう幾度心の中でつつこみ続けたか分からない。周囲に気を配りながらザックスは彼らから少し離れてついていく。

このダンジョンはザックス自身が過去に単独踏破していないものの内の一つであり、奇しくも先日、ザックスがヘッポイと行動を共にした場所だった。13ある初級レベルダンジョンの中では全12階層と比較的浅く、出現モンスターの強度レベルは中層部以降は若干高めだった。当然、最下層まで一本道ではない為、脇道に迷いながら進めば、おそらく2日ばかりとなるだろう。

《鋼鉄槌》と《鉄の短槍》を装備した二人の神官が前衛に、3人の巫女を間に挟んで、最後尾を《鋼鉄の剣》を装備した神官が守る。

この布陣ならば中階層まではどうにかなるだろう。

全体のマナLVが10前後のパーティではあるが、明らかに戦闘慣れしていないものがパーティの半数を占めている辺り、中階層以降の集団戦では苦しくなるはずだ。事前に提出されたりリストによるとイリアを除く二人の巫女は術師としての才能はさほど高くないように強力な複数同時攻撃手段はない。頼みの綱はイリアの魔法弓を使つての魔法矢弾による遠隔同時攻撃であるが果して、その事に彼らが気付くのか？

「適当なところで止めるべきだろうな……」

彼らの後ろ姿を眺めながらザックスはぼつりと呟いた。

この試験ではダンジョン踏破にはさほどの意味がない。

日程的なものもあるが、大切なのはその過程であつて、状況に応じて適切な行動をとることができたかどうかが試される。

例え、途中でダンジョンを離脱することになっても、それが審査官の目から見て適切な行動であると判断されたならば、その時点で合格となる。逆にマヌケルのように仲間を見捨てても己の手柄に執着する者は、神官としてあるまじき行為として『失格』となるわけである。

当然、試験結果はパーティの全ての者に均一に及ぶ訳で、皆が受かるか落ちるかの一蓮托生となる。マヌケルを除く他の者達はその辺りの事にうすうす気づいているのだろうが、いかんせん、強烈すぎるマヌケルの個性にあてられ、ちぐはぐさが浮き彫りとなり、各人が思い思いに状況を切り抜けているといった様子である。イリアも見知らぬ者達との間に挟まれて、そのどこか遠慮がちな姿勢が、パーティのちぐはぐさに輪をかけていた。

2011/09/01 初稿

06 イリア、頑張る！

様々な不安要素を詰め込んで進むパーティに異変が生じたのは、探索開始から半日が経過し、中階層辺りに差しかけた頃だった。

「うわああー」

先頭を先走り気味に進んでいたマヌケルの声が通路に響いた。ここまで比較的強力な敵も出ないで順当にやってきた事で、みな気持ちが悪んでいたのだろう。あわてて、彼の元へと駆け寄ったメンバー達の目に映ったのは、負傷して倒れたマヌケルの姿ではなく、腰を抜かして倒れた姿だった。その姿に誰もが吹き出しつつ、その指さす先を見た彼らは皆驚きの声を上げた。

このあたりは魔法光や光苔の恩恵が少なく、通路内は暗い。そんな中に、ぼんやりと一人の女性が静かに立っていた。

(あれは……)

その姿にザックスは息をのむ。

それは先日ヘッポイとのクエストの際にみたエルフの幽霊だった。勝気そうな瞳にしっかりと結びあげた美しい金髪、そしてエルフ特有の長い耳。そのどれもにザックスは見覚えがあった。やがて彼女は音もなく通路の奥へと消えていく。

「チクシヨウ、バカにしゃがって……。待ちやがれ！」

恥をかかされてむきになったマヌケルが起き上がりざま、彼女を追いかける。

「おい、バカ、ちょっと、待て！」

ザックスの叫びを無視して通路の奥へと消える彼を追って、一つの影が走った。イリアだった。

少女の唐突な行動に一瞬、啞然としたザックスだったが、速やか

にパーティに指示を出す。

「試験は一時中止。君たちはここで周囲を十分に警戒しながらゆっくり前進、脇道があれば停止。何かあったら大声を上げる事！ 自分からの戦闘は極力避けるように……」

言葉と同時に彼は振り返ってイリアの後を追う。スキル《駿足》を発動させ、彼女の後ろ姿が見えたその瞬間だった。

「うわあぁー」

再びマヌケルの悲鳴が響いた。

慌てたザックスは追いついたイリアの身体を抱き上げるとスキル《倍力》《全身強化》を発動させてマヌケルの姿を探す。通路のさらに先、開けた空間の広がる場所で魔法光の明かりに照らされたのは、負傷して壁に寄り掛かるマヌケルと彼を襲おうとするオーガの姿だった。

「イリア、ここで待機を。周囲には十分に警戒するんだ」

こくこくと頷く腕の中の彼女を下ろすとザックスはそのまま広間に飛び込み、隙だらけのオーガの背中を《ミスリルセイバー》で《一刀両断》する。戦闘不能となったオーガはあっけなく崩れ落ち、その軀は消えた。

「なんでこんな奴が……」

オーガ……巨人族に分類される最下級のモンスターであるがその強度はC級とされている。中級レベルダンジョンではさほど珍しくないそれも、初級レベルダンジョンであるここではまず出現の機会はないというのが過去の実績だった。

想定ランク以上のモンスター、徘徊するエルフの幽霊。

二つの異常事態に同時に遭遇したのは、もしかしたら自分が原因なのだろうか？ そんな不安がザックスを襲う。

そんな彼の元にイリアが、そして遅れてパーティのメンバー達が駆けつける。ザックスは彼らと共に負傷して壁に背を預けているマヌケルの元へと駆け寄った。

「痛ってーよ……」

マヌケルは思った以上に重傷だった。

薬草水と二人の巫女の治癒魔法の同時併用によって事なきを得たが、シヨツクは大きかったらしい。

「おい、どうなってんだよ。審査官！ あんな奴が出るなんて聞いたやいないぞ」

怪我の回復と同時に悪態をつく。重傷である怪我ほどその回復と引き換えに疲労がたまるものだが、マヌケルはそんな気配を微塵も見せずザツクスに喰ってかかる。

「まあ、オレも聞いてはいないな……」

「冗談じゃない、いい加減な仕事してんなよ、審査官！ これ以上こんなところにいられるか！ 俺は離脱する」

「それはこれ以上の実技試験の参加を拒否して、リタイアするとう意味か？」

「当然だろう！ 俺達の手に負えない敵に遭遇したんだ。これ以上の前進は無謀。速やかにリタイアする事が正しい判断だろうが……」

「それは他の者達も同意見なのか？」

ザツクスの言葉に皆が互いに顔を見合わせる。

「では仕方がないな。お前たちはこの時点でリタイア。戦闘実技試験は失格となり、中級試験は不合格とする。以上だ！」

「なんで、そうなるんだよ！」

マヌケルが喰ってかかる。

「知ってるぜ！ この試験はダンジョン踏破だけでなく、状況に応じて適切な行動をとることができたかどうかを試されるって事を！ リタイアしたって不合格なんかになるわけないじゃないか！」

思った以上に狡賢い奴らしい。きちんと判定基準を考慮したうえで、自分のわがままを通す術を心得ているようだ。

だが、ザツクスは引かなかった。

「お前、何か勘違いしていないか。それを決めるのは審査官であるオレだ！ お前たちの行動が不適切だと判断したからこそオレはお前達を失格にするんだ。問題があるか？」

「ふざけんな、俺達に命を侵すリスクを背負ってまで進めって言うのかよ、冗談じゃねえ、なあ、みんな」

同意を求めるものの彼らも混乱しているようだ。同調する気配はない。ザックスは続けた。

「当然だ。過去この試験において命を落した受験生だっていない訳じゃない。ダンジョンに入るってのは、そういう事だ」

「冗談じゃねえ。あんた狂ってるよ。こんな奴につき合ってられるか！ 指輪をよこせ！ 後であんたの事は神殿に訴えてやるからな」
掴みかかろうとするマヌケルをいなしたザックスは、逆に彼を殴り飛ばした。

「今のお前の行為は審査官に対する暴力行為として報告させてもらうが……、構わねえな」

その言葉に周囲がしんと静まり返る。さらにザックスは続けた。

「マヌケル、お前は度重なる独断専行の上、パーティを全滅の危機に陥れた。さっきのオーガだって、苦戦はしただろうが総がかりで当たればどうにかなったはずだ。お前の行為はリーダーとしてもメンバーとしても目に余る」

「……………」

「さらにイリアさん。君も同罪だ。どういう理由があるか分からないが、君が先行した事でパーティは分裂し、オレは残った彼ら4人をおいて君達を助けに行かなきゃならなかった。それが、どれだけ危険なことか分かるか？」

ザックスの言葉にイリアは下を向く。

「それから他のメンバーもだ。度重なるマヌケルの独断専行を引きとめるものは誰一人としていなかった。忘れてないか？ たった一人の独断で自分自身の命が危機にさらされているということに……。お前ら、たかが試験だからうまく要領さえつかめば合格できるはずだ、って勘違いしてるんじゃないか？」

その言葉に皆の顔色が変わった。

「オレは神官ではなく冒険者だ。そして審査官として神殿に臨時に

雇われた身だ。だが、ダンジョンに入ればそんな事関係ない。襲い掛かってくるモンスターに冒険者も神官も区別はねえ。戦闘になれば強い奴が勝ち、弱い奴がやられる。優勢劣敗、弱肉強食だけが真実だ！」

誰もが無言であった。

「冒険者としてお前らに一言、言わせてもらおう。オレはお前らと仲間としてパーティを組みたいなんて、これっぽちも思わねえ。お前たちが経験不足だからじゃない。ダンジョンに入ってモンスターと対峙するって事をなめてるやつに、背中なんて任せられないからだ！」

マヌケル！ お前、さつき、俺達に命を侵すリスクを背負ってまで進めって言うのかって聞いたよな。そんな事当たり前だろ。冒険者をなめんじゃねえ！」

「別に俺は……」

「もうひとつ言っておいてやる。お前は自分がミスしたのを棚に上げて、あるかどうかも分からぬルールを身勝手に解釈し、それを盾に我が儘を言ってるだけだ、自分のちんけな面子可愛さにな！」

オレはお前のような身勝手な奴を一人知っている。正直、実際に食わない奴だし、二度と顔も見たくねえ。

でもな……、あいつはどんなに困難な敵や状況に対しても、真っ向から向かって行った。周囲に頼らず己一人でなんとか前に進むのと、がむしゃらにな……。冒険者としてそれがいい事だとは思わないが、それでもお前みたいに卑怯な真似はしなかった。

はつきり言って、お前は奴以下だ！」

マヌケルの顔色が変わった。周囲のだれもが黙りこむ。そんな彼らにザックスは静かに告げた。

「お前らに時間をやる！ 今後どうするのか自分たちで結論を出せ！」

その言葉を残してザックスは周囲を警戒するために彼らの側を離れた。魔法光の明かりの下、ぼつりと開けた空間の中に6人の姿が力なく浮かび上がった。

「あ、あの、ごめんなさい、勝手な事をして……」

残された6人の中でそう口火をきったのはイリアだった。

「私、以前にあの方をお見かけした事があって……、それでつい気になって追いかけてしまいました。その結果皆さんに迷惑をかけてしまつて……。どうか許して下さい」

ぺこりと頭を下げる兎族の少女の行動に誰もが息をのむ。やがて、一人の神官が口を開いた。

「済んだ事です。貴女の行為をとやかく責めるつもりはありません。わたしも動転してそれどころではなかつたのですから……。それよりも問題なのはわたし達がこの先どうするかという事でしょう?」「確かにそうよね。審査官殿の言うとおり、少なくとも私達はここに来るまでばらばらだった。責任をマヌケルさん一人に押し付けるわけにはいかないわ」

巫女の言葉にさらに同調する。殿を務め続けた神官がさらに付け加える。

「このままだと審査官は確実に俺達を不合格にするはずだ。悪いが俺はリタイアするつもりはないね……」

「じゃあ、このまま続行しようつてのによ! 踏破したつて意味なんかねえんだぞ!」

マヌケルが反発する。

「踏破するかどうかじゃない。このまま尻尾を巻いて逃げ帰ることが嫌なんだ」

その言葉に一同が押し黙った。周囲を沈黙が支配する。

「あ、あの……」

口を開いたのは、イリアだった。

「わ、私も続行に賛成です。いえ、私はそうしたいです」

その言葉に周囲が彼女に注目する。そんな彼らに向かってイリアはその想いを伝えた。

「私は巫女です。いつも神殿という場所で多くの冒険者の方々のお手伝いをしてきました。神殿巫女の仕事が多くの人々が思うように楽な物だとは決して思っていません。でも、神殿はある意味において命を失う危険のない安全な場所である事は事実です。だから私はこの場所にもう少しだけ身を置いて、私達がお世話をさせていたたく冒険者の方々が、いつもどんな思いを抱えていらっしやるのかを知りたいのです」

イリアの言葉に周囲が黙りこむ。やがて一人の巫女が口を開いた。「あたしも同じ……。いつも難癖をつける冒険者って嫌いだけど、ここにきて怖い思いをしてみても、どうしてあいつらがあんな事を言うのか少しだけ分かったような気がする……」

「俺も続行に賛成だ。ここで逃げるのは負ける事と同じ。この程度の相手から逃げてたら、この先モンスターだけでなく、人間の相手もしなければならぬ神官の仕事なんてできるかよ」

それまで黙りこんでいた神官が口を開いた。そして誰もがマヌケルに視線を向ける。

その視線に耐えきれなくなってマヌケルはうろたえながら、答えた。

「わ、分かったよ。続行すればいいんだろ。でも、どうなっても知らねえからな……」

その言葉に皆が安堵する。

「それでは、私、ザ……、いえ、審査官殿を呼びに行きます」
言葉と同時にイリアが駆け出す。不思議な魅力をもつ少女の背を、他のメンバー達は今までとは違う視線で見送るのだった。

「結論は出たのか」

戻ってきたザックスの言葉に返答したのはイリアだった。

「私達はこのまま、進みます。審査官殿、引き続き試験の続行を許可して下さい」

ザックスの目に映るイリアの姿に、いつも神殿で巫女の務めを果たしている彼女の姿が重なった。

「ここから先は難易度が上がる。モンスターそのものの強度レベルはさほど変わらないだろうが数か問題になってくる。負傷者も出るぞ……。さっきのマヌケル以上、のな！」

「覚悟の上です」

「死人も出るかもしれないぞ……。それは君自身かもしれない。分かってるのか……」

「それは……」

小ぶりの耳がピクリと動く。

「半端な義務感なら止めた方がいい。次の機会だってあるんだから……」

「違います。そうじゃないんです」

イリアが強い調子で訴えた。

「確かに私達は甘いのもかもしれません。目の前で誰かが死ぬということを知らない以上、それを想像するしかありません。それでも私達は前に進みたいのです」

「どうしてだ……」

ザックスの言葉に僅かに躊躇いを見せた後で、イリアは続けた。

「以前にとある冒険者が私に言ったのです。冒険する事が楽しい……と。嫌な事も怖い事もあるかもしれないが、仲間たちと連れだって目的を完遂して、それを共に喜びあってみたい……と。私も同じなのです。今、共にいる彼らと前に進んで何かを掴み取る、そんな喜びを忘れずに神殿巫女としてこれからも冒険者の方々のお世話をしていきたいと、そう願うのです。いけないでしょうか？」

真摯な瞳だった。それはかつてザックスがイリアに語った言葉。

彼女は彼の何気ない一言をしつかりと胸に刻み込んでいたらしい。

「他の奴らも同じなのか」

ザックスは周囲を見回す。誰もがイリアの背に立ち、沈黙をもつて答えた。

「いいだろう、だったら審査官として命令する」

やおら自身の左手から《跳躍の指輪》を抜き取るとイリアの小さな手に握らせる。

「イリアさん、今後は君をリーダーとして、パーティの全ての事柄を決定すること。離脱のタイミングも君自身が決めるんだ。いいね……」

その言葉に驚いたイリアは周囲を見回した。僅かにマヌケルが顔をそむけたものの、他のメンバーはそれを了承したようだった。彼らの支持が受けられた事を知ってイリアは胸を張ってザックスに告げる。

「分かりました。審査官殿のおっしゃられる通りにいたします。ご迷惑をおかけしますが引き続き、御同道よろしく願います」

言葉と同時にぺこりと頭を下げる。そんな彼女の姿を見ながらザックスは、言葉にできぬ想いを抱えていた。

不思議なものだ　　快進撃を始めたイリア達を目の当たりにしてザックスはそんな感慨に包まれていた。

個人の能力がさほど変わったわけではない。だが、目の前の彼らは先ほどまでのばらばらのパーティと同じものであるとは思えないほどに息の合った様子を見せ始めていた。

中階層を過ぎ、予想通りダンジョンの攻略難易度は上がり始めた。押し寄せるモンスターの群れに対して、イリア達は互いに声を掛け合い、困難に対応した。

イリアの魔法弓が効力を発揮する事でモンスターの集団に先手を

とってダメージを与え、前衛に立った二人の神官が同時に攻撃を掛ける。彼らのすぐ後ろに立った巫女達が負傷した彼らを手早く治療し、その間に殿を務めていた神官が空いた前衛をカバーする。各々が激しく位置を入れ替えながら次々に立ちふさがるモンスターの群れを掃討していく。

一度つき始めた勢いは止められないようで、戦い慣れしていない二人の巫女たちまでが簡単な炎術や氷水術を的確に使用して集団攻撃に幅を持たせはじめた。

そんな中、最も目を引いたのはイリアの変化だった。

それまでの遠慮がちでおずおずとした姿勢から一転して、パーティの中心に立った少女は魔法弓を駆使して敵を掃討する一方で、リーダーとして申し分ない役割を果たし始めた。

あいかわらず先走りがちなマヌケルをマリナ譲りの話術と微笑みで巧みに抑え、周囲に溶け込ませる。いつしか余裕の生まれ始めたパーティには笑みが浮かび、彼らの放つ空気に安定感が生まれていった。

『イリアはとても強い娘なのよ……』

マリナの言葉がふと思い浮かぶ。その言葉にザックスは得心がいった。

ふと、彼らの姿にかつて見たウルガ達の背が重なる。

LVこそ低く戦闘技術も稚拙ではあるが、互いに声を掛け合う彼らの姿は見る者に安心感を与え、彼らはもう問題はない、ザックスにそんな思いを抱かせた。

仲間たちの間で微笑むイリアを見ながら、ふとザックスはヘッポイの事を思い出した。彼への対応の仕方には、もっと違うやり方があったのではないのか、と。

イリアが周囲と協力してマヌケルをうまく同調させたように、ザックスも又彼に対してそうすべきであったのではないのだろうか、そんな後悔がザックスの中に生まれた。

「負けてるな、オレ……」

仲間たちの輪の中で凜々しく前を向くイリアの横顔に、ザックスはぼつりと呟いた。

中級試験が無事に終了した最高神殿内の大広間では、受験者及び神殿関係者の多くが集まり、盛大な打ち上げパーティーが開かれていた。会場内に生まれた幾つもの人の輪の中で、とりわけ大きなものの中心にあつたのはイリアの姿だった。

華やかな神殿巫女の正装に身を包み額に《額環》をつけた彼女の周囲には共にダンジョンを踏破するという快挙を成し遂げ堂々と合格をはたした仲間たちだけでなく、他の受験者である巫女達や神官達の姿もあつた。数日前に見た頼り無い面影など微塵もなく、周囲の者達と楽しげに談笑するイリアの姿は眩しく輝いていた。

「あらあら、あの娘はすっかり人気者になりましたね」

会場の片隅で泡酒のグラスを片手にそんな彼女の姿を眺めていたザックスの傍らにたつたマリナが声をかける。

「ああ、本当によかったよ……」

マリナとグラスを合わせながらザックスはぼつりと呟いた。

「あんたは、きちんと分かってたんだな……」

イリアをリーダーに据えてみてほしい、それは試験開始前に提示されたマリナのアイデアだった。

「うまく誘導していただいたのはザックスさんでしょうか？」

「冷や汗ものだったがな……。でもあそこまで上手くいくとは思わなかったよ」

「ふふつ、日頃の仕込みが違いますわ……」

豊かな胸を反らせて得意げにマリナが微笑む。

「あれは、あの娘本来の資質です。周囲を巻き込み明るい花を咲か

せる。私達《ペネロペイヤ》の巫女達もそんなあの娘の強さと明るさにとても救われているのです。きつとこれからもあの娘は多くの人たちに明るさを分け与えていくのでしょね

少しだけさびしげな表情を浮かべて彼女は語る。ふとイリアを包む輪の中に小さな波紋が浮かぶ。マヌケルがイリアに「ウサギ、お前を俺様のヨメにしてやるつ」と妄言を口走り、周囲からタコ殴りにされているらしい。

「イリアの姿を見て、いろいろと考えさせられたよ」

その言葉をマリナは微笑みで受け止める。そんな彼女に一人の巫女が声をかけた。どうやら人気者であるのはイリアだけではないようだ。

「御免なさい、ザックスさん。少しだけ席を外しますね」

そんな言葉と共にマリナは軽やかに去ってゆく。入れ替わるように彼に近づいて来たのはイリアだった。わずかに躊躇いながらも、彼女は彼におずおずと声をかける。

「あの、審査官殿……その……」

「もう、試験は終わったんだ、いつもどおりでいいよ……」

ザックスの言葉にイリアの顔に明るい笑みが浮かんだ。そして彼女は両腕で彼の左腕を抱え込んだ。

「お、おい、イリア……それは……まずいんじゃない」

だが、彼女は怯まない。輝くような笑みを浮かべてザックスに囁いた。

「皆さんが《魔将殺し》の冒険者であるザックス様に興味を持っています。こんなところで一人でいらっしやらないで、私と一緒に来て下さいませんか。さつきから困まればなしで、頬がひきつりそうなんです」

小ぶりの耳がピクリと動き、少女はぺろりと舌を出す。

「私にはとてもマリナ姉さまのような真似はできません。ですから、助けると思って……」

片目をつぶって悪戯っぽく笑いながら、そんな言葉と共にぐいぐ

いと力強くザックスの腕を引く。輝くような笑顔を向ける少女の仄かな胸のふくらみとぬくもりが、ザックスから抵抗する気力を消し去っていく。

「それと……」

人の波にもまれながらザックスの傍で彼女は小さく呟いた。

「あなたのおかげで私は一人ではなくなりました。ザックス様、本当にありがとうございます」

その言葉を呟いた少女の横顔は、誰よりも眩しくザックスの目に映るのだった。

2011/09/02 初稿

07 ザックス、躊躇う！

自室の扉が叩かれる音で目を覚ます。

不快になるほどに強くもなく、気付かれぬほどに弱くもなく……。ドアのノックの仕方にも奥義が存在するのだろうか？ 寝起きの頭にそんな馬鹿げた考えを浮かべながら、ザックスはドノヴァンの宿の自室の寝台で目を覚ました。

「そっぴや、戻ってきたんだっただな」

ここ数日、中級試験の審査官としての傍ら、マリナに様々な雑務を押し付けられ、正確にはザックスがそう言いだすように仕向けられたのだが、最高神殿内の一室に彼は寝泊まりしていた。

波乱万丈だった中級試験も終わり、めでたくお役御免となったザックスは、マリナとイリアに見送られ、再び西地区にあるこの酒場兼宿屋に戻っていた。二人の神殿巫女はまだしばらくこちらに滞在し、あちらこちらへのあいさつ回りや雑務に追われることになるらしい。紆余曲折の末、見事中級巫女となったイリアは真新しい巫女の印を胸に、名残惜しげにザックスに手を振っていた。

様々な規律と制限のある神殿で寝起きしていた頃とさほど変わらぬ息苦しさは、今はなつかしく感じるだろうが、数日の内にまた、ストレスの原因となるのだろう。そう思いつつ、ザックスは朝食をとるべく階下へと足を運んだ。

だが、そんな彼などよりはるかに気の短い者もいたようで、その日の朝はドノヴァンの酒場始まって以来の嵐が吹き荒れる事となり、店はターニングポイントを迎える事となった。

「だから、もうこの酒場には出入りする気はない、って言ってんだ！」

「そんな、一体どういう理由で……」

「どうも、こうもないな！ 出て行くっていったら出て行くんだ。あんたは黙って、証明書を発行しろよ！」

これがガンツだったならノキル酒の一杯でも差し出し、去るものは追わずというところなのだろうが、生憎、ドノヴァンはまだ若く経験も浅い。自身の気付かぬ始末に対して不安なのだろう。

かつて、冒険者達の集まる『酒場』とは本来文字通りの意味であった。

だが、様々なダンジョンで得た稼ぎで飲んだくれる彼らがそのまま朝を迎える事で、いつしか酒場は宿屋を兼任するようになったのである。

生活の中で不可欠な『住』の一角を担うようになった『酒場』兼『宿屋』の顧客リストは必然的に冒険者達の実態を図る為の戸籍のようなものとなっていき、そんな酒場の店主達の寄り合いから酒場ギルドが生まれたのである。やがて、そのような各都市の酒場ギルドが、大陸で絶大な権力をふるう神殿勢力や国家群に対抗し、弱い立場の冒険者達を守るべく統合されたのが冒険者協会だった。

冒険者達の管理を任される酒場は協会から認定されることで、都市における税やその他の面で様々に優遇され、協会からクエストの支給が受けられる。酒場の看板に協会認定証が描きこまれると言う事には、大きな意味がある。

その一方で、不祥事を起こしたり、登録冒険者が一定数を切ってしまうえば、その酒場からは認定証がはく奪され、廃業か、認定証を得ずに営業を続ける「裏酒場」として残るしかない。当然、様々な特権も剥奪される事で、その経営は極めて苦しいものとなる。

ドノヴァンの酒場も例に洩れず、彼の酒場の登録冒険者数は認定基準ラインぎりぎりになりつつあり、極めて危ない状態にあるらし

い。彼が去っていきこうとする冒険者に対して食い下がるのは、このような背景があった。

「出て行く事を止めはしません。ただ、理由を教えてくださいと言っているのです」

「うるせえな！ そんなものあるかよ、出て行きたいから出て行きたい、って言うてんだ。あんた、いちいち面倒くせえんだよ！」

「そんな……」

カウンターで店主のドノヴァンと言い争っているのは獣人族である牛族の男だった。気の長さとおおらかさで定評のある種族のはずだが、そんな評判など全く当てにならぬかのような勢いで激昂している。長い間、押さえつけていたものが弾けてしまった……そんなところだろうか。

怒りに震える牛族の男にドノヴァンは珍しく食い下がっている。

「私達酒場の店主には冒険者の皆様の『食』と『住』をお世話すると同時に、その行動を把握しておく義務があるのです。責任ある認定証を頂いた店の主として、協会への報告義務を全うしなければならぬんです」

「何かと云えば規則、規則って。こっちは冒険者なんだ。ダンジョンに潜ったり厄介なクエストを抱えて疲れて帰ってくることもある。出会った奴らと意気投合して別の店で大騒ぎすることだってあるんだよ。そんな不規則な生活が当たり前なのにそれを規則、規則で縛られちゃたまらないんだ！」

「そんな方々だからこそ規則が必要なのでしょう？ 酒場や宿屋には種族を越えて多くの者が滞在します。皆さんの価値観が違うからこそ、一定のルールが必要なのが分かりませんか？」

「だからそれが、行き過ぎだと言ってんだ！ あんたも分からない人だなあ……」

ああ、そういう事なのか。

ザックスは牛族の男の言葉に得心がいった。彼がこの宿に来て以来、どことなく締め付けられるような思いを抱え続けていたものの正体がうつすらと見えたような気がした。

だが、それをどう彼に伝えればいいのか？

今のザックスには牛族の男以上に上手く、それをドノヴァンに伝える言葉が見つからなかった。

傍観する位置に立たざるを得ない彼は忸怩たる思いをかみしめる。これはドノヴァンからガンツへ、そしてガンツからザックスへ依頼されたクエストでもある。だが今のザックスには手に余る問題だった。どちらにも言い分があり、どちらも正しい。それが感じられるからこそ、ザックスには語るべき言葉が見出せなかった。

自身の考えとその立場に理解を示されない悔しさに涙ぐむドノヴァンと、怒りのままに拳を振り上げたもののその下ろし所に困った牛族の男がカウンターを挟んで睨み合う。朝食時でありながら空席が目立つ一階席では突如として勃発した修羅場に多くのものが困惑していた。おそらくはそこにいる誰もが二人と同じような想いを抱えているのであろう。そんな時だった。

柔らかな歌声と共に一人の男が二階席から階下へと降りてくる。豎琴を奏でながら現れたのはザックスのよく知る男　シーポンドだった。

「おお、店主殿に優しき種族の方もおはようございます。さわやかな朝のひと時に争いごとは、少しばかり無粋ですね……」

「なんだ、あんた、関係ない奴は引っ込んでくれ……」

男の恫喝を「ラララー」と歌を口ずさんでいなしながら、シーポンは言葉を続けた。

「店主殿、ここは彼の言われる通りに速やかに証明書を発行し、気

持ちよく送り出してあげるのが粹、というものではありませんか？」

「わ、私は……」

「彼も飛び出たはよいが、もしかしたらこの宿の良さに気付いて再び帰ってくるかもしれない。去ろうとするものを無理やりに引きとめても、得られるものは何もありませんよ……」

シーポンの助け船にドノヴァンは素直に従った。

「ご利用有難うございました。行ってらっしゃいませ……」

商売上の笑みを浮かべながらそれを男に引き渡したのは、ドノヴァンの酒場の店主としての誇りゆえであろう。

出された証明証を決まり悪げに引き取った男は、フン、と鼻息を鳴らすと大股で、店を出る。それを機に再び店内は元の朝の静けさを取り戻し始めた。

「シーポン、ドノヴァンさん……」

「おお、ザックスさん、こちらに戻られていたのですか。大任、御苦労でしたね……」

「まあな。そんなことよりドノヴァンさん、すみません、力になれなくて……」

「いえ、ザックスさんの謝られる事ではありません。それにしても私は間違っていたんでしょうか？」

返答などあるはずのないその問いが、店の空気の中へと消えて行く。

「亡き父から店を受け継いで二年近く、私は私なりに一生懸命にやってきましたつもりです。だが、そんな努力も空しく、冒険者の皆さんは離れて行くばかり。皆さんのお役に立とうと頑張ってきたつもりなのですが、もはやどうすればよいのか……」

ドノヴァンの言葉が重く響く。だがそんなドノヴァンにシーポンは意外なほどにあっさりと答えた。

「答えはすでに貴方自身が分かっているのではないですか？ 店主殿……」

豎琴の音楽と共にシーポンは語る。

「答えですって……！」

「例え、貴方が分かっていたとしても、先ほどの彼がそれを言葉にされたではないですか？」

「……………」

「あるいは、これまでも去って行った人々は何らかの形でそれをあなたに示してきた。だが、貴方はそのことから目をそらし続けてきた……………」

「！」

「人の世にはよくあることです。自身の望む正解が、他者が望まぬ不正解であるという事実を目をつむってしまつてしまうという事は……………」

「そんな、私は……………」

シーポンは彼の言葉を遮る様に豎琴を掻きならしさらに語った。

「私事でお恥ずかしいのですが……………、私も又、目をそらし続けるものの一人なのです」

「シーポンさん……………」

「多くの方が私の奏でる楽曲を美しい、楽しいと喜んでくれます。

だが、その時の私はいつも寂しさを感じているのです。なぜなら彼らが喜んでくれる楽曲は私にとっては音楽とは呼べぬ物……………。私にとっての最上の音楽とは魂の全てをかけて紡ぎ出す私独自の音色の事……………。だが、それは決して他者には受け入れられない。たとえそれが私にとって親愛なる者達であっても……………」

シーポンがザックスに意味ありげな小さな笑みを送る。ザックスは決まり悪げに頭を掻いた。

「自身が最良と思うものが他者に受け入れられないということは寂しいもの。だが、人が他者と共に生きていくためにはどこかでそれと向き合わねばならないのです。受け入れ妥協するのか……………それとも突っぱねるのか……………」

ドノヴァンは下を向いたままだった。

「それでも私はこれからも追い求めたいと思います。私が最上とする音楽でありながら、人々が心から喜んでくれる音楽の存在を……………」

その言葉を最後にシーPONは語り終える。あとは只豎琴の調べだけが優しく流れた。しばらくして顔を上げたドノヴァンは意を決したようにザックスに尋ねた。

「ザックスさん、教えてください。私の何が間違ってるのかを……」
小さくうなずいたシーPONの顔を見て、ザックスは静かに語り始めた。

「俺はドノヴァンさんの事が個人的に嫌いじゃない。仕事も熱心に行っていると思う。だが、この店は冒険者の為の物ではない気がする。さっきの牛族の男がいった事は正しい。ドノヴァンさん、あなた、冒険者としてダンジョンに入った事はないだろう？」

その問いにドノヴァンはコクリと頷いた。

「確かにここには規則が多い。ドノヴァンさんの言うとおり多くの価値観の異なるものが集まる以上、決まりごとは重要だ。でもそのどれもがここで時間を過ごす冒険者のためではない。その全てが店を切り盛りするドノヴァンさん達に都合のいい決まり事なんだ……」

瞬間、彼は目を閉じた。

「御免、ドノヴァンさん。生意気言っただもこれはガントツの親父から受けたクエストであり、そして、ドノヴァンさんへの感謝をこめて、あえて言わせてもらった……」

互いの間に沈黙が流れる。やがて、ドノヴァンはぽつりと「ありがとう、ザックスさん」と呟くと店の奥へと消えて言った。

「きつと分かってくれますよ。彼は……」

そうとうとシーPONは再び明るい曲を奏で始めた。

「さあさあ、ザックスさん朝御飯にしましょう。今日のメメノ鳥の卵料理は絶品ですよ」

言葉と共にいつもの2階席へと向かう。

嵐の過ぎ去った店内にはいつもの朝の時間が静かに戻っていた。

「で、その後、奴はどうしたんだ？」

カウンターにおかれたアルキル果実のしぼり汁の入ったグラスの横で顔を伏せたままぐったりとしているザックスを見下ろしながらガンツは尋ねた。

「別にどうもしねえよ。その日一日顔は見なかったけど、翌朝にはケロリとした顔で気持ちいい挨拶してたぜ。まあ、唯一変わった事といえば宿の規則が半分くらいに減っちゃまったってことかな」

「店の事を何か言ってたか？」

「別に……。まあ俺が引き払う頃には少しばかり食事時の客足が増えてたかな。あそこの飯はなかなか上手いから……。ところで、いいの。なにか助言とかしなくて……」

ザックスの言葉をガンツは鼻で笑う。

「ふん、必要ある訳ないだろう。店を作っていくのはあいつだ。いくら親から受け継いだからって、それをそのまま守っていけるなんて甘い世界じゃねえ。時代が変われば人の趣向も変わる。それを肌で感じてはじめて一人前ってもんだ！」

「あんたの知り合いだったのか、ドノヴァンさんの親父さんって人は……」

「昔の弟子さ。いい奴はみんな先に逝っちゃう。残ったのは悪党ばかりってね」

「あんたもか？」

「ふっ、そんなところさ。ところでお前の方はどうなんだ。帰って早々にアルキルのしぼり汁なんて飲んでるところをみると、まだまだって感じだな」

あの日から数日が経過し、ザックスは予定通り《エルタイア》を後にして《ペネロペイヤ》に帰還していた。あの日以来時折共に飲

むようになつたドノヴァンは別れ際に「今度来られる頃にはきつと繁盛していますよ……」と言って笑つてザックスを見送つた。シーポンは再び旅に出てしまい、又どこかの空の下で魂の音色を奏でているのだろう。

それなりの充実感を伴つて帰還したザックスだったが、《ペネロペイヤ》に到着するや否や、彼に再び災難が待ち受けていたのである。

「この状況でどうやって笑え、と？」

カウンターに倒れ伏したザックスの傍らにおかれた一枚の紙片には『挑戦状』という言葉が大見出しで踊っている。《旅立ちの広場》でそのピラを受け取つたザックスは、それを見るや否や、目が点になつた。

挑戦状

《魔将殺し》ザックス殿

来たる酉の月、大格闘技大会にて貴殿との手合わせを望む。

この挑戦から逃げられるならば、以降《魔将殺し》の称号は当方のものとし、貴殿には《卑怯者》の称号を贈呈し、自由都市《ペネロペイヤ》中にこれを喧伝する事とする。

闘技場現覇者 デュラグヌス

気付けば《旅立ちの広場》の周囲にはこれと同じような張り紙が幾つもベタベタと張り付けてある。幸いザックスの肖像までは張り出されてはいなかったが、直に大騒ぎになる事は間違いないだろう。マナ酔いとは異なる目眩を覚えながらザックスは、懐かしいガンツ＝ハミツシユの酒場に帰還したのである。

心なしか店内にいる冒険者達の視線を強く感じる。あわよくばひ

と儲けと行ったところだろうか……。

「下らんことを考えるもんだ、興行主共も。放っておけ」
ガンツは吐き捨てるように呟いた。

二か月に一度《大市》と交互に開かれる都市を上げての格闘技イベントは自由都市《ペネロペイヤ》の貴重な収入源となる。ザックスは格好の客寄せパンダというところだろう。

「そうは言うけどよ、多分それだけじゃ済まなくなるぜ……。それにあんたにも迷惑になっちまうだろう……。」

闘技場覇者何某という輩はおそらく焚きつけられて踊らされているだけだろう。

ここで勝ったとしても第二、第三の馬鹿共がこぞって現れるのは目に見えている。

逆に負けたとしたら、それはザックスのみならず《魔將殺し》の事件に関わった多くの人々の名誉に関わってくる問題となる。

ガンツの言うように無視したとしたら、おそらくさらに悪質な手で、ザックスやこの店を揺さぶってくる事になるだろう。

「ふざけやがって！」

吐き捨てるザックスの言葉と共にアルキルのグラスの氷がコロロンと転がる。どう転んでもザックスには良い結果になると思えない事態に、彼は途方に暮れていた。そんな時だった。

「では、作戦を練る為に拙者と暫し山籠りというのはいかがでござるかな？ ザックス殿」

懐かしい声に振り向いたその場所に立っていたのは、ブルポンスのリーダー、マゲを左に結ったイーブイだった。

「イーブイ、あんた帰ってたのか……。」

「お久しぶりでござる、ザックス殿。活躍は聞いておるでござるよ……。」

「大した事なんて、やってねえよ。それより山籠りって？」

「どうもこの企て、いろいろキナ臭い噂が聞こえてきて……。まず、まずは身を隠すのが先決かと思ひ、ザックス殿を誘いにきたでござるよ」

「それは構わねえけど、一体どこへ……」

「それはついてのお楽しみでござる」

「いいぜ、とりあえず任せるよ」

「では出発は今夜にでも。善は急げと申すでござるからな……」

かくして、ザックスは再び《ペネロペイヤ》から離れ、身を隠す事となった。

2011/09/03 初稿

08 イーブイ、語る！

遙か彼方の地平線へと続く山々の稜線は鮮やかに色づき、空の青さがさらにそれを引き立てる。紅葉というものを初めて見るザックスには実に新鮮な景色だった。とがった葉の木々ばかりがうつそうと茂る故郷の山々は、この時分、そろそろ寒さが厳しくなり始め、ちらほらと舞う白いものにうつすらと覆われ始める頃である。

「景色が気に入ったようござるな」

「ああ、驚いたよ。《ペネロペイヤ》のすぐ近くにこんな場所があるなんて……」

イーブイと再会したその夜、二人は、イーブイの手配した荷馬車の台に乗って、自由都市の正門を後にした。近郊の農村から麦を運んだ帰りらしい荷馬車の台から、澄み切った秋の空を眺めながら揺られる事2日、とある山のふもとにある掘立小屋に二人の姿はあった。

「マナを使えるようになると、冒険者はみな《転移の扉》ばかりを使うようになるでござるからな。拙者達は便利な道具を使ってどこにでも行っているようで、実は限られた狭い場所ではかり時を過している事に、大抵気付かぬでござるよ」

「全くだ、すぐ近くにこんなきれいな場所があるなんて思いもしなかったよ」

「ここらあたりは野生の狼がいるくらいで凶暴なモンスターは現れんでござるからな……本当に良いところでござるよ……」

「モンスター？ 山や野原に出るのか？」

「ザックス殿は南の生まれでござったな。あちらの方はそういった事は余りないようござるが、北や西の国々ではそういう事もある

のでござるよ。古代遺跡そのもの、あるいは山が丸ごとダンジョンにある召喚魔法陣のようになっており、定期的にモンスターが現れる……そんな中で暮らす人々もいるのでござる」

「へえ……」

「詳しい事は拙者も知らぬでござるが、これは世界の成り立ちに関わる事であつて、神殿のタブーに触れる事らしく、原因についてはこれ以上のことは分からないそうでござる」

「そうなのか……」

世界は広い。

まだまだ知らぬ事は山のようにあるようだ。

「さて、ザックス殿、それでは特訓を始めるでござるか」

「特訓つて、一体、何をするんだ」

「闘技場覇者何某とその裏に控える者達の企みを叩きつぶすための秘策を身につけるためでござる」

「なあ、その事なんだが……」

勝つても負けても逃げてても、分の悪い展開になる事は間違いない。これで終わると思えない泥沼の未来が想像できるだけにザックスの腰は重かった。

「確かにザックス殿の心配はもつともでござる。実のところ拙者達が《ペネロペイヤ》を離れた日にはすでに、《転移の扉》周辺には興行主たちの手の者が張り付いておりまして、ザックス殿の動向は見張られていたでござる」

「つまり、荷馬車を使つて都市を抜け出したのは奴らにとって盲点だった訳だな」

「あと一日遅かったら、多分それも無理でござつた。今頃《ペネロペイヤ》は大騒ぎでござろうな……」

「嘘だろ……」

「後は大会期日近くまで特訓と静養を兼ねて身を隠し、その日に合わせて帰還し、その足で何某とやらを叩きのめす、それも思いつきり派手に……でござる。そこから先の事は拙者達にお任せ下され。」

まずは目先の勝利を確実にする事でござる」

「ああ、でもなんで、あんたがそこまで……」

「ふむ、敢えて言うなら、ウルガ殿達の名誉の為でござるかな」

「ウルガ達の？」

「ウルガ殿達はガンツ＝ハミツシユの酒場、いや、この《ペネロペイヤ》の冒険者達の誇り。彼らは我々冒険者の先駆けとして多くの者達を引っ張ってきたでござる。《ブルポンス》もダントン殿にひとかたならぬ世話になり申した。

そんな彼らが長い間苦悩しながら、ようやくザックス殿の助力を得て、命を掛けて戦い散っていった、そんな死闘の末にある《魔将殺し》の称号を、金もつけや売名行為の為に利用しようと言う輩が、拙者は許せぬでござる」

「……………」

「残念ながら、拙者はザックス殿のように魔将と闘う事は出来なかった、いや、その資格すらなかったでござる。だからせめて、彼らの名誉に泥を塗るような真似をする輩から、失くしてはならぬものを守りたいと思うのでござるよ」

「そうか……、そうだよな。あんたの言うとおりだ」

「ではザックス殿には拙者の必殺技《体当たり》を伝授するでござる」

「た、体当たり？」

戸惑うザックスにイーブイはニヤリと笑みを浮かべた。

「《体当たり》を甘く見ておると痛い目を見るでござるよ、ザックス殿」

イーブイはザックスを滔々と豊かな青い水をたたえる湖を背に立たせた。

「念の為でござる。全ての強化系魔法を使った上で、魔法障壁を発生させて踏ん張っておくでござるよ」

「あ、ああ」

言われたとおりに《全身強化》《倍力》を発動させ、さらに籠手

の魔法障壁を発生させる。

「ザックス殿は泳げるでござるな……」

「ん？ ああ」

「では、行くでござる」

距離にして5歩程度の場所に離れて立っていたイーブイの姿が言葉と同時に揺れた。

次の瞬間、凄まじい衝撃と共にザックスの身体は撥ね飛ばされ、水面上を数度はねた後、湖に沈んでいた……。

「なんだ、今のは」

ずぶぬれになって水から上がったザックスは、開口一番イーブイにそう尋ねた。《全身強化》のおかげでさほどダメージはなかったが、気付いたら岸から遥かに離れた水中に投げ出されていた事は相当にショックだった。

「ただの体当たりでござるよ……」

左側頭部のマゲを揺らしながら、イーブイはにこやかに笑う。

「嘘だろ」

と、言いつつ地面を見たザックスは、イーブイが立っていたところを目にして啞然とする。そこには人の背丈程度の幅のクレーターが生まれていた。

「このあたりの土は柔らかいでござるからな、拙者の踏み込みで大げさな穴になつたでござる」

「……………」

「いかがでござるかな。ザックス殿」

「ああ、頼む、イーブイ、オレにこいつを教えてくれ」

たった今、その威力の凄まじさを己の身をもって実感したばかりである。ザックスの冒険者としての本能がこの技の習得を求めている。彼の様子に満足気な表情を浮かべて、イーブイは語り始めた。

「ザックス殿は《居合閃》という技をきいた事はござるかな？」

「いや、知らん」

「これは、サザール大陸の東、イステイリア諸島の戦士が使う剣技の一つでござるが、その第一段階を応用したものでござる」

「……………」

「大切なのは踏み込みの瞬間と衝突の瞬間のマナのコントロールでござる。拙者は特殊スキルとして《部分強化》《剛力》を持っておりますが、それだけでもあのくらいの威力は出せるでござる、拙者以上のスキルを使いこなすザックス殿ならばどれほどの力が生まれるか、御想像できますかな」

「いや……………」

「戦闘の最中、補助魔法で身体を強化してしまえば大抵の者はそのまま戦闘のみに集中するでござる。しかし、強化した身体のマナをさらに己の意思の支配下に置き、集中と拡散を自在にコントロールする事で、瞬間的でござるが自身の能力値を遥かに越えた力を生み出す事が出来るのでござるよ」

「おい……………」

「ザックス殿の理力値はMAX。マナのコントロールを重視することの技とは抜群に相性が良いはずでござる。では、やってみるでござるかな……………」

今度はイーブイが湖を背にして立つ。

「拙者を先ほどのように弾き飛ばさねばこの技を使えたとはいえぬでござるよ。さあ、ザックス殿、多くの者の誇りと名誉のために、特訓あるのみでござる」

展開したシールドを陽光に輝かせながらイーブイは笑う。そして、二人の特訓が始まった。

「ずいぶん形になってきたでござるな」

あれから2日がたち、湖のほとりでのザックスとイーブイの特訓は続いていた。

「まだまだだよ。あんたを一步か二歩程度しか吹き飛ばせないんじや、使い物にはならんだろう」

ザックスの答えにイーブイは笑みで答えた。そんな彼にザックスはふと尋ねた。

「なあ、イーブイ、闘技場の奴らの強さってのはどうなんだ。俺達のこの技が十分に通用するの？」

その問いにイーブイは、少し休憩するでござるか、と声をかけ、盾を閉じると《袋》^{バック}から水筒を取り出した。

「率直に言つて、間違いなく通用するでござる」

きらきらと輝く水面を眺めながら、イーブイはぽつりと呟く。

「でもよ、闘技者とはいえ、やつらも冒険者なんだろ。それなりにマナレベルも高いんじゃないかねえのか？」

「たしかにその通りでござる。だが、戦いとはステータスの数値で全てが決まるわけではないのでござるよ。特に人間同士の場合には……」

その場にごろりと横になって、二人は澄んだ青い空を見上げる。

イーブイは続けた。

「得物も戦い方も自由といえども、闘技場という場所には闘技場独自のルールが存在するでござる。見世物として成立しなければならぬでござるから……。だが、それ故にそこで長く戦い続けられる程、知らず知らずの内に窮屈な枠の中に己の意識が閉じ込められ、奇妙な戦いの型にはまり切ってしまうでござる。闘技場では負け知らずの猛者が、いざダンジョンに入って全くの使い物にならなかった、という事例はよくある事でござる」

「……」
「逆に上級レベルダンジョンを探索する高レベル冒険者が闘技場で

あつさりと負けてしまつ、これもよくある事でござる。闘技場の窮屈なルールに合わせようとするとするあまり、己を見失い実力が出せずに負けてしまつのでござるな」

イーブイは続ける。

「要するにいかなる時でも自身の最大の力を発揮して相手を打ち倒せばよいのでござる。いくつかの戦術はあるでござるが、ザックス殿はこの《体当たり》を用いて、開始の合図と共にそれを決めればいい訳でござる」

「反則じゃないのか？」

「そう取られるかもしれないでござる。だが、それでも構わぬのでござる。冒険者の戦いに開始の合図はありません。自身よりも強大なモンスターに対しその弱点と隙について仕留める……我々の実戦とはそういうものでござる。そんな戦いの中でザックス殿は《魔将》を倒したのではござらぬか？」

「それはそうだが……」

「これは試合ではござらぬ。戦いでござる。」

挑戦状を送りつけられる事で先手こそ取られはしたものの、今、我々は奴らを出し抜いておることに変わりはありません。奴らの土俵の上で奴らの定めたルールに従う必要はないのでござる。

音信不通の相手があるのか来ないのか、自身の出した挑戦状故にそれに縛られた覇者何某というものは、内心動揺しておるでしょう。そこへザックス殿が突然現れ、有無を言わず叩きのめす。それが鮮やかであればあるほど、多くの者は納得せざるをえなくなる。

『冒険者』と『闘技者』は違うものなのだ、と……」

「なるほど、イーブイの考えが読めてきたぜ……」

「ここから先は、成り行き任せになるでござる。だが、この一手は、この先において、二度と同じようなバカ共が現れぬための、最善の一手だと拙者は考えておるでござる」

「……………」

「それに、これまで多くのダンジョンで難解な敵と一人で戦ってき

たザックス殿は奴を前にした時、おそらく相手に対してさほど脅威は覚えぬはずでござる」

「どうしてだ？」

「それはおそらくその時になれば、自然と分かるはずでござるよ」
空を見上げてイーブイはからからと笑った。

「なあ、イーブイ、あんた、なんでそんなに強いのに盾だけで戦ってるんだ？ あんたならもつといういろいな得物が使えるはずだろうに……」

その言葉に暫く、イーブイは黙り込んだ。そして彼はやがてぽつりと呟いた。

「拙者、生来の不器用者でござる」

「不器用者？」

ザックスの言葉にイーブイは小さく笑った。

「拙者の爺様という方はイステイリアの生まれで、素晴らしい剣士であり申した。子供の頃の拙者は、爺様のようになる事が夢であったでござる」

その瞳ははるか空の彼方を見つめている。

「剣の奥義の一つといわれる爺様の《居合閃》はそれは見事な物であったでござる。強力な踏み込みと共に一瞬の内に遙か向こうへと移動し、全ての者が倒れている……いつかあのような技を使える剣士になるのだと、幼い拙者は何度も剣を振り申した」

僅かに言葉を区切る。

「しかし、拙者には剣を使う才能というものが全くといってよいほどに無かったでござる。爺様もその事に早くから気付いておったのでござろう。拙者に己のような剣士になれとは一言も申さなかつたでござる。歳を重ねることに拙者自身、己に才能がないということはどうも感づいていたでござる。しかし、それでも拙者は一縷の望みをかけて冒険者になり申した」

イーブイは深くため息をついた。

「だが、そんな拙者の事を創世神はしっかり見ておられたのでござ

ろくな。《戦士》職であった拙者が《転職》で得られたのは《剣士》でもなく《騎士》ですらない 《闘士》でござった」

僅かに鼻をすする。

「泣いたでござるよ。神殿からの帰り道、拙者は人目もはばからず子供のように泣いたでござる。飲んで、泣いて、あの日は共に《転職》を果たしたブルポンスの面々だけでなく、マスターのガンツ殿にも本当に迷惑をかけたでござる。」

子供のころから憧れ続けた己の夢は一生かなえる事は出来ないのだ 拙者は只その想いだけで一生分の涙を使いきったでござる」
「……………」

「泣いて、泣いて、泣き通して…………、ふと夜明けの空を部屋の窓から眺めたときに、爺様の言葉を思い出したでござる」

「なんて言っただんだ？」

「『剣は決して傷つけ勝ち取る為だけのものではない、己の大切な物を守る為のものでもあるのだ…………』と」

「守る為のもの…………」

「だから、拙者は考えたでござる。剣を使えぬ不器用者の拙者でも、守る事くらいはできるのではないか…………と。そんな思いから拙者は《盾攻防術》を会得したでござる、そして爺様のような剣士になる夢をきつぱりと捨てるために、拙者はマゲを左に結うことにしたのでござる」

「そうだったのか…………」

イーブイはそこでやおら身を起こした。彼の視線の先には青い湖が広がっている。

「人生は理不尽でござる。それを心から望む物に決して与えられる事はない…………。」

だが、その事で他者を恨み運命を呪うのは筋違いでござる。

そして、視点を変えたならば、拙者がそれまでに見落としてきたものが、手近にたくさん転がっていたでござるよ。

それは、ブルポンスという仲間であり、ザックス殿との出会いも

そうでござる。」

「俺が？」

「今はこうして肩を並べて共に湖を眺めておるでござるが、拙者は所詮、凡人でござる。そしていつかザックス殿は、拙者の頭の上を軽やかに駆け抜けて行くでござろう。」

「俺はそんな大それたもんじゃ……。」

「運命とはそういうものでござる。」

あれほど悩み続けたウルガ殿達の五年間を、ザックス殿は僅かな期間で吹き飛ばしてしまった。理由はどうあれ、それは他の誰にも真似の出来なかつた事でござる。

それ故に拙者達はザックス殿に憧れ、期待するのでござる。」

「……………」

「いつか、ザックス殿は己の身に降りかかった困難と戦うべく、それにふさわしい仲間を見つけ、我らが立ち入れぬ領域で戦う日が来るでござろう。ですが、拙者はそんな時に何の力にもなれぬ己を嘆くつもりはござらん。」

なぜなら、拙者達は友だからでござる。

例え、共に闘う事は出来なくとも、きつと何かの力にはなれるはずでござる。ただし、それまでの間はだれが何と言おうと拙者達はパーティでござる。パーティとは目的を同じくする運命共同体の事

それこそが《ザ・ブルポンス》なのでござる。今は例えばならばでも……、友の窮地には皆、何処からか必ず駆けつけてくるでござる。」

「ありがとう、イーブイ。」

「礼には及ばぬでござるよ。拙者達にとっても又、それが喜びなのでござる。」

「そうか……………」

「では、特訓を再開するでござるよ。」

「そうだな。」

言葉と共に二人は立ち上がる。自身の踏み込み位置を確認したげ

ツクスに対して、イーブイはなぜか左腕の盾を外した。

「イーブイ？」

訝しむツクスにイーブイは真顔で答える。

「先ほど『ブルポンス』と言った折、拙者、大切な事を思い出したでござる。もう一つ大事な事をツクス殿に伝授せねばならぬ事を、すっかり忘れており申した」

僅かな疑問が脳裏を駆け抜ける。そんなツクスを尻目にイーブイは続けた。

「温泉宿に滞在するうちに拙者達は一つの結論に達したでござる。ツクス殿という新たなメンバーが加入した事で、拙者達は『ザ・ブルポンス』という新たなステージへと立つことになり申した。ならば……」

背筋に冷たいものが走る。

「それにふさわしい『決めポーズ』と『名乗り』が必要であるはずだ、という事でござる」

「ちよつと、待てえい！」

「ダメでござる。ツクス殿。この二つは我らにとって必須事項、さらにこの方針はすでに決定事項！そして、ツクス殿は我らの運命共同体なのでござる」

「だから、待てと言ってるだろうに……」

「ではツクス殿、これより新たなステージに立つ我らに相応しき新たな『決めポーズ』と『名乗り』を伝授するでござる。準備はよろしいか？」

「オレの話を聞けー」

ツクスの叫びは、さわやかな秋の空と涼しげな湖水、そして鮮やかな色に彩られた山々の木々に静かに吸い込まれていった。

09 ザックス、集う！

神殿の紋章の入った馬車が《ペネロペイヤ》大神殿裏手の通用門の前へと到着する。

まだ日の高い時間に堂々と正面から帰れば大きな騒ぎになるであろうことを考慮しての措置であったが、いざ出迎えの者が誰もいないというのもさすがに淋しいものである。

「ようやく、帰ってこれましたね」

馬車を降りたマリナは、そのふくよかな胸を反らせて大きな伸びをする。開口一番、さわやかな秋の空に向かってそう呟いた。

「マ、マリナ様、こちらはいかがなされますか？」

随伴の神官がよるめきながら下ろそうとした荷の中には、かつてザックスがマリナへの貢物として捧げた大きな木箱があった。最高神殿を離れる際に贈られた饒別の品々が無造作に放り込まれたその箱の内側には、マリナ自身の筆跡で『ザックス寄贈』と書かれている。

「荷は巫女寮の方に届けておいてくださいな。さほど急ぐ物でもありませんから、ゆっくりとお願いいたします」

マリナにいいところを見せようと張り切る彼にそう告げると、彼女は振り返り、馬車の中で荷をまとめていたもう一人の道連れが現れるのを待った。輝く銀の長い髪と小ぶりの兎の耳が特徴的な愛らしい少女が、真新しい中級巫女の印を胸に輝かせて降りてくる姿に手を貸そうとする。

その頃になってようやく年季の入った通用門付近に、彼女達を迎えるべく3人の巫女達の姿が現れた。ずいぶんと急いだのであろう。肩で息をしながら、彼女達はとるものもとりにあえずといった様子で、

こちらへと駆けてくる。

「お、おかえりなさい、マリナ姉さま、イリア！ 御免なさい、出迎えが遅れてしまっ……」

「あらあら、3人ともどうしたのです？ 神殿巫女は常に優雅に立ち振舞う事を、忘れてはなりませんよ」

二人からいくつかの荷を受け取るうとしながら3人は口々に出迎えが遅れた事を詫げる。

「お務めが大事ですから、私達の出迎えなどは後回しでよいのですよ。ですが、今日はそれほど忙しい日ではなかったと思えますが……」

「……」
ゲンを担ぐ冒険者達にとって、転職には日が悪いという事で敬遠され、多忙な巫女達にとっては比較的負担のかからない日を選んで、マリナ達は帰ってきたつもりだった。

「それが、姉さま……」

3人の巫女達は顔を合わせる。

真ん中にいたエルシーが僅かに視線をイリアに向けた後で、マリナにおおずと切り出した。

「実は数日前から神官長様達を始めとした上の方々が気難しいお顔で会議室にこもられまして……。神殿内の空気もすっかりピリピリとしてしまっ……」

「あらあら、それはゆゆしき事態ですね。一体何があったのです」「実は……」

そういうとエルシーは懐から一枚の紙片を取り出し、おおずとマリナに差し出した。4つに畳まれたそれを開いた彼女は、大きく踊る見出しとその内容に眉を潜めた。それは闘技場覇者何某からツクスに叩きつけられた、件の挑戦状だった。

「姉さま、いったい何があったのですか」

脇からひよこりと覗き込んだ兎族の少女も、その内容に目を通す。きつと不安を抱えるであろう彼女を気遣ってエルシー達は口々に慰めようとした。

「だ、大丈夫、こんなの只のいたずらよ……」

「そうそう、彼も、まともに対手にする事なんてないから……」

「まったくいくらネタに詰まったからって、興行主もつまらない演出をしたものよねえ」

彼女たちの言葉に、当のイリアはきよとんとした表情を浮かべる。意外な彼女の反応に3人の巫女達は顔を見合わせた。

そんな彼女たちに向かってイリアは微笑みを浮かべると、その可愛らしい口を開いて静かな口調で告げた。

「大丈夫ですよ、姉さま方。ザックス様ならきつとうまく切り抜けられます」

堂々と、自信たっぷり。

妹巫女のその言葉とマリナ譲りの笑顔に、3人の姉巫女達は一瞬呑み込まれそうになった。

「こっのー！」

二人の巫女がイリアを羽交い絞めにしてその両頬をつねり上げる。

「ちよつと、どうしちゃったのよ、その余裕は！」

「中級巫女になって、大人の階段も登っちゃたのかしら……この娘は」

「フミヤア、い、いひやいれす。ね、姉ひやま！」

「ほらほら、しっかり顔をお見せなさい」

「駄目よ！ いそいで大人になんてなつちゃ……。あんたは一番年下なんだから、ずっと私達の可愛い妹分だからね……」

そんな3人の姿を目にしながらエルシーはマリナに尋ねた。

「あの娘。少し変わりましたね。いい経験をしてきたのかしら……」

「ええ、件の彼のおかげで巫女としても人間としても一回り成長したようですよ」

妹分の成長に目を細めながらマリナは答えた。

「ほらほら、3人ともその辺にしときなさい。神殿巫女は常に優雅

に振舞わねばならないのを忘れたの？」

「エルシー姉さまにだけは、その台詞は絶対に言われたくないわ」

「似合わないと思います」

「だよー」

「なんだとー」

イリアを中心にきゅきゅと笑い合う4人の妹巫女達の傍らで、マリナはもう一度手の中の紙片に目を通した。

(どうやら、大事になるかもしれないですね)

欲に目のくらんだ者達が、藪をつついて大きな竜を出すことにならねばよいのですが……。マリナの胸に一抹の不安が広がった。

グラスを床にたたきつける音が、店内に響きわたる

「おい、おっさん、ザックスって奴を出せ、って言っただよ、ここにいるんだらうが……」

数人で徒党を組んで現れたのは格闘技大会の興行主の手先のチンピラたちであろう。そんな彼の鼻先で、我関せずとばかりにグラスを磨き続けるガンツにしびれを切らしたのか、彼らの声は大きくなるばかりである。

今度はカウンターのの上に並んでいたものを数個まとめて床にたたき落とす。派手な音が鳴り響き店内は明らかに殺気だっていた。

いそいそと勘定をすませて立ち去るのは、この店の食事目当てにやってきた一見の客たちであろう。店内に残る大抵の者達は、休みを持って余して昼日中から酒を飲んで語り合うこの酒場に所属する冒険者たちである。

「おっさん、俺達もガキの使いじゃねえんだ、手ぶらで帰るわけにはいかねえんだよ」

「知った事か。うちは酒と食い物を出す店だ。持ち帰りメニューならそつちだぜ。ただし、カネはあるんだらうな？」

「てめえ、ふざけてんのか」

とうとうしびれをきらした男はカウンター越しにガンツの襟首を掴んで、両手で締め上げる。ガンツが手に持っていたグラスが床に落ちて割れる音が再び大きく店内に響いた。

「ザックスってやつがいらないんだったら、テメエでもいいんだ、きつちりと事情の説明……アギヤア」

二階席から落ちてきた《鉄槌》アイアンメイイスが男の頭の上に直撃する。ガンツの襟首を掴んでいた男は、そのまま床に大の字になって伸びてしまった。リーダー格の男をやられて仲間たちが色めき立つ。

「誰だ！ 出てこい！」
だが、そんな彼らの頭上を飛び越して、一つの声がガンツに向けられた。

「おい、ガンツ、そろそろいいだろう。こつちはせつかくの休みに気持ち良く酒を飲んでいたいんだ。キャンキャン喚くザコ共に大きな顔させると、せつかくの酒がまずくなっちまうだろうが……」

ガンツの店が誇る二階席の荒くれ者達。その中でも最も気の荒いと目される七番席に座る者達の言葉にガンツは一つため息をついた。
「仕方ねえなあ。お前ら、もうちつと我慢って奴を勉強したらどうだ」

「それを冒険者おれたちにいうのかよ、ガンツ」

「まっただ」

二階席に笑いが生まれる。

「テ、テメエら、俺達を無視すんじゃねえ！」

自分達の存在を忘れたかのようにふるまう彼らの姿に怒りを爆発させる。そんな彼らに向かってガンツは静かに告げた。

「お前ら、ここがどこだかよく分かってないみたいだな」

「な、何だと……」

「しかも、ずいぶんとうちの大事な備品を壊しやがって。常日頃か

ら、ダンジョンで大変な思いをして戦う冒険者様方に気持ち良く食事してもらったために、うちの店で扱う食器はそんじょそこらの安物じゃねえんだぞ」

その言葉に、店内が爆笑する。

荒くれ者達が集う店でそんな物を出せばあつという間に店は破産である。

ちなみにガンツが先ほどから拭いていたグラスは、そんじょそこらの安物以下の値段であり、このような状況を見越してわざと彼らの前に並べていたのである。

「な、なんなんだ、お前ら」

いつもと勝手の違う店内に流れるどうにもおかしい空気に、男達はたじろいだ。気付けば彼らの周囲には屈強な男たちが、手ぐすね引いてガンツの一声を待ちわびている。

「こ、こんな真似して、お前らただで済むと……」

「やれ！」

ガンツの一言で暇と力を持って余した荒くれ者達が一齐に襲い掛かる。あつという間に裸に剥かれてロープでぐるぐる巻きにされた彼らの姿は余りに滑稽だった。

「ガンツ、こいつらどうするよ。ダンジョンの中でも放り出すか？」

「そうだな、この間中級レベルダンジョンの最下層前に印をつけたから、あそこくらいがちょうどいいだろうな」

その言葉に数人の顔が恐怖に歪む。

「いや、こいつらは聖者の像から逆さに吊っておけ。もしも仲間が助けに来たらそいつらもまとめて吊ってしまえ」

よっしゃあ、という声と共に荒くれ者達が男達を抱えて店を出て行く。

「まったく、お前ら、それだけの元気があるんだったら、未踏破ダンジョンにでも挑戦したらどうなんだ」

呆れた口調でそう呟きながらガンツは箒と塵取りを持ちだして、

割れたガラスの破片を片付ける。

そんな一連の事態を二階の2番席に一人座っていた大柄な男は冷めた目で眺めていたのだった。

「協会長、また、こんなところで釣りをなさっておられたんですか！」

「協会長？ 一体誰の事じゃ？ 騒々しいのう。魚が逃げてしまっ
じやるうが」

引き揚げた竿で気の利かぬ部下の頭をぽかりと打つ。それなりに年齢のいつた男が涙目になりながら老人に抗議する様は、はた目からは滑稽であるが、当の本人にしてみればたまったものではない。

「それどころじゃありません。《旅立ちの広場》でガンツのところの冒険者達が大変なことをしでかしてくれまして……」

「……で、誰か困る者が出たのか？」
「いえ、それは……」

日頃から神官たちの手を煩わせるチンピラやごろつきが、次々に捕まえられては聖者の像に逆さ吊りにされてゆくのである。

多くの者達は手放しでこれを大いに喜び、珍しい物見たさにあちらこちらから人々が集まってくる。そんな彼ら目当ての臨時の店は大繁盛。いいことづくめである。

一つまた一つと《聖者の像》に新たなオブジェが吊り下げられるごとに、冒険者達はヤジ馬達と歓声をあげ、それを肴に酒を飲む。実に楽しそうな事この上ない。自分も目の前の老人を縛りあげて、広場に吊るす事が出来たらどんなにすつきりするだろうか。そんな光景を思い浮かべて……頭を振った。

いや、待て、これは常識的なものの考え方ではない、と我に返っ

た部下の男は再び老人に懇願する。

「とにかく直ぐに戻ってください。あちらこちらからの苦情で、本部も支部もてんやわんやなのです」

「……ったく、情けないのう。そんな事、自分達の頭で考えてどうにかできるのか……」

どっこいしょ、と重い腰を持ち上げる。

面倒くさいのう、と呟きながら、釣竿を片手にふらふらと歩いていく老人の後を、魚の入ったバケツを持った部下の男がついて歩く。「……で、ワシが頼んだ事は全て終わっておるかろう」

「それは、もちろん。調査はほぼ終了し、大神殿からはすでに面会の日取りも通知されております」

ボケたふりをしているが、それは表面上の事。

常に数手先を読み切った上での彼の采配は、人材不足の冒険者協会を奇跡的に支え続ける原動力となっている。それが見抜けずに老人の言を軽んじたばかりに、大きな失態を招き僻地へと飛んで行って反省している同僚は多い。

若いうちから目先の欲得に振り回され、そのまま、年をとってどうにも薄っぺらい人生観しか持てないダメな年寄り達が増え続ける中、このような老人は今時珍しい。もつとも部下としてはたまったものではないが……。

「結構じゃ、結構じゃ」

カツカツと笑いながら老人は先を歩く。

「さて、ワシも件の珍しい飾りのぶら下がった《聖者の像》を眺めに行くとするか……。おお、そうじゃ、写影具の準備が必要かのう。だれかワシと一緒に映ってくれる若い娘はおらんかのう。ミニとシツポがあれば大歓迎じゃ」

その言葉に頭痛を覚えながらも、部下の男は彼の獲物の入ったバケツを下げて、後について歩くのだった。

人の集まる場所には様々な空気が生まれる。

華やかな場所には華やかな空気が。厳かな場所には厳かな空気が

……。

そして荒々しき場所に集う人々は、その激しい興奮を周囲と共有し、己の闘争本能を満たさんと原始的な感情に己の身を預けようとする。そんな空気の充満する闘技場の中で、その日最大のメインイベントが、今、始まるうとしていた。

激しい打楽器が鳴り響く試合場の上では、闘技場現王者であるデユラグヌスが腕組みをして対戦相手が現れるのを待っていた。成人男性の優に頭二つ分は高い身長に丸太のような腕と足、そして鍛え上げられた身体を誇る彼は我慢の限界に達しつつあった。

開始予定時刻はとくに過ぎており、フラストレーションを溜めた観客達はしきりに罵声を浴びせ始め、それはいつしか闘技場の覇者である彼に向き始めていた。

「ふざけおつて！」

今朝方、《ペネロペイヤ》市内で対戦相手であるザックスの姿が見かけられた、という知らせが興行主からあつたものの、それ以降の足取りは一切入ってこない。一方的に挑戦状を叩きつけておいて相手の意思も確認せぬままこの日を迎えてしまったために、彼の精神的な負担は想像以上に大きかった。

度重なる観客達のブーイングについて耐えられなくなったデユラグヌスは、組んでいた腕を解き、大声で叫んだ。

「うるせえぞ、観客共！ どうやら《魔将殺し》って奴は、この俺に恐れをなして逃げたようだ。きつと《魔将》を殺つたなんてのもただのフカシに違いねえ！ 所詮冒険者なんてのは口先だけの連中だ！ 適当にダンジョンで小金を稼いで、たらたらと遊んでいるような奴らが、毎日激しいトレーニングで鍛え上げているこの俺様に

かなう訳がねえ、そうだろうが！」

デュラグヌスの叫びに賛同するように、拍手が鳴る。

「宣言通りザックスって奴は今日から《卑怯者》だ！ テメエらはここから出ると同時に大声で街の中で叫んでやれ！ 特に奴の根城のガンツ＝ハミツシユの酒場あたりでな！」

会場が湧く。気を良くしたデュラグヌスはさらに大声で叫んだ。

「けっ、今日は俺の相手も逃げちまった事だし、暇でしょうがねえ！ 誰でもいいから飛び入り参加で俺とやり合おう、って奴はいねえか。おい、そこのお前、どうだ！」

その言葉に会場が静まり返る。

自分では闘わず、他者の戦いを観戦する事でしか興奮を味わえない観客達に、ここ2年近く全く負けなしで闘技場覇者の座に君臨し続ける男に挑もうなどと酔狂な人間がいる訳がない。先ほどまでとは一転して水をうつたように静まる観客席に舌打ちしたデュラグヌスが、試合場を降りるべく背を向けようとした、その瞬間だった。

「オレでよかつたら相手するぜ！ デュラちゃん！」

その言葉で一気に会場内の空気の温度が下がる。

「誰だ！ もういつぺん言ってみろ！」

「だからオレでよかつたら相手する、って言ってるだろう！ デュラりん！ テメエの耳は飾りか？」

確信的な暴言に会場内に矢笑が湧く。声はデュラグヌスの直ぐ側、観客席の最前列近くからである。

「出てこい、テメエ、なめた口叩いた以上、どうなるか、分かっただろうな！」

その言葉に一人の男が立ちあがる。観客席最前列より2列目。それなりに体格はあるものの、自身が相手にしてきた闘技者達に比べればずっと線の細い貧弱な姿にデュラグヌスは戸惑いを覚える。そんな彼にさらに男は毒舌を放った。

「なんだ、なんだ？ でかい図体してボケた面しやがって、テメエの対戦相手の顔も知らねえ、なんて言い出すんじゃないだろうな！」

こつちは朝からわざわざ入場チケット買って、待っててやったのによー！」

その言葉にデュラグヌスは啞然とした。

「お前、まさか……」

男は試合場上がることなくゆっくりと周囲を歩きはじめる。そして一言こう告げた。

「《魔將殺し》の冒険者、ザックス様の登場だ！ 身の程わきまえぬ馬鹿な筋肉ダルマにお仕置きの時間だ！」

その言葉に会場がどよめいた。

「本当に大丈夫なのかよ、それで……」

《ペネロペイヤ》への帰路の荷馬車の上での、イーブイの忠告にザックスは驚いた。

「大丈夫でござるよ。会場内は皆興奮して試合に注目しておるでござるからな、後は十分にイラつかせて平常心を失わせる事でござる。イラつくほどにこちらの奇襲の成功確率はぐんと上がり申す」

その時には半信半疑ではあったものの、状況はイーブイが予想したように動いている。ゆっくりと試合場の周囲を回りながらザックスはデュラグヌスの拳動を見逃さない。

「決して、対等な場所に立つてはならないでござる。そうやってしまえばこちらは不利であり申すからな……」

その忠告通りにザックスは彼の様子を探る。

(大したことないな……)

泉の側でのイーブイの言葉が思い出される。

「これまで多くのダンジョンで難敵と一人で戦ってきたザックス殿は奴を前にした時、おそらく相手に対してさほど脅威は覚えぬはずでござる」

彼の鍛え上げられた肉体に比べれば、ザックスのそれは及ぶべく

もない。

だが、デュラグヌスの存在は小さかった。これまで闘ってきたドラゴンや、魔将、そして竜戦士化したウルガに比べれば、余りにちっぽけだった。

見てきた世界の差なのだろうか？ そんな事をふと思いながらもザックスは《駿足》《全身強化》《倍力》をひそかに発動させた上で、用心深く、自身の最も効果的な攻撃ポイントを探る。

『真ん中でござる。相手の重さの真ん中を掴むのでござる！』

特訓の最中、イーブイをなかなか弾き飛ばせずにはいたザックスに、彼はそうアドバイスした。相手の重さの真ん中を掴む事で自身の体当たりの衝撃を全て叩きつける事ができる、そのコツを掴んだザックスは、注意深くデュラグヌスの周囲を回る。

「どうした、《魔将殺し》、さっさと上がってこいよ、とっくに試合開始時刻は過ぎてるんだぜ！」

「それは試合が始まって、ってことなんだろうな」

「当たり前だ！」

のらりくらりと言葉を交わすザックスに、デュラグヌスはさらにいら立ちを募らせる。

「じゃあ、遠慮なく……」

言葉と同時に試合場に飛び上がる。その足が地についた瞬間、試合場に彼の凄まじい踏み込みの音が響き渡った。電光石火のザックスの体当たりがデュラグヌスの身体を捉え、弾き飛ばされた彼の身体はあっさりと観客達の頭を飛び越え、はるか会場の壁面に叩きつけられてめり込んだ。

ピクリとも動かぬ壁面にめり込んだデュラグヌスの身体に、会場の観客達はみな呆然とする。あわてて駆け寄った会場係達も大混乱だった。観客達にはおそらく何が起きたかなど全く分からなかっただろう。自身の理解を越えた場面に遭遇した彼らの答えは、一つしかなかった。

「反則だ！」

誰かの言葉が次々に会場内に伝染し、やがて、それらがシュプレヒコールとなつてザックスに向けられる。どんだんエスカレートして足をふみならし始めた観客に対して、ザックスはやおら腰の《ミスリルセイバー》を引き抜き大声で叫んだ。

「うるせえぞ！ 一人じゃ何にもできねえ、クズ共め！ 文句があるならかかつてこい！ ここからはさっきのように手抜きはしねえ！ 百人でも、二百人でもかかつてきやがれ！ 《魔将殺し》の冒険者の恐ろしさを teme たちの身体にたっぷり刻んでやる！」

悪役そのものといったその言葉に観客達は、さらにエスカレートし始める。

「金返せ！」と叫び始めた観客達は、もはや暴動寸前となり会場内は一触即発のムードに支配された。

(おいおい、さっきと違うじゃねえか……)

きらりと輝く《ミスリルセイバー》を掲げながらザックスは冷や汗をかく。

先ほどのデュラグヌスのパフォーマンスを真似てみたのだが、やはり体格の遥かに劣るザックスでは説得力がなかったらしい。所詮人間は、中身ではなく見た目でしか判断されないということだろうか？

自身の席をけり飛ばして立ち上がった観客達は直に試合場に向かってくるだろう。もはや絶体絶命のピンチである。そう思った時だった。

「えーい、鎮まれい、鎮まらぬか！」

戯曲じみた台詞が観客達の間を駆け抜け、その言葉を発したであろうと思しき者達がすくと立ち上がる。混乱する観客席の中で、フードのついた外套をしっかりと着込んだ怪しい4人組が周囲の注目を浴びている。

「なんだ？ teme たち？」

その問いに答える者は無い。代わりに、「トオー！」という掛け声と共に、4つの影は観客席から飛び上がり、試合場の真ん中に立つザックスの周囲にひらりと降り立った。

降り立つと同時に、彼らは着ていた外套を脱ぎ棄てる。見知ったその姿にザックスは安堵し、突然の出来事に観客達は啞然とする。

そんな彼らに向かって4人は堂々と『名乗り』を上げた。

「東に闘争あらば、鬼神の如く焼き尽くす。我こそは炎の闘士、イブイ！」

「西に混乱あらば、雷光の如く駆けつける。同じく雷撃の魔術士、デュアル！」

「南に弱者あらば、もろ手を差し伸べる。紅一点、大地のごとき慈愛の僧侶、サンズ！」

「北に苦悩あらば、涼やかな音色でもって吹き飛ばす。風任せにさすらう吟遊詩人、シーポン！」

「我ら四人、友の為、義により参上仕った！」

ビシリとそれぞれのポーズを決め、唱和した4人がザックスを促す。すかさずザックスもそれに応えた。

「中央に理不尽あらば、問答無用で斬り捨てる。我こそは『魔將殺し』にして、光速の超剣士、ザックス！」

ザックスを中心に更なる新たな『決めポーズ』で周囲を圧倒する5人の声が唱和する。

「我ら、東・西・南・北・中央無敵！ その名も『ザ・ブルポンス』！」

瞬間、火球が天井に向かって打ち上げられる。空中で鮮やかに生

まれる小さな爆発の連鎖の衝撃が興奮した観客達を怯ませた。

同時に5人の周囲に風の結界が生まれ、シーポンが数歩前に進み出る。

「猛り狂う者達よ！ 我が涼やかな音色で静まるがよい！」

場内をシーポン渾身の魂の旋律が、虹色の帯となって駆け抜けた。

そして、《ザ・ブルポンス》を除く会場内にいた全ての者達が、白目をむいて失神したのだった……。

新生《ザ・ブルポンス》 冒険者達の誇りと名誉を守り、敢然と理不尽に立ち向かうべく、彼らは今、再び立ちあがった。

だが、この一件の裏側で密かに暗躍する者達は、好機とばかりにこの混沌とした事態を利用し、彼らとその所属するガンツハミツシユの酒場を窮地に追い込むことになったのである。

10 ジジイ、傍観する！

会場内は陰湿な空気に包まれていた。

《ペネロペイヤ》市の治世管理官、冒険者協会本部及び《ペネロペイヤ》支部の理事達、協会から認定証を戴く大手の酒場の店主達、そして柄の悪そうな格闘技大会の興行主達。そうそうたるメンバーが並ぶその場所で、ガンツはその大柄な体を少々すぼめて、室内の一席に座っていた。

「いつたい、この事態をどう責任とってくれるんだね」

声を張り上げたのは興行主の一人だった。ザ・ブルポンスの活躍によつて大混乱に陥つた本月次の格闘技大会は、多くの観客達が救護院へと運ばれ、怒りに震える観客達に対して入場料の全額払い戻しが断行されることとなった。

それ以外にも様々な損害を支払わされることとなった彼らの怒りは、《ザ・ブルポンス》の面々と彼らを支配下におくガンツへと向けられた。

「闘技場の現覇者が再起不能となつてしまったことで、どれだけの損害になつたと思う」

「知つた事か、もともとテムエらが蒔いた種だろう。大体、死んじやいねえんだから、いくらでも回復はできるだろうが」

「黙れ、彼の負つた精神的なダメージは、数日やそこらではぬぐえないんだぞ」

「けつ、何、寝言を言つてやがる。冒険者なら、そんなヤワな奴は即座に廃業に決まつてるだろう。もともと格闘技大会なんて物を大々的に見世物にしたテムエらに、一番の問題があるんだろうが！」

「なんだと！」

「冒険者つてのはダンジョンに潜ってなんぼだろうが！ 奴らが闘技場で訓練するのはあくまでも自身のスキル向上の為。」

それを無視して人間同士の争いごとを見世物にしたテメエらのだらなさの極みが今回の事態を引き起こしたんだらう。」

知ってるぜ、ここ数カ月、そろそろネタが尽き始めて、観客にも飽きられ始めてるって事くらい……。《魔将殺し》つてのはテメエらにとってさぞかし魅力的だっただらう……。」

「黙れ、貴様！」

「奴らは降りかかる火の粉をはらったにすぎねえ。それよりもこの数日、テメエのこの若いのがウチの店にかけた損害の方をどうにかしてもらいたいもんだな」

両者の視線が火花を散らす。

「ご両者の事情はどうか知りませんが、さすがに今回の事態は我々《ペネロペイヤ》市としても見過ごす事はできませんでしてね……。その辺り協会はどのようにお考えですかな」

その言葉を向けられた先では、一人の老人がうつらうつらと舟を漕いでいる。代わって、別の職員が回答する。

「我々としてはこれはあくまでも《ペネロペイヤ》支部内の問題と考えておりますので、返答は出来かねますな……。」

「ふむ、それでは……。」

《ペネロペイヤ》支部の理事であり、支配下冒険者数最大手の酒場のマスターの一人がおもむろに席を立つ。

「我々としては今回の事態はゆゆしき問題であると捉え、ガンツ氏の酒場及び、件の……何と言いましたかな、アンポンタンズ……などという者達の追放処分も視野に入れた……。」

「ふさげんな！」

言葉を遮って、ガンツが吠えた。

「奴らが何をした！ やれ《魔将殺し》の称号を奪うだのなんだのと、できもしない事を面白半分には吹聴して、世間様をペテンにかけたのはテメエらだろうが。」

知らねえとは言わせねえぞ！

今回の一件、その興行主共^{ハカ}だけでなく、テメエらが裏で糸を引いていたってことに気付かねえとでも思ってたのか！

「おやおや、何を根拠に……」

別の理事が立ちあがる。

「全く冒険者も冒険者なら店主も店主というところですか。証拠もなく推測で物を言うとは嘆かわしい。反省の色も見せないようでは……、どうやら貴方も同罪のようですね……」

その言葉に理事たちが同意の色を表す。

「テメエら……」

立ち上がったままガッツは拳を震わせた。

「冗談じゃねえ、これ以上馬鹿な茶番につきあえるか」

席を立とうとしたガッツだったが、そんな彼を引きとめる者が現れた。

「逃げてはいかな、逃げては……」

こくりこくりと舟を漕ぎながらぼつりと呟いたのは、件の老人だった。その言葉に会議場内の空気が僅かに冷える。

やがて、うつすらと目を開けた老人は、ふわあ、とあくびを一つすると言葉を続けた。

「少し落ち着いて頭を冷やすんじゃないな。まあ、事が事だけに無罪放免という訳にはいかんじやろうが……、火遊びも度を過ぎると取り返しがつかんようになるので……」

言いたい事を言いつくしたのか、再び舟を漕ぎ始める。そんな老人の姿を薄く笑いながら、《ペネロペイヤ》支部の理事たちは老人の言に席を離れる事を思いとどまったガッツをねちねちと締め上げはじめた。

（下らん事に知恵をまわすのう……）

そんな議場内の空気の中、老人は舟を漕ぐふりをしながら、成行きを見守る。

ザックス達を餌にして、ガンツの店を潰す。それが、理事であり、支配下冒険者数大手の酒場の店主達の企みであることくらいはとうに承知している。

この《ペネロペイヤ》で冒険者達のトップの位置に居続けたウルガ達と、彼らが所属するガンツ＝ハミツシユの酒場の存在は、長らくの間彼らにとって目の上のタンコブであった。支配下冒険者数においては圧倒的に優位であるものの、そのミッション及びクエストの実績はガンツの店とほとんど変わらぬ事態が長く続く事で、これまで彼らは苦汁を飲まされ続けてきた。

ウルガ達が消えた事で、今ようやく自分達に巡ってきた千載一遇のチャンスをものにせんと、この企みを思いついたのであろう。

興行主たちの犠牲など些細なことである。

おそらく支部内の理事は全て同意の上であり、《ペネロペイヤ》市の治世管理官もすでに彼らの手の内であらう。

ガンツに初めから勝ち目などない。この一件はザックスに対して挑戦状が叩きつけられた時に全て決まっていたのである。

(じゃがのう……)

薄眼を開けて、勝利を確信した表情を浮かべる理事たちの顔を見ながら、老人はほくそ笑む。

(油断しておると、世の中、思わぬところで足を取られることになる、という事を忘れとるのう……)

ダンジョンの中では当たり前前の教訓もひとたび安全なところに居ついてしまうと忘れてしまうものらしい。

(まあ、お手並み拝見といこうかのう。誰の頭に天罰が落ちるやら、見物じゃな……)

再び老人は舟をこぎながら、静かに成行きを見つめていた。

「さて、ではそろそろガンツ＝ハミツシユの酒場に対する処分を決めねばなりませんな」

さんざんにガンツを髑りものにして溜飲が下がったらしく、理事

たちは結論を述べようとしていた。すでに結論などは始めから決まっていたにも拘わらず、長いプロローグの末の三文芝居は、彼らの単なる退屈凌ぎだった。

とつくにガンツは抵抗を諦めたらしく、先ほどから己の席についたまま、何一つ語らず、只静かに理事たちの顔を睨みつけている。無言の怒りに包まれる彼の姿に僅かに背筋に冷たいものを走らせながらも、理事たちは自身の筋書き通りの結論を述べようとした。

「《魔將殺し》なるものを騙った冒険者ザックスと並びにその協力者たちは《ペネロペイヤ》から追放、ガンツハミツシユの酒場は認定証を取り消しの上で数力月の営業停止処分という事で構いませぬかな……」

それは事実上の廃業命令だった。

冒険者協会支部の決定は無視できたとしても《ペネロペイヤ》市の命令があれば、これはもはやどうにもならない。ガンツハミツシユの酒場の運命はもはや風前の灯　そんな絶望的な状況の中、会議室の扉を力強く叩く者が現れた。

「誰だ、こんな時に……」

非常識な闖入者に文句を言うべく、立ち上がり扉を開けた理事の顔が、一気に蒼白になる。そこに立っていたのは《ペネロペイヤ》大神殿の神官長と二人の高神官　そのうちの一人はライアットだった。

「会議の決定は出たのですかな」

ライアットのその言葉に、理事たちは不審を浮かべる。

「ええ、まあ、実りある議論の結果、最も妥当と思われる結論に達する事が出来ましたが……、何か？」

その言葉にライアットは小さく頷くとさらに続けた。

「さようですか。実は我々《ペネロペイヤ》大神殿、及び《エルタイヤ》最高神殿が本日ある決定を下しまして……、皆さまおそろいのよい機会ですので、こうしてまかり越した次第で……」

中央の上座に通された彼らの言葉を、室内の者達は皆訝かしむ。

「いったい、大神殿だけでなく最高神殿までがどのようなご用件で？」

その言葉にもう一人の高神官が席より立ち上がった。最高神殿の神官衣を着用した彼は、こほんと一つ咳払いをすると、静かにその場にいる者全てに厳然と申し渡した。

「昨日、最高神殿会議において、『ペネロペイヤ』大神殿を暫くの期間、閉鎖する決定がなされました」

その言葉に室内の誰もが顔を見合わせどよめいた。

国家の枠に属さない自由都市において創世神殿の存在は大きい。

特に、神殿に所属する神官達が一手に引き受ける治安活動は、自由都市に暮らす人々が平穏な生活を過ごす為には欠かせない。

一体どんな理由なのか。

そんな彼らに構わず彼はさらに言葉を続ける。

「閉鎖期間は残念ながらまだ正確には決まっておりますが、当面はガンツハミツシユの酒場の営業停止期間と同等と我々は考えております。尚、これはすでに当地の大神殿神官長も同意の上の決定事項です」

「バカな！」

理事達が立ちあがる。

「そんな事が許されるものか！」

「いくら、創世神殿とはいえ、横暴がすぎますぞ！」

口々に上げられる反発の言葉を一喝して制止したのはライトだった。

「黙れ、たかだか酒場の店主風情が！ これは創世神の意思を代理する最高神殿会議の決定事項であるぞ。貴様らごときがその決定に意を唱える事が許されると思っているのか！ あまりに身の程をわきまえぬようなら都市ごと『神敵』としてみなすことになるがよいのだからうな！」

『神敵』という言葉に誰もが絶句する。

彼らは本気である 一度そう決めたならば徹底的に実行する創

世神殿の狂気とも思えるその行為の数々は様々な伝説として各地に残っている。

「そ、そもそも神殿は中立のはず、せめて、一体なにゆえにこのような決定に至ったのか、納得できる説明を願えませんか？」

一人の理事が震える声で尋ねる。その質問に答えたのは、それまで沈黙を守っていた《ペネロペイヤ》大神殿の神官長だった。

「貴方は創世神の敵たる《四大魔王》とその配下である《魔将》を滅すべし、という我々の教義を知らぬのですかな」

「そのぐらいは我々でも知っております。故に毎年多額の寄付を神殿に贈り、その実現に協力すべく……」

「先日、その教義を実行し《十二魔将》の一人を討伐した、という神殿史上初の報告を我々はここにいるライアットより受け取りました。我々がそのような快挙を成し遂げた冒険者達と、その戦いで散っていった勇敢な者に対してどれほど畏敬の念を抱いているかお分かりですか？」

室内に沈黙が流れた。

「《魔将殺し》 この称号を持つものを軽んじてしまったては、我々創世神殿はその存在意義を根本から問われることとなります。大陸中にいる信者たちにも、どのように説明すればよいとお考えかな？」

「それは……」

「さらに過日、神官及び巫女に対して行われた中級試験において、未来の神殿を支える者達のよき導き手として並々ならぬ尽力を、かの《魔将殺し》の冒険者より得られたと報告を受けております。我々神殿がそのような尽力に対して、何らかの返礼を施す事は当然といえませぬかな？」

「あなた方は数多の人々が暮らす都市一つよりも、冒険者たった一人の行為に価値を見出すとおっしゃられるのですか？」

「その通りです。そうしなければ、我々はその存在意義を根本から疑われ、多くの信者の信仰を失ってしまうのです」

「バカな、創世神殿に門戸を閉じられてしまえば一体《ペネロペイヤ》市が被る損害はどれ程になるとお考えですか？」

顔を蒼白にした治世管理官の問いに、神官長は静かに答えた。

「信者からの信仰を失う事に比べれば、自由都市一つの滅亡など些細なことでしょうか？ いえ、むしろそうする事で我々は、ともすれば軽んじられつつある信仰の大切さを、大陸中の信者たちに改めて伝える事が出来るのです。《魔將殺し》という偉業を賭けの対象にする 我々の教義から考えれば正気とは思えぬこのような不心得者とそれに手を貸した者の集まりなど一掃してしまった方が、世の為でしょうか？」

その言葉に理事達は誰もが絶句した。

創世神殿の恐ろしさ、それはもはや俗世で暮らす彼らの理屈をはるかに越えた世界にある事を、改めて認識させられる。想定外の事態に彼らは誰もが言葉を発することなく呆然としていた。

「やれやれ、エライ事になったのう。ところでガンツ、お前さんどのくらい店を閉めるつもりなんじゃ？」

それまで黙って成行きを見守っていた老人がガンツに尋ねた。

（このクソ爺イ。知ってやがったな……。全く底意地の悪い……）
老人の痛烈な皮肉にガンツは苦笑する。すでに主導権はお前さんにあるんじゃないよ、という老人の言外の言葉とその阿漕なやり口に密かにあきれ果てる。

「さてねえ、俺もずいぶんとこの仕事ばかりやってきたからなあ。

ここは骨休めに温泉にでもものんびり浸かって、ゆっくり店の改装案でも練る事にするか」

「バカを言うな、貴様《ペネロペイヤ》を滅ぼす気か！」

「まあ、何かと五月蠅い奴らもいる事だし、店そのものを別の都市に移すつてのもこの際ありだろうな……」

「では我が大神殿は、神官や巫女達を人材の不足した都市へと移し、完全に閉鎖となります……」

「成程のう、ならばわしも協会本部を《エルタイヤ》に移す事をい

よいよ考えねばならんのだ」

老人の追い打ちに今度こそ、室内の空気が凍りついた。

そんな事簡単に実現できる訳はない……だが、それを今この場で言葉にする度胸のあるものなど皆無だった。先ほどまでの威勢はどこへやら、誰もが俎上の魚といった様子で黙りこんでしまった様子は、ガンツにとって胸がすく思いだった。

「協会長、何か良い解決策をご提示なさってはいただけませんか？」

「そうだ、あんた、こういう時ぐらい決断しろよ」

「なんじゃ？ ワシ、まだ協会長じゃったんか……。お前さん達がワシの知らんところで、何やらこそこそつまらん画策ばかりしおるからに、要らん子扱いされたワシは、そろそろ引退かとうと嘆いておったんじゃが……」

なりふり構わなくなりつつある苦し紛れの《ペネロペイヤ》支部の理事達の言葉に、容赦ない皮肉で老人が斬り返す。手痛い反撃をくらった彼らは、堪らず黙りこんでしまった。

「まあまあ、そろそろこのあたりで何らかの方針を表明していただかない事には、我々としても今後の見通しが成り立ちませんからなあ」

神官長がにこりと微笑みながら提案する。

「そうじゃのう、確かにここら辺りが、はねつ返り共も潮時じゃろうて……」

老人も又になりと笑みを返し、さらに続けた。

「まあ、何もかも無かつた事に、とはいかんからのだ。神殿の意向もある事だし、公平も期さねばならんからな。興行の損害については興行主殿に責任を負って頂こう。ただし、この度の一件でお前さん方がガンツハミツシユの酒場及び冒険者達に与えた損害については不問に付す事にしよう」

「ちよつと待て、ジジイ。そのどどこが公平だ」

実質大損害を被る事になる興行主たちが、大声を上げる。

「まだ勘違いしておるようじゃのう。ワシはこの際、冒険者の為に

ならん興行の在り方を見直せと言つておるんじゃ。なんじゃつたら自由都市連盟に働きかけて、お前さん方を追放処分としてもよいのじゃぞ！ ワシの公平な裁きは気に入つてもらえんかのう」

その言葉に彼らは黙り込んだ。

そんな彼らを睨みつけながら老人は続ける。

「さらにこの度の騒ぎを引き起こすこととなつた冒険者個人の責任は一切問わず、ガンツハミツシユの酒場には二週間の営業及び資格停止というところで手を打つか……」

「待つて下さい、協会長、二週間も神殿に門戸を閉じられてしまえば、その間に多くの者がよその都市へと流出し、信者達や市民の生活にも大きな影響が……」

治世管理官が青ざめる。

「おお、そいつは気付かんかったのう、年をとると色々と気ばかり焦つてのう。どうやら少し短すぎたようじゃ……。どれ、じゃあ、一カ月とするかのう」

「協会長、これ以上ふさげるのは……」

その言葉に老人の目がギラリと光る。

「ふむ、まだ足らぬか、では二カ月ぐらいで手を打つかのう」
「わかりました、では二カ月という事で……」

すかさず、大神官が相槌を打つ。もはや《ペネロペイヤ》支部の理事達も治世管理官も半泣きの状態である。

「どうか、協会長、二週間でなにとぞ、ご容赦願います」

プライドをかなぐり捨てて、米つきバッタのように頭を下げる彼らに冷たい視線を送りながら、老人は結論を下す。

「では、この度の騒動はガンツハミツシユの酒場の二週間の営業停止をもつて、全て手打ちと致す。

以降、かの酒場に何らかの報復措置を行おうとする者、及びこの度の一件に触れたものは冒険者協会、並びに最高神殿の意向に反するものとして厳しく追及することにする。

よいな！」

姿勢を正し、凜とした老人の声にその場所にいる誰もが従わざるを得なかった。

かくして、事態はようやく沈静化した……かのように思えた。

しかし、酒場の店主であるガンツにとっては、まだまだ問題の完全な解決とはならなかった。

2011/09/06 初稿

11 ガンツ、吠える！

支配下冒険者の全てが集まったガンツハミツシユの酒場には、異様な熱気が立ち込めていた。

それなりの収容人数を誇る店内は暑苦しい冒険者達ですし詰め状態となり、あぶれた者の内の幾人かは店の窓から身を乗り出して中を覗き込んでいる。

いつもならば選ばれた者しか上がる事の出来ない2階席への階段にも多くの者達が上り、頑強な冒険者が酔った勢いで暴れてもびくともしない階段は、みしみしと今にも崩壊しそうな音を立てている。

そこにいる者達は、誰もが怒りの表情を浮かべ、その矛先は店の中央に座る5人の姿に向かっていた。

《ザ・ブルポズ》、彼らの所業のせいで店が営業停止処分を受ける事となったが故に、ガンツハミツシユの酒場に所属する全ての冒険者が迷惑を被ることとなったのである。

店主のガンツはカウンターの中に仁王立ちに立ったまま無言で腕組みをし、その隣にはこの店の厨房の責任者であるドワーフのハミツシユが、ガンツと同様に無言で立っている。よく磨かれた《大斧グレート・アックス》の先端を下向きに立てて仁王立ちするドワーフの姿は物々しさを感じさせ、もはや店内は一触即発の状況であった。

「この落とし前、テメエら、どうやってつけるつもりだ！」
冒険者達の間からはそんな揶揄が《ザ・ブルポズ》の面々に向かつて飛ぶ。

酒場の2週間の営業・及び資格停止。

この決定によって、協会から酒場に提供されたクエストだけでなく、さらにガンツの酒場自体が直接受けていたクエストまでが、キ

キャンセルされてしまった。

店がその信頼を失ったが故の当然の結果であるともいえるが、おそらく裏では、自分達の計画通りにガンツ・ハミツシユの酒場を潰す事が出来なかった酒場の店主たちの、ささやかな報復行為なのである。

クエストをキャンセルされ、収入が途絶える事で、とばかりを食った冒険者達の怒りは、当然《ザ・ブルポンス》に向けられることとなったのは言うまでもない。

「そもそもこいつが特別扱いされること自体が、おかしかったんだ！」

声を上げたのは2階の2番席に座るパーティーのリーダー・斧使いのバンガスだった。彼の標的はザックスのみに向けられ、店内はそんなバンガスの言葉に賛同する者達の罵声で溢れていた。

「こいつはウルガ達の後を、ちよろちよろくつついて回っただけの駆け出しだぜ。それをいつまでも一番席に座らせるような特別扱いするから、こんな事態を引き起こしたんじゃないか！」

「ふざけんな！ テメエらがあそこに座る事を許されないからってイチャモンつけんじゃないやねえ。テメエなんざ、ウルガの足元にも及ばねえよ！」

売り言葉に買い言葉。ザックスの反論にバンガスの顔色が変わる。「いい年こいた冒険者が、駆け出し風情にチマチマ絡みやがって、あの席に座るのが実力主義だっつてんなら、この店の誰もが納得いくように、テメエらで実績を積んだらどうなんだ！」

「もういつペン言ってみろ！ 小僧！」
巨漢のバンガスの凄まじい雄叫びが店内の空気を揺らし、熱くなっていた冒険者達の肝を冷やす。だが、そんなバンガスにザックスは負けていなかった。

「文句があるならかかってこい。テメエのねちねちとした絡みにはいい加減うんざりしてたんだ。表に出ろ！ きつちり白黒つけてやる」

「やめるでござる、ザックス殿。そんな事しても何の解決にもならんでござるよ」

互いに周囲の者に抑えつけられながらも睨み合う。そんな中、冷静な第三者の声が飛んだ。

「でも、あんた達のおかげでこの店の一切のクエストがキャンセルされて、俺達は干上がる寸前だ。この責任を一体どう取ってくれるんだ」

その言葉に多くの冒険者たちが賛同する。正論すぎる正論にザックス達は言葉もなかった。

「けっ、やりたい放題やって、テメエのケツも拭けないんじゃない、ガキそのものだな」

バンガスの言葉にザックスは唇をかみしめる。今、この店に訪れた事態は間違いなく自身が原因となってしまった事は疑いようもない。そして、その事に彼は成す術もなかった。だが、そんなザックスに意外な援護が入った。

「あのー。ちょっとよろしいでしょうか？」

店内の誰もがその声の主に注目する。

それはかつてザックスと共に中級レベルダンジョンを踏破したパーティーのリーダーだった。

彼らとの探索は実に味気ないものであり、唯一思い出に残ったのは休憩時のマリナやイリアについての会話ぐらいだった。

「確かにこの店が営業停止になることでクエストを受ける事はできませんが、ボク達が冒険者資格をはく奪された訳ではありませんよね。だったら自分達でミッションを組んで探索を行い、換金アイテムを集めれば、当座は凌げるんじゃないですか？」

その言葉に一瞬、周囲が息をのむ。だが、やがて破裂したかのように次々に罵声が浴びせられていく。

「ふざけんな、たかだかダンジョン踏破程度で手に入るカネで何ができるかってんだ！」

「自分達でミッション組める奴らばかりじゃねえんだよ！ 分かっ

てんのか？」

声を上げているのは、協会や店から支給されるクエストにべったり頼り切った者たちなのだろう。

そんな彼らの姿を眺めながら、カウンターの中でガンツは舌打ちをする。長い間自身が思い描いて来た店の在り方とはあまりにもかけ離れたその姿に、ガンツの怒りは頂点に達しつつあった。

「ともかくだ。今、俺達はいいつらのせいで生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされてるんだ。この落とし前だけはきっちりつけさせてもらう！ 命まで取るうと言わねえ！ 装備と有り金を全て置いて、テメエらは全員この都市から追放だ！ 文句があるならここで叩きつぶして……」

「黙れ、バンガス、テメエ、いい加減にしろ！」

カウンターを叩きつける音と共に、大音量の怒声が店内中に響き渡った。その凄まじさに誰もが震えあがり、その主に注目する。声の主はカウンターのの中にいたガンツだった。ガンツの凄まじい怒りに当のバンガスも唾然としている。

「黙って聞いてりや言いたい放題抜かしやがって！ 今まで面倒みてきた奴らがこんなクズ共の集まりだったかと思うと、本当に泣けてくらあ！」

さらに大きなガンツの怒声が店内に響き渡る。

「いいかボンクラ共、耳の穴かっぽじってよく聞け！」

2階の1番席を欠番にしたのは、長年あの場所に座り続けた偉大な冒険者であるウルガ達に俺が敬意を払っているからだ！

そして、ザックスにあそこに座る事を許したのは、ウルガ達の客分である以上に、一人の仲間として奴らの勝ち取った結末に大きく関わったからだ！ それは奴の称号を見れば分かるはずだ。

この店でウルガの葬式に出た人間ならば、ザックスの無謀ともいえる行動が勝利を引き寄せた、という事をじかにダントンから聞いたはずだ！

よく考えろ！

この中に一人でも魔将に挑もつてえ、とんちきな事を考えた奴はいるか！

ウルガ達が悩み続けた5年間、協力しようとした奴が一人でもいるか！」

ガンツがバンガスを睨みつける。

身体の大きさでは一回り以上、上回る上級冒険者であるバンガスがガンツに気圧されていた。さらに周囲を一睨みしたガンツは、その激しい言葉を続けた。

「今回の一件もそうだ！」

《魔将殺し》のザックスを見世物にするってことは、ウルガ達の誇りを辱め、馬鹿にし、ひいてはこの店の看板に泥を塗ったってことだ！

ザックスとブルポンスは、そんな奴らからこの店とウルガ達の誇りを守ったんだ！

一方的に挑戦状をたたきつけられたザックスが一人悩んだ時、お前たちは奴に手を貸そうとしたか？ あわよくばひと儲けしようと思んだ奴だっていたらうが！」

その言葉に数人の者達が顔を伏せた。

「たかがクエストがキャンセルになったからってえ、オタオタしやがって、情けねえ！」

クエストが来なけりや、テメエらでミッション組んで協会の管理下のないダンジョン踏破でもしたらどうだ！

昔の冒険者達つてのは、みんなそうやってたんだ！」

「冗談じゃねえ、いつの時代の……」

その言葉を最後まで続けさせることなく、ガンツは一睨みで黙らせた。

「いいか、ボンクラ共。この一件は、もう《ザ・ブルポンス》の問題じゃねえ、俺の店に売られた喧嘩であり、俺が買った喧嘩だ！」

その言葉に店内がざわめいた。そのざわめきを打ち消すかのようにな、ガンツは言葉を続けた。

「喧嘩を買った以上、いかなる相手であつても容赦はしねえ。

俺の店の看板と誇りを穢し、潰そうとした協会の理事共や同業者共に容赦するつもりもねえ。堂々と盾突かせてもらう！」

「ガンツ、あんた正気じゃねえよ。協会に盾突いたらどうなると思つてんだ！」

その瞬間、店内に凄まじい音が響く。

ガンツの隣りに立っていたハミツシユが手にした《グレート・アックス大斧》の先端を床にたたきつけた音だった。

「履き違えるな！ ボンクラ共！」

この店は俺の物だ。あらゆるルールを決めるのはこの俺だ！

そして、この俺の意思は相方であるハミツシユの意思でもある。

俺達はこの方針を一切変えるつもりはねえ！ 文句のある奴はここにあるノキル酒を飲んでとつと出て行け！」

言葉と同時に、ガンツはカウンターの上に並べたグラスになみなみとノキル酒を汲んでいく。並べられたありつたけのグラスにノキル酒を注ぎ終えたガンツは、その前で腕を組んで静かに目を閉じる。その姿に皆、暫くの間しんと静まりかえっていたが、やがて数人の者達が顔を見合わせ立ち上がると、グラスを一息に飲み干して立ち去って行った。

一人、又一人、とそれに続き、ようやくその列が途切れても店内にはまだ十分以上に人の数は残っている。

「いいんだな！ ここに残るってことは、この店と心中する覚悟があるってことだ！」

その気がないならとつとと出て行け！ 今ならまだ引き返せるぞ！」

ガンツの鋭い眼光と言葉に、再び数人の者達が立ちあがり、ノキル酒を飲んで店を出て行った。

「他にはいねえのか！」

その問いに今度こそ立ち上がる者はいなかった。

「いいだろう、だったらこれより俺達、ガンツハミツシユの酒場

の人間は、来るべき営業再開の日に向けて一大ミッションを決行する。これは俺からお前たちへのクエストだ！ 賛成の奴は協力する意思を込めて、足を踏みならせ！」

その言葉に初めに反応したのはザックスだった。

次いでバンガスが、さらにブルポンスが、二階席の者達が、そして気付けば店中の者達が足をふみならし、その振動が大きく店を揺らす。

「いいだろう、テメエらの意思は了解した」

そう告げると、ガンツとハミツシュはカウンターの中から出て、皆の前に立つ。カウンターを振り返ったガンツは、目を閉じるとそれを愛おしそうに撫でて、その感触を確かめた。

構えてから30年近く、店を開けた日は一日たりとてそれを磨かぬ事などなかった。ここを通して数多の冒険者たちと出会い、そして別れを繰り返してきた。様々な思い出と共に過去を振り返ったガンツは、やがて目を開くと傍らに立つハミツシュに声をかけた。

「やってくれ、思いつきりな……」

「いいのだな？」

その問いに無言でガンツは頷いた。そのやり取りを訝しげに眺めていた周囲の者達は、次の瞬間、顔色を変えた。

ハミツシュは《大斧》^{グレート・アックス}を振りかぶるとそれを磨き抜いたカウンタ―に叩きつける。バリバリと音を立てて砕け散るその光景に全ての者達が呆然とした。

「ガンツ、あんた、何を……」

「黙って見てろ！ バンガス、これは俺のけじめだ！」

3度、4度とハミツシュが《大斧》^{グレート・アックス}を叩きつけ、やがてカウンタ―はあとかたもなくなり、無残な木片と成り果てた。

「ご苦労さん」

声をかけたガンツも、そして《大斧》^{グレート・アックス}でカウンターを粉微塵にたたき壊したハミツシュにも、そのまなじりに小さな輝きが生まれていた。

ぐずりと鼻をすすったガンツは、再び冒険者達に振り向くと、宣言する。

「いいか、これで、ガンツハミツシユの酒場は一時閉店だ。これからこの店の大改修を始めると同時に、テメエらにはとことん働いてもらう。いいな！」

その言葉に僅かにあつけにとられたものの、反対の意を示す者などいなかった。

「ブルポンス、それからそこのお前ら……ちつ、名前がでてこねえ！ まあいい、お前らにはこの店の新メニューの為の食材集めに走ってもらう。それからザックス、バンガスお前達には……」

僅かに息を切って、ガンツは彼らに一つの命令を下した。そのあまりにも突飛な内容に、命じられた本人達だけでなく、周囲の者達までが啞然とする。

そんな彼らにお構いなくガンツは言葉を続けた。

「いいか、テメエらへのクエストはこの店を再開するにあたっての一番の目玉だ。ここ数年、ウルガ達以外の誰もできなかった事を、テメエらはやり遂げる！」

その言葉にザックスとバンガスは目を合わせる。互いの不満と不審感がぶつかり合い火花を散らすその姿を眺めながら、ガンツは言葉が続けた。

「いいな、できないとは絶対に言わせねえ！ 必ずやり遂げて戻ってこい！ それまでこの店の再開はないと思え！」

「いいだろう」

「分かったよ、ガンツ」

互いに睨み合いながらも同意を示す。それは二人にとって嵐の幕開けであった。

深夜の《旅立ちの広場》は、日中の人の出入りがまるで嘘のようにしんと静まり返っている。

あくびをしながら《転移の扉》の番をする夜勤の係員達以外に、人気はほとんどない。朝日が差す頃には再び行き交う人々であふれかえるようになるその場所は、静かに眠りの時を迎えていた。

そこに、数名の冒険者達の姿が現れる。

ガンツに命じられた食材收拾の為にこの地を離れようとする一団と、それを見送るザックスの姿だった。

「悪かったな。オレの為にあんなことになっちまって……」

「それは言わぬでござるよ、ザックス殿」

「ふっ、憎まれるのも英雄の務め……」

「お気になさらず……ザックスさん」

「ララーララー」

ブルポンスはブルポンスのままである。

もはや彼らの頭の中には店の中の修羅場の事よりも、これからの旅路の事しかないようだ。

「では、ザックス殿、拙者達は一足先に出発させてもらうでござる」

「友よ、健闘を祈る」

「私達のことよりも、どうかご無事で、ザックスさん」

「ララーララー・ラー」

飄々とした態度で《転移の扉》へと消えて行くブルポンスの姿を見送るザックスに、さらに声をかける一団があった。

「あー、ザックスさん」

「ああ、あんた達も気をつけてな」

修羅場と化した酒場の中でザックス達を擁護しようとしたパーティ。どうしてもリーダーの名前が思い出せないザックスの中では、密かに《名無しナナシのパーティ》と命名されている。

「よかつたら、これを使ってください」

言葉と共に紙束を一つ差し出す。戸惑いながらも中を確かめたザ

ツクスの顔に、驚きの表情が浮かんだ。

「こんなもの……本当にいいのか？」

「ええ、ボク達がお役に立てる事なんてこの程度ですから……、ただ、完全な物ではないのが心苦しいのですが」

ザツクスの手元にある紙束には、とあるダンジョンの詳細な分析が記されている。出すところに出せば相当の金額となるであろうそれを、彼らは惜しげもなくザツクスに与えたのだった。

「でも、どうして、こんなものをオレに？」

その問いに彼らは顔を見合わせる。そして再びリーダーが、僅かに笑みを浮かべて話し始めた。

「実は、あなたとのミッションの後、ボク達もいろいろと思うところがありました……。」

特に魔将と闘われたザツクスさんの活躍を聞いて、発奮させられました。同じように肩を並べたはずの貴方がウルガさん達と魔将を倒し、対してボク達は貴方の協力を得ながらルーチンワークのようなダンジョン踏破しかできない……。

この差はどこにあるのだろう、と考えたのです」

ナナシのパーティの一同が照れくさそうに微笑んだ。

「これまでボク達はカネを得る事だけを目標として、ダンジョンに挑んできました。」

すでにある情報を最大限に利用し、最も効果的かつ合理的なルートで効率的に換金アイテムを集める。その事が間違っているとは思いません。いくら冒険者とはいえ、カネがなくては生きていけないのですから……。

でもそれだけではダメなのです。物足りないのです。

ボク達をそんな気分させてくれたのは、多分、貴方です」

「俺が、か？」

ザツクスの答えに周囲の者達が一斉に頷いた。

「そう考えたボク達は、近頃様々なダンジョンへと挑戦を始めました。」

とはいってもボク達の取り柄は情報の収集と整理くらいです。だから、まださほど情報の出回っていないところへいっては、実地で情報を集め、分析し、それを売る　そんな事を始めたのです」

「すげえじゃねえか、それって」

「おかげで世界がずいぶんと広がり、様々な人とも知り合えました。先ほど渡した資料もそんな人たちの一人から譲ってもらったものです。」

とはいえ、カネにはなかなかありませんし、思い通りに事が運ぶ事なんてめったにない失敗続きの毎日です……。

でも、それなりに充実しています。先を走っている貴方の後を追いかけている　少なくともボク達はそんな気分ではいられるのです」

わずかに誇らしげな顔で彼は胸を張って言った。

「ですから、それがザックスさんのお役に立てば、ボク達はとても嬉しいのです。」

正直、貴方の進む道は多難以外の何物でもないように思われます。道連れのバングスさん達とのこともあるでしょう。できる事なら共にいっていってお役に立ちたいのですが、ボク達の力ではどうにもなりません。

どうかお気をつけて、ザックスさん。そして又ガンツ＝ハミツシユの酒場でお会いしましょう」

「ああ、あんた達も気をつけてな」

「ええ、実は今回、少しばかりボク達は本気なのです。これを機にガンツ＝ハミツシユの酒場でその名を知らぬ者などいないパーティになるつもりです。」

それでは御機嫌よう、ザックスさん」

語り終えた彼らは挨拶を終えると同時に、堂々と《転移の門》へと消えて行く。

「ああ、頑張れよ、ええと……」

相変わらず名前を思い出せないナナシのパーティの姿を見送ったザックスは、ぼつりと一人旅立ちの広場に取り残された。

「負けてられねえな」

本当に先を歩いているのはザックスではない。

ナナシのパーティであり、ブルポンスであり、そして、中級巫女となったイリアもそうなのだ。

「やるぞー」

人気の少ない夜の広場で、ガンツの朝吠えのように空に向かって吠えるザックスの姿を、眠たげな眼をした夜勤の門番達が迷惑そうに眺めるのだった。

自由都市《ペネロペイヤ》東地区。

数多の鍛冶屋やアイテム屋が立ち並ぶその区画は一日中賑わいにあふれる場所の一つである。

ダントンに連れられ、初めて訪れたその場所も、今やすっかり慣れ親しんだ場所となりつつある。ザックスの知らぬ掘り出し物を扱う隠れた名店もあるらしいのだが、その辺りの発掘はまだしばらく先の楽しみとなっている。

周囲の壁面には先日格闘技大会のビラが残っているが、そんな物に目を止める人々はもはや皆無であり、品物の買付や原材料の仕入れで先を急ぐ人々で道は溢れ返っていた。

様々な工房の立ち並ぶ区画の片隅にある《ヴォーケンの鍛冶屋》をザックスは訪れていた。相変わらず掘立小屋のような外見のままの店の店主であるヴォーケンは、口こそ悪いがその腕は一級品である。

ただ、ここ暫く元気がないようだというのが、店番兼見習いの少年の言である。長くこの店の常連であり喧嘩相手だったダントンが、

冒険者を廃業しこの都市を去って行った事が原因らしい。

ボロボロの外見からは全く想像のつかないほどに綺麗に整頓されたその店に入ったザックスは、退屈そうにあくびをしていた少年に挨拶をする。

「オレの剣、あがってるか？」

ザックスの言葉に店の裏手へと走った少年に代わって出てきたのは、店の主であるヴォーケンだった。

「来たか……」

「ああ、終わってるかい？」

ザックスの前に、彼愛用の《ミスリルセイバー》が静かに置かれる。きらりと輝く白銀の刀身には、美しい文様が浮かび上がる。

「ずいぶんと使い慣れてきたみたいだな」

「まあ、そこらの剣なんか足元にも及ばない切れ味だしな」

「ふん、当然だ！ 何たってこの俺様が作ったんだからな」

腕自慢をする鍛冶屋だが、その言葉には今一つキレが感じられない。

「それはそうと、こっちの方はいいのか、テメエ」

人差指でヴォーケンは己の額を指さした。それはかつてザックスが額につけていた《賢者の額環》の事を意味していた。

「ああ、近頃は体力がついたおかげで、目眩に悩まされる事はめっきり減ったんでね。それにあのレベルの物をそうそう購入したら、破産しちまうよ！」

「違いねえ！」

ザックスに《賢者の額環》を贈ったのはヴォーケン本人である。

当初は彼とダントンが作った《理法の小剣》の材料として鑄潰される予定だったが、より高純度の《精霊金》アマルガムをザックスが持ち込んだために、お役御免となったという、曰くつきの代物だった。

「そっちの方の具合はどうだ」

ザックスの右腕に輝く《ウルガの腕輪》を指し示すヴォーケンにザックスは返答する。

「相変わらずだよ。属性半減以外の特別な能力ってのはなさそうだが、十分、お守り代わりになってるさ」

「そうか」

ザックスの言葉に僅かにいぶかしげな顔を見せながら、ヴォーケンは腕に輝く石から目を離さない。

この腕輪も《賢者の額環》同様錆潰される予定だった物を、エルメラの依頼でヴォーケンがウルガの魂の石を嵌め込んでザックスに渡した物だった。大柄な体格に似合わず細かい作業の得意なヴォーケンは、独創的すぎるアイテムを作り出す職人の顔も持っている。

「竜人の力つてのは、正直分からねえからな。それは只のお守りっただけじゃ、すまねえ代物だとは思うんだが……」

「ああ、大事にするよ」

自身の腕に輝く腕輪に大切そうに触れながら、ザックスはヴォーケンに答えた。これはウルガの魂ともいえる物。それを受け継いだ以上、半端な事などできようはずもない。

調整を終えた《ミスリルセイバー》を試すべく、ザックスはヴォーケンの眼前で軽くそれを振る。十分に手になじんだ柄の感触にも違和感はない。

「ずいぶんと張り切ってるな。又、どこかに行くのか？ 確かお前のところの酒場は、先日のバカ騒ぎのせいで営業停止中のはずだろっ？」

「ああ、二週間後の営業再開に向けて、今あそこは大改装中だね。俺もガンツ本人からのクエストで、未踏破ダンジョンに挑む事になっただ」

「なんだと!」

素振り続けるザックスの何気ない言葉に、ヴォーケンの顔色が変わった。

「テメエ、未踏破ダンジョンに挑戦って、仲間はどうすんだ?」

「ああ、その事ね……」

ザックスは《ミスリルセイバー》を鞘に収めると一息つく。

すかさず少年が運んできたアルキルの搾り汁のグラスに口をつけ、近くにあつた椅子に腰かける。

「ガンツから直接のクエストでね、あの店の2番席に座るバングスって陰険ヤロウのパーティの臨時メンバーとして挑む予定さ」

「テメエ、未踏破ダンジョンに挑む、ってことがどういう事か分かってんのか？ あのダントン達でさえ、ずいぶんと危ない目に合ってるんだぜ」

「まあな、でもこうでもしないとウルガ達の抜けた穴は埋まらない。それだけの実績がなければ、俺は店の中で認められないし、ガンツの店も又、同業者達に軽く見られ続けることになる。

やるしかねえんだよ！」

カランと音を立てて手元のグラスの氷が踊る。どこか遠くを見ながら語るザックスから、ヴォーケンは何をそらさない。

「ちよつと待つてな」

暫くの間、ザックスの顔を睨みつけていたヴォーケンだったが、何かを思いついたのか店の裏手に引込んで行く。やがて戻ってきた彼は小脇に箱を抱えていた。

「こいつは？」

不思議そうに箱の中を見ながらザックスはヴォーケンに問う。子供の拳程度の丸い球体のその外観は、ザックスが過去に使用した《閃光弾》や《爆裂弾》に似ている。

「テメエの言葉にヒントを得て作った改良型の《爆裂弾》だ。

素材の質を思いっきり落とした分、強度はほとんどねえ。爆発の際には器も一緒に砕け散って、その破片が対象物を破壊する、って危ない代物だ。マナのチャージ時間は従来の3分の1。臨界から5秒でドカンだ。威力は従来の3分の2程度。だが、使い勝手は格段にいいはずだ」

「それはすげえな」

「50個ある。持って行け！ カネは要らねえ！」

「おい、いいのかよ」

その言葉にヴォーケンは無言でうなずいた。

「まだ試作品だからな。そんな物を自在に扱えるやつは高位の魔導士を除けば、お前以外に今のところいねえ。当然魔導士達はテムエの炎術のほうに誇りを持つてるから、そんな物、見向きもしねえ。そいつはおそらくお前自身の助けになるはずだ。《爆片弾》、取り合えず俺は今、そいつをそう呼んでいる」

過去、様々な戦いで秘密欠陥兵器として、数多の強敵との戦いで勝利の立役者となったヴォーケンの創作物は実に心強い。

「そいつを使って、無事にダンジョンを踏破して戻ってこい。代金が払いたかつたら、その後で聞いてやる」

「ああ、分かった。ありがとう。存分に使わせてもらうよ」

感謝の言葉と共にザックスは箱の中の《爆片弾》を《袋》^{バッグ}にしまいこみ、ヴォーケンに礼を言ってお店を出るザックスを見習いの少年が送り出していった。その後ろ姿をカウンターの中で見送りながらヴォーケンはぽつりと呟いた。

「新しい伝説の幕開け……か。時代つてのはテムエの言うように次の世代へと自然に受け継がれていくんだな、ダントン」

古いなじみの名を呼びながらヴォーケンは感慨にふける。だが、ザックスを送り出して戻ってきた見習いの少年を見るなり、彼はニヤリと笑って大声で怒鳴りつけた。

「今日は店じまいだ。久しぶりに大物を打つぞ！ 炉の火を上げて準備をしろ！ 鍛冶屋の誇りを掛けた伝説の名品つて奴を打ち出してやる！」

言葉と同時にいそいそと去ってゆく親方の背に気持ちいい返事を送った少年は、すぐさま準備に取り掛かる。

鍛冶場へと向かう親方の顔が、以前のように生き生きと輝いている事を敏感に感じ取った少年は、久しぶりの大仕事に胸を高鳴らせるのだった。

2
0
1
1
/
0
9
/
0
7

初稿

12 ザックス、敗れる！

その存在を確認されているものの未だに踏破されていないダンジョンは、大陸及び大円洋に浮かぶ大小の島々に多数、存在する。

数多の上級冒険者達によって編成されたパーティが挑戦し、ある者達は踏破を諦め、又ある者達は帰還すらできなかった。そのうちの一つが協会指定案件1-034号と名付けられたこの地下ダンジョンだった。

過去、探索に向かったパーティが到達しえた階層は地下39層。それより下の階層の記録は存在しない。

当のパーティも39層への到達報告を最後に、未帰還のままだった。出現モンスターの強度レベルと想定階層から間違いなく上級レベルダンジョンであると推察されるそのダンジョンの第5層付近にザックス達一行の姿があった。

探索開始と同時に遭遇した周回モンスターはいきなりのBクラス。巨人族であるジャイアントの出迎えを受けて始まった攻略は困難の連続だった。

いつも通り一行の先頭にたつてアタッカーの役割を買って出たザックスは、自身が挑もうとしているダンジョンの攻略の困難さに早い段階で気付かざるを得なかった。

ガンツによって直々に指名されたこのダンジョンは、数多の未帰還パーティを生み続ける事で有名であり、これを踏破したなら、おそらく《ペネロペイヤ》だけでなく、大陸中の冒険者達に羨望されることとなるだろう。だが、それはあくまでも踏破に成功した場合の話で、確率としては彼らも未帰還パーティの一つとして、入り口近くにある管理所内のリストに載ることの方が大きい。

今、彼の立つ第5層付近は、まだ一本道であり、厄介なトラップも存在しない。だがすでにBクラスもしくはAクラスモンスターが集団で現れ始め、一戦一戦に取られる時間も過去に踏破したダンジョンに比べるべくもない。

理力値MAXのおかげで理力切れをおこす心配のないザックスは、踏破開始時から《駿足》《倍力》《全身強化》の3重掛けで自身の身体を強化し、ヴォーケンの再調整で切れ味を増した《ミスリルセイバー》によって、どうにかアタッカーの役割が果たせていた。
(ずいぶん鈍^{なま}ってるな……)

魔将エイルスと対峙して以来、強敵という強敵に当たってこなかったここ数カ月を密かに反省と共に顧みる。

ザックスが上級レベルダンジョンに入ったのは、ウルガ達と行動を共にしたあの時一回きりである。なぜかあの日は周回モンスターに出くわさなかったものの、最下層部の幻影の中で感じ取った数多の凶悪なマナは、今、思い出しただけでも身体を震わせる。

あれからしばらくの間、彼は臨時メンバーとして多くの依頼を受けたが、それはあくまでも自分の能力で十分に対処できるレベルの問題だった。

今の彼は臨時メンバーという立場こそ変わらぬものの、これはガンツが与えた彼自身のミッションとも呼べるものである。同行者達の力をあてにして、いつまでもお客様気分を味わっているわけにはいかなかった。

さらに、今のザックスには大きな問題があった。

彼の同行者　ガンツハミツシユの2番席に座るパーティは、リーダーであるバンガスを含めた4人で構成されている。

マナLV45《武闘士》バンガス

大柄な体躯のこの男は斧使いとして相当な腕をもつ。パーティのリーダーである彼とザックスとの仲の悪さは周知の事実である。

マナLV46《聖騎士》ブラッドン

狼族の獣人である彼は非情に無口である。言葉よりも行動で示すタイプらしく、周囲の者達からの信頼は厚い。《斧槍》^{ハルバート}と《短槍》を状況に応じて巧みに使い分ける技量と、獣人ならではの力は決して侮れない。

マナLV43《魔導士》ルメーユ

おそらく妖精族の血をひいているのであろう。彼の耳は僅かにとがり、その容貌はどこかエルフを思い起こさせる。顔立ちこそ柔和だが、その本心は今一つ計り知れない。

マナLV42《大僧正》レンディ

ふつくらしとした体格の女性であり、彼女の存在が殺伐としたパーティに柔らかな空気を振りまいている。だが、ザックスとバンガスの険悪な仲に戸惑いを覚えているのか、必要以上にザックスに近づこうとはしなかった。

誰も彼もがザックスより経験も力もある実力者ぞろいである。

そんな彼らに舐められぬようザックスは、武器や特殊スキルで嵩上げされたその力でパーティの先頭に立ち、背後からの冷たい視線を無視して戦い続けた。

ウルガの魂を継承する自身が半端な事をすれば共に戦った彼らの顔に泥を塗ることになる。そんな思いが焦りとなり、彼を不必要に力ませ、周囲とのちぐはぐさを生み出す元凶になっていることに、まだ彼は気付いていなかった。

元来、無口な狼族のブラッドンはともかくとして、バンガスとは視線すら合わせない。

《魔導士》ルメーユや《大僧正》レンディが時折掛けてくる声に生返事しながら、ザックスは眼前の通路に漂う不気味なモンスターの気配に全神経を注いでいた。

このままでは、自分はどこかで潰れることになるだろう。という悪い予感を頭の片隅に追いやって、ザックスは強力なモンスター

達の群れに果敢に挑み続けていた。

探索2日目・1-034号第20層。

「大丈夫？」

最初のボスモンスターが控えているであろう大広間へと続く扉の前で、レンデイがザックスの肩に手をおいて声をかける。

パーティの中でただ一人、ぜえぜえと肩で息を切るザックスは、彼女の言葉に無言でうなずいた。

まだ中層部にすら達していないこの状況ですでにザックスの体力は限界に近付いていた。

ナナシのパーティのリーダーから手渡された情報によって、出現モンスターの攻撃傾向や弱点がある程度絞れていたため、ここまでの戦闘はどうか切り抜けてこられた。

「こんな疲れる探索は初めてだな……」

滋養水を口に含みながらザックスはぼつりと呟いた。体力的な問題もそうだが、精神的なものもきつい。

周囲に人はいてもそれは同行者であって仲間ではない。そんな状況にあつて、自身の手に残るモンスターの集団と正面切つて戦つてきたのだから、仕方のないことだろう。

そんなザックスの姿に「チツ」と舌打ちしながらバンガスは先に扉の向こうへと消えて行く。負けるわけにはいかないという一心でザックスはその後を追った。後に残された3人は無言で顔を見合わせて小さくうなずくと、彼らの後に続いた。

その行く先には暗雲が立ち込めていた。

激しい破裂音と共に二つ目の《爆片弾》が爆発する。ヴォーケンの言うとおり、使い勝手が格段に上がったその武装を持ってしても眼前のAAクラスボスマンスター《アイアン・ゴーレム》には僅かな傷しかつかなかつた。

「バカヤロウ、突然何しやがる」

《爆片弾》の爆発に驚いたバンガスが、ザックスに大声を上げて怒鳴りつける。

「うるせえ。前に出られない臆病者は、引っ込んでろ！」

負けずに言い返すザックスだったが、今の彼の心には全く余裕はなかった。

文字通り鉄の塊である《アイアン・ゴーレム》の身体は、《倍力》で強化したザックスの《ミスリルセイバー》でも決定的なダメージを与えられず、已むを得ずに使用した《爆片弾》も効果はない。頑強な巨体から繰り出される《アイアン・ゴーレム》の拳の一撃はスピードこそ遅いものの、当たれば一撃で致命傷である。

限界に近い体力によって集中力すら乱され始め、微細なマナのコントロールを必要とする《体当たり》の応用技を使う事も出来ず、ザックスは徐々に追い詰められていた。

最も弱いものから潰していく 戦闘のセオリー通りにザックスを執拗に追う《アイアン・ゴーレム》によって、いつの間にかザックスは大広間の壁を背にしていた。

強烈なうち下ろし気味の拳をぎりぎりでかわしたザックスは、《駿足》を発動させたまま床にめりこんだ右腕沿いに肩口に駆け上がり、ミスリルセイバーで《アイアン・ゴーレム》の首筋をねらう。

「馬鹿！ よける！」

その瞬間誰かの声が耳朵を打つと同時に、ザックスは空中で強烈な左の一撃をまともにくらい、吹き飛んだ。嫌というほど地面にたたきつけられた身体には《全身強化》の効果も空しく、凄まじい痛

みが駆け巡り、それまで張りつめていたザックスの緊張の糸は根こそぎ断ち切られた。

激しい戦闘音が少しずつ遠のき、薄れて行く意識の中で、「ああ、俺は負けたんだな……」と実感すると同時にザックスの意識は闇に落ちて行った。

「……は無理だ！……は足手纏いにし……らねえ！」

何者かの怒声でザックスは目を覚ました。目を覚ました彼の視界には、焚火の炎に照らされた満天の秋の夜空が広がっている。周囲の草むらでは虫達が各々の楽器で秋の夜の歌を奏でていた。

起き上がろうとした彼は身体の中の鈍痛に顔をしかめながら辺りを見回す。

「無理しないで、まだ、あなたの身体は完全に回復した訳じゃないのよ」

ふつくらとした体格の《大僧正》レンディが、女性らしい柔らかな手でザックスの身体を支えた。

「ここは？ ゴーレムはどうした」

ザックスの問いに答えたのはレンディではなく、近づいて来た《魔導士》ルメーユだった。

「ゴーレムはどうか倒しました。私達はその足で気絶した貴方を担いで、ダンジョンを一時離脱したのです」

「テメエが足を引っ張ったんだよ！」

焚火の向こうからバンガスが吠える。事実であるだけにザックスは言い返すことができず黙りこんだ。

「そう落ち込む事はありません。分かっていた事ですから……」

意外なルメーユの言葉にザックスは顔を上げる。だが、再びバン

ガスが追い打ちをかけた。

「お前は実力不足の足手纏いだ。明日からは外れてもらおう。これ以上テメエにうるうるされちゃ全滅だ！」

返す言葉もなかった。

自身の失態が招いたこの事態にザックスは大きく落ち込む。だが、そんな彼に意外な援護が入った。

「そうですね、パーティの編成を変えて、明日からはザックス君にリーダーをやってもらいましょう」

ルメーユの言葉にバンガスは啞然とする。

「ルメーユ、テメエ、どういう意味だ！」

「言葉通りの意味ですよ」

怒りに震えるバンガスの厳しい視線をルメーユは何食わぬ顔で受け流し、付け加えた。

「気付いていないのですか。バンガス。足手纏いは貴方のほうなのですよ……」

その言葉にバンガスは呆然とした表情を浮かべる。ザックスも又啞然とした顔で焚火の炎に映えるルメーユの顔を見つめていた。

周囲を明るく照らす焚火に薪をくべながらルメーユは言葉が続けた。

「彼はマナレベルも低く、我々上級クラスの冒険者と比べればいささか以上にその実力が劣るのは事実です。」

だが、昨日、今日と彼は皆の先頭に立ち、常に戦端を切り開いていった。初めて見るはずのモンスターに全く怖気づくことなく、冷静にその弱点を見出し、攻撃の起点を作っていた。それに対して貴方は何をしていましたか、バンガス？」

「……………」

「確かに戦っていたのはザックス君一人ではない。」

おそらく彼は気付いていなかったでしょうが、ブラッドンの冷静なフォローがあったからこそ、この2日間彼は戦い続けられた。だが、貴方はその間、ただ後方に控えて、彼がへばる様子を冷たく笑

っているだけだった。

彼よりもはるかに技能も経験もありながら、貴方は何もせずに彼の失態を待ち続けるだけだった」

「それは奴が、出しゃばって……」

「本当にそれだけなのですか？　いつもの貴方ならそんな真似をするとはとても思えません……」。

はつきり言いますよ。

今の貴方はリーダーとしても私達の仲間としてもふさわしくありません」

「ルメーユ、お前……」

「貴方は変わりました。昔の貴方はそうではなかった。どんな時でも強引に前に出て皆を引っ張ってきた。根がそっかしいですから間違いもずいぶんとありましたが、それでも私達は……、私達4人はあなたがリーダーだったからこそ今日までついて来たのです」

「……………」

「ブラッドン、私、レンデイ、ドメツシュ、そして、貴方……。私達5人は互いに信じ合えたからこそ、ガンツハミツシュの酒場の2番席に座る事が出来たのです」

ルメーユの言葉が暗がりにはやかに響き渡る。

「貴方がウルガに憧れ、彼の背を追い続けることに必死であったことも知っています、長い付き合いですから。」

そんな時に突然に現れ、彼らと共に魔将を葬ったザックス君の存在が疎ましいのは、仕方のない事でしょう。

だからといって冒険者の誇りを捨ててどうするのですか！　貴方と私達とのこの数年間という時間はそれほどにつまらぬものだったのですか！

死んだドメツシュに今の貴方は堂々と顔向けができるのですか！　ルメーユの声が僅かに揺れながらもその口調は少しづつ厳しい物になっていく。その言葉にバンガスは弱々しく返答する。

「あいつの死は俺の責任だ。確かにもう俺はリーダーに向いていな

いのかもな……」

「思い上がるのもたいがいにしてください！ 貴方は何様ですか！ 私達は貴方にずっと守られてきたとでも言いたいのですか？

それは、私への、ブラッドンへの、レンデイへの、そしてドメツシユへの侮辱です」

「ああ、そうだよ、俺はどうせ、ウルガにはかなわねえ！ 俺は所詮2番席どまりの冒険者だ！」

バンガスが吐き捨てるように呟いた。その言葉と同時に周囲は沈黙に包まれ、秋の草むらに潜む虫達もいつしか黙りこんでいた。

暫くしてその沈黙を破つたのは、起き上がったザックスだった。

「当たり前だ！ テメ工程度の2流の冒険者がウルガにかなう訳ねえだろうが……」

その言葉に周囲が驚きの色を示し、バンガスもあつけにとられる。よろめきながら立ちあがったザックスは腰の《ミスリルセイバー》を外し、さらに防具を外した。

「図体のでかい、いい年した大人がつまんねえ事で当たり散らしやがって！ そのひん曲がった根性、叩き直してやる！」

ザックスの言葉にバンガスは憤慨する。

「小僧、黙って聞いてりゃ、つけ上がりやがって……。上等だ、やっ……」

バンガスの言葉を最後まで聞く事もなく、ザックスは立ちあがるうとするバンガスの顔面にひざ蹴りを叩きこんだ。容赦のない奇襲攻撃にバンガスは後方へとひっくり返る。

よろめきながら立ちあがったバンガスは、自身も身につけている装備の一切を取り外すとザックスに襲い掛かった。

強力な両の拳がザックスの顔面を捉え、今度はザックスが地面に転がった。

「テメエには前々からムカついていたんだ。目上の者への尊敬つてのが欠片もないテメエの態度の悪さは、目に余るってな」

だが、起き上がったザックスも負けていなかった。左前蹴りをバ

ンガスの鳩尾に放り込むとそのままバンガスの鼻っ柱に頭突きを叩きこむ。自身の重さを利用した一撃にバンガスは片膝をついた。

「目上の者への尊敬だと。笑わせんじゃねえ。尊敬される人間ってのは自然に頭を下げさせるもんだ！ オレを尊敬しろだの、他人に礼儀を強制させる奴ってのは、結局はテメエの薄っぺらい自己満足の為に、虚勢を張ってるだけだ！」

何年生きようとバカは永遠にバカのままだ、救いようはねえ！」

吐き出すように言葉を叩きつけたザックスを、立ちあがりざまにバンガスが蹴りつける。そこからは互いに拳を繰り出している殴り合いへと発展し、焚火の炎で仄明るい周囲に、肉体の激しくぶつかり合う音だけが不気味に響く。

「ちよつと、あんた達、止めなさい……」

二人を制止しようとするレンディの腕をルメーユが掴んだ。

「無駄ですよ、今の二人は誰が何を言おうと止まりませんよ。ああやって積もり積もった互いへの感情を吐き出して、ぶつけ合ってるだけです」

「でも……」

「馬鹿なんですよ。二人とも……。ああいうやり方でしか、分かり合えない、古いタイプの……ね」

「……………」

「互いに武器も防具も捨て去って、マナの力も使わずに己の肉体だけで殴り合う。あれは只の喧嘩です。その証拠にブラッドンは関心を示していないでしょう」

焚火の直ぐ側に座り込んだ狼族の男は、静かに目を閉じている。

「治すのは私なのよ……。ついさっきまで苦労してザックス君の治療をしてたつてのに……」

ふつくらとした頬をさらに膨らませてレンディはそっぽを向く。

「すみませんねえ。でもそろそろ決着がつきそうですよ」

当の二人は互いにふらふらになりながらも拳を振るい続ける。すではれ上がった顔は血にまみれ、肋骨も数本ひび割れているよう

だ。

それでも構わず放ったザックスの渾身の一撃をよるめきながらかわしたバンガスは、かわしざまにその丸太のような左腕を伸ばしたまま振り回し、ザックスのど元を強襲した。カウンター気味に入ったその一撃をまともに受けたザックスは、そのまま地面にあおむけにひっくり返ると動かなくなる。

「けっ、バカが、思い知ったか！」

倒れたザックスを見下ろして自身の勝利を確信したバンガスは、捨て台詞を残してよるめきながら闇のなかへと消えて行く。すぐさまレンディがその後を追い、その姿は闇の中へと消えていった。

「大丈夫ですか？ ザックス君」

地面に倒れたままピクリとも動かないザックスに、ルメーユが声をかける。

「チクシヨウ、図体の分だけ、やっぱり、強えな……あの野郎」

顔面を二倍に腫らしたザックスはゼエゼエと荒い息を吐きながら満天の秋の夜空を見上げる。自身よりも頭一つ以上、大柄な男と真正面から殴り合えば、当然の結果である。

「すみませんね、いやな役を押し付けてしまって……」

彼の傍らに座り込みながら、ルメーユは詫びの言葉を述べた。

「結果、そうなたただけだ。別にあんた達の為にやったんじゃねえよ。俺があいつを殴りたかったから殴ったんだ」

「そうかもしれません。だが、私たちでは駄目だったんですよ。今のバンガスに自分を見つめ直させるには仲間の言葉は甘えにしかありません。外部の者である君の力が必要だった。それに私の細腕では、君のような真似はできません」

「……たく、知らずに乗せられたって訳か……。あんたタヌキだな……」

「ええ、よく言われます。おかげで友達がなくなってます……」

そんな会話を交わす二人の元に足音が近づいた。

それはザックスの傍らで止まり、倒れている彼の傍らに何かを置

くとそのまま立ち去ってゆく。手を伸ばしたザックスは傍らに置かれていた高級薬液水の瓶を取り上げ、まじまじと見つめる。

「珍しいですね。それはおそらくブラッドンから貴方へのお礼ですよ」

「珍しい？」

「彼ね……、ケチなんです。犬ですから……」

ルメーユの言葉に焚火の側へと再び座りこんだブラッドンが「ガウ」と小さくうなり声を上げる。狼族の彼の聴覚はルメーユの小さな声を、しつかり捉えていたらしい。肩をすくめながらルメーユは小さな笑みを浮かべる。

手の中の瓶の中身を一息に飲み干したザックスは、薬液水の効果で己の傷が治癒していく様を感じ取りながら、その懐かしい味と共にふとエルメラの顔を思い出した。

「なあ、ドメツシユって……」

先ほどのバングスとルメーユとのやり取りの中で上がった一つの名前についてザックスは尋ねた。

その質問にどこか悲しい色を帯びた笑みを浮かべながら、ルメーユは答えた。

「ドメツシユは君が酒場に現れる数日前、とある上級レベルダンジョンの中で死んだんです。ほんの一瞬の出来事でした。あまりにもあっけなく彼は逝ってしまった。ドワーフでしたが気のいい奴でした。私達はパーティーを組んで6年近くになります、初めて仲間を失うという経験をしたんです」

「……………」

「彼の死に私達は皆、傷つき、悲しみました。中でもリーダーだったバングスが心に受けたダメージは相当なものでした。それからしばらくして君が現れ、嵐のような一カ月と共にウルガが逝ってしまった。」

決してあるはずはない、そんな事態にバングスは混乱していたんです。私達冒険者にとって人が死ぬというのは、普通の人たちより

もずっと身近であるはずなのに……」

ルメーユの言葉が闇へと吸い込まれてゆく。彼の言葉を聞きながらザックスはぼつりと呟いた。

「人は死ぬ。どんなにあがいても、生まれた命はその運命からは逃れられない。ならば、いかに死ぬか、それを考えよ……」

「誰の言葉ですか……」

「オレ達の部族の教えさ。戦う事しか頭のない奴らの生き方が嫌で、抜け出してきたんだけどな……」

「そういえば、君はフィルメミアでしたね……。染みついた生き方からは人は逃れられないのでしょうか……」

「さあな……」

言葉と共にルメーユは立ち上がる。そして、ふと、彼は思い出したように尋ねた。

「ザックス君、君にとってウルガとは何だったのですか？」

その問いにザックスはぼんやりと夜空を眺めながら考える。

目に浮かぶのは彼のあの背中。

そして、あの日己の前に立ち塞がり、残した『さらば……』という言葉を思い出す。

「壁だな……」

「壁ですか？」

「ああ、乗り越えるべき、あるいは叩き壊すべき壁だ。オレの行かなければいけない場所は、たぶんその先にあるんだ……と思う」

ザックスの言葉にルメーユは微笑んだ。

「そうですね。さて、もう一人の駄々っ子の様子を見に行ってください。ザックス君、君はもう休んでください。明日の事は又明日考えましょう、お休みなさい」

枯葉を踏むルメーユの足音が少しずつ遠のいてゆく。

満天に広がる秋の夜空を眺めながら、ザックスはふと故郷の山でみた星空を思い出していた。

「馬鹿、痛てえ、もつと優しくやれよ……」

「うるさいわね、あんたたちみたいなバカにはこの程度でちょうどいいのよ。まったく、只ですら悪い人相をこれでもかかってくらいに悪くして……」

「うるせえ……」

「ちよつと、どさくさにまぎれてどこ触ってるの……。ニッシヨンの間は禁止だつて言ってるでしょう……」

暗がりの中、レンディの温かな膝枕に身を任せて、バンガスは、彼女の治癒を受けていた。

「あのガキ、えげつない技で容赦なくやりやがって……」

「そうさせたのは、あんたでしょう。悪いけど今回の事に関しては、みんなザックス君の肩を持つでしょうね」

「へん！ どいつもこいつも薄情な……」

そんなやり取りをする二人に落ち葉を踏みしめる足音が近づいた。ぼんやりとした魔法光が周囲をほのかに照らし出し、そこに浮き上がったのはルメーユの姿だった。

「おや、お邪魔のようでしたね」

「うるせえ、この裏切り者が！ 何の用だ！」

バンガスは地面に横になつたままルメーユに背を向けた。そんな彼につかつかと歩み寄ると、ルメーユは容赦なく彼の背を蹴りつけた。

「なにしやがる、この腹黒魔導士が……」

「ザックス君を見習って、私も一発、実力行使をしておこうと思いましてね」

二人のやり取りを傍らに座っていたレンディは呆れた様子で眺めている。その場に腰を下ろしたルメーユに背を向けたまま、バンガ

スは黙り込む。空中に浮かぶ魔法光が、ただぼんやりと3人を照らし出していた。

それからどのくらいたっただろうか……。背を向けたままバンガスはぼつりと呟いた。

「なあ、俺ってそんなにブザマだったか……」

「そりゃ、もう……」

「見ていて、こっちが恥ずかしかったわ」

二人の容赦のない肯定の言葉にその大きな背が小さく萎む。その背に二人はさらに追撃を加える。

「酒場で彼とブルポンスを吊るし上げて得意になってる貴方の姿ときたら……」

「こんな情けない男だったなんて、思いもしなかったわ」

「仮にも二階の二番席に座るパーティのリーダーが率先して騒ぎ立てるなんて……」

「他の席のやつらはみんな呆れて何も言わなかったじゃない……」

「ガンツが怒鳴り付けなかったら、多分、私が燃やしてましたね……」

……

「その前にこの中身のない軽い頭の上に、私が《アイアンメイ鉄槌》を落としてたわ……」

「だあー、俺が悪かったよ……」

言葉は剣より強い。容赦のない二人の言葉にバンガスは心を抉られる。

「そろそろ新しいパーティを探そうかと本当に悩みましたよ」

「冒険者なんかをオトコにするよりも、もっと頭のいい生き方する人を、探そうかしら……」

「悪かった。俺が間違ってた、勘弁してくれ……」

強力な言葉のハンマーを叩きつける二人に、バンガスはとうとうその場に土下座する。そんな姿を目にしながらルメーユは口調を変えた。

「で、もう気が済みましたか？」

「いや、まあ、それはな……」

いくら全力で殴り合って叩きのめしたからといって、そうそう割り切れるものではない。

口ごもるバンガスの姿に一つため息をついたレンディは、その背に己の背を重ねた。

「なあ、ルメーユ、お前、あいつをどう思う？」

いぶかしげな視線を投げかけるルメーユを意識しながら、足を崩したバンガスは言葉を続ける。

「長い事、色眼鏡で奴を見てきたからな、正直、今の俺にはどうすればいいかわからねえ。お前と違って俺は頭も悪いしな……」

その言葉に僅かな黙考の後にルメーユは返答する。

「信頼に値する人物であると私は見ますがね。だからこそ、ウルガ達も彼を頼りにしたのでしよう」

「あいつが……頼りにされてたのか？」

「そうでしょう？ 結果が全てを物語っているではないですか？」

「昔、貴方に尋ねた事がありましたよね。あなたにとってウルガとはなんなのか……と。」

その時あなたはこう答えた。『俺は奴のようになりたい』と。

先ほど彼に同じ事を尋ねてみました。彼はこう答えましたよ。『乗り越えるべき、あるいは叩き壊すべき壁だ』と。

貴方達の差は分かりますよね……」

ルメーユの言葉にバンガスは沈黙する。

「でもね、ウルガはもういないんです。そして、あなたはウルガではない。私達のパーティーのリーダーなんです、かけがえのない……ね。もう、ウルガの背を追う事も、ザックス君と己を比べる事も、そしてドメツシュの死を一人で背負う事も、いい加減にやめませんか」

ルメーユの言葉が静かに響く。

「私達は今、この瞬間を生きているのです。そして、私達のパーテ

イもガンツハミツシユの酒場も過去最大の試練の中にあります。にも拘わらず、前を向く事なく、互いの足を引つ張り合おうとする愚かしさにそろそろ気付くべきではないですか？」

そう告げるとルメーユは沈黙する。沈黙に包まれた3人の頬を秋風が優しく撫でて行く。

「これ以上は、もう言いません。後は貴方が自分で考えてください。私達は明日に備えて、もう休みます」

バンガスを残して、ルメーユとレンディは立ちあがる。

落ち葉を踏みしめながら去ってゆく二人の足音を耳にしながら、バンガスは一人残された闇の中に寝転んで、夜空にまたたく秋の星座を眺めていた。

「考えるのは苦手なんだよ……」

ぼつりと呟いたバンガスの言葉は、闇の中に潜む虫達の楽器の音色に優しくかき消されていった。

2011/09/09 初稿

13 ザックス、再挑戦する！

翌日の空はさわやかな秋晴れだった。

焚火のまわりで簡単な朝食を終えたあとのミーティングで、ルメーユは意外な方針を提案した。

「もう一度ははじめからやり直しましょう」

このパーティにおいて、彼の提案は決定事項そのものであるといつても過言ではない。ルメーユの提案に只一人戸惑うザックスに、彼はその真意を説明した。

「第一の目的は、ザックス君のマナLVの底上げです。昨日までの2日間でそれなりに上がったかもしれないませんが、このダンジョンの踏破を成功させる為の不安要素の一つであることは確実です」

ザックスは自身のクナ石を確かめる。

名前	ザックス				
マナLV	29				
体力	167	攻撃力	214	守備力	177
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	168
智力	141				
技能	149				
特殊スキル	収奪	駿足	全身強化	倍力	直感
称号	剣撃術	斧撃術	一刀両断	乱れ斬り	体当たり
職業	中級冒険者	魔将殺し			
	剣士				
敏捷	173				
魅力	124				
総運値	0	幸運度	MAX	悪運度	MAX

状態	呪い（詳細不明）全属性半減
備考	協会指定案件 6 129号にて生還 協会指定案件 6 130号にて生還 協会指定案件 6 131号にて生還
所持金	32867シルバ

武器	ミスリルセイバー
防具	魔法障壁の籠手 神聖護布の上衣 疾風金剛のひざ当て バトルブーツ
その他	ウルガの腕輪

ルメーユの指摘は至極まっとうなものである。故にザックスは彼の言葉に了解の意を示した。

「第二の目的は私達の集団戦闘戦術の再確認です。ドメツシュがいなくなつて以来、初の困難を伴うミッションにおいて私達は新しい編成と戦術パターンを練り直さねばなりません」

これは4人から離れて座るバンガスへ向けられた言葉だった。「幸いなことに、ザックス君からこのダンジョンの攻略に当たつてのいくつかの資料が提供されました。これで私達は大幅に時間の節約ができるはずです」

その朝、ザックスはナナシのパーティのリーダーから受け取った資料をルメーユに見せていた。

「成程、これがあつたから君は迷いなく踏み込めたんですね……」ニコリと笑いながらルメーユはその全てに目を通した。

資料の内容を恐るべき速さで自身の物としていく彼の能力に驚いたのはザックスの方だった。仲間達の手を巡回して再び手元に返ってきたそれを《袋》^{バック}に戻すと、ザックスは彼の方針に了承の意思を示して立ち上がる。

こうして、再び彼らはダンジョンの踏破を最初からやり直すこととなつたのである。

「なあ、放つといてもいいのか？」

4人から遅れて後を付いてくるバンガスの事が気になるザックスは、ルメーユに尋ねた。

「いいんですよ、彼は私達と共にいるのです。決して逃げた訳ではない。いずれ元の彼に戻りますよ……」

他のメンバー達も彼の行動を気にする様子はない。皆が互いに分かちあっている。その自然な姿はザックスには少し眩しかった。

(いいもんだな……仲間ってのは……)

ふと思い浮かんだ彼らへの羨望をそつと胸にしまって、彼は再びダンジョンの入口を潜り抜けたのだった。

再挑戦を開始したダンジョンで最初に出会ったモンスターは奇しくも数日前と同じジャイアントだった。

自分達よりも大きな巨人族に対して、ルメーユの指示でブラッドンが前に出る。ギラリと輝く斧槍が中空に弧を描きジャイアントを怯ませる。鋭い刃の輝きに怯んだジャイアントの懐にザックスは飛び込み一気にその身体を切り裂いた。

「能力強化は私に任せて……」

レンデイの言葉を受け入れたザックスは、己の体内のマナのコントロールに専念しながら敵を打ち倒した。

リーダーのバンガスは失ったドメッシュの穴埋めをすべく、殿に位置して、ルメーユとレンデイの防御役に回る。

前日までとは全く異なる戦闘の流れにザックスは驚きを隠せなかった。

階層が深まりBクラス及びAクラスモンスターの集団と対峙しても、彼らの戦いは全く危なげなく、着実に歩を進める。何よりも周囲の援護を受け入れる事で、ザックスの身に昨日までのような一方的な負担はかからなくなった。

精神的にも余裕ができた彼の動きには、俄然、キレが生まれ始めた。戦闘終了後には換金アイテムまで集められる余裕すら生まれる。ブラッドンと先頭を交互に入れ替わりながら歩を進める彼の頭の中にふと、中級試験で審査官となったイリア達のパーティのことが思い浮かんだ。

「結局、周りが見えてなかったのは俺も同じか……。ヘツポイヤマヌケルと大して変わらないって訳か……」

先を歩くブラッドンの背にふとウルガの背中が重なった。

（未熟者め……）

自身の腕に輝くウルガの魂が、そんな言葉でザックスを叱咤したかの様に思えた。

「準備はいいですか」

僅か一日でたどり着いた最初の難関である第20層へと続く扉の前で、ルメーユはザックスの状態を確認する。

「ああ、多少の疲れはあるが全く問題ない。昨日とは大違いだ……」
その言葉にルメーユは小さく笑みを浮かべて続けた。

「では、再戦と行きましょう。作戦通りにいけば問題ないはずですよ」
侵入した大広間の中央には昨日と同様に《アイアン・ゴーレム》の威風堂々たる体躯が待ち構えている。

戦闘領域に入ると同時にルメーユの雷術《極大雷撃陣》が《アイアン・ゴーレム》を襲った。すかさず《斧槍》^{ハルバード}を構えたブラッドンが前に出て、後ろに続くザックスが《爆片弾》を頭部に向かって放り投げ牽制する。

《爆片弾》の爆発に一瞬怯んだ《アイアン・ゴーレム》に真正面から挑んだ、ブラッドンの描く刃の弧が《アイアン・ゴーレム》の巨

体を削り取る。

「下がって」

言葉と同時に、再びルメーユの《電結連弾》が飛び《アイアン・ゴーレム》の足を凍らせた。鉄製の身体が災いし、床に両足を氷着させられた《アイアン・ゴーレム》は、片足に重心を掛けて強引に氷をはぎ取るうとする。その瞬間、軸足の側に素早く回りこんだザックスが《ミスリルセイバー》でそのひざ裏を薙ぎ斬った。剣の切れ味に加えて、《倍力》の効果、及び体内のマナのコントロールが加わったその一閃は驚く程にスムーズに刃先に伝わり、ひざ裏から切断され片足を失った強靱なゴーレムの身体は音を立てて崩れた。前のめりに倒れた巨人の正面にすかさず飛び込んだバンガスが、眼前のモンスターの頭部に上段から《金剛大斧》ダイヤ・アックスを叩きつける。

断末魔の声を上げる事もなく、頭部を一刀両断された《アイアン・ゴーレム》はそのまま動かなくなりやがて、体組織が崩れて消え始める。全く反撃の隙すら与えずにボスモンスターを完封した一回は、僅かに息をついた。

消えゆくモンスターのマナに自身のそれを同調させて、換金アイテムを回収しようとしたザックスの手に、一抱えもある鈍い輝きを放つ金属の塊が残される。

「《魔法銀》ミスリルですね、それもかなり上質の……。モンスターから獲得できる鋼材には良質なものが多くですからね……」

「へえ、こいつが……」

Aランクアイテムではあるが、レア指定されており良質な武器防具の材料となる為、その相場は一ランク上のアイテムに匹敵する。昨日までの鬱憤を十分に晴らすかのように進み続けた怒涛の一日は、こうしてようやく終わりを告げた。

自身をも含めたこのパーティの潜在能力をザックスは十分に納得していた。

これなら踏破も可能であるかもしれない、そんな予感が彼の中に芽生え始めていた。

探索は5日目に入っていた。

前日に丸一日をかけてザックス達は21層から40層の扉の前までの道のりを踏破していた。

ナナシのパーティの資料はここまでの道のりにも大きく貢献し、ザックス達は様々なパターンで襲い掛かってくるAクラス、あるいはAAクラスモンスターの群れを危なげなく打ち払っていた。リーダーであるバンガスの態度は依然として変わらなつたが、それでも彼らは十分にパーティとして機能し、余裕を持ってダンジョンの道のりを進んでいた。

いささか無理な日程がたたなり始め、見えない疲労が蓄積していた一同だったが、ルメーユからの休みの提案は珍しく全員によって却下され、少しでも早く踏破を完了させるべく、彼らは再びこの場所に戻ってきていた。

眼前に大広間へと続く巨大な扉が立ちはだかる。初めての探索以来もはや見慣れた光景であったが、周囲には異様な冷気が立ち込めていた。

「心の準備はいいですね……」

白い息を吐きながらのルメーユの言葉に誰もが頷いた。

ここから先の情報を彼らは全く持ち合わせていない。文字通り出たとこ勝負となることを覚悟した一同は、5人で力を合わせて扉を押し開く。大広間へと続く通路がぼっかりと口を開け、中から一段と濃い冷気が漏れ出てきた。

暗い通路を慎重に進み、ようやく開けた視界の先には恐るべきモンスターが彼らを待ち受けていた。

Sランクモンスター《ブルー・ドラゴン》である。

伝説獣と呼ばれるSSランククラスのモンスターには一歩及ばないものの、その地力には並々ならぬものがある。

「でっかいトカゲのくせに冷気を吐くのかよ。なんて非常識な奴だ

……」

ザックスの素直な感想に、ルメーユが慌ててフォローを入れる。

「ダメですよ。あのクラスのドラゴンになると人間以上の知性があるんです。いくら人相が悪くて、外見が似てるからって、トカゲ扱いたら気を悪くして暴れ出しますよ」

「あんたの言葉も十分傷つくと思うぞ」

ザックスの冷静なつつこみに、答えたのは当の《ブルー・ドラゴン》だった。

魔力のこもった咆哮と共にドラゴンは冷気を吐き散らし、周囲の温度をさらに下げて行く。まだ戦闘領域に入っていないにも拘らず、《ブルー・ドラゴン》は戦闘意欲満々といった様子である。

「先、行けぜ！」

レンディに補助魔法をかけられたザックスが前に進み出そうとしたその時だった。ザックスの前に大柄な背中が立ちふさがる。

「調子に乗るな、小僧、難敵に対して先陣を切るのはリーダーであるこの俺の仕事だって、昔から決まってるんだ。雇われ者は黙って従え」

ここまでの道中、ずっと殿と防御役に徹してきたバンガスは相当にストレスがたまっていたのだろう。自身の生存すら危うくしかねない難敵と対峙してどうやら我慢の糸がぶつつりと切れてしまったらしい。

バンガスの行動に驚き、ルメーユと顔を見合わせたザックスは、彼が笑みを浮かべていることに気付いた。

『これがいつもの彼なのです』

言外にそう語るルメーユと周囲の者達から安堵感を感じ取る。故にザックスはバンガスの言葉に従った。

「上等だ！ あんたの本気をきっちり見せてもらおうじゃねえか！」
「おうよ！」

言葉と同時に全員の身体が輝きに覆われる。《大僧正》レンディの光の結界が完成したようだった。それを確認すると同時にバンガスが先頭を切って走り出した。ザックスがそれに続く。すかさずラッドンがルメーユとレンディのカバーに入った。

自身に駆け寄ってくる二人の敵に対して《ブルー・ドラゴン》は《冷気のプレス》で応戦する。はじめて出会った《グリーン・ドラゴン》よりもさらに巨大な身体と《ドラゴンゾンビ》を遙かに越える俊敏性とパワー、そして強力な《冷気のプレス》は、《剣》の魔将を除けばこれまで出会った中でも最強の敵といえる。

正面をバンガスに任せてザックスは側面から陽動をかける。

振り回される強靱な尾の一撃を確実にかわし、その背に《爆裂弾》を投げつける。思わぬ方向からの攻撃に《ブルー・ドラゴン》は堪らず標的をザックスに変更する。

だが、それこそがバンガスの思惑だった。自身の武器《金剛大斧》の刃に炎の魔力をのせて放った《大炎斬》の一撃が《ブルー・ドラゴン》の強靱な体躯を斬り裂いた。

巨大な咆哮を上げて暴れる《ブルー・ドラゴン》。そしてその姿にザックス達は自分達の勝利を確信する。

だが、次の瞬間、圧倒的な殺気が周囲を支配した。

巨大な殺気の中央にある《ブルー・ドラゴン》の姿に慌てて飛び下がったザックスが、それと目を合わせた瞬間、ザックスの目にはそれが笑ったように見えた。

（ちよつと待て、こいつ自分の意思があるのか）

攻撃本能に任せて冒険者達を襲うモンスターにいかにも高度な知性

があつたとしても、人間のようには綿密な戦術と計算の上に攻撃を行うモンスターなどありえない。

だが、眼前の《ブルー・ドラゴン》からは明らかにそのような意思が感じられた。これは竜族所以のことなのか。あるいは……。

「うおおー」

バンガスが再び己の武器に炎を纏わせて《ブルー・ドラゴン》に挑みかかる。その一撃を難なくかわしたドラゴンは前腕の一撃で逆にバンガスを壁面まで弾き飛ばした。攻撃をかわした瞬間、ドラゴンの姿がぶれたように見えたのはザックスの気のせいだろうか？

さらに背後に立つザックスに襲いかかるうとするドラゴンに対して、ルメーユが《極大火炎連弾》を打ち込んで援護する。その隙について《駿足》の効果で側面に回り込んだザックスはドラゴンの後ろ脚を《ミスリルセイバー》で一閃しようとした。

だが、次の瞬間、眼前の強靱な目標は消失し、代わりに背後からの尾の一撃でザックスも又、壁面近くまで弾き飛ばされた。とつさに籠手の魔法障壁を展開させたもののダメージは大きい。すぐ近くでバンガスの治療にあたっていたレンディが、すかさずザックスにも治癒の輝きを纏わせた。

「この野郎、間違いない。強化系の呪文を使ってやがる」

ザックスの言葉にルメーユが反応する。

「なるほど、そこまでの知能があると言う訳ですか。もはや伝説獣の領域に達しつつあると言う訳ですね」

「どうするよ。こいつはちよつとやそつとじゃ、倒せそうにねえぞ」

「仕方ありません。切り札を使いましょう。ザックス君にバンガス、私が援護しますので、もうしばらくだけ持ちこたえてください」

「行くぞ小僧、ついてこい」

切り札の内容を確かめることなく、ザックスは回復したバンガスの後に続く。そんな二人に《ブルー・ドラゴン》は再び《冷気のブレス》で応戦した。

「俺に任せろ」

バンガスの前に出たザックスは籠手の魔法障壁を展開して、冷気のブレスを真っ向から受け止める。

障壁で効力を弱められたブレスに反応したウルガの腕輪が輝きを生み、その効果でさらに威力を半減させる。レンディにかけられた光の結界によってさらに威力を弱められたブレスは、ザックスの髪を僅かに凍らせるにとどまった。

「やるじゃねえか」

ザックスの背後から飛び出したバンガスがドラゴンに一撃を加える。

だが、それを《駿足》の効果でなんなくかわした《ブルー・ドラゴン》に対して、ルメーユが《極大火炎連弾》を打ち込んだ。体の表面を僅かに焦がしたものの、効果はいま一つのような。

さらにドラゴンの足元に二つの球体が転がり爆発する。

「どうだ、2連発の大サービスだぜ！」

ザックスの《爆片弾》の爆発によって、粉碎した破片が《ブルー・ドラゴン》の両の後ろ脚にダメージを与えた。今日、初めて見る武器はさすがに堪らなかったのか、《ブルー・ドラゴン》は僅かに後退した。

「ブラッドン、まだか！」

バンガスの声にザックスは開始時より後方で戦闘に参加することなく控えていたブラッドンの姿を探す。そして、そこにあった彼の姿に目を見張った。

「あれは……」

それはかつて一度目にした光景。

ウルガがその命をかけて自身の姿を変質したように、ブラッドンも又その姿を狼族の獣戦士と化していた。

「おい、大丈夫なのかよ！」

ザックスの不安の原因をバンガスは察したのだろう。

「大丈夫だ。奴は純粹種の獣人族だ。それに獣戦士化は、それほどヤバい代物じゃねえ！」

その言葉に僅かに安堵する。

「見てな、これが俺達の切り札。ここからがブラッドンの本領発揮だ」

バンガスの言葉と同時にブラッドンの姿がかき消える。

次の瞬間、後退したドラゴンの足元に現れ、その斧槍でもって《ブルー・ドラゴン》を蹂躪し始める。

《瞬歩》を利用した連続攻撃に《ブルー・ドラゴン》は成す術もない。周囲で踊るように多彩な攻撃を仕掛けるブラッドンは《ブルー・ドラゴン》を圧倒しているように見える。だが、ザックスは小さな異変に気付いた。

「おい、なんか、ヤバくないか」

ザックスの言葉にバンガスが一瞬、不審の色を浮かべたものの、直ぐに彼の言わんとする事に気付いた。

「このヤロウ、そういう事が」

獣戦士化したブラッドンのスピードにかなわぬと見るや否や、《ブルー・ドラゴン》は防御に徹しつつ、自身の周囲を冷気で凍らせ、確実にブラッドンのスピードを殺し始めている。いくら獣戦士としていつかは体力に限界が訪れる。自身の鱗をわざと傷つけさせて、《ブルー・ドラゴン》はじつとその時を待っている。

その事に気付いたバンガスが再び走り出す。

炎を纏った《金剛大斧》を大上段に構えて、《ブルー・ドラゴン》に襲いかかるうとする。

とっさにブレスでそれを牽制した《ブルー・ドラゴン》だったが次の瞬間、目を見張った。

炎を纏った《金剛大斧》でブレスを相殺したバンガスの背を踏み台にして、その後ろに続いたザックスが真正面から襲いかかった。

ザックスの《ミスリルセイバー》の一閃が《ブルー・ドラゴン》の左目を抉り、隻眼となったそれは咆哮と同時に、空中のザックスを弾き飛ばした。

（浅かったか……）

弾き飛ばされたダメージに苦しむことなく立ち上がったザックスは、自身の必殺の一撃が僅かに左目だけしが奪えなかった事に唇をかむ。

もつと強い一撃が、もつと鋭い一撃が欲しい。

瞬間ザックスの脳裏に一つのイメージが浮かんだ。

「バンガス、もう一回行く！ ブラッドン！ もう少しだけ踏ん張ってくれ。ルメーユ、雷撃で援護を！」

言葉と同時に走り出す。

瞬時にルメーユの雷撃が飛び、ブラッドンが最後の力を振り絞ってそのスピードで《ブルー・ドラゴン》を足止めする。

駆け出したザックスは《ミスリルセイバー》を鞘にしまうと、柄を握り締めたままバンガスの背に向かって駆けだした。彼の背後を取った瞬間、体内のマナを左足に集めて強く床石を踏み込んだ。

強烈な踏み込み音があたりに響くと同時に、ザックスは飛び上がり逆の足でバンガスの肩をさらに踏み台にして蹴り飛ばす。

死角から突然現れたザックスの姿に全く反応できない《ブルー・ドラゴン》の首筋に飛び込んだザックスは激突の瞬間、一気に鞘の中からミスリルセイバーを引き抜き、ドラゴンの強靱な首筋を切り裂いた。

胴体から斬り飛ばされた《ブルー・ドラゴン》の首が宙を飛ぶ。空中でバランスを失いつつザックスは、偶然宙を飛ぶドラゴンの首と目を合わせた。

瞬間、世界が止まった。

『見事だ！ 解放者よ！』

『見事って……、あんた、ドラゴンか』

『いかに、今日の勝負は貴様たちの勝ちだ！ だが、次に会うときは容赦しない。このような限定された空間内で束縛された幻影としてではなく、わが本体の力でもって相手をしよう。それまでに貴

様も守護者達共々力を磨く事だ……」

『守護者達つて、おい……、何の事だ？』

『我が印を貴様に与える。再会を楽しみにしているぞ、解放者よ！』

『オレの話の話を聞けー』

再び世界が動き始める。

途端にザックスの身体は地面に激突した。どう、と地響きを立てて首と分断された胴体が倒れて行く。そしてすぐさまマナの輝きと共に実体を失い始めた。

戦いの終焉を確認するとレンディがバングスに駆け寄り、ブラッドンはその場に座り込む。

大きく身体を震わせて獣戦士化を解いたブラッドンは、大きく息を吐くとその場に倒れ込んだ。

「いいのか？」

床に転がったままのザックスのもとに歩み寄ってきたルメーユに、彼は尋ねた。

「大丈夫ですよ。獣戦士化はそれほど身体に無理をかける事はありません。大きな疲労を伴いますが少し休めば回復します。それよりも、ザックス君、君の左手に輝くそれは何なのですか」

言われて己の左手を見たザックスは、そこに見覚えのない紋章を握りしめていた。

「不思議な文字が彫り込んでありますね、はて、竜人族の言葉にも似ているようですが……」

ザックスから紋章を受けとったルメーユは不思議そうにしばらく眺めていたが、やがて、ザックスにそれを返した。

「それは、君が持っていて下さい」

「いいのか？」

「どうにも厄介事の匂いがありますので、そういうのは君の領分ですよっ」

ニヤリとルメーユが笑みを浮かべた。

とてつもなく悪い物を押し付けられたような気もするのだが、的を射ているだけに反論できない。

「ルメーユ、これ、何かしら」

バンガスを回復させたレンデイが床から何かを拾い上げる。手渡されたそれを《鑑定》していたルメーユは、僅かに表情を崩した。

「これは珍しいですね。ドラゴンの宝玉ともいわれる《ドラグオーブ》ですね」

「高価なものなの？」

「大した事はありません。ざっと最低価格で50万シルバ程度のものです……」

「5、50万シルバ……」

レンデイとザックスが絶句する。

「あくまでも最低ですよ。これだけ大きいとおそらくもう少しくらいはするでしょうね。今回遭遇したオオトカゲさんは、ずいぶんと気前のいい方だったみたいですね」

興味なさげにそう告げると《ドラグオーブ》をばいっと無造作にレンデイに放り投げる。どうもルメーユの価値観は常人とは異なるらしい。

暫くの休息の後にようやく起き上がってきたブラッドンを加えた一同は、再び探索の続行を決定する。

「それではバンガス、ここからは貴方に指示を任せていいですね？」ルメーユの言葉に従って、一同の中心にバンガスが進み出る。

パーティのリーダーとして復帰すべく皆の中心に立ったバンガスは、ザックスと向き合った。

ここまで二人の間には様々な行き違いがあり、互いに激しく激突する事もあった。

だが、困難な敵に共に立ち向かい、助け合う事で、今、互いの間に新たな絆が生まれようとしていた。周囲の者達もようやく訪れた和解の時にほっと胸をなでおろす。

「長かったわね……」

「ええ、これで私もようやく肩の荷が下ります」

「ガール……」

ついに苦勞が報われる時がきたか、と安堵の表情を見せる3人に見守られながら、開口一番、バンガスはザックスに向かって叫んだ。

「テメエ、よくもさつきは俺の事を2度も踏み台にしゃがったな！」

「うるせえ、でかい図体が邪魔で仕方がなかったんだ！ その不細工な面を踏み台にできなかっただけでも、ありがたいと思え！」

売り言葉に買い言葉。

再び二人の口論が始まり、険悪な空気が辺りを覆った。

すかさずルメーユの雷撃が飛び、レンディが《アイアンメイ鉄槌》を投げ付け、

ブラッドンが大きく咆哮したのは……言うまでもない。

2011/09/10 初稿

14 ザックス、苦闘する！

探索5日目・1-034号第45層。

微細な光沢を放つ壁面が延々と続く。第40層の大広間を通り抜けて以来、通路の一面がこのような壁面で構成されている。

僅かな輝きを放ちながらも、決して冷たく硬くはない、だが、それでいて少々のことでは傷一つ付かない、初めて見るその壁面をザックスはマジマジと観察する。

「ケル石ですよ、純度はかなり低い物ですがね……」

ルメーユが解説する。

「ケル石って、あの神殿にあるあれか？」

「ええ、尤も神殿や裏酒場で使われるものはもっと純度が高く、大量のmanaを封じ込められる物ですがね、まったく厄介な場所です」

「厄介って？」

「まず第一にクナ石のマーキングができません。manaを壁面が吸収してしまいますからね。もしもこの先、一度ダンジョンを離脱することになれば、私達は再びオトカゲさんか、あるいはそれに準ずるボスモンスターを倒さねばならないのです」

「マジかよ……」

「さらに厄介なのが周囲の空気ですね。気付きませんか？」

言われてみれば僅かにだが、空中にうっすらと何かが漂っているように感じられる。

「manaですよ。本来manaは意識しないと感じ取れないものはずなのですが、このあたりは意識しなくてもはつきりと感じられる。もつと下に行けば、目に見えるぐらいに濃くなるでしょうね……」

「そんなに厄介なのか……」

「確かに悪い事ばかりではありません。理力の消耗を抑え、術が強力になるという利点は挙げられます。だが、それは相手も同じ、マナによって形作られるモンスターの力は倍増するはずですよ。おかしいと思っただけですよ。第41層以降遭遇する周回モンスターの強度ランクが急激に落ちているのに、強さがさほど変わらないんだから……」

「言われてみれば確かに、でも、遭遇率は落ちている……」

「未踏破ダンジョンなのにトラップもない。出現モンスターが強いだけなら過去、様々に名を馳せたパーティが攻略に成功していてもおかしくはなかったはずだと思っていました。こういう事だったのです。古代帝国人は厄介なものを作ってくれたものです……」

「古代帝国？」

「ルメーユはね《アドベクシュ・ルム》の存在を信じてるのよ」

二人の会話にレンデイが割って入る。

「《アドベクシュ・ルム》？」

「古い言葉で『輝ける帝国』という意味。昔、アドベクシュ海、つまり『輝ける海』と呼ばれる大円洋の全てが大陸で、そこに『輝ける帝国』が繁栄していたという突飛な話よ」

「突飛ではありません。幾つもの仮説だって証明されています」

「ちよつと待てよ。一体そのなんとか・ルムとダンジョンがどう関係あるんだ？」

何気ないザックスの問いにルメーユの目つきが変わった。

ああ、始まったわね、とレンデイがため息をつく。

「いいですか、ザックス君！ 君はダンジョンというものの存在をおかしいと思わないのですか。こんなものが自然に造られたと本気で思っているのですか？」

「いや、まあ、それは、確かに……」

すでにルメーユの目の色までもが変わっている。どうやら彼は、自身の信じる物を語り始めたらしまらないタイプの人間のようなのだ。

「一説にはダンジョンは古い時代の権力者たちが己の墓として作っ

たものであるとか、国を挙げての大規模な公共事業だったといわれてもいます。ですが、そのような事実を示すものはダンジョンには何一つ残されていない。何者かが意図的に操作した真っ赤な出鱈目なのです」

「何者かって誰だよ」

「創世神殿です」

「ちよつと、ルメーユ、それ以上はやめときなさいよ。ザックス君が混乱してるじゃない」

「いいえ、真実は正しく追及されねばなりません！ 後世に物事を正しく伝えるのは、智ある者の正しき義務なのです！」

「まあまあ、とにかく何で、創世神殿がここで出てくるんだよ」

「大陸中、歴史の真実を探ろうとする者は必ず創世神殿の存在で行き詰ってしまうのです。そして彼らの疑問に創世神殿は決して答えようとはしません。しつこく食い下がったものは皆、闇に葬られてしまうのです」

「おいおい、あそこってそんなにヤバいとこなのか？」

「ヤバいも何も、多くの国々が生まれては消えて行くこの大陸で、古くから最大の権力を誇り続けるのはエルタイヤの最高神殿なのですよ。ああ、一度でいいから最高神殿の内側に入って、あのバカでかい神殿内に封印された資料を片っ端から読み漁ってみたいものです」

「あそこにか？ 別に何にもない只のバカでかい建物だったけどな……」

何気ない一言だった。

だが、その言葉にルメーユは喰らいついた。

「ザ、ザ、ザ、ザックス君！ 君はあの中に入ったのですか！」

「あ、ああ、この間まで《エルタイヤ》に行ってたからな。たまたま神官と巫女の中級試験の実技審査官のクエストを受けたもんで……。暫くの間、厄介になってたんだ」

「な、な、な、何という事を！ どうして私を誘ってくれなかった

のですか！」

「ル、ルメーユさん、く、苦しい。首、首……」

もはや半狂乱状態のルメーユは、ザックスの首を締めあげていた。「ああ、君は何という幸運に恵まれているのだ。さすがに幸運度MAXのパラメータは伊達ではないという事ですね。それに比べて私は何という不運！ 目の前に大きなチャンスが転がっていたというのに……！」

ええい、それもこれも、バングス！ 貴方の責任ですよ！ つまらない事で彼といがみ合うから、私はチャンスを逃してしまっただじやないですか！」

知るか、と背を向ける大男に、八つ当たりしながら、心底残念そうに彼は肩を落とす。

暴走する彼をもはや止める者はいない。パーティの皆が呆れかえっている。

「いいですね、ザックス君、今度そんな機会があったら、私を真っ先に誘うのですよ」

「あ、ああ」

「バカ言わないで！ 貴方みたいな人を神殿内に入れてしまったら、ザックス君どころか私達まで、創世神殿から指名手配されるじゃない！」

「ええい、真実の為です。多少の犠牲は仕方ありません！」

「他人の人生を勝手に貴方の犠牲にしないで！ 私はイヤよ！」

どうにもおかしな空気になりつつある。なんとか場の空気を変えようと、ザックスは苦し紛れに別の話題を振った。

「……たく、ガンツも何で又、こんなところをわざわざ指名したんだらうな」

「ザックス君、君、知らなかったの？ このダンジョンと彼の因縁を……」

レンディが驚いたように尋ねる。

「へっ……」

「ウルガ達以前に、ガンツの酒場の2階の一番席に座っていたパーティが二度程、ここに挑戦し、どちらも失敗して未帰還のままのよ」

「おいおい……」

「今、彼の心中は居ても立ってもいられない、そんな状態ではないかしら……。それでも彼はこのダンジョンの踏破を私達に望んだ。それほどに私達と君に期待してるのよ……」

「そういう事が……」

冒険者としてとびぬけたウルガ達の実績を越える事はなかなかできるものではない。

だが、過去の一番席のパーティよりも優れた力を持つという事を証明するには、このダンジョンの踏破がうってつけなのであろう。いくら支配下冒険者数を誇ったとしても、このダンジョンの踏破は並のパーティでは務まらないのは身を持って理解できる。

二度ある事が三度あるのか、それとも三度目の正直となるのか。これはガンツの賭けであり、ザックス達にとっても賭けなのである。「面白え、やってやろうじゃねえか」

目先の困難に、俄然気力を湧かせたザックスの言葉は、周囲にそれとなく伝染していく。

「おい、そろそろおしゃべりはやめるんだな！ 妙なやつが出てきたぞ」

先頭に立っていたバンガスの声が響いた。それまでのどこか和やかだった空気が一転して、緊張感に包まれる。

「女性ですか……」

「爺さんだな……」

「子供……かしら？」

その言葉に誰もが顔を見合わせた。

「妙ですね、見えているモノがみな違うという訳ですか？」

ルメーユが首をかしげる。先頭に立つバンガスの隣りに立つザッ

クスは、よたよたと近づいてくる人影に目を凝らす。

「おい、気をつけるよ」

「分かってるよ」

よたよたと近づいて来た人影は、後数歩という距離でようやく判別ができるようになる。と、やおら二人の後方から光弾が飛んだ。

光に呑み込まれた人影は、そのまま消滅する。

「おい、ルメーユ、一体どういう事だ」

振り返ったバンガスの目に、僅かに顔色を変えたルメーユの姿が映る。

「気をつけてください《影族^{シャドール}》です」

「《影族^{シャドール}》？」

「濃いマナの充満する場所に発生するモンスターと呼べるかどうか分からない存在です。現象と違ってよいかもありません。マナの影響を受けやすい冒険者の精神に取りついて、様々な幻覚を見せます。輝光術系の魔法もしくは、魔力を付与した武器でしか対処できません」

「強いのか？」

「いえD級もしくはE級程度です。ですが徒党を組んで発生したり、別のモンスターがまぎれるとなるとどういう事になるか……お分かりですね？」

その言葉に誰もがごくりと唾を飲み込んだ。

「先を急ぎましょう。その前にいくつかの対策をとっておかねばなりませんね」

先ほどまでの半狂乱ぶりが嘘のように、ルメーユの声は緊張している。だが、事態は彼らが想像する以上に厳しいものだった。

視界は悪かった。

瘴気といつてもよいほどの濃いマナが辺りに立ち込め、さながら霧の中を歩いているようだった。50層を越えたあたりからぴたりとモンスターの出現はなくなり、代わりにわらわらと現れる《影族^{シャドール}》を振り払う道程が続いていた。

最も負担がかかったのは輝光術系の魔術を使えるルメーユとレンディであり、すでにルメーユの方は体力の限界に達してブラッドンに背負われている。

彼を背負ったブラッドンも《ブルー・ドラゴン》との戦闘の際の獣戦士化の影響で疲労がたまっているようで、顔には出さぬものの相当厳しい状態にある。殿についたバンガスは、同じく体力の限界に達しつつあるレンディに肩を貸している。

先頭に行くザックス、その後ろを歩くブラッドン、殿のバンガス、彼ら3人の身体は同志討ちを防ぐためにロープで繋がれていた。強さこそさほどではないものの《影族^{シャドール}》の出現は厄介であることに変わらぬ。

55階層付近で数十体の集団に出くわした時は、全員が離脱を覚悟した。たまたまザックスが閃光弾の存在を思い出し、それを使って一掃したものの、使用回数に制限のあるそれは、万能な助けとは必ずしもなりえなかった。

一度離脱すれば、再び40層からやり直し、ケル石の壁とマナの瘴気によってビバークも不可能であり、一行は前日から丸2日間歩きづめだった。

ダンジョンの構造がさほど複雑なものでなかった事が救いとはいえ、《影族^{シャドール}》が見せる幻覚は大きく一行の精神を追い詰めた。

自身が最も忌むべき記憶を引きずり出し、苦手とする人物の姿を形取る。悪辣ともいえるその性質は、これまでのダンジョン探索とは異質のものである。

互いに声を掛け合って幻影の存在を確かめあう事で、彼らは危難を逃れ続けていた。

濃い疲労の色を顔に張り付けながら、一行はとりあえず60層を目指して歩き続ける。そこが最下層でなければ離脱も已むをえない。追い詰められた彼らはそのような心理に達しつつあった。

未踏破ダンジョンの真の恐ろしさは先が見えないという事にある。ゴール地点が分かっているならば、その場所を目標として進み続ければよいが、先行きの全く見えない探索行では、どこにあるとも知らないゴールに向かって延々と歩き続けるための精神力と団結力を要求される。

「おい、ザックス、しつかりしねえか」

はれ上がった顔のバンガスが同じくはれ上がった顔のザックスを怒鳴りつける。その声にザックスは朦朧とした意識を取り戻す。

数時間前から眠気を覚ます為に、互いの頬を張りあって、ようやくここまで歩き続けてきたのである。体力回復の為の滋養水はとくに使い切っている。濃いマナの瘴気に久しぶりに目眩と吐き気を覚えながら、ザックスはなんとか意識を保ち続けていた。

「おい、バンガス」

振り向いて、声をかけざま一発、彼の頬を張る。

「デメエ、何しやがる」

構わず、ザックスは続けた。

「お前、あれが何に見える？ 俺には扉のように見えるんだが、気のせいかな？」

その言葉に前方に目を凝らしたバンガスは、再びザックスの頬を張って、答えた。

「ああ、俺にもそう見えるな。どうやら、たどり着いたらしいな」
その言葉に他のメンバー達が僅かに息を吹き返す。皆、疲労の極みに達しており、まともな思考ができるものは一人もいなかった。

「で……、では、行きましようか。さつさとボスモンスターを倒して……、このダンジョンを踏破してしましましょう」

ブラッドンの背から降りたルメーユが足元をふらつかせながら歩

きはじめる。

冷静に考えれば、ここが最下層である保証はどこにもなく、この疲労困憊の状態で《ブルー・ドラゴン》よりもさらに強力なボスマンスターに遭遇する確率もありうる。

だが、そのようなまともな思考に至る者は誰もいなかった。それほどに彼らは追い詰められていた。

過去、経験がないほどによるめきながら、5人は大広間へと続く扉に手をかけると、倒れ込むようにしてそれを開いたのだった。

誰もが言葉を失っていた。

よるめきながらたどり着いた大広間には他に出口はなくここが最下層であるという事を示していた。だが、その中心に魔法陣は存在しなかった。濃いマナの霧の中に浮かび上がったのは複数の人影だった。

「ウルガ……」

「ドメツシュ……」

誰もが絶句する。失ってしまった大切な人達の姿がそこにあった。ふざけやがって……」

ザックスが最後の閃光弾を放り投げる。目のくらむ光の中でも人影は消えなかった。

「ルメーユ、これはどういう事だ？」

「分かりません……」

バンガスの声にルメーユも又大きく動揺していた。

「ともかく、戦うしかないようです」

言葉と同時にルメーユはザックス達の武器に輝光術をかけた。マナの輝きに満ち溢れた《ミスリルセイバー》を手にしたザックスに、

ウルガの幻影が襲いかかる。

（おい、待てよ、今の俺がウルガにかなう訳ねえだろう……）

あの日見た竜戦士化したウルガの圧倒的な力を思い出す。

魔将とすら互角に渡り合っていたというのに、今のザックスがかなうはずは無い。周囲の仲間達も皆それぞれの幻影と戦っているように、援護は期待できそうにない。ウルガの幻影の苛烈な剣撃に一方的に押しこまれたザックスは、瞬く間に壁面へと追い込まれた。

「くそっ、もう駄目か……」

すでに体力が限界に近づき、剣を握る手にもほとんど感覚がない。魔法剣の光も徐々に衰え始め、打つ手はなかった。

目の前には自身の知る最強の戦士。

迎えうつ自分は最悪のコンディション。

（これも、悪運度MAXのせいだよ……）

弱った心が負の思考の螺旋へと捉えられてゆく。ウルガの幻影の激しい剣撃に一方的に耐えながらザックスは、完全に追い詰められた。

「諦めるな！」 瞬間、懐かしい声が走った。

その声を確かにザックスは己の耳で聞いた。

それはウルガの声だった。目の前の幻影から発せられたものではない。もっとどこか別の場所の……。

不意に、自身の右腕にあるウルガの腕輪が輝いている様子がザックスの視界に入った。強く激しい輝きが、負の思考に陥りかけていたザックスの精神を引き戻した。

（なに、勘違いしてんだ！）

あの日、魔将を封じ切ったウルガの魂は今、自分と共にある。目の前のそれは単なる幻影。自身の心が生み出した単なる幻なのだ。

ウルガの魂の継承者である己がこんな幻影にやられてよい訳がない。ザックスが心に光を取り戻すと同時に、ウルガの腕輪はさらに輝

きを増し、それに応えるかのように《ミスリルセイバー》の刃の輝きも一段と力を増す。

「邪魔をするな！」

背後の壁を蹴って身体を入れ替えると同時に、隙の生まれたウルガの幻影を上段から叩き斬る。《一刀両断》された幻影は声を出す事もなく消滅した。即座に駆け出し、苦戦する仲間達の心身を攻め立てる幻影を、背後から次々に切り捨てて行く。

5体目の幻影を切り捨てた瞬間、周囲のマナの霧が一気に晴れていった。そして部屋の中央に魔法陣が生まれ、その上にモンスターの姿が現れた。

「ザックス君、あれが本体のCランクボスモンスター《ミラージューゴースト》です」

疲労困憊したルメーユの言葉と同時に、ザックスは《ミスリルセイバー》を鞘におさめて、モンスターに向かって走り出す。

彼我の距離を一気に駆け抜けたザックスは間合いに入るや否や、最後の力を振り絞って体内のマナをコントロールし、強力な踏み込みを生み出した。同時に、鞘の中から《ミスリルセイバー》の刃を走らせ、モンスターを一刀のもとに斬り捨てる。

特殊スキル《抜刀閃》 《ブルー・ドラゴン》の首を斬り落としたその技で、ザックスは《ミラージューゴースト》を葬っていた。声なき声を上げてモンスターが消滅していく。後に残されたのはきらきらと輝く換金アイテムだけだった。

そして、この瞬間、彼らはずいぶん、過去、数多の冒険者達が誰一人として成しえなかった協会指定案件1-034号と呼ばれた未踏破ダンジョンの攻略に成功したのだった。

15 ザックス、祝う！

自由都市《ペネロペイヤ》には幾つもの伝説がある。

そのうちの一つに、南地区にあるとある通りの名前が挙げられる。その通りはこの都市で最も安全な場所であり、同時に最も危険な場所である、故にそこでは決してトラブルを起こしてはならない……と。

理由こそ定かでない《ガルガンディオ通り》という名のその場所に、ガンツ＝ハミツシユの酒場は店を構えている。

二週間前に店を一時閉店して以来、店内の内装を一新し、さらに外装にまでいくらかの手が加えられていた。

その日の夕方から始まつたりリニューアルに伴う大宴会は、店内だけに留まらず、《ガルガンディオ通り》に面した全ての店を巻き込んだの祭りに発展していた。

《ガルガンディオ通り》を全て貸し切り状態にして、その場所には多数の卓が並べられ、無数の酒樽と料理が準備され、様々な催し物が開かれている。その中央に位置するガンツ＝ハミツシユの酒場前に仮設された舞台上では、冒険者協会協会長の働きかけで実現した《ペネロペイヤ》執政官による開会の挨拶の後、無礼講のお祭り騒ぎとなっていた。

この2週間、《エルタイヤ》最高神殿の命により、《ペネロペイヤ》大神殿が《楔》の為に閉鎖され、市民の生活や治安状態に多大な不安と不満が生まれつつあった。そのようなフラストレーションを一気に解消すべく《ペネロペイヤ》市民の多くが押し寄せ《ガルガンディオ通り》は空前の賑わいを見せていた。

一人当たり50シルバで食べ放題の飲み放題。

ちよつとした外食より僅かに高いとはいえ、無礼講の宴会騒ぎを多くの市民が楽しむべく、財布のひもを緩めて誰もが楽しんでいた。通りに仮設された厨房からは客のリクエストに答えた料理が次々に運び出され、日頃からガッツの酒場で働く者達だけでなく、さらにはクエストとして駆り出された多くの女性冒険者達が、華やかなコスチュームに身を包んで、花から花へと飛びまわる蝶のように様々な卓へと訪れ、料理を運ぶ。

演台近くに設置されている卓の一つでザックスは早々に仲間たちと勝利の美酒に酔いしれていた。

執政官の挨拶の後で、似合わぬ燕尾服に身を包んだガッツによって、ザックスとバングスのパーティがウルガ達以来となる未踏破ダンジョンの攻略に成功した事が発表された。

その報告に周囲からはどよめきが生じ、店主のガッツとバングス達に多くの賛辞が寄せられることとなった。この騒ぎにいやいや参加せざるを得なかった冒険者協会《ペネロペイヤ》支部の理事達は、それらを横目に与えられた卓で今やヤケ酒を煽っている有様である。

協会指定案件1-034号の踏破は正式に冒険者協会によって認められ、上級レベルダンジョン、それもかなりの難易度を誇るものとして登録されることとなった。後は《踏破者》であるパーティのメンバー達によって、正式名称がつけられるのを待つばかりである。「……で、どうするか決まったのかい？」

ザックスの問いに同じ卓で酒を飲んでいたルメーユは、少し思案しながら返答する。

「ええ、いろいろと考えたんですが、《再会の迷宮》というのはいかがなものかと……」

「《再会の迷宮》？」

「はい、他人のトラウマを容赦なく抉りだす、えげつない仕様のダンジョンでしたが、それでも懐かしい人々に会う事が出来たのは、ある意味で素敵な事ではないのか……と」

「いいんじゃないねえの、俺は賛成だな」

「うむ、我も反対はせぬ」

ザックスの左隣でやはり酒を飲んでいたブラッドンが相槌をうつ。『ダンジョン攻略の際には決して他者と言葉を交わさぬ』という奇妙なゲンかつぎをしている彼も、今は表情を緩め、眼前の巨大な骨付き肉の塊にその意識を奪われている。

「おお、ザックス殿、こちらにおられたか、拙者共の卓で一杯やられてはいかがでござるかな？」

イーブイに連れられ、ザックスは彼らの卓へと移る。

そこにはシーポンを除くブルポンスとナナシのパーティの面々が集まって、冒険者談義に花を咲かせていた。吟遊詩人のシーポンはあちらこちらの卓へと呼ばれて、本人にはいたく不満の残る美しい楽曲の数々を披露しては、チップを荒稼ぎしているらしい。

「ですからー、ぼくたちがほんきをだせばー、あていどー、あさめしまえなんですよー」

酒に弱いらしく、ナナシのリーダーはすでに完全に出来上がっている。これでは、また彼の名前を聞き出す事は難しいようだ。

「彼らの活躍には目を見張るものがあつたでござる」

ハミツシュからの要請で予定の食材を3日間で手配し終えた彼らは、出発前から温めていたとある計画を実行に移した。名付けて『レアアイテム荒稼ぎ作戦』である。

ブルポンス並びにナナシのパーティ総勢8名が、『錬金の迷宮』を始めとした換金度の高いアイテムを排出するいくつかの中級レベルダンジョンを回って、レアアイテムの荒稼ぎを行ったのである。「彼らの情報の正確さとその手際には、全く驚かされたでござる」「いえいえ、しーぼんさんをはじめとしてー、ぶるぼんずのみなさんのー、おちからあつてのことーですよー」

「さすがに『ハルキュリムの根』とまではいかなかったでござるが、

レアアイテム取得の特殊要件を全て把握した彼らと、拙者達の実行
力でかなりの額を稼ぐ事が出来たでござる。このようなミッション
のやり方もあるのだと拙者、つくづく勉強になったでござる」

彼らは荒稼ぎした金額を店の改修費用と大宴会の為の準備金とし
て、全てガンツに引き渡したらしい。

「きつと、彼らは拙者達が吊るし上げられた時の暴言に対して、意
地を示したかったのでござるうな」

「そうなんですよ、そうなんですよ、いーぶいさん。ボクたちはと
つてもくろうしたんです。なのに、なのに、うわーん」

ナナシのパーティーのリーダーはおいおいと泣き出した。どうやら
彼は泣き上戸のようだ。

「ザックス殿とバングス殿達のパーティーが取得した《ドラグオーブ
》を気前よくガンツ殿に贈呈してしまった為に、我らの努力はすっ
かり霞んでしまったのでござる」

どうやら彼らの『これを機にガンツハミツシユの酒場でその名
を知らぬ者などいないパーティーになる』、というささやかな野望は
露と消え去ったらしい。

「そ、そうだったのか……。それは悪い事をしたな」

「あやまらないでください。もつとみじめになるじゃーないですか
ー。うわーん」

《ブルー・ドラゴン》から獲得した《ドラグオーブ》は正式な鑑定
の結果80万シルバの値がつき、バングスは皆の総意を持って、こ
れをガンツに贈ることにした。この行為は、店の改装とこの大宴会
の為に大赤字を覚悟して、意地を張り通そうとしたガンツへの十分
な援護射撃となっていた。

『へっ、バカ共が、余計な気遣いしやがって……』

憎まれ口を叩きながらも僅かにまなじりを輝くものを浮かべなが
ら、奥へと引っ込んで行ったガンツの後ろ姿が何気に思い出される。
「うわーん、あんなにがんばったのにー、そうせいしんさまのば
かやるー」

酔った勢いで、危ない一言を口走り始めたナナシのリーダーの口に、仲間たちが慌てて酒瓶をつっこんでいる。どうやら、酔わせてこのまま寝かしつけるつもりらしい。

「決して、無駄にはならぬでござるよ。今回の探索で、我らも彼らも又一つ新しい境地へと向かう事でござろう」

「な、なに！」

ザックスの頭に恐ろしい光景が浮かび上がる。

きびきびとした態度で徹底的に合理的な探索を行うブルボンズ。

あるいはナナシのパーティを併合して9人となったブルボンズが《聖者の像》の上に立っている。

当然新たな『決めポーズ』と『名乗り』に周囲の人々は皆、啞然としている。

そして、その中にザックスの姿が……。

「大丈夫でござるよ、ザックス殿が考えるようなことにはならんでござるよ」

「そ、そうか……」

からからと笑うイーブイはさらに言葉を続けた。

「彼らと拙者達とは心の支えとする美学が違うでござる。無駄もなく、徹底した合理主義の下に探索を行う彼らに対して、徹底的な無駄だらけの中で探索を行う我ら。どちらにもそれぞれにドラマがあり、その道はおそらく決して交わる事はないのでござる」

「そうだな」

「故にザックス殿。我ら《ザ・ブルボンズ》は永遠に不滅なのでござる」

イーブイと共にカチンと麦酒のジョッキを合わせて、一息に飲み干す。

ふと、何かが間違っているように思われたのだが、きっと些細なことだろう。

不意に祝杯を上げる彼らの背中の人々のどよめきが生まれた。

振り返るとそこには神殿からの使者が姿を現していた。周囲を警護の神官たちに固められ、正装に身を包んだマリナを中心に5人の巫女。その中にはイリアの姿もある。僅かにザックスと目を合わせたイリアは、小さく微笑みを浮かべるとすぐさまそれを消した。

「マリナ様、おかえりなさい」

「イリアちゃん、昇格おめでとう」

賛辞を口にする人々の中をしずしずと厳かに歩む彼女達は、やがてガンツハミツシユの酒場の前に立つ。彼女達を店の前で迎えた燕尾服姿のガンツが頭を下げ、仕事着姿のハミツシユも側に控えていた。

いつもの様子からは想像つかない程に厳かな振る舞いでマリナが祝いの唄を詠唱し、イリアを始めとした周囲の巫女たちがそれに唱和する。シーポンを始めとした数人の吟遊詩人達が思い思いの楽器で彼女達の唄に曲を合わせ、周囲には美しい旋律と巫女達の唄のハーモニーが厳かに溢れてゆく。

巫女達による祝いと繁栄の儀式が終わると、ガンツは大声を上げてガンツハミツシユの酒場に所属する冒険者達を集めた。

「ザックス、どこだ！」

目立つのが苦手なザックスは後方に控えていたのだが、ガンツに呼ばれて仕方なく一同の前へと立つ。バンガスのパーティとザックスを従えて、ガンツは、店の扉を開いた。

「入ってくれ」

内装が一新された店内はこれまでの荒くれ者達の吹き溜まりというイメージとは正反対の小洒落たデザインで統一されている。

「いまいち、俺の趣味とは違うんだがな、皆の総意って奴だからよ……」

少しばかり照れくさそうにガンツは語る。

この2週間ガンツハミツシユの酒場に所属する冒険者達の多く

が、業者の指示の下、内装及び外装変更作業に励んだようだった。そのデザインについても大いに議論を交わし、自分達が帰るにふさわしい場所にしようと思われぬ作業に懸命に励んでいた。振り返ったザックスの目には疲労しながらも満足気な笑みを浮かべる彼らの姿がある。

まだ、塗料の匂いが鼻につく店内に入った彼らをガンツは2階席へと導いた。

「来てくれ、こっちだ」

ガンツの導くままに足を運んだその先で、ザックス達は驚きの声を上げる。

二階の一番席。

ガンツハミツシユの酒場において最も優れたパーティにのみ座る事を許されるその場所だけは、店の内装が全て一新されたにも拘らず、まったく変化のない以前のままだった。

「ここだけはよ……どうしても弄れなかった。皆もそれを了承してくれてな……、ご覧の通り、元のままだ」

一番席へと歩み寄ったザックスは、変わらぬその場所に手を伸ばす。彼の目にはそこに座っていたウルガ、ダントン、エルメラの姿が映っていた。

そんなザックスに、ガンツは告げた。

「この席をどうするか、お前達が決めてくれ。あのダンジョンを踏破したお前達にはここに座る資格が十分にある。俺はそう考えている。あとはお前達次第だ」

その言葉にザックスは振り返る。彼の後ろに立っていたバンガスと目を合わせた。

「テメエ、どうしたい？」

バンガスの言葉に僅かに沈黙する。階下にはすでに冒険者達だけでなく、店の従業員達にマリナやイリア達までが入店し、皆がザッ

クスの決断を待つてこちらを見上げている。

再び一番席を振り返る。彼らならば、なんと云うだろうか。

『好きにしる』

ウルガならそう云うだろう。

『時代は変わってゆくものだからね』

エルメラはそう云うはずだ。

『いつまでも冒険者を止めた俺達に大きな顔させてちゃ、困るんだよ』

ダントンはきつとそんな言葉を残したに違いない。

ザックスの腹は決まった。振り返るとバングスの目を真正面から見据えて堂々と告げた。

「あんた達の自由にしてくれ。オレはあんた達のパーティなら、この席に座る資格があると思う」

「本当にそれでいいんだな」

「ああ、文句なんか言わねえ」

「そうか」

にやりと笑うとバングスは階下に向かって大声で叫んだ。

「いいか！ テメエら！ よく聞け！ 今日からこの店のNO.1は、これまで未踏破だった《再会の迷宮》の踏破に成功し、《踏破者》及び《竜殺し》の称号を得た俺達バングス様のパーティだ！

その俺達の権限においてこの席を欠番にする！

ただし、例外としてここに座る事が許されるのは、俺達の店の誇りを守るために戦った《魔将殺し》ザックスと彼が許す者のみだ！ 文句のある奴はでてこい！ 俺達が相手になってやる！」

バングスの言葉が終わると同時に、彼の仲間たちが一歩前に進み出て、階下ににらみを利かせる。その行動に驚いたザックスは、バングス達を見つめた。

バングスも、ブラッドンも、ルメーユも、レンディも、誰もが小

さく頷き返した。どうやら皆、初めからそのつもりだったらしい。そして、階下からはバングスの言葉に賛同すべく盛大な拍手が鳴り響く。

店内にいる全ての者達へと次々に泡酒のグラスが回され、バングスが祝杯の音頭を取る。

「たった今から、俺達の店ガンツ〓ハミツシユの酒場は営業再開だ。未来永劫この店が繁栄することを切に願う。乾杯！」

店内のあちこちでグラスの触れあう音が響き、多くの者達の喜びの声で店内が明るさに満たされて行く。

こうしてガンツ〓ハミツシユの酒場はその危機を乗り越え、新たな船出の時を迎えたのだった。

冒険者協会の建物屋上では、遙か彼方に見える《ガルガンディオ》通りの賑わいを肴に二人の老人が酒を飲んでた。釣りたてのカシサ魚の香ばしく焼けた匂いが辺りに立ち込める中、一人の老人が秘蔵の酒を取り出した。

「つい先日最高神殿に参りました折に、よい物が手に入りましたな」「おお、それは幻の名酒とよばれたあの……！やはり大陸中に根を張り巡らした組織は違うのう」

「いえいえ、今や創世神殿とは中身の無い空っぽの箱のようなもの。集まってくるのは浮世の塵芥ばかり……」

「それを言っならうちの協会も同じじゃて、一体いつまでもつ事やら……」

幻の銘酒が注がれたグラスを合わせて楽しげに語らっているのは、冒険者協会協会長の老人と《ペネロペイヤ》大神殿の神官長だった。

その傍らには、せつせと魚をさばいて網の上でそれらを焼いている、件の部下の男の姿がある。

「ガンツ殿もうまく乗り切られたよう……。これで暫くは理事の方々もおとなしくされるでしょうか？」

「いやいや、それは無理じゃろうよ。あやつらに反省などとしおらしい真似ができるくらいなら、とつくにうちの協会は安泰であろうし、ワシは楽隠居の身分じゃよ」

「悪党と恥知らずばかりが大きな顔をするのは、どこの世界も同じということですか」

「悲しいのう……」

魚をつつきながらグラスを傾けた老人は、遠い目をして呟いた。

「ところで《魔將殺し》の彼、ザックス君でしたか？ 彼はまたもや活躍されたようですね」

「今時珍しく、元気で生意気な若造じゃてのう。あやつのは活躍は単にステータス値のせいという訳でもないようじゃいな。神殿のモグラ共もそろそろ、目をつけ始める頃かのう」

ニヤリと笑って協会長は神官長の顔を眺める。

「まあ、長老方も今は身内のごたごたで手一杯ですから……。まだまだというところでしょう。しかし、いずれは彼もライアットのようになんて選択を迫られることになるでしょうな……」

「あやつの前途多難な運命は逃れようがないという事か」

「では、前途多難ついでに、そろそろ彼に真実を一つ明かしてもよいのでは？」

「真実？ おお、『眠り姫』のことか？ しかし、あれは、のう……。なかなかややこしい事になりそう。気が向かんのう。下手したら巫人戦争を招きかねんぞ」

「ですが、我々の力の及ぶうちに片をつけねば、後々厄介な火種になりかねませんか。少なくとも表向き、神殿は件の『眠り姫』に関して、自発的に手は出せぬ立場にありますからな……」

「《妖精憲章》か……。あやつらの頭の固さはどうにかならんもん

かのう……」

ぶつぶつと呟きながら老人はグラスを煽る。空になったグラスに酒を注ぎながら神官長は続けた。

「魔將の出現に始まって、国家および各種族間の争いに加え、神殿の内紛……。そろそろ平和と安寧の時は終わりに近づきつつあるよ。うな気がいたします」

「過去の世代の垢を若者達に押し付けては、又、文句を言われることになるから。確かにあの若者にはせめて協力者の一人も必要な時が来ておるのかもしれない」

「その際には、御依頼下さればいくらでも協力させていただきますよ、協会長」

「まったくじゃ。頼りにしておるよ。持つべきものは古い友人といふところかのう」

「何をおっしゃいますやら。《ガルガンディオ》の方々も未だにご健在ではございませんか」

「あ、あやつらの事はよいんじゃ！ このままあそこで大人しくしててもらわんと、《ペネロペイヤ》が壊れかねんわい」

珍しく焦った様子で協会長は答えると、はるか彼方に見える賑わう通りに目を向ける。宴の最高潮を知らせる火花が盛大に打ち上げられ、通りに集まる人々は最高の夜を満喫しているようだ。

「宴は一段とにぎやかになりましたなあ。我々も立場がなければ、あそこで騒いでみたいものですね」

「全くじゃ、早く隠居したいもんじゃのう」

見晴らしの良い屋上でため息をつく二人の老人の呟きを尻目に、《ペネロペイヤ》の宴の夜は一段と盛り上がっていくのだった。

16 ザックス、向き合う！

大きく開け放たれた自室の窓から、秋の虫達の声と共に涼風がふらりと訪れる。

時折、酒場で騒ぐ冒険者達の声が大きく弾け、小さな女の悲鳴が混じる。再び静かになったのは決して彼らが騒ぎをやめた訳だからではなく、次の騒ぎに備えての嵐の前の静けさといったところだろう。

今時分は故郷の山々にもそろそろ白いものが目立ち始め、冬支度はその最盛期を迎えている。

冷たく凍える長い冬の中で飢えと寒さに震えて待つ短い春の訪れは、ザックスにとつて余り良い思い出ではない。願わくは、もう二度とあの場所には戻りたくないものだ、というのが彼の本音だった。初めて体験する『静かな秋の夜更け』を寝台の上で目を閉じて楽しんでいたザックスだったが、不意に彼の部屋の扉を勢いよく叩いた不躰な訪問者によって、その安らかなひと時はあっけなく破られてしまった。

「誰だよ、人がせつかくいい気分で浸っているって時に……」

ぼやきながら開いた扉の向こうにいたのは、ガンツハミツシユの酒場の自称看板娘である猫族の女性だった。皮肉の一つも言つてやろうか、などと思つたザックスだったが、彼女の珍しく青ざめた顔を見て、その考えはすぐに消えてしまった。

「すぐに店に来て欲しいニヤン！ マスターがあんたをお呼びだニヤン！」

言葉と同時にぐいぐいと彼の手を引く。

切羽詰まった状況にも拘わらず、語尾に『ニヤン』とつけ忘れなところはどうやら筋金入りらしい。

猫族である事を示す彼女のシッポはピンと立ち、いつも笑顔と愛

嬌をふりまく彼女にしては珍しく、何かに怯えている様子を示している。尋常でないその様子と彼女の冷たい手の感触に戸惑いを覚えながら、ザックスは彼女に引きずられるままに酒場へと向かった。

改装されたばかりの店内はまるで誰もいないかのようにしんと静まり返っている。

リニユアルの日以来、ガンツ＝ハミツシユの酒場の客の入りは上々のようで、閉店時間まで常に一階席は満席の状態が続いている。値段の割に上質な食事と小洒落た店のデザインに引かれて、その所属をガンツの店に移そうと考える女性冒険者パーティーの姿もちらほらと目立つようになつた。一時閉店時に離れて行つた冒険者たちの数を十分に補いつつあるガンツ＝ハミツシユの酒場は、ザックスの手助けによつて未踏破ダンジョンを踏破したバンガスのパーティーを看板として、以前と変わらぬ盛況ぶりを示していた。

閉店二時間前に限つての仄明るい照明の光の下では、多くの冒険者達が息を潜めており、宿屋側の通用口から現れたザックスの姿に一齐に彼らの視線が集中した。

「マスター、つれてきたニヤン！」

その言葉に二階席から乗り出して顔を見せたガンツが、ザックスに声をかけた。

「悪いな、ザックス！ ちょっとこつちに来てくれ！」

ザックスの拳動を一階席の冒険者達皆が、固唾をのんで見守っている。

彼らの呼吸と意識が一齐に自身に向けられた事に僅かに不快感を覚えながら、頑丈に造られた階段をしっかりと足取りで上っていく。二階席に上がると同時に、そこに座る屈強なパーティーの面々までもが、息を潜めてザックスの動向を注視する姿に、さらに戸惑いを大きくする。

「こつちだ！」

ザックスに声をかけたガンツは二階席の一番奥、欠番である一番席の前に立っている。声をかけられるがまま、彼に近づいたザックスは、ガンツの向こうに見える一番席の様子に驚きの声を上げた。

「ご覧の通りの有様でな……」

マスターであるガンツも説明不能な異常事態に戸惑っている様子である。

「まったく、不思議な光景です」

二番席に座っていた魔導士のルメーユが興味津津といった様子で身を乗り出している。その後ろからは、おそろおそろといった様子でリーダーのバンガスが覗き込んでいる。

「お、俺は、どんなモンスターでも怖くはねえんだが、さ、さすがにこつちうのはな……」

「大きななりをして、怖いんですか？　バンガス」

「う、うるせえ……」

ルメーユの意地の悪い質問をバンガスは突っぱねるものの、彼の心情はその態度が示している通りなのだろう。

一つため息をついたザックスは、ガンツに事の次第を尋ねた。

「いったい、どういう事なんだ？」

「俺にも何が何やらさっぱりでな……」

ザックスの問いにガンツは躊躇いながらも続けた。

「一仕事終わったんで、客の様子を見に店内を回っていたら、いつの間にかこつちうなったのさ」

「こつちうなった、って……」

再び一番席に目をやる。

ガンツの希望と店に所属する多くの冒険者達の了承の下、この場所だけは改修前のままの状態に保たれていた。

欠番扱いされ、無人のはずのその場所にただ一人座っていたのは、エルフの女性だった。そんな彼女が店内の全ての人間を動揺させているのは、ひとえに彼女の姿がうつすらと透けており、その輪郭が

おぼろげだからであろう。『この世のものではない……』一目でその理解できるその姿を目にして平然としていられる者は、まずいいい。

黄金に輝く長い髪を後ろでひとくりに結びあげ、妖精族独特の特徴的なピンととがった長い耳、その彼女の姿は誰もが美しいというに違いない。

それはかつてザックスが初級レベルダンジョンの中で幾度か見かけ、ここ暫く冒険者の間で噂になっていたエルフの幽霊そのものだった。

かつて彼が見かけた姿と只一つ違う点があるとすれば、勝気さを感じさせる整った顔立ちに浮かんでいるその表情は、ダンジョン内で見た悲壮感など微塵もなく、彼女は実に楽しそうに微笑み、見えない何者かと語り合っている。

そんな彼女の姿を眺めながら、ガンツはぽつりと呟いた。

「俺はこの店に来た奴なら、たとえ一日だけだったとしてもどんな奴でも覚えている。だが、あんな娘は見た事がねえ……。それに……」

僅かに言葉を切る。

「パーティってのは、長く共に時間を過ごすうちに癖や仕草が似てくるもんだ。座り方や座る場所、あの娘はあそこに過去、座っていたといつとも似てやしねえ。ただし、たった一人を除いてな」

「たった一人？」

「お前だよ、ザックス。これは俺の直感なんだがな、今、あの娘と話してるのはお前じゃないのか、俺にはどうしてもそう思えてならねえ。あの娘の視線の先にどうしてもお前の姿が浮かびあがっちゃまってな、それで、お前を呼びにやったって訳なんだ」

「お、オレか？」

「あまりに突飛で申し訳ねえんだがよ、あれはあの場所の未来の姿、あるいはありうるべきもう一つの現実の姿ってのを映し出してるんじゃないのかって、そう思わされちゃうんだよ」

ガンツらしくないその突拍子もない言葉に、ザックスは絶句する。だが、ザックス自身もその言葉にどこか腑に落ちるものを感じ取っていた。そんな二人の後ろからルメーユが口を挟んだ。

「意外と正解かもしれませんね、それ……」

「どういう事なんだ？」

ダンジョン内でも博識ぶりを披露し、その知識にずいぶん助けられただけに、ザックスは彼にその答えを求めた。

「マナですよ」

「マナ？」

「ええ、ご存知のようにマナとは世界中のあらゆる場所に存在します。そしてこの場所は過去から現在に至るまで、ガンツハミツシユの酒場に関わる全ての人々の様々な想いや願いが込められた場所。改修された店内で唯一以前の姿を保つことで、この場所に凝縮された想いのエネルギーが、マナによって浮かび上がったのではないか……そんな風に考える事は可能だと思います」

「マナか……」

ダンジョン内で特に強く感じられるマナがその理由であるとするならば、これまで彼女の姿がダンジョン内だけで確認された事にも納得はできる。

「なあ、ザックス。無責任な言い方で申し訳ねえんだがよ……」

僅かに躊躇いながらもガンツは言葉を続けた。

「これはおまえが向き合わなければならぬ問題のような気がするんだ。この場所に座る事を、店内の誰もが認めた只一人の人間であるお前だけが、この娘を助けてやれるんじゃないかねえのかってな」

「助ける？」

「ああ、そうさ、この娘は助けを求めている。俺にはそうとしか思えねえ」

「あんたがそう言うんなら、そうなのかもしれないな」

ガンツの人間観察力は超一流である。

そして、何よりも、過去何度か彼女の姿を目の当たりにしてきた

ザックスには、ガンツの言葉がなぜか腑に落ちた。見下ろした一階席に座る者達は皆、ザックスに注目している。

「任せませ」

その言葉を残してガンツは去ってゆく。

店のマスターであるガンツが問題の解決をザックスに委ねた事で、他の客達も納得したのでろう。恐る恐るこちらを窺いながらも、店内はいつもの空気へと戻りつつある。

「任せませ、って言われてもな、オレは幽霊退治屋じゃねえんだがゴースト・ハンターな……」

いわゆる死霊や悪霊といった類に分類されるアンデットモンスターも存在はする。それらを専門にハントしている冒険者達もいる事にはいるのだが、この場合は違うだろう。どちらかといえば神殿巫女や星詠みといった神秘性をもつ者達の領分といえる。

一つため息をついたザックスは、仕方なく一番席に座った。楽しそうに笑いながら語り続ける彼女の視線に合う位置に腰掛け、決して交わらぬ時間を共有する。

整った顔立ちにくるくると様々な表情を浮かべるその姿に、いつしかザックスは魅入られていた。

「なあ、あんた何者なんだ？」

初めて出会ったときに感じた既視感にとらわれながら、ザックスは決して答える事のない彼女に語りかけた。

「俺は、あんたに何をしてやればいい？」

返事をする者などないであろうその言葉は、只虚しく宙へと消えて行く。

「まいったな……」

いったいどう問題を解決すればよいのか？

まったく見当もつかない事態に放り込まれたザックスは頭を抱える。

閉店の時間が訪れ、店内から次々に客の姿が消えて行った後の無人の空間で、彼女と向き合ってザックスは時を過ごした。

その場所でいつしか眠りの世界へと旅立ったザックスが翌朝目覚めた時、彼女の姿はすでになかった。

「たのもう!」

翌日の朝、彼が手土産を持って扉を叩いたのは《ペネロペイヤ》に居を構える冒険者協会本部協会長執務室 件の老人のところだった。

組織としての実質はともかく、仮にもここは、大陸を股にかける組織の総本山である。ここならば何らかの情報が得られるのではないだろうか、という淡い期待を胸に、ザックスはか細い人脈の糸を頼りにここへとやってきた。

ここが駄目ならば後は《大神殿》くらいしかないだろう。

今日は転職の日取りに良い日とされているため、神殿は朝から大賑わいのはずである。人気の途切れた夕方くらいにでも訪ねて、マリナがライアットに相談を持ちかける事になるのだろう、甚だ本意ではあるが……。

確率としては先に向かった波止場の方が件の老人を捕まえられるのではないかと思っただが、残念なことに彼の姿はそこにはなかった。

部下に仕事を丸投げしてあちこち遊び歩いている そんな放蕩老人のイメージしか湧かないザックスだったが、どうやら今日はまじめに仕事をしているらしい。

「おや、これは、珍しい」

扉を開けてザックスを出迎えたのは、件の老人の秘書役兼世話係の部下の男だった。

「面会予約は入れてないんだが、爺さんはいるかい？」

ザックスの問いに、男は苦笑いを浮かべた。

「申し訳ない。ザックス君。協会長は本日珍しく朝から仕事をして下さってましてね……」

「それは珍しいな。雨が降らなきゃいいが……」

老人に対する互いの認識は一致しているらしい。手土産を男に渡ししながらザックスは続けた。

「じゃあ、出直すよ。できれば早いうちに爺さんに会って、相談したい事があつたんだが」

「君が協会長に相談ですか？ それは本当に珍しいですね……。よろしければ私が代わってお聞きして、協会長にお伝えしておきますが……」

彼の好意のままに部屋に招き入れられ、上質なソファに座らされたザックスは、余りに突飛な用件で申し訳ないんだが、という前置きと共に、用件を伝えることにした。

「実は、昨晚、うちの店にエルフの幽霊が現れて……」

目の前の男に事態のあらましを話すうちに、彼の顔がみるみる曇っていく。

常日頃から放蕩老人に様々な仕事を押し付けられる、まじめさが売りの男に申し訳なく思いながら話し終えたザックスは、彼の言葉を待った。あまりに下らない話に気を悪くしたんだろうか、そんな心配をしたザックスであったが、彼の返事は予想外のものだった。

「これは、なんと偶然なのでしょうが、いえ、あるいはそうなるべくしてなつた、という事なのか……」

ぶつぶつと呟きながら、何事かを考えていた彼は、やがて顔を上げるとザックスに語り始めた。

「実は、今朝からうちの協会長が悩まされている問題が、件のエルフについての事でした……」

その言葉にザックスは驚いた。

「色々と微妙な問題を含んでいますので、部外者である君に本来話すべき事ではないのですが……」

僅かに躊躇った後で、彼は決心したように顔を上げる。

「ついて来てください。ザックス君。君を協会長の下にお連れします。実際に目で見た方が話は早い。ただ……」

僅かに声を潜めて、彼は続けた。

「どんなに頭に来ても決して怒ったりしないで下さい。下手をすれば、私と君のクビだけでは贖いきれない問題に発展しかねません」

「おい、大丈夫なのかよ、それって……」

「ええ、私の独断ではありませんが、問題の解決に君の協力はおそらく必要なはずです。何、安心して下さい。これでも彼の有能な右腕として、日頃から並々ならぬ貸しがたつぷりとあのジジ……おっと失礼、協会長にはありますからね……」

「成程……」

「ただ、くれぐれもご注意下さい、本日いらしている協会長のお客様は実に気難しく頭の固い方々ですので……」

「いったいどんな人たちなんだ？」

「……。エルフです。それもかなり気位の高い……」

「エルフ！」

その言葉に驚きの声を上げる。どうやらいきなり問題の核心へと踏み込む事が出来るらしい。

「彼らの思考は、私達人間とは明らかに違う部分があります。些細なことで気を悪くされて臍を曲げられると厄介な事になりかねません」

「分かった。あんたの顔を立てて俺は黙っておく事を約束するよ」

「助かります。それでは行きましょう。眠り姫の下へ」

「へっ、眠り姫？」

ザックスの疑問に小さな笑みで答えると男はザックスを連れて部屋を後にする。どうやら、問題は一気に解決できるかもしれない、男に連れられて廊下を歩いていくザックスの胸にはそんな期待が広がりはじめた。

だが、事態はザックスの予想を越えて遙かに深刻なものとなって

いた。

しばらく待たされた後でようやく入室を許可された部屋の中には、幾人かの先客の姿があった。ザックスを驚かせたのは、老人以外に顔なじみの二人の姿があった事である。

通された部屋の中にいたのは、老人を始めとして、おそらく彼の客と思われる3人のエルフ、そして《ペネロペイヤ》大神殿の神官長と巫女長、さらにはライアットとマリナの姿だった。

「これは一体どういう事ですか、協会長殿！　どこの土地の草とも分からぬ者をこの場所に入れるとは！」

3人の内のもつとも若く見えるエルフが老人に食ってかかる。人間の言葉でいうところの『どこの馬の骨』という表現はエルフ達の間では『どこの土地の草』というらしい。もちろんそれがザックスの事を指している事は疑うべくもない。

「まあまあ、ここは抑えて下され、お客人。彼も又、決して無関係というわけではありませんのでこのう」

「こいつが、ですか？」

ザックスを上から下まで値踏みするかのような不躰な視線を送る3人のエルフ達に怒りを覚えるものの、ここは秘書の男の顔を立ててじっと我慢の子である。

周囲の人々の表情は皆硬い。

いつも惘然とした顔のライアットはともかく、常に優雅な微笑みを絶やす事のないマリナまでがその表情を消しているところをみると、事態はどうかやかなり深刻らしい。これはいつもの調子でやっていけば大変なことになりそうだな、という悪い予感が、ザックスの心にブレイキをかけていた。

「まあ、よろしい。とにかく我々は彼女を連れて、すぐさまこの地を後にさせていただく。貴方がたに拒否する権限は一切ありませんぞ」

「ほう、それは結構なことですが、彼女に触れる事すらできぬ貴方がたが、一体どうやって彼女を移されるのかな？」

その言葉に3人のエルフは、渋面を浮かべた。

「我々としても厄介事の種は早めに消えてくれる事が望ましいが、いかんせん彼女に触れることすらできぬとなると、この状態を維持し続ける事で手一杯でしょう」

「ですが、私どもの里に知らせを走らせることぐらい、できたはずでは……」

「たしかにそのくらいはしたであろうな。彼女が己の身分を偽っていないければ……」

老人の言葉に3人は再び渋面を浮かべた。どうにも状況は彼らに分が悪いらしい。

ふとザックスは、部屋の奥の天蓋付きの寝台の上に眠る何者かの姿を見つけた。僅かに自身の立ち位置をずらし、その寝顔を見たザックスは思わず驚きの声を上げた。

「なんじゃい、若いの、もうちつとばかり静かにせんか」

「どういう事だよ爺さん、あれはここ暫く騒ぎになつてたエルフの幽霊じゃねえか」

その言葉に3人のエルフは驚きの表情を浮かべた。

「幽霊だと。一体何のことですかな？」

彼らの言葉に答えたのは老人だった。

「何、ここ最近、冒険者協会管轄下の初級レベルダンジョン内で目撃されたエルフの幽霊によく似ておる、と彼は言っておるんじゃよ」

「幽霊だと、バカな」

エルフ達は顔を見合わせる。老人は続けてザックスに尋ねた。

「ところで、若いの、お前さん彼女に見覚えはないかのう？」

「見覚えも何も、彼女は夕べうちの酒場に現れて、店内を凍りつか

せたばかりだぞ」

「なんじゃ、それは？ 初耳じゃのう。まあ、よいわ。他にはどうじゃ？」

「他に？ まあ、どこかで会ったような気はするんだが、それがいつかっつのは思い出せないな……」

「なるほどのう、お前さんの方も、まだまだ重症のようじゃのう」「どういう意味だよ」

その言葉に老人は答えなかった。件の彼女の寝顔を眺めながら、何事かを考えている。

「なあ、ちよつとそつちに行つて、彼女の顔をよく見せてもらつてもいいか？」

「無礼な。高貴なエルフの姫君の寝顔に近づくなど、無礼にも程があるぞ」

そんなエルフ達の言葉を無視して、老人はザックスに許可を与えた。

「ん、まあ、無駄とは思うが試しにやってみせい」

「なんか、引つかかる言い方だなあ」

ザックスの傍らに立つ秘書の男と顔を見合わせると、そろそろと彼女に近づいてゆく。

眠る彼女の直ぐ傍らにまで近付いて、その寝顔を間近で見つめる。それは昨晚、ずっと2階の一番席で眺めていた彼女に間違い無かつた。一体どういう事なのか？ どうやら答えの鍵は老人が握っているらしい。彼を問い正すべく振り向いたその場所には、奇妙な光景が広がっていた。

ザックスの周囲にいる全ての者達が皆、啞然とした顔で彼の事を見つめている。唯一マリナだけが、その口元にいつも通りの微笑を浮かべている。

特に3人のエルフ達の驚きは相当なもので、自身がマヌケ面をさらしている事にも気付いていないようだ。元来、エルフというものは物静かで理知的な種族というイメージが強いのだが、この3人は

例外なのだろうか？

「なんだよ、あんた達、そろいもそろってマヌケ面さらして……」

「わ、若いの……、お、お前さんなんともないのか？」

いつも飄々とした老人が驚く顔というのは珍しい。

「一体なんのことだよ？」

ザックスの言葉に老人が彼に向って手を伸ばす。と、何か見えな
い障害物があるかのように、老人の手が弾かれた。

「こつという事じゃよ。これまで全ての者達が皆、例外なく結界に弾
かれて、どうしようもなかったんじゃが……」

「そ、そんなバカな。たかが人間風情に……」

ザックスの下に駆け寄ろうとしたエルフの一人が、駆け寄った反
動で弾き飛ばされる。

「どうやらこの眠り姫は、同族であるお前さん方よりも、この若い
のに心を開いておるようじゃのう」

老人の皮肉に3人のエルフは渋面を浮かべた。

「ついでじゃ、若いの。その娘の首元のクナ石を外してはくれんか
のう」

「ああ、別に構わないが」

わずかにマリナの視線が気になったものの、老人の願いどおり彼
女の首元に輝くクナ石を恐る恐る取り外す。

柔らかな寝息を立てている彼女の上質な絹織物のように柔らかな
手触りの黄金の髪が、心地よくザックスの手に触れる。

僅かに苦勞しながらも彼女のクナ石を取り外したザックスは、そ
れを老人に手渡した。どうやら彼女の周囲の結界らしきものの前で
は、老人の持つ特殊スキルも効果はなかったらしい。

「これは……、やはりそうか」

クナ石にマナを込めた老人はその中身を確認した後で、周囲の者
達に石を渡す。室内にいる全ての者達の手になんか渡ると再び老人
の下へとそれは返ってくる。

「なあ、俺も見せてもらっていいか？」

その問いに老人は、僅かに躊躇う様子を見せた。

「構わんが、決して取り乱すではないぞ」

「あ、ああ」

室内の全ての視線がザックスに集まる。いったいなんなのだと思
いながら、ザックスは彼女のクナ石にマナを込めた。

名前	ルティルの娘アルティナ
マナLV	23
体力	118 攻撃力 43 守備力 98
理力	MAX 魔法攻撃 189 魔法防御 138
智力	182
技能	137
特殊スキル	駿足 部分強化 直感
称号	炎術 氷水術 雷術 風術 輝光術 中級冒険者
職業	魔術士
敏捷	173
魅力	152
総運値	MAX 幸運度 MAX 悪運度 0
状態	呪い(詳細不明)
備考	協会指定案件6 129号にて生還
所持金	非資格者による閲覧の為表示不可
武器	なし
防具	なし
その他	なし

その内容に手が震える。動揺しながらも不意に老人の言葉を思い
出し、なんとか平静を保とうとする。

それはザックス自身のステータス値の中にあつた幾つもの事象と符合する。

慌てて己のクナ石を取り出し、その内容を比較する。

名前	ザックス
マナLV	33
体力	189 攻撃力 232 守備力 188
理力	MAX 魔法攻撃 0 魔法防御 179
智力	153
技能	179
特殊スキル	収奪 駿足 全身強化 倍力 直感
刀閃	剣撃術 斧撃術 一刀両断 乱れ斬り 体当たり 抜
称号	中級冒険者 踏破者 竜殺し 魔将殺し
職業	剣士
敏捷	194
魅力	142
総運値	0 幸運度 MAX 悪運度 MAX
状態	呪い(詳細不明) 全属性半減
備考	協会指定案件6 129号にて生還 協会指定案件6 130号にて生還 協会指定案件6 131号にて生還
所持金	135348シルバ
武器	ミスリルセイバー
防具	魔法障壁の籠手 神聖護布の上衣 疾風金剛のひざ当て バトルブーツ
その他	ウルガの腕輪

MAX値をしめすパラメータ、詳細不明の呪い、協会指定案件6

- 129号という言葉。

かつて、そして今も彼を悩ませるそれらが、彼女のステータス値にも示されている。

「じ、爺さん、これ、一体どういう事なんだ」

声の震えを抑えられない。

自身の顔が真っ青になっている事が感じ取れるほどに、ザックスは動揺していた。

目眩と共に座り込みそうになる彼を、いつの間にか傍らに立っていたマリナがしっかりと支えていた。そんなザックスに向かって老人は静かに告げた。

「お前さんが考えている通りじゃよ。彼女はあの日ダンジョン内で生き残ったもののうちの一人じゃ。そして、それ以来ずっと眠り続けておる。彼女はお前さんの同期生なんじゃよ」

「そんな……」

「それよりもお前さんに改めて尋ねたい。お前さん、あの日以前の事、つまり、自分がどんな仲間たちと共に時を重ね、あの日のダンジョンに挑んだかという事をまだ思い出せぬのか？」

その言葉に愕然とする。言われてみれば当たり前前の事が思い出せない。

あの日の魔人との邂逅については鮮明に思い出される。だが、それ以外の記憶となるとあやふやになって、まるで霧の中にいるようだった。

「そ、それって……」

「お前さん、記憶の一部がないんじゃないよ。あの日、ダンジョンの中で保護され、目覚めた後での協会の事情聴取記録にはそう書いてある」

その事実には愕然とする。

だが、それでも彼は最後の気力を振り絞って一つの疑問を老人にぶつける。

「でも、おかしいじゃねえか。もしも彼女があそこにおいて、それ以

来眠り続けているとしたら、このステータス値はおかしいだろう。マナLVだつてせいぜい2か、3つてところじゃねえのかよ」

その質問に老人は押し黙る。しばらくして彼は静かに口を開いた。「彼女の意識はおそらく別の場所にあるんじゃないやろよ。我々の暮らすことは違う世界、そしてその場所で彼女は冒険者として時を過ごしておるんじゃないやろ。詳しい事はワシらよりもそちらのエルフの御三方の方が、よく御存知のはずじゃ」

「バカな事を！」

老人の言葉に年若いエルフが答えた。

「彼女は生まれてまだ20年にも満たないのですぞ。そんな彼女が《エルフの眠り》の中にあるというのか？」

「ほう、《エルフの眠り》とは一体何じゃ？」

「そ、それは……」

「なんじゃ、又、この期に及んで《妖精憲章》で禁じられておるとでも言い出すのか、お前さん方」

老人の言葉に年若いエルフが口ごもる。だが、それを引き取ったのは最も年長のエルフだった。

「我々エルフは、150年近い寿命の果てに病死やその他の理由を除いて、二つの人生の終わりを選択します。一つは寿命と共に土に帰る事。そしてもう一つは、《エルフの眠り》の果てに、自身の生の中で得た知識と力を糧に森の木々となって長い時の中を生きにくい事です」

「ほう、では彼女はどうなるんじゃ」

「もし、彼女が《エルフの眠り》の中にあるとすれば、近いうちに彼女は若木の苗となるでしょう。しかし、彼女の短い人生からは、本来得られるはずの十分な糧となる知識と力がない以上、彼女の木の苗は直ぐに枯れ、永遠の死を迎える事になります」

「それを防ぐ事はできるのか」

「残念ながら《エルフの眠り》から目覚めた者は、かつて一人としておりません」

「歴史や伝統を何よりも重んじるお前さん達が言つのなら、間違いないんじゃないかな」

その言葉に室内の者は、みな押し黙る。

「やれやれ、どうやら、最悪の結末になるという訳か……。無念じやのう」

老人の言葉は室内に静かに重く響いた。

2011/09/15 初稿

17 ザックス、翻弄される！

その日も静かな夜だった。

窓から入ってくる秋の風と虫の声、そして酒場の喧騒。だが、自室の寝台の上で横になるザックスにはそれらがどこか遠くの出来事のように感じられた。

あまりに多くの出来事がありすぎた。エルフの幽霊騒ぎは思わぬところで自身の運命に結びついていった。

彼女が眠る室内で、決して答えの出ぬ問題に堂々巡りを繰り返すようになった一同は、その後一旦解散となり、日を改めて仕切り直すこととなった。

特に3人のエルフ達の動揺は激しく、あのままでは感情的なもつれから最悪の事態を引き起こしかねなかった。

どこをどのようにして歩いて帰ったかを思い出せぬくらいに呆然としていたようで、ザックスは気付けば自室のこの場所で横になっていた。最もシヨックだったのはおそらく自身が、訓練校の頃の記憶の一切を忘れ去っていたことだろう。

「参ったな……」

ぼつりと呟く。

自身の過去の一部がすっぽりと抜け落ちているという事態は思った以上に衝撃が大きいものようだ。不意打ちのように訪れた不幸をどう受け止めればよいか分からぬまま、ザックスはただ漠然と時間を過ごしていた。

だが、不幸に愛された彼に安らぎの時が訪れる事など、あるはずもない。

昨夜と同様に、いやそれ以上に激しく叩かれる自室の扉の音に、

ザックスはいら立ちを覚えて起き上がった。

「誰だ！ こんな時間に！」

扉を開けると同時に怒鳴りつけたザックスだったが、そこに広がる光景に目を丸くする。

宿に所属する暑苦しい男達が、廊下の端から端までびっしりと連なってこちらを見つめている。

「な、なんだ」

驚くザックスに、全員が唱和する。

「おい、ザックス！ お前にお客さんだ！」

「客って、誰だよ」

再び彼らは唱和する。

「つべこべ言うな！ さつさと来い！」

言葉と同時にザックスの身体は抱え上げられ、そのまま階下に向かって送り届けられる。

気付けば、彼は酒場への通用口の扉の前に立たされていた。訳もわからぬまま目を白黒させるザックスの前で通用口の扉が勝手に開き、さらにそこには暑苦しい男たちが起立して控えている。おそるおそる店内に入ったザックスは、カウンターにガントツの姿を見つけた。ザックスと目を合わすや否や、当のガントツは呆れ返ったような顔で、彼に二階席に行くように指し示した。

ガントツのその行為にザックスは驚く。ザックスの客人はおそらく二階の一番席にいるという事なのだろう。

先日の大宴会の際のバンガスの宣言以来、ザックスの許す者がそこに座る事は店内で認められているものの、そのような行為に値する人物をザックスは未だに許した覚えはない。

にも拘らず、今や宿中の人間が当のザックスを差し置いて無条件でそれを認めているという事実は驚異だった。

いったいどういう事なのか？

恐る恐る階段を上り二階席の最奥部へと目をやったザックスは、その席に座る者の姿を一目見るなり全てを納得した。現れたザックスを見るや否や、件の人物は満面の笑みを浮かべて立ち上がる。その姿に苦笑いを浮かべながらザックスは声をかける。

「いったい、どうしたんだ？　こんな時間に神殿巫女がこんな場所に来るなんて？」

身分を隠す為のフード付きの無地の外套を傍らに丁寧に畳んで置いた彼女　神殿巫女のマリナはザックスの問いに答えた。

「あらあら、私とザックスさんの間柄ではございませんか、水臭い……」

「なにいー」

その言葉に、店内中の男達の声が唱和する。

「ザックス、テメエ、どういう事だ！」

「マ、マリナ様に不埒な真似を試してみる、どういふことになるか分かってんだらうな！」

「吊っちまえ！　こんな奴は《聖者の像》に逆さ吊りだ！」

どうやらこの店にもマリナ信者はいたようだ。いや、正確にはマリナ信者の集団がこの店の冒険者をやっていたようだ。

頭痛を覚えながら、ザックスは彼女の前に座る。

注文したアルキル果実の搾り汁を口にして気分を落ち着けたザックスは、マリナに突然の訪問の真意を問う。

「あら、私が、ザックスさんの顔を見たかったからというのでは、理由になりませんか？」

その言葉に店内中の殺気が膨れ上がる。

「マリナさん、頼むからオレで遊ぶのはやめてくれ。周りからの視線が痛くてたまらん」

「まあ、《魔将殺し》の称号を持たれる方がご謙遜を……。ザックスさんが本気になられたら、この店内の冒険者の方々など一捻りだと窺っておりますが？」

さらに殺気が膨れ上がる。もはや暴発寸前の状態にザックスは頭

を抱えた。そんな姿にくすくすと笑いなから、彼女は言葉を続けた。
「嘘ですわ。表向きは昨日のエルフの幽霊に関する大神殿の实地調査という名目で、こちらに参りました」

その言葉に店内の空気が一気に澄み渡っていく。

「なんだ、そうかよ」

「さすが、マリナ様だ」

「巫女の務めでお疲れのところ大変なことだ……」

(この宿の奴らの頭の中身ってのは、一体どうなってんだ……)

まるで冗談のような展開に、ザックスはさらに頭を抱えた。だが、彼女の言葉に引つ掛かるものを覚え、ザックスは再び尋ねた。

「表向きっていうことは本命は、別にあるってことかよ」

「ええ、実は大神殿よりザックスさんに内密に伝言を承ってきたのですが……」

そういうと周囲を見回し、その美しい顔に悩ましげな表情を浮かべた。

「困りましたわ。このような状況では落ち着いてお役目を果たす事はできそうにありません。できればザックスさんと二人きりでお話しできる場所が欲しいのですが……」

その瞬間だった。

「よし、今日はもう店じまいだ！ 一般客はさっさと勘定済まして帰れ！ 手のあいた奴らは掃除を済ませて上げるんだ！」

何者かの声が響き、さらにそれに同調するかのように多くの者達の賛同の聲が上がる。

「ちょっと待て、ここは俺の店……フガッ」

マスターのガンツの抗議の聲が途中で途切れ、しばらくして扉が閉まる音がする。どうやら強引に店外に連れ出されたらしい。

「マリナ様、お務めご苦労様です！ ごゆっくりしていつて下さい
男達の唱和が店内に響き渡り、僅か数分で店内は無人と化す。

「あらあら、みなさん、とても優しい方ばかりですね……」

「あ、あんた……、こういうの営業妨害って言うんじゃないのか……」

……」

「ふふつ、これも神殿のお務めですから……」

恐るべし、創世神殿。いや、真に恐ろしいのは神殿巫女のマリナとその信者達なのだろうか？

そんな事を考えていたザックスに、マリナは常と変わらぬ微笑みを向ける。

「もう、お加減が良くなられたご様子で安心しましたわ。昼間のザックスさんは、私がどのようにお声をかけても全くうわの空でいらして、とても心配していたのですよ」

「そ、そうか、ついさっきまでは変わりなかつたんだがな……」

「まあ、それでは私はお役に立てたという事でしようか……」

再び彼女のペースに巻き込まれそうな事態を察知したザックスは、強引に話題を切り替える。

「……で、あなたの本題に入ってもいいか？」

「まあ、ザックスさん……、せつかちな殿方は女性に嫌われましてよ」

「……………」

敵は強者である。ザックスごとき駆け出しが太刀打ちできようはずもない。にこにここと楽しそうな笑みを浮かべるマリナに対して、ザックスはしぶしぶ長期戦の構えを取る事にした。

明日の天気予想に始まって、神殿の洗濯係のばあさんの話題に、野菜と小麦の相場、さらには最高神殿の長老たちの意外な趣味から高度な国家間紛争に関する諸問題まで彼女の話題は事欠かない。適当に相槌を打つザックスが、会話に飽き始めると「ああ、そういうえはイリアが……」と彼女の近況ネタで再び引き付けられてしまう。

実に話術巧者ぶりをいかんなく発揮しながら対面に座っていたはずのマリナは、気付けば彼の傍らにぴたりと寄り添って座っている。

「マ、マリナさん……」

驚いて距離を取ろうとするザックスの腕をしっかりと抱え込んだ彼女は、ザックスに微笑みを向けると小さな声で囁いた。

「お静かに……、マナが乱れ始めました」

「えっ？」

その言葉に彼女を注視する。

ザックスの腕を握りしめる彼女の両手から緊張が伝わってくる。

しっかりと腕に押しつけられた彼女の豊かな胸の感触に反抗の意思を根こそぎ奪われ、その美しい横顔に見とれながらも、視線の先、先ほどまで彼女が座っていた場所に目を向ける。

彼女の言葉からしばらく後、周囲の空気を僅かに揺らして現れたのは、昨日と同じエルフの女性の姿だった。現れた彼女は昨日と同様に、何者かと語り合っているように見える。

「確かに、あの部屋で眠っておられた方に間違いありませんわ」

「ああ」

「本当にきれいな方ですこと。ザックスさんがうわの空になってしまつのも無理からぬことですな」

「はい？」

「理性を失ったザックスさんが彼女に襲いかかったらどうしようかと今日は、はらはらし通してしたわ。イリアになんと行って報告しようかと、気が気ではありませんでしたもの」

「ちよつと、待てえい！」

くすくすと微笑んだ彼女は、ザックスの腕をとつたまま、今日は本当に大変な一日でした、と前置きして語り始めた。

転職によい日取りとされるその日の朝、イリアをはじめとした妹巫女達と今日一日をしつかり切り抜けようと励まし合ったまさにその時に、彼女は巫女長に呼ばれることとなった。

そのまま訳も分からず連れられていったその先は、殺伐とした空気に支配された件の老人の執務室だったらしい。創世神殿からの訪問者が突然に現れた事にエルフの3人は怒りをさらに深くしたようで暫くは彼らをたしなめるための時間が必要だった。

「なんでエルフがあんた達に怒りを向けるんだ」

「一部のエルフ達が創世神の存在を決して認める訳にはいかない、という立場をとっているためです」

「なんで、また、そんなことに？」

「彼らの中には《妖精憲章》という規範が存在します。私達神殿に属する者達にとっての《経典》のようなものだと考えていただいて結構です。」

その中には、彼らの祖先達が別の世界から創世神の奇跡によって無理やり連れてこられた、という記述があるらしいのです。自分達は創世神という禍々しき神によって樂園を奪われた。彼らの中の一部の者達はそう考え、人間と対立を望む、急進派と呼ぶべき勢力が存在するのです。

創世神を認めない以上、当然、創世神の加護を大きく受ける冒険者の存在も決して認められないという事です」

「物騒な話だな」

「元来、エルフはその生まれとルーツを大切にしている種族です。彼らの中でも特に七氏族に属する家系の者達の発言権は大きく、今、目の前にいる彼女の出自は、その七氏族の一つ、しかも姫君と呼ばれる立場にあるらしいのです」

「へえ、彼女が……」

「数日前、エルフの里の星詠みが行方不明になっていた彼女の居場所を捜しあて、それが事の発端となりました。彼らは里をあげての大騒ぎの末、本日、3人の使者をこの都市に送ってよこしたのです」
「爺さんは彼女の事を知らなかったのか？」

「ご存知のように今日、ザックスさんが彼女の結界の中に入るまで、誰一人として彼女に近づけなかったそうです。そして協会に登録されている彼女の身分には偽りがあり、彼女がそのような立場にあるなどとは夢にも思わず、ただ目覚めの時を待っていたというのが実情だということです。真実は分かりかねますが……。」

ただ、食事も一切取らぬまま眠り続ける彼女が一向に衰える様子のない事に、皆不審感を持っていたようですが、全ては彼女の目が

覚めたら分かるだろうという事で、あの事件以降、ただ静かに彼女はあの部屋で保護され続けました」

冒険者協会本部　　どうやらその仕事は相変わらず実にいい加減なようだ。

「でもよ、やっぱりどうにも納得できないんだよな、眠っているはずの彼女が成長しているっていう原理がさ……」

ザックスの言葉に彼の腕を握るマリナの両手の力が僅かに強くなる。だが、しばらくして彼女は何かを決心したように語り始めた。

「彼女は《エルフの眠り》と呼ばれる中で、この世界と同じような場所で今も生活しているでしょう。そして、冒険者としてあちらこちらの初級レベルダンジョンを踏破しています」

「なんで、そんな事が分かるんだ？」

その質問には答えず、ただ静かにザックスの瞳を見つめる。そしてそのまま彼の肩に自身の額を寄せた。まるで彼女に縋りつかれるような格好になってしまったザックスは大きく動揺する。

誰もが認める美貌の神殿巫女が、その豊かな胸をしっかりと押しつけて自身の肩に身を委ねているのである。これで動揺せねば、男ではないだろう。

顔を伏せたまま、彼女は呟くように語り始める。

「私達神殿巫女には裏技と呼ばれるクナ石の覗き方が、先達より口伝で伝えられています。その方法を使えば、目の前の冒険者がどのようなにして成長してきたかという事を知る事が出来るのです」

それは便利だな、と言おうとしかけて、彼女の身体が小さく震えている事にザックスは気付いた。マリナさん、と声をかけようとしたザックスの唇に彼女の人差し指がすばやく押し当てられた。やがて、震えるような声で彼女は続けた。

「私、今、神殿巫女として大きな禁を犯してしまいました。この事は決して、外部の者に漏らしてはならないのです」

その言葉にザックスは驚いた。禁を犯した巫女は力を封じられる以前彼女との会話から聞き知った事だった。

どうして、と尋ねようとするザックスの唇を、すらりと伸びる人差し指で封じながら、彼女は震える声で言葉を続けた。

「クナ石の記録によると、彼女は幾つもの初級レベルダンジョンを僅かな期間の間に次々と単独で踏破しているようなのです。かつてのあなたと同じように……」

「マリナさん！」

彼女の人差し指を振り切ってザックスは彼女の肩を掴んだ。

「いったい、どうしてこんな事を！ 禁を犯せばあんたは巫女でいられなくなるんじゃないのかよ！」

「ええ、その通りですわ」

顔を伏せたまま彼女は答えた。

「だったら、どうして？」

「それが、巫女の務めだからです」

「えっ？」

「私達神殿巫女は冒険者の方々の為の道標となると同時に、彼らの困難を手助けする事を創世神から命じられています。

今、一人の冒険者が私の目の前で死の危険に直面しています。そして私は一人の神殿巫女として、その問題の解決の為に全力をつくさねばならないのです。

例え自身の力を封じられることになろうとも……」

「マリナさん……」

「禁を犯した巫女としてレットルを張られ力を封じられることと目の前の冒険者の命……、天秤は後者に傾いてしまう。それが神殿巫女なのです」

彼女は顔を伏せたまま、再びザックスの肩にもたれかかる。その身体は小さく震えているようだった。マリナのような強かな女性であつても、神殿巫女の禁を犯すという行為には大きな怖れを感じるのだろうか？

そんな彼女の姿を目の当たりにして、ザックスはぽつりと呟いた。「聞いてねえよ……」

その言葉に彼女はわずかに顔を上げる。

「俺は何にも聞いちゃいない。だからあんたは何の罪も犯してなんかいない。故に創世神もあんたの罪を問う事はねえ！」

彼女は黙って彼の言葉を聞いている。

「それでもあんたが自分を許せないっていうんだったら、俺はあんたを脅す事にしよう！」

尋常でないその言葉にマリナが顔を上げた。その美しいまなじりには、僅かに輝く筋が見られた。

「全て無かった事にして、あんたが今までどおりに巫女を続けなれば、あんたの大切なもの、そうだな、イリアをあんたから奪い取ることにしよう。きつと事情を話せば、彼女も協力してくれるはずだ」

……」

「ちょ、ちょっとお待ちください。ザックスさん、さすがにそれは……」

ザックスの突飛な提案に、マリナは珍しく焦りの色を見せている。「あんたが黙ってオレの言う事に従えば、全ては丸く収まる事だ！」

ザックスの顔をまじまじと見つめていたマリナだったが、やがて大きく吹き出した。

「ザックスさん、それは悪者の台詞ですわ」

「ふん、オレは今、創世神を欺き、敵に回そうとする悪者なんだ！文句あるか！」

ザックスの芝居がかった表情と言葉に、とうとうマリナは腹を抱えて笑い始めた。

「わ、分かりましたわ。イリアを人質にされては私も困ります。あなたの御命令に全て従わせていただきます」

「口約束だけでは信じられないな。きちんと創世神にかけて、誓ってもらおうか！」

もはや極悪人のノリである。マリナも笑いをこらえながら右手を上げて誓いの姿勢をとると、ザックスに答えた。

「分かりました。創世神に誓って、私はザックスさんの御命令に喜

んで従う事にさせていただきますわ」

「よし、あんたはこれまで通り神殿巫女のマリナさんだ！ しつかりと日々の務めに励んでくれ」

「はい、分かりました、ザックスさん」

妙にしおらしく、彼女はザックスの言葉に返答する。

その姿に僅かに引つ掛かりを覚えたものの、ともかくこれで、ザックスの身に起きるかもしれない危難は無事に去って行った。

もしもマリナが巫女を止めることになり、それがザックスのせいだという事が露見しようものなら、おそらく大陸中のマリナ信奉者から命を狙われる事は間違いない。一つの店に生息する奴らの力だけでも先ほど目にした通りである。

事が明るみになれば、おそらく三日と待たずにザックスの身体は物言わぬ冷たい軀となつて大円洋に漂うこととなるだろう

ほつと一息ついたザックスだったが、それは大きな過ちであった事を直ぐに思い知る。最強の敵は常に己の側にいるものだ。

「ところで、御主人様、私はこれからいかがすればよろしいのでしょうか？」

「はい？」

突然、ご主人様と呼ばれた彼はうるたえる。眼前のマリナはまるで肉食獣が獲物を目の前にしたかのような目つきで、彼を見つめていた。

「ええと、マリナさん？」

「御主人様、私は先ほど創世神に誓つてあなたの命令に従う事を、約束させられたばかりです。もはやこの身は貴方に奉げたも同然。今や私はいかなる御命令をされても、貴方には逆らえない立場に置かれ、言わば、それは奴隷のようなもの……」

「ちよつと、待てえい！」

「さあさあ、御主人様、私をご存分になさつて下さいませ！」

にこやかに微笑みながら、マリナはそそと、その魅力あふれる姿態をザックスにすり寄せる。

「あ、あんた、まさか、又オレを嵌めたのか？」

「さて、何のことでしょう」

さすがに大陸中のマリナ信者を敵に回す訳にはいかない。イリアに歪んだ情報も与えられる事になりかねず、知らぬうちに鮮やかに攻守の逆転した立場におかれたザックスは、呆然とする。

相変わらず何者かと語り続けるエルフの姿が浮かびあがるその場所、ザックスは、恐るべき敵を相手にずれてしまった本題を元に戻そうと必死の抵抗を始めるのだった。

2011/09/16 初稿

18 ザックス、歩み出す！

「まったく昨夜は、えらい目に合わされたぜ……」

睡眠不足気味の目をこすりながら、ザックスは冒険者協会の建物の廊下を、件のエルフの女性の眠る部屋に向かって歩いていった。

マリナの悪フザケを全力で回避しながら、どうにか大神殿まで送り届けた後、すっかり夜半を回り切った時間帯にも拘わらず、ガンツハミツシユの酒場には煌々と明かりが灯り、ザックスの帰りを手ぐすね引いて待ち構えていたマリナ信者達との激烈なバトルが待っていた。

もう一度未踏破ダンジョンをクリアする方がいいだろうと思えるほどの激しい戦いを終えて床についたのは、朝も白み始めた頃。寝台の上でうとうとしかけると再び叩き起こされ、冒険者協会協会長直々の呼び出しによって、彼は再びこの場所にやってくる事となった。

「おはようございます、ザックスさん」

昨夜遅かったにも拘わらず、いつもと変わらない微笑みを浮かべて、マリナは部屋の前に立っていた。

「ああ、おはよう」

その彼女の姿に、昨夜、神殿裏手にある通用門で別れた時の彼女の姿と言葉が重なった。

『私はおそらく神殿巫女として彼女を救う為に、人として恥ずべき振る舞いを行う事になるかもしれませぬ。どうか、ザックスさん、それがいかなる事態となっても、私を軽蔑なさらしないで下さい』

彼女の真意は分からない。

昨日の訪問についても、結局のところ彼女が何をしに来たのかと

いう事は分からずじまいだった。いつも弄ばれてはいるものの、彼女の言葉に嘘はない。昨日のようにザックスには理不尽としか思えない神殿巫女の信条に従い、自身の務めを果たそうとするのだろう。「みなさん、もう、お待ちかねですよ」

言葉と同時に彼女は扉を開き、彼を招き入れる。

その姿にため息を一つついたザックスは彼女に招かれるまま、再び険悪な空気の中に身を置いたのだった。

室内にいるのはマリナを除けば、昨日と同じメンバーだった。

ザックスを招き入れた後、退出した彼女はそのままどこかへ行ってしまった。年長者ばかり残されたその場所で互いが互いをけん制し合う中、大神殿側から提案された一つの案に若いエルフが怒りの声を上げた。

「バカな、何故、創世神殿の力を借りねばならぬのだ！」

「では他に貴方方に何か打つ手はあるのですかな。彼女の身体の状態は先ほどそちらの冒険者によって確認されたように、もはや予断の許さぬ状況にあるのですぞ！」

協会長の依頼で巫女長の立ち合いの下、再び彼女の結界内に入ったザックスは、彼女の身体の掛け布をとりはらい驚きの声を上げた。むき出しになった彼女の腕からは若芽が芽吹き、彼女の身体は昨日、エルフ達の言ったように、すでに若木の苗と化しはじめていた。

そんな彼女を目覚めさせる事が出来るかもしれないとある手段が、神官長によって提示されたものの、それが大神殿の協力の下に行われるという事実、エルフ達は大きく動揺した。

彼らの中には《妖精憲章》の記載事項に大きく縛られた者達がいるらしい。

そして、さらにそんな彼らを激怒させる提案が、大神殿側からな

されたのだった。

「お入りなさい……」

巫女長の声に従って部屋の扉が開くと二人の巫女が入ってくる。マリナとイリアだった。イリアの容姿にエルフ達は大きな嫌悪感を示した。

「なんの真似だ！ けがらわしい！ 獣人族、それも『狡き者』の一族をこの部屋に招き入れるとは……！」

「黙れ！ 『森の住人』共！ 昨日から礼を失し続ける貴様らの暴虐な言葉の数々、もう我慢ならん！

貴様らの不出来な姫の為に我らが手を貸す事など、馬鹿馬鹿しいわ！

これ以上、我が愛娘を愚弄するならば、この場で貴様らを斬り捨て、その亡骸を里に送り返してくれよう！」

沈黙を保ち続けていたライトの怒声が部屋を揺るがす。

その剣幕に当のエルフも言葉を失った。獣人族と妖精族の対立、そして兎族への偏見は根深いものようだ。

「お怒りをお納めください、お義父様。大丈夫です。私はここに巫女の務めを果たしに参っただけです」

しっかりとした口調でイリアの澄み切った声が室内に響く。その声に険悪な空気が僅かにかき消されてゆく。

「では巫女殿、あなたは姫の結界の内に入る事が出来るのですかな？」

年長のエルフがイリアに尋ねる。マリナに肩を叩かれた彼女は大きく深呼吸をすると足を踏み出し、眠り姫の側へと近づいてゆく。

そして次の瞬間、誰もがその光景に驚きの声を上げた。

昨日のザックス同様、イリアも又、エルフの結界をもつともすることなく自然に彼女の枕元に近づいた。上級巫女のマリナですらかなわなかったその奇跡に、室内の者達はみな目を丸くする。唯一マリナだけが小さく微笑んでいた。

「バカな、なぜ『狡き者』の一族までもが……」

その言葉にライトアットが再び睨みつける。

「決まりのようじゃの。神官長の申し出通り、彼女を大神殿へと連れて行き、洗礼を受けさせることとしよう」

協会長である老人の言葉に、エルフ達が反発する。

「お待ち下され、このような事、我々には想定外で……」

「想定外じゃと、お前さん方、現状がきちんとして認識できておるのか？」

「しかし、大神殿の力を借りるだけでなく獣人族にまで……、このような事態、氏族長会議の決定を無視して……」

「ほう、その会議とやらをやりこから帰る訳か……、お前さん方……」

「私達は単なる使用者でございます。与えられた以上の権限のない我々にこれ以上の判断は……」

無駄としか思えぬ彼らのやり取りに、ザックスは業を煮やしつつあった。

いい年をした者達が、事の本質も見極めずに自分達の都合勝手に並べ立て、そうこうしている間にも目の前の女性の時間は、刻一刻と失われていく。

その現実が彼の中で怒りとなり、ついに爆発した。

無為な言葉を重ねる彼らを見無視したザックスは、つかつかと寝台に近づくと、眠り続ける彼女の身体に掛け布を巻きつけ、そのまま抱き上げる。ザックスのその行為に、室内にいる誰もが啞然とした。「き、貴様、無礼ではないか、姫のお身体に勝手に触れると……」

「黙れ！」

低く、鋭く、ザックスの怒りが彼らに突き刺さる。その気迫に3人のエルフは気圧された。

「どうやら、年を重ねるってのは、バカになるってことと同じ事らしいな！」

temeエらにはこの人の命よりも、自分達の立場やつまらん偏見に彩られたプライドの方が大事ってことか！」

「それは我々を侮辱しているという事か！ そのような真似をして
只で済むと……」

「戦争でもやるうってか！ やれるもんならやってみろ！」

同族を見殺しにしてまでチンケなプライドにしがみつく種族が、
安穩と生き残れるほど世界が甘いかどうか試してみるんだな！」

「これ、若いの……」

老人が呆れたように声をかける。当のエルフ達は怒りをあらわに
してザックスを睨みつけている。

「テムエらの下らんしきたりなぞ、クソ食らえだ！」

オレはこの女性ひとを助ける。彼女がエルフであるか人間であるかな
んてどうでもいい。どうやら俺と同じ境遇に置かれ、無事に生き残
った数少ない女性ひとらしいからな。

そして毎夜のようにうちの酒場に助けを求めに現れる。そんな彼
女が生き延びる手立てがあるというんだったら、オレはそれに賭け
させてもらう。

そのために兎族の巫女の力が必要ななら容赦なく協力してもらう！
いいよな、イリア！」

突然声をかけられたイリアだったが、ザックスの傍でコクリと頷
いた。

「爺さん、彼女に洗礼を受けさせればいいんだな」

「そうじゃ」

「分かった！」

言葉と同時に眠り続ける彼女を抱えて、ザックスは歩き出す。

「ま、待て、そのような勝手な事、たかが冒険者風情が……」
年若いエルフが制止しようとする。

「近づけるのか、あんたに……」

ザックスの言葉通り、彼は結界に阻まれて抱え上げられた彼女に
触れるどころか、近づくことすらかなわない。

「そんなあんた達の頑なな姿勢が彼女に拒絶されてる、とは考えら
れないのか？ エルフってのは聡明で理知的な種族って評判らしい

が、どうやら実態はそうでもないようだな」

冷たく言い残すとザックスは扉に向かって歩き始める。すかさず彼の前に立って扉を開け放ったマリナが、出て行こうとする彼の後に続き、イリアが彼らを追いかけていく。そしてライアットがそれに続いた。

「年を重ねるとバカになる……か、あいかわらず痛いところを突きおるのう……、あやつは」

老人の追い打ちに、守るべきものを見失ったエルフ達はうなだれる。室内には開け放たれたままの扉からさわやかな秋の風が舞い込んでいた。

(やっちまった……)

大神殿内に与えられた一室の片隅で、ザックスはどんよりとした空気を放ちながら壁際で落ち込んでいた。

カツとなっていた時には気付かなかったが、どうやら自身はとてつもない暴言を放ってしまったらしい。

感情的になってしまったエルフ達がある事ない事、里に報告して本当に種族間戦争になってしまったなら目も当てられない。

すっかり落ち込んでしまったザックスのいる部屋に、ノックの音と共にマリナが現れた。

「おや、ザックスさん、先ほどまでの威勢の良さはどちらに行かれましたのでしょう？ 先ほどの大変勇ましいお姿に、私、ときめいてしまいましたのに……」

「悪いな、マリナさん、今は付き合えそうにない……」

どんよりと壁際で暗い物を背負うザックスの背を、マリナは微笑みを浮かべて眺める。

「大丈夫ですよ、神官長を初めとして、様々な方がエルフの御三方をとりなしていらつしやいましたから。勿論、協会長様も……」
「うっ……」

老人にすっかり借りを作ってしまったようである。その事実にはザックスはさらに泥沼にはまり込んでいた。

「もしも時は神官になられてはいかかですか。冒険者としてのスキルは十分すぎる程にお持ちですし、きっと良い神官になられると思いますよ?」

「それだけは、嫌だ……」

おっさんやマリナの部下になつてしまえば、一体どんな目にあわれるやら……。

ここは過去の数多の偉人達の所業を見習つて、潔く全てをなかつた事にして、明るく前を向くべきであろう。

「洗礼の準備は、どうなつてるんだ?」

「ええ、今イリアを初めとして多くの巫女達が準備にかかつております。夕刻の門限を迎えて神殿の全ての通常業務が終わり次第、直ぐに開始されることとなるでしょう」

「そうか、でもよ、なんで今更、洗礼なんだ?」

ザックスの何気ない質問にマリナの顔が僅かに曇つた。しばらくして彼女は重々しく口を開いた。

「ザックスさん、私は、貴方に一つだけ謝らねばならない事があります」

「なんだよ……」

「実は貴方が中級職に転職する際に、イリアと共に行った洗礼の一部始終を、密かに見届けておりました」

「へっ?」

「べっ、別にやましい事などありません。ただ、その時の私はあの娘の事を思つて、そうすべきだと判断したのです」

その日の事を思い出す。

なんだかとても気恥ずかしい事があつたような気もするものだが、

彼のその時の記憶はどうにもおぼろげだった。

「まっ、まあ、それはいいとして、それが今回の事とどういう関係が？」

「お二人が洗礼の滝を潜った一瞬、二人の姿は神聖水の輝きの中でかき消すように消えてしまったのです。時間にして数分程度でしたが……」

「えっ？」

「後でイリアにもそれとなく確かめたのですが、やはり彼女もその時の記憶はないようで……」

「……………」

「これまで私自身、神殿巫女として幾つもの洗礼の場に立ち会ってきましたが、そのような神の奇跡というべき出来事を目の当たりにしたのは初めての事でした。そして、その出来事に疑問を持った私は、先日最高神殿に参りました折に、いくつかの文献を調べて参ったのです」

マリナは静かに一息ついた。

最高神殿には様々な古い文献が保管されている。かつてルメイユが未踏破ダンジョンの中で語った事は事実らしい。きつと彼がこの事を知ったら半狂乱であろう。

「それらの中に最上級洗礼について書かれた行くだりに気になる一節がありました。『巫女は冒険者の道標であるだけでなく、彼の者を《現世しよ》に留めるべく、これを守るべし』と……」

「よく、分かんねえんだが……」

「本来人間の体内に存在するマナとはほんの僅かなものです。常人が冒険者となる事で、その感覚の一部を外側に向かって解放し、外界のマナを様々な形で体内に取り込み蓄積する事で、冒険者は大きな力を得ることになります。上級冒険者になればなるほどその量は多くなります。」

ですが、洗礼の時のように過剰な量のマナが一度に集中すれば、世界の歪みが生まれかねない。そう考えられるのです。巫女の本

来の役割とはそのような冒険者をこの世界に留め導く事……、私は
そう解釈しました」

「……………」
「今、思えばイリアは巫女としての直感で、ザックスさんを守り続
けてきたのかもしれない。あの娘の桁外れな巫女としての資質は、
私など及びもしないのです」

彼女はそのまま静かに目を閉じた。

「中級試験が行われるしばらく前、私はあの娘からエルフの姫君に
出会ったという報告を受けました。」

そして彼女を目撃したザックスさんが、誰も入る事の出来なかつ
た彼女の結界に何事もなかったかのように入られた時、私は一つの
仮説を立てたのです。

あるいはイリアにもそれが可能なのではないのか……と。

そして、予想通りの事態が起こりました。その事で私は確信した
のです。

貴方とイリアならば、違う世界にいる彼女の魂をこちらに引き戻
す事ができるはずだ……と」

「危険はないのか？」

その言葉にマリナは目を閉じたまま黙り込んだ。どこか苦しげな
表情が彼女の美貌に影を差す。

「正直何が起こるか分かりません。これは危険という言葉では表わ
せない程に危険な行為です。」

この事を思いついた時、私は直ぐにそれを胸の内にしまい、素知
らぬふりを通そうと思いました。

あの娘を思う一人の人間として、あの娘をどうなるかも分からぬ
危険に放り込む事など、正直論外です。

いえ、それは嘘ですね。私は只、あの娘を失いたくないのです、
私自身の為に……」

「マリナさん……」

「ですが、それでも神殿巫女である私がそれを許しませんでした。」

眞実を隠したまま、私を目指して神殿巫女としての務めに励むあの娘に恥じることなくこれから振舞い続けられるのか……と」

「それって、昨日言ってた……」

不意に目を開いたマリナが人差し指をザックスの唇にあてた。

「迷った私は昨夜、貴方の下へと窺い、姫君の姿を目の当たりにしてどうすべきかを考えたのです。そして選りよった結論が、これでした」

巫女の禁を犯してまで様々な話をした昨夜のマリナの行動にはそんな意味があったのか　ザックスの胸に複雑な想いがよぎった。

「私は酷い人間です。自身の満足の為に貴方達を危険な目にあわせ、のうのうと事態を傍観している……」

不意に今度はマリナの唇にザックスの人差し指があてられた。自身の唇にあてられた彼女の人差し指を優しく外すと、ザックスは彼女に言った。

「そういう言い方はやめろよ。あんたが苦しんでいるのはよく分かっている。自分の大切な物を犠牲にしても果たさねばならないのが巫女の務めって奴なんだろ。だからイリアだって、納得したんじゃないのかよ」

「ザックスさん……」

「だったら、オレだってそれに付き合うまでだ。オレがイリアに助けられたように、今度はオレが彼女と眠り姫を助ける番なんだろう」
巡り巡って、自分が与える側に回ることだってある　いつかの

ガントツの言葉を思い出す。

「今のおあんたがしなければならぬ事は、無事に事を終えたあの娘に、『よくやった』と一声かけて、いつも通りの笑顔を向けて迎えてやることだろう」

その言葉に彼女は小さく微笑みを浮かべた。

「何が起こるか分からないってのに、じたばたしたって仕方がねえよ。あとは創世神の意思に任せるしかないんだったら黙ってそうするしかない。あんたが後ろでしっかりしていてくれなくちゃ、俺も

イリアも動揺しちまうだろう」

「まあ、ザックスさん、それは私への命令でしょうか？」

昨日の出来事を思い出す。

「ああ、そうだな、あんたは笑って、いつもどおりにしてくれ。

オレ達は『別の世界』とやらにいる『ねぼすけ姫』を叩き起こして、それで事態は一件落着だ」

彼女はくすくすと笑う。まるで少女のようなその笑顔にザックスは一瞬どきりとした。

……と、その瞬間、何者かが部屋の扉をノックする音が響いた。

「どうぞ」という言葉と共に現れたのはイリアだった。初めて見る漆黒の厳かな衣装に身を包んだ彼女の姿は、実に大人びて見える。

「あの、姉さま、変じゃないでしょうか？」

部屋に入ってきた彼女は、僅かに顔を赤らめてマリナにそう尋ねる。

「いいえ、とても似合ってますよ。ねえ、ザックスさん」

「ああ、でもこれって、一体？」

先日の中級試験の打ち上げの時に見た神殿巫女の正装とも違うイリアのその姿に、ザックスは戸惑いを覚えた。

そんな彼にマリナが説明した。

「これが、神殿巫女が冒険者の方と滝を潜る際に身につける正式な衣装なのです。イリアがいつも身につけていたのは、女性冒険者用の洗礼着なのです」

その言葉にザックスとイリアの顔が赤くなる。そんな二人を交互に眺めながらマリナは悪戯っぽい笑みを浮かべると続けた。

「さて、私はこれから準備に行かねばなりません。時間が来るまで、貴方はここでザックスさんとお話していなさいな。あまり彼を困らせてはいけませんよ、イリア」

その言葉をあんたが言うのか、というつつこみを密かに胸の内に留める。

「はい、姉さま」

言葉とは裏腹に、彼女の小ぶりの耳は忙しく動き、どこか不安げなその様子はやはり隠せない。そんな彼女の心中を察したマリナは、愛しい少女をしつかりと抱きしめる。

「大丈夫、きつとあなたなら出来ます。誇りある神殿巫女として、彼とエルフの姫君をしつかりと導きなさい」

「はい、姉さま」

忙しく動いていた耳がぴたりと止まる。マリナの言葉はイリアにとって絶対的な道標であるのだろう。

そんな彼女の様子を確かめたマリナはイリアを手放すと、ザックスに神殿礼をして部屋を後にした。後にはぽつりと二人の姿が残された。

「あ、あの、ザックス様……。不安ではありませんか？」

「ん？ ちつとも不安なんかじゃねえよ……。って言えばウソになるかな」

その答えにイリアは小さく微笑むと、懐からある物を取り出した。「もしよろしければ……。これを持っていて下さい」

わずかに顔を赤らめて、イリアはそれをザックスに差し出した。

それは魔将との戦いの際に、彼とウルガ達を導くこととなったイリアの護符だった。

「ありがとう、でもいいのか？」

その問いに彼女は顔を赤らめたまま、小さく呟いた。

「はい、これは私達巫女が失いたくない大切な方々の為に贈らせて頂くものです。きつとザックスさんのお役にたてると思います」

「そうだな、こいつの力はよく知っているよ。これがあれば安心だ」
彼女の護符の威力はすでに経験済みである。

固めの表情を僅かにゆるめたザックスの言葉に、不思議そうな顔をするイリアに小さく笑いかけると、彼女の護符を懐に忍ばせる。

「じゃあ、後はよろしく頼むぜ！ 中級巫女さん」

「はい、ザックス様」

ザックスの言葉にイリアは明るい返事で答え、彼の傍らにちょこ

んと座る。洗礼開始までのほんの僅かな間、何気ない会話を交わしながら、二人はその時を静かに待っていた。

《ペネロペイヤ》 大神殿 洗礼の部屋 。

滔々と青白い神聖水をたたえる泉の側には、眠り姫を両腕に抱いた洗礼着姿のザックスが立っていた。イリアによって洗礼着に着替えさせられた彼女をしっかりと抱え、ザックスは上階層から流れ落ちてくる滝の水音に耳を傾けていた。

彼の傍らには漆黒の衣装を身にまとった少し緊張した面持ちの、イリアの姿があり、その周囲にはマリナを始めとした4人の姉巫女達の心配げな姿がある。

本来秘事である洗礼において、協会長やエルフ達は特例として、少し離れた場所にある傍観窓からベール越しに泉の様子を窺っているようだ。

「では、イリア、そろそろ始めましょう」

マリナの言葉に小さく頷いたイリアは泉に身を投じる。膝上まで水につけた彼女は、漆黒の洗礼着の裾を水面にふわりと浮かべながら振り向くと、ザックスを誘った。

彼女の導きに従い、ザックスがそれに続く。

そこからはいつも通りの儀式の手順が進められてゆく。

「ちよっと、待ってくれ」

彼女が両手で滝の水を差しだした時、ザックスはふとある事を思いついて洗礼を中断させた。その行為に傍観者達の間から小さなざわめきが生まれた。

何事か、と尋ねようとするイリアを眼で制して、ザックスは両手

で抱えていた眠り姫の身体を片手で支えると、左手を伸ばした。その手にはイリアの護符が握られている。目を閉じたザックスは静かにその護符にマナを込めた。

マナを込められた護符は、あの日と同じように瞬時に燃え上がり、中におさめられたイリアの銀色の髪がふわりと宙に浮かんで彼の左手に絡みつく。

その光景に背後の巫女達が息を飲む様子が窺え、当のイリアも驚いた表情を浮かべる。

そんなイリアに片目をつぶって、ザックスは言った。

「これがあれば安心だ、って言っただろ」

ザックスの言葉にイリアは小さく微笑んだ。再びザックスは眠り姫の身体を両手で抱き抱える。

「じゃあ、始めてくれ」

儀式が再開される。

滝の水を口に含んだ二人は互いに寄り添うように立つと、イリアの力によって互いのマナが同調する。

「いきましよう、ザックス様」

「ああ」

一度だけ目を合わせた二人は、同時に足を踏み出す。両腕に抱えられた眠り姫と二人の姿が滝の水に触れた瞬間、神聖水が激しい輝きを生み出した。

その奇跡を目の当たりにして息を飲む傍観者達の前で、3人の姿は光に呑み込まれ消えて行った。そのまま輝きを放ち続ける滝の水を前にして、傍観者達は呆然と立っていた。

いったい何が起きているのか。

その答えを知っているのは、おそらく創世神のみであろう。人智では理解しえない光景にその場にいる誰もが言葉を失い、ただ彼らが無事に帰還する事を願うだけだった……。

2
0
1
1
/
0
9
/
1
7
初稿

19 アルティナ、振り返る！

「ねえ、かあさま、どうして、にんげんとなかよくしては、ならぬいの？」

幼い彼女の質問に母はいつも困ったような表情を浮かべて返事をする。

「また、誰かにそう言われたの？」

「うん、おじさんや、おばさんはそういって、みんなこわいおかおをするの……。かあさまはいいっていったのに……」

「そう……」

その疑問は彼女が成長するにつれて、共に成長していった。

彼女が暮らすエルフの里に人間はいない。

だが、里を少し離れば人間達の暮らす集落は数多く存在し、また、時折里にやってくる人間達は馬車に様々なものを載せ、里の交易品や鈍く光るものと交換していく。里の近くではエルフと人間の両方を親にもつという者に出会った事もある。

一見、人間など全く関係のないように思えるエルフの里の中にも、その影響が随所に見られ、事ある毎にエルフという種族の中にある矛盾を彼女に匂わせた。

『フォウハスの娘ルティル』　そう呼ばれる彼女の母は里の中で指導者的立場にある《氏族》の頭領の一人であり、その娘である彼女もまた、『フォウハスの娘アルティナ』と呼ばれ、いつかは彼女の母親のように《氏族》の頭領の一人として里を導くことを運命づけられていた。

婚姻というしきたりのないエルフ達は、『誰々の娘』『誰々の子』と唯一の親の名を名乗り、その出自を明らかにする。生まれてすぐ

に里の奥深くの《先人達の森》の中にある《永遠の木々》の巨大な幹に記された系図にその名が刻まれる事で、エルフ達は里の中での己の地位を定められる。例外的に氏族の直系たる者だけが、始祖に当たる者の名を冠することとなっていた。

特殊な地位に生まれた幼い彼女はその事に不満を持ち続け、「どうしてわたしは、ともだちみたいにルティルのむすめアルティナではないの？」と尋ねては、母を困らせていた。思えば自分はいつも母を困らせるような質問ばかりしていたな、と後々の彼女を後悔させた。

彼女の年が十を超えた辺りからだろうか？

エルフ達の在り方の矛盾　その問題は里の中で様々な争いの種となり《氏族》の頭領の一人である彼女の母を苦しめ、まるで餌を飲み込もうとする時の蛇のようになりと絡みつき、彼女の心を絞め続けた。

《妖精憲章》に従って頑なに古くからの言い伝えを守って人間と敵対しようとする強硬派と、《妖精憲章》の解釈を変え、未来を見据えて変わりゆく時代に自分達の在り方を合わせようとする穏健派の対立の矢面に立たされた彼女の母は、人間に比べてはるかに長いはずのその寿命の半ばに至る前に、若くしてついに病に倒れ、あつけなく他界した。

「かあさまは、身勝手な年寄り達の犠牲になつて死んでしまったのだ……」

母の死と共に、代々女性が頭領を務めるフォウハス氏族ただ一人の直系の女性であるアルティナは、幼くして二人の兄達を差し置いて、一族の頭領となるべき運命を背負わされた。

若すぎる頭領の死を嘆く事もなく、次の頭領となるであろうアルティナの後見人の地位を巡って醜く策謀を巡らす、哀れな年寄り達の姿を目の当たりにして、彼女の小さな胸の内には古い世代への嫌悪感が育っていた。

母の死後、後見人達の迷惑な監視の下で、幼い彼女は彼らの期待に十分に応えるふりをする一方で、人間達と敵対することなく適度な距離を置きながらともに暮らそうと考えた母の想いを実現するべく、里に訪れた行商人達や、里の周囲に暮らす人間達と積極的に触れ合いながら、エルフとは違う彼らの思考と習慣を学んでいた。

だが、母の死後、僅か数年の間にエルフの里は強硬派が多数を占めるようになり、人間との協調を求める穏健派は次第に数を減らしていった。

元来、理的で長命な種族である彼らが僅かな時間で変遷した背景には、戦争や内乱といった人間達の社会の変化の影響があり、平和や安寧をのぞむ彼らが自身の里とその文化を守るべく閉鎖的かつ攻撃的になっていったのは当然のことといえた。

そんな里の中でアルティナは徐々に異端者として扱われ、彼女を擁護する者も一人、又一人と減っていった。彼女の胸の内に広がる未来への理想像と現実とのギャップは日に日に彼女を苦しめ、いつしか、彼女は里の外へと出て、世界の在り方とその行方を自身の目で確かめることを望んでいた。

そんなある日、祖先を祭る大祭で里中が祝い事に湧き、外部への通路の警戒が緩んだその機会を狙って、アルティナはかねてからの計画通りに里を飛び出し、冒険者となるべく自由都市へと向かった。いくら人間達の習慣を知っていたとはいえ、道中、大きなトラブルを招く事もなく、すんなりと冒険者への第一歩を踏み出す事が出来たのは、亡き母の加護があつた故であろう。

冒険者訓練校　冒険者となる事を志す者はマナに対する適性さえ満たせば、誰にでも門戸は開かれている。

妖精族であるエルフの彼女にとってマナは至極当たり前のものであり、彼女はなんの問題もなく訓練校に受け入れられることとなった。

『ルティルの娘アルティナ』

冒険者協会に登録され、クナ石に映し出されたその文言に、彼女は小さな喜びをかみしめた。真実のみが記載されるクナ石に彼女の名がそう表示される事で、彼女はこれまでとは全く違う新しい自分になれたような気がした。

こうして理想への第一歩を踏み出した彼女だったが、訓練校内での彼女はやはりどこか異端であった。

訓練生の大半が人間、獣人、あるいはエルフ以外の妖精族で占められるものの、マナと相性の良いエルフの血を引く者が冒険者となる事は決して珍しい事ではない。親、あるいはその又親の代に里と縁を切り、人間の世界で人間に混じって暮らす者達は多く存在し、そんな彼らは純粹種のエルフが持つ創世神へのタブーに縛られる事はない。

だが、アルティナのような純粹種のエルフが冒険者になるということは珍しく、その育ちの良さもあって、彼女は訓練生内でも少しばかり浮いた存在となっていた。

美しい金髪を後ろでひとくりに結びあげ、エルフの証ともいえる先端のどがった長い耳とその整ったうなじのラインは多くの者の視線を引きよせた。

エルフという存在を端的に示す彼女の容姿は好奇の対象でもあり、彼女に近づこうとする者達からは常に打算的な匂いを感じられ、パーティへの誘いもどこか作為的だった。

百人近い同期生の中で、彼女はいつしかとある一人の人間の青年に目を向けるようになっていた。十人並みの容姿に粗末な身なりでありながらも、何かきらりと光るものが感じられるその姿は、なぜか奇妙に彼女の興味を引いた。

『ああ、彼はフィルメリアなのよ……』

知人の一人はそんな彼の事をそう評した。

フィルメイア 南の貧しい部族の彼らの多くがその一生の大半を戦いの中に身を置く生き方をする。

平和と安寧を第一とするエルフの里で育った彼女には、そのような出自と彼に纏わりつく戦いの空気が物珍しかったのだろう。彼に対する好奇心の原因をそう理解した彼女は、決して自分から彼に近づく事もなく、遠くから時折、その動向に目を向けるに留まっていた。

訓練校の卒業審査である初心者向けダンジョン踏破試験が近づき始めた頃、踏破試験とその後の冒険者活動の為に、訓練生達の間では優秀な者をめぐって引き抜き合戦が行われる。優秀な術者の素養のあったアルティナも例に洩れず、様々な者達に声をかけられることとなった。

そんな彼らの内の一つのパーティに所属する事を決めた彼女だったが、その中に件の彼の姿があったのは、驚くべき偶然だった。

「ザックスだ」

飾り気なくぶっきらぼうに只一言そう名乗った彼に、アルティナは好感を覚えた。

（この人とはウソのない信頼関係が築けそうだ）

それが彼女の彼に対する印象だった。そして、彼女は見習い冒険者になる為の最後の試練に挑み、新たなスタートをきる……はずだった。

運命の日。

結成して間もない、ぎこちなさばかりが目立つパーティは、頼りない足取りで初めてのダンジョンへと踏み入り、最下層を目指していた。

換金アイテムの取り忘れ、攻略地図の読み間違い、うっかり迷子になってしまった仲間の捜索、などなど、初心者にありがちな数々の失敗を重ねながら、共に一つの目的に向かって進む仲間達の間

は、いつしか小さな連帯感が芽生えかけていた。このメンバーならばきつと上手くやって行けるだろう。そんなささやかな希望がアルティナの中に生まれ始めた頃、その出来事は突然に起きた。

踏破の時間よりも現実性を重視した彼らは、最下層近くの小さな広場で休憩を取っていた。だが、そんな彼らの方に向かって、先に最下層へ降りて行ったはずのパーティーの面々が血相を変えて走り寄ってくる。

「おい、どうした、何があった？」

その言葉に返事をする者はいない。

恐怖の表情を顔に張り付けて自分達が逃げてきた方向を指さしながら、彼らの前を逃げるように走り去って行く。

一つまた一つ、次々にそんなパーティーが彼らの前を駆け抜けて行くことに不信感を抱いた彼らだったが、直ぐにその理由を知った。

通路の奥からさらに逃げ出してきたパーティーのメンバーの一人が炎に焼かれ一瞬の内に消失する。事態を言葉ではなく身体で理解した彼らは、即座に逃走を選択した。

「どうなってるんだ！ 《跳躍の指輪》が働かねえぞ！」

「あきらめろ！ とにかく足を動かして逃げるんだ！」

だが、そんな彼らの前にも魔人の姿が現れ、一人の仲間がその炎に焼かれ、消えて行った。

「畜生！」

怒りのままに魔人に剣を向けたリーダーの男がさらに焼かれて消えて行く。高熱で溶けて変形した《跳躍の指輪》が渴いた音を立てて床石の上に転がった。

圧倒的な優越感に浸った笑みを口元に浮かべた魔人は残った彼らを放り出し、先に逃走していったパーティーの後を追って姿を消した。眼前でおきた突然の悲劇に発狂しそうになりながら、ただ上を指して逃げ出す仲間達。アルティナも又、そんな彼らと共に自身の身に降りかかりつつある死の予感に身を震わせた。

（これが私の選択の結末なの？）

あまりにも理不尽だった。夢ならば覚めてほしい。だが、ダンジョン内に次々に響く断末魔の声が彼女を現実へと引き戻す。

「諦めるな！ 前に向かって走るんだ！」

投げやりになり、いつしか足を止めそうになった彼女の手を引いていたのは、ザックスと名乗った青年だった。圧倒的な力量差に仲間達を次々に奪われ、顔も名も知らぬ者同士が寄り集まって上層階を目指してひた走る。ただこの狂気の闇から逃れようという一心で……。

だが奮闘虚しく、最上階にたどりついた彼らの前に再び魔人が立ちはだかる。生き伸びようと果敢に最後の抵抗を試みる仲間達が一人また一人と焼き消され、そして、いつしか彼女の意識は闇へと落ちて行った。

（ああ、これが死というものなのか……）

薄れゆく意識の中で、ただ無力感と絶望だけが彼女の心を支配した……。

青く晴れ渡った夏の空を、海鳥の群れが気持ちよさそうに声を掛け合って飛んでゆく。

オレもあんな風に自由に空を飛べたらもっと違う人生を送れるのだろうか、などとため息をつく。

そんな彼の傍らには只一人の道連れとなったエルフ娘の姿がある。二人ともすっかり疲れ果てて無言のまま、青く広がる海と空を眺めていた。

協会指定案件6 - 129号　そう名付けられた事件に遭遇し生き残り、冒険者となる事を選んだのは彼ら二人だけだった。

己にかけられた呪いを解くため、施術院を出た二人はまずは冒険者として所属すべき酒場を探すべく、《ペネロペイヤ》市の大手の酒場を巡った。だが、彼らの異常値を示すステータスを一目見るなり、彼らは皆その門戸を閉じたのだった。

2日ばかりで30件の店を回ったものの、どの店にも袖にされ、いくあてもなく今後の見通しもたない現状に途方に暮れていた。

そろそろ日が落ち始めた空を眺めながら、まずは今夜の寝床の確保をしなければならぬと思ひ当たる。

「魚でも釣って、今夜は野宿かな」

「とりあえずは、宿に落ち着きましょう」

互いのプランを口にし合って、マジマジと見つめ合う。やがてため息について彼　　ザックスは、彼女　　アルティナに告げた。

「あのなあ、オレ達は現状、先行きに全く見通しが立たないんだよ。節約と野宿は基本だろう」

二日間共にすごして、ザックスは彼女の金銭感覚が一般人とは少しばかりかけ離れていることに気付いていた。

それがエルフである故なのかどうかは知らないが、金銭に無頓着な彼女につき合い続けていれば、このままでは間違いなく破産である。

昨日は初日であった事もあって、割高な旅人の宿に泊まる事をしぶしぶ納得はしたものの、もはやこれ以上の贅沢は許されない。ともかく一日も早く所属する酒場を見つけ、ミッションに挑んでぼったくられた見舞金の分も取り返さねば、目も当てられない。だが、予想されうる今後の事態を懇切丁寧に説明するザックスに対し、アルティナの回答は、ただ一言だった。

「イヤよ！」

「お前、エルフだろう。エルフってのは、森の中で野宿ってのが当たり前じゃないのかよ？」

「失礼ね。それは私達エルフをバカにしてるの？　いろいろな風習の為に神聖な森の中で数日を過ごす事はあっても、エルフの里の中

ではみんなきちんとした家で暮らしてるわ！ だいたい疲れた顔のまままで明日の酒場巡りをしたって無駄足にしかないじゃない！

第一印象は大事なのよ！」

「とにかく節約しなくちゃ、今後の探索の下準備にも差し障るんだよ。……たく、頭が固えな！」

「あ、貴方、やっぱり私達をバカにしてる！」

「そうじゃねえよ！」

二日間の無駄足で溜まりに溜まったストレスが、ついに爆発してしまったのだらうか。釣り客達の眼前で二人は喧々諤々の言い争いを始めてしまった。目覚めて以来、度々訪れる目眩と不快感がザックスの不機嫌さを倍増させ、事態はさらに険悪になってゆく。

一向に途切れそうもない二人の言い争いに、不意に割って入るものが現れた。

「なんじゃ、なんじゃ、騒々しいのう。痴話喧嘩ならよそでやらんかい。魚が逃げてしまっじやろうが……」

「うるせえ、今、それどころじゃねえよ！」

「お爺さんは引っ込んで！」

声をかけてきた老人を一睨みすると、二人は再び言い争いを始めた。

そんな二人の姿にため息をついた老人は「どれ……」という言葉と共に二人に向かって手を伸ばす。不意に首元に掛かっていたクナ石の首飾りの重さが消失した事で、二人は驚いて老人を見つめた。その手には二つの首飾りが輝いている。

「ちよつと、お爺さん、一体どうやって？」

「まあ、ちよつとした特技じゃよ」

にやりと笑みを浮かべると老人はクナ石にマナを込め、彼らのステータス値を覗き込んだ。

「成程のう。じゃが、冒険者協会はお前さん達に何もせんかったのかい？」

「冗談じゃない、あんなぼったくりの詐欺師集団！」

「なんじゃ、なんじゃ。えらい言いようじゃのう」

ザックスは彼らの身に起こった事を老人に語って聞かせた。

見舞金の半分をぼったくって何もできなかった解呪士、さらにはその足でアルティナからも騙し取るうとした彼を殴り飛ばし、協会に突き出したザックス対して、職員達は面倒くさそうに対応し、多数の支配下冒険者数を誇る酒場の名を挙げて、彼らを厄介払いしたのだった。

協会からの紹介だからと訪れたその先で、彼らはステータス値を見せるなりあっさりと言前払いを食わされ、その足であちらこちらの酒場を巡ったものの、ただの一軒たりとも彼らを受け入れようとしなかったのである。

「そうじゃったか……、そいつは済まん事をしたのう」

黙って彼らの話を聞いていた老人は、そうぼつりと呟いた。

「爺さんが謝っても仕方ないだろ。それよりオレ達は現状、手詰まり状態なんだ。どうにかしないとこのまま干上がっちゃうんだよ！」
ザックスの傍らでアルティナは小さく肩を落とす。

「ようやく彼女も現状の厳しさを理解してくれたのだろうか？」

手の中のクナ石と彼らの顔を見比べていた老人は暫し考えていたようだったが、やがて彼らに向かって言った。

「仕方ないのう。お前さん方、ちょっとワシについてこい。そつちのエルフのお嬢さんもがっかりしたままでは、せつかくの美人が台無しじゃぞ」

カツカツと笑って、老人は竿を片手に歩き出す。顔を見合わせた二人はこの風変わりな老人の言葉のまま、彼についていく事にした。

「爺さん、ここは駄目だぜ……」

ふらふらと先を歩いていく老人が彼らを誘ったとある店の前でザツクスはため息をついた。そこは二人が最後に訪れ、懇切丁寧に駄目出しをくらった30件目の店だった。

「なんじゃ、お前さんらは、ここでも断られたんかい」
呆れたような言葉で老人は確かめる。

二人の頷く姿に「まったく困ったもんじゃのう、最近の店主共は……」と呟きながら、すたすたと彼は店の扉を開けて中へと入っていく。

顔を見合わせた二人は、再びため息をつくとき、しびしび彼の後につき従った。

「駄目だ、駄目だ、爺さん、いくらあなたの頼みでも、こればっかりは無理つてもんだ……」

ガンツハミツシユの酒場のマスターであるガンツは、首を振って老人の依頼を断った。

「何を言っておるか、まだ海の物とも山の物とも分からんあやつらをうまく導くのが、お前さんの仕事じゃろうが……」

「普通の奴らなら……な。あんただってあいつらのステータスの異常値をみたんだろう？ だったらそんな奴らを今の時代の冒険者達が受け入れる訳ないだろう。無理に店に登録したって、どこにも受け入れられずに生殺しにされるくらいなら、現実って奴をぶつけてきつちり引導を渡してやるのが親切つてもんだろう？」

「全く、だらしのないのう。未知の物事を拒絶する そんな弛んだ精神でどうやって冒険ができるんじやい」

「だから、それが上から見下ろしているだけの物の見方なんだよ。当のパーティにとっては死活問題になりかねないんだ。嘘だと思っならここにいる奴らに聞いてみるよ？ 初っ端からケチのついたこいつらとパーティを組んで未知の冒険に挑もうとする奴らはいるか、

つてな？」

その言葉に一階席に座っていた者達は皆目をそらす。常に冒険者達と向き合っているマスターのガンツの言葉は、ある意味的を射ている。

「もういいよ、爺さん。オレとしてもこんな根性無しの奴らとパーティを組むなんて御免だ。とてもじゃないが、修羅場で背中を預ける気にはなれないな」

ザックスの言葉に一階席の者たちがいきり立つ。そんな彼らを睨みつけながら、ザックスが店を出ようと二人に提案したその時だった。

「ガンツ、だったら俺達が面倒を見てやるよ」

頭上から僅かばかりのんびりとした声が降ってくる。見上げた先には、一人の熟練冒険者風の男がこちらを覗きこんでいる姿があった。

「ダントン、お前達が、か？」

その言葉に一階席がざわめいた。

「ほう、お前さん達が、かい」

老人も又、その言葉に意外な様子を示した。思わぬ展開にザックスとアルティナは顔を見合わせた。

この状況を素直に喜ぶべきなのか、それともいぶかしむべきなのか？

判断に困った二人は再び二階席を見上げた。だが、その場所に男の姿はなかった。

「きゃっ！」

突如として背後に現れた気配にびっくりして振り向くと、アルティナが真っ赤な顔をして自身の尻を押さえている。そして彼らの眼前に先ほど二階席から覗き込んでいた男がニヤリと笑みを浮かべて立っていた。ふと、その顔にザックスは既視感と同時に戸惑いを覚える。

「まずは、クナ石を見せてもらっていいか？」

無造作に差し込まれた手とその言葉に、ザックスはふらふらと従うかのように己のそれを差し出した。

「そっちのいいケツしたエルフのお嬢ちゃんもな！」

だが、その言葉にアルティナは警戒を示す。あいさつ代わりに尻を撫でるような男とかわす言葉なんてないわ、とでも言いたげな顔で男を睨みつける。

「おいおい、困ったな、どうもエルフってのは頭が固くっていけねえ、兄ちゃんからも一言、言ってみてくれよ」

僅かに困ったような表情でダントンはザックスに声をかけた。

だが、そんな彼の頭に天罰が落ちる。二階席から降ってきた麦酒のジョッキが見事なコントロールで彼の頭を直撃した。ゴツンという鈍い音と共にダントンは頭を押さえて、その場にうずくまる。

「品がないんだよ、あんたは！ エルフのお嬢ちゃんが怒ってるじゃないか」

艶のある知的な声と共に、一人の妖艶な美女がこちらを覗きこんでいる。

「……つてえな！ 何すんだよ、姐さん！ 今のはちよつと洒落になんねえぞ」

「洒落にならない事をしたのはどっちだい。まずはその娘に謝るんだね！ それとも今度はその空っぽの頭に椅子の一つも落としてみるかい？」

「わ、わかつたよ、姐さん。悪かったな、エルフのお嬢ちゃん。ちよつとした挨拶のつもりだったんだよ！」

「アタシからも謝るよ、うちの連れが悪い事をしたね」

二階席の手すりを軽やかに飛び越えて彼らの前に降り立った美女が、アルティナに声をかける。しっかりとメリハリのある身体ラインとその脚線美に、ザックスは再び既視感を覚えた。

「いえ、私は大丈夫です。人間の世界のしきたりにはまだ慣れてないもので……」

どことなく硬い表情のまま、アルティナは彼女に答えた。自身を

エルメラと名乗った眼前の美女は、ふりかえってザックスにも声をかけると、アルティナの首飾りを預かった。

ダントンとエルメラがそれぞれのクナ石を覗き込む。そんな二人の姿に傍らに立っていた老人は声をかけた。

「まあ、お前さんたちなら任せて安心かろう。じゃが、その二人をどうするつもりじゃ？」

「そうだな、とりあえずこの二人の幸運度を測る絶好の標的があるからな、そいつで試してみる事にするか……」

ダントンが返答をよこす。

「よいじゃろう、ならば爺のお節介はここまでじゃ。じゃあ、仲良きう、御二人さん。冒険者諸君もしつかり励むんじゃぞ」

「待てよ、爺さん、あんた一体何者なんだ？」

ザックスの問いに老人は笑って答えた。

「わしか？ わしは只のおせっかいなジジイじゃよ。しつかりな、若いの！」

そう告げると鼻歌を歌いながら、老人は店から出て行った。ぼつんと後に残された二人が礼を言い忘れたことに気付いたのは、それからしばらくしてからだった。

「じゃあ、今日はこの宿に泊まってゆっくりするんだね、明日は早いよ。ウルガもそれで構わないね？」

エルメラの言葉に二階席から二度、足を踏みならす音が聞こえる。それは彼らの間の肯定のサインらしい。

再びそちらに目を向けたザックスは、その場所に一人の男の姿を見出した。がっしりとした大柄な体躯のその男は、こちらを見る事もなく、席についたまま葡萄酒のグラスを傾けている。その姿になぜか、ザックスの胸が熱くなった。

「ちよ、ちよつと、どうしちゃったのよ」

「おい、お前さん、もしかして泣いてんのか？」

アルティナとダントンに指摘されて、ザックスは自身が涙を流している事に気付いた。

「えっ、あれ……」

思わぬ自身の涙にザックスはうるたえる。そんな彼の姿をエルメラは怪訝な顔で見つめている。

「そ、そうよね、や、やっとな落ち着くことができて、ほっとしただけだよ……」

「なんだ、なんだ、だらしねえな。そんなに細い神経じゃ、この先やっていけねえぞ！」

「そ、そんなんじゃないよ、これはただ……」

アルティナの見当違いなフォローとダントンの呆れた声を否定しながら、ザックスは己の内から溢れるように湧きあがってくる懐かしさと既視感に、大きく戸惑っていた。

2011 / 09 / 18 初稿

20 ザックス、振り回される！

翌日の夕方、ガンツハミツシユの酒場は大騒ぎだった。

その日の朝早くに、新米冒険者二人を連れて出発したウルガ達のパーティが、向かった先の《錬金の迷宮》で懸賞金の掛けられたレアアイテム《ハルキユリムの根》を取得し、その祝いがてら店内中の客に酒が振舞われた。

閉店時間まで確実に続くだろうと思われたその大宴会は大いに盛り上がり、その主賓となったザックスとアルティナの二人はこの店に所属する事を正式に認められたのである。

ジョッキ片手に、彼らが幸運をもたらしたからだ、あちこちのパーティに吹聴するダントンのおかげで、これからはパーティのメンバーに困る事もないだろう。

そんな安心からか、ザックスとアルティナは二階の一番席で久しぶりに表情を緩めて美味な料理の数々を堪能していた。

しばらくすると7番席の周囲が大いに盛り上がり始める。輪の中心にはウルガがどっしりと座り、彼の前には幾つものコインがうず高く積みまれている。

店中の力自慢達が集まって始まった腕相撲大会は大いに盛り上がり、一階席・二階席に拘わらず多くの者たちがウルガに挑むもの、誰も彼に敵う者などいない。

その光景を眺めていたザックスも又、彼に挑んではあっさりといつくり返される。諦めが悪いのか、何度も彼に挑んではその度にひっくり返され、無駄にコインを消費していくザックスの姿に、周囲はすでに呆れかえっていた。

「やれやれ、あんたのカレシはどうやらあんたの事よりも、ウルガ

に夢中のようにだね……」

一番席からそれを呆れながら眺めていたエルメラが、傍らに座って初めて飲むキール酒の甘酸っぱい味に目を白黒させているアルティナに声をかけた。

今日のダンジョン踏破で、エルメラが自身よりもはるかに上手の術者であることを知ったアルティナは、すっかり彼女に入れ込んで弟子入り状態となっていた。

気難しいエルメラにしては珍しく、アルティナと波長があつたように、ダンジョン踏破の傍ら、様々な術の使い方から、冒険者生活のあれこれに鬱陶しい男どもの効果的な撃退方法まで、様々なレクチャーを行っていた。

「おい、そろそろ止めとかなないと、あの娘、姐さんみたいになっちゃうぞ」

ぼつりとザックスに呟いたダントンの言葉に、師弟関係を結びつつある二人が睨みを利かせたのは、実に印象的な光景だった。

そんなエルメラの言葉に飲んでいた酒を思わず嘔き出してむせながら、アルティナは抗議の声を上げた。

「ちょ、ちょっとエルメラさん、なんてこと言ってますか。あんな奴がカレシなんてまっぴら御免です」

長い耳の先まで赤くなつて抗議するアルティナに、エルメラは笑って答えた。

「なんだい、凶星だったのかい。まあ、冒険者同士の恋愛ってのは意外と熱しやすく冷めやすいもんだからねえ。つまらん男にひっからないように、あんたも気をつけるんだよ。まあ、あたしの見立てではあのザックスって坊やは悪い奴ではないようだけどねえ」

すでにエルメラの中では二人の関係は既成事実らしい。慌てたアルティナは、苦し紛れに話題をそらした。

「エ、エルメラさんこそ、どうなんですか。ウルガさんとはまんざ

らでもなさそうですし、ダントンさんはエルメラさんに気があるようですし……」

その言葉に今度はエルメラの方が酒を嘔き出した。アルティナにはない大人の色気満載の彼女が動揺した表情というのは、はたから見ている実に可愛らしい。

「バ、バカ言つてんじゃないよ。あたし達はそういう関係じゃないのさ」

僅かな時間で動揺を収め、冷静さを取り戻した彼女は続けた。

「アタシ達はね、もう、そういう関係にはなれないんだよ。冒険者になってアタシ達は多くの物を手に入れたけど、同時に多くの物を失ってしまった。失った物の中にはそんな感情も入っちゃまってるとね……」

どこか遠い目をしながら語る彼女のそばで、アルティナはしおしおとうなだれる。そんな彼女を元気づけるようにエルメラは言葉を続けた。

「あなたの冒険者人生は始まったばかりなんだ。考えたり悩んだりすることもあるだろうけど、意外と走り出してしまうなんてことはないものさ……。幸運なことに、あなたは一人じゃないんだからね」

相変わらず熱く盛り上がる7番席の方を眺めながら、エルメラはうなだれたアルティナの肩を抱いた。

そんな二人の様子に気付く事もなく、ウルガに最後の勝負を挑んでひっくり返されたザックスは、そのまま眠りこけていた。

大宴会の翌々日、朝早くからアルティナに叩き起こされたザックスは、大浴場に放り込まれ身を清めさせられたその足で《ペネロペ

イヤ》大神殿に乗り込むこととなった。ダンジョンを踏破し、初級冒険者となった二人は初めての『職』に就くべくその場所を訪れた。「お前、妙に気合入ってるな」

朝早くからテンションの高いアルティナに呆れかえったザックスに、彼女は答えた。

「当ったりまえでしょ！　これから私達は敵地に乗り込むのよ」

「敵地って、お前……」

彼女が言うにはエルフ達の行動規範となる《妖精憲章》によって、彼女達エルフは創世神殿に対してよい感情を抱いていないらしい。冒険者の転職を創世神殿が一手に引き受ける事もあって、純粹種のエルフが冒険者になるというのは珍しいことのようにだ。

「ま、まあ、私はちよつとばかり例外なのよ」

自身の身の上話になると途端に口が重くなるアルティナに対して、ザックスはあえて詮索する事はなかった。

ともかく今は、冒険者として新たな段階に踏み出すことこそ優先すべきである。緊張した面持ちの彼女を連れて、ザックスは創世神殿の門を潜った。

その日は転職によいとされる日取りだったらしく、ずいぶんと待たされたザックス達の順番がようやく回ってきたのは、昼時を遙かに過ぎた頃だった。

通された部屋の壁面いっぱい描かれた壁画に、ザックスは小さな違和感を覚えた。

子供ですら知る世界創造の物語　力強い筆力で描かれた壁面に、創世神と破壊神が背中合わせに描かれている。

初めて見るはずのその絵に魅入られながらも、どこか違和感を覚えるザックスに、優しい声が投げかけられる。

「どつやらずいぶんとお気に召したようですね」

彼に声をかけたのは一人の神殿巫女だった。

おそらくは彼と同年代くらいなのだろうが、彼女の浮かべる微笑みは実年齢よりも高い女性達の柔らかさを感じさせた。

「失礼しました。私、当神殿で《巫女》を務めさせていただいている『マリナ』と申します」

「ザックスだ」

アルティナの緊張がそのまま乗り移ってしまったのか、マリナと名乗った巫女の柔らかな微笑みに飲み込まれぬよう、少しばかり居丈高になって、彼は名乗った。

だが、そんなザックスを優しく包むかのような彼女の振る舞いによつてすぐさま緊張を解かれてしまい、導かれるままに席についた彼は、初めての『職』^{シヨブ}についての説明を受けていた。

（何かがおかしい……）

そんな違和感ばかりが、頭の中をぐるぐると回る。

思えばこの神殿の門をくぐって以来、奇妙な既視感と違和感が交互に訪れていた。特に違和感の元凶となっていたのは彼らの頭上にある壁画だった。そしてそれをきっかけに周囲全ての出来事が幻のように感じられる。眼前に座る巫女のマリナですらも……。

（オレはどうしてしまったのだろうか？）

答えなど出ようはずもない思考の堂々巡りを繰り返していたザックスだったが、不意にその頬に温かな手の平が当てられ、その感触にハッと我に返った。

「大丈夫ですか？ お顔の色が優れないようですが？」

自身の頬に手をあてたまま、身を乗り出している彼女の豊富な胸元がたゆんと揺れる。その光景に顔を赤くしながらもザックスは彼女に答えた。

「す、すまない。どうも初めての事で戸惑っているようだ」

「そうでしたか。なんだが幽霊にでもあったかのような顔をなさっていらつしゃいましたので、少しばかり心配になってしまいましたわ」

どことなく鋭い一言にどきりとしながらも、ザックスは深呼吸を一つして気分を落ち着かせる。

「大丈夫ですわ。洗礼などと大げさに言いますが、神聖水の滝を潜りぬけるだけの簡単な物ですから何一つ不安な事などありません。どうか大船に乗ったつもりで、事の一切を私に任せては頂けませんか？」

きっと彼女の目には、ザックスは情けない冒険者のように映っているのだろう。

「ああ、そうだな、よろしく頼む」

曖昧な言葉でごまかしながら、彼は自身の中に浮かぶ違和感と既視感を無理矢理追い払うのだった。

洗礼の部屋。

上層階から泉に流れ落ちる仄かに青白く輝く神聖水の滝の姿は、やはりこれまで同様に既視感があった。だが、どう頭をひねったところで答えが出る訳でもなく、ザックスは目先の洗礼に集中する事にした。

マリナから神聖水の入った杯を受け取り、一息に飲み干す。

何事かを呟いて彼の背にマリナが触れると、体内に入った神聖水のマナが僅かなぬくもりとなって全身に広がってゆく。《巫女の加護》をかけられたザックスは、彼女に示されるがままに滝へと向かってゆく。さほど強い水勢を感じられぬ滝の前で僅かに立ち止まると、思いきって滝の中に入ってゆく。

その瞬間、ザックスの身に異変が生じた。

真つ暗な世界だった。

右も左も、前も後も、上も下もない　ただ果てしなく闇だけが広がっている。だが、その世界はなぜか当然のものとして感じられた。

（戻らなければ……）

ふと、そんな思いが浮かび上がる。

だが、どうやって……。

一介の駆け出しの冒険者である彼に、そんな事が分かるはずもない。

途方に暮れかけたその時、彼の左手が小さな輝きを放ち始めた。

よく見れば、輝いているのは彼の左手そのものではなく、そこに纏わりつく銀色の糸状の物だった。伸ばした左手の周囲をふわふわと浮かびながら、その輝きは彼に道を指し示す。

途端に世界が変転し、気付けば彼は洗礼着である腰布を身につけたまま、滝の向こうに立っていた。

『気をつけて……』

世界が変転する瞬間、聞き覚えのある小さな呟きが、彼の耳に届いたような気がした。

自身の眼前で起きた信じられぬ出来事に、マリナは呆然としていた。

初めての転職であるにもかかわらず、うわの空状態で初級職についての説明を聞くどこか頼りなげな冒険者の姿に、彼女はどこか不自然さを覚えていた。

《巫女の加護》をかけた瞬間、第3者のマナが彼女の加護を僅かに妨げるような感覚を覚えたが、不安を見せる事もなく淡々と洗礼の

儀式を執り行う。

だが、件の彼が滝に身を潜らせた瞬間、彼を中心にして滝の水が輝きを生み出し、その姿はかき消すように消え去ってしまった。

『創世神の奇跡』とも呼べるその瞬間を確かに目撃した彼女は、己の経験と常識からは理解不能な事態に直面し、暫し呆然としていたが、慌てて泉の反対方向に向かって走った。滝の向こう側にあたるその場所には件の冒険者がぼつりと立っているだけだった。

「あ、あの、御気分はいかがですか？」

後から考えれば、我ながら間抜けな質問だったな、と思うほどに当たり前のことを尋ねた彼女に対して、ザックスはきよんとした顔で答えた。

「ああ、別に問題はないみたいだが、これで儀式は終わったのかな？」

その問いに、コクリとマリナは頷くだけだった。

自身のクナ石を確認したザックスは彼女に礼を言うと、泉から上がって自身の荷物が置いてある部屋に向かって歩いていく。

初めて直面した異常すぎる事態に大いに戸惑いながら、気付けば引き寄せられるかのようにふらふらとマリナは彼の後を追っていた。

装備を身につけ、洗礼の部屋を後にしようと扉を開いたザックスは、少々機嫌の悪いアルティナに出迎えられることとなった。

「遅いじゃない、いつまで待たせるのよ！」

待たされた事に不満を募らせるアルティナの目に、ザックスと共に部屋から出てきたマリナの姿が映った。

洗礼のシヨックから直ぐに立ち直ったマリナは、ザックスに興味を覚えたらしく、先ほどから言葉巧みに彼の身の上を聞き出していた。

「あらあら、ザックスさん、こちらのお美しい方とは、どのような

お知り合いなのでしょう？」

輝く蒼月の美貌という比喩がふさわしいエルフのアルティナに対して、大輪の薔薇を思わせる美貌のマリナが向かい合う。不機嫌そうなるアルティナを挑発するかのようになり、マリナはザックスの左腕を両手で抱え込むとその豊かな胸をしつかりと押しつけた。

「ええつと、マリナさん……、これはいい……」

左腕に感じられる柔らかな弾力と彼女のぬくもりにザックスは大きく動揺する。

そんな彼女の行為を宣戦布告と受け取ったらしく、アルティナは空いているザックスの右腕をつかんだ。マリナに比べれば大ききこそ劣るものの、形のよい彼女の胸のしつかりとした弾力がザックスをさらに刺激する。

「神殿巫女さん、どうやらうちのザックスが、大変お世話になったようですね。でもあなたのお仕事はここまでよ。次の冒険者の方の為に、さっさとお務めに戻ってくださいな」

ザックスの腕につかまったまま、互いににこにここと微笑み合う。

さすがのザックスも、「お前ら顔と内心が一致してないだろう」などと不用意につっこむ度胸はない。何の前触れもなく始まったこの事態をなんとか穏便に済まそうと、ない知恵を振り絞ってようやく言葉を思いつく。

「と、とにかく、二人ともここは……」

「ザックスは黙ってて……」

「ザックスさんはそのまま置いてくださればよいのですよ」

あっさりと言葉を封じられ、より強い力で腕をしつかりと掴まれたザックスは、しおしおとしなびた野菜のように二人の美女の間で萎れていく。

もはや生きた心地もしないとは、この事だろう。

世の中には何人もその女性を侍らせて手玉に操る男もいるようだが、どうやら、自分にはその資質はないらしい。そんな事を考えながら必死に逃げ道を探すザックスをしつかりと間に挟んで、アルティ

ナとマリナは互いに微笑みあう。

この瞬間、二人の美女が一人の男を巡る壮絶な戦いの運命が幕を開けた……などという物語的な展開はあるはずもなく、全ては単なる創世神の気まぐれであった。

女の買物物は長い。

世界中の数多の男達がため息とともに語りつくすその教訓を、ザックスは今しみじみとかみしめていた。

神殿で二人が《戦士》職と《詠唱士》職を得た翌日、彼らは自身の装備を新調するために、エルメラと共に東地区のエルメラ御用達の店を巡っていた。

僅か十分足らずで自身の装備の選択を終えてしまったザックスは、あちらこちらの品を見てはしゃぎまわっている二人の女性の荷物持ちと化していた。彼女達が購入した品々を《袋》^{バッグ}に無造作に放り込もうとして、二人の女性に同時に説教されるという体験は、人生で初めてのことであろう。

いつも面倒見のよいダントンが珍しく同行を固く拒否したのはこういう事だったのか、とザックスは深く後悔した。我が身が可愛いのは誰もが同じである。

ウルガ達のパーティは《ペネロペイヤ》市内でも知らぬ者はないといってよいほどの知名度を誇るようで、二人の女性とその従者の一行は、行く先々で丁寧な歓待を受けた。

この数年、相当な荒稼ぎをしてきたらしく、保有シルバの底が知れないエルメラだったが、その買物スタイルは実に手堅く、商品についてしっかりと吟味を重ねた上での指摘は、時としてその道のプロである店員達をも唸らせる。と、思えばびっくりするような品

をびつくりするような価格で衝動買いするのだから、分らない。

金銭感覚が少々あやふやなアルティナに、いい影響と悪い影響を確実に与えているであろうと思われる彼女達の買い物行は、儉約家のザックスにしてみれば大いに心臓に悪く、彼女達から少し離れた場所で両手に荷物を抱えて震えながらぼつりと立っている彼の姿は、周囲の同情の視線を集めていた。

そんな彼の姿を尻目に、当の二人は今、ディスプレイに飾られた一点もののスーツの前で立ち止まっていた。

「ああ、お客様、お目が高い。こちらは彼の防具職人として名高いマイスター・エロームが、全力を注いで作られた最新作でございます。」

機能性とデザイン性を極限まで追求したこの品は、お客様方のようにスタイルの整った方でなければ決して着こなせません。当に選ばれた者のみが着る事を許される御品でございます。」

メリハリの利いたボディラインを誇るエルメラは云うに及ばず、未だ成長途上であるアルティナも、整った胸の形を始めとして各所に大物の器の片りんを覗かせ、その将来が期待される。その品を二人が着用した姿は眼福に値するのだろうが、実際にそれを着用して傍に立たれるとなると、話は別である。

「ふーん、面白いね。マイスター・エロームの防具は定評と実績があるからねえ。アルティナ、ちょっと試着してみな！」

「はい、先生！」

もはや思考能力を削ぎ落され、エルメラにすっかり洗脳されつつある彼女が、その品を手にいそいそと試着室へと消えて行く。しばらくして現れたその姿は、店内にいる多くの者達のどよめきと溜息を誘った。

高弾力性を誇る素材でありながら表面はしつかりと磨きあげられ、少々の斬撃や打撃ならはじき返してしまうであろう。魔法処理も施されているようで、魔法防御力も並々ならぬものがあるようだ。

だが、問題はそのデザインだった。

いわゆるボンテージスーツ、あるいはラバーコンシャスといった類のその品は、創作者が運動性を考慮した故と思われるスリットが全身の随所に施され、その隙間からちらりと垣間見えるアルティナの白磁の肌と漆黒のスーツのコントラストは、実になまめかしい。

特に背中から後腰部へと入ったスリットは臀部の真上まで伸び、危険である事このうえない。必要以上に強調された全身のラインは、もはや騒動の種になりかねなかった。

「お客様、後はこちらの仮面を装着して頂ければ、スーツに施された魔法結界が完成し、完璧なものとなります」

言葉と共に店員が手にした蝶を模したであろうと思われるそれを装着してしまえば、もはや彼女は違った意味での危険な世界の住人となるだろう。

こんな姿で街を歩かれた日には、たちまちのうちにモンスターどころか有象無象が寄ってきて、傍らに立たされたザックスの日常の安寧は、永遠に失われるだろう。

「まあ、大変お似合いですわ。当にこれはお客様の為だけに生まれた商品といえるでしょう。いかかですか、お客様。いつも大変お世話になっているエルメラ様のご紹介ですし、お値段の方、しっかりとお勉強させていただきました」

「よく似合ってるじゃないか。これは買い、かもしれないねえ」

「先生がそうおっしゃられるのなら……」

店員の勧めとエルメラの後押しに従って、アルティナの心はずでに精算モードへと移行しつつある。

「ちよつと、待てえい！」

これからの探索にかかる諸経費を死守する為、世間知らずのエルフ娘の暴挙を阻止する為、そして己の日常の安寧を守る為……、両手に大量の荷物を抱えたままのザックスは、死地と呼んでもよいであろう購買意欲に燃えあがった女性達の商談の場に、玉砕覚悟で果敢に飛び込み、必死の説得を試みたのだった。

2
0
1
1
/
0
9
/
1
9

初稿

21 アルティナ、本領発揮する！

激しい熱が空間を焼き尽くす。

炎に巻き込まれた小型獣型モンスターの群れは次々に戦闘不能になり、残った数匹に白銀の閃光が襲い掛かり、あっというまに殲滅される。通路に転がる換金アイテム群を消滅前に回収してしまえば、一連の行為は全て終了だった。

どんなものよ、と胸をはるエルフ娘に「ご苦労」と一声かけた彼は、そのまま先を目指す。

「ちよつと、もう少し感謝とか労りの気持ちとかを表現できないの？」

と言いながら追いかけてくる相棒の抗議を軽く聞き流しつつ、二人は次の標的を探していた。

「お前達にはこれから二人で《初級レベルダンジョン》を踏破してもらおう」

刀折れ、矢尽きかけながらも、どうにか相方の暴拳の阻止に成功した買い物行の翌日、朝食の席でダントンは新米冒険者である二人にそう提案した。

クラスチェンジ
転職を終え、マナLVこそ10であるザックスとアルティナであるが、実質的なダンジョン攻略はこれが初めてである。

通常、《初心者向けダンジョン》を攻略して冒険者デビューしたパーティー達が初めて挑むのが《初級レベルダンジョン》であり、二人の実力からみれば妥当なところであろう。足りない人数分は彼らのLVに不相应な装備の質で嵩上げすることで困難な状況を乗り切れ

というところらしい。

抱腹絶倒、傍若無人、前代未聞、言語道断、空前絶後、赫々云々……いかなる言葉を用いても十分に形容できない二人の珍道中が今、ここに始まることとなった。

「ちよつとこの卑怯者、パタパタ飛び回っていないで、降りてきて正々堂々と戦つたらどうなのよ！」

ダンジョン内の空間を自在に飛び回る飛行型モンスターに向かって、護身用の短槍を振り回してアルティナが抗議の声を上げる。

「おまえ、《詠唱士》だろう。そういう相手は攻撃魔術で対処したらどうなんだ……」

ザックスの冷静なつつこみなど聞く耳を持たず、アルティナは《短槍》片手に追い回す。追われる側のモンスターが彼女の無茶な要求に困った顔をしているのは、おそらく気のせいだろう。

「いやあ、虫、虫、あんなの嫌いよ！ もう帰る！」

現れた虫型モンスターの群れに突然泣きだすアルティナ。

「ちよつと待て、お前、エルフだろ……。森の中に虫はたくさんいなかったのか？」

逃げ出そうとするアルティナの襟首を引っ掴んだザックスに、アルティナは泣きながら抗議する。

「あんなおつきいのは無理！ 理不尽よ！ 壊れちゃう！」

「いや、その理不尽なのがダンジョン探索だろう？」

すっかり冒険者の本分を忘れてしまった相棒にザックスは困り果てた。

「そのあなた、妖精族のくせにモンスターに成り下がるなんてい

ったいどういいう了見よ！」

大木槌を持った小型妖精種に突然理不尽な説教を始めるアルティナ。

例えて言うなら人間がペットの動物に「どうしてお前は人間らしく振舞えないのか」と説教しているようなもの、説教される方もいい迷惑である。自身の身体よりも大きな木槌を抱えたまま戸惑うモンスターに、なぜか同情してしまう。

「言葉が通じてねえだろ」

冷静なザックスのつつこみなど当然耳に入る訳もなく、腰に手を当て居丈高に振舞うアルティナの姿に、彼はあきれ果てていた。

「キヤー、可愛い、プヨンプヨンしてるー。見て見……ムギユ！」

あらわれたスライムの愛嬌ある容姿に、目を輝かせてぬいぐるみ感覚で抱きつこうとしてしっかりとかわされ、前のめりに倒れたところを上から押し潰されるアルティナ。

その前代未聞の暴拳にザックスはついに言葉を失った。パートナの選択を誤ってしまったのだろうか、などと真剣に悩んでしまったのは良い思い出だろう。

ともかく、てんやわんやのバカ騒ぎを繰り広げながら、どうにか最下層にたどりついた二人だったが、ザックスのドジっぷりも負けではいなかった。

初のボスモンスター戦を前に英気を養うべくダンジョンを一時離脱した二人だったが、うっかりクナ石のマーキングを忘れてしまい、二人の挑戦は再び初めからやり直しとなったのである。

「なんてことすんのよ！ 貴方みたいなぼうつとしてる人に任せてたら全滅よ！」

自身のマヌケさ加減を棚に上げ、ザックスに怒りをぶつけるアルティナに理不尽なものを感じたものの、やはりこれは己のミスである。しぶしぶ彼女の要求通りにリーダーの印である《跳躍の指輪》

を渡すこととなった。

だが、翌日の挑戦においては最下層直前に仕掛けられたトラップをリーダーの彼女自身がうっかり踏んでしまい、二人はダンジョン外へと強制転移させられる。当然、クナ石のマーキングなどではおらず、ダンジョン踏破は再再度のやり直しとなった。どんよりとしたものを背負ったまま、その日の夜は互いに無言で不貞寝を決め込んだ二人の姿は哀れだった。

踏破開始当初はさんざんな失敗を重ねた二人だったが、探索に慣れるにつれて徐々に息も合うようになり、彼らの道程は大いに安定し始めた。

特にアルティナの攻撃魔術の威力はケタはずれであり、中階層辺りから徐々に増え始めるモンスターの頭数に対する複数同時攻撃は実に効果的だった。

時折、前に立つザックスを巻き込むお茶目をやらかす事はあるものの、一行の快進撃の原動力となっていた。

大抵の場合、詠唱士系の多くの術者は柄頭に聖輝石を嵌め込んだ《魔法杖^{ロッド}》を使って術を発動させる。聖輝石を起点にマナを集中させ、《魔法杖^{ロッド}》の先端を目標に差し向ける事で術の発動方向をイメージするのである。

だが、上級レベル冒険者であるエルメラと同じく、そのような補助道具を一切必要としないアルティナは、左手の指にはめられた《聖輝石の指輪》を起点にマナを集めると自由自在に術を発動させる。スキルLVこそ低いものの、彼女の術の一発一発に込められた途方もないマナの力は、並の術者では到底足元にも及ばない威力を秘めていた。

時折ザックスを悩ませるマナ酔いの症状も、元来マナというものを生まれた時から当たり前に感じ取り、自在に扱う事の出来るエルフならではの特性なのか、彼女がそれに悩まされる様子は一切見られない。

「理力値MAXの恩恵って奴かな……」

そんな顔で淋しそうに笑う彼女の心中は察して余りあるが、炎・氷・雷・風・地・光・闇の7系統の内、5系統までの、攻撃魔法を自在に操る彼女の力は戦力として欠かせないことは疑うべくもない。現れるモンスターの群れに先制攻撃で大ダメージを与えて、ザックスが止めを刺す。それが彼らの戦闘スタイルとして定着しつつあった。

「すごいな、お前ら。たった二週間で6個もクリアしちゃったのか」
無事に最後の踏破を終え、僅かにボロボロの姿になって、二人は根城であるガンツハミツシユの酒場によく帰還した。

当初のダンジョンの指示は5つだったものの、ダンジョン探索の面白さに目覚めてしまった二人は、その勢いのまま、指定された期間内にさらに、もう1つのダンジョンを踏破していた。やり直しの回数を含めれば実に8つ近いダンジョンを踏破した事になり、この成績は初級冒険者としては驚異的なものであろう。

最後のダンジョンにおいてのボス戦で想定外の強度の敵に遭遇したものの、苦戦の末にどうかこれを退け、二人は堂々と帰還したのだった。

「当然でしょ！ 私の攻撃魔法にかかればこんなもの、どうってことないわよ！」

驚くダンジョンを尻目に、形のよい胸をしっかりと張って自慢げなアルティナの姿に、周囲の者達は「おおー」とどよめいた。

だが、「お前、アンダーウェアが破れてるぞ」というザックスの冷静なつつこみに、「うそー、どうして教えてくれないのよ」と声を上げ、胸と尻を押さえた彼女は、顔を真っ赤にしてその場から逃げ出していく。

「お前さん、もう少し、気をきかせたらどうなんだ」

ダントンが呆れたようにザックスに忠告する。

「別にいいさ、このくらいはご愛嬌ってもんだろ」

それは2週間近く続いた彼女のお守に対する、ささやかな反撃と
いったところだろうか。

「そんなことよりも……」

と行って、ザックスは《袋^{バック}》から一つの鉱石の塊を取りだした。

いぶかしげにそれを眺めていたダントンだったが直ぐに顔色が変わ
った。

「こいつは《精霊金^{アマルガム}》じゃねえか」

「ああ、そうらしいな、換金所の職員達も大騒ぎだったみたいだし
な」

「どうやって手に入れたんだ、それもこんな純度の高い奴を……」

「ああ、最後のダンジョンでやり合ったボスモンスターが残して行
ったんだよ、かなり手古摺ったけれどな……」

自身の武器すら失い、能力の限界値ぎりぎりまでを駆使した、実
際はかなり危険な戦いだった。

そんな想定外の強度のモンスターが残っていた換金アイテムを
冒険者協会のアイテム換金所で《鑑定》してもらった結果、これが
AAランクのレアアイテムと判明したのだった。初級レベルダンジ
ョンでの取得という事もあって、いくつかの報告書を書かされると
いった面倒な手続きに悩まされた二人だったが、売却を熱心に進め
る職員達の申し出を断って、持ち帰る事にしたのだった。

「そう言う訳で、こいつはオレ達からあんだ達への感謝をこめてつ
ていうことでさ……。アルティナも了承済みだ」

「おい、いいのかわ」

「なんだよ、必要なかったのか？ たしかあんだ達、この間《精霊
金^{ガム}》がどうのって言ってたじゃねえか……」

「なんだ、覚えてたのか」

突然のザックスの申し出にダントンは戸惑っているようだった。

時価にして50000シルバ、場合によっては出すところに出せば

それ以上の価格になるそれをあっさり譲られて戸惑っているのだろうか？

だが、直ぐに顔を上げたダントンは満面の笑みを浮かべてザックスに感謝を示した。

「助かったぜ。恩に着るよ。こいつがあれば、俺達の目的もどうにか果たせる事ができるかもしれねえ」

「役に立てて嬉しいよ。アルティナも大いに乗り気だったからな」

「礼は必ずするぜ！」

アマルガム

バッグ

《精霊金》の塊を《袋》におさめたダントンは、そんな言葉を残すとすぐさま店を出て行った。心なしか彼の足取りは軽く感じられた。「そんなものはいいつてんだよ、俺達はあるに達にずいぶん世話になってるんだから」

そんな言葉を呟きながらも、これと似たやり取りを前にしたような気がするなど、いう思いがザックスの中に不意に浮かび上がった。

凄絶な《初級レベルダンジョン》攻略ツアーを終えた翌日の昼下がりに、二人の姿は再び《ペネロペイヤ》大神殿の前にあった。

ザックスの隣りに立つアルティナは相変わらず不機嫌な様子であるが、ザックス自身はリラックスしていた。

いよいよ中級職になるにあたって、本格的な特殊スキルを身につけることのできる段階に入る事もあり、自身の授かる『職』クラスがどんなものになるのかという事は実に楽しみである。

そんな期待感と共に神殿の門を潜った二人だったが、意外な事態が彼らを待ち受けていた。

「どうも、作為的なものを感じて仕方ないのだけど……」

「あらあら、一体何のことでしょうか？」

比較的まばらな待合室で順番を待っていた二人の前に現れたのは、先日ザックスを担当したマリナという名の女性巫女だった。

ザックスを洗礼の部屋へと誘おうとする彼女に、先日のリターンマッチとばかりにアルティナが声をかけた。

「神殿巫女がわざわざ冒険者を出迎えにやってくるなんて、ずいぶんとサービスが行き届いてるじゃない」

「皆さん忙しいので、様々な仕事を役割分担してるだけですわ」

「その割にはザックスだけの待遇がいいのは、私の気のせいかしら？」

「いえいえ、私達神殿巫女は創世神の名の下に、皆平等に扱わせていただいておりますのよ」

「そう、で、ザックスの腕に押しつけられた貴女のその破廉恥な胸は一体どういうことなの？」

「あらあら、それは邪推というものですわ。エルフ女性のスタイルの良さは、世の女性達の誰もが憧れておりましてよ」

ザックスを挟んだ二人の美女が、ふふふ、ほほほ、と笑みを浮かべて微笑みあう。待合室内にいた誰もが息をひそめて3人を遠巻きにし、成行きを見守っている。

「な、なんでもいいけどさ、と、とにかく場所をかえないか」

ようやくの思いで絞り出したザックスの一言が、膠着しかけた待合室の空気を動かした。

「そうでしたわね、私とした事が、当のザックスさんを忘れてしまっうなんて……。さあ、早く参りましょう、ザックスさん。ああ、大丈夫ですわ、そちらのエルフの方。あなたのパートナーは責任を持って私が一切の御世話をさせていただきます」

意味深な言葉と共にマリナに腕を引かれてゆくザックスの背に、アルティナの怨嗟の声が掛けられる。

「この、裏切り者！」

どうしてオレはこうも理不尽な役回りにおかれてしまうのだろうか

？ そんな想いを胸にザックスはマリナに連れられるままに洗礼の部屋へと向かったのだった。

「ええっと……、これはどういう事なのでしょう、マリナさん」

上階層から清らかな輝きと共に流れ落ちる滝の水を滔々と湛える泉のそばで、ザックスはうろたえながら彼女に尋ねた。

「別に、『転職』の為に只の洗礼を行うだけですわ」

何事もないかのようにマリナは答える。だが、ザックスの目に映る彼女の姿は只事ではない。

先日の転職の際にも着用した腰巻だけの姿で泉の傍らに立つザックスの側には、同じく女性冒険者用の洗礼着に身を包んだマリナの姿があった。

豊かすぎる胸、しっかりとくびれた腰、張り出した臀部。

滝の水しぶきで僅かに湿った洗礼着が透けたままの状態でその大胆な姿に纏わりついている。そのような姿で大輪の薔薇の美貌に柔らかな笑みを浮かべて佇む彼女の姿の破壊力は凄まじい。上級冒険者の最上級爆裂術すら足元にも及びはしないだろう。

「どうみても、只の洗礼じゃないだろうが！」

だが、ザックスの抗議の声は虚しく消えて行く。破壊力抜群の姿態をそそと近づけ、マリナはぴたりと彼に身を寄せた。この状況で反抗の意思を保てるような勇敢な男は、まず存在しないだろう。

「では、参りましょうか、ザックスさん」

彼女の柔らかな吐息が、その甘い香りが、柔らかな感触とぬくもりが、彼の意識を支配していく。

「イテッ」

不意に彼の左手が痛みを発した。

弱い力であるがまるで彼の手の甲を抓り上げるかのようなその痛みに、ザックスは僅かに正気を取り戻す。ふと気付けば、マリナは

彼の左手をじつと見つめ、小さく微笑んでいた。

「あらあら、可愛らしいマナの乱れですこと……」
宥めるようにそれをさすると、再びザックスに告げた。

「それでは改めて、参りましょう、ザックスさん。大丈夫、大船に乗ったつもりで、安心してお任せ下さいな」

言葉とは裏腹に、ザックスの腕を掴んだマリナの手からは、僅かばかりの緊張が感じられた……。

2度目の洗礼をどうにか乗り切ったザックスは、世話になったマリナに礼を言うと洗礼の部屋を後にした。別れ際のどこか疲れた表情を浮かべる彼女の姿が妙に気になったものの、マリナはそんなザックスを有無を言わずに部屋から送り出した。

先日のようにアルティナとの抗争もなかった事は安堵すべきなのだろうが、どこかマリナらしくないその行為に、疑問を感じたものの、ともかく礼を言って彼はその場を離れた。

冒険者には分からぬ巫女の苦労というものもあるのだろう。そう考えたザックスは大神殿の正門前で、自身と同じく転職を終えたアルティナの到着を待っていた。

そろそろ夕方になるという事もあって、訪れる人の数よりも出て行く人の数の方が増え、正門付近は喧騒に包まれている。

そんな中を一時間近く待たされてようやく現れたアルティナは、相変わらず機嫌の悪いままザックスの下にたどりつくや否や、開口一番、不満を爆発させた。

「聞いてよ！ 神殿の奴らったら、私によりによって兎族の新米巫女なんかあてて、嫌がらせ以外の何物でもないわ……。きつとあの女が手を回したのね！」

てつきりマリナとの事で文句を言われるかと思っただけに、拍子抜けする。そんなザックスの内心など知る由もなく、彼女は不

満を口にし続ける。

「まったく、だから創世神殿って嫌なのよ。権威ばかり嵩にきて、ろくな事考えないんだから」

獣人族と妖精族は相容れない。それはこの世界に住む者ならば常識である。

ただ、偏見に満ちた意見というのは聞いていて気持ちのよいものではない。なによりも種族的な偏見を受けやすいエルフのアルティナ自身が嫌うその行為を、彼女自身が無意識に行っている姿というのは、見ていて不愉快だった。

ぶつぶつと文句を言い続けるアルティナに、初めは黙ってそれを聞いていたザックスだったが、やがて静かに彼女に尋ねた。

「で……、その兎族の巫女ってのは、お前に何か悪さをしたのか？」
ザックスの問いにアルティナは暫し言葉を失った。それまでの不満がウソのように、しおしおとうなだれて行く。

「ううん、すごく親切だった……」
小さく消え入りそうな声でぼつりと呟いた。

「その親切な巫女さんに、お前はどんな態度をとってきたんだ？」
その言葉に彼女は顔を赤く染める。感情が先走ってしまったとはいえ、自身の行為を反省しているらしい。やがてさらに小さな声で、彼女はぼつりと呟いた。

「御免なさい、反省してるわ」
「オレに言っても、仕方がないだろう」

その言葉に彼女は顔を上げる。
「そうだね、私、ちょっと行ってくる！」
言うや否や、アルティナは元来た道を神殿に向かって駆けだしていく。

「おい、ちょっと……」
走ってゆくアルティナの背を眺めながら、ザックスは苦笑いを浮かべた。

一度決めたら突っ走る　それが二週間のダンジョン踏破ツアー

でザックスが知りえた彼女の性格である。走り始めるとどうも周囲の事が見えなくなってしまうようだが、それでも彼女がやるうとしている事は間違っではないのだから仕方がない。

「どうやらまた暫くの間、彼女の帰りを待たねばならぬらしい。まあ、仕方がないかと溜息をついたザックスは、僅かに西日の差し始めた空を見上げた。

「兎族の巫女さんか……。俺も会ってみたかったな」

何気ない彼の呟きが周囲の喧騒にかき消されてゆく。誰も聞くはずのないその言葉に、ふと彼の左手が僅かに暖かさに包まれたのを、その時のザックスが気付く事はなかった。

2011/09/20 初稿

22 ザックス、訝しむ！

2度目の『転職』でそれぞれ《剣士》職、と《魔術士》職について二人は、《精霊金》の礼としてウルガ達から送られた新たな装備を身にまとい、初めてのクエストを受けるべく、店の扉を開けようとした。

と、不意にザックスの眼前で扉が開き一人の剣士が現れた。髪をひとくくりにして後ろで縛り上げ、まるで抜き身の真剣のような空気を放つその男にザックスはおもわず身構えた。

「ちよつと、ちよつと……」

慌てて彼の後ろにいたアルティナがザックスの襟元を掴んで、男に道を譲った。

「かたじけないでござる」

二人に会釈をした男は、もはや彼らに興味がないかのようにそのまま二人の前を歩いていく。続いて彼の仲間と思しき一団がそれに続いた。

「誰だよ、あれ？」

ザックスの問いにアルティナが答えた。

「知らないの？ 今うちの酒場の中級パーティーで、一番の注目株って言われてる人たちよ。リーダーは確かイーブイさんって言ったかしら」

「へえ、今のが……」

ザックスと同じ《剣士》職であろうと思われる彼は、張りつめた空気を周囲に振りまき、一目で自分よりも実力がある事が見て取れる。

「神業のような剣技を使うイーブイさんを筆頭に、強力な魔術士や

僧侶、さらに吟遊詩人までメンバーに加えた凄腕パーティーだつて言われてたわね。次にこの店の二階席に座るのは、あの人たちだつてみんな噂してるわ」

「ふうん」

見覚えのあるような気もするのだが、そんな感覚にも今やすつかり慣れてしまっていた。自身の能力の高さを鼻にかけたものが放つ空気がなんとなく感じられる4人の姿に、ザックスはぼつりと呟いた。

「あまり、好きになれそうにない奴らだな……」

「そうね」

振り返ってカウンターの対面に立つガンツとやり取りをする彼らを一瞥したザックスは、もやもやとする既視感と違和感を胸にしまつて、そのまま店を後にしたのだった。

《ペネロペイヤ》東地区、鍛冶屋やアイテム屋が乱立する区画のある一角にその店があった。

《ヴォーケンのアイテム屋》という看板の妙に洒落た外観のその店は、周囲の風景から浮き上がっており、やたらと目立っている。店主はどうにも危ない嗜好の持ち主なのだろうか？ そんな不安とともに、おそろおそろその店の扉を開けた二人を出迎えたのは、大柄な中年の男だった。

「いらつしゃい！」

大柄な体躯にアンバランスな愛想で彼らを出迎えた男に、ザックスは来店の目的を伝えた。

「ガンツハミツシユの店からクエストを受けてきたんだが、店主のヴォーケンさんはどちらに？」

「私がヴォーケンです。この度は私のクエストを受けて頂いてありがとうございます。」

愛想の良い笑顔を崩さず、男が名乗り、二人の前に大きな箱を置いた。試作兵器の実用実験とそのレポートをお願いしたい、という彼の依頼を承諾した二人は、箱の中身の数個の球形の物体を《袋》^{バッグ}に移しかえると、そのまま店を後にする。

帰り際、整った店内の様子と彼らを丁寧に送りだすヴォーケンの姿に、再び既視感と違和感を覚えながらザックスは店を後にした。

《凡庸の迷宮》 中階層 。

襲いかかってくるモンスターの群れに放り込もうとした《閃光弾》が自身の手を離れぬうちに、強烈な閃光を放つ。敵も味方も光に巻き込まれて視力を失い、危うく同志討ちと全滅の危機を迎えたが、どうにかこれを切り抜けられたのは、ひとえに二人の幸運度のお陰だろうか。

「冗談じゃないわよ、こんな欠陥武器、一体誰が使うつてのよ」

余りの使い勝手の悪さに最も被害を受けたアルティナが癩癩をおこした。

尤も試作武器であるからこそ実用実験が必要とされるのだから、その使い勝手の悪さには並々ならぬものがある。否、使い勝手が悪いというよりは、即刻お蔵入りすべきであろう。

《ヴォーケン》から預かったのは《爆裂弾》、《音響弾》、《閃光弾》、の3種類。そのどれもが欠陥の塊だった。

まずは景気づけにと最初に放り投げた《爆裂弾》はころころと転がるとそのままプスンと小さな煙の塊を噴き出し、そのまま沈黙す

る。敵味方共にあつけにとられたものの、そのまま戦闘は続行し、全くと言っていいほど役にたたない。

だが、戦闘後に回収しようとして近寄った途端に、爆裂弾は小さな炎を吹き上げ、程良い焼き加減のザックスが、ぱたんと倒れた。

「こんなの危なくて、使えるか！」

彼の怒りが通路内に木霊する。

続いてアルティナが《音響弾》を使用した。

ザックスの失敗を糧に、その取り扱いに慎重になりながら、マナを込めて放り投げたそれは、上手く作動した。発せられた強烈な音に蝙蝠型モンスターの集団が次々にパタパタと墮ちてゆく。

「アルティナ！ 一気に焼き払え」

きんきんと鳴る耳を押さえつつ、先頭に立っていたザックスが振り返ったその先には、音の反響をまともに受けたアルティナが、モンスター達と同様に、前のめりに、ぱたんと倒れる姿があった。どうやら耳のよすぎるエルフ族には刺激が強すぎたらしい。

「こんなの危なくて、使えないわよ！」

涙目になって耳を押さえ座り込むアルティナに、同情の視線が集まった。

度重なる不慮の事故にそうそうに試作武器の実験を中止した二人は、ヴォーケンのクエストと同時に受けたもう一つのクエストを達成すべく、彼らと同行していたパーティと共に二度目の中級レベルダンジョン踏破へと目的を切り替えた。

中級冒険者になった祝いに、とガンツから直々に指名されたクエストは、とある4人組みとパーティを組んでダンジョン踏破を試みるというものだった。

効率よく一度に二つのクエストをクリアして、しっかりと自分達の存在感をアピールしようとした彼らだったが、そうは問屋が卸さない。

ガンツに引き合わされた実に凡庸な四人組との探索は、緊張感の

かけらもなかった。

何をするのも、とにかくいきあたりばったりの彼らの方針は、およそ計画性という言葉とは無縁であり、ゲストである二人の方が始終、ペース配分に気を配る始末である。

もつとすっかりしろよ、と内心つつこむザックスだったが、そんな道程は不思議と楽しいものがあり、これまで緊張感ばかりの中でただゴールだけをめざしてきた二人の中に、微妙な余裕が生まれ始めていた。

3日目の休憩の頃になるとアルティナはすっかりと彼らに溶け込み、容易く雑談に耽っている。自身にも他者にも常に種族の壁を意識させてしまう彼女にしては珍しい事だった。

そんな彼らの雑談はやがて一冊の書物の内容へと移って行く。

「ザックスさん。ザックスさん。貴方はどう思いますか？」

裏酒場が高額の代金で発行している季刊発行されるその書物は、『貴方が選ぶ注目の美女たち』と題され、大神殿の巫女や酒場の看板娘、さらには街の有名人や観光スポットまでが紹介されている。

つい数日前に発行されたばかりの、その書物の巻頭見開きに映っていたのはザックスのよく知る神殿巫女マリナの姿だった。

「あれ、この女性？」

「おお、ザックスさん。やはり貴方もマリナ様を……」

「同志よ。出会えた事を喜ばしく思うぞ」

「でも、抜け駆けはだめですよ」

「そうそう、マリナ様は皆の憧れなんだからな」

どうやら4人は彼女のファンらしい。そんな彼らはこぞって、ザックスに彼女の様々な逸話を披露する。眉つばかりのもののような気がするものの、それはそれで楽しいものだ。

だが、そんな雰囲気にならずに機嫌を悪くしていく者もいる。

一度臍を曲げると元に戻るのに少々時間がかかる上に、その咎は一方的にザックスに押し寄せてくることもあって、危ない空気を察した彼は、なんとか話題を逸らそうと試みる。

「そ、そうだなマリナさんもなかなかだがオレはこっちの娘の方も……」
苦し紛れに適当に指し示したその肖像に4人が「おお」と声を上げる。なぜかアルティナは耳まで真っ赤になっている。

「なんだ、二人はやっぱりそういう関係だったのですか」
「うむ」

「種族をこえた恋愛。うーん。これがドラマというものか……」
「応援するぜ、ザックスさん」

訳も分からず、ポンと肩を叩かれる。慌てて、自身が指し示したその場所に目をやる。そこにあつたのはアルティナの肖像だった。強烈な違和感がザックスの中に湧き上がる。

「な、なんでお前が載ってんだよ！」

その言葉に返答したのはリーダーの男だった。

「ああ、そういえばウルガさん達の大宴会の時に、エルメラさんの取材をしに来た人が……」

酩酊しながらウルガとの腕相撲に耽っていた自身の知らぬ間にどうやら、様々な事があつたようである。はやし立てる四人を尻目にアルティナが照れ隠しに文句を言い、そんな彼女をさらに4人がはやし立て、その場はさらに盛り上がって行く。

(何かがおかしい……)

雑誌に映ったアルティナの肖像を眺めながら、その時、ザックスは初めて自身の違和感が決して無視できぬものであるという事を強く意識した。

そこにあるはずのものが無い、その想いが強くなればなるほど彼の左手が、少しずつ熱を帯び始めていることに、まだ彼は気付いていなかった。

4日間をかけて踏破した《凡庸の迷宮》から帰還した翌日、朝食を終えたザックスをカウンターに呼びつけたガンツは再びクエストを与えた。もともと愛想とは無縁の男であるが、その日のガンツはいつもにもまして慥然とした表情だった。

《神殿》からの直接指名のクエスト。しかもザックスのみが単独で指名されている事に不審を覚えたのであろう。

『他都市に向かう神殿巫女の道中警護』

そう記された依頼書を慥然とした顔でザックスに引き渡す。

「また、あの女なの！ 今度は何を企んでるつてのよ！」

傍らから依頼書を覗き込み、そこに書かれた依頼人名に憤慨するアルティナをどうにか宥めて、彼は依頼を受けることを了承する。もともと彼に拒否する権限などはなかったのだが……。

「神殿とはくれぐれもトラブルを起こさんでくれよ」

ガンツの念の入った言葉とアルティナのジト目を背中に受けながら、彼は一人神殿へと向かう事にした。

大輪の薔薇の美貌に豊満な肢体のマリナの姿を思い浮かべて、彼が鼻の下を伸ばしていたかどうかは……定かではない。

かばかばと馬の蹄が石畳を叩く音が、心地よく響く。轍に嵌ったのか、時折大きく揺れる事はあるものの、初めて乗る神殿仕様の四輪馬車の乗り心地は決して悪いものではない。

板張りの固い座席にひしめき合って詰め込まれる乗合馬車とは異なり、ゆったりとした造りの空間に上質のクッションが効いた皮張りの座席は、気を抜くとそのまま眠ってしまいそうになる。

「寒くはありませんか、ザックスさん？」

マナを込められた氷晶石が十分に広い居住空間内に涼を振りまき、今のザックスは汗だくで道を歩いてゆく人たちとは別世界の住人だった。

一見暑苦しく見える神官や巫女の正装ではあるが、懐に小さな氷晶石の欠片をしのばせることで逆に涼しく快適に過ごせるものらしい。

長時間の儀式などの際にはとても便利ですよ、というのがマリナの話であるが、庶民の生活において一般的に使用される火晶石に比べてずっと割高な氷晶石を、そんな目的で使ってしまう神殿の存在にふと疑問を持ってしまふのはザックスだけではないはずだ。

車内は涼しげであるにも拘らず、そんな彼の全身が火照っているのは、自身の左隣にびたりと身を寄せ、ザックスの左腕にしっかりとしがみついているマリナのせいであろう。窓には目隠しがされ、外側から中を覗き込む事はできないものの、こんな姿を彼女のファンや信者に見られたならば、大変なことになるだろう。

もっとも神殿の印の入った馬車にそのような不敬を犯そうとする者は皆無であり、道行く者は誰もが頭を下げ、通りを行くあらゆる馬車が道を譲って行く。

『神殿とはくれぐれもトラブルを起こさんでくれよ』

ガントツの言葉の意味をつくづく実感する。

「い、いや、大丈夫だ」

ともすればしつかりと押しつけられたマリナの柔らかな感触に、意識が持つて行かれそうになるのをこらえて、ザックスは初めて見るよその都市の風景を車窓の隙間からのぞき見る。

《トロイヤ》市 《ペネロペイヤ》よりもはるかに小規模な自由都市ではあるものの、その場所は実に活気があふれているように見受けられる。道行く人々の顔には希望と生気が宿り、「こんな街なら暮らしてみても悪くはないな」という呟きがぼつりと漏れる。

「ふふつ、ザックスさん、では、私達の新居はどのあたりにいたしましょう。私としては日当たりと風通しのよい場所という条件は決

して外せないのですが……」

それがマリナ流の軽口である事に、今やすっかり慣れてしまっていた。

神殿巫女という立場に加えて、その外見と穏やかな物腰のせいからいふんとの外れな噂が先走っている彼女だが、根はずいぶんとお茶目な性格らしい。

「まあ、その話は置いて……」

その言葉に美しい頬をぷくりと膨らませ少女のような仕草を見せる彼女に、ザックスは尋ねた。

「あんたへの道中警護の必要なんで全くないように思えるんだが……」

《ペネロペイヤ》大神殿から《旅立ちの広場》まで、そして《転移の扉》を潜ってその先でさらに馬車を乗り替えて、《トロイヤ》神殿へ。道行くものたちは皆、人も馬車も道を譲り、実に安心この上ない。

当初はずいぶんと緊張していたものだったが、周囲の状況は平和そのものであり、ダンジョン内で感じられる緊迫感など皆無である。「ま、まあ、何が起きるか分かりませんし、何もなければ、それはそれでよろしいではないですか……」

ザックスの言葉に珍しくたじろいだ表情を一瞬見せるものの、直ぐにそんな様子を消して、うるんだ瞳でザックスを見あげる。

「もう、その手はくわねえよ」というザックスの言葉に、「つまらないですわ」と再びふくれっ面を浮かべるものの、相変わらず彼の左腕をがっしりと掴んで離さない。

仕方がないな、と溜息を一つついた彼は、彼女のなすがままにさせておくことにした。

「おお、これは、マリナ殿、この度は遠路はるばるよくお越しくだ

さいました。」

神殿の入口で彼らを待っていたのは一人の壮年の男だった。すらりと伸びたやせ形の体躯のその男は、気持ちのよい朗らかな微笑みで彼らを出迎えた。

「ご無沙汰いたしておりますわ。ブレルモン神官長様。相変わらずご壮健で何よりです」

先ほどまでの馬車の中でザックスに寄り掛かっていた姿がまるで嘘のように、彼女は姿勢を正し、神殿礼と共にブレルモンという名の男に挨拶する。

「こちらは、私の道中警護を依頼したザックスさんとおっしゃる冒険者です。新進気鋭の冒険者として今、《ペネロペイヤ》で密かに注目されておられる方ですわ」

マリナによる大げさすぎる紹介にザックスは戸惑った。そんな彼にブレルモンは朗らかな笑みを浮かべて握手を求めた。

「おお、そうでしたか。小さな神殿ですので何かとご不便があるやもしれませんが、どうかゆるりとご逗留くださいませ」

握手する眼前の男の姿にザックスは再び違和感を覚える。

やはり何かが違う、その感覚が一瞬ザックスに幻影を見せた。

見た事のないはずの、それでいて過去に出会ったような気のする肥満した一人の男の姿。その姿が眼前のブレルモンの姿に重なった。

「な、なにかと礼儀知らずなもんで、ご迷惑をおかけしますが、世話になります」

「いえいえ、どうかご自身の家のようにおくつろぎいただいで結構ですよ」

なれぬ言葉でぎこちなく挨拶をするザックスの傍らで、マリナがくすくすと笑う。ザックスへの挨拶を終えたブレルモンは、マリナに向き直ると彼女に言った。

「では、早速ですが、マリナ様、洗礼のご準備をよろしく願います」

「分かりました、神官長。今日明日と二日間、精一杯お務めさせて

いただきます」

言葉と同時に二人は神殿に向かって歩きだす。彼女の警護に着た筈のザックスだったが、巫女の職務に励んでいる間の時間はすっかり手持ち無沙汰となってしまう、虚ろな時を過ごすことになった。

日はすっかり西に傾き、本日最後の冒険者が神殿を後にする。そんな彼の姿を見送ったマリナは、それが見えなくなると同時にほとと一息ついた。

「お疲れさん」

今日一日無為にすごしたザックスは、一日中休みなく己の務めに励んでいたマリナに、きまり悪げにねぎらいの声をかけた。

「ふふつ、なんだかとても疲れましたわ」

言葉通り、疲れた表情を隠すことなく、マリナは傍らに立ったザックスの腕に縋りついた。

思わずどきりとしたものの、疲れ切った彼女の顔を目にすると、それを無理に振りほどく気にはなれなかった。こんなところをアルティナに見つかつたら、又何を言われるか分からない。彼女が側にいなかった事に心から安堵した。

《トロイヤ》神殿　ここで洗礼を受けるものは誰もが希望通りの職につけるといふ。どういふ訳だか、近頃冒険者達の間ではそのような噂が広まり、この神殿に訪れる冒険者の数は急激に増えつつあるという。

退屈な神殿内で、ふと知り合つた雑用係の少年からそんな噂話をザックスは聞いた。

余りの忙しさに、近頃は交代で周辺の神殿から応援の巫女がやって来ては、冒険者の転職の手助けをしているらしい。今回のマリナの来訪にはそういった事情があるようだった。

夕方近くまで次から次へとひっきりなしに訪れる冒険者達の姿を相手に、いつもと勝手の違う狭い神殿内で、務めを果たし続ける凛としたマリナの姿は当に神殿巫女にふさわしいと言えた。そんな彼女の姿を眺めながら終日何をする事もなく過ごしたザックスは申し訳なく思っていた。尤も彼がこの場所で行えるような事など何一つなかったのだが……。

ふと、そんな彼らの下に歩み寄ってきた下働きの少年が、僅かに緊張気味の声で二人に声をかける。

「あの、そろそろお食事の準備ができたのですが……」

「ありがとうございます、では参りましょうか」

疲れた表情を消し、柔らかな微笑みを浮かべたマリナが少年に礼を言う。

その言葉に耳まで真っ赤になった彼は、ぎこちなく神殿礼をする慌てて走り去って行く。きっとマリナの視線を意識しているのだろう。そんな姿を見送りながら彼女はザックスの腕を引いた。

「さあ、参りましょう。神殿の食事は質素な物ですから、冒険者であるザックスさんには物足りないかもしれません……」

「ただ飯喰わしてもらおうんだから、文句は言わねえよ」

彼女に腕を取られるままザックスは歩き出す。マリナに懐に入られることにすっかり慣れてしまったザックスだったが、不思議と嫌悪感はなかった。

23 ザックス、対峙する！

イモの粥に一かけの腸詰めと煮込み野菜。ザックスの前に並べられた《トロイヤ》神殿の食事は実に質素だった。

神官、巫女、見習いに下働きの者達まで、神殿中の人たちが一斉に大食堂に集まって創世神に祈りを捧げている。その姿に再び違和感を覚えつつ、ザックスは傍らに座るマリナの側で祈りを捧げるふりをする。

祈りが終わると同時に食事が始まり、大食堂は終始和やかな時間に包まれた。

贅沢という言葉とは縁遠い内容ではあるが、十分に量を取る事が出来、誰もが幸せそうな顔に満ち溢れている。同じ場所に住まう人々が身分を問わず同じものを食べ、飲んで笑い合う。そこには理想的な光景が広がっていた。

(これが当たり前なんだよな……)

なぜ違和感を覚えるのかは分からない。眼前に広がるこの光景こそ、多くの人々が求めてやまない一つの幸せの形のはずである。

だが、どこか腑に落ちない。自身の中から激しく湧きあがる疑問を麦酒と共に飲み下しながら、彼は簡素な食事を十分に堪能していた。

食事を終え、与えられた客間の寝台の上に寝転がったザックスは見慣れぬ天井を見上げていた。

彼の頭をよぎっていたのはここ暫くの間、度々湧きあがる違和感

についてだった。自分は何か大切な事を忘れているような気がする。違和感はそのような感覚を呼び起こし、彼の心の中を激しく波立たせていた。

そんな心理状態では寝つける訳がない。仕方なく寝台から起きあがったザックスは夜の散歩でもして気分を落ち着かせようと考えた。と、その時、彼の部屋の扉を静かに叩く音が聞こえた。

枕元にある火晶石のランプに火を灯すと彼は静かに扉を開ける。そこに立っていた意外な訪問者の姿に息をのんだ。彼の部屋を訪れたのはマリナだった。

「どうかしましたか？」

マリナから与えられた彼の仕事は彼女の警護である。神殿内ということもあり、すっかり気を抜いてしまっていた自身の迂闊さに唇をかむ。彼女を部屋に招き入れ、廊下に顔を出すと周囲を警戒する。だが、怪しげな気配は一切なく、ただ静けさだけが周囲に満ちていた。

扉を閉めたザックスは振り返って背後にたつ彼女の顔を覗き込む。彼女の顔にはいつも通りの微笑みが浮かんでいた。

「あー、マリナさん？」

今一つ緊迫感に欠ける彼女の様子に疑問符がつかぶ。続いて放たれたマリナの言葉にザックスはあっけにとられた。

「先ほどから私の部屋にいつ尋ねてこられるかと首を長くして待っていたのですが、一向に来られるご様子がないのでこちらの方から出向いてまいりました」

言葉と共にマリナはザックスの懐に飛び込んだ。

「ちょ、ちょっと、マリナさん、一体、何考えてんですか！」

マリナに迫られて真っ赤になって後ずさるザックスは、よろよろとよるめいて寝台に転がった。当然マリナも一緒である。

「まあ、ザックスさん、いきなりなんてとても大胆ですね」

転がったまま嬉しそうな笑みと共に、ザックスの胸に頬を寄せる。彼女の甘く長い髪がさらさらとザックスの腕に滑り落ちる。

「いや、これは偶然であつて、その……」

すっかり動転して起きあがるうとするザックスにしっかりとしがみついたマリナは、微笑みながら続けた。

「ふふつ、では今夜はこのまま、身辺警護をお願いいたしますわ」

「はい？」

「お忘れですか？ 私の依頼したクエストは未だに有効ですよ。ザックスさん、今夜はしっかりと私の事を守ってくださいね」

耳元で小さく囁かれ、その度に甘い吐息が彼の心身を刺激する。

大胆なデザインの夜着に身を包んだ彼女は、惜しげもなくその豊かな胸を彼の身体に押しつけた。そのやわらかな感触と覗き見えるふくよかな谷間は、反抗の意思を根こそぎ奪いとり、今の自身の姿がクモの巢に捉えられた獲物のように思えてならない。

こちよい彼女の重さをしっかりと抱え込んだザックスは、彼女を傷つけずになんとかこの場を収めようと、懸命に智恵を巡らした。神殿とは事を構えるな　ガンツの言葉がぐるぐると脳裏を駆け巡る。

巫女に悪さをしたばかりに、店ごと潰されたなどという噂もあるだけに、男なら誰もが喜ぶはずのこの状況は、今は苦痛以外の何物でもなかった。

「ええと、マリナさん。今日は一日中働き通しで、疲れてるんじゃない？」

「はい、その通りですわ。このまま眠ってしまいたいくらいに……」
しっかりと彼の胸に顔をうずめたままで、マリナは答えた。

「じゃ、じゃあ、明日も早い事ですし、ご自身の部屋に戻って……」
不意にマリナの人差し指がザックスの唇にあてられる。その軽やかな指先はしっかりと彼の言葉を封じていた。

「いつもと勝手の違う場所で冒険者の皆さんの大きな期待を一身に背負って果たすお務めは、想像以上に大変でしたわ。でもこれも自身が望んだ事。文句を言つては罰が当たりますわ」

ザックスの唇に人差し指を当てたまま、彼女は続けた。

「望み通りに神殿巫女となり、お務めを果たし、多くの人々の期待にこたえ、他者の喜びとなる。頑張ったものが頑張っただけの代償をえられるのですから、こんなに幸せな事はありません」

マリナの言葉が奇妙に心に引つかかった。

寝台に転がったまま彼女をしっかりと抱きしめ、次の言葉を待つ。そんなザックスにそそ顔をよせるとマリナは優しく笑みを浮かべて微笑んだ。

「ですからこれも受けるべき正当な報酬なのです。しっかりとお務めを果たし、愛しい殿方と共に時間を過ごす。後ろめたいことなど何一つございませんわ」

その言葉にさらに違和感を覚えた。

彼女はこんな事を言う女性ひとだっただろうか？ そんな疑問がふと脳裏をよぎった。

「イテッ」

不意に彼の左手の甲に痛みが走った。以前にも一度感じた事のあの痛み。抓られるようにどこか可愛らしさを感じさせる痛み。ザックスは思わず声を上げて、己の左手を見つめる。その左手に彼女の手が重ねられる。

「ふふっ、可愛らしい事……」

マリナの手が優しくザックスの手の甲を擦り、まるで宥められるかのように痛みが引いていく。

「もう少しだけ、こうしていさせて下さいな……」

そのまま手を握りしめ、誰にかけられたか分からぬその言葉と共に、室内に沈黙が訪れる。火晶石のランプの仄明るい光が室内を揺らした。

「マリナさん？」

しばらくしてザックスは、己の胸の上の彼女が小さな寝息を立てていることに気付いた。

夕刻に見た彼女の横顔は相当に消耗していたようで、その寝顔はとても安らかだった。意識的な表情の消えた今の彼女のそれは年齢

相応のものであり、どこかあどけなさすら感じさせる。

その眠りを妨げぬように起きあがったザックスは彼女を抱き上げ、自身の寝台に寝かしつけるとその身体に掛け布をかけた。その傍らに座ると、すやすやと寝息を立てる彼女の頬を優しく撫でながら、ふとその言葉を反芻した。

『頑張ったものが頑張っただけの代償をえられるのですから、こんなに幸せな事はありません』

『ですからこれも受けるべき正当な報酬なのです。後ろめたいことなど何一つございませんわ』

何かが違つ　事あることに生じていた違和感は今や確信に変わりがつある。彼女の寝顔を眺めながら、ザックスはその根拠を自身の記憶に求めた。だが、十分に満足する解答など得られるはずもない。

仕方なく立ち上がった彼は、混乱する頭を冷やす為、自室を離れて人気のない夜の神殿内を散歩することにした。

暗く長い廊下の窓の端々から、さわやかな月の光が射しこんでいる。日ごとに満ちて行く月の輝きの恩恵を受けながら廊下を歩くザックスは、神殿の中庭に出ていた。

「おや、これはザックス殿、よい月夜ですね」

背後から声をかけられ、振り向いたその先には《トロイヤ神殿》
神官長であるブレルモンの姿があった。

大柄でやせ形の体躯の彼は右手にランプを持って静かに立っている。どうやら夜の神殿内の見回りを行っているようだ。

「神官長自ら、見回りですか？」

ザックスの問いに、ブレルモンは小さな笑みを浮かべた。

「なにぶん、小さな神殿で、人手も足りないもので……。尤もこんな地味な仕事こそ、私は好きなのですよ。こうしていると若い時分

に神官の一人として夜の街を警護がてら、歩いていた頃の事を思い出します。ところでザックスさんはどうなされたのですか？　こんな夜更けに……」

「ああ、申し訳ない。どうも寝付けなくて。静かすぎる場所というのは今一つ居心地が悪いみたいで……」

その言葉にブレルモンは微笑んだ。

「ここはとてもいいところだな。神殿内にいる人たちも皆幸せそうに見える」

「それは神殿を預かる者として大変嬉しい言葉ですね」

ブレルモンは続けた。

「たしかに小さな神殿ではありますが、今は噂のせいもあって多くの方々がこうしてお越し下さっておられます。時折、今日のように忙しすぎる日というのもありますが、お陰で、最高神殿からの援助も十分に受けられ、ここで、暮らす者達も質素ではありますが、十分に満ち足りた生活を送る事ができます。

これも皆、創世神の思し召しでしょう」

そう言うとは彼は神殿礼をする。

「創世神の教えか……。オレにはいまいちよく分からんが……」

その言葉にブレルモンは笑った。

「信仰は常に己の内にあるものです。そして日々を慎ましやかに送れば、きっと十分な代償が創世神によって与えられることとなるでしょう、おっと、あまり説教臭いのも野暮というものです。せつかくの美しい月夜が台無しになつてしまいますな……」

言葉と共に彼は背を向けた。

「それでは私は見回りの続きをさせていただきます。どうぞ、ごゆっくりお過ごしください。ザックスさん。別段足を踏み入れてはならぬ場所というのもしませんし、ゆっくりと夜の散歩をお楽しみください」

廊下の暗がりの中に、去ってゆく彼の背が手に持ったランプの光と共に消えていった。その背にふと別人の姿が重なった。

自分はここで、何か特別な事をした様な気がする。そんな錯覚が脳裏をよぎってやまない。首を振ったザックスは中庭を離れると再び暗い廊下を歩き始めた。

静けさに包まれる神殿内を再び散歩し始めた彼は、いつしか洗礼の部屋にたどりついていた。

上階層から流れ落ちる神聖水の滝は今も止められ、泉は只静かに滔々と水をたたえている。静かな水面をじっと見つめながら、ザックスは自身の中に溢れ返る違和感の正体を探し続けていた。

何かがおかしい。どこかが間違っている

だが、どうおかしいのかが分からない。まるで巧妙に覆われた見えないベールに阻まれるように、彼の周囲に存在する自然な不自然さの中に彼は身を置いていた。

この違和感はいつから始まったのだろうか？ そんな想いと共にこの数週間を振り返る。尤も答えなど出ようはずもない。

無意識に眼前の水面に手を伸ばそうとした、その時だった。

「おおっと、気をつけて下さいよ。むやみにその神聖水に触れると、どんなことになるか分かりませんよ」

全く気配もないまま、突如として背後から降って湧いた聞き覚えのあるその声に、ザックスは飛び上がる。身構えながら振り返ったその視線の先にあったのは、忘れようもない魔人の姿だった。

《初心者向けダンジョン》の中で次々に仲間達を焼き尽くして、自身とアルティナに正体不明の呪いをかけていったその元凶。

その姿を目の当たりにするや否や、ザックスは腰の剣を引き抜き、切りかかった。

だが、その一閃は空を切る。確かに切りつけたはずだったが、手

「ごたえは全くなかった。まるで幻を切ったような感覚にザックスは戸惑いを覚えた。」

「またお会いできて光栄です。ザックスさん。尤も久しぶりという感覚は私にはないので……」

「お前、オレの名前を……」

「おや、これは面妖な……。いえ、ああ、そういうことですか。やれやれ、ここは思った以上に厄介な場所のようですね」

「陰気な顔をした魔人はそう言っただけで肩をすくめた。ザックスは身構えたまま注意をそらさない。」

「ああ、大丈夫ですよ。今は貴方と争うつもりはありません」

「勝手な事を言っただけじゃねえ！ あれだけさんざん、たくさんの人間の命を奪っておいで、誰がそんな言葉を信じるってんだ！」

「確かに道理ですねえ。ですが、ザックスさん。それは貴方の本当の感情なのですか。はたして、あなたのその怒りは本物なのでしょうか？」

「なんだと？」

「ご自身で気付いてはいらっしゃいませんか。幾つもの違和感に。あるはずのない人や物の姿、そんなことに貴方は躊躇っただけなのではありませんか？」

その言葉にザックスは沈黙する。自身の疑問をよりによってこの魔人に指摘された事に、ザックスは動揺した。

「実はこの場所であなとお会いするのは二度目なのです。ザックスさん。その時に互いに自己紹介をしたのですが……。覚えていらっしゃらないとは大変残念です。」

私、《杯》を司る魔将ヒュディウスと申します。最後にお会いしてから、3か月近くになるはずですよ。

尤も我々魔将には時間という概念が存在しないのですが……」

「お前、な、何を言ってる」

ヒュディウスと名乗った魔将の言葉にザックスは驚いた。あの事件からまだ一月たらずというのに、彼は3か月ぶりの再会だという。

いったいどういうことなのか？

だが、魔将は更なる言葉でザックスに動揺を与えた。

「ここは実に奇妙な世界です。誰もが幸せなんてとても都合のよすぎる事だと思いませんか？ まるで誰かの『夢』のような……」

「『夢』だと」

その言葉に記憶の底の何かが大きくひっかかる。自分は何かとても大切な事を忘れている。そう直感した。

不意に彼の記憶の中から幾つもの映像が浮かび上がる。

食事時の神官たちの羨望に満ちた視線。

重なりあう二つのブレルモンの姿とそこにいたはずの人々の姿。洗礼の部屋の中で暴れまわる巨大なモンスターと苦戦する自分。

だが、どれも決定打とはなりえない。ザックスの混乱は一向に収まる気配はなかった。そんな彼にさらに変化が生じた。

自身の左手が熱く熱を帯び、そこからまるで彼を守ろうとするかのようなマナの波動が感じられた。

ザックスの姿に僅かに目を細めながら、ヒュディウスは言葉を続けた。

「どうやら、この世界の決着はあなたにお任せしたほうがよいようですね。あなたならこの厄介な場所から眠り姫を無事に助け出す事ができるかもしれません。尤も、その可能性は限りなく0に近いですが……」

言葉と同時に彼の姿が徐々に薄くなっていく。

「待て！ 逃げるのか！」

ザックスの言葉に小さな笑みを浮かべてヒュディウスは答えた。

「いまはまだ時が熟していません。全ては貴方の記憶次第……。直に『運命の時』が訪れるはずです。その時にまたお会いしましょう。それまでしばしのお別れです」

その言葉と共に彼の姿は完全に消えた。

「ザックスさん、あなたはどんな現実を望みますか？」

虚空から投げかけられたその言葉と共に、《杯》の魔将の気配は完全に途絶えた。ぼつりと一人取り残されたザックスの傍らには何事もなかったかのように神聖水の泉が滔々と水をたたえている。

「勝手なことばかり言いやがって……」

ぶつける相手を見失った八つ当たり気味のザックスの言葉は、虚しく宙に消えて行く。

魔人との邂逅で彼の悩みは解決するどころかより深みを増しただけだったが、心のどこかで、ザックスは自身の運命の歯車がかみ合い始めたような予感がした。

客室の窓からはさわやかな夏の朝の日差しが射しこんでいる。

何者かが頬に優しく触れる感触でザックスは目を覚ました。起きぬけのぼんやりとした頭で見回したその先には、寝台の上に座る大胆な夜着に身を包んだ一人の女性の姿があった。

そんな彼女と目を合わせる。

美しい顔を眺めているうちに徐々に昨夜の事を思い出す。

その一部始終を思い出したザックスは、思わずその場を飛び下がるうとした勢いのまま、バランスを崩して床に転がった。中途半端に寝台に縋って眠っていたために、足がしびれてしまったらしい。

そんなザックスの姿を見つめていたマリナだったが、その柔らかな頬を膨らませるとなぜかプイとそっぽを向いてしまった。

昨夜、魔人との邂逅を終え、動揺する心をなんとか落ち着かせたザックスは自室へと戻った。

彼の部屋の寝台の上では、押しかけて来たマリナがあいかわらず

すやすやと寝息を立てており、全く変わった様子はない。彼女の寝顔を眺めながら、自身の中に生まれた様々な既視感と違和感を整理しているうちに、そのまま眠りこんでしまったらしい。

昨夜の記憶を探る限り、何か彼女の気に障るような真似をした覚えはないのだが、当の本人は臍を曲げている。

「ええと、マリナさん、その、おはようございます」

「……。おはよう、冒険者さん」

実に他人行儀な挨拶である。否、これが当たり前の事なのだろうが、どうにも極まりが悪い。

「あの、マリナさん、何かまずい事でもあったでしょうか？」

臍を曲げてそっぽをむく彼女に、慣れぬ敬語を使ってザックスはその真意を尋ねる。だが、彼女は沈黙したまま語ろうとしない。いつもの柔らかな微笑みが見られない事に、なぜか無性に淋しさが感じられた。

室内に重苦しい沈黙の時間が流れる。下を向くザックスを横目でちらりと見た彼女は、暫くしてようやく口を開いた。

「私、がっかりしていますのよ」

「はい？」

「せっかく一晩を共にすごしたというのに、何もして頂けないなんて……。私、ザックスさんのお眼鏡に適うほど女として魅力がないのでしょうか」

その言葉に目が点になる。どうやら無防備に眠る彼女に自身が何かした訳ではなく、何もしなかった事に問題があるようだ。

「あ、あの、マリナさん……」

言葉を失ったままザックスは啞然とする。一体どうやってこの状況を乗り切ろう。兎にも角にも彼女の機嫌を直さねば、色々大変なことになりそうだ。

「いや、そんな事はないですよ。マリナさんは十分すぎる以上に魅力的です。お、男なら誰でもマリナさんのその魅力あふれる身体に

溺れてみたいですし、あなたの寝顔はとても可愛らしくて……」

もはや自分でも何をいつているのか分からない。しどろもどろで弁解するザックスだったが、マリナは相変わらず拗ねたままだ。

(参ったな……)

この手の修羅場はさすがに経験がない。

『女なんて単純な生き物、心にもない言葉をかけて拗ねる相手の唇を強引に塞いじまえば、直ぐに機嫌なんて直ちまうさ』

故郷にはそんな事をしたり顔で述べた猛者もいたものだが、相手がマリナとなるとどうにもうまくいきそうにもない。

困り果ててうつむくザックスだったが、そんな彼の姿をちらちらと横目で見ていたマリナの肩がやがて小さく震えはじめた。

「マリナさん？」

とつとつ泣きだしてしまったのかと慌てたザックスだったが、事実は正反対だった。肩の震えが徐々に大きくなり、ついにマリナは寝台の上で腹をかかえて笑い始めた。

「う、嘘ですわ、ザックスさん。もう、そんなに困った顔をなされるなんて、可愛らしい……」

涙すら浮かべながら爆笑するマリナの姿に、あつけにとられたザックスだった。

しばらくして笑いを収めたマリナは寝台から立ちあがると、床の上で唾然としたままのザックスに近づき、その両頬を柔らかな手の平で包んだ。しっかりと谷間をあらわにした豊かな胸元が、彼の眼前でたゆんと揺れる。

「何もなさって頂けなかったのはとても残念でしたが、夕べ一晩中、私の手を握って頂いて、大変嬉しかったですわ」

「そ、そうなのか？」

全く記憶にないが、どうやら事実はそのらしい。動揺するザックスの瞳をしっかりと見つめていた彼女だったが、やがてその美しい顔を近づけると彼の頬に柔らかな唇で触れた。蝶が花に止まるかのような軽やかなみずみずしい感触を感じたザックスの耳に、彼女は

僅かに囁いた。

「次は逃しません！」

あまりにも物騒な言葉を残した彼女は、まるで少女のように悪戯っぽく微笑むと、そのまま立ちあがり、飛び跳ねるかのような軽やかな歩みと共に、ザックスの部屋を後にする。理解不能な事態に呆然とするザックスの姿が、只一人その場に残された。

「女って……、分かんねえ……」

ぽつりと漏れた呟きが、聞く者のいない室内の空気に広がって行く。

ふと、彼の左手が熱くなり、また誰かに手の甲を抓られたような気がしたザックスは、慌ててそこを擦りながら、心の中で見知らぬ誰かに弁解を重ねるのだった。

2011 / 09 / 22 初稿

24 ザックス、目覚める！

「力を貸して欲しい」

満月の夜を翌日に控えたその日、夕食を共にした席上でザックスとアルティナは3人の偉大な先達に頭を下げられた。

必要なのはお前達の運勢値である　聞きようによっては余りにも失礼この上ない要求ともとれるが、それでも彼らは礼を尽くして、二人の協力を求めていた。

彼らの因縁を知り、また、魔将との事は二人にとって避けては通れない問題である事を思い知っている二人は互いに顔を見合わせる　と彼らに協力を申し出た。その言葉に顔を明るくした3人だったが、いざ、打ち合わせの段階になってアルティナが強く反発し始めた。

「3人についていくのは私だけでいいわ。貴方はここで待っていて！」

「お前、何を言い出すんだ。だいたい悪運度MAXは俺だけのパラメータなんだ。留守番するのはおまえだろう？　幸運度だけがMAX値のお前に、ダントンのいう最悪の選択つてのができる訳ないだろう！」

「大丈夫、別の方法を使うわ。私が責任をもって彼らを求める場所に導いてあげる。だから、貴方はここにいて」

「だから、なんで俺だけが留守番してなきゃなんないんだ！」

頑ななアルティナの態度にザックスは戸惑った。

思えば神殿からのミッションを終えて帰還して以来、アルティナの態度がどこかよそよそしい。

《杯》の魔将と名乗る男との出会いを彼女に報告したものの、なぜかうわの空のまま、彼女の意識は別のところにあった。いつもは朗らかな性格の彼女のはずだが、どこかイライラして落ち着きのない

様子が感じ取れた。

ウルガ達への同行を巡って睨み合う二人だったが、やがて彼女は視線をそらすと自ら妥協の意を示した。らしくないな、と思いつつも彼はウルガ達と共に打ち合わせを続ける。

明日の勝利を願って乾杯した麦酒の味が妙に苦く感じられたザックスは、小さな胸騒ぎを覚えていた。

それは激しい戦いだった。否、激烈な戦いだったというべきであろう。

上級冒険者が自身の命を危険にさらして全力で戦う。それはこれまで経験してきたどんな戦いよりも凄まじかった。

圧倒的な《剣》の魔将の力。

それに対抗したウルガは自身の身体を竜戦士化する。対して魔将も又、己の身体を異形化し、二体の異形の戦士の戦いは大地を震わせた。

一時は優勢かと思われた冒険者側だったが、やがて、その戦況にほころびが生まれる。魔将の地力は彼らの予想を圧倒していた。

鋭い刃で強靱な胸板を貫かれたウルガ。目論見を見抜かれ負傷したダントン。圧倒的な魔将の力に対して決定打を持ちえないエルメラとライアット。

4人の冒険者達はいつしか窮地に陥っていた。

離れた場所からその様子を窺っていた彼は、堪らずそこに飛び込み彼らに加勢する。だが、実力不足の彼は圧倒的な魔将の力の前に不様に地に這いつくばった。

鋭い刃が彼の頭上から襲いかかる。瞬間、彼の時間が止まった。

「だらしがない。貴様、一体いつまでそうして寝てるつもりだ？」

知らないはずだが知っている声が脳裏に響く。その声に周囲の風景が揺らいだ。

「せっかく力を貸してやったというのに、あの戦いをなかつた事にするつもりか？」

その言葉に彼の心が大きく動揺する。

「どんなに望んだところで過ぎ去った時は帰ってこない。何度繰り返そうが所詮、夢は夢でしかない。」

いかに強さを誇るうとも、自身の時を止めてしまった者が、前に進み続けようとする者に敵うはずがなかるう？」

そう、彼はこの戦いの結末を知っている。そして逃れようのない悲劇とその代償として自身が得たものを……。

「さつさとケリをつける！　いつまでも下らん世界で遊ぶでないわ尻を蹴飛ばすかの勢いで掛けられた言葉に、彼の意識が無理やり覚醒していく。」

フェードアウトしていく闇の中で窒息するかのような激しい苦しみにもがいたザックスは、ようやく真実の目覚めに至った。

全身が落下していく感覚と共に目を覚ます。

そこは自身がよく知るガンツ^{II}ハミツシユの酒場兼宿屋の一室だった。大量の寝汗に不快感を覚えた彼は、備え付けの水差しに直接口をつけて、中の水を飲み干した。

周囲は暗く静かだった。

窓からは満ちきつた蒼月の姿が煌々と浮かび上がる。

「アイツ、やりやがったな……」

天空に浮かび上がる満月の姿を目にしながら、ザックスは自身の置かれた事態をようやく把握した。

出発前の店内での食事の際にアルティナに勧められたグラスを飲

み干した後で、彼は強烈な睡魔に襲われた。おそらく眠り薬が混ぜられていたのだろう。

それまでのぎくしゃくとした空気を何とか修復しようとした彼女の申し出を受けたつもりだったが、どうやらそれが裏目に出たらしい。否、それこそが最も正しい選択であったのかもしれない。

暗がりの中、ランプに火をともして室内を見回した。

自身がよく知るはずの部屋。だが、細部は大きく異なっている。その事実にはザックスはため息をつく。

一体自分はどれほど無為な時を過ごしてきたのだろうか？

慌てて起き上がり装備を身につけると彼は自室の扉を開けた。いつもならば大抵誰かとすれ違はずの廊下には人の気配がない。

いや、廊下だけでなく宿全体から人の気配を全く感じられなかった。

ゆつくりと歩を進めたザックスは、そのまま酒場の通用口へと向かった。深呼吸をひとつすると思い切つてその扉を開ける。そこには彼の予想通りの光景が広がっていた。

店内は全くの無人だった。

明かりだけが煌々とともったその場所に、人のいた気配は微塵もない。自身がよく見知ったその場所はとうに姿を変え、すでに存在しないはずであるにも関わらず、以前と同じ姿のまま彼の眼前にある。試しに2階席にまで上がってみたがやはり同じだった。

そのまま店内の各所を見回ったザックスはもう一度だけ、二階の一番席を振り返ると、そのまま通りへの扉を開けた。

《ガルガンディオ通り》　そう名付けられたその場所もやはり無人だった。

否、通りだけではない。

街そのものがゴーストタウンと化していた。いかに夜も更けているとはいえ、《ペネロペイヤ》中で最もにぎやかな場所の一つであるこの場所が無人となる事などあり得ない。僅かに首をひねったげ

ツクスだった。直ぐにとある事に思い至り、彼は全力で通りを駆けだした。

目指すは《旅立ちの広場》だった。

特殊スキル《駿足》を発動させ、彼は暗い夜道をひた走る。家々に時折、明かりのついた様子が見いだせるものの、人の気配は相変わらず全くない。夜空には不気味に蒼月が輝きを放っている。

「静かだな」

小さな呟きが漏れる。

よく知るはずの場所、だが、決して知らぬ場所。周囲の風景はあの夏の日のままだった。

はるか北地区の小高い丘の上に立つ神殿が、明々と光を保つ。あの場所に彼女達はいるのだろうか。

夜道を全力で走りぬけながらツクスはふと考えた。

長い幻を見ていたような気がする。あるいは心地良い夢というべきか。

だが、どんな夢にもいつかは終わりが訪れる。だからこそ彼は目覚めたのだろう。そして真実と向き合わねばならない。それが彼のこの世界での役割だった。

走り続けたツクスは目的地である《旅立ちの広場》へと到着した。やはりその場所も人影はなく、広場の端々には閉じられた出店が軒を連ねていた。

そんないつもと変わらぬ夜の風景の中にただ一か所だけ、《旅立ちの広場》にいくつかある《転移の扉》の一つがぼうつと蒼い輝きを放っている。まるでここがゴールだといわんばかりの輝きを放つ《転移の扉》に、ツクスはおそろおそろ近づいてその様子を窺った。

これを潜ると後戻りはできないな　彼はそう直感した。

一度だけ後ろを振り返る。

息を潜めるかのようにして立ち並ぶ幾つもの建物の姿が彼の視界に映った。遙か北区にある小高い丘の上にある神殿は、相変わらず明々と光を保っている。

振り返れば、懐かしい人々とここで過ごした時間はとても楽しいものだった。誰もが幸せに笑える満ち足りた世界。このままこの場所に留まる事を望んではいけないのだろうか？

だが、思い出を手繰ったザックスは首を振った。

(後悔はしないな？)

己に問うたその回答は『是』であった。

幾つもの思い出と決別し、前を向いた彼は《転移の扉》に足を踏み出した。ザックスを飲み込んだその扉が強く光ると同時に、周囲全ての光景が闇の中へと消え去っていった。

《転移の扉》を潜ったザックスが現れたその場所は、彼にとって苦しい思い出の残る場所だった。

あれから意図的に避け続け、一度も訪れようとしなかったその場所に立った彼は、周囲の様子を窺った。

天には真円を描いた蒼月が煌々と輝き、はるか離れた海岸に打ち寄せる波の音が優しく響いてくる。その場所は記憶の中のあの日と変わらぬ、否、あの日そのものだった。と、ダンジョンの入口付近に漠然と立っている見知った者の後ろ姿を見つけた。

黄金色に輝く髪、妖精族特有の長くとがった耳。自身の相棒としてこの世界で共に時を過ごしたアルティナの姿がそこにあった。ゆっくりと彼女に近づいていくザックスに対して、彼女は振り向こう

としなかった。気配に敏感な彼女が気付かぬ訳がない。

「アルティナ」

彼女のすぐ後ろに立った彼は静かにその名を呼んだ。ザックスの
声に彼女の肩がピクリと揺れた。

「アルティナ」

再び声をかける。

その言葉にようやく彼女は振り向いた。泣いていたのだろう。その目は真っ赤に充血していた。両手を固く握りしめ、まるでその中にあるものを固く守っているように見える。

「探したぜ」

「来ないで！」

言葉と共に踏み出そうとした彼をアルティナが拒絶した。その言葉にザックスは立ち止まった。

「これは渡さない！ 貴方をあそこへは行かせない！」

彼女の手の中にあるのはおそらく《跳躍の指輪》なのだろう。あの日のザックスと同じくウルガ達を導き、そのまま、ダンジョンを離脱して、この場所で朝日が昇るのを待っていたのだろうか？

固い決意と共に自身を睨みつける彼女に、ザックスは静かに声をかけた。

「もういいんだ。全ては終わったんだ」

その言葉に彼女は泣きはらした目を見開いた。ザックスは続けた。「ここで待っていてもきつと彼らは帰ってこない。そして全ては幻影でしかないんだ」

「分からないわ、今度こそ、何かが変わるかもしれない！」

「変わらないんだよ、何も。ここにオレが要る限り、ウルガ達に勝つ要素はないんだ」

その言葉にアルティナはうつむいた。やがて彼女は言葉を小さく絞り出してゆく。

「ずっと……一人だった」

何度も何度も同じ事を繰り返して、私はその度に絶望したわ。ダ

ンジョンの中をたつた一人で歩き続けて、力を磨いて皆の力に少しでもなれるように努力を重ねた。でも、駄目だった。一度としてみんなが帰ってくる事なんてなかった。

あの日から……何度やつてもあの悲劇は変わらない。初めてダンジョンで仲間を失ってからずっと、私は無力なままだった」

「アルティナ……」

「初めてだったのよ。初めて私は一人じゃなかった、貴方に出会ってやっと共に闘う仲間を見つけたのだと、あの理不尽に答えを出すために共に闘う仲間を見つけたのよ」

「お前、気付いていたのか？ 一体、いつから？」

その言葉に彼女は首を縦に振った。

「あなたが《杯》の魔将に出会った事を私に教えてくれた時からよ。その時になって私はようやく全てを思い出した。自分がこれまで重ね続けた長い道のりも……」

「お前……」

「でもね、私はもう一人じゃない。貴方という仲間がいる。ここから私は新しい一歩を踏み出せるかもしれない。この暖かな場所で、貴方という協力者を得て私はようやく違う可能性を見出せる。

ねえ、ザックス、ここにずっと一緒にいよう。今までのように。

きつと私達はいいパーティになれるわ……」

言葉と同時に彼女の目から涙があふれた。たった一人で世界を彷徨い、ずっと苦しかったのだらう。だが、ザックスは彼女の言葉に同意する訳にはいかなかった。黙って首を横に振る。

「どうしてよ！」

泣きながらアルティナは叫んだ。

もう傷つきたくないのだ、彼女の叫びにはそんな思いが込められていた。

そんな彼女にザックスは静かに答えた。

「アルティナ、俺はウルガが死んでいった事を否定はしない。

たしかにウルガは命を失った。だが、自身に満足をして、その道

を選んだんだ！

幸せってのは不幸があるからこそ感じられるもの。

不幸がなければ幸せもまた感じられないんだ。失うものがあるからこそ手に入れられるものがある。それが人の世の理だ！

ここは幸せに満ちた世界、いや幸せという言葉に惑わされた欺瞞に満ちた世界、そう、ここは夢の世界。俺達はお前の夢の中にいるんだ。

ここから出よう、アルティナ！ そして、現実の世界で何をすべきか考えよう！ 共に闘う仲間として俺達に課せられた運命と向き合うために……」

彼女に左手を差し出した。

「イヤよ！」

差し出されたその手を彼女は叫びと共に振り払った。その瞬間、二人の間に何かが弾けるような輝きが生まれ、世界の全てが崩壊を始める。

そして、全てが闇の中に沈んでいった。

すぐ目の前にいた筈のアルティナの姿が、そこにはない。

ただ無が支配するだけのその真っ暗な闇の中に、ザックスはぼつりとして一人取り残された。

不意に彼の左手が強く輝き始める。左手に絡みつくように輝く幾筋もの銀色の髪。その持ち主である兎族の少女、イリアの存在を不意にザックスは思い出した。暖かな夢の世界で度々、彼に警告を発してきたのは彼女だった。

彼女はずつと彼を守っていたのだらうに、どうして忘れてしまっ

ていたのだろうか？

悔恨がザックスの心に残る。

だが、そんな彼をやさしく癒すかのように、銀色の輝きは闇の中を照らした。

『一人ではありません』

そんな思いが彼の心に満ちてくる。同時に今、この闇のどこかで一人にいるアルティナの事を思った。また泣いているのだろうか？今度こそ彼女を連れて戻らねばならない。それが多くの人たちに期待された彼の役割だった。

だが、どうやって？

これといった手段を思いつけず、途方に暮れかけたその時だった。「やれやれ、ようやくお目覚めのようですね……」

不意に虚空から彼に向って声が投げかけられる。聞き覚えのあるその声の主を闇の中に見つけると同時に、ザックスは腰の《ミスリルセイバー》を引き抜いた。

「相変わらず物騒な挨拶ですね、ザックスさん」

「そうさせたのはあんだらう？ 《杯》の魔将、ヒュディウス！」「覚えて頂いてくださって光栄です。ただ願わくば、その物騒な物を収めて頂ければ嬉しいのですが……」

いまの私がそれで傷つけられることはありませんが、さすがに剣を突き付けられて話し合うというのは、気分的にどうも……ね」

「話し合う……だと？」

「ええ、そうですよ。この状況を解決するために、一時休戦としましょうか？」

彼の真意が分からない。黙ってただ睨みつけるザックスにヒュディウスは続けた。

「大丈夫ですよ、ザックスさん。あなたが私を傷つけられないように、私も又、貴方を傷つけることはできません。」

何よりもその厄介な護符が邪魔をしていますからね。ずいぶんと強い想いの塊で今の貴方は守られているようだ。

だからこそ、この闇しかない場所で貴方は平然としていられるのですよ」

言葉を重ねる魔將の目を睨みつける。そんなザックスの視線を魔將は平然と見つめ返した。

互いの視線が交錯する。

やがて、ザックスは深く息を吐き出すと《ミスリルセイバー》を鞘に戻した。その行為にヒュディウスは笑みを浮かべた。

「勘違いするな！ あんたに気を許した訳じゃねえ」

「当然でしょう。私達はいくまでも究極の敵同士なのですから……」
不敵な笑みを浮かべる魔人に、ザックスは続けた。

「で、いったいあんたはオレに何を教えてくれよう、っていうんだ」
「そうですね、私ができる事など、貴方を眠り姫の下へと導く事くらいですよ」

いともたやすく、彼はザックスの最も望む事を彼の眼前に並べた。そんなヒュディウスが一度だけ腕を振ると、はるか遠くに一筋の輝きが生まれた。

「では、参りましょう。誰もが望み、納得する、最後のステージへ……」

先導するヒュディウスの後にザックスは続く。自身に無防備に背中をさらすヒュディウスにザックスは尋ねた。

「ここは一体どこなんだ？」

「ここですか？ そうですね、あえて言うならば《狭間の世界》というところでしょうか」

返事を期待していなかっただけに、その内容に興味が湧いた。

「《狭間の世界》？」

「貴方達が暮らす《現世》^{うつしよ}、そして私達魔將が存在する《揺らぎの

世界》。その間にいくつが存在するのが《狭間の世界》といわれるこの場所です。

時に何者かの夢であったり、力ある者が世界の理を捻じ曲げて強引に生み出したり、あるいは強力な力のぶつかり合いの末に生まれ、時空の歪みであったり……。その成立の仕方は様々です。

この場所は《現世》^{うつしよ}の理に縛られながらも《揺らぎの世界》^{ゆらぎ}でもある故に、時として《現世》^{うつしよ}の常識では考えられぬ現象も多々起ります。

かつて貴方が仲間と共に《剣》の魔将と戦ったあの場所も、そんな《狭間の世界》の一つなのですよ」

「へえ……」

「ちなみに今、あなたの左手に輝く護符の贈り主は、現世とこの狭間の世界の間立って、貴方の存在とあちらの世界との懸け橋となつていたのでしよう。」

「いやはや、《現世》^{うつしよ}に住まう者の身でとんでもない事をしでかしてくるものです。お帰りの際にはその導きに従えば、貴方達は無事に帰る事が出来るでしょう。」

尤も、それが叶うかどうかは、奇跡としか言えないでしょうが……」

「どつという意味だ？」

だが、その言葉に返答はなかった。かわりに返ってきたのは、彼らが目的地に到着した事を知らせる言葉だった。

「到着しました。ザックスさん。最後のステージは、おそらく誰もにふさわしい場所となるでしょう」

言葉と同時に彼にそれを指し示す。

そこにあつたのは《転移の扉》だった。先ほどザックスが潜り抜けたそれとは比べ物にならぬほどに、強く眩しい輝きを放っている。「礼は言わない。お前には貸しだらけなんだから！ いつか必ずその命で払ってもらおう！」

「ええ、私もあなたと慣れ合う気など、さらさらありません」

言葉と同時にザックスは、《転移の扉》に足を踏み入れようとする。

「ああ、そうそう、言い忘れておりました」

その背にヒュディウスが声を掛けた。

「覚えておいてください。いかなる世界にも絶対というものは存在しません。」

そして一度時を止めた者は、前を進み続けようとする意思をもつ者に決して敵わぬものなのだ、という事を「

まるで、謎かけのようなその言葉をザックスは己の背で受け止めた。そのまま無言で彼の身体は《転移の扉》の輝きの中へと消えて行く。

「はてさて、彼は再び奇跡を起こすのでしょうか。あるいは……」

陰気な顔に似合わぬ笑みを浮かべて、ザックスの背を見送ったヒュディウスは、その姿を闇の中へと消していった。

2011/09/23 初稿

25 ザックス、決着する！

光り輝く転移の扉の先にあつたのは、忘れようのないあの場所だった。忌まわしき思い出の詰まつたそこは、初めて訪れた《初心者向けダンジョン》だった。

「おい、ザックス！」

不意に名を呼ばれて振り返つた先に、彼は懐かしい姿を見出した。同期生の間でどこか浮きがちだった彼をパーティに引き入れてくれた、そのリーダーの男の顔と名前をザックスは今、はっきりと思ひ出した。

「じゃあ、先頭は任せませ、あんまり張り切り過ぎて迷子になるんじゃないぞ」

リーダーの言葉に仲間達が爆笑する。

気のいい奴らばかりだったような気がする。皆、それぞれに事情を抱えて冒険者になろうとした者ばかりだった。

底辺の生活から逃れ一攫千金を夢見る者。

騙され親の借金を肩代わりした者。

ただ強さを求めた者。

神官として正義を貫くべくそのキャリアを求めた者。

誰もが様々な夢や目的を持っていた。

それが僅かな時間で根こそぎ奪われ、消えて行った。

きつとシヨックだったのだ。心を通わせかけた仲間達が無慈悲に焼き尽くされてゆく姿を目の当たりにして、どうしようもない無力感の中で、自ら記憶を封じてしまったのだろう。

暖かな思い出がなければ、どんな辛い現実とも向き合える、なぜ

なら彼の中にはそれしかないのだから……。

そんな道を自分から選んだに違いない。

彼らの先頭を歩きながら、時折後ろを振り返る。だが、その中にアルティナの姿はなかった。彼女はどこへ行ってしまったのか？

「いや、違うな」

ザックスはぽつりと呟いた。

ここは『誰もが望み納得する最後のステージ』であると《杯》の魔将は言った。

ならば、彼女がいる場所はおそらく只一つ。

その場所を目掛けてひたすらに歩を進める。

僅か6階層しかないそのダンジョンの踏破など今のザックスには訳もなかった。そして、いつしか彼と共に歩いていたはずの仲間達は一人また一人と姿を消していった。

まるで自身の記憶の底で再び眠りにつくかのように。

その姿が一つまた一つと、思い出になって消えて行く度に、ザックスの目から涙がこぼれ落ちていった。

今の自分達の命は彼らの犠牲の上に成り立っているのだ。だからこそ、生き残ったアルティナと共に元の世界に返らねば彼らに申し訳がたたない。

2層から3層へ。

3層から4層へ。

4層から5層へ。

そして彼の前に最終階層への扉が立ちふさがった。

現実には決して見る事のなかった扉。

そして全てが始まった場所。

重々しく立ちふさがるその扉を押し開いたザックスは、通路を通

つて大広間へと抜けだした。だが、そこは見慣れた大広間とは全く異なる異空間だった。

ただ無限に広がる広大な空間。その中心にあったのは巨大な《盾》だった。

これも又《狭間の世界》と呼ぶべきものなのだろうか？

すらりと腰から《ミスリルセイバー》を抜き放つ。そして一歩一歩、空間の中心に座する巨大な盾に向かって歩を進める。

今、アルティナを取り戻すべく、ザックスの最後の戦いが始まるうとしていた。

「アルティナ！」

巨大な《盾》の向こうに僅かに感じられる彼女の気配を頼りにザックスは彼女に声を掛けた。だが、返答はなかった。

代わりに厳かな声がザックスに掛けられる。

「ここは、我が領域。侵入者よ、いかなる理由でこの場所に訪れたか」

それは眼前の《盾》自身から発せられた言葉だった。

慌てて飛び下がりがりザックスは身構える。

「あんた何者だ？」

ボスモンスターというには風格がありすぎる。だが、攻撃の意思を微塵も感じられぬその姿に戸惑いを覚えた。例えて言うなら、巨大な山と向き合っているようなものだろう。

「我はただ守護する者」

声は凜然と周囲に響く。

「彼の者をあらゆる災厄と外敵から守る為に我は唯、彼の者を守護するなり。そして、それは彼の者の望みでもある」

アルティナの意味と共に《盾》はザックスの前に立ちはだかつて

いるという事らしい。

「立ち去れ、侵入者よ！ 我は永久とわに彼の者を守護するだけなり」
「聞こえねえよ！ そんな事は！」

腰の《ミスリルセイバー》をすらりと抜き放つと彼は構えた。

「オレは彼女を連れ帰ると約束した。彼女が帰還する事を多くの者が望んでいる。そして、彼女はオレ達の住む世界に戻って、生きる義務があるんだ！ それを邪魔する奴は、例え創世神であっても容赦しねえ！ 押し通つてでも、引きずり出すぞ！」

「愚かな……。守護する事こそ、我が存在そのものなり。」

只その一点に執着した我にいかなるものも敵うはずはない。まして人の身で我に挑むなど笑止千万！」

「やってみなくちゃ分かんないって言葉は好きじゃないが、どうやら今はそれしかないらしい。ご託はここまでだ！」

ぶつ壊されて吠え面掻くなよ！」

言葉と同時に攻撃補助呪文を発動させる。《駿足》《全身強化》《倍力》によつて自身を強化したザックスは《ミスリルセイバー》を手に、眼前に立ちただかる《盾》に挑みかかる。

だが、ザックスの初撃はあっさりと弾かれ、その身体は遙か後方に撥ね飛ばされた。

「ちっ……」

のろのろと起き上がる。手始めの一撃だったが、眼前の巨大な盾の壁には傷一つついてはいない。

「仕方ねえな」

《ミスリルセイバー》を鞘に納めると腰だめに構える。体内のマナを左足に集中させるイメージを思い浮かべた。

「これならどうだ！」

特殊スキル《抜刀閃》が発動する。激しい踏み込みと共に一瞬の内に正面に移動したザックスは、刀身を鞘の中で走らせながら引き抜き、その刃を盾の壁に叩きつける。

だが、乾いた音と共にザックスの手から弾きとんだ《ミスリルセ

イバー』は宙を舞い、ザックスの身体と共に遙か後方に吹き飛ばされた。

「もう一発！」

よろよろと立ちあがり、再び《抜刀閃》で襲いかかったザックスだったが、信じがたい光景を眼にすることとなった。強靱な《ミスリルセイバー》の刃が音を立てて碎け散り、その小破片がザックスの身体を傷つけた。

「嘘だろ、おい」

柄だけになってしまった剣を片手に、傷だらけになりながら呆然と立ち尽くす。過去あらゆる場面で自身を支えてきたその剣が、いともたやすく碎け散ったのである。ショックを受けないはずはない。「どうするよ」

折れた剣を鞘に戻し、ザックスは考える。

手持ちの武器としては《爆片弾》や《爆裂弾》があるが、数個まとめて放り投げたところで、とてもではないがこの盾の壁を破壊出来そうにはない。じんじんとしびれる傷口から血を滴らせながら、ザックスは手詰まりになりそうなこの状況の打破に智恵を絞る。

と、彼の左手が熱く熱を放ち始め、やがて、それが全身に広がって行く。全身に達すると同時に負傷したザックスの傷が次々に癒え、体中から力が湧きだしてくる。

（この感覚、前にも覚えがある）

それはマリナに掛けられたことのある《巫女に加護》だった。はるか離れた場所でイリアも又、ザックスと共に戦っているのだろうか？

「だったら、へばってられねえな！」

だが、肝心の手持ちの剣がない。

もつと強く、強靱な剣が欲しい。

その強烈な想いが奇跡となって形になった。

徐々に輝きを放ってそれはザックスの手の中で具現化する。《大
剣》^{トリーテ} かつてウルガが持っていたそれと全く同じものがザックス
の手の中に現れた。

信じがたい光景に言葉を失ったザックスは、己の手に握られた思
い出深いひと振りの剣を手にして立ち尽くす。ふと《杯》の魔将の
言葉を思い出す。

『この場所は《現世》^{つっしよ}の理に縛られながらも《揺らぎの世界》でも
ある故に、時として《現世》^{つっしよ}の常識では考えられぬ現象も多々起
ります。』

これはそんな現象の一つなのだろうか？

「まあ、いいさ、せっかくだから借りるぜ、ウルガ！」

《大剣》を上段に構えると再び体内のmanaをコントロールする。全
力の踏み込みから飛び込むと同時に上段からの《一刀両断》。自身
の中にその明確な技のイメージを思い浮かべる。

イメージが浮かび上がると同時に、再びザックスは盾の壁に向か
って飛び込んだ。

体内の微細なmanaのコントロールに気を配り、踏み込んだ左足か
ら両腕の筋肉へ。

manaの瞬間的な局所集中によって生み出される強烈な力が十分に
乗った《大剣》の一撃が、再び盾の壁に襲いかかった。

だが、無情にもその一撃が盾の壁を破壊する事はなかった。逆に
再び砕け散ったのは《大剣》の方だった。粉々に砕け散った大剣の
破片で傷ついたザックスの身体は、再び弾き飛ばされる。

「それでも、駄目なのかよ！」

衝突の衝撃をまともに跳ね返されて全身にうけたダメージが、再
びリアの護符の力によって治癒されてゆく。ようやく起き上がれ
るようになったザックスは、眼前の盾の壁を目にして、傷一つつ
いていないその姿にあきれ果てた。

（もって強い武器はなかったかよ）

記憶の底からこれまでに見た様々な武器の姿を思い浮かべる。

《劍》、《斧》、《槌》、《槍》。

しかし、そのどれもが眼前の盾の壁を突破出来そうにはない。と、不意にザックスは一本の剣の姿を思い出した。

(あれならば、もしかして……)

すぐさまその姿をイメージする。手のひらにマナを集め、先ほどと同じく具現化を念じる。

彼の試みはどうにか成功し、彼の手の中に再び一本の剣が現れた。

《大太刀》　かつて《劍》の魔将エイルスによって使用され、ウルガと互角以上の戦いを演じたその剣が、彼の手に握られた。

「もう一度だ！」

《大太刀》を鞘ごと腰だめに構え、再び《抜刀閃》の構えを取る。手の中に握った《大太刀》から漂う圧倒的な攻撃力がザックスの中の何かを刺激する。これならいけるはずだ　そんな期待がザックスの中で膨れ上がって行く。

「行けえ！」

気迫と共に強烈な踏み込みで前に飛び出したザックスは、鞘の中で刃を走らせながら、引き抜くと同時に切りつける。《大太刀》の一閃は閃光となって盾の壁に襲いかかった。

金属同士がぶつかり合う甲高い音が周囲に響き、さらに一方が碎け散る音が続いた。

再びザックスの身体が弾き飛ばされる。

碎け散ったのは《大太刀》の方だった。傷だらけになった身体は衝突の衝撃をまともに受け、全身を凄まじい痛みが暴れまわる。すぐさま護符の治癒が発動したものの、心身に受けたショックとダメージは並々ならぬ物がある。

「もう、止めて！」

突撃の度にボロボロになって転げまわるザックスの姿を見かねたのだろうか。アルティナの声が盾の壁の向こうから響いた。

「どうして、そこまでするのよ！」

「決まってるだろ、お前を連れ帰るためだ！」

「私はここにいらねえよ、それでいい！」

「そういう訳には、行かねえんだよ」

「どうしてよ……」

泣きながら尋ねるアルティナに、その回答を探すべくザックスは己に問うた。

彼女を待っている人たちがいるから？

連れ戻すと約束したから？

このままでは夢の中の住人となった彼女が死んでしまうから？

どれもが正しいようだが、そのどれもが違うように思える。少なくともアルティナを納得させるだけの言葉とは思えない。

自分はなぜ、ここまでして彼女を取り戻そうとするのだろうか？ 暫くしてふと、ある事に思い当たった。そのあまりにも単純な答えに、ザックスは思わず笑みを浮かべた。

なんだ、そうだったのか。そんな当たり前のことだったのだ。

緊迫した状況に不似合いな笑い声を上げるザックスに、盾の向こう側でアルティナが訝しむ。そんな彼女に向かってザックスは大声で怒鳴りつけた。

「いいか、アルティナ。一度しか、言わねえぞ。お前はオレの仲間であり、パーティのメンバーなんだ！」

仲間である以上、目的は同じ！ 俺達は《現世》^{うつしよ} ってここに一緒に戻って、今度こそオレ達をこんな目に合わせた《杯》のヤロウを探し出し、ぶちのめさなきゃならないんだ。その為にはお前の力が必要だ。そして俺達の本当の絆はここから始まるんだ！

だから……、何が何でも……、引きずってでも、お前を連れて行

くぞ！

いいな！」

実にエゴイスティツクな言葉だった。

『オレの為にお前の力を貸せ』

そうとしか取れない言葉をザツクスは堂々とアルティナに向けた。行きつく先は修羅の道。だが、それでもその場所を駆け抜けてやる

そんなザツクスの言葉にアルティナは沈黙した。

「言いたい事を言ったら、すっきりしちまったな」

ぼつりと呟くと再び、盾の壁の前に立ちはだかる。

腰のミスリルセイバーの柄を握るや否やすらりと抜き放つ。剣の

刃は折れたままである。

「もう一度だ！」

きつとこれが最後になるだろう。これ以上はおそらくザツクスの心が持ちそうにない。彼を支えるイリアの守護にも限界は来つつあるはずだ。だから最高の一撃を叩きつけるしかなかった。

もつと速い一撃を。

もつと強い一撃を。

もつと重厚な一撃を。

再び脳裏にイメージを思い浮かべる。

《ミスリルセイバー》よりも速く、《大剣》グレートソードよりも強靱で、《大太

刀》よりも重厚なひと振りの剣を脳裏に思い描く。イメージが描きあがると同時にザツクスは折れたミスリルセイバーの柄にマナを込め、最後の気力を振り絞って具現化を試みる。

柄元から徐々に光が生まれ、伸びて行く。そして再び一本の剣が彼の手に現れた。

《ミスリルセイバー》に似てはいるが決して同じものではない。僅かに長く重くなった重ねの厚い刃からは圧倒的な攻撃力が感じられる。この剣はもはや今までの鞘に収まる事はない。故にザツクスの

最強の技である《抜刀閃》は使えなかった。

「まあ、いいさ、小細工はなしだ」

ここからは魂と魂の戦いである。無駄な小細工は気休めにもならないだろう。

「聞こえるか。アルティナ。これが最後だ、オレはこの一撃にオレの命を掛ける！」

「……………」

「だから、アルティナ！ お前の最後の答えを聞かせてくれ。お前は永遠にこの場所に一人でいたいのか。それともオレと共に《現世》で足掻くのか。そのどちらを望むのか答えてくれ！」

言葉と同時に剣を中段に構える。体当たりの要領で身体ごと突っ込んで、まっすぐに中段突きを叩きこむ。文字通り玉砕覚悟の一撃だった。

彼女からの返事は帰って来ない。

まあ、それでもいいさ、無理矢理にでもこの壁をこじ開けて引きずり出すまでだ。そう考えたザックスは深く息を飲み込んだ。

左手の銀髪が激しく輝く。イリアにもザックスの覚悟が伝わったのだろうか？

剣の柄を両手で軽く握ったザックスは、正面にそびえたつ盾の壁をにらみつける。

『真ん中のごさる。相手の重さの真ん中を掴むのでござる！』

不意に、湖畔での特訓の際のイーブイの言葉が思い浮かんだ。

ああ、そうだった。自身が生み出す全霊の一撃を全て叩きつけるための最も効果的な場所。その場所に見当をつけ狙いを定めた。

やるべき事は全て終えた。後は飛び込むのみである。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。続いて攻撃補助呪文を掛け直す。《駿足》《全身強化》の順に、最後に《倍力》を発動させる。と、いつもよりも強力な力が両腕に感じられた。

「行くぞ！」

僅かに眼を閉じた後でザックスは大きく声を上げて、激しく踏み込んだ。

「アルティナー」

中段突きを放ったザックスの身体が一筋の閃光と化す。

そして、放たれた閃光の矢は凄まじい音を立てて眼前の盾の壁に激突した……。

盾の壁の向こうで自身の身体を傷つけながら、己を引きずり出すとするザックスの姿にアルティナーの心は揺れていた。

これ以上はないというくらいエゴイステイックな理由で自分を必要としていると堂々と宣言した彼の言葉は、どこか気持ちよかった。このまま時の止まった世界でただ守られるだけの存在であってよいのか？ そんな疑問が彼女の心を激しく揺さぶった。

（私はどうしたい？）

そんな疑問が脳裏をぐるぐると駆けまわる。だが、彼女に与えられた時間はすでになかった。

当のザックスは命を掛けて最後の一撃を放とうとしていた。

私はどうしたい？ 私は……、私は……

壁の向こうで激しく命が輝いた。その輝きに突き動かされるかのように彼女の胸の中に一つの想いが溢れていく。その想いは素直に言葉となって彼女の口をついた。

「私はここから……出たい！ そして、貴方とともに歩みたい！」

瞬間、彼女の叫びが輝く光となった。盾の壁の両面に生まれた光

が結びつき、巨大な盾の壁を完全に貫いた。貫通痕を中心にして巨大な壁が音を立てて崩れてゆく。

崩れ落ちる破片の中に、ザックスは輝きに包まれたアルティナの姿を見いだした。

「アルティナ」

再び彼女の名を呼んで、ザックスはその左手を差し出した。彼女はその手を今度は迷わずしっかりと握りしめる。結ばれた二人の手にイリアの銀系か絡みつき、炎を上げて勢いよく燃え上がった。

銀系に残った最後のマナが二人を包み、《現世^{うつしよ}》への道を切り開く。盾の壁と共に崩れてゆく《狭間の世界》の中で、輝きに包まれた二人の姿は、導き手である巫女の力に導かれるままにやがて消えていった。

そして、全てが消え去った闇の中、只、静寂だけがそこに残った……。

2011/09/24 初稿

26 エピローグ 仲間の絆

上階層から流れ落ちる滝の中に生まれた光は、ただ静かに輝き続けていた。

3人の姿が消えてから、そろそろ半日近くが経過する。直に夜明けを迎える事になるであろうその場所で、彼らの帰還を待ち望む者たちはただひたすらに忍耐の時を重ねていた。

時折強く輝いたかと思えば、直ぐに消えそうになる。まるで人の命の強さと儚さを示しているかのようなその輝きを見守りながら、マリナを始めとした神殿巫女たちは、今にも消えそうな妹分のマナの輝きに、やきもきしながら己の無力さを嘆いていた。

いったいいつになったら決着がつくのか、傍観者達の一部にそのような空気が流れ始めた頃、滝の中の光が一際激しく強く輝いた。次いで爆発するように膨れ上がり、やがてマナの光はそのままあっさりとお消え去ってしまった。

不意に滝の裏側に何者かの気配が感じられる。
神殿巫女達は慌てて、そちらへと駆け寄った。

現れたのは3つの影。

洗礼衣姿のザックスとアルティナ、そしてイリアの姿だった。彼らの無事な姿に誰もが胸をなでおろした。

眠っていたはずのアルティナは、泉の中でザックスに肩を借りながらも己の足で立っていた。ただ、彼女は滝の水に全身をぬらしたまま、激しく嗚咽していた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

その言葉を繰り返しながら、泣き続ける。そんな彼女にザックスは静かに声を掛けた。

「全ては夢の中の出来事だ。オレ達は無事に皆でこうして帰る事が出来たんだ。もう全て終わったんだよ。いや、違うな。ようやく始まりの時を迎えるんだ」

そう告げると彼女を泉の淵に座らせる。すぐさま神殿巫女の一人が彼女の身体にガウンを掛けた。

「無事に戻られたようですね」

マリナがザックスに声をかける。

「ああ、おかげさんでな」

そう言うのと僅かに遅れて彼の後ろに立っていたイリアの方を振り向いた。だが、そこに立っていた彼女の瞳はどこか虚ろだった。

「イリア？」

歩み寄って声を掛けたザックスに彼女は返事をしなかった。代わりに崩れるように彼の腕の中に倒れ込む。

「イリア！」

その華奢な姿態を慌てて抱き上げる。体温の下がったその身体は氷のように冷たかった。

「ごめん……なさい……。とても……疲れました」

ザックスの腕の中でようやくそれだけを呟いた彼女は、僅かに安心したような笑みを浮かべてそのまま目を閉じる。

「ザックスさん、イリアをこちらに！」

珍しく厳しいマリナの声に、慌ててイリアの身体を彼女の下へと運んだ。すぐさまマリナを初めとした3人の巫女達が、イリアの体内のマナの流れを整える。

「大丈夫、マナを使い切って酷く疲労していますが、直に回復するはずですよ。命に別条はありませんので、ご安心を……」

巫女達の応急処置によってようやく頬に赤みが戻ってきたイリアの姿に安心したマリナが、そうザックスに告げた。

「そうか、よかった」

安心して気が緩んだのか、ザックスは崩れ落ちるようにその場に座り込んだ。

「大丈夫ですか、あなたもずいぶんと消耗しているようですね」
彼の背中に直に手を触れながら、マリナはザックスの体内のマナを調整する。

「ああ、かなり無茶したんでね、それよりオレ達は一体どれくらいあつちにいたんだ？」

「半日くらいですわ」

「半日？」

おどろいて顔を上げる。

周囲を見回せば協会長を初めとして、エルフの3人や神官長などその顔ぶれに変化はない。

「そうか、たった半日しかたつてなかったのか」

「ええ、とても長い半日でした……」

別室へと連れて行かれるアルティナと青ざめたライアットに抱えあげられて運ばれて行くイリアの姿を見送りながら、感慨深げに言葉をつき出した。

あの激しい夏の一月月は、たったそれだけの時間の中で繰り返された幻想だった事を実感する。

懐かしい人々と出会い共に過ごした様々な思い出を脳裏に描きながら、ふと自身を心配そうにのぞきこむマリナと目があった。

その微笑みをきっかけに、夢の世界で彼女と共に過ごした夜の出来事の一部始終が思い出されると同時に、ザックスは一気に赤面した。

「ザックスさん？」

訝しそくに彼の顔を覗き込むマリナの姿に堪らず、ザックスは目をそらす。

「どうされたのですか？」

「い、いや、いいんだ、べ、別に、大したことじゃない」

うつろたえながら明後日の方向を向く。

あちらの世界で共に過ごした夜の事、そして彼女の去り際の『次は逃しません！』という言葉が鮮やかに思い浮かぶ。

(じよ、冗談じゃない、あんな事バレたら何言われるか分かったものじゃ……)

だが、敵は強者つわものだった。悪戯っぽく笑ったマリナがザックスに力マをかける。

「どうやらあちらの世界で私と何かをなさったのでしょうか」

「待て、オレは別に何もしちやいない、そりゃ、色々とおったけど……」

あっさり自爆してしまったザックスに、マリナは勝者の微笑みを向ける。

「ふふっ、ザックスさんどうやらその話は、おいおい聞かせて頂く事にしましょうね……」

立ちあがると彼女は笑みを浮かべて歩き去る。後にはその場に手をつけてどっぷりと落ち込んだザックスが一人とり残された。

「未熟じゃのう」

そんな彼の姿を見た老人がぼつりとそう呟いたかどうかは……定かではない。

全ての構成要素が消え去って『静寂』へと帰ったその場所に、《杯》の魔将ヒュディウスの姿が現れた。

先ほどまでの激しい激突が嘘のように静まり返ったその空間で、彼はその激闘の残滓ともいえるひと振りの剣を拾い上げた。刀身に奇妙な輝きを秘めたその無銘の剣を彼は己の内へとしまいこむ。

多くの矛盾を含みつつ構成された様々な要素は、魔将の絶対的な力の前には何の意味もなさなかった。その事実を受け止められずに拒絶し続ける創造者の意思によって、この虚構の世界は、無限のループを繰り返しながら劣化し続けていた。

創造者の絶望と共に世界の終焉が近づく中、訪れた闖入者は彼の思惑通りに全てをひっくり返して、鮮やかに去って行った。奇跡的な確率の中でそれを実現したその行為は見事というしかないであろう。

「やってくれたわね、《杯》の……」

不意に彼の背後の虚空から声が投げかけられる。その言葉に振り返る事もなくただ一度だけ彼は大きく手を振った。

と、広がっていた『静寂』の空間が、彼を中心に揺らぎ始め、青白い光に包まれた《揺らぎの世界》へと変貌した。途端に彼の眼前に周囲から幾つもの小さな輝きが集まって一つの形をなし、その中心に一人の女の姿が現れた。

すらりとした平凡な外見は、40代前後の人間の女性のように見える。尤も時の概念を失った彼女にとって、その物差しに余り意味はない。

「礼は言わないわ」

《杯》の魔将によって、『静寂』に支配された《狭間の世界》の大枠が取り去られる事で、《現世》^{うつしよ}の頸木から解放され、仮初めの死から甦ったのが彼女、《盾》の魔将だった。

「いえいえ、そんなことよりも、まさか貴女ほどの方が、たかが人間風情に後れをとるなんて、思いもありませんでした」

「どの口でそんな事を言うの、貴方は？　さんざんにあの人間達に肩入れしておきながら」

「別に肩入れなどしてはおりません、ただ、私は世界の混乱を収めるために最も良き手段を取っただけですよ」

表情を変えずに、彼は答える。

「たしかにそうね。でも、貴方が与えた助言はあの人間には何の意味もなかった。己のやり方を貫いて事態を突破していたものね」

僅かに込められた皮肉にも、彼は笑みを浮かべるだけだった。

「まったく、真に恐ろしいのは千を知る智者ではなく一を貫く愚者のようですね。いやはや人間とは侮れぬものです」

「その人間達の世界である《現世》^{うつしよ}に貴方はなぜ執着しているの？
時を忘れ、揺らぎの住人となった私達魔将の目から見れば、それはあまりに愚かなこと。下手をすれば己の存在意義が失われ、消滅してしまいかねぬでしょうに……。愚かな選択としか思えないわ」
「別に私は《現世》に執着しているわけではありませんよ。ただ必要だから関わっている。それだけです」
（それが私達からみれば執着しているという事になるのが、分からないよね）

いかに強大な力を誇る魔将とて、元は人間。まだそのころの何か
が彼の内でくすぶっているのだろうか？

「まあ、いいでしょう。この場所での私の役目は終わりました。そろそろ場を退かせて頂きますよ、《盾》の」

「そう、できれば、もう二度と会いたくないものだわ、《杯》の」
「それはつれないお言葉で……」

そんな言葉と共に彼は姿を消していく。後には一人《盾》の魔将の姿だけが残された。

敗北と仮初めの死　魔将になった身で、まさか人間にそれを味あわされることなど夢にも思っていなかった。

理屈では理解できる。

彼女を構成する概念は《守護》である。狭間の世界で守護を望むものがいたからこそ、たまたま近くにいた彼女は導かれ、その意思の源を《守護》したのである。

意思の源が彼女の役割を拒否してしまえば、その存在意義は薄れ、価値を失うは自明の理。敗北は必至である。

だが、自身の力に守られた意思の源を変質させるまでの力を、人間風情が生み出した事は驚きだった。

否、弱い人間だからこそ、それは可能であったのかもしれない。
理に縛られる世界の存在でありながら、その頸木から自由であり続けようとする彼らの魂が起した奇跡とも呼べるものであるう。

そんな彼らに一体、《杯》は何を望んでいるのだろうか？

彼の言葉を反芻し様々な事柄を類推しながら、彼女は揺れる虚空に身を任せる。

それは、彼女を求める意思に再び出会うまでの、ひと時の休息であった。

アルティナの目覚めから数日が経過し、《ペネロペイヤ》大神殿で暮らす者達はいつもと変わらぬ務めの日々を送っていた。

だが、そんな神殿内のある一室において緊迫した空気の中、そこにいる誰もが洩面を浮かべていた。

渦中の中心にいる人物が、あの神殿巫女のマリナである事が原因だった。

「では、度重なる一冒険者への最上級洗礼を最高神殿に無断で執り行ったのは全て、貴方の独断であるという事ですね」

「はい」

「あなた程の方が一体どうして……」

「それが必要であると、私が判断したからです」

「それが、例え上級神殿巫女であったとしても明らかかな越権行為であると認識した上で、ですか」

「はい」

その日、《ペネロペイヤ》大神殿にやってきた最高神殿からの3人の審問官によって、マリナは審問会の席上で彼女の巫女としての資質と責任を問われていた。

問題となっていたのは、過去に彼女自身が執り行ったと報告された、二度にわたるザックスへの最上級洗礼が、最高神殿に許可なく

彼女の独断で行われたという事であった。

審問会の席には、訪れた3人の審問官のほかに、《ペネロペイヤ》大神殿の神官長、及び、巫女長、さらにライアット達数名の高神官と上級巫女、近隣都市の神官長が一堂に会している。

先日、《ペネロペイヤ》大神殿内でアルティナの目覚めの為に執り行われた儀式については、大神殿の神官長、巫女長が臨時に認可し、又、緊急性が高かったことと、エルフ達への感情的な配慮から不問に付されていた。

だが、そこに至る過程において判明したその事実は見過ごされることなく、当事者として儀式の一切を執り行ったと報告したマリナが糾弾されることとなった。

肯定、中立、否定の立場をとる3人の審問官に対して、ペネロペイヤ神殿の巫女長であるルーザが反論する。

「お待ちください。当事者となった冒険者はかの《魔将殺し》の一人であり、その扱いを巡っては創世神殿内でも意見が割れているはずです」

「それは結果論にすぎん。彼女の2度にわたる行為は、《魔将殺し》以前に行われたものであり、その責めを問われるのは必定！」

「それ以前にもかの冒険者は魔将と遭遇し、創世神殿ですら把握できぬ呪いをその身に受けております。何が起きるか分からぬ以上、最善と思える手段によって事に備えるは智者の務め。」

過去になかった事例に対して既存の基準で判断するのはいかがかと……」

「それを判断するのは我ら最高神殿の権威である事をお忘れか？」その言葉にルーザは押し黙る。

すでに50歳を過ぎ、巫女としてはとくに力を失っているものの、娘のような神殿巫女達を守る為に、日々巫女長の職務を務める彼女だったが、最高神殿の威光の前には成す術がない。

「結論として、我ら最高神殿は彼の神殿巫女マリナの中級巫女への降格、及び、《ペネロペイヤ》大神殿からの異動が妥当であると考

えませんが……」

「お待ちください、それは、あまりにも」

食い下がるルーザに、否定の立場に立っていた審問官が伝家の宝刀を切りだした。

「禁を犯した巫女に対して能力を封じ、追放処分とする事も可能なのですよ」

その言葉にルーザは絶句する。続いて、中立の立場に立っていた審問官が口を開いた。

「事が《魔將殺し》の冒険者に関わりがあり、彼の特異な経歴を考慮すれば、巫女長殿の意見ももっともであろう。

ですが、当該行為に対して最高神殿に窺いを立てなかったという事は決して見過ごす事は出来まい。そう考えれば、軽い処分であると私は考えるが……」

その言葉に反論する者は室内になかった。

続けて肯定の立場に立つ者が述べる。

「彼女の過去の経歴と事情を考慮し、新たな任地となる地については当該巫女の意味を尊重したいというのが我々の総意であります。いかがかな？」

「……創世神の御心のままに」

ルーザはその言葉と共に神殿礼をとって押し黙った。

結局はそういう事なのである。

神殿巫女として絶大な人気と実績を誇るマリナの存在に目をつけた最高神殿の長老たちが、この機会を利用して、彼女を《エルタイヤ》の最高神殿に迎えるためにこの事態を画策したのである。

暫くの楔の期間をおいて再び彼女の地位を復権し、《エルタイヤ》の地で創世神殿のアイドルとして彼女の力を十分に利用しようという実に世俗的な判断だった。彼女が新たな任地として最高神殿を選ぶか、あるいは沈黙を保つことで、審問官からの側から彼女の最高神殿行きが宣告される、そんな青写真が彼らの頭の中には描かれているのであろう。

だが、……である。

当のマリナは彼らの手のひらで踊るようなタマではない事が、最高神殿のお歴々には全く分かっていなかった。この審問会の流れも彼女とルーザの予測通りだった。否、それ以前に、彼女達によつてそう仕向けられたものだった。

アルティナの眠りを目覚めさせる奇策を持つて、彼女がルーザの下を訪れた時からそれは始まっていたと言っている。

最も守りたい真実を隠し、わざと穴のあいた台本を最高神殿に報告する事で、事態は彼女達の意図した方向へと動いていた。

(本当にこれでよかったのでしょうか……)

それでもルーザは自分達の仕組んだ筋書きに、一抹の不安を持つた。

マリナは聡明な女性である。

いつか巫女の力を失う事になったとしても、高い実務能力を持つ彼女は裏方として、そして行く行くは自身の後釜として大神殿の巫女長の席に収まるだけの力量を持っている。彼女の成長を長く見守ってきた身としては自慢の娘同然とも言えた。

だからこそ、《ペネロペイヤ》大神殿という小さな世界に引きこもらず、広い世界に打って出ようとすると彼女の意思には賛成であった。広い見識を持ち、代わりゆく世界の動向に自分なりの物差しを持つ事は、人の上に立つ者の必須事項である。

だが、そんな彼女の希望する行き先が余りにも過酷な場所である事に疑問を持つ。いったい彼女は何を考えているのか？

マリナが自身にも決して明かそうとせぬ目的がある事はうすうす感じている。だが、それを差し引いても彼女が信頼に値する人間であると十分に承知している。

少し離れた場所に座って目を閉じたままの当のマリナの横顔を見

つめながら、ルーザは彼女の先行きに得体の知れない不安を感じていた。

「では、マリナ殿、貴方の赴く任地についてご希望があればおっしゃられよ。創世神の御名において必ずや実現されるでしょう」

審問官の言葉に周囲の視線が当事者であるマリナに集まった。

ここまで当事者である彼女は最低限度の弁明をした後、一切語らずに黙って目を閉じていた。彼女に対する弁護の一切を巫女長であるルーザに任せ、彼女はただ静かに時を待っていた。

そして、今ようやくその時が訪れた事を感じ取った彼女は、立ちあがり言葉を口にする。

「この度は私めの未熟さゆえに、長老方をはじめとして多くの方々にご迷惑をかけました事、謹んでお詫び申し上げます。

最年少で上級巫女になったとはいえ、その事実のみに思いついた私めはまだ未熟者。この度の不始末はそのような私の傲慢さによって引き起こされた神殿巫女としてあるまじき失態であり、実に恥ずかしく思います。

つきましては初心に帰って巫女のなんたるかを再度見直し、己の信仰を問いただす為に……」

僅かに言葉を切って小さく息を吸う。そして彼女は続けた。

「……私は、新たな任地として城塞都市《アテレスタ》の神殿に赴きたいと考えております」

その言葉に室内の空気が凍りついた。

彼女の正面に座る3人の査察官は呆気に取られている。否、ルーザと事情を知る一部の関係者を除く全ての者が、呆気に取られていた。

「ば、馬鹿な、《アテレスタ》……だと？ あの都市は今、騒乱の最中。そのような場所に一体何の理由で……」

「そのような場所であるからこそ、今多くの信者達が疲弊し、神殿巫女として、そして創世神に仕える者の一人として、その信仰が試

されるのではないでしょうか？」

つまらぬ俗世の駆け引きにうつつを抜かす者達からすれば、実に耳の痛い言葉である。

「だが、待ちたまえ。いくらなんでも貴女がそこに行く必要など……」

「『創世神の御名において必ずや実現されるでしょう』たしか先ほど、そう言われたのではなかったのかな」
割って入る一つの声。

高神官ライアットのその一言が、審問官達の言葉を封じた。

高神官でありながら《魔将殺し》の一人であるライアットの存在は良くも悪くも、創世神殿に所属するものに大きな影響を与える。決してないがしろに出来るものではない。

タイミングのよい援護にマリナは心の中で頭を下げた。

ライアットとてマリナの決断を手放しで認めた訳ではない。幼いころから義娘であるイリアと共に何かと近しい存在だった彼女を騒乱の地に送りこむ事など論外だった。

だが、それが彼女の意思であり、二人が愛しく思う者を守る只一つの方法である以上、それを受け入れるしかない。無表情を装うその胸の内には忸怩たるものがあるはずだ。

暫し、何事かを話し合っていた審問官の3人だったが、やがて諦めたような顔で結論を述べる。

「では、我ら審問官は創世神の御名において中級巫女マリナを《アテスタ》神殿へ異動させる事をここに決定する」

彼らの決定に室内がざわめいた。それは創世神殿という組織が揺れ動く様を象徴しているかのよう思われた……。

秋の夕暮れは早い。

夕刻近くなるとそろそろ肌寒くなり始めるこの時期は、直ぐそこまで迫ってきている冬將軍の到来を予感させる。家路を急ぐ人々が集う《ガルガンディオ通り》を通る二人は、やがて、とある酒場の前で足を止めた。

「ここが、そうなの？」

「ああ、ずいぶんと変わっただろ？」

考えてみれば、店の再開の日からまだ10日程度しか過ぎていない。自身にとつてもあの日の祝宴が遙か昔のように感じられる。

立ち止まる二人の姿に道行く人々の幾つもの視線が集まる。否、視線の中心にあるのは二人の内の一人、女性冒険者らしき人物の方である。

黄金色の髪、妖精族特有の長い耳、誰もが目を奪われる均整のとれた体つき……。

一目でエルフと分かる彼女に視線を奪われ、そのまま他の通行人にぶつかる者の姿もある。そんな彼らの姿に苦笑しながら彼女の側にたつ男　　ザックスは、彼女　　アルティナを店内に誘った。

ガンツⅡハミッシュの酒場　　冒険者協会の認定証付きの年季の入った看板が下げられた店の扉を、二人は静かに押し開いた。

二人の姿が店内に入ると同時に、店のあちこちからザックスを冷やかす声が聞こえる。

「おいおい、ザックス、いつの間に嫁さんなんかもらったんだ」

「綺麗だな、姉ちゃん、こっちきて酌してくれよ」

「バカ、エルフになんてこと言うんだ、テメエは！」

好き放題な事を言う一階席の客達の言葉に顔を見合せて笑う二人に、カウンターを出たガンツが声を掛けた。

「どうやら、ケリがついたみたいだな」

「ああ、ガンツ、心配掛けたがもう大丈夫だ。彼女もこの通りだ」

ザックスの言葉に従ってアルティナがぺこりと頭を下げる。ここ

に来るまでの間、事前にいくつかの事情を聴いていた彼女だったが、内心は複雑である。

知っているが、知らない人たち。

ここに多くの人が、夢の世界にいたアルティナにとっては、決して初めてではないのだから、戸惑うのは無理もない。

目覚めてから数日の間、アルティナは協会の施術院で時を過ごしながら自身の身の処遇を待っていた。

彼女を強引に連れ戻そうとする3人の使者とそれを拒否する彼女の間割って入ったのは、件の老人だった。

彼女自身がザックスと同じく魔將の呪いを受けた身である事もあって、最終的に現在の彼女の身柄は協会長預かりという形になっていた。

仕事の丸投げの大得意な件の老人である。

当然の如くその役割をザックスに丸投げし、彼女は暫くの間、監視役であるザックスと共に行動することとなっていた。

「これで一件落着じゃのう」

満足気なその言葉を残して、お気に入りの釣り竿を片手に自室を後にした老人を、部下の男が書類を抱えてあわてて追いかけていったのはいつもの事である。

「徐々に慣れて行けばいいのさ。気のいい奴らもたくさんいるんだから」

ザックスの言葉に店内から歓声が湧く。美人のアルティナとお近づきになるうなど息巻く冒険者達も多いようだ。

そんな空気の中、ザックスはガンツに一つの注文をした。

「ガンツ、悪いんだが、一番席にオレ達の夕食を。それとウルガの葡萄酒とグラスを5つ程、頼みたいんだが」

その言葉に店内が一瞬沈黙した。

ザックスの言葉に、しばし、じっと二人を見ていたガンツだったが、直ぐに了解の意思を示して、カウンターの奥へと消えて行く。

「来いよ、アルティナ、見せたい場所がある」

そう言うとザックスは二階席への階段を上って行く。そのすぐ後をアルティナは僅かに躊躇うようにして行った。

「ザックス、この場所って」

一番席の姿を目の当たりにしたアルティナが言葉を失った。

「ああ、ガンツの希望でな、ここだけはあの日と変わらないだろ？」

「うん……」

その言葉にアルティナは涙ぐむ。

そこは自分のよく知る唯一の場所。そして様々な思い出の詰まった場所。

すっかり様変わりしてしまった店内で、ようやく自身の記憶との接点を見つけた彼女は安心したのだろう。

「まあ、座れよ」

そう言うと彼は彼女にいつもの場所を勧めた。

一番奥のウルガの指定席の左隣のエルメラの席。そのさらに左隣に彼女は躊躇いがちに腰掛ける。その対面に座ったザックスは、ガンツ自らが持ってきた5つのグラスをテーブルに振り分けると、ウルガのお気に入りの葡萄酒を全てのグラスに注いで行く。

その姿を眺めたガンツは一つ頷くと、黙ってその場所を離れて行った。

「話したい事がたくさんあるんだ」

あの日の不幸な出来事以来、たった一人で駆け抜けてきた今日までの日々。多くの人々と出会い、様々な思い出を胸にしてきた彼はその全てを、本来共有すべきだったはずの彼女に語って聞かせる。

時に笑い、時に涙し、時に苦しんだ、そんな日々の物語を、食事の傍らザックスはアルティナに語り続けた。

二人の楽しそうな姿が生み出す空気が一番席から二階席へ、そして店全体へと波及していく。

シーポンを始めとする吟遊詩人達が共演する事で、幾つもの素晴らしいハーモニーが店内を駆け巡った。楽しい空気は店内を一番席から眺めながら、二人の話が尽きる事はない。

互いの齟齬を、現実と幻想の齟齬を、過去と未来の齟齬を埋めるために、二人は語り続けた。

今、直ぐ側に3人の先達たちと共にいるかのように、一番席に座った者達の楽しい談笑の時間は尽きる事はなかった。

夕食時が終わり、店内で多くの冒険者達が酒と共にくつろぎの時を過ごし始めた頃、一番席に座っていた二人はその場所から静かに立ちあがった。

「さてと、じゃあ、始めるか」

「そうね……」

名残惜しげにその場所を一度だけ振り返った二人は、顔を見合わせる。そのまま二階席を後にした。

共に並んで階段を下りる二人に、店内のあちこちから冷やかし混じりのヤジがとぶ。そんな中をゆっくりと歩を進めた二人は、やがてカウンターに座るマスターのガッツの前に立った。

「ガッツ、話がある」

「なんだ？ 改まって」

今日は機嫌がいいらしく、彼の傍らには珍しく酒のグラスが置いてある。そんなガッツに向かってザックスは静かに告げた。

「パーティの登録をしたい」

ザックスのその言葉に喧騒に湧いていた周囲が静まった。沈黙が

徐々に広がって行き、やがて店内全体が奇妙な沈黙に支配される。

二人の顔を交互に見比べていたガンツだったが、直ぐに「そうか」という言葉と共に帳面を引き出した。

二人のクナ石を手にとったガンツはその内容を帳面に書き記していく。そんな彼にザックスはさらに続けた。

「もう一つ、言っておかなきゃいけない事がある」

「なんだ」

一度だけアルティナと目を合わせる。そして、互いに頷いた。

「今後、オレは一番席に座る権利を放棄する」

その瞬間、筆記具を持つガンツの手がぴたりと止まった。一階席からは小さななどよめきが生まれた。

「それは……、そっちのお嬢さんも納得してるのか？」

「はい」

アルティナが答える。

「本当にいいんだな」

ガンツがザックスの目を見据えて尋ねた。ザックスはその視線を真っ向から受け止める。

「ああ、俺達はいつまでもウルガ達に背負われて、甘えているわけにはいかないんだ……」

「そうか」

ザックスの言葉にガンツは小さく笑みを浮かべた。二人のやり取りにさらに店内はどよめいていた。

やがて、登録に必要なすべての作業を終えたガンツは二人にその内容を確認させた。

名前	ザックス				
マナLV	34				
体力	193	攻撃力	235	守備力	190
理力	MAX	魔法攻撃	0	魔法防御	180
智力	154				

称号 炎術 氷水術 雷術 風術 輝光術
 中級冒険者
 職業 魔術士
 敏捷 177
 魅力 155
 総運値 MAX 幸運度 MAX 悪運度 0
 状態 呪い(詳細不明)
 備考 協会指定案件6 129号にて生還

所持金 7521シルバ

武器 鉄の短槍
 防具 冒険者の上衣 フェアリースカート フェザーブーツ
 その他 聖輝石の指輪 ガードタイツ 深紅の髪留め

記事事項に誤りのない事を確認した二人から帳面を受けとったガ
 ンツは、それをしまうと傍らにおいてあったグラスを手を取った。
 そしてカウンターを出ると店内中に響く声で告げた。

「よく聞け、冒険者共！」

今日、この店にまた一つのパーティが生まれることになった！
 この店の仲間として共に助け合い、そして競い合え！

新たに加わった彼らの前途が輝かしいものであることを、心から
 望む！」

言葉と共に一息ついてグラスに口をつける。大きく深呼吸をした
 ガンツは万感の想いを込めてはつきりと宣言した。

「宣言する！」

本日、只今をもって、この店の最上席である二階の一番席を完全
 に欠番にする。

この俺があの場合に座るにふさわしいと判断できるパーティが現れるまで、以降いかなる特例も認めず、何人たりともあの場合に座る事を許可しない。

以上だ！」

ガンツの宣言が終わるや否や、店内に集う誰もが手にした杯を上げてそれに賛同の雄叫びをあげる。次々に酒が注文され、ザックス達のパーティの結成と、そして新しい店のルールの成立に誰もが祝杯をあげた。

割れんばかりの彼らの叫びが改修したばかりの店を大いに揺らす。ガンツ「ハミツシユの店は、再開後初めてとなるであろう祝事に大いに湧いたのだった。

冒険者達の熱気に湧く店内から一步外に出れば、すでにその場所には、いずれやってくるだろう冬の訪れを予感させるひんやりとした空気が漂い始めている。

直に到来するであろう冷たい冬將軍は大陸の大半を覆い、そこに暮らす人々の心を凍てつかせ、その絆をひび割らせることもあるだろう。

だが、そんなものにすら負けない熱い魂と情熱を持った冒険者達は互いの絆を信じ合い、助け合って難関を乗り越えて行くものである。

そして、再び訪れた暖かな春の日差しの下で、たくましく成長した彼らの中から伝説のパーティが生まれる事になるに違いない。

そんな予感を多くの者達に感じさせながら、自由都市《ペネロペイヤ》の秋の夜は、虫達の涼しげな合唱と共に静かに更けていくのだった。

2
0
1
1
/
0
9
/
2
5
初稿

T
H
E

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599u/>

Lucky & Unlucky 魂の継承者 ~アドベクシュ迷宮探索記~

2011年10月20日23時29分発行